

奇譚クラブ

奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan

12



1972

12



❖ 新しい風俗文献誌 ❖

雑誌 2805-12

12月号 ¥400

1972・12

奇譚クラブ

女体緊縛写真集

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と続肌の明暗 前田真知子
厳しい縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ゲ
答打ちの態勢	関谷富佐子
鞭縫いの痛曲	関谷富佐子
浣腸責の美態	長井葉津子
亀甲縛りの対照	左近麻里子
麻縄と白肌の照	中河恵子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の露り	中河恵子
責め疲れの放心	梨花悠紀子
没打の末の悦	中河恵子
痛打の人の悦	関谷富佐子
沖繩美人の緊縛	座間明子
剣玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路叢子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ゲ
海老責の狂態	川路叢子
ボリウムの挑戦	座間明子
鞭打の下に挑	関谷富佐子
祭壇の人身御供	渡部好美子
稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影

編集部構成

両手挙げ棒責め	川路叢子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富佐子
ムチが痛い、許して	関谷富佐子
柱を挟んだ連縛	関谷富佐子
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	渡部好美子
二つ折りの女体	長井葉津子
猿ぐつわの哀	中河恵子
日本式縛りの白人	シラ・ゲ
マソの女王に答	関谷富佐子
柱しばりの恥	金原加奈子
夫婦の淫の慈味	渡部好美子
長襦袢の艶姿	梨花悠紀子
豊満ボインを誇る	愛川悦子
美女今縛られる	関谷富佐子
海老責への展開	前田真知子
責めてみたい碧眼の女	佐々木真弓
日本式高小手縛	シラ・ゲ
猫の目のような女	川路叢子
足吊りの媚態	中河恵子
亀甲縛りの花	中河恵子
M女二輪の黒髪	渡部好美子
苛責に乱れた黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	前田真知子
愉悅のひととき	川路叢子
ハリツケ晒し	左近麻里子

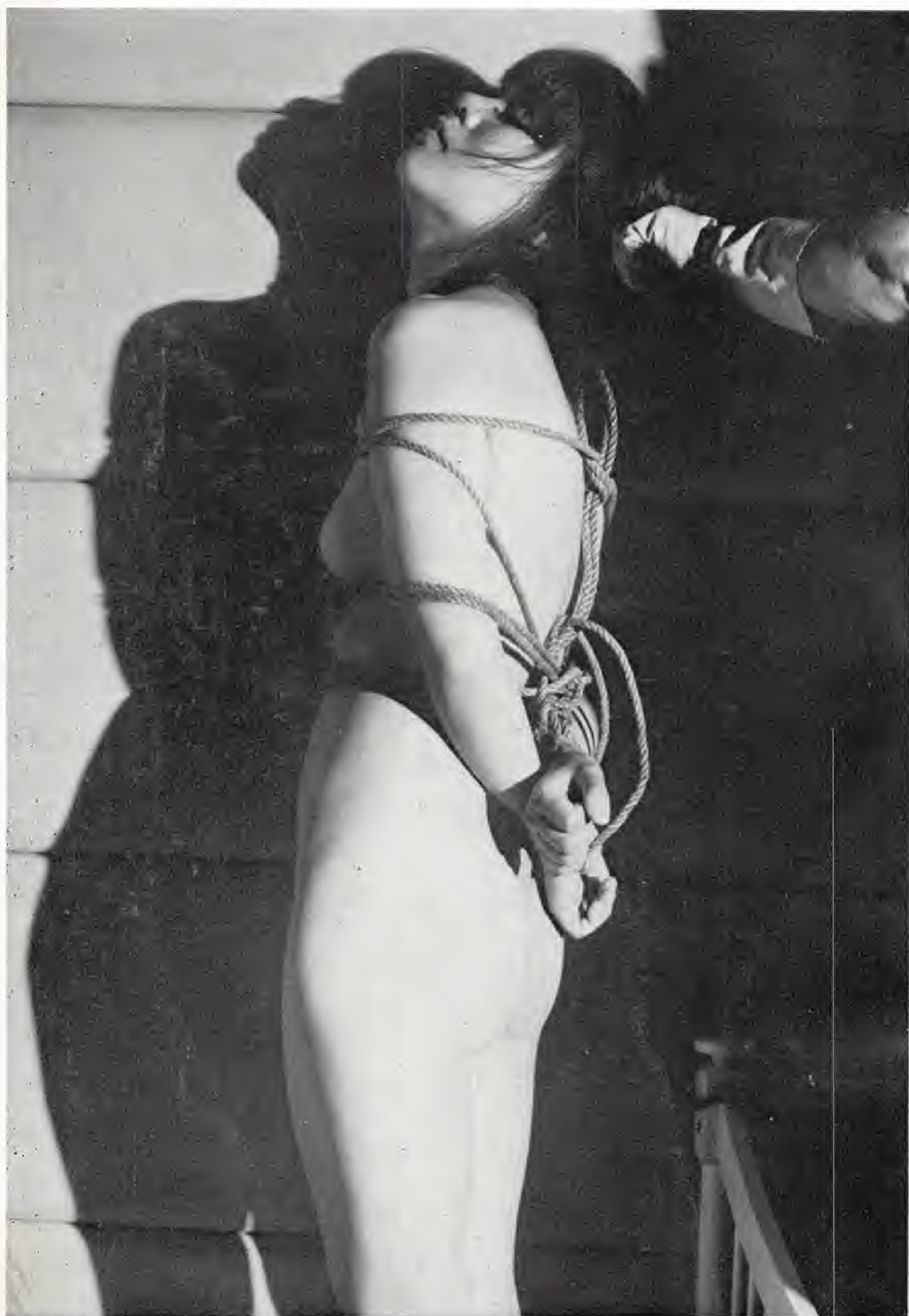
これから、どうするの？	長井葉津子
美しき吊り	前田真知子
苦痛か悦楽か	関谷富佐子
一筋の縄の魔術	中河恵子
逆エビ縛りに入る	三浦純子
愛撫の責め	渡部好美子
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	関谷富佐子
ボリウムを縛る	座間明子
浮上した女体	中河恵子
麗しき背面	中河恵子
汚辱の縄本縛り	金原加奈子
高小手の陶酔	佐々木真弓
責められたマソ女	川路叢子
失神した悶	関谷富佐子
前手縛りの天国	関谷富佐子
柱の彼方の責	中河恵子
荒縄の海老責	三浦純子
美と縛の女神	前田真知子
可憐な置物	梨花悠紀子
ながし目の天使	長井葉津子
酒の肴になる	川路叢子
妖蛇の洗礼	関谷富佐子
奔弄されるままに	前田真知子
海老縛りの妙味	川路叢子
柱につながれた女	長井葉津子
痛さをこらえる異国の女	中河恵子
責の果の諦観	シラ・ゲ
ホステス裸人生	関谷富佐子

曉出版株式會社編集部宛

〔塚本鉄三・撮影〕

光 と 影 の 幻 想

＜深 田 菊 子＞



奇
譚
ク
ラ
ブ

十二月号目次

△昭和四十七年▽

△第二十六卷△第十二号△通刊第二九八号▽

本

文



フォト猿ぐつわと乳房縛り△笠井奈保子▽…坂本 芳一…(21)
告白△私の緊縛写真撮影行△

『ホットパンツの可愛い娘』…野津 敏生…(22)

随想△“SM”と“タメ”の哲学……十 大介…(32)

連載・奴隷妻小説『命預けます』(3)……柴 利也…(36)

告白△「フット・フェチズム」……南 埜 茂雄…(50)

告白△“SMへの誘い”……東 京 介…(54)

連載・時代S小説『紫蘭の門』(16)……風流極道軒…(64)

淋しい情欲△夜の彷徨……陶 山 祝生…(80)

告白△「奴隷妻」になりたい……笠井奈保子…(82)

懸賞告白△「アナル・セックス」の一つの体験……嵐 由之助…(92)

ある夫婦SM△「金色のローソク」……佐 川 増夫…(96)

手記△「仮M性から本M性へ」……斎 藤 清…(106)

懸賞入選告白△「窃視の愉悅」……喜 多 庸介…(109)

靴に囚われた男△「白い脚の下で」……仲 圭介…(114)

体験記△私の口にも押し寄せてきたSM△……高 森 広…(126)

読者投稿△「関西の女性ファンへ」……北 畠 剣二…(128)

告白△「蠟責めと浣腸の思い出」……村 田 恭子…(132)

連載・S大河小説△「パロディ花と蛇」(12)……山 光 純…(140)

告白△「マゾを忘れかねた恵子の便り」……中 河 恵子…(152)

『過ぎにし日々の思い出』……中 河 恵子…(152)

私の感想記「那津子慕情」……長田 二郎
夫婦プレイ実践者の願い……鈴鹿 山賊
『夫婦交換プレイ』の
提唱に寄せて……西原 浩
イメージ画「アナタまだ？」……小川 茂正
愛妻、和歌子との「夫婦
プレイ」の一場面……紀川 正信
△山形の最上卓也氏へ▽
「羞恥責」雑感……喜恕 写楽
まりこのマゾうた……北川まりこ
SM妄想記……霜月 一
千恵のハダカを見て下さい……小杉 千恵
告白 美さ子の「浣腸」……佐野みさ子
器具、避妊……広島 一騎
M妻に想う……
イメージ画 深田菊子の変身……岡 たかし
に寄せて

サロン楽我記△〇〇▽……辻村 隆
フォト「悲鳴を挙げる双丘」……福井 桃子
手錠について……佐原陽一郎
イメージ画「クサリ音」……絹川美代子
イメージ画「タワシ機」……泉 絵実
僕のフェチ言葉集……並原 新一
編集部だより……編集部
ふんどし美とポスター(I)……岩手 信夫
寸評 身の中に……瞳 耀太郎
色艶筆 ああ、関谷富佐子……木戸川 健
告白「鼻いじめ」の夢……山井 二良
SM奴隷妻の出現を待つ……田中 友三
孤独なM男の回想……羽崎 勉
映画 最近の緊縛シーンから……東山 映史

光と影の幻想……深田 菊子
猿轡と縦縄縛り(2葉)……高村 浩子
私を責めて下さい(2葉)……笠井奈保子
レズ責めプレイの陶酔……三木・浜本
初妊娠を縛った若妻……富田由美子
剃毛責めのもと……荒尾 慶子
抜群のプロポーション(2葉)……鈴木千鶴子
迫りくる悪魔の恐怖(2葉)……深田 菊子
羞恥責め下カット(2葉)……福井 桃子
白い裸身が宙に浮く……前田真知子
露出こそ、わが命……中河 恵子
華麗なる宿命を背負いて……山原 清子
悦虐は全身を痺れさす……中河 恵子
猿轡をされるまで(2葉)……前田真知子
口を封ずる責め(2葉)……松本 たえ
惑溺の淵に沈む(2葉)……

あるプレイの檻のある風景……芳野 眉美(190)
告白 不貞妻の描く欲望のデッサン……野村 麻子(168)
秋風対談「SM界は花ざかり」……赤木 恵介(173)
SMカメラ・ハント△佐野みさ子の巻▽
『特訓プレイ妻』……辻村 隆(176)
連載・アブ紳士行状記△M派交友録△(33)……鬼山 絢策(208)
鉄三SM談義『縄とカメラの女体遍歴』……塚本 鉄三(220)
読者通信……編集部選(266)
イメージギャラリイ△「浜遊びの思い出」岡たかし(40)・「只今鑑賞中」志羽
利也(43)・「刺青少女の図」室井亜砂路(45)・「空の見える個室」飯田ひろくに
7147・「望みの反省」飯田ひろくに(120)・「須坂旭」(103)・「女性専用座椅子」春川ナミオ(124)
の羨望」岡たかし(120)・「実技指導押売り」須坂旭(144)・「内側もキレイに」
OKな「志羽利也」飯田ひろくに(149)・「晴、所により雨」春川ナミオ(165)・「だからこ
ちらなの？」飯田ひろくに(213)・「食欲の秋来たる」春川ナミオ(217)
目次 フォト





猿轡と従縄縛り

△高村浩子▽

「私を責めて下さい」



△笠井奈保子▽





レズ責めプレイの陶醉

(三 木 敬 子)
(浜 本 喜 美)



初妊娠を縛った若妻



△富田由美子▽



剃毛責めのあと

＜荒尾慶子＞



抜群のプロポーション

<鈴木千鶴子>



迫りくる悪魔の恐怖

△深田 菊子▽



羞恥責め下カット

△福井桃子▽





白い裸身が宙に浮く

＜前田真知子＞

△中河恵子▽



露出こそわが命



△山原清子▽

華麗な宿命を背負いて



悦虐は全身を痺れさす

＜中 河 恵 子＞





猿轡をされるまで……。

△前田真知子▽

口を封ずる責め



△前田真知子▽

惑溺の淵に沈む



△松本たえ▽



奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年12月号

<第26巻第12号・通刊第298号>



『猿ぐつわと乳房縛り』……モデル……笠井奈保子

笠井奈保子の豊かな肉づきの女体は、私は大変好きである。元来、私は痩せた女性よりも肥った女性の方が好きであるが、はちきれそうな笠井奈保子の太股なんかを見ていると新鮮な果実を目の前にしたように、食欲がわいてくる。それと、ぐつと齒の間にかまされ

た猿ぐつわの表情がいい。発声を封ずるということよりも、アクセントとしての美的価値に私は重点を置いている。縄目で強調された乳房の素晴らしさについては、今や私は言う言葉を知らない。

(坂本芳一・記)


~~~~~ <告白> = 私の緊縛写真撮影行 ~~~~~

## ホットパンツの可愛い娘

—— 野 津 敏 生 ——

夏もいよいよ、これからという六月一日、第二回目の写真撮影をしました。

彼女の名前は律子。歳は昭和二十七年生まれというから今年で二十才。年令に嘘いつわりのないことは、律子の同僚のOLが言っていたから間違いない筈です。

この撮影をしたのが、昨年ですから、当時は十九才だったわけです。

奇クの昨年の九月号に、『屋上での戯れ』（奇クサロン）で本誌に初登場したのですがこれが第一回目の撮影でした。会社の事務服を着たまま、屋上で後手縛りと前手縛りにした写真を撮ったのですが、足の美しい彼女の素足を撮ろうと考えて「すぐストッキングを脱いで」と言ったのですが、彼女は恥かしがって、とうとう靴下をはいたままでした。

第二回目の撮影は、第一回目から約一カ月ばかりあとでしたが、文章を書くのが苦手なついつい、今日まで延びてしまいました。なにしろ、下書きを仕上げる迄の時間の掛かる事がおびただしく、書いては消し、消しては書きしているうちに、徒らに日がたっていました。

そうして、やっとのことで、なんとか形が出来た原稿を投稿する気になったのが、昨年

編集部から貰った通信に『律子は良いモデルであるから、再登場を期待している——』という文面があったからです。

この第二回目の緊縛写真撮影のきっかけになったのは、律子が六月五日で、故郷の長崎に帰るから——と、私のところへ挨拶に来たからです。

「それなら、帰る前に、もう一度、写真を写して上げるから、次の休みに出て来ないか」と誘ってみましたところ、律子は心良くOKして「お願いします」と言いました。

待ち合わせ時間と場所をきめて、六月一日の再会を約束して律子は帰って行きました。

勿論、緊縛写真とは言っていないません。第一回目の屋上で撮ったときも、普通のスナップ写真を写してやると言って連れだしたのですが、途中で縛りに移ってしまったのです。

「写真を写して上げるから屋上においでよ」と耳打ちして屋上へ連れていったので、勿論、普通のポートレートも写したのです。でも、私が彼女の両手首を後で縛り、両足首を揃えて縛った写真をとっているとき（この写真は九月号の二四〇頁に載っています）律子が「後ろ、後ろ」と言うので、振りかえってみますと、若い女の子がジーンと、こちらを



見ているのです。

律子も、縛られて写真を写されるといふことに、何か、うしろめたさというものを、それとはなしに感じていたのでしょう。

六月一日を楽しみに、あの縛り方もやろう、こんな縛り方もやろうと、心は早くも、律子との会合の六月一日に向いています。撮影の前日の五月三十一日の夜最後の点検をするカメラ、フィルム、白黒十本、カラー一本。カラーは律子の普通のポートレート用を写して長崎へ送ってやる為のものです。緊縛写真をカラーで写しても後の始末処理に困りますから、写したくても写せません。

ストロボ、ロープ二本、細紐若干、鎖の太い物と細い物と各一本ずつ、鎖用の錠前を三個と手錠、洗濯バサミ十個、日本手拭い、筆トクホン大判——以上が撮影用と縛り用の小道具です。

用意は、すべて完了。あとは明日の逢う瀬



を待つだけです。準備を整えておいて、この日は、そのまま床につきました。

明けて六月一日。七時起床、これはいつもと変わりがありません。待ち合わせ時間までには、大分時間があります。朝食をすませてから、カメラの手入れをしながら、今日のプレイの計画らしいものをたてました。

今頃、律子は、どうしているかなア、と、ふと考えますと、今日、緊縛写真を写される

とは夢にも思っていないだろう——と、いささか、いじらしくなります。いや、前にも一度写しているから大体の察しはついていいるだろう——と、思い直したりします。

最初の、あの屋上で手足を縛った時は、驚いた様子は少しもなかったのです。むしろ私の方が、あまり律子が平気なので、面喰らったくらいでした。

待ち合わせ時間は午前十時、場所は国鉄片町線の片町駅改札口。私が駅に着いたのが、十時十五分前、律子はまだ来ていません。

人を待つというのは退屈なものです。果たして律子は来るだろうか、という不安があるから尚更、いらいらします。「はい」という二つ返事が良すぎたのが、かえって不安の種になるのですから、待つ身の心理状態というものには不思議なものです。

そんな私の心配をよそに、律子はすたすた



と、改札口の方へ足を向けて歩いてきます。

彼女は私を見つけると、小走りに走り寄ってきて、「待った？ おそくなって、ごめんネ」と、可愛い鼻の頭に汗をうかべて言うのです。男は美しい女性には弱いものです。

あれほど、いらいらして待っていたのに、

「いや、僕も今、来た所だ」と、答えてしまったのです。事実、私は時間としては、余り待っていませんでしたが、永く待った様な気がただけでした。彼女が来たのが、十時五分前でしたから、約束の時間には充分、間に合っていたのです。しかし、人を待たしたと言う事で「ごめんネ」という言葉が、自然と口に出て来たのでしよう。

二人で肩を並べて片町駅の前のタクシー乗り場へと向かいました。すでにタクシー乗り場には三組の先客が待っていました。約十五分程で私達の順番が回って来ましたので、目的地の城北公園へと向かいました。

プレゼント用のカラー写真を、この城北公園で撮影する予定なのです。車の中で大阪の名所を説明してやりますと、大阪城がすぐく気に入ったらしく、「あとで、大阪城へつれて行ってほしいわ」と可愛い顔を私の方へ向けてきました。

私は律子の願いを聞き入れてやるつもりでこう言いました。

「うん、写真の撮影が終わってから、大阪城見物をしよう。そのかわり、写真のモデルとしては撮影に協力してくれないと駄目だよ」

「ええ、いいわ、協力するわよ。だから、忘れずにつれて行ってよ」

どうやら、私の誘導は、うまくゆきそうです。この調子だったら、緊縛写真がとれそうです。内心、私はニヤリとしました。

律子の故郷、長崎の話に花を咲かせているうち、車は城北公園に着きました。タクシーから降りたとたん、ムウーと暑い空気が頬をなぞりました。

二人で肩を並べて公園へと入ってゆきました。いや、肩を並べてといいましたが、私は身長一米六十センチ、律子是一米六十二センチ位あるそうですから、彼女の方が私より少し高いのです。他人から見れば、どんな仲に見えた事でしょう。当時二十九才の私と、十九才の律子、恋人同志に見えたかどうか、知りませんが、公園のベンチに寝ていた土方風の四、五人の男が、ヒューヒューと冷やかしの口笛を吹きました。

おそらく、それらの男たちは、律子の服装

を見て冷やかしの奇声を上げているのでしょう。律子はホットパンツにハイヒールという奇抜な、いでたちだったからです。

この城北公園で色々なポーズをつけながら律子を被写体にしてカメラに納めてゆきました。ブランコや鉄棒、藤棚の下へと、バックを変えするために、あっちへ行ったり、こっちへ来たり、全身、アップと、さまざまなアングルから写しました。最後に堤防で数枚、シッターを切りました。

これでカラーフィルムの二十枚は写し終えました。私の下着は汗でベトベトですが、彼女の方は余り汗をかいていない様です。律子へのプレゼント用の写真は、これで完成ですが、あとは私の待ちに待った緊縛写真の撮影です。

場所は赤川町の友人宅です。この友人は昨年家を買ったばかりです。建物は古いのですが、場所がいいのがとれます。城北公園から歩いて十五分ぐらいの所です。夏の日ざしのきつい道を、友人宅へと足を運びます。

私は、これからの縛りプレイへの楽しみで自然と足は軽く、そして足早になります。

家へ着いたのが十一時半。まず腹ごしらえが第一だと、パンと牛乳を買ってきました。



食べながら、二人で喋る事十五分。終わって、いよいよ縛りプレイの開始です。

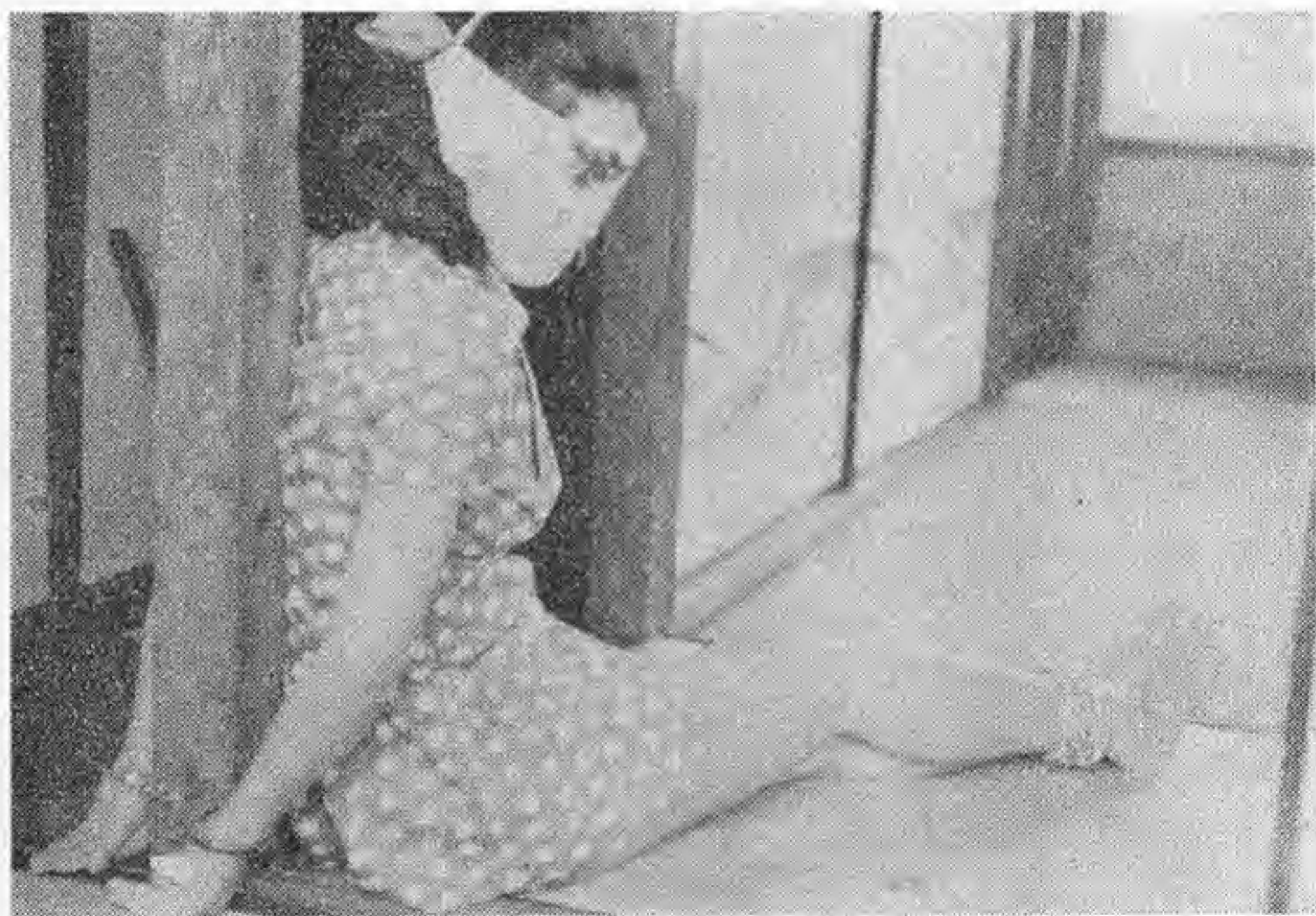
私は律子にストッキングを脱いでくるように言いつけます。彼女の素足は凄く美しいのですが、第一回目の撮影のときは、折角、足首を縛ってアップで撮影しておきながら、靴下をはいたままだったので、魅力が半減してしまった苦い経験があります。

律子は階下へ降りて行きました。その間、私は撮影の準備にとりかかりました。ロープなどの小道具をバッグから出してから、カメラにフィルムを入れストロボをセットして待ちます。十分ほどしてから、律子は二階へ上がってきて、黙って私の前に、ちよこんと坐ります。そのさまの可愛い事、早速プレイの開始です。先ず手錠からスタートです。

「では、律ちゃん、初めるよ。まず、この柱にもたれて手を後へ回してごらん」

と指図します。何の疑いもなく、彼女は素直に立ち上がって柱を皆にして、手を後へま

わしました。「これでいいの」と律子。



「うん、それでいいよ」

と言いなながら、私は手錠を律子の手首にはめました。全くの無抵抗なので私の方が驚きました。律子の耳元へ口を寄せて、

「手錠をはめられた気持は、どう？」

「別に、どうもないわ」

「怖くはないの？」

「いいや、怖くないわ」

こんなやりとりをしながら、二枚シャッターを切りました。今度は太い鎖を両足首に四回ほど巻きつけます。彼女は尚も黙って私のなすがままになっています。

そうしておいて、カメラのファインダーをのぞきます。右に左に移動して五、六枚シャッターを切ります。今度は、そのままの姿勢で眼隠しをします。

日本手拭いで律子に目隠しをした途端、彼女は、「あっ」という声を出しました。私は律子の顔をのぞきこんで「どうしたの？」と聞きますと「だって、急に眼隠しするんですもの、私、びっくりして、少し不安になってきたんよ」「なぜ？」「眼が見えないっていうのはすごく不安なもんよ」「怖い？」

私がそう聞きますと、律子は首を横に振



って「ううん」と答えます。その仕草は、たまらなく可愛いのです。私は思わず指を伸ばして、律子の鼻を、つまんでしまいました。

「眼隠しされていると、こんな事を急にされても逃げられないだろう」

「うーん、そんなことしちゃ、いや」

甘える様な声で、いやいやを、しています。私は尚も、この鼻いたぶりを続けます。

「ほら、鼻が僕の指につままれて、こんなにべしゃんこになっているよ」

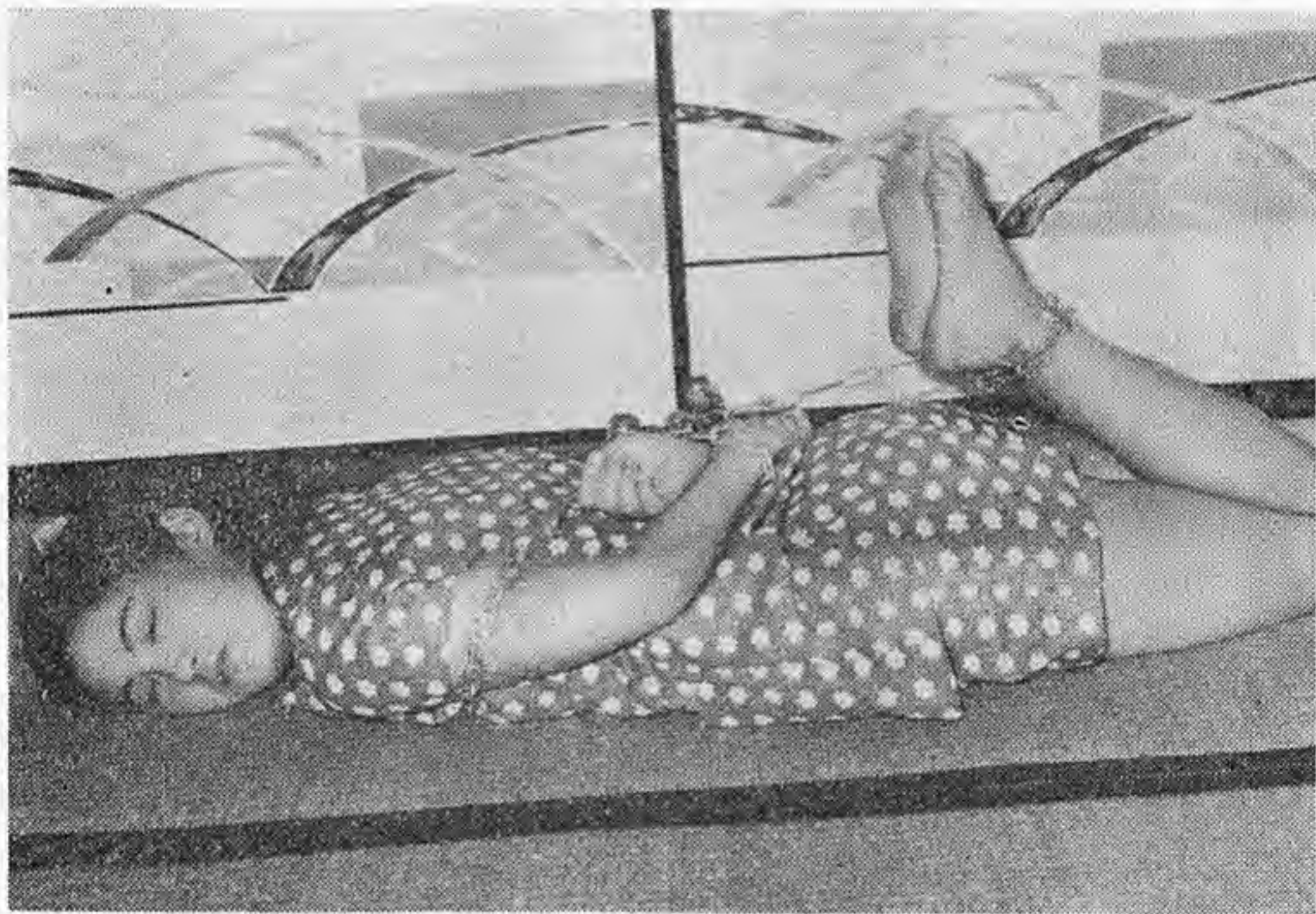
「あああ、いや、いや、やめて……」

その声で私は、やっと手を放しました。

律子の鼻は真赤になっています。そこを狙ってシャッターを切ります。

プレイと撮影の両方だと、走りまわらなければなりません。でも自分の好きな事をしていれば、少々忙しくても苦にならないから不思議なものです。

次は、錠のままで逆海老責めを試みます。手錠をはずし、柱の所から畳の中央に引っ張って来ました。そして、又手錠を後手にかけます。ごろんと転がして、うつ伏せになった所を二枚、そして足を曲げた所を三枚、写しました。



一杯、引き絞った所で結んで止めました。

余り迫力はない様です。そうしておいて、またカメラを手にして数枚のシャッターを切ってから、律子に「胸を上げて反りかえって——」と指図します。若い女の身体というものは、極めて柔らかいものです。軽々と手を起して反りかえってみせます。

私の様な年令になりますと、この様には、とてもゆきません。この律子は高校の時にモダンバレエをやっていたそうで、そのため尚更、身体が柔らかいのでしょうか。でも、このままのポーズでは、三分ともたないのは当たり前でしょう。

「ああもう駄目！」と、一息入れてから、再び私に命じられた通り同じ事を繰り返しています。「もういいよ」と声を掛けてやりますと、律子は「手がかくられていたら力が入れへん。くくられていなかったら、もっと上がるわよ」と笑ってみせます。

今度は逆海老にしようと思って足首の鎖に一米位のロープを巻きつけて手錠を通し、力

次は鎖による縛りを試みてみます。手錠をはずして、両足の太い鎖をほどきますと、足



首には、うっすらと鎖の跡がついています。

「痛かったか」と声をかけますと、律子は、

「うん、痛くないわ、平気よ」

「今度は、この鎖で手首を縛るからネ」

「うん、いいけど、こんな私をくくった写真写して、どうするの？」

「それはね、律ちゃんみたいな可愛い娘を縛って写すからいいんだ。不美人な人では駄目なんだよ。それに律ちゃんの縛られている姿は、ものすごく綺麗だよ。男は皆、美しいものには弱いんだよ。写した写真は大切にしまっておくよ」

彼女は不思議そうな顔をしています。

「ふーん、よく解らないけど、野律さんが良ければそれでいいわ。はい、くくって」

両手を後へ回して、待っています。鎖を持って律子の後へまわった私は、まず両手首に一回、巻いて、そのま



ま胸にも一回、巻きました。そして錠前で止めます。なにせ、鎖が短いものですから、ぐるぐる巻きには出来ないのが、残念です。

このポーズで二枚写した後に、細い方の鎖を三、四回ほど巻きつけて手首の所で錠前を止めます。カメラを手にした私は、前から後から、横からと色々なアングルからシャッターを切る事十五枚。カメラから手を放し、逆海老で縛ってある律子の素足に魅せられた私

は、思わず足首をつかんで、可愛い足の拇指を噛みました。

律子の足の指は、本当に格好よくて綺麗なのです。まるで芸術品のように整っていて、それでいきいきと血の通った温か味が、そのふっくらとした指に満ち満ちています。

右足、左足——と、私は交互に歯をゆっくりと当て、それを繰り返しました。

彼女は最初、小さな声で「痛い」と言っただけで、やめてとは言いませんでした。それをいいことにして私は細紐で左右の足の拇指に二回ほどまきつけ、力いっぱい引き絞ったところ、拇指の形が少し変形しました。

こんなポーズを又カメラに納めます。鎖による逆海老にしてから、かれこれ三十分位になる筈です。手首と足首に鎖が喰い込んで、なかなか痛そうです。私は彼女の耳元に口を寄せて聞いてやります。

「痛いかな？」

「うん、すこし痛いワ。でも我慢するわ」



律子は、そう答えて顔を横に向けます。よし、ついでに、もう少し我慢してもらおう、と、私は一本の筆をとり出しました。擦り責めを楽しもうと考えたのです。律子の美しい足を責めるのは、私の一番楽しみにしていたことなのです。

筆の腰は前もって折ってあったので、すぐに責めに掛かる事になりました。筆を先ず指と指の間のやわらかい所へ、すべらしました。すると、縛ってある指を曲げたり伸ばしたり、また縮めたりしています。私は、その指のうごきを楽しく眺めながら、指の間から足の裏へと筆を、すべらせてゆきました。

やはり、足の裏は擦ったいらしく、「ああ、こそばい。いや、いや、やめて」

彼女の口から、いろんな言葉が飛び出します。それでも私はやめません。足の裏か



ら足首、腰、太股へと移り、そして、また足の裏へと擦りを繰り返します。

大分長い間、擦り責めをやったので律子の額はじっとり汗が浮かんでいます。腕時計を見ますと十二時四十五分。もう一時間十五分も連続でプレイを続けていたのです。ここで十五分の休憩をとる事にしました。

鎖をほどこしながら、律子の太股や腕にキスをしてしまいました。ゼイ肉の少しもない、

ほっそりとした清純な腕や足は黄色いサクランボという感じですが。律子は私の唇を受けながらくすぐったそうに、くくく、と顎を引き寄せていましたが、鎖をすっかり解いてしまいますと、傍にあった手錠を手にして私にとびかかって来ました。

やはり若い娘は疲れを知らない元気を持っています。一時間以上も縛られていたというのに私にとびついて来たのです。私も負けずに律子に組みついてゆきました。手錠を取り上げて彼女の両手にはめました。組み合っていた加減で前手錠です。

「あーん、くやしい。又、手錠をされてしまったワ」

律子は手錠をガチャガチャいわして、くやしがっています。前手錠をしたままの休憩も特に苦にしている様です。可愛い女の子が前手錠にされている——そんな姿を、私は飽かずに眺めました。彼女は、こんなプレイをするのは初めてなので面白いらしく、二十分ばかり、そのまま喋り合いました。



「さあ、又、縛るよ。今度は、このロープにするからナ」

手錠をはずしてから両手をうしろへ組ませた上で、高手小手に縛りました。乳房の上を二巻き、下を二巻き、このロープは短かすぎて駄目なのですが、使い古しているので縛り易いのです。新しいロープは、どうしても硬すぎて使いにくいので、つい柔らかい方を使う事になってしまいます。

ファインダーを覗きながら。ピントを合わせていきますと、彼女がポツンと言いました。

「律子、かわいそう。こんなに縛られてしまつて、律子、かわいそう」

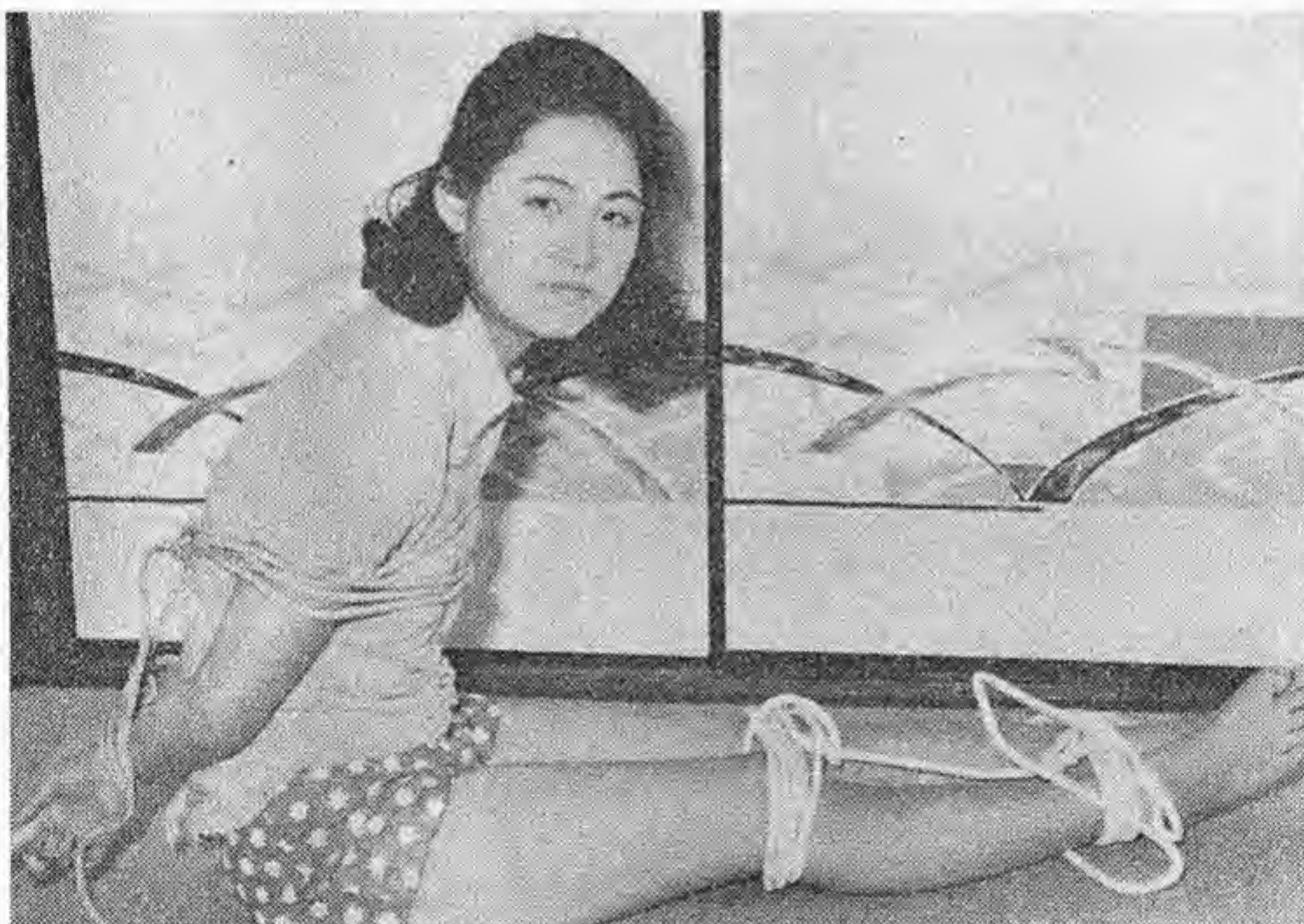
「律ちゃん、縛られて、かわいそうか。これから、もっともつと、律子のはかわいそうになるんやで。ええか、これはまだ序の口や」

そこで数枚、シャッターを切っておいて、一旦、ロープをほどいて、両手両足を揃えて一緒に縛りました。前かがみにしたポーズを上から一枚写してから、あとは前から、後から、横からと色々なアングルで写しました。

前縛りのロープをほどき、再び後手に、手の甲と甲を合わせて縛り、余ったロープを胸にまわしました。乳房の上に巻いてから後で止めました。この縛り方ですと、どうするこ

とも出来ないでしょう。縄をほどこうにも、指が縄にさわりもしません。身体を動かすと

手首までも痛くなる様です。更に足首と膝頭とを縛りました。



いよいよ、トクホンの猿ぐつわです。大判では上下の寸法が少し大き過ぎるのでハサミで切って、律子の口に近づけてゆきますと、途端に顔をそむけてしまいます。

「何するの？」

「いや、口に貼るだけだよ。すぐに取ってやるから」

安心させておいて、トクホンを口にべったりと貼りつけました。律子は口をモグモグさせますので、徐々に、はがれて来ます。

「余り口を動かしては駄目だよ」

私が注意しますと、暫く大人しくしていますが、カメラを手にして顔を上げると、又もやトクホンがとれかかっています。

「しようがないなあ。よし、それでは、ハンカチを口に入れてやる」

律子の鼻をつまもうとしますが顔を左右に動かして鼻をつまませません。仕方がないので日本手拭いで目隠しをしてしまいました。



そうしておいて、鼻を力一杯つまみ上げ、右手にハンカチを掴んで律子の口に当てがいます。息苦しくなってきた所、右手を一瞬の間、浮かすと、一気に空気を吸い込もうとして口を一杯に開けたすきを狙って、すかさずハンカチを口の中へ押し込みました。

「ム、ムムム……」

律子は目を白黒させています。左手でつまんでいた鼻を放してやります。すると、鼻で息を吸ったり吐いたりしています。

「いいか、律ちゃんが、すぐに猿ぐつわを取ってしまうから仕方なしにするんだよ」

といておいて、トクホンの新しい方を律子の口へ貼りつけます。そうして、又カメラの所に戻って、あわててシャッターを切ってから彼女の側に帰ってきます。声も出せない位べったりと口をトクホンで掩ってあるので、すから、少し鞭打ちでもやってやろうという気になって、ズボンからベルトを抜いて素振りを与えました。

眼隠しをされている律子は、これから鞭打ちをされる事など全然、知らないで、無言のまま縛られた体を横たえています。先ず第一打を背中へバシッと当てました。と同時に、律子が「アウ、ウウウ」と言葉にならない声

を洩らします。続いて、二打、三打と打ち続けます。

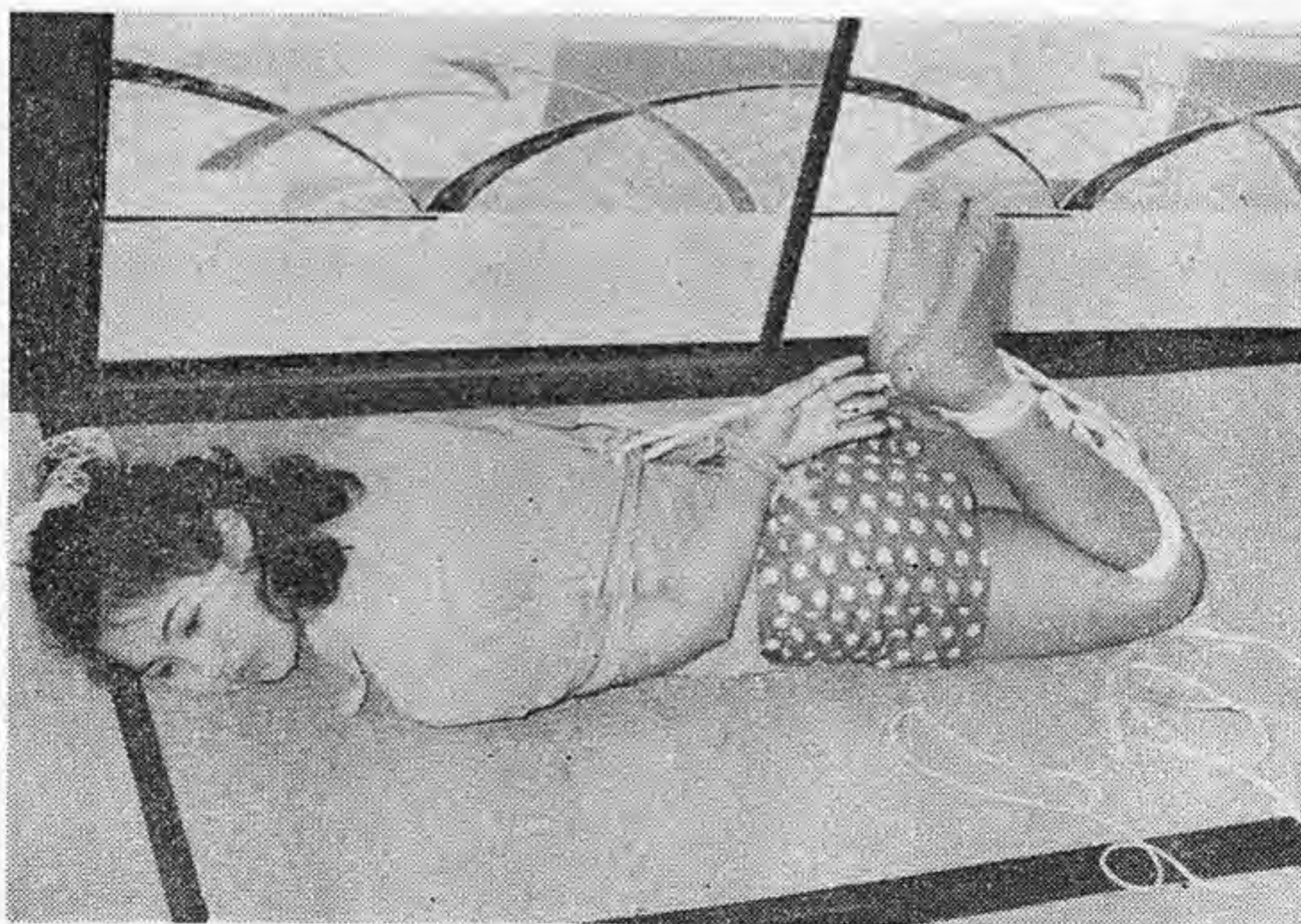
ベルトは、やがて太股へと移動してゆきました。律子は相変わらず声を上げながら、右へ左へと、ころげまわっています。余りに打ち過ぎると帰りに跡が残ると困るので、適当な所でやめておく事にしました。

うつ伏せになっている律子の両足を後へ曲げて逆海老にする為に足を縛り、そのロープを上半身に通して引き絞って足の所で止めました。逆海老縛りの出来上がりです。

次は、洗濯バサミを使っての責めを行なうつもりでしたが、とりあえず目隠しと猿ぐつわを取ってやりますと、口の中のハンカチを一度に吐きすてました。

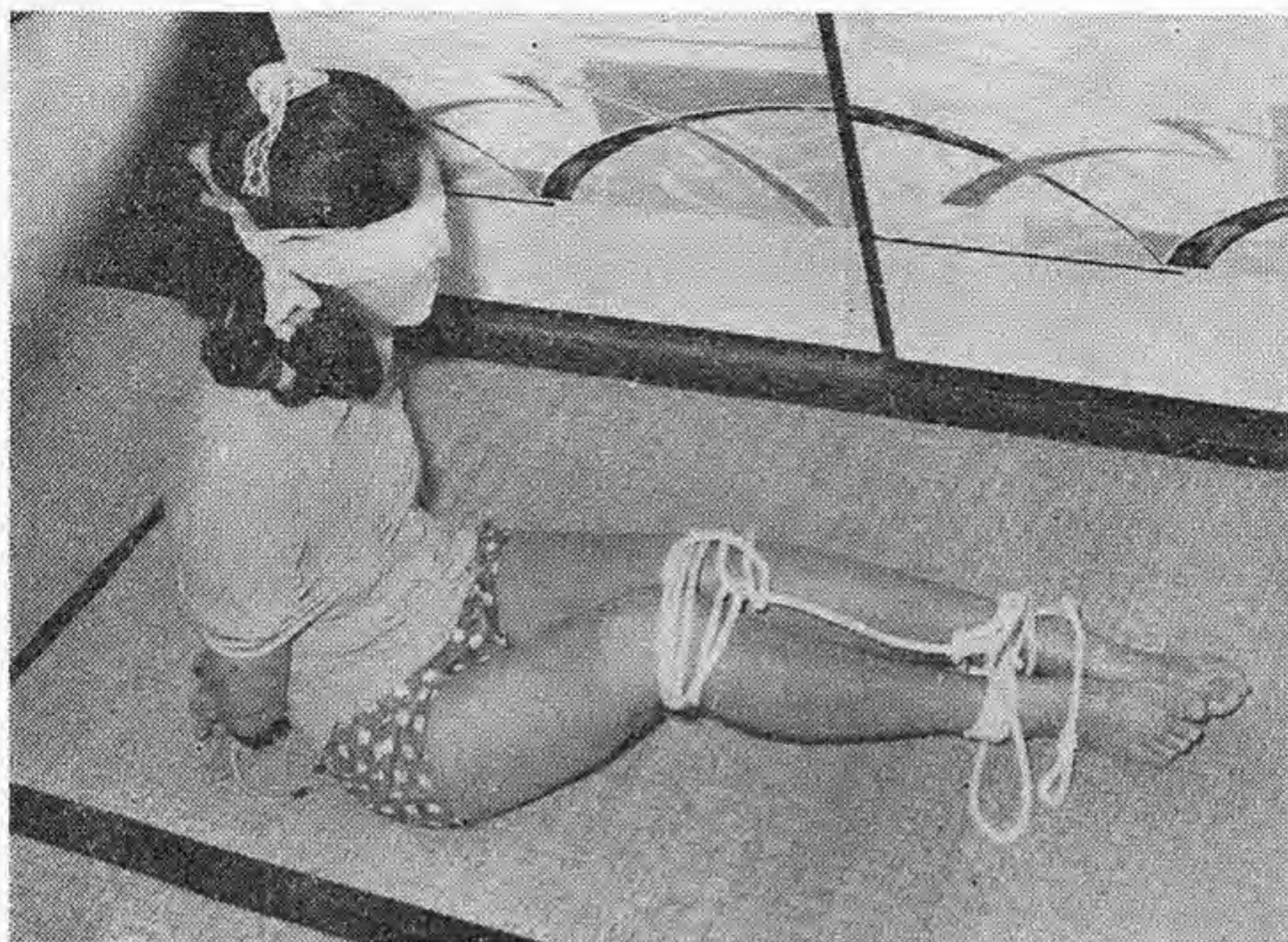
「ああ、苦しかったワ。口のまわりが熱をもって、カッカッしているわ」

それもその筈、トクホンの薬効が、そうさせているのでしょう。



「さっき、ぶったでしょう。何でぶったの。すぐく痛かったわ。背中の方は、ある程度、我慢出来たけど、太股の方は、痛くて、今





でもヒリヒリしてるわ」  
「このベルトで鞭打ちをしたんだよ。そんなに、痛かった？」

「そりゃ痛いわよ」  
「そう、ごめん、ごめん。では、その痛い所を可愛い可愛いしてあげよう」

私は律子を横向きにころがし、唇を彼女の唇にかさねてキスをしました。

「アフ、イヤ、ヤメテ」と叫びましたが、私はかまわず、太股へもキスの雨を降らせました。いつしか「ヤメテ」の声も聞こえなく静かになってしまいました。

次は、いよいよ待望のクリップ責めです。洗濯バサミを十個、両手に持って律子の傍へ寄って行きました。

その中の一つを、まず右足の指に、そして左足の指に、次いで腕に、ふくらばき、太股へと十個全部を律子の身体につけてしまいました。そのまま放置すること二十分。その間、私は撮影と観賞に専念しました。

太股のクリップは、ともすればパチンと、はずれてしまいます。若い女性の肌は柔らかいと思って

も、よく肉がしまって弾力性があるので、うまく挟むことが出来ないのです。

今日の緊縛撮影は私自身、十分に満足しました。次の機会には全裸で撮影したいものだと考えております。

縄を解きながら時計を見ますと、すでに四時半を回っています。小道具のロープやクリップ、ストロボ、カメラ等の後始末をしながら律子の方を横目で見ますと、手首や足首の縄目の跡を掌でさすっています。私の視線に気がついたのか、こちらを願って、はにかんだような笑みを見せています。

友人宅を出たのが午後五時十分前。タクシーで一路大阪城へと急ぎました。十五分位で大阪城へ着き、ここで食事を済ませて、いざ大阪城の中へ入ろうとしたら、なんと四時半閉館との事。仕方なしに内堀のベンチに腰を掛けて暫く話をして帰る事にしました。

片町駅まで、ぶらぶら並んで歩きながら、アベック気分を味わいました。

「律ちゃん、ここで別れよう。さようなら、いつか又、逢える日を楽しみにしてるよ」  
「ええ、又大阪へ出て来たら、きっと電話するわ。では、さようなら」

片町駅で右と左へ別れました。



随

想

S  
M

と

タ  
メの  
哲  
学つなし  
十大  
介

タメ——親のタメ、子のタメ、夫のタメ、妻のタメ、会社のタメ、組合のタメ、社会のタメ、民衆のタメ、解放のタメ、民主化のタメ、天皇のタメ、国民のタメ、東洋平和のタメ、アジアのタメ、世界のタメ、八紘一宇のタメ、世界同時革命のタメ、そして国益のタメ——その他、何でもよろしい。あらゆるタメ。このタメを能動的タメとしておこう（中略）これに対照するべきは、受動的タメである。親の無理解のタメ、こうなった。悪友のタメ、こうなった。あの男のタメ、上役のタメ、社会が悪いタメ、政治が悪いタメ、資本主義のタメ、戦後教育のタメ、対話がなかったタメ（中略）人間の行為は常に二つのタメ——能動的タメと受動的タメ——によって起

こるといふ考え方になる。

イザヤ・ベンダサン、テルアビブの孝行息子たち（タメの哲学）Ⅱ文芸春秋6月号、P 一二九

× × ×

この文をよんでいると、ゆくりなくも団鬼六氏の「花と蛇」を思い出した。「花と蛇」について、SMキング8月号に美濃村晃氏は「SMの源流を奔流に変えた。初期にはアウトロローであったはずのSMをある意味で普遍的なものに変えてしまったのであった」という文章を書いている。

団鬼六氏の評価について、私はこの美濃村晃氏の意見には必ずしも賛成ではないが、団

氏はベンダサンのいう「タメの哲学」を文学に利用することに、まことに巧みだったと考えられる。これが団鬼六氏の作品の流行する原因ではなからうか。

もちろん時期的（発表の）にみると団氏の作品が先で、ベンダサンのタメの哲学の方があとで書かれているので、団氏はこのタメの哲学を知って作品を書いているわけではないであろう。だが、批評の適用は自由である。

こういう観点から見ると、このタメの哲学のいう、日本人的思考を十分SMに生かしたのが「花と蛇」であり、団氏の作品は、その後の小説も同じようなテーマのくり返しでありながら、流行しているのもタメの哲学のせいであろう。「花と蛇」は実に長い長い小説で、しかもその中に書かれてあることは同じような場面のくり返しである。通読して、いささか、うんざりするが、SMマニアには、これがたまらないのかもしれない。

半面、作家の立場からいえば、どう変化を持たせるかというのがSM作家と名づく人たちの一番の悩みだそうである。このことは全盛時代の松井籟子さんもそうで、松井さんからいただいた書簡の中で、松井さんは真剣に述懐していた。団氏もまた、随分と頭をいためたのではないかと、同情しきりに思えてな



らない。

ところで「花と蛇」がタメの哲学にかなっているという証拠に、そんな風の描写を検討してみよう。

まず「花と蛇」の発端の第一章を見ると、主人公の遠山静子はズベ公グループにおちた夫、資産家遠山隆義の先妻の娘、桂子の身代金を脅迫される。弁護士に注意されながらも静子は、みずから、それを持ってデパートに行く、そのくだりの描写が巧みである。

静子夫人は、でも、もしもということがあります。今、主人は政界の方々と関西へ旅行中ですし、主人の留守中に変なことがあったりしては申訳が立ちませんからと、おろおろした声を出すのである。

と作者は書いているが、静子夫人のこのときの気持は主人のタメ、家のタメというわけである。この短い文章の中に静子夫人の人のよさと、世間知らずというか、いかにも良家の奥さんらしい性格、後妻という不安定な立場が描きつくされておき、静子夫人は、この弱点をズベ公たちにつかれ、利用されるのである。

それで桂子に逢わせてやるという口実のも

とに簡単に縛られ、素っ裸にされ、逆に桂子からも責められるという仕儀になる。その場面は、まず桂子が、おどされる。

「いいかい。丸坊主にされるのがいやだったら、お前がママに浣腸するのさ」

こうして桂子は、自分のリンチをのがれるタメに義母にリンチを加えるという、タメの哲学のパターンが展開する。そして、このような手法は最後の最後まで変わることなく延々と続くのである。静子夫人は、やがて川田鬼源たちから、「静子奥様自分自身のタメ」「人を喜ばすため」に、いじめられるというように教育され、彼女自身、継子のタメ、夫のタメ、そして最後には自分自身のため、SMのタメに責められ殉教の精神をすら、いだかされるのである。

ところで、話を本論に、もどそう。

現在におけるSMの隆盛は、いったい、どうしたわけであろうか。アウトローであったSMの源流を奔流に変えたものは何か、を考えてみることにしよう。

さきほどのベンダサンのタメの哲学を、このSM論にあててみるとSMのタメのSMと

なる。SMのタメのSMとは、いったい何であろう。SMの存在価値論、否、もっと以前のものまで考えてみると、現在のSMの隆盛は、日本人の心の中に、体質の中に、いや性質の中に、社会の中に、純粋にSMを理解する考え方なりパターンが、そなわっていたにちがいない。テルアビブの三人の殉教者？のように、いちずな考え、いや行動があったと考えられる。

外国であつたら、このSMのためのSMという言葉は、それ自体、自分の生命を守るため、種（民族）の発展をはかるためのもの、すなわち、フロイドというならば、ヒステリーやノイローゼの治療の一方法として発展した精神分析の中で、SMは幼時期の性感情の後遺症として説明され理解されるのである。

したがってSMが具体化（体現）される場合、プレイとしてよりも、もっと強烈な征服の一過程として、とらえられる。緊縛も相手の肉体を損傷してよい程に強烈であり、これより、さらに迫力のある鞭撻というものが流行し、黒ミサ、いやそれ以前の中世時代の魔女裁判という、身の毛もよだつ社会現象となつて、あらわれるのである。

その残酷さは、





死刑は火刑が原則だったが、それには、生きながらの火刑と、絞殺した上で、その死体を焼く火刑と二種あった。拷問の苦しさは耐えきれず、でたらめの自白をして死を望んだ魔女にすら、生きながら焼かれることの恐ろしさは非常なものであったらしい。「縛り首にしてやるから白状しろ」という裁判官の言葉は、大きな誘惑であった。刑場で虚偽の自供を撤回する者が殆どなかったのも、それによって縛り首の恩典が取り消されて、生きながら焼かれることになるのを恐れたからであった。(森島恒雄、魔女狩り、岩波新書一二六頁)

× × ×

この一文を読めばSMの言葉を生んだ国のSMが、どんなものかよくわかるであろう。テルアビブの事件にかぎらず、中近東、インドシナ半島の戦いは、こうしたSM精神に宗教的色彩が加味された争いだけに救いが無い。それに比べれば、同じ宗教的色彩が加味されたといっても、日本のキリシタン迫害はものの比でないことがわかる。

魔女裁判の中心は拷問であった。江戸時代の司法制度の中心も自供、すなわち拷問であったが、魔女と江戸と比べれば、日本の拷問は何となくユーモラスに見える。やはり、そ

こに伝統的な文化、風俗、社会制度の美をみないわけにはいかない。狩猟民族のSMのあり方と農耕民族のSMのあり方は、根本的に異なると考えてよからう。

日本的なSMを考える場合、一つの基準に江戸時代の捕縄法を見ると参考になる。士農工商だけでなく、男女でも縄のかけ方を変え、という格式ばったやり方は、いかにも順序方法を重んじる農耕民族らしい発想法であり、また拷問を受ける罪人たちにとって、拷問を堪えるということは勇者である、とされた考え方が獄中にあったということは絶対的な恐怖裁判である魔女裁判では考えられないことである。

そんなわけで戦後SMが特殊な地位を放棄して、いわば解放され大衆の目前にさらけ出されたとき、日本人の精神の中には、すでにSMを楽しむという、基調ができたがっていた。わが国においては、SMのためのSMとはSMを享受することであったのである。したがってSMを追及する人たちの間では、SMプレイという言葉が生まれ、SMを男女間で行なうということは、行なわない男女間よりも深い愛情でつながっているという錯覚？すら、生まれるにいたっている。

プレイといえば競技である。ギリシャに始

まったオリンピックは戦争で走り回ったことを、平和の中で走り回ることに変えてしまった。この代表的な行事、マラソンを日本の国技のようにいわれるのは、なぜだろうか。それは、日本に駅伝競争という競技があったからである。だが、駅伝とマラソンとは本質的に異なっている。駅伝は、飛脚、平和な使節に原流があるのである。だから同じ孤独なレースであっても、同じ長距離レースであっても駅伝の方が、はるかに自由であり、穏やかな感じさえ受ける。このマラソンと駅伝の差は西洋のSMと日本のSMとの差ではなからうか。

駅伝競走は全国的視野からみて、その代表的なものに東北——東京間、東京——大阪間、大阪——福岡間(いずれも読売新聞社主催)九州一周駅伝(西日本新聞社主催)がある。このほかにも箱根駅伝(大学)実業団駅伝などがあり、小さなものまでいければ、無数といつてよからう。

この駅伝に伴走したことがある。伴走車の上から手をたいて激励する。走る選手の横に、ぴたり監督車のジープがついて叱咤激励していた。今、この光景をSM的に考えるなら、駅伝というルールに縛られながら、体力の続くかぎり走りぬく選手を、監督という



責め手が言葉のムチをふるい、規則正しく追いたてている。追う方は機械であり、追われる方は人間である。伴走車の上から、この光景を見ながら、自転車の上にのせて一定限度より速度をおとすと足の裏が焼けてくるといふ責め小説が過去に奇クにのっていたことを思い出した。いかにもサジステイックなシーンである。走るといふ人間の本能的原始的な行為を車という近代文明の利器でヤユしながら強制しつづけるのである。

マラソンそれ自体は四七・一九五キロ。昔アキレスが走ったという、そのままの距離であり、あまりに長く、まさに死闘、悲壮ですらある。したがって、SMプレイにたとえれば出場者にとっては生命をかけた一発勝負の大プレイであろう。もっとも最近走法の進歩で、かなりニュアンスが異なってきたもののそれでも大レースであることにちがいない。それに比べると駅伝は長くて二十キロ余。短い区間は三千メートル（高校駅伝）という距離もあり、随分と余裕があり、考え方によってはユーモラスであり、人間性の入り込む余地があり、またチームワークの勝負にもなる。チームのタメにという、タメの哲学をも、ふくんでいて、プレイとしての興味はるかにマラソンをしのいでいるように思われる。

れる。体にたいする負担もマラソンより、はるかに軽いし、また知的ですらある。一本勝負のマラソンは国と国の争いといっても、あくまでも個人競技であり、一発勝負を好む、西洋的要素が強いが、駅伝は距離によって起用する選手も、さまざまなら、走りっぷりも各種各様で、いわば、はるかに頭脳を使ったチームプレイである。やはり、（タイム）と所（距離）と知恵（選手起用策など）を、生かす農耕民族にふさわしい長距離レースといえよう。

ところで再び話を本論に戻そう。西洋のSMは、その語源となったサドの逸話といい、マゾッホの話といい、さらに、さいきんのSM小説——たとえばO嬢の物語にしても、人間が生きていく血の臭いが髣髴（ほうふつ）としているのにたいし、徹底的なSM小説といわれる団氏の作品にしても、いっこうに、へたばらない静子夫人の責められぶりは、人間ばなれしていて、まるで透視図法以前の世界のようなものを感じさせる。そこには血のただよう空間はない。東洋的な神秘主義のベールを、かぶっているようでもあり、何となくキツネにダマされているようであり滑稽ですらある。そこには、どうにもならない国民的な血の差というものがあり、これが、わが

国のSMを追及して行く過程で、愛すべきプレイ尊重主義に走らせた原因であると考えられる。

SMを楽しむタメにはプレイをせよ。プレイをするためには相手の女（男）の了解を得て、道徳の許す範囲で楽しみなさい——なんと、わが国のSMは、こう教えているのである。そして、この精神があるからこそ、テレビは浅間山荘事件を長い間、中継しながら放映し、それを見る人は、まるで他人のでき事のように、その事件をでなく、その映像を、まるで絵空事のように楽しんでいる。

プレイが果たしてSMの本流であるか、どうかは別として、こうした考え方、不文律があるからこそ、SM雑誌が氾濫しても、一向に国民は平気であり、何ら古風の日本道徳に矛盾しているとも考えないわけである。狭い国土に一億もの人間がひしめいている日本。人間だらけで自由のカケラもない、わが国に実は、最大の自由があるのも、SMを楽しむことができるタメであり、このタメの哲学のタメであろう。このタメの哲学は、SMの世界でもわが国にあるかぎり、常に正統な地位にあり、つねに、また流動的で、現在の知識人の心の中や、実生活の中に生き、動き、そして存在しているのである。

（終）



連載・奴隷妻小説

参の章△M女年譜抄▽

須坂旭・画



# 命 預 け ま す

柴 利 好

## 10 継子の運命

春子の父は土方で、母は酌婦上がりりの女であつた。彼女が生まれた東京深川の家は、二間に台所のついた三軒一棟の棟割長屋で、貧しかった父が、出稼ぎのため遠出し勝ちであつたから、彼女は殆ど、いつも母と二人きりで留守を守つた。しかし、たとえ暮しは貧しくても、両親共、優しい人柄だったので、独り子の彼女は、彼等の愛を一身に受けて幸せ

に育つて行つた。

春子が七つになつた年の夏の事であつた。父親が長旅から帰つて来たある晩、彼女は不図、夜中に目覚めた。辺りが妙に明るいのを不審に思つて、目をすかして見ると、雨戸が半ば開いていて、そこから月明りが部屋に差し込んでゐる。周りを見回すと、いつも隣に寝ている筈の両親の姿が見えず、布団は空っぽになつてゐるではないか。

幼い娘にも、それなりの好奇心はある。ソツと起き出して雨戸の隙間から庭を覗き見し

た彼女が、「あッ!」と小さく叫んで、慄え上がったのも無理はない。狭い庭の一隅に立てられた物干柱の一本に寝巻のまま細引で縛りつけられてゐる母の姿があつたのである。

雨戸の蔭で良くは見えないが、その前に縁台に腰掛けてゐる人影は父に違いなかった。

なんとという事なのだ。日頃から優しく、荒い家業に似合わず口争い一つした事のない両親の仲であつた。それなのに父が何故、母を縛つたりなんかしているのだらう。母は一体どんな悪い事をして、お仕置きされてゐるの



だろう。直ぐさま寢床に逃げ戻った春子だったが、胸が弾んで、悶々として寝つかれない一夜であった。

それにしても、月明りの下で見た母の、白く青ざめた面差し、柱に固く縛りつけられたその細っそりと、しなやかな姿の、何と美しかったことか。その時の光景を、春子は後々までも、決して忘れる事が出来ないものであった。

母がそんな姿で、何時まで縛られていたものか分からない。翌朝、春子が目覚めた時は既に父は仕事に出掛け、母独りが普段通りの家事仕事に励んでいた。春子は、

「お母ちゃん、お早よう！」

と、わざと元気に声を掛けたものの、母の両の手首に、縄目の跡が赤くくびれて、はつきりと残っているのを、彼女は目敏く見つけてしまった。夢ではなかった。庭先で柱に縛られていた女は、正しく母なのであった。

「はい、お早よう、春ちゃん。何ボンヤリしてるの？ それに、今朝は随分、お寝坊さんだったのねえ」

どうせ子供だもの、何も分かりやしないさあという安易感からであろうか。いつもと少しも変わらない母の態度を眺めながら、

『分からないわ。何故？ 何故なの？』

又しても幼い頭では解き難い疑問が、彼女を悩ませるのであった。

その後の春子の注意深い観察によって、母は父が遠出から帰って来た晩には、必ずといって良い程、縛り上げられているらしい事を知った。

その折檻の場所は、障子一つ隔てた隣室や台所、または玄関のタタキの上であったりした。或は、例の月夜の晩のように庭に出て、される事もあった。

子供には理解できない、大人の世界の一端を覗き見た春子の驚き。後年、彼女自身、その身内に潜む嗜虐の性向を自覚した時、彼女の母が強度の悦虐愛好者であつたらしい事、そして大人しい父が、その母にせがまれるままに、それを手助けしていたらしい事等々、両親の当時の秘事を追想しつつ、異常性向を持つて生まれた彼女自身の業の深さを、つくづくと嘆いたことであつた。

彼女が八ツの時、その優しい母は、急性盲腸炎で急逝した。若しも、この女性が長命してさえいたならば、春子の運命も、随分、明るく変わっていたかも知れない。が、悲しい星の定めの下に生まれついた彼女の不幸は、

この母の死から始まったのである。

母の死によって、残された二人の悲しみは深かったが、何時までも悲しんでばかりはおられなかった。小さい娘を抱えて、しかも家に不在勝ちな彼女の父が、忌の明けるのを待ち兼ねるようにして再婚したのは、実生活上致し方ない事であつただろうが、その相手というのも矢張り酌婦上がりで、砂町から来た中年女であつた。

この女は何度か結婚に失敗した揚句に酌婦になつていたのだが、根が軽薄な上、好色の質だった。それ故、後添いに這入った家の夫の不在の折節には、兎角、近所の噂の立つ程不身持な女であつた。

しかも春子は、この継母に対しても感心に良く仕えた。小学校三年から卒業するまでの四年間、彼女の献身的な孝行振りは近所でも評判で、幾度か町内での表彰候補に上げられたのだった。けれども淫蕩な継母の存在が、その実現の妨げになった。そして世間の春子に対する評判が良い事を我が身の不評に引き較べ、この新しい母親は段々春子を邪険にし始めた。

陰險で卑劣な継子虐めの類型的仕置の数々が、この貧しい、小さな屋根の下で屢々見ら



れるようになった。何かにつけて叱られ、責められる春子の側には、そうされなければならぬ理由は殆どなかった。勿論、子供の事だから時には間違いや失敗もあったかも知れない。しかし折に触れて行なわれる折檻の口実は、そうした事柄には関係なく、継母の自由勝手に、何時でも、幾らでも設けられるのが常であった。

夫が不在勝ちであったため性欲の捌け口がない事。時偶、忍んで来る相手があつても、継子が居ては気儘に振舞えない事などが、継子虐めの重要な原因に違ひなかった。それでいて継母が春子を一責め責め終わった後は、まるで別人のように機嫌良くなったのは、明らかに鬱積したストレスが解消した結果に他ならなかった。

生来、明るくて元気の良かった春子は、いつとはなしに引き込み勝ちな陰気な娘になつて行きはしたが、学校の成績には余り影響もなく過ぎ、根が従順な性質は、以前と全く変わらぬ、気立ての優しい娘として終始していた。

それにも拘らず継母は春子を虐め続けた。打ち叩くのは日常、当たり前前の出来事で、酷い折檻の時は、春子の泣き声を隣近所に知ら

すまいとする手立てとして、屢々猿ぐつわさえ嵌められた。春子は、いたいけな身体を裸に剥がれて、細紐や麻縄で縛られ、押入に入られる位なら、まだしもの事。寒夜、玄関のタタキに坐らされたり、台所の天窓に吊るされた事もあった。

こうした酷い折檻の後では、手足について消えない縄目が子供心にも恥かしくて、好きな学校へも行けず、公園で独り一日を泣き暮す事もあった。

優しくて美しかった実母が、嘗て被虐の縄目に悶えた庭の物干柱に、長いこと春子が縛りつけられる時は、大抵、父ならぬ別人が継母を訪ねて来る夜が多かった。

閉ざされた雨戸の隙間から明るい灯が見え、その中でチラチラ人影が動く様子を、暗い夜空の下で、縛られながら見ている春子の心はこの継母に対する、いいようのない怨みと、こうした事を露知らぬお人善しの父に対する同情と齒痒さ。はては亡き母恋しさの一念などで無残にも打ちひしがれるのであった。そんな時は、いつも固く嵌められた猿ぐつわの手拭いが、知らず知らず涙と夜露を吸ってビッシヨリと濡れた。

父親は、こうした娘の不幸を満更、知らな

い訳ではなかった。けれども、必要からとはいえ自分で連れて来た女の手前があった。時折、小言の一つもいう事はあつても、心に思う事の幾らも口には出せず、遂々女のするなりに任せている気弱さであった。

やがてその父も、春子が小学校を卒える前の年、仕事上の事故が因で、呆気なく他界してしまつたのだ。独り取り残された春子の運命は、愈々果敢ないものとなつた事は、いうまでもない。

父の死後しばらくして、春子の家に公然と這入り込んで来たのは、前々から継母と通じ合つていた香具師であつた。彼は春子に対して爪の垢程の愛情も感じないらしく、春子が継母に折檻されるのを見ても、素知らぬ顔で過すような男であつた。

それから一年経つた時、即ち春子の小学校卒業を待つて、この継父の発案で、可哀想な春子は、継母の出身地、砂町の暖味屋の一軒に売られる事に決まつた。彼女は自分がそういう家に売られる事が、何を意味するものかを本能的に知つた。けれども、どうしようもなかったのである。

しかもその時になって、反つて慌てたのが継母であつたのは皮肉である。継母の継子虐



めは、その頃では、憎さからというよりも、主に欲求不満に対する慰め的手段として習慣化していた。それ故に春子を失う事は、継母の日常をこの上なく淋しくする訳で、その上その様な虐待にも拘らず、いつも傍に居ては何呉れとなく依然、孝養怠りなかった、このいじらしい娘を、手放したくないという勝手さであつた。しかし所詮は、男のいいなりに従わざるを得ない。継母は春子との別れ際には涙さえ流して、彼女への虐待を、くどくどと詫び、許しを乞うのであつた。

可憐な春子が、それでも小ざっぱりと洗濯したてのセーラー服を着せられて、住み慣れた我が家を後に、売られて行つたその晩に、彼女は恐ろしさと、悲しさに耐え切れず、その家から最初の脱走を試みた。

が、それは見事、失敗してしまつた。というのは、こうした身売り娘の取扱ひに慣れた店の者が、嚴重に警戒していたからである。身体一つで出ようとしたその家の裏木戸の外に、鬼の様な形相の見張人に立ちはだかられた時、彼女は一瞬、眩暈を起こして、ヘタヘタとその場に崩折れてしまつた。

「ホンの子供だと思つてたが、油断も隙もありゃしないよ！ 懲らしめのため、縛つて放

り込んでお置き」

怒つたこの家の女将の鶴の一声で、現場から直ちに男衆に荒々しく縄打たれた春子は、そのまま奥の納戸に、監禁されてしまつた。そこは、恐らくこれまでにも、多くの女達が悲嘆に暮れた場所に違ひない。小さな高窓が一つあるきりの、暗く陰気な座敷牢といつても良い部屋だつた。

春子は翌日も、その次の日も、殆ど食事らしい物も与えられず、麻縄で後ろ手に縛られたまま、その部屋に入れ置かれた。その間は三度ばかり用便を許されはしたが、便所の中でも縄付きのままであつた。三日目になつて不心得を論された上、漸く縛しめは解かれたが、その納戸からは出してもらえなかつた。

その夜、ホンノ一寸した家人の隙を盗んで彼女は二度目の脱走を決行した。なんとしてみても、こんな処に居たくないという固い決心がそうさせたのだつた。その時の彼女には、不成功の報いにまで考えを巡らす余裕は全くなかつた。がしかし、この脱走は運良く成功して、漸くその家から逃げ出す事が出来たのであつた。

春子は空腹を抱えて、裸足のまま逃げに逃げ、走りに走つた。勿論、何処という当ても

なかつたが、兎に角、一刻も早く、少しでも遠く逃がなければならなかつた。当時、街は既に戦時態勢で、夜間の照明は一段と制限が厳しくなつていたので、街中の灯りも暗かつた。その上、折柄、俄の豪雨が彼女の逃走を助ける結果になつた。深夜の篠つく雨の路上には人影も稀で、裸足で、ズブ濡れになつて走る小娘を見た者が、時偶、何人かあつたとしても、さして怪しまれずに済んだからである。

家に帰る気は毛頭なかつた。何処とも分からぬ、暗い真夜中の通りを、辿り辿つて着いた、とある冠木門かぶきもんの屋根の下で、一時の雨を凌いだ春子は、飢と寒さと疲労のため、ビシヨ濡れの身体を門扉に寄り掛けるなり、そのまま意識を失つてしまつたのであつた。

翌朝、春子が救助された、その冠木門の家というのが、不幸にも、その辺を地回りとする香具師の顔役Yの家であつたのだ。彼等は門前に行き倒れた小娘の身の上話を、如何にも憐憫の情を以て聞く素振りこそした。が、その実、良いカモが転がり込んで来た位にか考えない手合ひであつたから堪まらない。

二日ばかり休養が与えられ、良い働き口を世話してやるとの言葉を感謝した彼女は、そ



## イメージギャラリー 〓『浜遊びの思い出』〓 岡 たかし



れとも知らず、二度目の身売りのために、その家から連れ出された。

若しも先の彼女の逃亡が、不成功に終わっただならば、当然、そのまま曖昧屋で身を、ひさがなければならなかったに相違ない。とはいえ、偶然、脱走出来た事が、決して春子に

幸運をもたらしたとは、いえない結果になった。又しても身一つで売られたこの哀れた娘は、より一層、激しい虐待への道を辿る事になったのである。

春子に逃げられた店と、継親達との間に、どんな問題が起こったか、又それがどの様に

結着がついたものかは、もとより彼女の知る由もない事である。

## 11 地獄のサーカス

春子の二度目の身売り先は、当時、浦安で興業中のM曲馬団であった。この一座は、団長と、その妻の他、下回りの男衆まで含めても十五名に過ぎない小規模の集団で、動物は犬と猿が数匹いるだけのものだった。演目は体技、曲芸、寸劇を取り交ぜた、所謂ドサ廻り興業で、彼等は各地方の祭礼の期日に合わせて、巡業を続けているのであった。

その夜十時近く、彼女が連れてこられたのは、町外れの空地に組まれた天幕小屋であった。折柄、六、七名の男女の演技者が、入り乱れて荒稽古の最中で、団長の打ち鳴らす鞭音が、夜の静寂に鳴り渡っていた。

「お前みたいに呑み込みの悪い奴は、こうして体で覚える他ないんだ！」

と嗷鳴り乍ら、団長が振り降ろした長い革鞭が、一人の年若い女の背中に炸裂した。

「ヒエッ！」

と悲鳴一声、のけ反ったその女は、土間に四つん這いに、ひれ伏して、



「許して下さい、鞭だけは許して下さい！」  
と哀願する。それを見下ろした団長は、

「よし。立つんだ。許してやるから、早く立  
って、もう一度、初めからやり直せ！」

と、尚も女に強制する。

「団長さん、やってるねえ、相変わらず」

春子を連れて来たY組の若い衆が声を掛け  
ると、団長は、この時、初めて二人に気付い  
た様子で、

「やあ、みえてたんですかい。相変わらずと  
は、ご挨拶だねえ。こうして鍛えればこそ芸  
を覚え、従ってお客様にも楽しんでもらえる  
んですぜ。何も好きで、この鞭を振り回して  
る訳じゃありませんやね。ところで、先日の  
話の娘こというのは、この娘ですかい？ おい  
専公。後を頼んだよ」

と、団員の一人に、いい残して、二人を、  
狭い仕切り間に招じ入れると、じろじろと春  
子を一瞥して、

「良さそうじゃないか。こっちへ来な」  
と手招いた。

春子は、新しい働き口が、どういう処であ  
るのか、全く知らされていなかったし、真逆  
サーカス一座に売られようとは夢にも思わな  
かった。その上、小屋に這入るや否や、鳴り

響く鞭音と、激しい鞭打ちに倒れ伏した若い  
女の姿を目撃したのだから、心に受けたシ  
ックも一入、大きかった。

「おいおい。お前、懷えてるじゃないか。ど  
うって事ありやしないよ。じきに慣れるさ」

太い腹を一揺りした団長の、

「さあさ、そう怖がらずに、こっちへ来い。  
取って喰おうって訳じゃないやね。……先ず  
着てる物を脱いでもらおう」

という言葉に、春子は、おろおろするばか  
りだった。

「さつさと、しねえか！ さもないと、此奴  
をお見舞する事になるんだぜ！」

と団長は、じれったそうに早くも鞭を一振  
りする。その様子が脅かしだけではなさそう  
に感じた春子は覚悟を決め、羞かしさに耐え  
て、やっと上着を脱いだが、

「下着も脱いで、体を見せるんだ！」

と、促す厳しい語氣に押されて、仕方なく  
彼女が白キヤラコのスロース一つになったの  
を、ジッと見据えた団長は、

「面は良しと。体格は、まあまあだな。筋肉  
も良くついて柔らかいし、結構使えそうだ」

と、半ば独り言のようにいつてから、使い  
の男を見返って、

「話は、こないだの通りで良いでしょうねえ  
……しかし、何か見たところ、酷く裏れてる  
ようだがねえ」

と首をかしげるのを、すかさず男が引き取  
って、春子がここに来るまでの経緯を手短か  
に話す。それを大きく合点しながら聞き終わ  
った団長は、それまで、割に明るかった表情  
を、俄に曇らせると、

「成る程、そうですかい。道理でなあ。いや  
別に高い買物という訳じゃないが、トンズラ  
の前科者とは聞き捨てならねえ。知つての通  
り、この社会じゃあ、トンズラが一番、重い  
罪になってるんですがねえ。そうと分かれば  
こちとらも余程、用心して掛からなければ  
ならない訳ですよ。ふうむ！ この小娘がト  
ンズラの前科者とはねえ」

と、いいながら長鞭を、しごく。それは団  
員の逃亡が、彼等にとってどんなに苦勞の種  
であるかを表明したもので、あながち春子に  
当たり散らすだけの意味合いからではなかつ  
たかも知れない。しかし、団長の言葉や素振  
りに、たまたまなくなった春子は、いきなりそ  
の場に跪くなり、

「私、悪い事は致しません。なんでも、おい  
い付け通りにしますから、あんな風に私を鞭



で撲たないで下さい」

と一生懸命に嘆願した。しかし、

「いやいや、そうは行わねえ。此処には此処の掟があつてなあ。一度、入団したからには娑婆ッ気は捨てて掛からねば一人前の芸人にはなれないんだ。この鞭を、伊達や酔興で振り回しているとも思つたら大間違いだぞ。これ一本で一座が動いてるんだ。誰だろうが落度があれば容赦しつこなしさあ」

と、冷たく突き放すように言いきる団長だった。そして、丁度その場に來合わせた、副団長の妻に向かつて、

「峯子！ この娘だよ、Yさんからの娘は。良さそうな娘だと思うが、一つ気に入らねえのは、トンズラの前科があるそうだよ」

と口を歪める。しかし、黒いタイツに赤い

派手な上衣を引っ掛けた峯子は案外、気にも止めない風で、

「そうなの。まあ良いじゃない。後は、こっちで存分に仕込むんだから。その娘は私に任せて下さるんですよ。きつと良い芸人に仕上げて見せるわ」

何故か、一目で春子が気に入った様子で、

「お前、名前は？ 春子？ フーン、素敵じゃない。その俚、芸名に使えそうねえ。まあ

私が悪いようにはしないから、心配おしでないよ。でも、この社会では、なんてったって鞭で鍛える事が一番なんだから、その覚悟だけはしてもらわなければならぬけど」

と、したり顔で念を押す。

「お前が、その気で仕込むんだつたら良いだろう。後は任せるよ。おい！ おまえ。えーと、春子とかいったなあ。兎に角、この一座に這入ったからには、なんでも俺の命令に服従しなければならぬのだ。否といつても、この鞭が承知しないんだぞ」

と、又しても一鞭、鳴らす鞭音に、顔青ざめた春子は、恐ろしさに肩をすくめて、

「許して下さい。鞭だけは許して下さい」

と、さっきの若い女と同様の言葉を口走りながら、

「私、決して逃げたりはしません。どんなに修業が苦しくても、逃げは致しませんから勘忍して下さい」

と土下座する春子を、睨み据える様にして

団長は、

「本当かね？ 絶対に逃げ出さないという保証でもあるのかい」

と、尚も意地悪く続ける。春子は

「誓います。もしご心配なら、いつでも私を縛って置いて下さっても構いません。でも、鞭だけは許して下さい」

と涙ぐむのであった。

それは、その場で咄嗟に出た言葉だったが「私を縛って」という一言を、団長は聞き洩らしはしなかった。

「縛ってくれろって？ ほほう、これは面白い。お前、聞いたかい。鞭を恐がる奴は沢山いたが、自分で縛ってくれといったのは、この娘が初めてだ。そうだろう？」

と、やや呆れ顔で、峯子に呼び掛ける。

「全くだねえ。珍しい娘なこと。きつとこの娘は、随分、苦労して來たに違いないよ」

と、むしろ憐れむような眼差しで、この小娘を眺めた峯子は、矢張り女であった。しかも、その觀察眼も団長より鋭かった。ズロース一つの裸のまま晒されている春子に近づくと、峯子は独り領いて、

「ちよいと！ 団長さん。この娘の体を良くご覧な」

春子の二の腕の外側を指差しながら、

「ほら！ 此処と此処に、こんなに括れた跡があるわ。両手を前にお出し。ホレ、思った通りよ。お前は今まで何度も縛られた事があるんだろう？ この手首の括れ具合は、二度



や三度の縄目じゃ出来っこないものっさあ。  
正直に白状おし」

と、少し気色ばんで見せる。折柄、稽古場  
の方から又しても聞こえて来た鞭の音に、身  
を慄わせた春子は、思わず、

「はい！ 何回も縛られています」

と答えてしまった。峯子は、したり顔で、  
「そうだろうさ。この体に残ったくびれは、  
着物の着付なんかで出来た帯紐の跡とは、全  
然、違うもの。この様子だと、この娘は今ま



イメージギャラリー

『只今鑑賞中』

志 羽 利 也

でに始終、縛られて暮していたらしいわよ。  
それでも鞭で打たれた経験がないもんだから  
鞭は恐ろしいけど、縛られるのなら案外、平  
気という訳なのよ。きつと、そうに違いない  
わ」

と目を輝かす。団長は感心して

「そういわれれば、成る程そうに違いねえ。  
それじゃあ、お前、いっその事、この娘を鞭  
の代りにロープで仕込んでみたらどうだ？」  
と、今度は突飛な提案を出した。

「それも楽しみだわねえ！ 団長さんも随分  
と女の子を責めて来たけど、縛り専門という  
娘は、いなかったから興味あるでしょうね。  
一つやってみましようか。トンスラの前科者  
だから、罪人扱いの腰縄付きって訳ねえ」  
と、すっかり乗り気になったらしい峯子に  
頷いた団長は、

「良からう。そこんところはお前に任せる。

好きなようにしな」

と、ようやく機嫌を直した様子。その時ま  
で傍で、成り行きを興味深げに見守っていた  
組の男を帰してから、

「腰縄つきとはねえ！」

と独り北叟笑んだところを見ると、彼は責  
めの道でも相当なものであるらしい。それに



しても可哀想なのは春子であった。地獄から脱け出したいばかりの逃亡の一件が、とんでもない方向に発展してしまったのだから……「そうと決まったら、明日からといわず、早速、今から始めましょうよ。善は急げというからね。私、ロープを取って来るわ」

何が善か知らないが、小走りに出て行くその後ろ姿を眺めやった団長は、

「あいつめ、いい気なもんだぜ。鞭なしで仕込みが、そう易々と出来るもんかい」

と未だ拘っているらしい。

やがて、真新しい綿ロープを一本、持参した峯子は、先程から裸身を固くして、その場に、しゃがみ込んで慄えている春子を立ち上がらせる。そして彼女の腰を包んでいた小さなズロースの腰ゴムに手を掛けて、無造作にずらした。しなやかな彼女の細腰には、まるで絵の具で描いたような赤い一筋のゴム跡がクッキリと印されている。それもその筈、彼女は家を出る時、継母のせめてもの詫び心で真新しいのを穿かせて貰ったばかりだったのだから。

「まあ！ 随分キツク締めてるんだねえ」

と薄笑いを浮かべた峯子は、春子の裸に剥がれた胴囲りを、ゴム輪形に添って一撫で二

撫でしてから、やおら、ロープの中程を腰骨の処に当てがうと、ゴム紐の赤い締め跡がついた肌溝に埋めながら、前に回して、グイと一締め、締め上げた。更に後ろに一巻き締め戻すと、元の腰骨の窪みの所で、嚴重な固結びに縛り止めてしまったのであった。

ロープが長かったので、こうして腰縄を胴に二巻きして縛っても、その縄尻が二本共、一メートル近く余っているのを一緒に持ちながら峯子は、

「さあ、これで良しと。お前、ズロースをしっかりお上げよ」

と促してから、春子のズロースの裾ゴムと腿の間に指を差し込んで、ピチンピチンと二三度、鳴らしてみて、

「まあまあ、このゴムも、こんなにキツイのね。新しいのを穿かせてもらったね。これも親心か知らねえ」

と、つぶやいたのは、女なればこそその感慨だったかも知れない。

いわれるままに春子は、ずり下げられていたズロースを、急いで普段の位置に引き上げると、腰ゴムが、腰縄でキツク絞られて、くびれた場所にピッチリと嵌まった。直ぐさま促されて、副団長の峯子に縄尻を取って引き

立てられた春子は、再び稽古場に連れて行かれた。両手は縛られてはいなかったけれど、罪人同様な腰縄つきという浅ましい姿を、彼女は、座員達の前に晒す羽目になったのである。

「皆、良くお聞き！ この娘は今日から仲間入りした春子という新入りだよ。一寸事情があつて、こうして腰縄つきで働いて貰う事になったから、皆もそのつもりでいてね」

という峯子の紹介の辞に続いて、一足後れて現われた団長が、声を励ましていう。

「俺達はこれから、この娘をロープで仕込む事にしたんだ。別段、悪い事をしたという訳じゃないんだが、つまり鞭で鍛える代りに、縛りだけで仕込んでみようと思う。皆も知つての通り、鞭こそ我がMサーカスの団結の絆で、今後もそれには変わりはないが、この娘に限って、縛り専門を試みてみる事にした訳だ。そのつもりで、よろしく頼む。皆、分かったな。良し、稽古を続けろ！ 峯子。この娘を、そこらに縛って置いて、とっくりと稽古の様子を見せてやりな！」

命令されるまでもなく、峯子は、素早く春子の腰縄の、長い縄尻を引きつけると、彼女を傍の丸太の根方に連れて行って、忽ち立ち



縛りに括りつけ、おまけに両手まで柱の後ろに回して、縛り上げてしまったのであった。

## 12 可憐な腰縄娘

こうして売られて来たその夜から、春子のサーカスでの新しい生活、それはロープで縛られ続けて暮す惨めな奴隷生活が、始められる事になったのである。

春子は、これまでに継母の手によって六年間、幾度、縛られたか数え切れない。それだからこそ、彼女は縄目の恐ろしさは、さ程に感じてはいなかった。それ故、縄目を身に受ける事は、鞭打の苦痛を思えば、比較にならない程、楽なお仕置だと考えたのであった。この事が、このような縄つきのまま暮すという、囚人よりも酷い生活に陥る結果を招いたといえる。



イメージギャラリー

『髪の毛縛り』

須坂

旭

だが、彼女には、自分の思惑が全く甘かった事が直ぐに分かった。縛られるという事がどんなに苦しく、辛い事であるかを存分に思い知らされる悲しい日々が、果てしなく続く事になったからである。それまでの継母による縄目が、当時の彼女にどんなに厳しく思われたとしても、それは、この地獄のサーカスでの、熾烈極まりない緊縛に較べられはしない。その方法からいっても、厳しさの度合いから見ても、全て彼女の想像を超えた、無残な責め苦であった。鞭打は大抵の場合、鞭打たれている時限りの一時的な苦痛で終わる。それに反して緊縛の苦しさは継続的である。特に彼女の場合は、他の団員と違って、四六時中、腰縄で縛られている事が、その苦痛を一層、激しいものにした。他の者でも鞭の折檻の外に、色々とロープによる懲らしめの緊縛を受ける事はあった。それでも縛られている時間や、その回数はタカが知れている。しかし春子に限ってそうは行かないのである。彼女の緊縛に使われたロープは、手当たり次第で、特別に選ばれた物ではなかった。柔らかい綿ロープ、丈夫な麻縄、痛い荒縄や棕櫚縄、弾力のキツイゴム縄などが使われた。時には女団員達が、その身体に締める、日常



の帯紐である事もあったし、それと反対に細い鉄鎖がロープ代りに使われる事も、しばしばであった。問題の腰縄は綿ロープだったから、一時に素肌を傷ける直接の心配は先ずなかった。けれども、それは固く嚴重で、被縛者が勝手に解く事が出来ない縛り方で、腰骨の処で縄止めされていた。そのため、厳しく締め上げられた細胴のその部分は、縄溝が深く深く喰い込んで、全く締め緩みは見られなかった。

由來、サーカス程、折檻の道具に事欠かない職場は少ないように思われる。様々な種類の縄や鎖。滑車や鉄輪の類の外、丸太柱や高梁等数え上げれば限りはない。たとえ春子が鞭の苦痛を免れたとしても、それに代る折檻の道具や方法には不自由しないのである。

春子は年が若く、肉体が未熟で柔軟な事を理由として、先ずアクロバットを仕込まれる事になった。しかも、その訓練の手段としては、革鞭の一振りよりも、縄による緊縛固定の方が、より以上に効果的であった。例えば身体を逆にして弓なりに反り返ったり、両足を真横に一直線に広げたりする、アクロの基本練習の時、縛りが一等良く効いた。彼女はそうした苦痛に満ちた姿勢を完成させるため

『責め板』に縛りつけられて何時間も過す事は珍しくなかった。しかも、これらの基本姿勢を、自力で確保出来るように仕込まれた後でさえも『責め板』は彼女の全身の汗と脂肪を吸収し続け、殆ど彼女の専用物同然に使われた。

春子が一番、悲しかったのは、何よりも、『逃亡前科者』の烙印を、押された事であった。それは仲間中に徹底されていた。それ故彼女に逃亡の意志があるなしに拘らず、何時でも、何処でも、縄打たれた。それは稽古中であれ、食事中であれ、誰かの手によって行なわれ、就寝中でさえも後ろ手に縛られていなければならなかった。しかもこれ等の緊縛には、別段捕縄を深し求める必要は更々ない。それは、彼女自身が常に細腰に帯びた腰縄の長い縄尻が、立派にその役目を果たしたからである。

こうして、彼女に対する絶え間のない緊縛は、舞台上上がっている時と、一座の移動中とを除いて、全く過酷なまでに嚴重に実行され続けた。これは、ひとえに団長と副団長との、彼女を縄一つで仕込もうとする執念であるというよりも、彼女がこの二人の支配者の持つ加虐性を満たすための、生け贄に供せ

られていたと見た方が当たっている。

他の団員達、特に女達は、こうした事実を充分、承知の上で、この仲間内で一番、幼い春子を、いろいろに縛っては、自分達の玩具にしていた。折檻用具に余り相応しくないと思われる女達の帯紐は、こうした遊戯の時にしばしば用いられたのである。

人間の習性は、恐ろしいものである。この一座に買われて以来、春子は、こうして毎日毎夜縛られ通している内に、半年足らずして肉体的にも精神的にも一匹の女奴隷同様に馴化され、抵抗心など全く失ってしまった。例の腰縄は日が経つにつれて、すっかり彼女の肌に馴染んで、初め女手ながら随分、力一杯締め絞られた苦の縄目にも、次第に緩みが出て来た。これは決して縛り目が緩んだからではなく、彼女の胴囲りそのものが、引き続いた緊縛のために、小さく変形して来たからであった。

副団長の峯子は、何時も春子を側に置いて身の回りの世話をさせ、それなりに何かと可愛がりもしていた。それだから、春子の腰縄の緩みを見過ぎはしなかった。

「まあ！ 何時の間にか随分隙間が出来たわねえ。胴囲りと縄の間が、こんなに空いてし



まったよ。このまま放つといても脱げる心配はないけど、もっと、きつく締め直してあげようねえ。その方が気持が良いだろう？」

そう勝手に決めた峯子は、他の者達の見ている前で、固い腰縄の結び玉を解くと、身構え直して、両腕の力の限り、春子の細腰を厳しく絞りに掛かった。

「おや！ 全く凄いのよ。これ、ご覧な。幾らでも細く締まるじゃないの。この娘ったら、まるでコンニャクみたいな身体だよ！」

頓狂な声をあげて周囲に笑い掛け、尚も力任せにロープを締め上げる様子は、如何にもご満悦の態であった。

一方、春子にしてみれば、腰縄つきの生活



イメージギャラリー

『空の見える個室』

飯田ひろくに

は、もとより苦しいには違いなかったし、こうして縛られ通さなければならぬ我が身の上の惨めさを思っただけ泣きはした。しかし、全ては彼女自身の身に覚えのある事。即ち逃亡前科者に対する懲らしめと見せしめに相違ない事なのだ。従って、こうした苦しみを堪え忍んで、奴隷生活に甘んじている事こそ、自分の罪の償いになるのだという風に諦めて、辛抱し続けていたのである。春子という女は生まれつきそうした性質の女なのであった。

腰縄改締の作業が、春子のこの一座での生活中に何回か繰り返されている内に、遂には春子の胴は、そこだけが極端に小さく細く、くびれて、まるで蜂の胴のようになった。こんな胴絞りの、拷問にも似た腰縄の緊搾も、その頃の春子にとっては、既に苦痛が交じって断しい快楽にまで昇華していたようである。

腰縄の縄尻は、初めから余裕をタップリ取ってあったので、普段、舞台や練習の時は、その余分を胴にグルグル巻きつけて、その上に衣裳を纏った。

曲馬団の人達は、怪我を防止するために殆ど素肌を現わさないで、綿の肌着を着けるのが常習である。この習慣が鞭や縄で肌に残った折檻の跡を、公衆の目から隠してくれた。



シャツやタイツの類を脱いで演技する場合でも、腕や脚に巾広の環を嵌めるなどすれば、縄目の跡を見られずに済んだのである。

この一座の象徴である鞭の折檻は、春子を例外とした全ての団員に、相も変わらず情容赦なく続けられていた。が、それにも拘らず逃亡者が出なかったのは、春子が縄一つで鍛えられているように、彼等も鞭一本で飼育された奴隷に外ならなかったのだ。春子との相違は単に鞭と縄の違いに過ぎず、いわば彼等の一座は、折檻に耐え得られた者だけが固く団結した、マゾ集団と見るべきであろう。

一座は祝日や祭礼を追いながら、果てしなく各地を巡業して回ったが、この一座の移動中でさえも、春子は時には、もっと酷い目に会わされることがあった。

その頃は既に非常時態が深刻化して、客の入りも悪くなるばかり。従って一座も不況に見舞われていたので、少しでも経費節約の工夫がされ、乗車券を浮かすために、春子は柳行李やトランクに押し込められて、他の荷物と一緒に荷車に積み込まれたり、或は又、彼女は宿泊費を軽減するために、リュックや鞆に入れられて、部屋まで運ばれたりするようになったのだ。そうした時の彼女の口には、

呻き声や泣き声を防ぐ必要から、猿ぐつわが嚴重に噛まされたし、時には荷造りでもするような縄捌きで、身体中を丸めて、細引で雁字搦めに縛られた事もあった。

公演する先々では、全ての座員が宣伝隊となって繰り出すのが慣わしだった。そんな時は、演し物に依じて、その舞台の扮装の俣で練り歩く。若し責めのようなコミックを挿入する場合の宣伝には、必ず春子が悲劇のヒロイン役になった。木戸を開ける前から客寄せのために、木戸口の上段に、縛られたまま、自分の出番が来るまで晒されていたり、時にはリヤカーに取りつけた十字柱に磔にされて引かれた事もあった。

春子がこの一座に入団して三年目に、一座は九州から海峡を渡って遠征した。それは引き続き空襲に戦く内地では、既に巡業の余地が少なくなった事と、当時としては、破格の旨い話が半島で見つかったからであった。

そちらでの巡業成績は、目論見通り順調で一座の全てが、前途に光明を持ったのも束の間で、思いも掛けぬ敗戦となった。現地の秩序は混乱し、一座は当然、巡業処ではなくなったので、その時限り現地で解散した。団員達は夫々なにがしかの金額を分配されて、皆

内地に引き揚げて来た。それでも彼等は佐世保に上陸するまでは、全員が一致団結して行動を共にしたのは、流石、日頃、培われた鉄の規律の賜物といえる。

春子は元より寄る辺ない身であったから、身の振り方に困ったけれども、兎に角、東京に帰りたかった。団長夫婦は、すっかり縄目づいたこの腰縄娘の春子が、ペットのように可愛くて、手放すのを惜しがった。それだから一緒にいて来ないかと奨められたのは、本当の好意からであったかもしれない。しかし春子が、その勧誘を振り切ってしまったのは、ひとえに東京深川の地下に眠る、亡き両親を慕う心からであった。

問題の腰縄は一座が現地解散した時、一旦は外されようとしたのだが、春子は、それを断わった。そして、そのままの姿で内地に帰還して来た。その理由は、彼女が団長達と行を共にしている間中は、奴隷のままの境遇でいたかったからか、腰縄による被虐の快感を失うまいとしたからかは分らない。何にしろ、春子はその時、既に腰縄つきの生活になんら肉体的不自由さを感じない身体に変化していたのだ。それが当然在る可き自分の姿として、不自然とも思わないまでに飼育され



つくしていた事は事実のようである。

春子は彼等と別れてからも、一座の誰彼、特に団長夫婦の事を時折、懐かしく思い出す事もあった。けれども、それ以来、杳として彼等の消息を聞かないという。

こうして、春子は東京に帰っては来たが、深川一帯は焼け野原と化しており、食べるために一人の女がしなければならぬ、或は受けなければならぬ様な惨酷が、否応なしに彼女の、か細い両肩に、無慈悲にも降り掛かって来た事は想像出来る事である。

その頃、十七才になっていた春子は、少なくとも本人の意志一つで、なんでも出来た筈であり、彼女が何処で何をしようと勝手だった。しかし内地帰還後の彼女の生活内容については、全く誰にも分からない、何年かの空白が認められる。それは、その間の消息を、彼女が誰にも話したがないから、致し方がない。更に彼女が何時、何処で純潔を失ったかについても、口を緘して話そうとはしなかった。多分それは、春子自身が余りにも惨めな自分というものを愛しく思っているからに違いないとは、夫新吉の語った言葉である。

いずれにしても、女一人で生きる、どん底の生活が、どのような苦渋に満ちたものであ

ったかは想像は出来る。そして、その哀れな生活が何年か続いた後、一夜、馴染んだ一人の客と結ばれる運命になったのである。

○

日が暮れかけていた。南面した廊下と座敷とを仕切る障子を通して、柔らかく差し込んでいた夕陽影が、何時の間にか西に回って、家中が薄暗くなつて来た。ようやく、それに気づいた浩介は、

「これは、いけない。随分、長居してしまいました。奥さん、お疲れになったでしょう。すっかり夢中になって聞き惚れていましたので、まるで時間の経つのも忘れていました。ところで、どうです、お縄の具合は？ 随分厳しく締まっていますよ。夜中から縛られ通しですから、もう十七時間にもなっている訳ですねえ。それでも苦しくないの！ 大した身体ですねえ。とても信じられない！」

「ごもっともですわ。でも、縛り方の上手、下手によっても差別がありますのよ。ツボとでもいうんでしょうか知ら。お縄を受ける場所によって、縄慣れが出来ている部分があるのです。同じように縛られても、他の人に目茶目茶に緊縛されれば、矢張り堪えられないことだってあります。けれど、ツボを心得た

上手なお縛りでしたら、その苦しささえも楽しさに変わって来るのが、不思議ですわ」

と春子は、悦虐の境地に酔っているかのよう、目を細めるのであった。浩介は心の底から感動していた。その日の午後の半日を通して、ポツリポツリと往時を懐かしみながら伏目勝ちに小声で話す春子の話は尚、尽きない様子であったが、ふと気付いた彼は、夫の新吉が帰宅しない内に辞去しようと思った。

浩介は、縛られ放しで薄闇の中に仄白く浮かんで見える春子の円やかな肉体が全く眩しいもののように見え、殊にその付根を固く括られて、ゴム毬のようにパンパンに張り出した二つの乳房の谷間に顔を埋めて甘えたいような衝動を、やっとの思いでこらえていたのである。これ以上、この場に長居してはどんな結果に陥るか、自信を失いかけて来たのだ。

「じゃあ、今日は、これで失礼します。くれぐれも、お身体に気をつけて下さい」

と、夕闇の中に立ち去って行く浩介の後ろ姿を、独り、柱に縛られながら見送った春子の、つぶらな眸は、既に単なる来客に対する眼差しではなくて、それは恋する女のみが持つ妖しい輝きに満ちていた。――(未完)――



<告白>

フート・フェチシズム

<前田真知子嬢の素足の美に魅せられて>

みなみ  
南

の  
埜

しげ  
茂

お  
雄

私は奇譚クラブ47年9月号を、はからずも書店で手にして、頭を殴られるような激しいショックを受けました。

と言いますのは、そのグラビア写真と本文中の写真に、ポーツとなるほど心から魅せられてしまい、涎がたれそうになってしまったのです。



巻頭の緊縛美フォト——『二の腕に縄痕を残して』という前田真知子嬢の写真を見て、私の胸は高鳴りました。

なんとという美しい足でしょう。フート・フェチシズムの性癖を持つ私にとって、この前田真知子嬢のフートは、最高のものに思えたのです。特に下段の引き寄せた足の裏、ピン

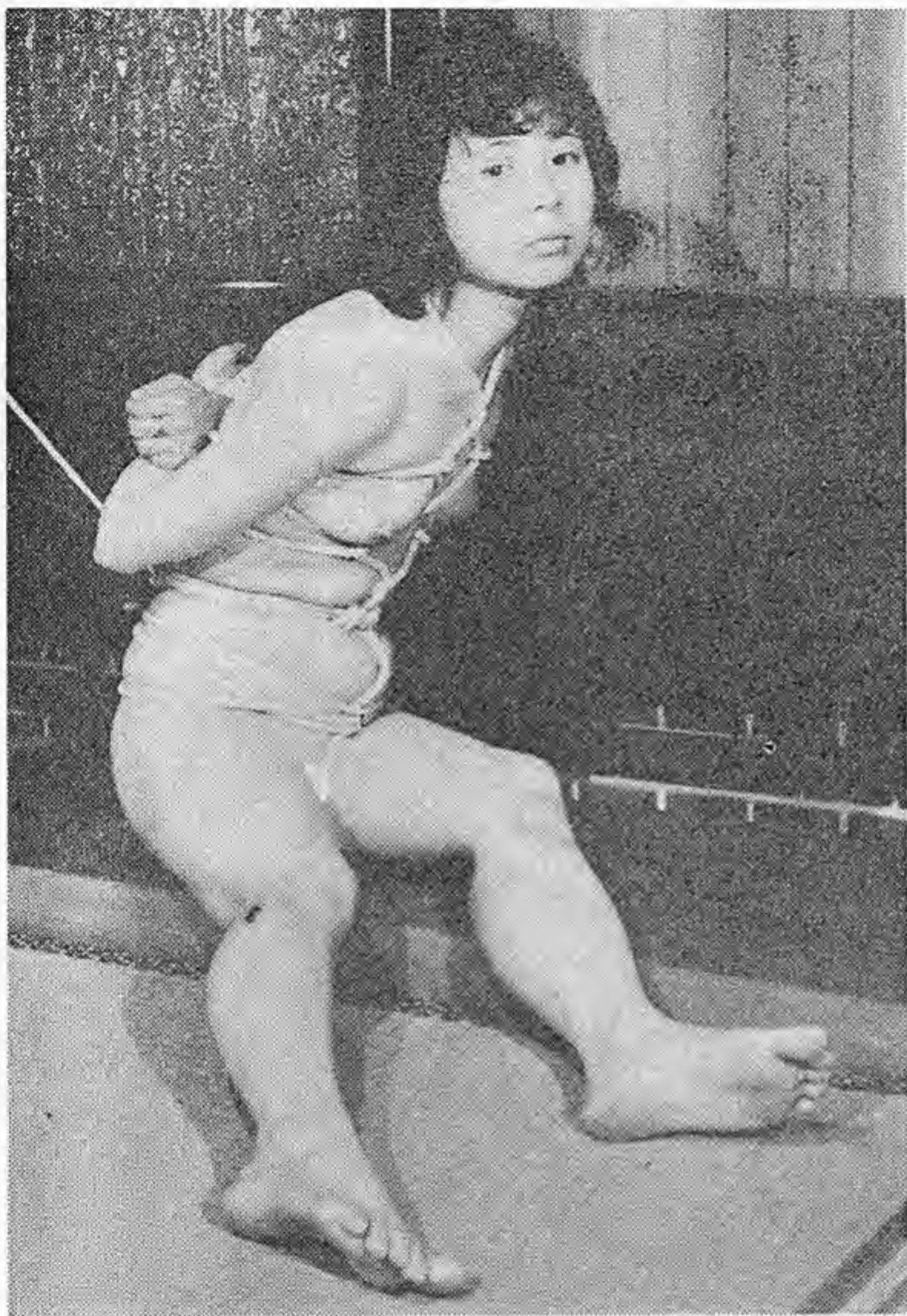


とはねた足の指先——に、たまらない魅力を感じました。

彼女が縛られていて手の自由がきかず、僅かに足の自由だけがきいているのですが、その自由になる足も、責める人の意志によって動かされている——というところに、一層の良さを見出しました。

本文の△霖雨余情▽に挿入された写真を見てみますと、更に一段と私の性癖が満足させられるのでした。

一六六頁の首に縄を掛けられて引き回されているポーズで、後へピンと、はねた右足。それに、前へ投げだして力をこめた左足の爪先。グラビアと違って本文の写真は、いささ



か不鮮明なのが難点でしたが、私の胸をドキリとさせるのに十分でした。一六八頁の、縄に吊られて無理に上げさせられた右足の足の裏が、目の前に、まざまざと美しく突き出されているのです。

同じく左足首にも縄を掛けられて、引きひろげられているのですが、さすがに無垢の若い女性らしく膝を寄せて抵抗しているさまが伸ばした足の拇指から、足の裏にかけて、よく、その表情を出しています。

続いて、一七一頁の両足を揃えて吊り下げられたポーズでは、両足の五指とも、きゅつと力をこめているのが、よく分かり、足の裏の方へくの字に曲げているところなど、本当に△女責め▽の感じが満ち溢れていて、私を魅了してしまいました。

一七三頁では、右太股の曲げて力が入ったところが素晴らしく、前に投げだした左足の脛も魅力的でした。一七四頁には、太股から脛へかけて流れるような線が、まことに見事に描きだされています。それというのも、前田真知子嬢の足が美しいばかりでなく、縄という小道具が、緊縛という手段によって、言うに言われない美的な描線を現出しているからなのです。



それは、一七五頁と一七六頁の両足を思いきり伸ばした緊縛ポーズに最もよく現われています。ぐっと伸ばしきって、その足指が、くの字に力いっぱい内側に曲げきっているところなんかは、まさに絶品ではないでしょうか。女体責めとしても、これは、巧まずしてその瞬間をキャッチされた見事な出来ばえの写真だと思いました。

一七六頁のうつ伏せになった前田真知子嬢の、この美しい脚は、なんとも言葉の出しようもありません。すらりと伸びた脚線美を、このように、あらわに見せた写真を私は知りません。高手小手に縛られて、上半身を引きあげられているので、一層、見事な脚線美が活きているでしょう。

一七七頁の左足首を吊られて、太股からはち切れるように足を挙げたポーズも、まことに私の胸をゆさぶるものがあります。太股の裏側が、私の目の前で美しく、ぶるると躍動している有様がたまりません。

私は、前田真知子嬢の素足の美に、すっかり魅せられてしまいました。今までに、こんなに美しい足の持主に会ったことはありません。直接、印画紙に焼付けた前田真知子嬢の写真を手にしたくなりません。

私は、なぜ、もっと早く、この奇譚クラブという雑誌にめぐり会わなかったのだろうか、と、それを悔みました。私の知らない雑誌の中に、どんな素晴らしい写真があったかも知れない——。その思うと、もう、いても立ってもらえない気持ちに、かられるのでした。

そんなわけで、私は八月号を注文して、これ入手しました。表紙をめくるなり、パツと目にとびこんできた写真。私は頭を、がんと打たれたようなショックを受けました。前田真知子嬢の素足の美しさを、これ以上、巧妙に表現したポーズはないだろうと思われる見事な写真に、めぐり会ったのです。

開巻第一頁に、**「美しき縛しめ」**と題した前田真知子嬢の清楚で、しかも艶麗な写真がそれです。臀部から太股へ、太股から脛へ、脛から足の甲へ、そして綺麗な爪先へと、まるで雪のように白い脚が伸びているのです。

それは、脚線——というような単純な言葉で言い表わすことの出来ない、複雑な美しさを見せていました。

勿論、前田真知子嬢の美貌もさることながら、流し目でカメラの方を凝視した表情にも思わず生ツバを飲み込む真迫さが、私の胸を打ちました。

この前田真知子嬢の写真こそ、まさに絶品といっても過言ではないでしょう。

次に巻頭グラビアに載っている彼女の写真を見てみましたが、見れば見るほど、なんと脚の表情の豊かな女性であろうかと、私は感心しました。

『本格的に責め始める』と題する二葉の写真にしても、右と左の足の爪先を、一方は上に戻らし、他方を内側へ曲げているといった対照の妙は、巧まずしてM女性の本性を露呈しているものか、或は撮影や責めを担当している方の演出指導によるものか、その点も知りたいものです。

曲げても、伸ばしても、挙げて、反らしでも、美しい前田真知子嬢の脚線は全く見事という他はなく、ここに至って、完全に私を魅了してしまいました。

フット・フェチズムの性癖を抱いて、女性の美しい素足を追い求めていた私ですが、縄で女性を緊縛するというのが、これほどまでに、素足の美を純化するものとは、知りませんでした。

この時、私は日本経済新聞の朝刊に連載されている女流作家瀬戸内晴美の小説「八京まんだら」の中に、私と同じようなフット・フェ



チンズムに憑かれた男、作家の黒川知一郎の痴態の描写が目につきました。

三七九回のこのページには、エロ雑誌顔負けの女の上に男が重なり合った風間完の挿絵が載っています。新聞小説もここまでエスカレートしているのかと、昭和47年後半の風俗思潮を如実に現わしているのを見て、大いに興味を持ちました。

さて、その小説の文中ですが、祇園の芸妓えん子を愛した作家の黒川知一郎が、彼女を愛撫する場面ですが、前日の分では、黒川がえん子の足袋を脱がすところが、まことに巧妙に書かれていました。今日の回では――

△二つの足を掌に抱き黒川は足の甲の痛々し

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御了承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

い線を舌でなめさすってやった。交互にそれを行うと、えん子は身をくねらせて悶えた。

(中略) 深い息をして、それをなだめなだめしながら、黒川は軀をずらせ、自分は床にひざまずき、えん子の足の指を口にふくんだ。

小鳥の喉をしめたような細い鋭い声えん子の咽喉から洩れた。小さな細い足の指が黒川の口の中で、ひとつずつ身悶え、捕えられた小鳥のように可憐に翹ばたいて逃げようとする。黒川はじらしながら、いとしい小動物に歯をあててやった。(中略)

両腕がのび、宙を掻いている。黒川はかまわず、えん子の上体を無視して、えん子の足の裏に唇を移していった。南仏の花の香をふくんだ石鹼のほのかな匂いが足袋にむれていた足うらからはただよってくる。土ふまずの皮の柔かさはなめし皮のようだった。指がそりかえり、足が強く黒川の顎を蹴りそうになる。

黒川はその足首をしっかりと握み直すと、足うらをなめてやった。えん子はもうひかえきれない声をあげた。▽

素足に対する愛撫が、まことに巧みに描かれています。女の足の指を口に含むことや、足の裏を舐めるといふことは、フート・フェ

チンストとしては常套のことですが、私なんかは、女性を愛撫するときは、ついつい、知らず知らずのうちに、視線が素足にいつてしまふのです。行為の最中でも、相手の女性のそのときの素足の表情に目をやると一層、興奮してしまうのです。

黒川が、えん子の美しい素足を愛撫するといふのは、男性の心の奥底に巣喰っている女性の肢体の一部に対するフェチが、知らず知らずのうちに露呈したものであって、性行為の中の一つの前戯のテクニクとして考えると、この程度だったなら、特に変わった性癖といふことは出来ないでしょう。

世の中には、この程度の軽い変態性を持っている男性は、案外多いのではないのでしょうか。私もまた、その一人です。女性の身体を見るとき、視線は先ず第一に素足へ行ってしまうのです。

最近の男女性に対するアンケートで、女性の身体の中で、どこへ視線が行くかという統計では、やはり脚線が第一で四十%代、次にヒップとバスト、という順であったが、これは年齢によって、変化するという答が出ていました。





私がSMに興味を持ったのは、高校三年の春頃からだから、もうかれこれ十三年にもなる。ひと口に十三年と言っても、ひと昔以上となると色々な事があり、その都度、SMの趣向が変化して行った。

大別すると三つに分けられるが、一期は高三から大学生活を過ごし社会人になる迄——この頃は、まだ初期の段階で、自分の気に入ったモデルの緊縛ポーズと、その顔の表情に喜悦していた時代で、自分で実際に女を縛っ

てみよう等とは夢にも考えていなかった。

二期は強烈なSMショーを見  
苦痛美への憧憬が募り、SMハントに誰彼と  
なく、うつつをぬかしていた時代。ようやく  
SMというものがわかって来て、自分のパタ  
ーンが出てきた頃である。

三期はM作家、谷貫太氏との出逢いから現在に至る迄で、私にとってSMの完成期とも言える。谷氏とは二年前、一寸した番組の取材に行つて以来、じつこの間柄だが、そのつき合い方が一寸、変わつていて面白い。

ある時、谷貫太氏が、私の会社に遊びに来

△告白

白

S エス

M<sub>工ム</sub>

^

の

誘いざな乃

い

東 あづま

京 きょう

介すけ

て色々雑談をしている内に「君は目つきが悪い。私も、あまり良い方ではない。目付きの悪い人に悪人はいないというから、今後、君とも、うまくやっていけるよ」と、こんな工合で、現在では仲間と共に一緒に別の仕事もやるような友人関係になった。

彼を知ってから、物を書く事に興味を持つようになつたのは勿論、自分自身、人が変わったように明るくなつた事である。今迄の私はS特有なのだが、無しように陰にこもつた所があつて、他人によい印象を与えない一面があつた。しかし彼は私の悪い一面を指摘してくれて、私も段々角かどがとれ、人前でも平氣



でSMについて話が出来るようになった。

その他、彼自身Mなので私とは正反対なのだが、口では言えない位、彼の恩恵を蒙っている次第で、今後も彼の影響が大きいものになると確信している。しかし、断わっておくが、谷貫太氏と一緒にプレーした事は一度もない。私は男とのプレーは好まないし（彼も同様だが）女性の苦痛美と緊縛、ことに股間しぼりが好きなサディストだからである。

女をいたぶる事は好きなのだが、どうもカメラマン上がりの所為もあってか、いかに苦痛美、緊縛美と云っても、美しさを越えてしまふと、反って汚なさを感じてしまう。だからまだ試みた事はないのだが、浣腸等は仲々やる気はしない。

# △▽

私のSMへの芽ばえは、高三の春休み、叔父の経営するカメラ店にアルバイトに行った時から始まる。

叔父の家にも、私より一年下の雄吉という一人っ子が居たが、バイト三日目、その雄吉と二人して客のネガを八十本位、現像していた時、暗室で突然、大声で雄吉が言った。

「京ちゃん、SMって何だか知っている？」  
私はビックリしたが、それでも年上の威厳

を見せ、現像液を攪拌しながら返事した。

「聞いた事がある言葉だが分からないア」「うーん」

しばらく、又沈黙がつづいて、二人共、それぞれの仕事に熱中していた。時折、雄吉のメガネが液に青く反射して光った。

「雄ちゃん。SMって、何だい？」

「うーん」

雄吉は一寸、気まずそうな、それでも「俺の方が物知りだ」と言わんばかりに目を輝かせて言った。

「Sってサディズムの事さ。Mってマゾヒズム。つまりSは

虐待する方で、

Mは虐待される

方——」

「ふうん、分かったけど、それ雄ちゃんと、何の関係があるの？」

「俺、一寸、その事で京ちゃんに、相談があるんだ」



「どんな事？」

「一寸、今、ここでは、言えない事なんだが……。そうだ、今日はもう晚いし、俺の家に泊まって行けよ。そうすれば、ゆっくり話も出来るしさ」

「俺は家に電話すれば、かまわないけど」

「実は京ちゃんに剣道の合宿をさばらせてまで、バイトに来てもらおうよう親爺に頼んだのは、この俺なんだ」

「そんな事は、どうでもいいよ」

「でも、京ちゃんは来年大学受験があるし、本当は悪いと思ったのだけど、京ちゃんは俺



の本当の友達だし、どうしても秘密を、話しておきたかったんだ」

「分かった。じゃア、早く現像をすませてしまつて、このネガを乾燥室へ入れてしまおう」

乾燥室にネガをぶらさげると私は家に電話をし、風呂も鴉の行水ですませ、雄吉の部屋へ行った。丁度、雄吉は二人分の蒲団を敷いている所だったが、机の上には雑誌を山積みにしてある。

「なんだい、これ？」

雄吉は手を休めて戸に鍵をかけながら、

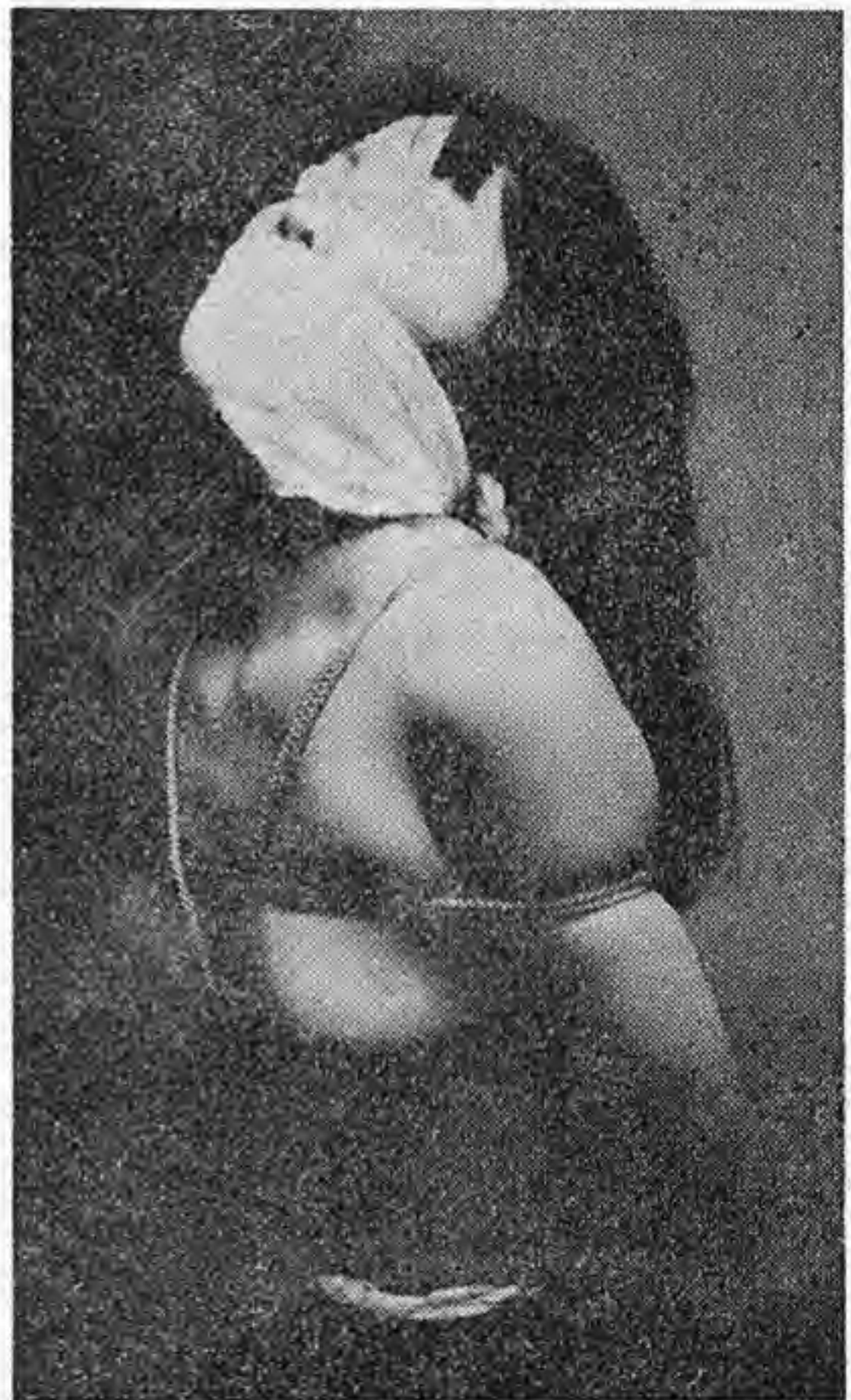
「うん、相談って言うのは、その事なんだ」

二人は雑誌を挟んで対座した。

「一度、中を見てくれよ」  
私は頷いて雑誌を取り上げると、パラパラと頁を、めくって見る。

と、一瞬、目の前が真っ暗になる。心臓の鼓動が激しくなった。

裸の女が後手に縛られ、その顔は苦痛に歪んでいる。又、ある女は両手を後に縛られ、あまつた縄が両足にも深く喰い込み、海老の



ように体を曲げて苦悶している。

私はそれ迄、女性の裸の写真は見た事はあったが、こんなのは始めてだった。

「何だい、こりゃ？」

「SM雑誌だよ」

「ふうん、こんな本があったの。俺全然、知らなかった」

私は、うわずる声を押さえながら頁を何気ない風をよそおって、めくっていった。

それは種々の女が、裸で縛られた写真や、さらに凄惨拷問の絵で一杯の雑誌だった。

「相談って、この事なんだけど、俺、かなり

前から、この本を見てるんだ。

初めは好奇心から一冊、買ったんだけど、毎月買っているうちに、こんなに増えてしまつて、俺の部屋だけでは、しまいきれなくなつてしまつたんだ。こんなに沢山あるので、おふくろに見つかりそうになつた事が何度もあった。だからここに置いておくのが、とても危険になつてきたんだ。幸い、京ちゃんの家は旧家だし、物置も大きいのが二つもある事を思い出したんだ

よ。是非、これを全部、箱に詰めて、保管し

ておいて欲しいんだ」

「別に、俺の方はかまわんけど、それにしても、強烈な写真だなあ」

「俺も初めは、そう思つたんだが、最近では何ともなくなつてしまつたよ」

「この女の人、痛くないのかね」

「そりゃ痛いだろうよ。初めはね。だけど、だんだん、それが快感に変わってゆくんだぞうだ」

「これがSMの世界というのかね」

「うん、人間の体の中には、SとMとの両方



があつて、その度合で、SとMが分かれるらしいよ。俺はSの方に興味を持っているが、さしずめ京ちゃんだってSだと思うよ」

「なぜ？」

「なぜって、京ちゃんは剣道二段だし、人を虐める方が楽しそうなもの」

「それは分からないよ。俺が相手に叩かれる場合だって、あるもの」

「でも、何となく普断の京ちゃんを見てみると、そんな気がするよ」

私の返事は、うわの空だった。身体は火のように熱く、興奮は、ますます昂まってゆくのであった。

「こんなのを見てオナニーするの？」

「うん、でも、この写真全部が、俺の好みに合っている訳ではないよ。俺の好きな写真には、小さく赤丸がつけてある。」

そんなのが良いなあ。俺が特に良いと思うのは、女の顔が苦痛に歪んでいる表情だね」

「苦痛美か？」

「この雑誌はSMの世界では権威のある雑誌で、何でもモデルは全部、M女性らしいよ」

「虐められる事で快感を感じるのか？」

「そうさ。この女なんか、あまり美人でもないのに、縛られたポーズといい、顔といい、

最高と思うがなあ」

「演技だろう」

「多少は演技もあるかもしれないが、こんな喜悅した顔は、そう何度も出来ないと思うがなあ」

「ブスな女が虐められて、こんなに美しくなるのなら、美人だったら、もっと美しくなるといふ訳だな」

「そう思うよ」

「俺も写真には興味があつて、色々と写して来たが、こんなのを撮ったら最高だろうな」

「人間なんて食欲だから、その上その上と望むからナ。初めは他人の撮った写真で満足するが、次には拷問の場面を直接見てみたくなり、そのうち自分で撮りたくなるものだよ」

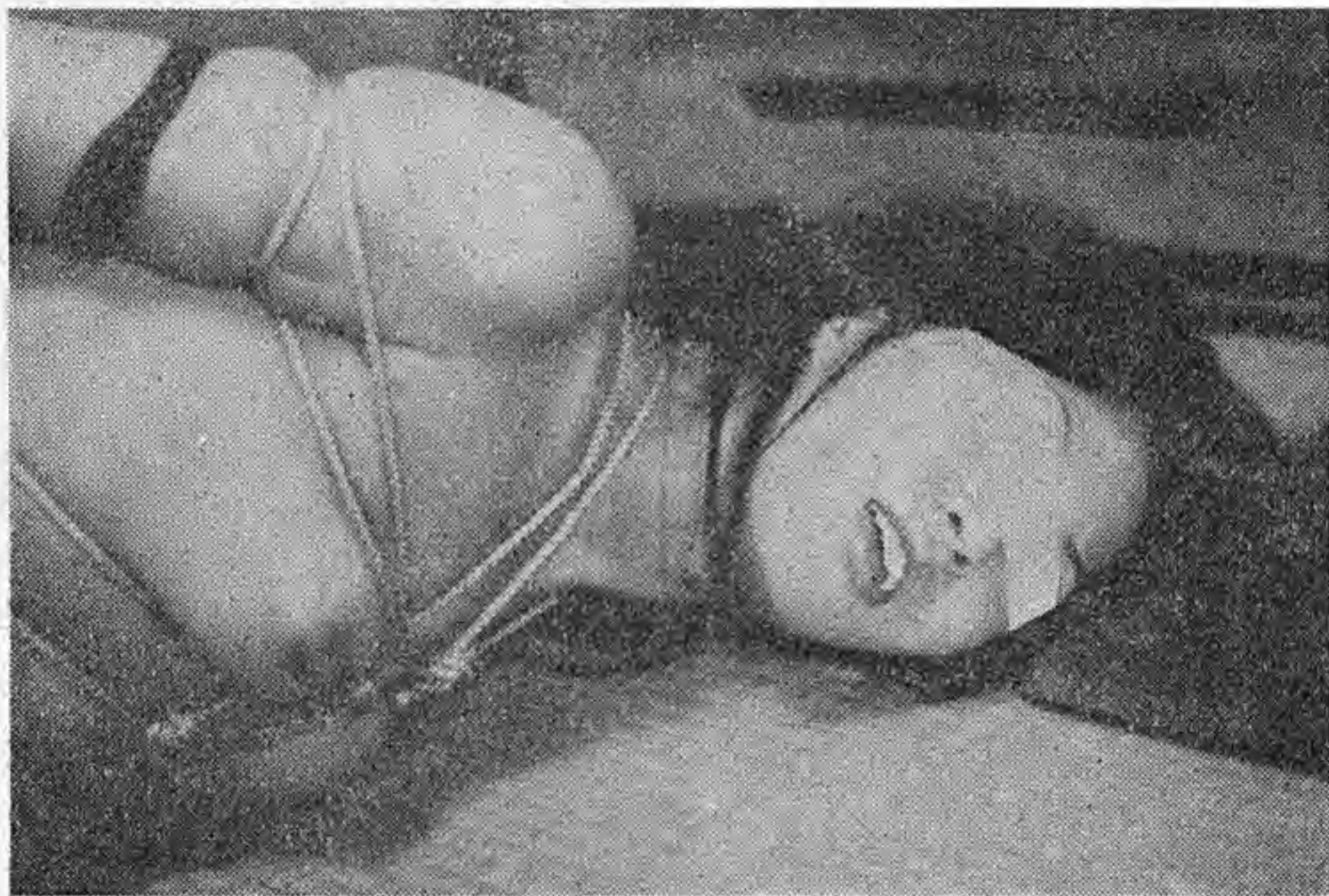
「今夜は俺、眠れそうもないなあ」

電灯を消したが、とても私は寝つけそうもなかった。SMへの憧憬が、一時に全身に満ちて、爪先迄ふるえるのだった。

△二▽

春が過ぎ、夏がきた。

私は受験があるので、バイトもやめて毎晩おそく迄、自分の部屋にとじこもって





た。

三時間勉強しては、三十分SMの雑誌を見るというのを、くりかえしていると意外にはかどるのだった。

夏休み、四日目の晩だった。

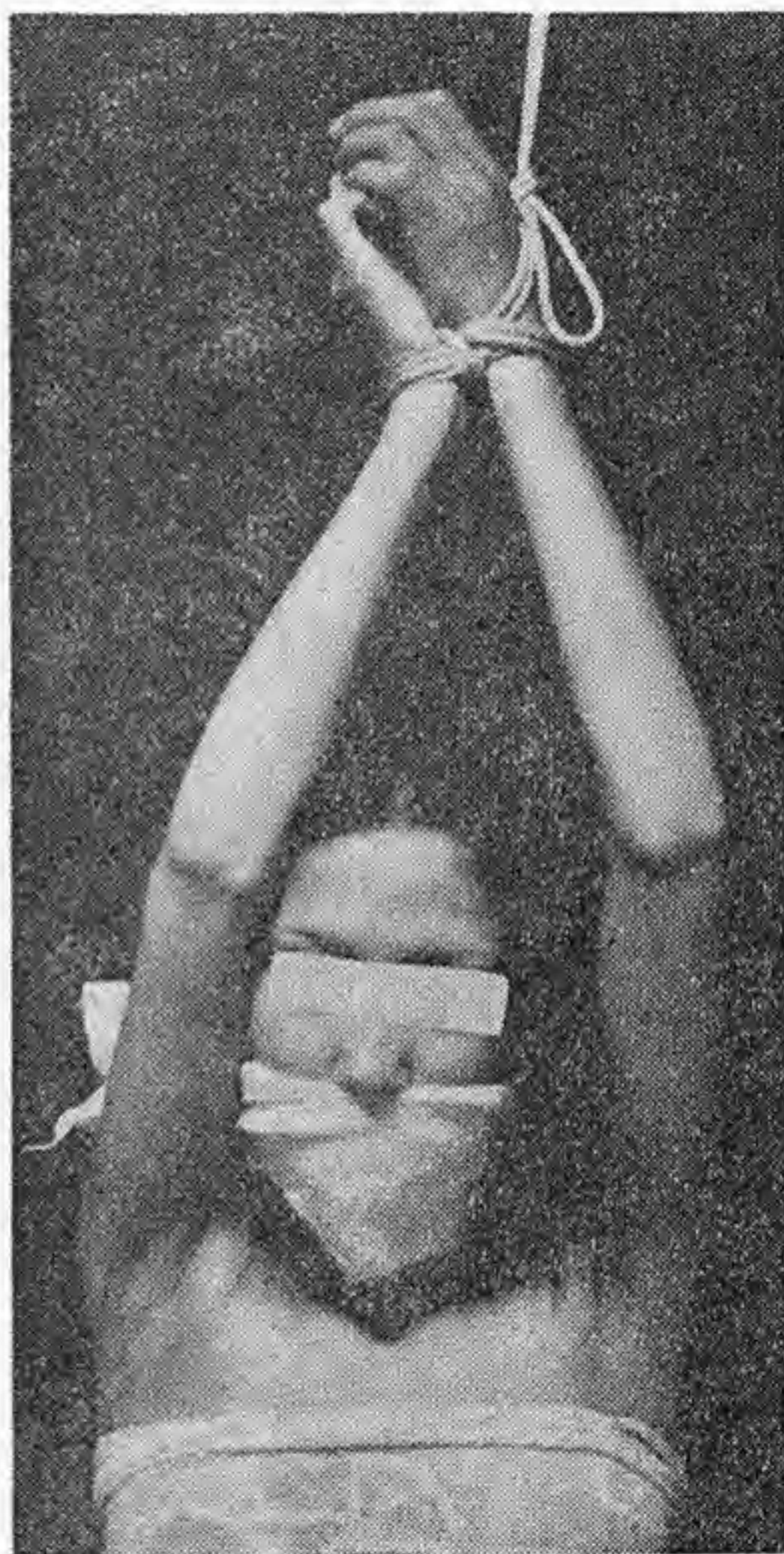
三十分の休憩に縛りの写真を一心に見入っていた。突然、隣の家から絹をさくような、女の悲鳴よなかがあがった。時計の針は夜中の二時二十分を指している。

私は、スタンドのあかりを消すと、身乗り出して階下を見た。男が女の髪の毛をつかんで床に引き倒している所だった。

「よくも俺の居ない留守に、舎弟と乳くり合いやがって、俺の顔に泥を塗ってくれたな。二人ともバラしてやるからな」

男は大声で、がなり立てると、女の背に馬のりになって頭をボカボカとなぐりつけているのだった。それでも、女は喚きながら、足をバタつかせ男の背を蹴った。

「お前だって、小便くせえ女のケツばかり追いかけてやがって、あたしをぶてるのかよ」



女は髪をふり乱し、跣足のまま庭へ飛び出した。着物の前がはだけ、大きな乳房が、こぼれそうだった。腰にまとった帯も紐もなく赤い腰巻から白い太ももが青い月光に映えて美しかった。

それでも女は、なりふりかまわず、通りの方へ、かけ抜けて行った。男はステテコ一つのまま、凄い形相で後を追う。

私は階下におりて、母を起こした。

「母さん、起きて。行って止めてやれよ」

「だめよ。夫婦喧嘩なんて、止めに行った者が馬鹿を見るだけなんだから」

「でも、あの様子じゃ、奥さん、殺されちゃ

うよ」

「いいのよ、裏の家とは、あまりかかわり合わない方がいいの」

とり合ってくれない母に、いささか怒りを感じながら私は又、二階にもどった。

そう言えば、あの奥さん、たしか光枝とか言ったが、男好きのする美人で、柄も大きく特に唇の形が、何となくエロチックだった。

私自身も淡い慕情を持った事もあった。

二年前、こんな田舎町にもM会の一家が組を作り、ヤクザの組織が出来上がりつつあった。私の裏の離れを幹部の一人が借りていたが、家賃はチャンと払ってくれるし、別に堅気に危害を加える訳でもなく、普通の家庭と変わってはいなかった。

年は三十を過ぎていたが、子供はなく、四日程前から男の姿はなかった。多分、花会か何かで地方に出張していたのだろう。

光枝の姿を、よくパチンコ屋や映画館の前で、若いチンピラとふざけあっている姿を見かけたが、そんな時、私は下を向いたまま、





前を通り過ぎたものだった。

また階下が、さわがしくなった。

私は見つからないように、腹這いになって机のかげからソツと頭だけを出していた。

男は女の右手を逆にねじり背中にまわして頭をこづきながら戻って来た。

着物は脱がされていて、上半身裸で下は腰の物一枚だけだった。男は台所から自転車の荷縄のような物を持ち出してきて、女を後手に幾巻にも縛った。そして余った縄で乳房の上と下に、ギリギリと巻きつけ、まだ余ったやつを首に巻きつけた。

完全に自由を失った女は、男にツバを、は

男は女を蹴たおすと、今度は別のビニール

紐で、あば

れる足を押

さえて、両

足首を縛り

残りで首を

縛った縄に

通して、グ

イと引っぱ

った。

「グエッ」

女は逆海

老縛りの型

きかけた。男は狂ったように、右手で女の髪の毛をつかんで引っ張り、左手で女の乳房をねじ曲げた。

白い女の肌が赤味を増して肩で息をしているのか、釣り鐘のように白い胸が大きく揺れた。

「手メエが半チクをしたくせに、はむかいやがって、これから、体にきいてやるからナ」

になって、そり返った。

私は夢中であつた。SM雑誌にあつた縛りの写真を思い浮かべながら、現実の今の美しさを一分のスキも見逃がすまいとして女の体に視線を集中した。

女は涙も見せずに不自由な体を、全身でころがり出した。男は何か取りに行ったのか、一瞬、姿をかくしたが、すぐ木刀とローソクを持って出て来た。

「テメエみたいな奴は、ぶっ殺してやる」

男は木刀をふりかざして、女の尻を、思いきり、なぐりつけた。

「ヒイー」





悲鳴は前にも増して静寂をやぶった。なぜあの女は、あやまらないのだろう、と私は思った。こんな大声でののしり合っている、誰一人、止めに入る者はなかった。

母が、さっき言った事を周囲の人々も考えているにちがいない。

男はステテコも脱ぎ白い越中フンドシ一本になり、女の

腰といい乳房といい、木刀をはわせていた。

大粒の汗が額からポタポタと落ちていた。

「殺してやる、殺してやる」

男は完全に狂ってしまったのか、同じ言葉を繰り返しながら同じ動作を、し続けた。

女は木刀でぶたれるたびに、全身が痙攣してピクピク動いたが気でも失ったのか、言葉が出なくなった。

「失神するのは、まだ早いわい」

男はバケツの水を女の顔にぶっつけた。

女の黒髪が乳房迄、長くたれて妖艶だった。

私は心の一部では、助けてやりたい気持ちもあったが、「もっとやれ、もっとやれ」と言う気持ちの方が全体を支配していた。



男は今度はローソクに火をつけると、女の乳房に傾けた。女は又、わめき始めた。

「うるせいッ」

男は自分の脱ぎすてたステテコの足の部分を、女の鼻をつまみ開いた口の中へ、ギューギュー押し込んだ。

「みんな焼いてやる」

男は何を思ったか、腰にまとった最後の布も引きはがすように取ってしまうと、ローソクを黒い奥の部分に迄、近づけた。

「ムムム、ギュー」

異様な臭気が私の部屋に迄、匂ってきた。「すごい！」

私の下腹部にも熱い血汐が流れてきた。こ

の気分はオナニーの比ではなかった。

男は持っていたローソクを今度は顔に近づけた。熱い蠟涙が眼や口にたれ流れた。次に髪の毛にも近づけたが、ぬれた毛によって逆にローソクが消えてしまった。男は誰かの視線を感じたのか、私の方を見上げた。

私はあわてて顔をひっこめた。狂ったように妻へのリンチに熱中していた、後でフト我にかえたのだろうか。男は縛った女の体をひきずって座敷に上げてしまいい、雨戸を全部、閉めてしまった。

「見られたかな」

私は後になって、家の方にどなり込んで来るのではないかという懸念を心配したが、この暑いのに戸を閉めきって行なわれる今後の行為の方が気がかりだった。

ソツと階段をおりて跣足のまま垣根をこえて隣の家迄行き、閉められたスキ間に目をあてた。自分がどうなっても後を見とどけなければならなかった。

先程から虫の音もやんでいたが、又にぎや





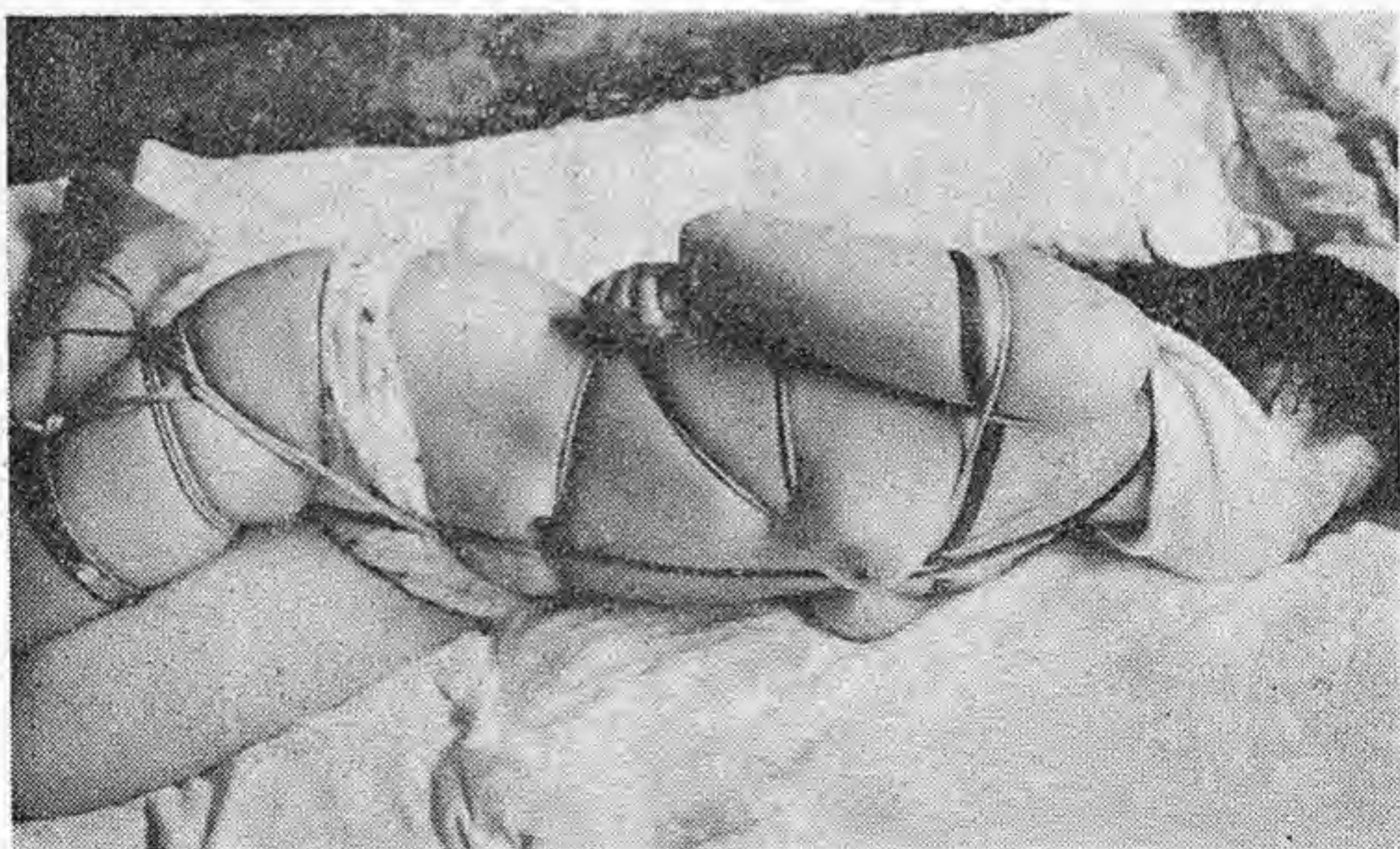
かに鳴き出した。女は足の縄ははずされ、猿轡もとられて座敷の中央に正座していたが、

胸と首の縄だけは、許されてはいなかった。

先程の啖呵とは、うって変わって女は、しおらしく下を向き、嗚咽しているのか、時々身体がふるえていた。男は前に対座して何か言い聞かせているようだったが、言葉はよく聞きとれなかった。私は「これで終わったな」と自分に言い聞かせて、そっと、その場を離れた。跣足で飛んできたわりには、一寸、物足りなさを感じたが「仲直りすれば、それでいいんだ」と、又部屋に戻った。

それにしても最近のSM雑誌の氾濫ぶりは雨後の筍の様である。ポルノブームに乗じてSMにポルノふりかけを、ふりかけた、ただ縛ってあればいいというだけの写真の味気なさ。裸の女よりは、縄目の衣裳をきせた方が絵になるだろうと言う浅はかな考えに、私は腹が立って仕方がない。

二万円位のギャラを払えばピンク女優も、ヌードモデルも、たやすく縛らせて



くれるからだ。しかし彼女等とて、Sでもなければ、Mでもなく、一生懸命、演技はして



も所詮、白けた写真になってしまふ。

それに縄目のゆるい事といったら、これでもSM雑誌かと、うたがいたくなる。これは写真に限ったことではない。私の尊敬していたS作家がいたが、最近書きすぎたのか、パターンがきまってしまい、ひどいマンネリにおち入り、読者にあきられているのに、自分ではそれに気がつかないで、まだぬけぬけと同じものを書いていく。

もっとも、アイデア盗用の風潮は各方面にあるものらしく、それが特許ものの以外は、あらゆる分野に於いての先進好評物件の類似品が、忽ちのうちに出現するようだ。

商品然り、加工食品然り、ファッション然

り、遊戯品、電気器具、家庭用品……等々。

実に猿真似天才国の面目躍如たり、と思わざるを得ないのが、情けないながら現在、日本マーケット界の状態のようだ。

日々目につくテレビ番組などは、とくに激しいと思われる。勿論、その理由はあるうが子供向けの怪獣ものや漫画映画、ことに近ごろの変身ナントカのパターンとなると、もはや何をか云わんや、という以外にない。

ボーリングがブームになって、ソレツとばかり各局が飛びつき、現在では、どこの局でもボーリング番組を三つ以上、持っている。

そんな訳だから、視聴者も、いつでも見られるという安易な気持を持つし、又、どのチャ

ネルも、こう同じものをやっていては、あきられてしまうのは、あたり前である。

SM雑誌も、

あと二、三年もすれば、自然淘汰されて最後に残るのは、二つ

か三つになるだろうが、私は幾多の風雪に耐え二十数年間、現在迄営々と生きている「奇ク」に、大いなる敬意を表したい。「奇ク」は、あまり世間の雑念にはとらわれず、独自の手法で超然と生きて行ってほしい。

他誌が奇クに追いつき追いこせを合い言葉に、がんばってみても、所詮、ゴマメの歯ざしりでしかない。

このマンネリを打破出来るのは、奇ク以外にはないと言っても過言ではない。

△追記▽

挿絵代りに、私の撮影した写真十二葉を同封します。もっと沢山、違った女の写真があるのですが、ベタヤキのままで伸ばしていませんので今、手元にある分だけ送ります。

女性の説明は、全部出来ませんが、又の機会に書かせて下さい。写真はライト、ストロボ等は、一切使用しておりませんので一寸、不足気味ですが、ごかんべん下さい。絞りは千から開放、シャッタースピードは一・六〇です。

最後に奇クの今後の躍進を期待し、編集部諸氏の御健斗を遠く東京の空から折ります。

——(終)——





## 作 鬼 団



## 決 定 版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

「昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける『花と蛇』の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。」

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。」

／＼内容主要見出し一覧／＼

第一章 発 露 人 探 偵 登 場  
第二章 美 麗 な 浣 腸 図 場 弄 端  
第三章 華 麗 な 来 た 腸 敗 る 図 場 弄 端  
第四章 救 援 者 の 失 敗 敗 る 図 場 弄 端  
第五章 餓 狼 へ の 好 好 敗 る 図 場 弄 端  
第六章 悪 魔 の 地 獄 敗 る 図 場 弄 端  
第七章 怖 恐 の 地 獄 敗 る 図 場 弄 端  
第八章 弄 弄 さ れ る 美 女 敗 る 図 場 弄 端  
第九章 淫 蛇 の 妹 危 執 念 女 室 笑 餌 敗 る 図 場 弄 端  
第十章 美 色 姉 妹 の 危 執 念 女 室 笑 餌 敗 る 図 場 弄 端  
第十一章 色 事 子 調 妹 危 執 念 女 室 笑 餌 敗 る 図 場 弄 端  
第十二章 美 津 子 調 妹 危 執 念 女 室 笑 餌 敗 る 図 場 弄 端  
第十三章 落 室 の 秘 密 ショ 敗 る 図 場 弄 端  
第十四章 密 室 の 秘 密 ショ 敗 る 図 場 弄 端  
第十五章 脱 走 の 秘 密 ショ 敗 る 図 場 弄 端  
第十六章 華 麗 な 宴 敗 る 図 場 弄 端  
第十七章 地 獄 敷 へ の 新 顔 宴 敗 る 図 場 弄 端  
第十八章 翻 弄 さ れ る カ ッ プ ル 宴 敗 る 図 場 弄 端  
第十九章 一 千 万 円 の 身 代 金 宴 敗 る 図 場 弄 端

第二十二章 身代金奪取の失敗  
第二十三章 涙の宣誓文  
第二十四章 連命の逆転劇  
第二十五章 奇妙な三々九度  
第二十六章 飼育される白い動物  
第二十七章 悪魔と悪女の悪業  
第二十八章 屈辱の地獄図  
第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末  
第三十章 悪鬼達の残忍な所業  
第三十一章 落花無残の修羅場  
第三十二章 淫らな美女の調教  
第三十三章 すさまじいショの展開  
第三十四章 汚水にまみれた宝石  
第三十五章 華々しき美女の屈伏  
第三十六章 対峙する美女と美女  
第三十七章 あくどい陥弄  
第三十八章 羞恥図絵の展開  
第三十九章 清純な令嬢の屈辱  
第四十章 人身御供の令夫人  
第四十一章 深窓の美少女とスベ公  
第四十二章 小夜子への執拗な調教  
第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子  
第四十五章 激しいスターへの訓練  
第四十六章 低脳男と令夫人の結婚  
第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人  
第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊  
第四十九章 悪魔たちの哄笑  
第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄  
第五十一章 珍芸を開陳する令夫人  
第五十二章 淫靡な時代劇シヨ  
第五十三章 華々しきショの展開  
第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり  
第五十五章 スベ公達の邪悪な責め  
第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち  
第五十七章 悪党の執拗ないたぶり  
第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面  
第五十九章 勝ち誇る悪党一味  
第六十章 中国伝来の秘法  
第六十一章 緊縛された美女の泣き  
第六十二章 新しい餌食への触手  
第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄  
第六十四章 恐怖の責め続く  
第六十五章 結末なき責めの結末  
第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人  
第六十七章 新しい儀の到来と静子の狂態  
第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女  
第六十九章 ニューフェイスに飼育開始  
第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女  
第七十一章 熱気を帯びたマソの競演  
第七十二章 女盛りの妖美な肉体  
第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊  
第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。  
〒558 晩出版株式会社宛



## 連載・時代 S 小説

カット・岡たかし



紫

蘭

の

門

(16)

風  
流極  
道  
軒

女を抱くということは  
極めて単調なものであるが  
縄を使うことを知ったとき  
千変万化の風情を呼び起こし  
万華鏡のごとくに花開く

## 妻のつとめ

老中領田下野の手にする象牙の匙には、仕掛けがあった。

みかけは、一尺の柄に、一寸幅のものをすくいとる凹みのついた何の変哲もないものであったが、領田が、柄のさきの凸部を、ポンと押すと、尖端の凹みの部分が、二倍くらいの広さにひろがり、目指すものを、一滴あまさず、さらってくるといった、からくりになっていた。

そのからくら仕掛けの匙の攻撃をうけて、いまだかつて味わったことのない恍惚状態に陥った朱房のお銀は、人妻であることも忘れて、すすり哭き、あられもなく号泣して艶め



く女体を、のたうたせる。

三度、四度、五度と、思う存分の液体を、金時絵の角盥にうけた領田は、ニヤッと、元禄屋を振りかえり、

「そちもやらぬか。豊太閤五夜のロザリオを揃えるまでは、生きておきたいであろうが」  
下林のさし出した蜂蜜を角盥のなかに垂らしこむと、ぐるぐるとかきまわし、匙ですくって、元禄屋にさし出す。

「ものは試しでござりまするな」

ものおじもせず、盃にうけた元禄屋は、それをグイッと、のみ干し、「珍味、珍味……」と、ほめたあと、

「では、領田さま。今宵は、いかい馳走にあ

前号まで——豊太閤の遺した莫大な埋蔵金の謎をめぐって、菊亭貴子、久我雅子、豊香、千登世の四人は元禄屋の手中に陥ち、衣笠美和は老中領田下野の地下牢で責め罵られている。一方、元禄屋や領田に挑戦して埋蔵金を狙う怪盗徳夜叉と情婦小紫のお景たち、虹の陣兵・洗い髪お妻夫婦。五夜のロザリオをめぐって淫虐な拷問が美女たちに加えられるなかで、いよいよ日本橋・元禄屋の本邸ではヒロイン菊亭貴子に対する本格的な責めが繰りひろげられていくのであった。

いなりまして有難う存じまする」

「帰るのか」

微笑をうかべて軽く会釈すると、

「貴子や雅子が、まっておりますようほども早うもどって可愛がってやりませぬと、この頃は、ちと、気嫌が悪いようで」

「フッフッフ。よかろう、あの二人、せいぜい飼いならしてつかわせ」

チラッと、正面に目をやった元禄屋は、林大学頭の茶笥責め、つづいて領田の匙責めとも云うべき責苦をうけたあと、さらに美女衛門たちの手で、朱房のいろもあざやかな十手で、縦横無尽に女体をなぶられている。縛られ屋・朱房のお銀に、

「お銀殿とやら、女は魔性よ。だからこそ男どもが、むらがつてくる。魔性を備えた女こそ女のなかの女。せいぜい、殿方に可愛がってもらおうがよい。遠慮はいらぬ」

と云いのこし、拷問道具が、うず高くつまれた土間をくぐり、地下牢の衣笠美和にチラと目をやってのち、長廊下にでた。

三日の月が、濃い紫の夜空に、うっすらとかがっていた。

江戸で、並ぶべきものがないのは、小石川領田さまの中屋敷の菊——と噂される大輪の

美濃菊の香りを腹いっぱい吸いこむと、

「学を為せば日に益し、道を為せば日に損す之を益しまた損し、之を損しまた益す——おわかりかな、林大学頭殿」

官学としての時の権力、徳川幕府のおおぼえめでたき昌平坂学問所のボスに、老子「道德経」の言葉の理解できようはずはなかった。

とまどう林大学頭に、

「その有事に及びては、以て天下を取るに足らず——夏・殷・西周・東周・春秋戦国と、はたして誰がよく天下を一家の如く治め得たるや。秦、漢、三国、五胡十六国、随……随か、ズイカ、ズイズイズッコロバシ……」

大笑一番、駕籠に乗って、小石川から飯田町、北の丸のお堀を南へ、桜田門の尾張様、会津様、彦根様のお邸のまえを、日本橋の本宅へと、元禄屋は、悠々と帰って行った。

悠々と——

まさしくこの男の巨万の富は、徳川幕府を揺りうごかすだけの力を持っている。

が、財力への欲望は、権力欲と同じく果てしがないもの。七尺近い巨軀に、大鷲の如き眼をひからせながら元禄屋は「金銀湧出の時代」と祐筆太田牛一が「太閤記」に書きのこした豊臣秀吉の頃をフウッと臉に描く。



二百年早く生まれておれば、黄金づくりの館を建てたものを――。

○ ○ ○

――矢張り我が家じゃわい。

丑の刻をすぎているにも拘らず門のまえで待ちうけていた番頭の昭吉に、

「旦那さまのお帰りイ……」

と邸のうちに大声をはりあげられると、元禄屋ほどの男でも、やはりホッとする。

（朱房のお銀か。フッフッフ、領田さまもイキなことをなさる）

思い出し笑いをうかべながら長廊下をわたり、中庭に咲く秋海棠の花を眺めた元禄屋がさて、貴子や雅子は明日のことにして、まずひと眠りするかと寝所に足を向けたとき、

「お、お帰りがなされませ」

女の声が出た。ハテ……と首をかしげる。

「お帰りがなされませ、旦那さま」

まがうかたなき鈴を振るような女の声。けげんな気持ちで振り返ると、あとについてきていた昭吉が、ニヤッと笑って、「旦那さま御台所さまがお待ちかねでございます」と、すぐそばの部屋の襖を開いた。

なかを一目みた元禄屋は、はじめ我が目を疑った。

そこには、貴子がいたのである。

いつもは座敷牢にいるはずの貴子が、白無垢の長襦袢に真紅の腰紐をあてがっただけの姿で三つ指をついていたのである。しかも、狐につつまれたような元禄屋に、ふかぶかと挨拶をすると、

「妾は、旦那さまのものでござりまする。あの夜、御老中領田様の中屋敷で旦那様のお恵みを賜わりましたからのち……」

と貴子は、せつなげに長い睫毛を震わせ、「妾は、旦那さまのモノ！」

貴子の両どなりに陳沈宝たちが、ひかえて居なかったとしたら元禄屋は、多分、王子の狐火に誑かされていると思ったであろう。

「ダンナサマ。イ、ヒイヒッヒッ……」

黒い縄をしごいて貴子の背後に立った陳が奇妙な笑顔を見せると、こびとのような李田客も、デブの王晏奴も、黄色い歯茎をのぞかせてニタ、ニタッと顔を、ゆがめる。

「旦那さま。まずは、こちらへ。いえ、なにも私たちのせいではござりませぬ。貴子姫がどうしても旦那さまのお帰りを待つと申されました」昭吉が小腰を屈め、

「それだけではございませぬ」いつのまにか姿をみせた和吉までが、「旦那さまに逢いと

うて、逢いとうて。旦那さまに一刻も早く妾の裸をみていただき、縛られて拷問されとうて……」と、例の女言葉で云い、

「そうでしょう、陳さん。貴子さまは、確かに旦那さまがお帰りになれば、そのまえで、お氣に入られるように縛られたいと申されておられましたわね」

「ソレハモウ、ヨク心得テ、オラレマスル。一日中、根ヲカギリニ働イテオラレマスル旦那サマヲ手輕ウオ迎エシタノデハ妻タルシカクガゴザイマセン。最近、日本デハ、女房デアリナガラ、夫ノ帰リヲ玄関マデ出迎エヌモノガアルトカ。モツテノホカデゴザリマスル妻タルモノハ、夫ノ趣味・主張・主義ハモチロン、衣服、食物ノ好ミモコトゴトクワキマエ、ヒタスラ夫ニツクスノガツトメト申サレテオラレマス」

陳の言葉をうけて王が、つづける。

「妻ト申スモノハ、夫ノ好ミニ合ワセテ、亭主ノ好キナ赤烏帽子。夫ガソレヲ望ムナラバハダカニナツテ毎日、玄関マデ出迎エテ、旦那サマ、ゴ苦勞デゴザイマシタ。サア夕餉ノ仕度ガ整ッテオリマスルト一糸マトワヌママオ給仕ヲシテサシアゲ、ソノアトデ、三ツ指ヲツイテ、ドウゾ、妾ヲ可愛ガッテ下サイマ



セト云ウノガ女房タルモノツトメ。夫ノタ  
メトアラバタトエ火ノ中、水ノ中、ドノヨウ  
ナ拷問・責苦ニアオウトモソレヲススンデウ  
ケルノガ義務トイウモノヨ、ノウ、李ヨ」

「ソノトオリデゴザイマス。中国デハ、三皇  
五帝ノ昔カラ、女トイウモノハソノヨウニシ  
テ夫ニ身モ心モ捧ゲテ参リマシタ。ソノヨウ  
ナ女性ニヨツテ支エラレテイルガユエニ、中  
国ハ、六千年ノ歴史、サンゼント輝イテイル  
ノデス。貴子サマ、ヨクワカツテクレタ。旦  
那サマノマエデナラ、ドンナコトデモ、イザ  
鎌倉トイウトキ、地獄ノソコマデ墜チル覚悟  
デゴザリマスルト」

三人三様の言葉に、

「おおげさなことを申すでない」と元禄屋は  
苦笑したものの「昭吉や、酒の用意をしてお  
くれ。老中さまのお屋敷は、さすがに疲れる  
わい」と、どっかりと胡座をかいだ。

苦勞して手に入れた前右大臣正二位菊亭政  
房の娘が、やっと帰宅した自分を迎えてくれ  
始めた——昭吉の運んできた盃に酒をうけな  
がら元禄屋は、満更でもなかった。

その眼前で、昭吉が、

「では、お内儀さま。先刻、誓われましたと  
おり裸になって、ご挨拶を」

「ハ、ハイ……」

肩に手をおかれた貴子は切長な眸を、かす  
かにあげて昭吉を見上げると、二度ばかりう  
なずき、そおっと右膝から起き上がる。

「旦那さま。貴子は、貴子は、身も心も旦那  
さまのもの。ど、どうか、おあらため下さい  
ますよう」

京都から江戸に下ってもう三月みづきになろう。

いまでも愛しつづけている中納言押小路高明  
のまえで、老中領田下野と形の上での夫であ  
るにすぎなかった元禄屋の二人に抱かれての  
たうってから、貴子の心は徐々にではあった  
が、変化を示していた。これまで堅くかたく  
閉ざされていた紫蘭のつぼみが、二分咲き、  
三分咲きと花びらを開かせるように、元禄屋  
に対するかたくなな心が、和み、いくらか自  
重的な翳をうかべながらも、昭吉と和吉に命  
じられるまま、元禄屋の意のままになるほか  
はないらしいと思い始めていた。

女心は、赤と白との、まだらの縄。微妙に  
いつとはなしに、その色を染めわけ——。

白魚のような指が腰紐にかかり、藤結びの  
結び目が、すらりと解けて、「アッ」と幽か  
な喘ぎを見せ、前を押さえたものの、思い直  
したように息を吐き、

「昭、昭吉さん……」

これは、自分を穴のあくほど見つめている  
番頭に対して、せめてそう呼びかけることに  
よって少しでも羞恥を、やわらげようとする  
女心でもあろうか。

「見、見ないで……昭吉さん。それに和吉さ  
んも……お、お願い」

「見ないでとおっしゃっても、お内儀さま。  
私どもは、もうあなたさまの躰のすみずみま  
で存じあげているのですよ。さあ、早く」

「ハ、ハイ……」

昭吉のいうとおり、貴子はもう何度となく  
この二人の番頭に、一糸まとわぬ裸体を眺め  
られ、撫でられ責められさえた。

が、この八畳の部屋で、自分からすすんで  
裸になる段になってみると、新しい羞恥が、  
こみあげてくる。しかも、夫のしている前で  
はないか！

が、陳たちの言葉もあった。

夫の帰宅を、スッ裸になって迎えるのは妻  
たるもののつとめ——。

貴子は、涼しげな眉をひそめながら白無垢  
の長襦袢の襟に手をやり左、右と肩を脱ぐ。

昭吉たちの命令であるう、その下には半襦  
袢はなかった。



……僕のイメージ画集……

『刺青少女の図』

室 井 亜砂路



いくらか上にそった豊かな乳房が、チラッと燭台の灯りに照りはえたとみるまに、

「アッ、ア、ア……」

華奢な両腕で胸を抱いて思わず蹲ってしまった貴子の動作は、さすが、血筋正しい優雅な美しさを溢れていた。

が、優雅な美しさを女が備えていればいる

ほど、男の本能ともいうべき破壊欲が、いよいよ燃えさかる。

真紅の湯文字ひとつで蹲っている貴子の背後に、黒縄を手にした陳が迫ると、李と王が右、左に拷問役人のように寄りそう。

「早く申シアゲナサイ、オクサマ。ソレ、早く、サキホド、才稽古シタトオリニ」

「ハ、ハイ……」

蘭麝の香りを漂わせながら貴子は、胸を抱いていた腕をとき、ふるえる声で、

「旦那さま。貴子は、わ、わるい女でござりまする。これまで旦那さまのことを軽うみて身の周りのお世話もいたしませんでした。そのお詫びに、陳さまたちのお縄を神妙にお受けいたしました、身動きひとつできぬ躰になりますゆえに、どうか思う存分に、お、お勝りなされて下さりませ」

手をのばせば届くところで、裸身を小さくして訴える貴子に、元禄屋は、ふと、

「フッフッフ、お芝居じゃの。姫、うまいものじゃ」

思ったままのことを口した。

「と、とんでもない、旦那さま」

口に、はこぼうとした盃を途中でとめた昭吉が、あわてて、さえぎる。

「気にするな、昭吉。お芝居といえは人生すべて、これお芝居。どりゃあ、ひとつ市村座の、かぶりつきにでも坐っているつもりでバカされてみるとしうか」

「そ、そんな！ これではお内儀さまのまごころが少しもおわかりになっておりませぬ」「フッフッフ、昭吉。お前、いつから貴子姫



の味方になった」

皮肉そうに云った元禄屋であったが、

「まあよいよい。では、姫。お前さまのまごころとかいうやつを、とっくり見聞させて頂こうかの。陳、遠慮はいらぬ。僕の女房だとも高貴な姫だとも思うな。女囚として責めて責めて責めまくるがよからう」

といった元禄屋は、ボンと膝を打ち、

「昭吉、和吉。今、気づいたことじゃが、女という字は、平仮名の何という字に似ていると思う」

「はて」小首をかしげていたが、「せ——せの字に似ておりますようで」

「そうじゃろう。いまひとつ、めの字にも似てる。似ているのが、あたりまえ。めの字は女という字が変化したもの」

「それがどうかなされましたか」

主人の突然の云いぐさに、けげんな昭吉に

「まだ、わからぬか。和吉は、もう……」

元禄屋がニタツと笑うよりも早く、

「昭吉さん、女という字は、せにもめにも似ているですよ。三つあわせると、女せめ、つまり女責め、女はせめられるためにあるということですよ」

「こ、こいつは一本、参りましたな。旦那さ

まも、お人がお悪い」

三人の高笑いに、一座の空氣がなごみ、貴子までが、心なしか、きつと結んだ唇の端をゆるめたようにおもわれた。

「オクサマ。サア、オ手ヲウシロニ！」

陳が燦くように美しい背中を押すと、左右から王と李が、それぞれ肩に手をあてる。

三人の男たちに犇々とつめよられて、貴子は、もうためらうときではないと思う。

「旦那さま……どうか、このふつつかな貴子を、か、かわいい女に、責め、責めそだてて下さりませ……」

両手が後ろにまわる。グッ、グッと王と李がそれを、たかだかと肩口近くにまであげて交斜させると、あとは陳の金股流修羅繩、みるみるうちに白磁と見まがう上半身に厳しく黒い縄が喰いこみ、

「ア、アッ……」

陳たちのニンニクくさい体臭にかこまれて貴子は、せつなげに喘ぐ。

## 唇で、そして手で

「さあ、お内儀さま。そのまま前に進んで」

真紅の湯文字ひとつの裸身を黒縄で縛られ

ている貴子を昭吉は、元禄屋の真正面に膝でにじりよらせると

「次は、どうなされることになっておりましたか。さあ、恥かしがっているときではございませんまい」

「昭、昭吉さん、妾、妾……どうしても」

貴子の眸が、怨ずるように見上げるのを、「まごころをお示ししなければいけません。

そうでないと、これまでのことが何の役にも立たなくなりますよ」

「ハ、ハイ……」

五尺にちかい黒髪を波打たせた貴子は、頬をポオツと、あかく染め、

「旦那さま。貴子は、旦那さまのおめぐみを賜わりとうございます」

「めぐみだと。なんのことだ、それは」

「ア、アッ、その、旦那さまの……」

あとは、女の身として、どうしても口に出せよう。さきほどの「お稽古」のときも、その

単語だけは、和吉が代って云ってくれた。本番では必ず発音するようにと念を押されて！

だが、頬だけでなく乳房の谷まで桃色に染めながら貴子は、どうしても、次の言葉を口にすることはできなかった。

見かねたのであろう、和吉が、元禄屋の耳



元で、なにごとかを、ささやく。

「フッフッフ、こいつは面白い。姫、さあはっきりと云うのです。いうまでは許しませぬぞ、姫！」

「イヤ……イヤ！ 旦那さまですが、そ、そのようなことを。どうかそればかりは、お許し下さりませ！」

貴子の声のなかに、甘えるような、ひびきのあるのを感じとった元禄屋は、

「では、姫。こうしよう。儂がその言葉を吐いてやるかわりに、くわえてみるか。その美しい唇のなかに入れてみるか。どうじゃな。妻たるものが、それほどのものできいでは大きな口もたたけまい」

とたん、貴子の乳房を縛る黒縄が、激しく波打ったのは、彼女の驚きを示すものであったろう。夫婦二人の閨房でならいざ知らず、四人も五人もの他人のいる前で、いつか小梅の利倉屋の別宅で見せつけられた南蛮渡来のバナナという果物のようにさせられることは貴子にとって、これ以上ない羞恥であり、恥辱であった。

「お、お許しを旦那さま……そ、そればかりは、どうか……お許し下さいませ」

「許さぬ、貴子！ お前さまは、さきほど、

一日中、働いて帰るご主人をスッ裸で、お迎えして何でも命令をきくのが、つとめと申したではないか。フッフッフ、イヤと申すのかそうであろう、そうであろう。お前さまには押小路高明という大事な男が……」

と、「イヤ、イヤでござりまする！ そ、それを仰せられましたは！」貴子は、キツとなって叫んでいた。こんなときに押小路の名をきくことは、いよいよ惨めな気分になるばかり。

「いやでござりまする！ 旦那さま、むかしのことを仰せられましたは。貴子は、いまでは身も心も旦那さまに……」

「捧げていると申すのか。ならば、できるはずじゃ」

「でも……」口ごもりながら「昭吉さまや和吉さまが……」

「かまわぬ。見ている前でやるのじゃ！」

一喝されて、おもわず「ハ、ハイ」と頷いた貴子の眸には、名状しがたい困惑と恐怖のかげが走っていた。

「な、なんでも、おいいつけどおりにいたします。貴子は、旦那さまの……」

「はっきり申してみい」

「ハ、ハイッ……」

何度か生唾を呑みこんだあと、耳まで真赤に染めて、ついにその言葉を口にした貴子はめまいに似た感じに襲われた。そして、一瞬のち、元禄屋の羽二重の前裾がさばかれると、実際に、ふらふらとその場に倒れこんでしまったのであった。

「ナントマア、奥サマ、才氣ノ弱イ」

陳たちが、あわてて抱きおこす。

「開きなさい、貴子。唇を開くのです」

元禄屋は、亭主としての威厳をもって、女房に命令する。が、貴子は、突きつけられたもののあまりの巨大さに、あらためて、おじけ立つ。

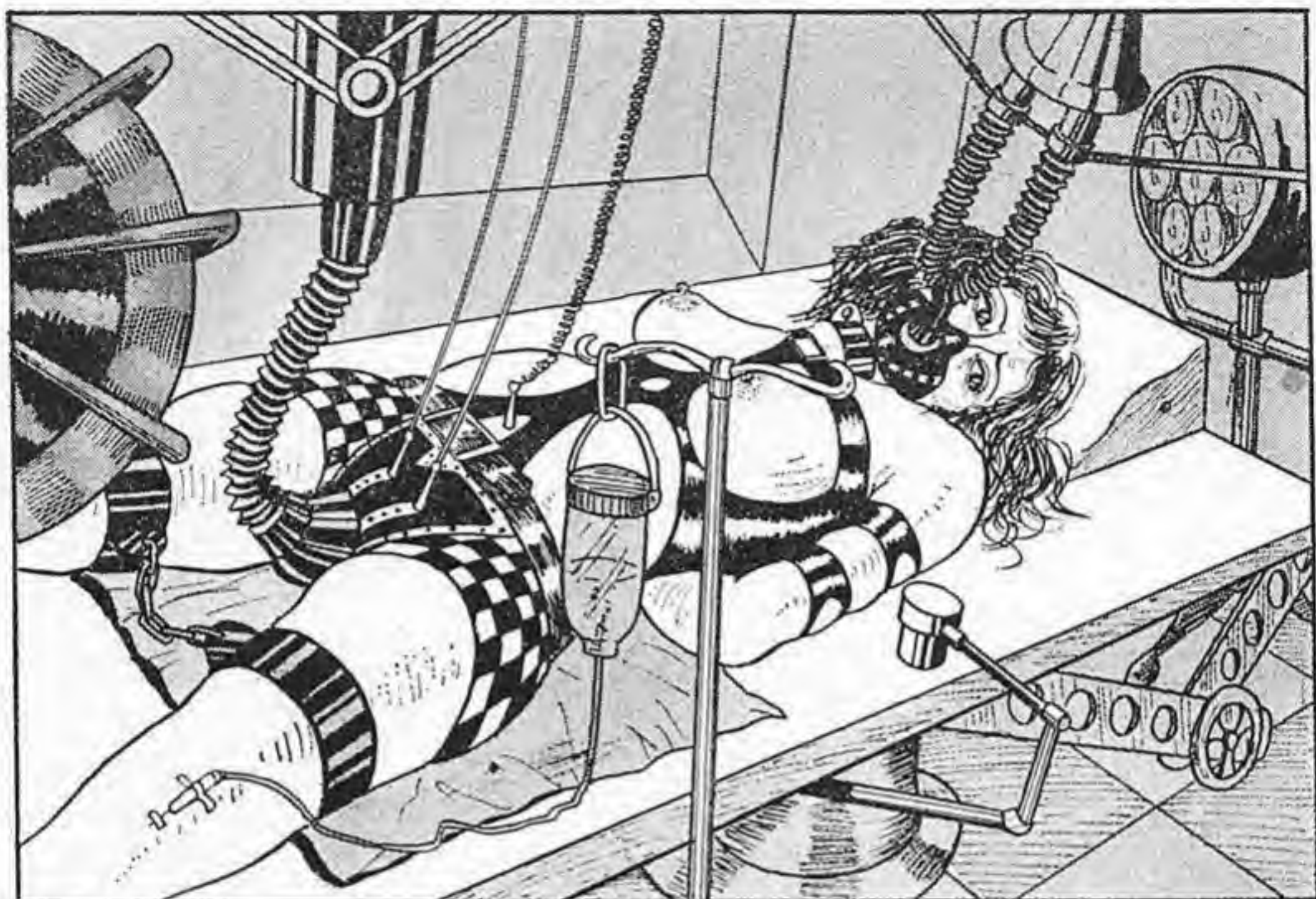
そばで、和吉が、

「貴子さま。ご主人さまは、江戸随一との評判。あなたさまが驚かれるのも無理はなくてよ。その代り、お味のほうはそれはもう関東随一、いや、日本一。京都のなよなよしたお公卿衆とは月とスッポンの違い。そうでしたでしょう。ねえ、一度、ご経験なさったはずよ、貴子さまったら！」

老中領田の中屋敷で、はげしい痛みを感じたが、それが次第に、大きな波濤にもてあそばれる笹舟の感じとなり、やがては、無我夢中の状態へとたたきこまれてしまった——こ



===== イメージギャラリー ===== 『絶対安静患者?』 ===== 飯田ひろくに =====



れが、あのときの……。

めくるめくおもいのうちに貴子の唇が、なかば開かれ、白く美しい歯並びがざくろのように、のぞく。

「貴子さま。それではとても駄目。もっと、もっと大きくお開きになりませんか」と

和吉がよくとおった鼻筋にそって手をはわせ、「ほれ、こうしてさしあげてよ、お内儀さま」

——右手の人差し指と中指を、鼻孔のなかに突っこんだからたまらない。

奇妙な声をたてて裸身を振りたてた貴子の朱い唇が、大きくひらき、色鮮かな舌が、見えかくれする。

「噛みついてはいけなくてよ。おわかりよね。ゆっくりとそう棒飴（長

さ一尺、直径一寸五分くらいのもちごめを麦芽で糖化させた淡黄色の嗜好品）のおつもりでね」

耳もとで昭吉がこう囁いている最中に、ずいといと一足、貴子の眼前に迫る元禄屋。

一方、ほとんど同時に和吉が二本の指を上になじまげたものだから、貴子の形のよい鼻孔は二つとも、釣針で吊りあげられたように上に向く。

「よい恰好ですよ、お内儀さま」

思わず膝が崩れて横坐りになった貴子の背後に回った昭吉が、力いっぱい握りしめられている、にぎりこぶしの指を一本一本ひらきながら、肩のあたりに唇をよせる。

「さあ！ ご主人さまをお喜ばせ申し上げるのが、妻たるもののつとめよ、貴子さま」

七尺近い巨体をたちはだからせている元禄屋のかげで、顔をななめ上に向けている貴子の姿は、大熊に責めひしがれる白兔にもたとえられようか。

美しい顔をからくれないに染めて、必死で和吉に命じられたとおりに従う貴子の白々と輝く裸身を、燭台があかるく照らし出す。

「次は、背中の手で握るのですよ。よろしいね、お内儀様」



昭吉が元禄屋と場所をとって替わる。

一方、和吉が鼻孔を吊り上げていた指を抜き出したものだから、

「ヒ、ヒュウッ！ ヒ、ヒイイ」

海底ふかく潜っていた海女が、海面にうかび上がったときの吐息にも似た悲鳴が朱い唇からあがり、口辺から流れ出し、乳房の上をしめつける黒い縄を伝わって、はては、雪のように白い深い谷へと垂れていく涎れが認められた。

「起て、起つのじゃ、貴子！」

背後に回った元禄屋が吼えた。

「ハ、ハイ」右膝をたてたものの、あまりのショックに腰がよろめくのを昭吉が支えて、陳たちと抱きかかえるようにして、やっと立たせる。真紅の湯文字ひとつ——六人の男に囲まれたその姿は、哀れであるだけに、男心をゾクゾクさせる美しさに溢れていた。

「さあ、後を向いたままで、お握り申しあげるのよ」

和吉に云われたものの後手に縛られている身で、どう探し出せばよいものか。

手首を重ねられた原点から、二つの扇のようには両手をひろげて、後退しながら、貴子はふらつく足を、ふみしめる。

「ここですよ、お内儀さま。もう半歩、右。

そう、あと五寸、三寸……そう、ここですよよかったわね」ピクッとその手をひっこめ、さあっと顔うなだれてしまう貴子に、「さあ早く！ それ、それ」

和吉の声に、しっかりと握りしめられていた手が、おずおずと開く。が、二度、三度とためらったのち、

「ア、アッ、旦那さま！ 貴子は、貴子は恥かしうて、恥かしうて……」

小さな心臓がドキドキと鳴った。

「もっと強く！」

「ハ、ハイッ！」とは答えたものの、ゾツとする不気味さに悲鳴をあげる貴子であった。

「フッフッフ、貴子。どうやらその湯文字も邪魔のようじゃ。とることにしよう」

背後からつきささるような元禄屋の声に貴子は、ひときわ、「ア、アウ！」と激しい喘ぎを洩らした。

いくら一糸まとわぬ身にされることを覚悟しているとはいえ、あからさまにそう云われてみると、女であるかぎり、あらためて羞恥がこみあげてくるものである。

「お、お許し下さりませ、旦那さま」

消え入るような声をあげて、その場に崩折

れた貴子を、たちあがらせた陳たちは、

「金股流修羅繩ノヒトツニ、淫風矢車責メトユウノガゴザイマス。ソレデ責メナブリタイトオモイマス」

元禄屋の返事もまたずに三人は、たち上がらせた貴子のまわりをとりかこむと、天井の滑車にかかる縄を、後手を縛りあげた黒縄と連結し、ひきずりあげた上、貴子の両足首を五尺もひきはなして、二本の青竹に括りつけてしまい、

「昭吉サン。コノ責メ、男多イホド面白い。シカモ女、ヨロコビマス」とニヤニヤしながら説明を加える。

女を裸に剥いて、いま貴子が、そうされているように「人」の字型に吊り、そのまわりを男たちが円陣をつくって廻りながら、ところかまわず責めつけるといふ拷問のひとつで高貴な、羞恥心の強い女に用いると効果は甚大だという。

「面白そうじゃな。昭吉、和吉。それに陳たちも、かまわぬ。僕が許すゆえ、いっしょにその淫風矢車責めとかをやろうではないか」

元禄屋、酒がよほど回ってきたらしく、豪快に笑いとばして、昭吉たちに裸になるように命ずるのであった。



「そのまえにじゃ、お前もその湯文字をとらずばなるまいの」

もはや、お許し下さいと訴える段階でないことを悟った貴子であったが、その顔からは血の気がサアツと失せていく。

「フッフッフ、赤うなったり白うなったり。まさしく女心は、赤と白とのまだらの紐か。

あきらめることさ、貴子」

元禄屋の頑丈な指が、紐にかかる。と、

「ア、アツ、旦那さま！」

身をすくませようとしたが、「人」の字に磔りつけられて宙に浮いている身であつてみれば、膝を「く」の字に曲げることさえかなわず、「ア、アツ！」と哀しげに喘いで、左に右に顔をふりたてることがせいっぱいの抵抗のすがたであつた。

「そう恥かしかることもなからう。ここに居るものは、みな僕の子飼いのものども。まんざら他人ではあるまい」

——紐がとけた。

「アツ！ アレッ！……」

「まだまだじゃ。いいな、貴子。湯文字というものは、ゆっくりと脱がせるのが男のつとめというもの」

真紅の湯文字が一寸二寸と、ずりさがる。

「イ、イヤ、イヤでござりまするってば！

お許し下さりませ、旦那さま」

湯文字は、腰から足を、一まわり半つつむもの。その合わせ目がゆるんで、冷たい空気がサアツと太股のあたりに忍びこんでくる感触に貴子は、最後の訴えを試みたが、もちろん、きき入れられるはずもなかった。

着物をぬぎかけていた昭吉たちも、女の最後の羞恥を見逃がすはずはなく、手を休めていっせいにまんじりともせず、見守り始めた。

（ど、どうして男のかたは、こうも、女のはだかに興味を抱かれるのだろう）

身を灼くような羞恥の一時、一時……

「出、出た！」

すっとん狂な声をあげたのは、女言葉もどこかへ忘れてしまった和吉であつた。

貴子が、思わずカチカチと齒の根を合わせる。

女にとって多数の男の見守るなかでのこの瞬間は、たとえようもない羞恥と、ある種の恍惚感の入りまじる奇妙な、例えれば、*「まだらの陶醉」*とでも名付けるほかはない時の流れなのだ。

その時の流れに身心をゆだねている間に、

えもいわれない気高い香りが漂いはじめた。

「この匂いじゃな。多くの男たちをとりこにしたのは！」

雄叫んだ刹那、元禄屋の武骨い指先から離れた真紅の湯文字は「八」の字形にひらかれた白磁のように輝く太股にそって、ペアツと左、右へと舞い散っていき、

「す、すごいわね、ほんとに凄い！」

感嘆した和吉がおもわず叫ぶ。和吉だけではなかった。陳も、李も、王も、ゴクンと唾をのみこんで、一糸まとわぬスッ裸の身に丈なす黒髪を波うたせて、泣きじゃくりはじめた貴子の裸身に見惚れるのであつた。

夜もふけた丑の刻——

閉ざされたこの八畳の部屋には、むんむんする男の精気と、それをあくまでもはね返そうとする清冽な女の香りが、男と女の壮烈な戦いを予期するかのようにたちこめていた。

## 淫風矢車責め

「お、お許し下さりませ。お、おねがいでございます！ ア、アレッ、もう、もう、ほ、ほんとに、キャアツ！ どうか、どうか、もう、お許し下さいませ！ アツ、アレッ！」



イメージギャラリー 『蠟涙あそび』 須坂 旭



間断なく貴子は、悲鳴をあげつづける。  
六人の半裸、全裸とりまじった男たちが、  
彼女を中心に、一尺(三十センチ)と離れて  
いないところで円陣を描き、あるときは早く  
あるときはゆっくりと、ぐるぐる、ぐるぐる  
廻りつづけるのである。

廻る——といっても、ただ素通りするだけ

ではなかった。めまぐるしいほど次々と、急  
襲、接触、離脱、反転、そしてまた急襲と、  
矢車のように撥ねまわり、ために貴子の周辺  
には、淫ら極まりない風が吹きまくるかと思  
われた。

この光景を映画のなかに求めれば、西部劇  
に似ている——。

騎兵隊の隊員全部を射殺し、あえて、殺さ  
ずにおいたヒーローとヒロインのうち、男の  
ほうを木に縛りつけたあと、ヒロインの美し  
い人妻をまんなかにおいてインディオたちが  
勝利の踊りを狂ったように踊りつづける。

映画の場合、ヒロインは、スッ裸にされる  
ことはあるまい。またこのように至近距離で  
の乱舞もありえない。

が、貴子は、もう一度云うが一尺の距離。  
六人の男たちの吐く息が、じかに肌にかかり  
手が、同時に何本も「人」の字に曝されてい  
る裸身にのびるのである。

四尺にみたない李のあたまが、太股に埋ま  
ったかとみると、次はでっぷりと豚のように  
肥えた腹が、つづいて和吉の女のように細い  
指が、伸びてくる。

「ヒ、ヒイイ！ お、おやめ、おやめ下さり  
ませ。アレッ！ ア、アッ、ア……」

めまぐるしく回転する男たちの矢車のような  
動きに、貴子は、左、右、前、後と、裸身  
をくねらせて身を護ろうと、はかない努力を  
試みる。それにつれて黒髪が背から脇腹へ、  
脇腹から胸もとへと絶間なく波立ち、額や首  
頸から、にじみでた汗が乳房の谷を濡らした  
かとみると高手小手に縛りあげられた両腕と



背中の間隙を、豊かな双臀へと流れ落ちていく。

李が黄色い歯茎をがっちり乳房に喰いこませると、脇腹に昭吉が噛みつく。一瞬のちには王が、つづいて陳が……。

「昭吉、うしろからこい！」

突然、元禄屋が大声をあげた。そのとき彼は前面にいたが、半回転して左にまわる。

「承知しました！ 旦那さま」

昭吉の声も、うわずっている。

主人と速度をあわせて一回転、貴子の背後に立つと、

「アレッ、キャアッ！ な、なにをなされまする！」

貴子の悲鳴もかまわず、抱えるようにして乳房を襲う。

一方、その前面では――。

小山のような巨体をむしゃぶるいさせた元禄屋が、半歩、前に進んだ。

「ヒ、ヒヤッ！ ム、ム、ムウッ！」

白い首領の上のふくよかなあごを、ひときわ、貴子がのけぞらせた。太股から膝、ふくらはぎがピンとひきつり、美しい足の指々が、そりかえって青畳に舞う。

「ヒ、ヒイイ！ だ、だんな、さまア……」

連娟とした細長い眉の根を合わせ、朱い唇をわななかせて貴子が叫ぶ。

燭台に、てり映える三つの肉体は、白をまんなか、はさんでの黒と黒――すさまじいばかりの対照美をみせて、一刻、また一刻、妖しい顫動を繰り返すのであった。

和吉に制せられ、二人をのこして淫風矢車責めを解いた陳たちは、またたきもせずこの光景を見つめる。過去、数回、女たちにこの責めを加えたことはあったが、今夜のように、美しい女を責めるのは始めて、ましてや今、眼前にみる元禄屋と昭吉とのピッタリと呼吸のあった淫ら責めもまたはじめてみる。

「ア、アッ、アウ！」

しりあがりになくなった貴子の悲鳴が、やがて「ヒイイッ！」という、ふだんの貴子からは想像もできない金切声に変わり、やがて、それが、燃えるような喘ぎに移る。

「貴子さま、フッフッ、よいお声ですこと。ほれ、もう少し、かわいがってあげましょうね、陳さんや、王さんや」

前後から元禄屋と昭吉に、はさまれている貴子の「ハ」の字にひらかれた下半身に目をつけた和吉が、陳たちに、すんなりとのびている脚への攻撃を指示する。

待ってましたとばかり陳が、青竹にはさまれている右足に手をあてて、指のまたをひとつひとつ解きはぐしたり舐めたりし始めると王と李が左足のふくらみはぎや、足の裏へと長い舌をペロペロと出してこれまた熱心に、水飴でも舐めるように、しゃぶりついていく。

それを見おろした和吉は、和吉で、元禄屋と昭吉の攻撃のあいまを狙って、双臀や、唇や、脇腹や鼻を、獅子の喰いのこした獲物をあさるハイエナのような、きめのこまかい襲撃を展開するのであった。

## 蛸

どれほどの時刻がながれたことであろう。

元禄屋の分厚い胸に押しつぶされている紅真珠のような貴子の乳首に汗がひかり、小刻みになっていた喘ぎが、すすり泣くようなひびきにとってかわった頃――

「や、やめい！」

頃合いを見はからっていた元禄屋は、突如叫ぶと、みずから一歩、サアッと後退した。五人の男たちも、いっせいにとびさがる。

「アッ！ だ、だんな、だんなさまア！」  
一瞬、渦巻いていた淫風がピタととまり、



八畳の密室を静寂がつつむ。

その静寂のなかで、

「アッ、だ、だんなさま！」

我を忘れた状態から、突如として現実にもひきもどされた貴子の驚きは、なみたいていではなかった。

のけぞらせていた顔をたてなおして眸を見開いたものの、なお焦点がさだまらぬのか、二度、三度、瞼をしばたかせて、やっと元禄屋を捉えると、もう一度「だ、だんなさまア！」と呼びかけたが、その声には、あきらかに、なまめかしい媚がこめられていた。

媚が含まれているのは、声だけではなく、なかば開いたままの唇にも、しっとりと汗ばんでいる豊胸にも「ハ」の字に縛りつけられている太股にも、まごうかたなく、じれったさ、やるせなさ、むんむんと、ただよっていたのである。

座にもどり、身づくろいした元禄屋は、そんな貴子の頭のとっぺんから足の爪先までをゆっくりと眺めて、盃をとりあげ、

「中国の聖賢、孟子がの、<sup>はな</sup>引いて発たず

と申しておる。日本でも貝原益軒が養生訓に「接して洩らさず」とな。ハッハッハ、まだ夜が明くるまでに時もあるう。昭吉、次なる

趣向をやりなされや」

元禄屋、さすがに名言を吐く。しかも、性衝動を土壇場まできて制御できるということは、彼がなみなみならぬ傑物であることを示して、あまりある。

「昭吉。御主人さまの帰宅を迎える妻たるもののつとめを貴子に教えておると申したの。それを、やってみよ。とっくりと眺めてあげようではないか」

小倉地の襟をあわせて身づくろいを終えた昭吉は、元禄屋の言葉に、

「どんなことでもお許し下さいますか」

「ハッハッハ。引いて発たぬ」以上は、何をやってもよいぞ」

「これは、これは、ご寛大なお言葉。では」陳に目くばせした昭吉は、あらたまった口調で、

「旦那さま。お内儀さまは、まことに名器のお方と、存じます。まさしく、いそぎんちゃく」と讃えられましょう。そこで旦那さま」

昭吉は、陳のはこんできた大きな壺を元禄屋のまえにすえさせると、

「いそぎんちゃくには、たこがいちばんよく似合うかと存じまして」

「たこだと。あの海の蛸か」

「いかにも旦那さま。これでござりまする」

昭吉が壺のなかから、つかみ出したのは胴周り七、八寸、足の長さ一尺二、三寸の、まだ捕えられたばかりの生きた蛸であり、はやくも八本の脚を、くねりくねりと、のばして昭吉の腕に、からみついている。

「蛸をのう」——昭吉の意図を察した元禄屋は、チラッと、ためらいの色をうかべたが、「よかろう。どうせ、あとで、ゆっくりと洗ってやらねばなるまい。穢しついでに、たっぷりと汚してやるのも面白からうて。よいよい、やるがよいぞ、昭吉」

元禄屋は、それでよいかも知れない。が、貴子にしてみれば「よいよい」どころの騒ぎではなく、おどましい責苦となろう。

蛸そのものは、さほど嫌いではなく京都にいる頃、自分で料理したこともあるし好んで食べた貴子であったが、それはあくまで食用としての話。生きている蛸を、いったい、どうしようというのだろう。

不安にかられるまま貴子は、

「旦那さま。お許し下さりませ。そのようなものを、いったい……旦那さま」

声をふるわせるのだったが、元禄屋は別に答えようとせず、盃を悠々と唇に、はこぶ



だけであつた。

一方、喜んだのは昭吉たちである。

「お許しが出来ましたぞ、陳さんや」と立ち上がる、蛸のからみついた腕を貴子の眼前にニョキッと突き出し、

「お内儀さま。これから、たつぷりと楽しませてあげますゆえ、ほれ、そんなに、よこそお向きになるものじゃあございませんよ」

と猫撫声でいい、茶褐色の足の先を、つまみあげると、紅真珠色に輝く乳首に、そおとのせたから、

「ヒャアアッ！ 昭吉さん、な、なにをなされまする！」

貴子が思わず悲鳴をあげた。

乳首といえば、女にとっての急所。そこへ突然、ぬるっとした蛸の足を、のつけられては、悲鳴をあげない方が、どうかしている。

女に加えられる拷問の一種に、なめくじ責めとか蛇責め、いもむし責めなどがあるが、この蛸責めは、それらを合わせたようなものであり、蛸が他の動物にない吸盤をもつ故に、いっそう酷薄な責苦となる。

「お許し下さいませ、昭吉さん」

黒縄で、いましめられている上半身を、のけぞらせて貴子は必死になって叫び訴えた。

蛸にも、マダコ、イイダコ、ミズダコ、タ

コブネと、いろいろの種類があるが、いま貴子の乳首に足（正確には「腕」）をからませているのは、テナガダコであつた。マダコよりも、いくらか大きく、色もマダコの紫褐色に較べて赤茶けているが、その名のように手が長い。その上に吸盤のもつ吸力がつよい。

そのテナガ蛸が、貴子の乳首に吸い着いており「つぎは、こちらにも！」と昭吉が、もう一方の乳首に、二本目の、ぬるぬるした足を、からみつかせる。

「イ、イヤァー！ イヤ！ 昭、昭吉さん、これ、これを。ア、アアッ。ヒャアッ！」

血筋正しい気品を溢えた鼻筋から唇へぬける優雅な曲線もどこへやら、貴子は、まるで悪寒にでもとりつかれたように、身ぶるいしながら訴えつづける。

「じゃあ、前はやめにして後にしましょ」

よこから手を出した和吉が、ひょいと、その軟体動物をつかみあげると、ガンジガラメに縛りあげられている背中の双腕のあいだにポツンと落とした。

「ヒ、ヒイッ！」

ぬるっとした、その感触に、貴子の唇から再び絶叫があがった。

蛸は、八本の足で、高手と小手を縛っている黒縄に手がかりを求めて、しきりに「蛸坊主頭」を、くねらせていく。

その蛸坊主の頭の部分（実は胴で、頭は、目のあるウェストのように、くびれた部分であることは御承知のとおり）が、手首から先だけが自由で、開いたり閉じたりしている貴子の掌に触れようとした刹那、

「おっと、どっこい、にぎりつぶされちゃあこれからの楽しみが台なしだ！」

と昭吉が、八本の足の中央（口の部分）をもちろてで、つかんで「お前には、こっちのほうは、よかないかい」と蛸に話しかけ「八」の字にひらかれきった貴子の右太股に、からみつかせる。

乳首に触られるのも、おそましいが、太股もまた女にとって大切な部分。その柔らかい肌にはペチャツとばかり蛸に吸いつかれた貴子は、「ヒャアッ！」と、けたたましい声をはりあげて、もう見栄も外聞もなくなったように五体を悶えさせたが、そんなことにはお構いなしで蛸は大きな頭をひきずりながら上っていく。

そして、その一本の足が、太股のつけねに届こうとした瞬間、



「まだ早くてよ、蛸さん。そこはダメよ」  
和吉が、ひょいと掴み上げ、今度は柳の葉をたてにしたようなへその真上に蛸を移す。

「ヒ、ヒイッ……」

大きくひらかれて青竹に縛りつけられている足の指を立てて、爪先だつて下を眺め、豊かな乳房ごしに、八本の手をくねらせる蛸をかいまみた貴子は、縛られた身をくねらせて払いおとそうとするのだが、いったん、へばりついてしまった蛸は、ぬるぬると、八本の足を四方八方にのばして、どちらに行こうかと迷っているふうであつたが、やがて、一本また一本と足をのばして白磁のような腹部のふくらみを辿り下がっていく。

「や、やめて！ お、おやめ。おやめになつて下さりませ！ だ、だんなさま！ ダ、ダナサマア！ ア、アッ、アウ！」

貴子は、もう、狂つたように叫び出す。

が、ねっとりした蛸の足は一本、また一本と、まるで若草の萌える春の野を、ゆくように、ねち、ねちッ、ねちッ、ねちと、すすみ続ける。

背後に縛りあげられている華奢な手首にかかる痛さも、両足をがちりと捕えて離さない青竹が喰い込む苦しさも忘れはてたように

貴子は、不気味な蛸を、どうにかしようと全身をくねらせ、下腹や、太腿をできるかぎりふりたてて、たたかう。

が、蛸は執念深かつた。いったん、こうときめた以上、どうしても辿りつかずにおくものかともいうように、しばらく茶褐色の頭を垂らして考えこんでいるふうであつたが、貴子が、ありつたけの力を、ふりしぼって、「タ、タスケテ！ お、お願い。だ、だんなさま。もう、もう、もう、ダメ、ダメでござりまするウー！」と絶叫をあげ、太腿を激しくけいれんさせた時、それが合図でもあつたかのように、ニョキッと、なかんずく長い足をのばして、何かの手がかり（足がかり）を求めするように、うごめいた。そして、いくつかの吸盤を持つ、その尖端が足がかりを得たのであろう。急に、いきおいづいて、その足を支点に全体を、ひとひねりして、まえに進める。

グラツと茶褐色の頭が揺れて、二本目の足が柔肌を這い、すでに到達していた最初の足が、かるやかに宙に弧を描いた。

と、その刹那、

「フッフッフ。蛸は、本能として壺を求めものよのう」

ふらりと立ち上がった元禄屋が、その蛸をむんずとつかんだ。が急に、げげんな顔付きになり、

「蛸というやつ。なかなか、こりゃあ、バカにならん吸着力じゃ。喰いついたら離れぬものをスッポンというが、こいつは、なかなか蛸とても！」

簡単にひき離すことができるものと思つていたのであろう元禄屋は、いまさらのようにその吸盤の力に驚いて、右手の上に左手も加勢させて、一本一本、その足をつまみでは、自分の小手にまつわりつかせていったが、おいそれとはいかない様子。

「旦那さま、お手伝いいたしましょう」

昭吉と和吉に手伝ってもらつて、やっと八本の足を、ひきはなす。

「すごいものよのう、蛸というものは。雄蛸と雌蛸の交りは、すさまじいばかりと聞いてはおつたが……」と、陳のさし出した盃をグイッと、のみ干した元禄屋は、「昭吉、湯に入るぞ。たっぷり洗い流してやらねばなるまい。連れておいで」と、いいのこし、淫らな気合いの充満した八畳の部屋を太股で出て行った。

あとを見送つた昭吉たちは大役を無事、果



たしたあのようにホツとした面持ちで、天井の滑車を下げたり、青竹を外したりして、貴子を「人」の字形の吊りから解放すると、「お内儀さま。しっかりなされませ。これから湯殿で、きれいさっぱり洗ってさしあげますから」と、失心寸前の貴子の、ぐったりした裸身を双腕で抱きとり「しっかりなされませ！」と縄尻をとって主人のあとを追う。

と、長廊下の途中、角柱のそばで、燈籠のあかりをあびて咲いている秋海棠の淡紅色の

花を眺めていた元禄屋が、貴子をなかに、はさんで追いついてきた昭吉と和吉に、「麻布から何か連絡はなかったかの」「別にございませんでした」「そうか。すると、まだ徳夜叉の手がかりはつかめぬか」

怪盗・徳夜叉、その隠れ家がわからない以上、いくらあせっても五夜のロザリオのうちの残るひとつ、戌夜のロザリオを手に入れることはできない。

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 五万円 |
| 良作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 貳万円 |
| 佳作 | 一篇につき | 壹万円 |
| 可作 | 一篇につき | 五千元 |

### ☆規 定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するたと「告白懸賞」とお書き下さい。

「旦那さま。待てば海路の日和とやら。まず今夜は、名器にて英気を養われては、いかがなものでしょう」

「フッフッフ、そうするといったそうか。どりゃ、では湯浴みじゃ。二人ともいっしょに入れ。そして貴子の駄のすみずみまで、南蛮渡来のシャボンで洗ってやってくれ」

ひっそりと踞んでいた貴子が、「いや、いやでござります。旦那さま、おひとりならば……とても昭吉さまや和吉さまと一緒にには。どうか、お許し下さいませ」と、恥かしそうに膝を「く」の字にまげて

訴えたが、元禄屋は、

「妻たるもの、女房たるもの、何事たりとも夫に背いてはなりませんぞ。ひたすら夫を、御主人さまを喜ばせ、慰めるのが、妻たるもののつとめ。そうじゃったの、昭吉さんや」

「ハ、ハイッ、旦那さま」

「じゃ、参りましょう」

先に立って長廊下のつきあたりを右にまがり、露地門から敷石づたいに離れの湯殿へと歩いていく元禄屋のあとを、二人の番頭に縄尻をとられて、小腰をかがめ内股に従っていく貴子の、ほの白く匂う裸身を、星影が淡くてらし出していた。

(つづく)





彼は夜学生である。

親元を離れて上京し、安下宿に居を定め、自活している。

昼は近くの煎餅工場に、配達助手として働き、夜は学校へ通っている。家へ帰りつく頃には、身も心も疲れ果てて、ものを考える気力もない。

彼の将来の夢は、法律をうんと勉強して、偉い弁護士になる事だ。何故、弁護士になり

淋しい情欲

## 夜の彷徨

陶山祝生

たいのか。理由は簡単だ。他人から先生と呼ばれ、金が儲かる。ただ、それだけの理由からである。

同じ法科に通っている友人が、悪党ぶって「弁護士は良いよなあ、分かりきった犯罪人を弁護する事だって出来るんだから。合法的に悪と結託出来る唯一の職業だぜ」と言った時、彼は何の事やら分からず、目をパチパチさせて、豆鉄砲を喰った鳩のような顔をしたものである。

それでも、とにかく、彼は弁護士になりたのである。いや、なりたかった——というべきなのかもしれない。何となれば、東京での暮しも、三年目に入った今、彼の情熱は、

容赦なく吹きつけてくる現実という砂礫に磨滅されて、当初の若い峻峭な稜角を失いつつあったからである。

彼はもはや、熱烈な希いを胸に秘め、一秒たりとも無駄にすまい——と、心に誓った昔の、あの一途な向学心に燃える学生ではなかった。と、いって、良からぬ遊びに憂き身をやつすといった一般的な自堕落のコースを辿っていた訳でもない。それなら、まだしも宜いのである。

彼は、今でも授業には欠かさず、出席している。

仕事も滅多に休むことはないし、下宿と職場と学校とを結ぶ道筋以外は、殆ど知らない



のである。

しかし、その勤勉さの裏には、何ら自分の意志は働いていず、全ては無気力な惰性によるものだった。

学校では心を許す一人の友人も持たない。もし、彼を放蕩の道へ誘う悪友が、一人でもいたなら、彼は今よりは、どれ程、幸福だったろう。

彼は、他の多くの少年たちのように、都会への柔軟な順応性を持っていなかった。いつまで経っても、田舎臭さが彼からは、ぬけなかった。彼は、自分の背負っている母の土地の臭いを羞じなければならぬ自分を、一層深く羞じた。

こうして、彼は依然として、一人ぼっちであつた。

孤独で、しかも無気力な少年の身体の中にも、若い血はめぐっている。時折、抑え難い衝動が、彼を指嚇する事がある。けれども、それも矢張り、孤独の歪んだ形をとらざるを得ない。やがて、それが定着すると、その歪みは、次第に自分自身に意識されないものになった。

学校を終えて家に帰ると、もう十一時である。それから急いで風呂へ行く。汗を流して外へ出るのは十二時を回った頃である。風呂は駅前通り商店街の奥まった一隅にあり、下宿まで凡そ二十分近くもかかるほどの道のりである。

この日も、彼は風呂からの帰り途、淋しい道を歩きながら、あの異様なまでの誘惑に、強く駆られた。

「駄目、駄目。もう二度としないって、決めたばかりじゃないか——」

……けれども、彼はその妖しい魅力を持った誘惑に負けてしまうのである。

注意深く、あたりに気を配りながら、彼は前のジッパーを下ろした。

それは、忽ち、容量を急に増して鎌首をもたげた。ああ！ 自分の秘部が外気に接している事のもたらず、何という感動——。

その奇妙な興奮に酔い、恍惚として夜道を歩いて行った。

身体の振動に呼応して、そのものの充実した重たげな振動がかえってくるのを、彼は快く受け止めていた。

学校の前を通りすぎる。自動車のスクラップ置き場がある。その先を右に折れると、ドブ川に面した広い空地がある。

そこが彼の愉しみの終点である。彼はいつも、その空地に到着すると、手頃な物蔭に身を寄せて、ひっそりと、この淋しい遊戯の結末をつけるのだった。

曲がり角にさしかかったとき、堆高く積み上げられているスクラップのかげに停まっていた車が、いきなりライトをともし、エンジンを響かせてスタートした。

距離は、ほとんどなかった。あわててかくそうとした手から洗面道具がすべり落ちた。

ライトは確実に彼の胴体を舐めてから、ゆっくりと走り去った。

黒いフロントガラスの奥に、胡散気に光っている二つの目を見たように彼は思った。

一物は途端に力を失い、萎えてダラリと頭を垂れた。

一人ぼっちの遊戯のみじめさが、俄に彼の全身を堰を切ったように襲った。

彼は瞼を閉じて空を仰いだ。

——眼を開くと、青い満天の星が、一せいに降り注いできた。



告

白

# 『奴隷妻』になりたい

笠井奈保子



九月号の読者通信で、私にお便りを下さった京都市の増井武様は、私の日記帳をこれからも、ずっと載せてもらうようにと、いうことでしたが、雑誌に載せてもらってから、私は日記が書けなくなっていました。

少しでも、いいから、書いてみなさい——と、すすめられるのですが、作りものでない自分の日記が、多くの人の目にふれる雑誌に載ってしまうということは、私としても困ってしまうのです。ですから、無理に書こうとすれば、作りごとになってしまいますし、そのところ、私はうまく書けません。

ですから、私は、もう日記は書けません、とお返事しておいたのです。そしたら、十月号に載った、私の文章『十冊の奇譚クラブの雑誌』に大変反響があって、貴女に対する読者の方からの通信が、こんなに沢山きていますから、一つ、これを読んで、何か書いてみませんか——と、言われたのです。

そういえば、十月号に載った文章は、大分前に書いたような気がします。奇巧の八月号までしか、手にしていない頃に書いたものです。それが、今では、九月号も十月号も手にしているのですから、読者の方に、お返事します——と、書いておいたのも、ちょっと、



忘れてしまっていたのです。

なんで、私に、こんな手紙が——と、そのとき、考えました。さあ、大変、これからお便りに返事を書かなければならないことになったのです。奇巧編集部の方は、まあ、返事は後で書くとしても、原稿は忘れずに頼みますよ——と言って帰られました。

必ず、載せてもらえる文章を書く。いや、それよりも、予定されている誌面をうめるために、なんとしても書かなければならない、ということは、なんとなく気が重いです。

先ず、頂いたお便りに目を通しました。

私は、自分は字も下手だし、それに文章や手紙なんか書いたこともないから——と、卑下していましたが、十数通のお手紙を拝見して、ちょっと安心しました。私とチョボチョボの多いんです。『自信がある』というのを『自身がある』と書いてあったりして、私と同じくらいなんです。

塚本さまから、お手紙をもらったときは、私は、とてもあかんと思いました。黒のボールペンの太書きで、まるでペン習字のお手本のようなきれいな字で、流れるような便りが達筆で書いてあったからです。それに、文章がまた、私の心を、ぐっと掴んで引きずりだし

てしまうような巧みさなので、もう、最初から、圧倒されてしまいそうでした。

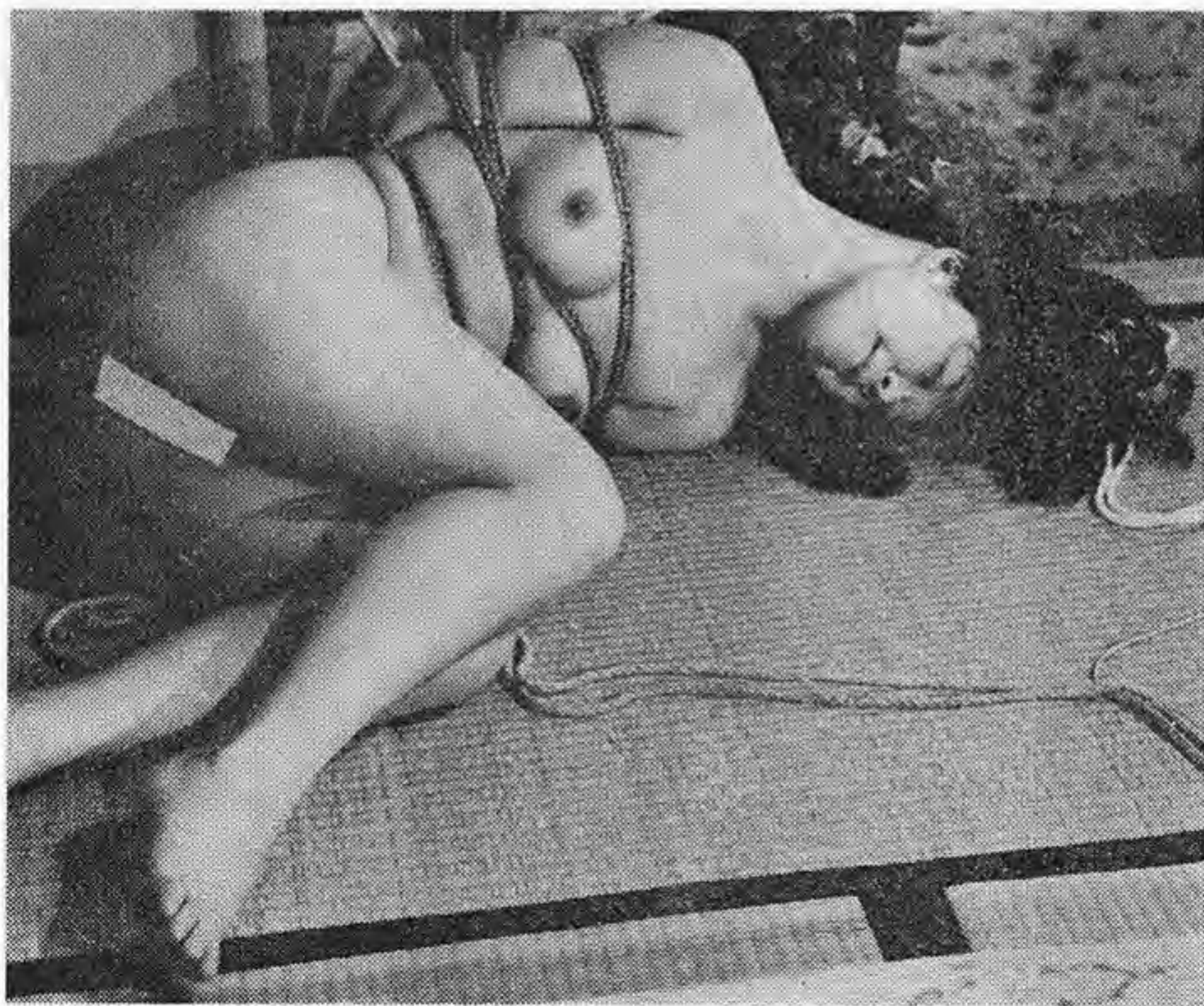
それに引きかえ、読者の方々からのお便りは、自分と同じくらいだという親近感が持てました。これだったら、気易くお返事が書けそうなんです。でも、便箋に書き出してみても、これは、なかなか大変だと思い初めました。

一人一人、違うお手紙の内容に対して、それに応じたお返事を書くということが、如何に時間のかかるものか、如何に面倒なものであるか——ということがわかったのです。

これが、たった一人の恋人に対してラブレターを書くのだったら、情熱をこめて、一心に書くことも出来るのですが、こう沢山の方の、的のきま

らないお手紙の返事って、一体、どうなってしまうのでしょうか。

初めての お便りなのに、いきなり結婚しよ





うって書いてある人もあります。真面目なのか、冗談なのか、どちらでしょうか。きっと真面目すぎる方なのでしょうね。

私のような女と結婚したら、きっと、お困りになると思いますわ。私、お尻が大きいのですから、お尻に敷いてしまうかもしれませんもの。それでも、いいでしょうか。

私とプレイをしようと、熱心におっしゃって下さる方、いろんな責め方を書いていただいて、心から楽しく読みました。私は、縛られた女性のシャシンを見るのは大好きですがまだまだ責められることについては、豊富な経験はございませんので、そんな変わった責め方についてゆけるか、どうか、耐えられそうもありません。

この原稿を書きながら、私は、読者の方からのお便りに対するお返事を平行して、ぼつぼつ書いています。この文章と同じように、なかなか前へ進みません。書いては消し、消しては書いたりして、消しゴムの屑が小さな机の上に、いっぱいになってしまっています。

書きさしのまま、放っておくので、日がたつと、もう次を書く気がしなくなります。

逢ったりプレイをしたりした方でしたら、下手な字ながら、すぐにでも、なんだか書け



るような気がするのですが、手紙の文面だけを読んで書くということは、私には、いっそう、むづかしく感じました。それも、もし、たった一通だけの手紙なら、まだよかったのですが、こんなに沢山の手紙の束をもらって読んでしまいますと、どれとって特長が目につかなくて困ってしまいます。

便箋にたった一枚だけ、ぺろっと簡単な文章を書いてあるのなんかもありますが、これ

なんかは、相手の方のことが、一体どんな方なのか、さっぱりわからなくて、お返事の書きようもありませんが、「笠井奈保様、私はまだ貴女にお会いした事ありませんが、全然、他人の様な気がしません。6月号で貴女を知り、それから貴女の心の動きを書いた日記を読んでいるのですから、私としては、いたし方のない事だと思っています。」という書き出しのお手紙には、私も心をひかれるも



のがありました。

といいますのは、私の拙い告白の文章をよく読んで下さっていたからです。こんな方に

だったら、お逢いしても、話も合うだろうし少なくとも、雑誌に出ていた範囲の私というものを理解して下さっていると思ったから、

私の心は、やはり動きました。

〔7月号の貴女の書かれた「私の玉手箱」で私が6年前に奇クを始めて知った当時を思い出しました。又8月号9月号で貴女の女性としての変身ぶり、又女性特有のデリケートな心の動きが生々しく私の心に飛び込んできます。特に9月号「紫陽花の咲く朝」で書かれてある「今迄の様に駒切れの短い時間では、この頃の私って、なんだか物足りなくなってきたみたい。私の体が痩せ細ってしまうくらい責めぬいてくれなにかしら。そして——何となく力強いものにすがりつきたい気持、どんな

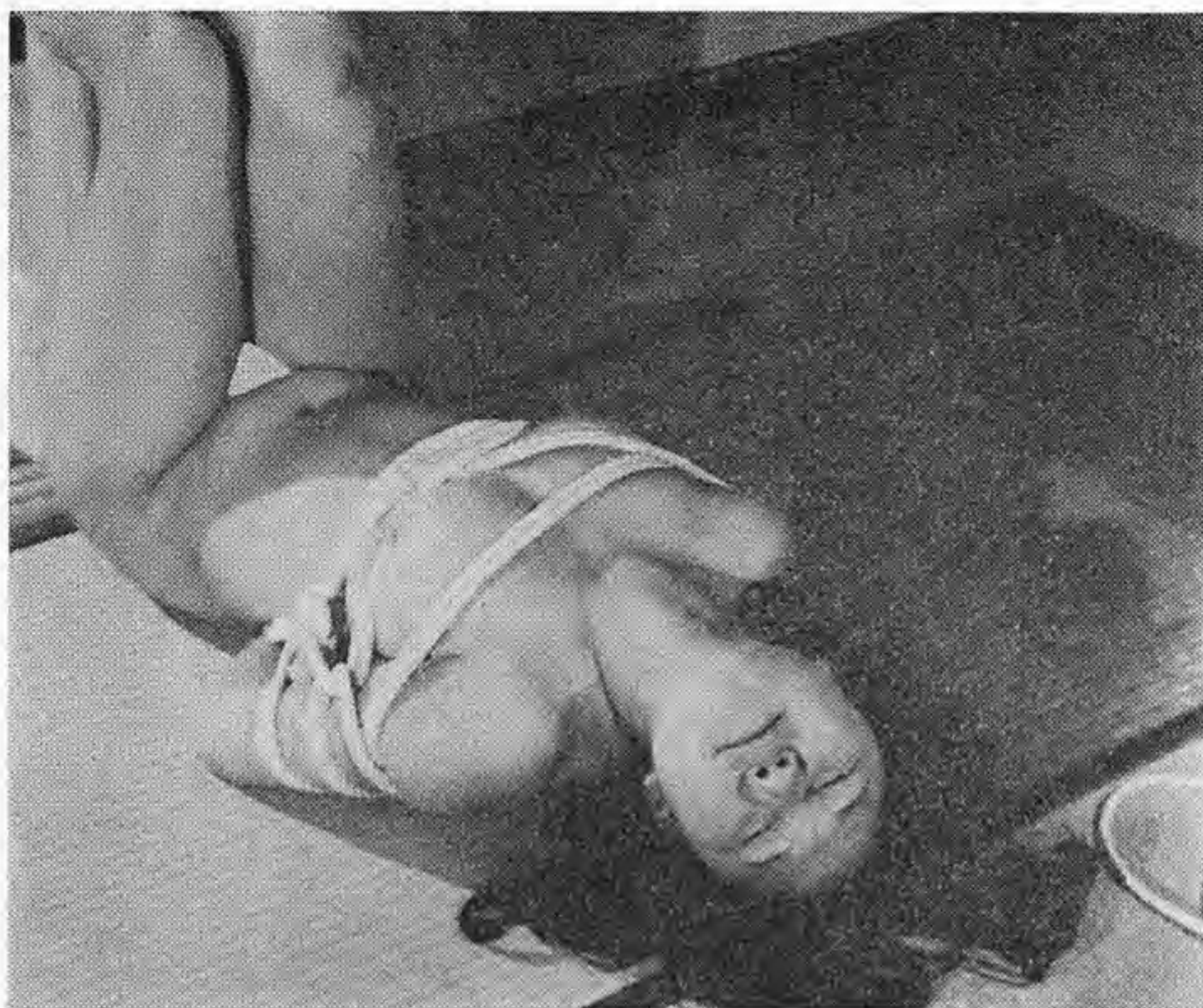
にすぎなくされても腕にすがりついてゆける様な人がほしいと思う。私を思いのまま縛ったり責めたりしてくれる人。我ままで、気ままなこの私の性質を直すために、お仕置やセツカンを愛情をこめて、やって下さる方っていないかしら〕私はこの文が好きで、ほとんど暗記する位、何度も読みました。私は貴女は、もう普通のSMプレイでは、あきたらなくなり、奴隷としての第一歩をふみ出した事を証明する文の様に思えてなりません。〕

この方は、私の書いた文章を暗記するほどよく読んで下さって、その上、私の心の動きや変化にまで心を配っていて下さるのです。

私は塚本様のすすめで、こわごわ縛られてみて、シャシンをとられたりしましたが、もともとポーズをとることなど器用ではなく、この頃は、「身体ばかり、むくむくとふとっいていて動作がにぶい」とか、「もっと縛られているという苦痛の表情を出すんだ」とか言って、ひどく叱られます。

時には、「カンのにぶい奴だッ。どうしてこう、どたどたしてるんだ」と言って、足で蹴られたりします。

いじめられることは嫌いではない私ですがやはり本気で、そう叱られると、やはり悲し





い気持がします。その上、他のモデルの方を  
引き合いに出されて、「この人はこうだのに  
お前はなんと駄目な奴なんだ」と言われたと  
きは、もう二度とカメラの前になんか、立っ  
てやるもんか——という気になります。

「お前の、その頬っぺたを、ぶーっと、ふく  
らますところが、悪いくせだ」

と言われて、いっそう、すねて、ふてくさ  
れてしまうのです。

へどうせ私は、ぶくぶくふとっていて、動作  
もにぶく、身体も、よう曲がりません。少し  
強く縛ったりしたら、「痛い、痛い」と文句  
も言いますし、言われた通りのことは何一つ  
満足に出来ない女です。V

心のなかでも、そんなに思っています。で  
も、塚本様には、私の心はわからないのでし  
ょう。只ふくれている私に、不愉快な表情を  
されて、「しょうがないナ」という顔つきで  
シャシンの撮影を中止されます。

シャシンを撮影しておられるときは、大変  
気むずかしく、いろんな注文を出され、私が  
とまどっていますと、きつい言葉で叱りつけ  
られるのですが、一たびカメラが終わってし  
まいますと、がらりと人が変わってしまわれ  
るので、私もびっくりしてしまいます。



それから、真のSMプレイではないのか  
しら——と、私が思うようなプレイが展開さ  
れるのですから、不思議なのです。なぜ、私  
が、このようなことを書いたかと申しますと  
さっきのお手紙には、続いて、次のように書  
いてあったからです。

「私は空想で貴女と、何度も何度も、SMプ  
レイをしています。私は可愛い奴隷である  
貴女に、開股縛りによる剃毛、又浣腸責等、

私の好きな羞恥責で貴女をいじめ尽します。  
貴女は身もない姿でむせび泣くでしょう。」

同性の縛られたシャシンを見たい——と、  
いうことから出発しました私のSMへの関心  
は、自分が縛られてみて、（塚本様の熱心な  
すすめがあったからです）この方のおっし  
やるように、徐々に変化していったのです。  
自分では、この方に言われるまでは、そう、  
はっきりと自覚していませんでした。





ポーズをつけられたりシャシンをとられたりする時には、そう好きではない私なのですが、フットを見せられて燃えあがったあとのSMプレイは大好きなのです。

読者の方からのお便りに対して、指先をインクだらけにして、お返事を書きながら、私は、もう一通の書面に目を通していました。

そのお便りは、私の考えても見なかったオシメのことが書いてありましたので、私の目を引きましました。

〔拝啓、十月号掲載の、「十冊の奇譚クラブの雑誌」を拝見、お便り致します。〕

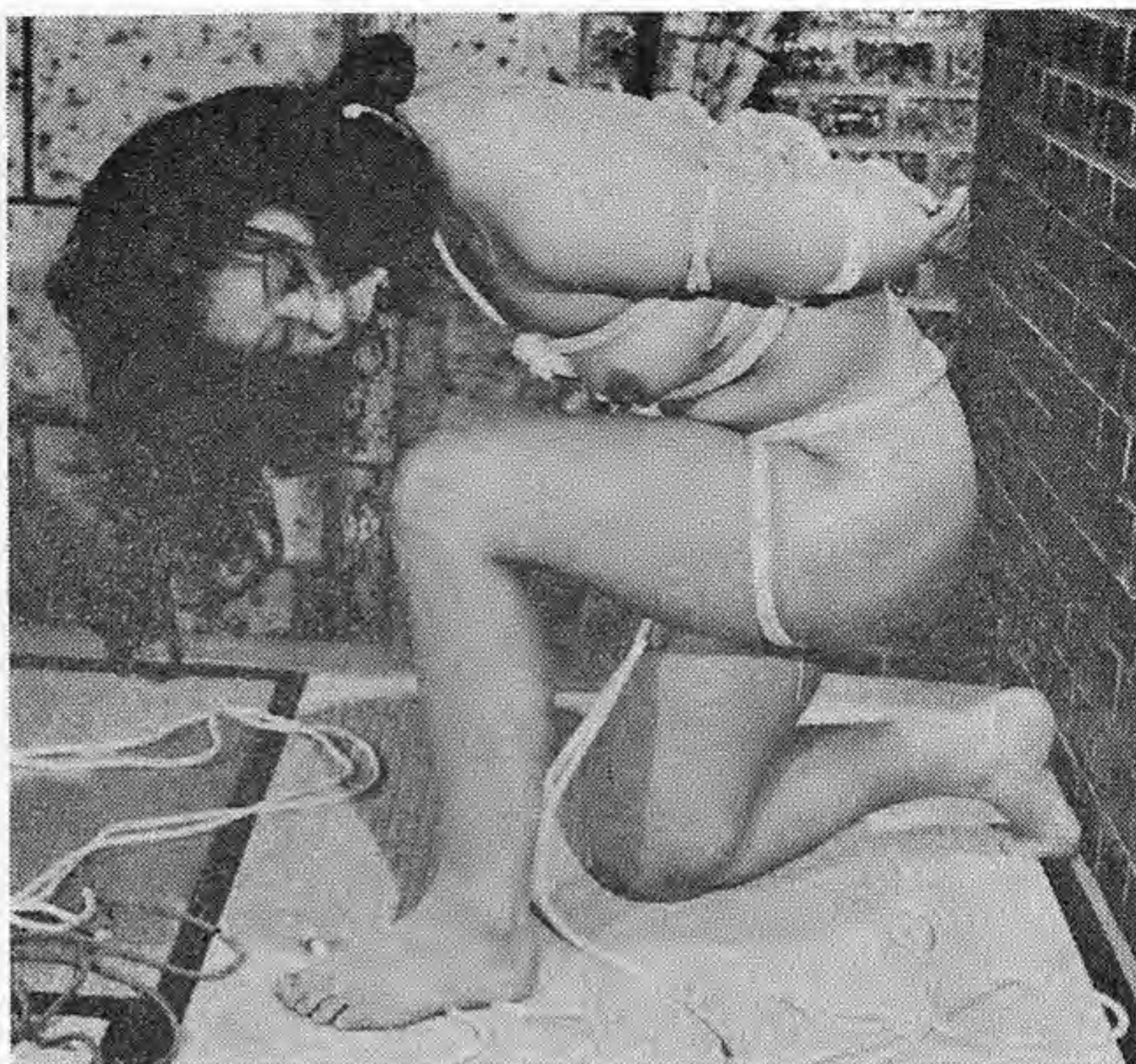
SMの世界を知って十年余り、今年二十五になる一青年それが私です。

十年近くを過ごしながら本格的なプレイは殆ど経験ありません。つくづくSMプレイのむずかしさを痛感致しました。私とプレイした女性はMでなかったのかも知れません。

今、あなたという素晴らしい人を知り、矢もたてもたまらず、お便りする次第です。あなたがどのような縛りやプレイを望んでおられるかわかりませんが、御希望にそう自信はあります。あばれるあなたを押えつけ猿轡をしっかりとませ、裸にひんむいて後手に縛り上げます。その上で海老縛り、木馬責め、くすぐり、軽い吊りなどをして、あなたを責めます。そのうち、あなたは尿意を訴えるでしょう。しかし、トイレへは行かせません。いやがるあなたの腰にオシメをあてがい、その上からオシメカバーをあててしまいます。あなたは猿轡の奥でうめきながら必死にがまんするでしょう。しかし、はかない抵抗です。やがてオシメは少しずつ、ぬれていきます。オシメがぬれても、とりかえず、そのまま長時間不快感を味あわされて責めを受けるのです。猿轡は、このひとときだけ、はずされません。そして再び猿轡をされたあなたは、責め続けられるのです。〕

オシメをされるなんて、それに、私がオシ





メのなかに……なんて、考えてみただけでもゾッとします。そんなことも責めになるのかしら、と不思議に思います。

もともと私は、奇クの一月号にのっけていた松本たえさんの、きれいな縛られたシャ

シンを見て、すっかり、この本のとりこになってしまったのですが、SMのことについては、まだ何も知りません。ですから、オシメのことなんか今のところ、自分では何のことだか、さっぱりわかりません。こんな変わった方もいるのだなあと、いうことぐらいいしか考えられないのです。

やはり、なんといっても、きつく縛られて苦痛に耐えている女の人のシャシンが、美しいと思います。奇クには、たくさんシャシンがのっているのです、とてもたのしみです。

私は自分の身体には自信がなくて、ぶくぶくふとってばかりで好きにはなれないのですが、縛られてうつされた自分のシャシンは、好きなのです。表情をつくるなんてことは、素人の私には、出来っこありません。でも、

自然のまま、ありのままの自分がシャシンになってるのが好きなのです。

塚本様から、「お前は動作がにぶい。身体も曲がらない。食べてばかりいて、運動をしないからだ」と言っ、よく叱られます。

ある時なんか、裸で縛られた身体を、縄尻を持って追いたてられて、よいポーズを作らないからと、部屋の隅まで、押し込められたことがあります。大変悲しい思いをしました。それが、あとで出来上がった、そのときのシャシンを見せていただいたら、非常に感じがでていて、猿ぐつわをかまされながら泣きだしそうにしている私の顔が、自分ながら美しいと思いました。

「もう二度とお前なんか、モデルに使ってやらないから——。お前をうつしていると疲れてかなわない」

そんなことを言われ、自分の才能のなさを悲しく思うと共に、なにも、こちらから頼んでモデルになっているのと違うんだもの——と、すねてみたくなりました。

いつとはなしに、自分の方から、縛ってシャシンをうつして——と、お願いしているのに、「お前なんかダメだ。その値うちはないぞ」と、さんざんイヤがらせを言われ、そし



て、しまいには、足下にひざまずいて、両手をついて、「どうか、私をモデルに使って下さい」とお願いをさせられてしまいました。そんな私の態度を見て、塚本様は、なおさら、乱暴な言葉で、私をいじめるのです。

「私は沢山の女を見てきたが、お前くらい、カンのぶい女は知らんぞ。いくら言ってもわからないんだから、イヤになってしまおう。それに、すぐにぶーッと、ふくれっ面をして感じが悪くてかなわんよ」

私は、すぐ「ゴメンナサイ」と、あやまりますが、心の中では反ばつていますので、どうしても顔に出してしまうのです。別に、殊さら、ふくれ面をしているわけではないのですが、頬っぺたがふとっているのです、そう見えるのです。

「後手首を縛っても腕に肉がつきすぎているので、なかなか上がらない。エビ縛りにしてもお腹の肉がつかえ、なかなか曲がらない」そう言って叱られるのですが、すらりとスタイルのよい女の人のように、曲芸のようなポーズは、とても私には出来ません。そしてとどのつまり、さんざん毒づかれた上で、シヤシンも、とってもらえないのです。

「もう次から、お前なんか来なくてもよい」

冷たく、そう言われると、うまくポーズのとれない自分が、なさけなくなってしまう。一生懸命、努力しているのに、なぜ自分って、こう駄目なんだろうと思います。

「次からは、うまくやりますから、どうか、お願いします」と頼みますと、

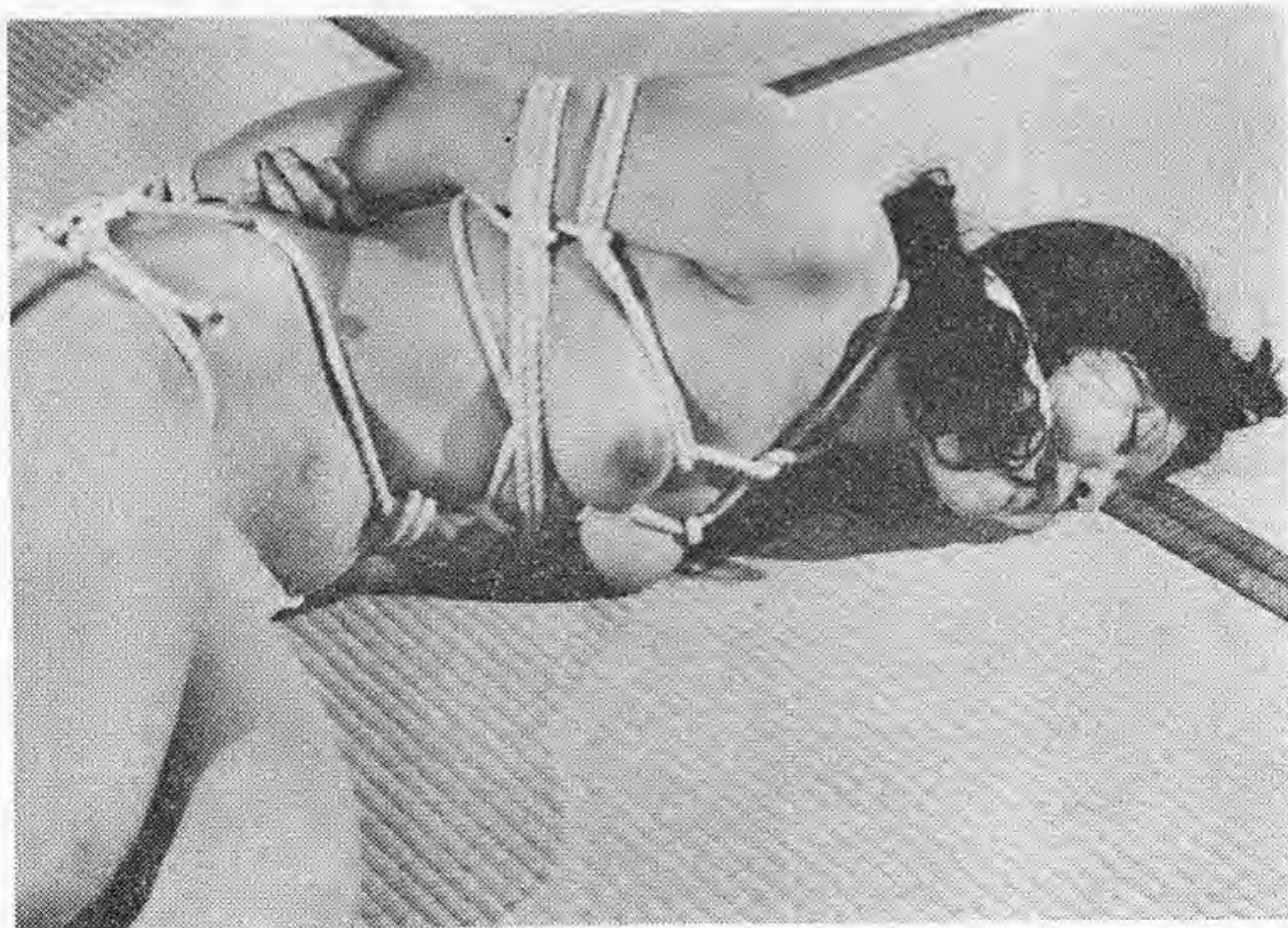
「今まで、何回もそう言ってるじゃないか。こんなことだったら、フィルムと時間の無駄だ。只ね、一生懸命にやってるだけじゃ駄目なんだ。わかったネ。そのぶくぶくと肥えふとってる身体を直さなくちゃ——」

「でも、御飯、余り食べてないんです」

「だったら、何故、そんなに肥るんだ」

「これでも大分やせたんです。十七、八の時は、まだ四キロほど肥ってました」

「とにかく、好きなだけ食べるから、そんなことになるんだ。僕も忙しくて、お前の調教ば



かりしてるわけにはいかんが、まあ、真面目にやるって言うんなら、うつしてやってもい



いがふくれっ面だけはするナ」  
「ハイ、言われた通り、しっかりやります」

そんなわけで、引き読んで呼んでももらえらと思っていただけですが、余りの私のカンのにぶさに驚かれたのか、連絡はないのです。私の方から電話するのもなにかしら、ためらわれて、日がたってしまいました。

私は今、編集部から回送されてきた読者の方からの手紙に目を通していきます。このなかに、私の希望するようなシャシンをとって下さる方って、おられるでしょうか。真面目な方が多いので、私はどなたに、お返事を書こうかと、ほんとうに迷ってしまいます。

〔笠井奈保子さん〕

私はあなたの写真を本誌の六月号で拝見した時から、あなたと文通、そして、できれば交際をしたいと思っていました。

しかし、私は女性を一度も縛ったことはありませんし、もちろんSMプレイを経験した



こともありません。その為、手紙を出すのをためらっていましたが、十月号のあなたの手記を読んで、それこそ、矢も楯もたまらなくなり、この手紙を書いたしだいです。

私が、いつもあなたのことを空想するとき、あなたは、私の「奴隷妻」となって、ちようど今、連載されている「命預けます」の

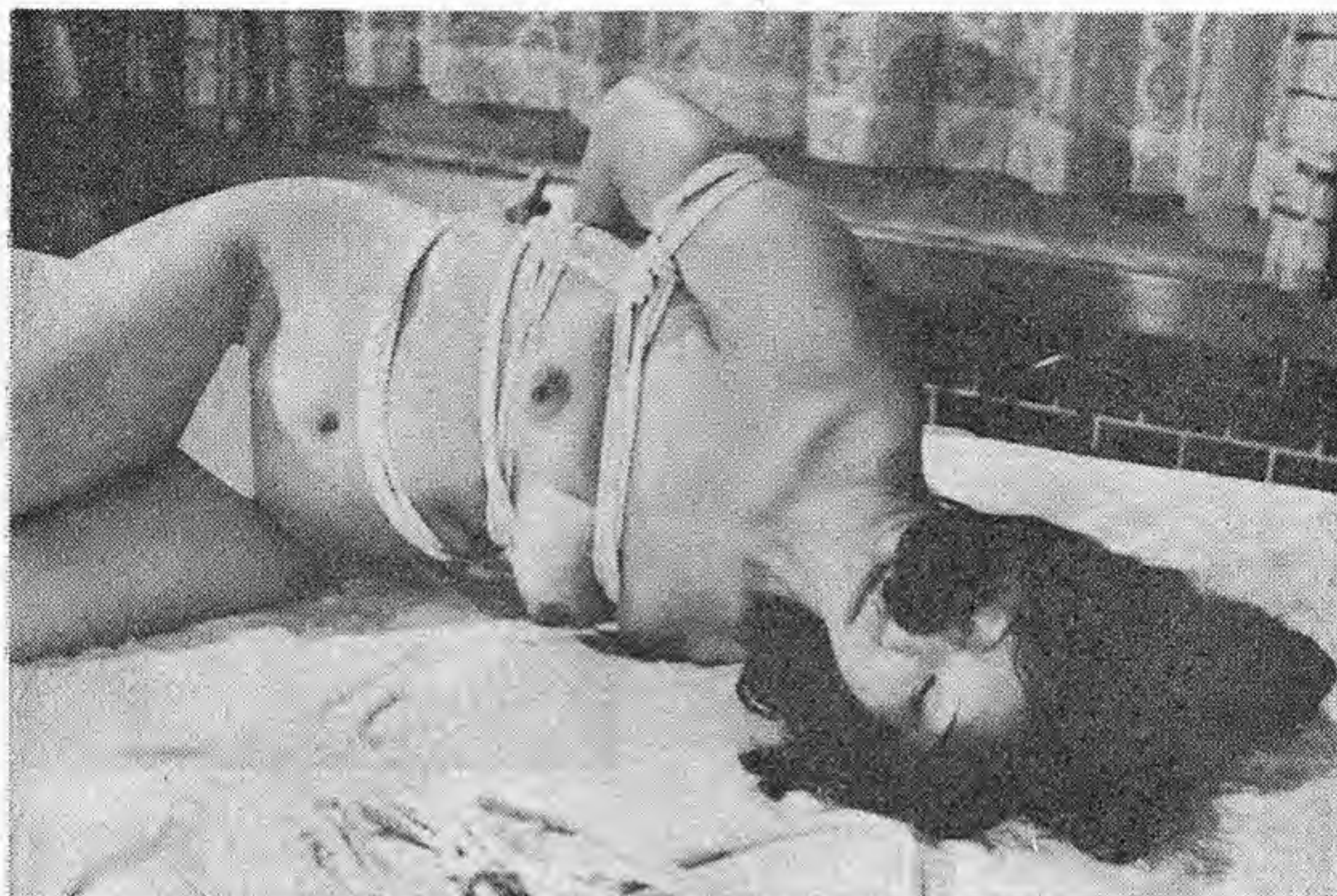
ヒロイン春子のように、私の命ずるままに、あなたは、全身に、はるかさをあらわしながら、それでも従順に、はるかしいポーズをとっているのです。

勝手な事ばかり書きましたがあなたの返事を頂けましたら幸いです。』

近くの文房具店で、封筒と便箋とを買ってきました私。まず最初に、封筒の表に宛名を書いてから、裏の自分の住所をどこにしようと考えて、そうしておいて、どうしても手紙を書かなければならない立場に自分を追いこんでおいて、いざ便箋にペンをおろしますが一向に先に進まないのです。

縛られた女の人のシャシンを見るのは大好き、そして、自分が縛られることも嫌いではない私ですが、さて、心まで男の方の言いなりに従順になれるかどうか、自分でも自信はないのです。ベテランの塚本様でさえ、「お前は扱いにくい女だ」と、サジを投げられているのです。





「ゴメンナサイ」と口であやま  
っていても、心の中では、それ  
と反対のことを思っている私で  
す。如何に私を縛ってみたこ  
ろで、心まで征服することは出  
来ないので。

私の身体ばかりか、心までも  
征服して下さる方が、もしも私  
の前にあらわれたら、その  
ときこそ、私は、その方の「奴  
隷妻」として奉仕させていただ  
きたいのです。

辛抱づよいのと身体が健康な  
のがとりえの平凡な女性です。  
まだ五回ぐらいしか縛られた経  
験はありません。塚本様からの  
お呼び出しさえあれば、私の方  
は、もっと縛られたシャシンを  
とってほしいと思っています。

今のところ、東大阪市の方に  
居をおいでいますが、アパート  
の一部屋を借りて一人住居をす  
るか、彦根の父のもとへ行くか  
きまっております。父も大分  
年をとって、一人でいるのが淋

しいらしく、私に来ないか——と、よく言っ  
てきます。お盆には、久しぶりに彦根へ帰っ  
てきました。都会に住んでおります者の目に  
は、やはり樹々の緑も美しく、歩いて数分  
琵琶湖の湖岸に出ることが出来ます。のんび  
りとした一週間を過ごしてきましたが、やか  
ましい程の蟬の鳴声をきいておりますと、遠  
い子供の頃のことか思い出されます。

父の飼っている錦鯉が品評会で入選したと  
かで、大変ごきげんでした。この鯉は、みん  
なお前にやる——と、言ってくれました。

事業を失敗してから父にとって、この錦  
鯉だけが唯一の財産なのです。一疋何十万円  
もするのがあるそうですが、果たして、そん  
なに高く売れるのでしょうか。

私は指先をインキで汚しながら、懸命に便  
箋にペンを走らせています。机のまわりには  
書きつぶしてまるめた便箋の白い花が、いた  
ずらに数を増すだけで、表書きを書いた封筒  
へ入れる手紙の方は、なかなか書き上がりそ  
うにもありません。

原稿の方は、言われた枚数よりは、大分、少  
ないのですが、とにかく、これだけ書いてみ  
ました。また、何か書くことが出来たら  
そのとき、書かせていただきます。



北太郎画



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 「アナルセックス」の

## 一つの体験

嵐 由之助

午後の九時ごろから飲みはじめて、ふと気付くと、既に午前二時を少し回っていた。

その間、ずっと飲み続けだから、随分酔っていたに違いない。飲食街を吹き抜ける二月の冷たい風も別に気にならなかった。

フラフラと風に運ばれるように歩いているうち、いつも一人で飲むことの好きな僕だがこの時、ふと、無性に女が欲しくなった。

ここ横浜では、その気になりさえすれば、女に不自由することなど、まづなかった。何しろ、年間入港船舶数四万隻を優に超える日本一の貿易港だからだ。この港町に出入りする国の船員の数に膨大なものである。いちい

ち売防法を馬鹿正直に守っていた日には、性犯罪が多発して仕方あるまい。

伊勢崎町の裏通り、黄金町（ここは昔、麻薬の巣窟といわれた）赤門町などは、昼間からでも公然と客を引いている。夜間になればなおさらのこと、ポン引きや直<sup>じき</sup>パンの大賑わいだ。屋台にたむろする三十才から四十才前後の女性は、大抵は、そう思っているようにであるが、好みもあるだろうし、上等な向きを好む向きは敬遠した方がいいだろう。

ところで、この港町には、男娼の多いのも事実である。一説に依れば、五百人から六百人にのぼるといわれているが、それは、あな

がち誇張ばかりではないようだ。

だが、僕は男娼には、あまり興味が無い。僕は今二十六才だが、同年輩の同性とベツドを共にするなど、考えただけでも、あまりパツとしない。しかし、素晴らしい美少年というのなら、話は別である。

僕の友人の中にゲイバーに勤めている者がおり、無二の親友である。彼の職業は十分承知だが、僕は彼をただの男性とは思えないし、友人以上の関係もない。ただ彼の勤めている店には時々遊びに行く。また頼まれて開店前の営業企画会議（ミーテングのことか）には、三度ばかり参加したことがある。



そして素顔の彼たちと化粧後の彼女たち？  
との変貌ぶりに、啞然としたこともある。

彼女たちの化粧は、実に念が入っていて、  
一時間以上もかかる。そのかわり化粧の後は  
四十才位のいかつい男も、艶冶な芸者風に変  
わるし、二十一、二才のなやかな若者は、  
ミニスカートの魅力的なファッション・ガー  
ルに早変わりするのである。そのさまは、見  
ていても、かなり奇怪なものである。

そのゲイバーの二階は、ママの他、三人ほ  
どが下宿している。そして、その部屋は店が  
開店している間、スペシャル・ルームとして  
も使用するのだ。だが、その店のことを書く  
のは別の機会にし、ここでは僕の体験だけを  
述べることにしよう。

そういうわけで、僕には男娼について、あ  
る程度の鑑識眼があるものと自負していたも  
のである。だが、やはりそれは、いい加減な  
ものであったことを、思い知らされる破目にな  
ってしまったものである。

その夜――。

酔眼朦朧とした僕の眼に、一人の女性が映  
った。それも飛び切りのヤツである。

電柱の陰で、タクシーを待っているふうの  
その女性は、なだらかな肩と、細いうなじを

持っていて、その周囲から、麝香の匂いが、  
かすかに漂ってくるようだった。

声を掛けると、静かに願った。黒目勝ちの  
うるんだ瞳。僕は一瞬にして魅了されてしま  
った。彼女は案外なほど簡単に承諾した。も  
ちろん金額は決めた。

タクシーに乗り込むと、彼女はチューイン  
ガムを僕に寄越した。僕の酒くさい口臭を、  
彼女が嫌ったからに他ならない。閉じ切った  
車の中では、麝香の匂いが一層、強く匂う。  
彼女が永楽町と告げ、数分して車は人通り  
の全くないアパート街に停まり、先に立って  
一軒のハイツに入ると彼女はハンドバッグか  
ら、銀色に輝く鍵をとり出して、ドアを開け  
た。

通された部屋は和室であった。十帖位の部  
屋の一方をダブル・ベッドが占めていた。

僕はすぐ横になって悩ましい手付で和服を  
脱ぐ彼女をベッドに入って待っていると、彼  
女も和服をするすると足許に脱ぎすて僕の  
傍に入ってきた。僕たちは早速、接吻を交わ  
したのだが、彼女の下腹に手をすべらせた途  
端、僕は全く驚いてしまった。

「なんだッ、君は男か――」

彼女の声といい、つややかな肌といい、女

そのものと僕には思われたからである。咽喉<sup>のど</sup>  
仏<sup>ぼとけ</sup>などは、勿論ない。

「ええ、そうよ。知ってるのかと思ったワ」  
彼女はそう小さい声で答え、「ごめんなさ  
い」と、素直にあやまる。

横浜に男娼の多いのは知っている。だが、  
まさかこの僕が、知らずにつき合ったなどま  
ず考えてもみなかったことである。

僕は、彼女に帰ると告げ、金を返してくれ  
と言った。

彼女は、しばし、うつむいていたが、もう  
一度、僕に詫び、そしてベッドから降りた。  
襖を開け、僕が手渡した金をとり出した。  
暗くてよく分からなかったが、彼女は金を、  
そこに隠しているのだと思った。

その時、何故か、僕と同じように、女と見  
違えてホテルに行き、男娼と分かれるとカッ  
なって相手を殺してしまった、未だに迷宮入  
りの殺人事件を思い出した。秘密のベールに  
包まれた彼女たちの立場は弱い。

部屋の照明は全く暗い。ベッドの脇の小さ  
な行燈風の灯りが、緑色の妖しい光彩を投げ  
かけているだけである。

その灯りで、彼女を見ると、女性とも男性  
とも見分けのつかぬ一種異様な雰囲気、彼



女の周囲から発散しているのが感じられた。体毛が全くなり、そして、どこも骨ばったところがない。年は僕と同じか、一つか二つ位、上だろう。僕には男色趣味はないと云ったものの、その後姿を見ているうち、ある種の感動に打たれた。

それは彼女の素直なことだ。男だな——と指摘すれば素直に詫び、金を返せ——と言えば、すぐ取りに行く。その素直さに、幾分、心を動かされた。

とはいえ「いいよ、その金やるよ」と言えば、いかにも寛容で男らしい態度かも知れない。でも、事実をありのまま記せば、僕はそれほど寛容な心の持主でも、また金持でもない。彼女とつきあおうとしたのは、たまさか遊びに来た横浜の夜を、楽しく過ごそうとしたために過ぎない。

彼女は、持ってきた金を僕に手渡ししながら哀願するように、耳許で囁いた。

「ねえ、帰らないで。お願い。いいことしてあげるから……」

その声には、なにか哀切なものが、こもっていた。彼女はそう言くと、いきなり口に含んだ。僕は、あやふやな状態のままである。女性に、そうされたことはあるとはいえ、男

性からは始めてである。いい加減、酔っていたせいもあるが不快感はなかった。僕は全てを彼女に委ねることにした。彼女の唇は下肢腋の下、胸——と次第に上ってくる。

僕は、その時、男性の体にも、性感帯が、そこ、ここにあるのを始めて知った。それも極めて強烈なヤツが……。

乳首もそうだし、胸部から下腹にかけて走る線もそうだ。それを巧みな接吻で、まるで宝物を掘りおこしてゆくかのように、彼女の唇は教えてくれる。

ゲイボーイは、本来、男性であるが故に、いくら上手に女装しても、丹念に観察すれば男性であることがわかる。別段、男性であることが分かって、差しつかえないのだが、それでは、中々商売がうまくゆかないのが実情である。

それで、彼女たちは化粧には時間を充分かけるし、話術も研究する。稽古事などは、並みの女性よりも熱心だ。料理に至っては、カレーライスや目玉焼しか作れない、大抵の水商売の女よりも、うまい。

「女でございます」といった顔をして、サービスの仕方何一つ知らないブス共が、たむろする普通のバーよりも、ゲイバーを好む人

たちの気持も分かる。仮に、その人に倒錯趣味がなくてもだ。

飲んでいて、一番良いのが、「芸者遊び」二番目が、「ゲイバー」三、四がなくて、カスガ、普通のバー」と俗に云うのは、サービス精神の多寡によるものだ、僕は解している。

話は横道にそれたが、まさか、ゲイボーイたちが男性の性感帯について研究し、それを巧妙に接吻によって愛撫するということは実のところ驚いてしまったのである。

僕は、自然と興奮して来、とうとう彼女を背後から抱きかかえようとした。彼女は、その時、すばやく口の中に何かをくわえると、それで、僕のものを覆ってくれた。それはゴム製品であった。それも、実に器用に、ものの一秒か二秒かの間である。汚れるのを心配してくれたのだろう。

酔っていたせいもあって、女性とのセックスだったら、ほとんど不可能だと思われたのに、たちまちにして、果ててしまった。女性よりも、すばらしい快楽だった。

僕は彼女から体を離すと、しばらく、息の平静になるのを待った。すると、彼女は僕の中に入りたいと云うではないか。金なんか要



らないという。まさに民主的なセックスである。僕は承知したのだ。

こうして、酔いもさめ、ペンを握っている  
と、どうして、ああも、アブノーマルなセックスにのめり込んで行ったのか、いささか、自分でもあきれ果てているのだが、ウィスキーを飲んだ自分は、そうしたものであって、これを悪夢とか、何だとか、月並みな言葉で弁解しようとは思わない。

彼女のものは戸惑った。何故なら、僕が初体験のため、恐怖心で身体を固くしているからである。彼女は、僕に全身の力を抜くように忠告する。何かを塗りつけたのも、分かった。こわごわ、力を抜いた。

別段、痛みは感じなかった。これは彼女がベテラン故に出来たことだと思う。

僕の快感だが――。これは実に索莫としたもので、痛みもなく、さればといって、快感もないのである。愛身の人間には、相手を精神的に愛していないと駄目だと僕には思われた。あるいは、僕が、数分前に峠を越した人間であつたからかも知れない。

彼女は、後から首筋に接吻したり、両腕で愛撫をくりかえしたりしていたが、やがて、激しく体を収縮させた。

そのあと、僕は風呂に入った。風呂といっても、ガス温水器により沸かした湯を、ポリ製のバスに入れるものだから、少し時間がかかる。腰のあたりまで、やっと、お湯がたまると、それで全身を洗った。

酔いも幾分かさめ、改めて、部屋の中を見渡すと、全く女性の部屋と交わらない装飾である。予備のかつら、コーナー・キャビネットの生け花、ガラスケースに入った舞い扇や日本人形、三面鏡など……。

壁にかかった状差しには、沢山の手紙が差し込んである。彼女へのファンレターの如きものである。僕が、彼女に身を委したためか彼女は一層、親密になり、コーヒーを入れて呉れ、名刺を差し出した。名刺には、名前の他に写真も刷り込んである。ゲイバーの営業用の名刺である。金も返そうとしたが、これは断わった。僕のために時間を消費し、全く無収入であるとは気の毒であるからだ。

名刺によると、彼女は伊勢崎町の映画館が多かったらんでいる一角に店を構える、ゲイバーのママであつた。

つまり専門の男娼とも違うらしい。彼女は僕に安くするから、遊びに来てくれという。

後日、その店に一度だけ顔を出したが、事

実、安かった。コンパよりも安い位である。ただ、難をいえば、ホステスが年輩の人間ばかりで、これがはやらぬ原因であり、それが高じて、たまさか、入ってくる人間にبولよ  
うな真似をし、よけい客が寄りつかぬのではないかと思われた。

それで、おんたい 御大自らが出張営業ということになるのだろうが、これは趣味としてやっている人間もいると聞く。

× × ×

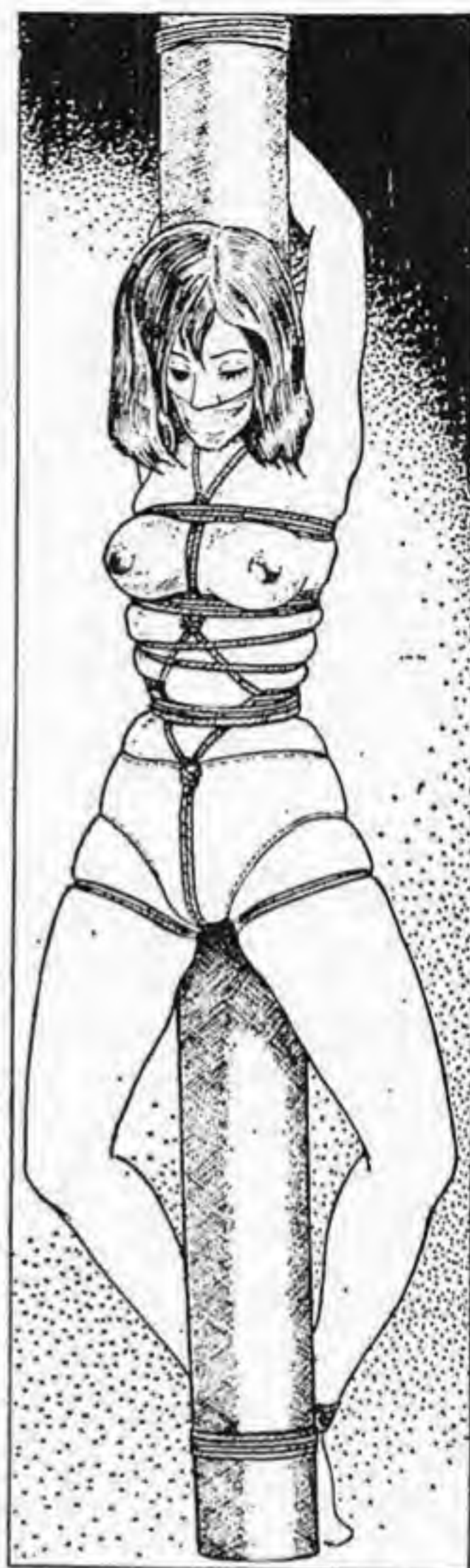
後日談だが、初めて体験したアナル・セックスが極めて快適であつたため、二十才ぐらいの青年をつかまえて試みたが、これは失敗に了った。あまりにも苦痛を訴えるため、気の毒になつたのである。

肛門の括約筋は、きわめて薄いという。無茶をすれば、相手に裂傷を与えるのは必定である。何かのテクニクがあるらしく、それは不幸にして知らない。

また、僕が女房になるのは、全く苦手である。今から、五、六年前は、僕も少しはハンサムだったので、よく、いたずら半分に、背後から抱きつかれたことがあつたが、不快感ばかりが先立つたのを記憶している。

これからも、二度と縁はなさそうだ。





カット・名古屋S生

ある夫婦SMプレイの告白から

金色のローソク

佐川増夫

『お手紙拝見致しました。突然のことです。一寸驚きましたが……。こういう趣味は、同好の士と大いに語り合いたい気持ちもある一方では、そっと自分だけの秘密にしておきたい気持ちもあるものですね。しかし、お手紙の様子から

信用のおける方と判断して、御返事を差しあげる次第です。

私は三十二才でA商事に勤めて居ります。プレイは妻を相手に、しばしば行なって居りますが、この所、少々マンネリ気味で、何か

打開策を、と考えていた所です。奇ク誌上で渡部さんや川路さんのカメラハントなどを見るにつけ、私も一つ、辻村氏に御出馬をお願いしようかと考えていた矢先でした。なお、妻は二十九才で、幸か不幸か子供は居りません。

SM趣味には、かなり個人的な好みが強いですから、一度ゆっくりお会いして、若し意見が一致するようでしたら、御一緒にプレイを致しましょう。電話番号を書いておきますので、御連絡をお待ちして居ります。

大塚 精一

大塚氏からの手紙を前に、そわそわしながら色々なことを同時に考えるので、一向に考えが、まとまらなかった。私は女房以外にも多少のプレイ経験はあるが、夫婦プレイに割り込むのは初めてであった。そして今までの相手は、いつも本当のMではなく、おつき合いに過ぎなかったり、飼育する所まで行かなかったり遠慮しすぎたりで、どうもプレイを堪能したという気分になれなかった。それで私と同じような立場の人の中にも何人も居ることと思ひ、一寸した偶然から大塚氏に手紙を出し、今、その返事を手にした所だっ



た。ただ大塚氏もいうように、同じSM趣味にも、色々な派閥があり、それが一致しない、全く興が乗らないこともあるし、更に大事なこととは、お互いに社会人としての生活があるので、それを乱さない良識のある人ではないと危険でしょうがない。こういう趣味に便乗して、かなり悪どいことをする人もいるよ。うだし、悪意がなくても、思慮分別が足りないために、結果として迷惑をかける怖れもある。さらにまた、相手が偶然、知っている人だったりすれば、バツの悪い思いをしななければならない。そんなことを考えていると、ついお病になっちゃうのも止むを得ない。

大塚氏が私の手紙を見て、私が果してどんな人間か心配されただろうし、返事をくれるのを、ためらったであろうことは想像に難くない。が、とにかく大塚氏が私に電話番号を教えてくれたのは、一応、私を信用してくれたことになるが、私を信用する根拠は、さしてなかったのだから、彼としては、かなり思い切った賭をしたことになる。

とにかく、私は彼に電話をかけて連絡をと、都内のある駅のホームで待ち合わせることにになった。

冬の土曜日の午後、私は約束の時間に遅れまいと、あまりに早く出掛けすぎ、三十分も早く、約束の場所についてしまった。そこで一旦、改札口を出て、近くの喫茶店で時間をつぶし、もう一度、ホームに登って行った所今度は約束の時間に五分、遅れてしまった。お互いに相手が、どんな人物か神経を、とがらせている時に、五分、遅れるのは、不味いなと思いつながら、大塚氏と覚わしき人を探した。ホームに入っていた電車が発車すると、人の波が、ぐっと流れて行ってホームが一瞬空になる。するとベンチから、つつと立ち上がった中肉中背の紳士が、こちらを向いているので、

「佐川ですが、大塚さんでしょうか」

と、やや咳込んで尋ねる。相手は、私の上から下まで素早い目を送りながら、一呼吸遅れて、

「大塚です。佐川さんですね」

「最初から遅刻してしまって、申し訳ありません」

「いやいや、私も丁度、今来た所です。じゃまあ駅を出て、喫茶店にでも行きましょう」大塚氏は先に立ってスタスタと歩いて行った。おそらく彼は時間通りか、あるいは少し

前から来ていたのだろう。私は彼の後を追いつながら、この人は几帖面でキビキビしているが、思いやりのある人らしいと感じた。「やあ、どんな方かと、気にしていたんですが、案外ソフトな方なので安心しました。自称ロマン派といわれるのが、うなずけるような気がしますよ」

「どうも、どうも。私のロマン派っていうのは、あまり思い切ったことが出来ないという自嘲の意味も含んでいるんですよ。私の雑文を、お読みになりましたか」

「ええ、二三、読ませて頂きました。よく読むと、なるほど御もつともで、味もあるんですが、ああいう短いのは、つい見過ごしてしまいますね。何か長いのを、お書きになったことは」

「大分、以前に『マヤの黄昏』とか『L・T商会』などというのを書いたことがあるんですが、多分、御存知ないでしょう」

「L・T商会っていうのは読んだような覚えもありますが、たしかMの女を商品にして売り出すといったような筋でしたね」

大塚氏は、大分、古くからの奇ク愛読者のようであった。

土曜日の午後とあって満員の喫茶店で他の



お客に気兼ねしながらも、だんだん話が弾んで来た。しかし、あまりきわどい話も出来ないで、その日は適当に話を切り上げ、お互いに名刺を交換し、再会を約して別れた。彼の名刺には営業係長としてあり、彼の快活な話しぶりと、いかにも似合っていた。私の名刺には公務員としての職名が入っており、いささか愚図で臆病だが、無害な人間であるという印象を与えたようだった。

その数日後に鮎屋の二階で、やや落ち着いた気分で大塚氏と話し合った。今度は周囲に、あまり気兼ねなく、持参したフォトなど、お互いに見せあって熱心に話し合った。

大塚氏のフォトは全部、彼の奥さんがモデルで、かなり激しいものばかりだった。露出度の強いポーズで、きびしく責め立てているものが多く、ロマン派たる私は、少々毒気を抜かれてしまった。私のフォトは女房その他いずれも、局所は何かで隠してあるし、顔もさだかでないものばかり選んで持って来たのだが、彼のは顔も局部も、すっかり写っている。こうなると私は、どうも彼に圧倒されたような気分になり、いささか元気がなくなってきた。

「こういった写真は、どうですか。貴方の縛

りの美学から見て——」

「いやあ、あれはどうも口先ばかりで、実際には、たいした腕前ではないんですよ」

大塚氏は年長者たる私に敬意を表してか、彼のフォトの批評を求められるが、なかなか適確な批評も浮かんで来ない。まあ、一つ二つ、気のついた点を喋って、お茶を濁すばかりだった。例えば、仰臥して膝を曲げて縛りその膝を大きく左右に開かせてあるフォトで足首だけでなく足（フット）そのものにも縄をかけ、その縄が開股の役割を有効に果たしているのは、私の美学と全く一致するとか、太い縄と細い縄と一緒に使う時は、細い方を上半身に、太い方を下半身に使って、両方があまり、からみ合うのは、よくないといったようなことである。

強烈な大塚氏のフォトに引きかえ、私のフォトは縄配りはキチンとしているし、ポーズやライティングにも細かい配慮は払ってあるが、いかにも線が細く厳しさが足りない。どうも迫力からいって、第一ラウンドは私の敗北を潔く認め、私を大塚氏の助手として採用して欲しいと申し入れた。実は、心ひそかに私は縛りのデザイナーとして売り込むつもりだったのだが。

大塚氏も、私をもっと期待していて、御指導願いたい、といった感じを持っていたらしく、少々期待外れだったかも知れないが、しかし、それでも、お互いの好みが、それほど違わず、つまり同じ派閥の人間だということがわかったし、私がいささか強引な男でないことを安心したのか、次の土曜日、彼の家に招待してくれた。

その日は寒い日だったが、朝から、そわそわしていた私は、昼食もそこそこに、とび出して行った。その日の電車は、いやにスピードが遅かった。私のバッグの中には、手土産に以前、私が作った部厚い木製の手枷と足枷が入っている。その外、愛用の黒い紐と手拭いとカメラ、ストロボなどで、バッグはち切れそうに膨らんでいた。

少々探して、彼のマンションに着いたのは丁度、約束の時間だった。ベルを押す手が震え、心臓の動悸が自分で、よく解った。一瞬このまま帰ってしまおうかと思ったが、その間もなくドアが、さっと開いて、大塚氏が顔を出した。

「順子、お客さまだよ」

大塚氏が奥に向かって声をかけると、ハー



イと声が出て、大塚夫人が現われた。

「ほら、お待ちかねの佐川さんだよ。こちら家内の順子です」

「順子です。どうぞ、おさがり下さい」

伏し目勝ちに、小声で挨拶する大塚夫人を一目みて私はハッと息を呑んだ。あの有名な梨花悠紀子に、そっくりだったからである。

梨花さんは、東京に出て結婚したときいてるので、ことによると大塚夫人は梨花さんその人ではなからうか、と、ふと考えた。

立派な応接間に通されると、挨拶もそこそこに、

「綺麗な奥さんですね。梨花悠紀子さんに、そっくりじゃないですか」と尋ねた。

「佐川さんも、そう思いますか。いやあ実は私が惚れたのも、梨花悠紀子によく似ているもんで、こいつはマゾっ気があるな、とピンと来ましてね。それから無理矢理、くどき落として一緒になったんですよ。女房は、あとでそれを知って、私は梨花さんの代用品ですか。って、えらくすねてましたけどね。しかし何ていったって結婚してしまえば、こっちのもので、いいように飼育していますよ」

「子供さんがいらっしやらないと聞きましたか、作らないんですか」

「いやいや、私は谷崎潤一郎みたいに、女房をいつまでも、きれいに独占しておきたいから子供を作らせないというわけじゃないんです。作ろうとしてるけど出来ないんですよ。」

女房は私が道楽でもして、悪い病気でもあるんじゃないかと、セックスに誠意が足りないとか文句をいってますがね。悪い病気はしてないですよ。正直の所、私にとってセックスより、SMそれ自体に、より興味が深いもんで、ついセックスが、つけ足しになってしまふんですね。お宅では、どうですか、その辺の所は」

「そうですね。その感じは分かるんですけどね。でもSMだけに徹し切れないんですよ。」

それに女房にもサービスしてやらないとね」

「佐川さんの奥さんはMですか」

「痛い質問ですね。M傾向はあるし、別に嫌がりはないけど、どこまでMか。本当の所は、ノーマルに近いんでしょうね。それが、こちらに解ってしまうもので、つい不徹底になるし、サービスも、しすぎてしまふんでしょうね」

「佐川さんの写真には、そういう感じが出てますね。少し大事にしすぎているな。その点私の所は大分、徹底してますよ。セックスそ

のものは生殖のための行為で動物だってやることだ。SMは生殖をはなれた、もっと高次元の行為で、もっと精神的に高度のものであるとか、なんとか理屈をくっつけて、私の好きなようにやっています。それに順子は確かにMですよ。それでなきゃ、私以外の第三者つまり貴方がプレーに参加するのをウンというわけがないですよ」

「奥さんが、よく承知しましたね」

「ウンというまで徹底的に責め上げたんですよ。一寸、待って下さい」

彼は立ち上がるとカセットテープを、もって来た。スイッチを入れると、すぐに順子夫人と大塚氏の声が、とび出して来た。

「いいいます。いいいますから、許して。順子は、あなたの奴隷です。本当のマゾ女です」

「もっとその先をいうんだ」「今度の土曜日に、佐川さんという人の前で、うんと虐めて下さい」「どんな風に虐められたいんだ。はっきりと試してみろ」「やめて、痛いっ。いいいます、いいいます。あの、あの逆さ吊りにして下さい」「それだけか」「ああ、やめて。あの、あの、ローソク責めも、して下さい」「それから、どうするんだ」「もう許して、ね」「ローソク責めの前に、やっておかなければ」



----- イメージギャラリー 『目隠し?』 小川 茂正 -----



ればならないことがあるだろう」「それは嫌  
っ。許して」「甘ったれても駄目だ。誰も助  
けには来ないぞ。それっ、はっきりといって  
みろっ」「あっ、痛い。痛たたっ。許して」  
「そんなら、はっきりいうんだ」「ていもう  
して下さい」「もっと、はっきりといってみ  
ろっ」「剃毛して下さい。あああ」「とい

うわけなんですよ。今日は、たっぷり責めて  
やりますからね。乞う御期待という所ですか  
ね」

大塚氏もテープを聞いているうちに、だん  
だんとハッスルして来たらしく、遠足に行く  
前の小学生のように、浮き浮きした表情で話  
が弾んだ。

私が手土産代りに持参した木の手枷と足枷  
を進呈すると、大塚氏は思いの外、喜んでく  
れた。

「私も鉄の手錠は持ってるんですけど、木の  
は持っていなかったんですよ。頂いていいん  
ですか。それじゃ早速、はめてみましょう。」

「おい、順子。一寸、来てごらん」

順子夫人が、ビールやら、おつまみやらを  
持って部屋に入ってきた。

「何を、ぐずぐずしてるんだよ。遅いじゃな  
いか。ほれ、みてごらん。佐川さんが、こん  
ないもん、くれたぞ。一寸はめてみろ」

さすがに初対面の私の前で、恥かしそうに  
首を、うなだれて真赤になっている夫人の両  
手をつかむと、手枷の間にはさみ、錠をピン  
とおろしてしまった。細い手首に重く大きい  
手枷が、いかにも痛々しい感じだった。

「足枷は、もう少し、かんべんしておくが、  
その手枷があっても、台所仕事位、出来るだ  
ろう。しばらく、そのままでもいいさ」

だまって立ち去ろうとする奥さんの腰に腕  
を回すと、大塚氏は自分の膝の上に夫人を抱  
き上げ、長い髪の毛を荒々しくつかむと、無  
理に頭を上げさせた。

「ほら、佐川さんに、ちゃんと顔を見てもら



いなさい。お前を美人だって、ほめてくれたんだから、今日はお礼に、うんと恥かしい責めを、お見せするんだよ。わかったな。どうです、佐川さん。こうやって髪をあげて、おでこを出すと余計、梨花悠紀子に似ているでしょう」

なるほど、本当によく似ているとは思いますがそれでもよく見ると、順子夫人の方が髪のが長く、全身に柔らかみがあり、乳房も大きく、心持ちグラマーではあった。

「あつ、嫌っ」

順子夫人が声をあげるのもかまわず、大塚氏は自分の両足を使って奥さんの両足を上げ、藤色のミニスカートを、まくり上げた。なんとそこには金色の貞操帯が、白い素肌にピシッと、はめられていた。

「これを外すのは、後のお楽しみとして、もう少しアルバムでも見ていて下さい」

夫人が逃げるように出て行ったあと、彼が持って来た五、六冊のアルバムを熱心に眺めていた私は、折角のビールも一向に、はかどらなかった。さすがに初期のフォトは、着衣のものや、縛りのゆるいものが多かったが、その後、だんだんと、きつい縛りに代り、ポーズもハレンチになって来た。それと共に夫

人の身体も、しだいに、なまめかしく成熟して来て、表情もエクスタシーを、たたえるようになって来る。

「奥さんは、本当のMになって来たようですね。それにエクスピシヨニズム（露出欲）もありますか」

「ええ、そうなんです。始めは嫌がっていましたが、今はかなり強いんですよ。Mでエクスピシヨニズムの女は、かなり多いんじゃないですか。奇巧のモデルでいえば木村洋子とか中河恵子なんかは、そういう傾向がありますね」

あの消え入りそうに楚々とした順子夫人にそんな傾向があるとはとても想像出来ない。

「まず磔をやりましょう」

大塚氏は楽しそうに、今日のプランを話し始めた。

「今までに何回もやったんですが、佐川さんのフォトを見て、一寸、発奮したんですよ。私のは、いつも床柱を利用して即席の磔を作っていたんですが、あれじゃ駄目ですね。今日は角材を使って本格的に作りしました。縛るのは佐川さんに、まかせます。貴方の方が丁寧だから……。ええと、それから私流のM字開きにして剃毛し、最後に逆さ吊りをやり

ましょう。逆さ吊りは一人じゃ、なかなか大変ですからね。誰かに手伝ってもらおうと、前々から考えていたんですよ」

今日は、私はあくまで助手の立場でアシストするつもりだったし、彼も主導権は渡したくないようだった。それでも私の縛り方に多少でも敬意を表してくれるのが嬉しかった。

あたりは、まだ明るかったが、大塚氏はカーテンを閉めると、

「ボツボツ始めますか」と立ち上がった。

隣室は床の間つきの八帖の和室で、そこには、もう磔柱と覚しき角材が置いてあった。

「大体、こんな寸法で、いいですか」

「ええ、まあ。この股木の位置は奥さんの寸法に合わせましたか」

「ええ、大体、合わせたつもりです」

「足の横木との間隔も大丈夫ですか」

「実は、さっき貴方がくる前に、乗せてみてきめたんですよ」

「それじゃ間違いないでしょう」

「それで柱は、どうやって固定します」

「それが一寸、困ったんですがね。結局この床柱に支柱を打ちつけて、支える事にしました。これに傷をつけるのは一寸、惜しいんですけど、SMのためには仕方ありません」



私の家は木造の住宅なので畳を上げ、床板と地面を利用して上手く簡単に固定出来たがコンクリートの家では、そうもゆかず、やたらに釘も打てないので、大事な床柱に釘を打つ破目になったらしい。

礎柱が固定されると、彼は私をそこに残して、出て行った。私は、これからのプレイにワクワクしながら、カメラにフィルムを詰めたり、ストロボのテストをしたりして、待っていた。

間もなく、ふすまが開くと、大塚氏が順子夫人を引つ立ててお仕置部屋に入ってきた。夫人は白い、よれよれの囚衣を着せられ、真白の新しい目隠しをされ、さきほど私が進呈した木の手枷を後手にはめられた上に、足枷までかけられて、いかにも歩きにくそうに、オドオドと入ってきた。

「そこに坐るんだ」

大塚氏が、どなったが、足枷が邪魔で、なかなか坐れない。

「早くしないかっ」

彼の怒号で夫人は、やっと正座したが、足枷にはさまれた可愛いらしい足が、いかにも痛そうだ。私なら、そっと抱いて坐らせてやる所だが、とにかく今日は彼にペースを合わ

せて黙って見ていた。

「お奉行様。こいつがキシタンのお順と申す、したたか者です。どうぞ、お裁きをお願いします」

急に彼は芝居がかった声を出し、夫人の頭を押えつけて平伏させた。

「さようか。どうしても転ばぬ、しぶとい女キシタンとは、こやつのことか。美しい女だが、止むを得ぬ。諸人の見せしめのため、磔にせい」

私は、あわてて調子を合わせたが、ふっと我に返ると、カメラをかまえて、キチンと正座している順子夫人にストロボを二、三発、光らせた。

「あっ、私のカメラにも、撮っておいて下さい。自分で写しているとプレーの流れが中断して面白くないのでよろしくお願いします」

彼のマミヤプロCをとり上げると、こちらも低いアングルから一発、写した。

彼は夫人の胸をはだけて乳房を、いとおしそうに愛撫したり、口づけしたりしていたが間もなく磔にとりかかった。

「佐川さんの磔の縛り方を教えて下さいよ。縄は沢山ありますから一つ、びしびしやってみて下さい」

驚いたことには、彼は荒縄を一巻き、持ち出して来た。

「これじゃあ、痛くて可哀そうですね」

「佐川さんは甘くて駄目だな。緊縛師は情無用でビシビシやらなくては困りますよ」

お奉行様は、いつの間にか緊縛師に早替りしたが、そうまでいわれて、ためらってばかりはいられないので、思い切って荒縄に手をかけた。

囚衣は後から脱がせるとして、先ず下の横木に足をかけさせ柱に乗せると、両手を広げさせ手首から、くくり始める。

「縄は重ねちゃ駄目ですよ。きちんと並べて三回、巻いたら止めて下さい。余った縄尻は短く切って、垂れ下がったりしないように、そうです、それで結構です」

大塚氏と左右に分かれ、順子夫人の手首、肘、肩と、きびしく固定していった。次に柱の後から首に回した左右の縄を結び合わせ、斜めに腋の下から柱に回して、更に乳房の上を一巻きした。乳房が縄に挟まれたのか一瞬ビクッとしたが、声は出さなかった。

次いで乳房の下から胴にかけて、一々切り縄を使って柱に、かたく縛りつけたが、私の好みに従って、へそのあたりを中心にして、



やや大きめの菱形を作った。次は足を縛るのだが、これは横木の上に足を載せて縛ったのでは、女囚が余りにも安楽そうで感じが出ないので、足の土踏まずのあたりに縄をかけ、その縄を、ふんばって立つように横木に固定

した。

その際、あらかじめ測っておいた寸法よりも、女囚の身体が重みで下に下がったのか股木の位置が高すぎて、局所にかかりの重量がかかってしまったが、女囚の身体には先刻の



僕のイメージ画集

『強要された反省』

室井 亜砂路

貞操帯がつけられていたのが多少の救いになったようだ。太股の付け根にも縄をかけ、外側に引き上げるように柱に結びつけたが、荒縄のトゲトゲに擦られて、青白い肌が赤くなり、いかにも無残な感じだった。

最後に囚衣の胸をはさみで切り開き、その囚衣を、たばねて古式のように三箇所を縛って、充分に乳房を露出した。両手は水平より少し上に上がり、まさに我ながら上手く縛れたと思う。更に美しい女囚が荒縄で、ひしひしと大の字に磔られ、恥かしそうな、それだけで、あきらめ切ったような悩ましい表情を浮かべている姿は、エロチックというよりは神々しいばかりの美しさであった。

私は自分のカメラと大塚氏のカメラを交互に使って写しまくったが、何せ大塚氏のカメラは十二枚しか撮れないので、フィルム交換の時間が惜しくてならなかった。その間、大塚氏はゴルフのクラブを持ち出すと、それを槍に見立てて、哀れな女囚の身体中の、あっちこっちを突き廻していた。

そのうちに、腰の貞操帯を外しにかかったが、この貞操帯たるや、内側に皮製の十纏ほどの突起がついている、いかにも苛酷な代物だった。さすがに温和しく女囚になっていた



順子夫人も「嫌っ、嫌っ」と叫んだが、こう嚴重に、くくり上げられていては、身もだえすることさえ出来なかった。その上、大塚氏は夫人の目隠しを外すと、その代りに口の中にガーゼを、たつぷりと詰め込んで、その上から目隠しの白布で猿轡をかけてしまった。

鼻まで覆う猿轡に、大きな瞳が一層、大きく見ひらかれ、涙が流れているのか、キラキラ光っていた。大塚氏は、竹の物差を持ち出すと、それで乳房や太股をピシリピシリと叩き始めた。手加減はしているのだろうが、それでも、いかにも痛そうな音をたてるし、女囚も猿轡の下から「ウッ、ウッ」と声をあげるので、私はハラハラしながら見ていた。最後に、大塚氏は、僅にまといついている囚衣を破いて、むしり取ると、全裸の女囚の全身にキスの雨を降らせて行った。

柱から解き放すと、順子夫人の身体には縄目の跡が、赤く刻み込まれ、荒縄のトゲトゲの一つ一つが、くっきりと残っていた。さすがに順子夫人も、ぐったりとしているので、一時、刑の執行を猶予して、その間に夕食を御馳走になり、入浴をすませた。

順子夫人は、入浴してまだ湯気の立っている裸体をバスタオルに包んで、お仕置部屋に入って来た。まだ先程の縄目は消えずに残っていた。

今度は私の持参した黒縄で上半身を菱縄に縛った。首と乳房の間に小さな菱形を一つ、その下の乳房の谷間を頂点に少し大きな菱形の菱を連結する。乳房を上と下から挟んで横縄をかけ、上腕にからんでから背後に回す。背部にも菱形を一つ作る所に、一寸した私の工夫がある。この紐と、この縛りは、いつも女房にほどこしているもので、手際よく縛ることが出来る。上半身を縛り終えた所で大塚氏とバトンタッチする。

彼は高さ十巾が三十糎、長さ六十糎ほどの革張りのストールの上に順子夫人を仰向けに寝かせた。小さなストールなので頭は外れて首がガクンとなった。

後手が背中にあたって胸から腹にかけて弓なりに、そり返った。大塚氏は、やや太目の麻縄を用いて、片足ずつ折り曲げて足首とも上腿とを、きつく縛り合わせた。次に土踏まずに縄をかけて縛ると、ストールの下をくぐって反対側の足に結びつけて、ぐっと引っばった。両足は上から見ると、Mの字型に一杯

に開かれてしまった。さすがに夫人は、痛さと恥かしさに、うめき声をあげたが、大塚氏は一向にゆるめようとせず、そのまま縄尻を固定した。縄で締め上げられた乳房は天を向いて息づいていたし、太股に喰い込んだ縄は蛇のように女体を責めさいなんでいた。

「佐川さんは、口に脱脂綿を詰めるのが、お好きでしたね」

大塚氏は、私の書いた、つまらぬ雑文までよく読んでいるようで、私の趣味にまで気をくばってくれる。夫人の頭の所に椅子をもつて行き、そこに浅く腰を下ろすと、自分の両足で夫人の頭を、はさみ込み、脱脂綿を千切って夫人の口にギューギューと詰め込んだ。

夫人は首をふって、もどえるが、大塚氏の足で頭を、はさみ込まれているので、どうしようもなく、たつぷりと脱脂綿を詰めこまれてしまった。大塚氏はウイスキーを持ってくると、ビンからラッパ呑みに口に含み、それを口うつしに夫人の口に注ぎ込んだ。ウイスキーは脱脂綿に黄色く、しみ込んで行った。その上から豆絞りの手拭いで、きつく猿轡をかませ、予定に従って剃毛に、とりかかった。

大塚氏は、いかにも、いとおしそうに、電



気カミソリやら安全カミソリを使って、丁寧に剃り上げていった。その間、私は、ひたすら、あらゆる角度から写真を撮ることに没頭していたが、出来ることなら、大塚氏と役目を交代したかった。

かなり長時間をかけて剃毛が終わると、いかにもスベスベして少女の如く清潔な美しさになった。今までの、ひどく淫らなポーズが一変して塑像のように美しく見えて来た。

大塚氏は私の存在を忘れたように、次から次へと、あらゆる道具を用いて女体を、なぶり尽した。私は夫人の表情の変化をアップで追い求めていたが、そのことが、夫人のM性を更に、ゆすぶったのか、僅かに動かせる首を気も狂わんばかりに、ふっていた。頭が下がって低くなっている上に、口に含ませたウイスキーの故もあって顔は真赤に充血し、汗が、したたり落ちていた。

彼がズボンを脱いだ時、私は気をきかせて部屋を出ようとしたが、彼は

「いいから、撮って下さい、私のカメラで」と叫んだ。私は一寸ためらったが、思い直して彼のカメラをとり上げた。

第二のお仕置のあと、一服して、すぐまた

最後の逆さ吊りに、とりかかった。

順子夫人は、もうすっかり参ってしまったようにグッタリとしているが、大塚氏は、フアイト十分の様子だった。

「SMっていうのは、むしろSの方が疲れるんですよ。まだまだ大丈夫です。いつも、もっと、こっぴどくやるんですから」

大塚氏の声にはげまされて、夫人の両手足首に、それぞれ長さ二米ほどの太い青竹をとりつけ、柔らかな赤い、しごきを使って、大の字に縛りつけた。軀幹には一切、縄をかけなかった。スベスベした全身が余す所なく、さらけ出され、夫人は放心したように、ぐったりと、されるままになっていた。

床柱の一番、上部に滑車のついた腕木をとりつけ、足を開かせている青竹の中央に動滑車を結びつけ、そこに太目のロープを通す。

大塚氏が夫人を逆さまに抱き上げると、私がロープを、どんどんと、たぐった。一人で逆吊りをするには容易でない悪戦苦闘を強いられるものだが、二人がかりでやると、あっけない位、簡単に出来てしまった。ロープのよじれで、逆さに吊られた女体が、ゆるく回転するが、滑車と動滑車が、くつつく位、高々と吊るし上げているので、ロープの部分は

短く、はげしくは回らない。ここで、またもや私は、カメラに専心することになった。

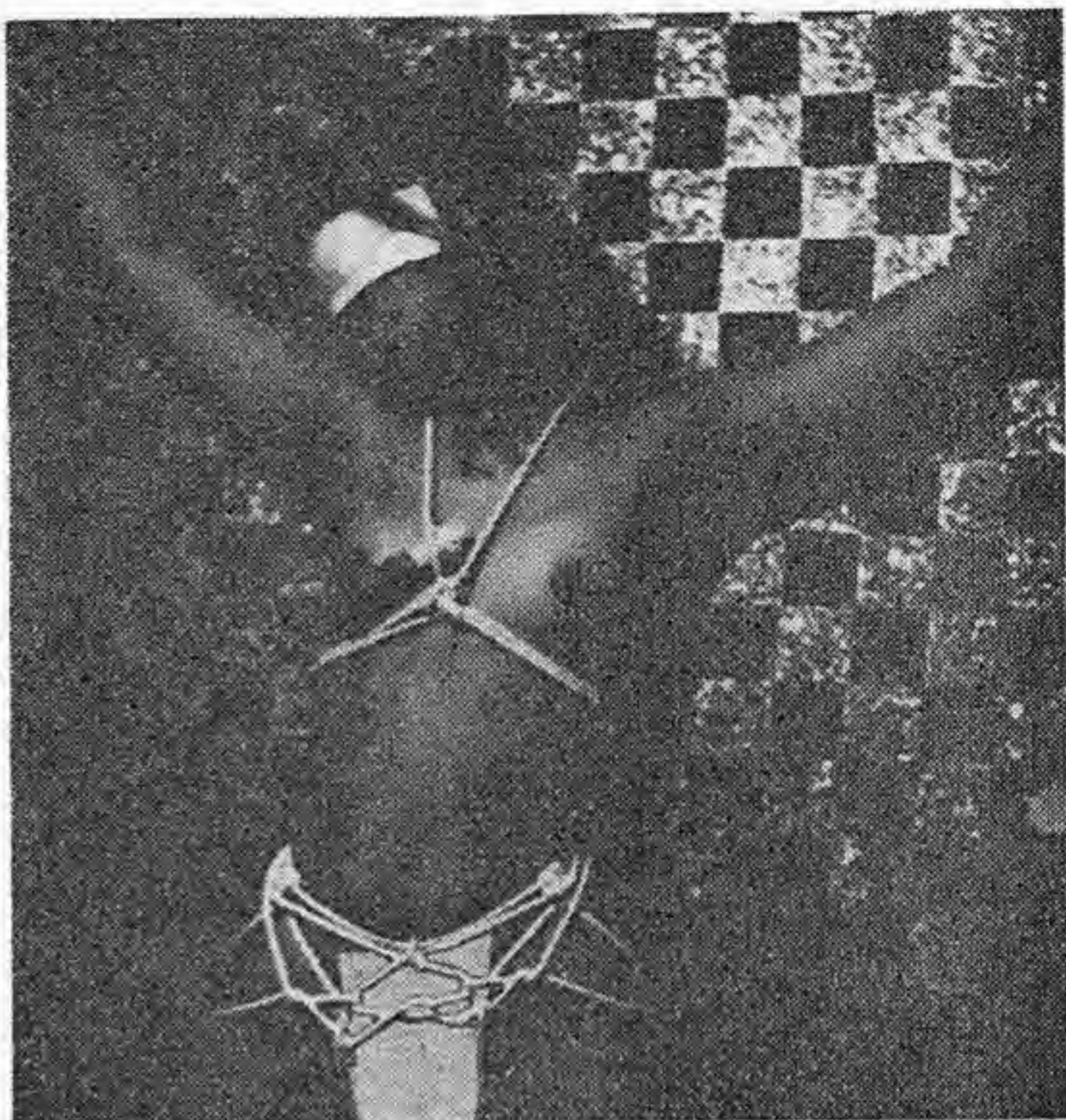
大塚氏は、クリスマス用の太い金色の、ねじれたローソクを大小二本使った。ローソクに火をともし、電気を消すと、二本のローソクの淡い光の中に、逆さ吊りの女体が浮かび上がった。苦しいのか熱いのか、或は嬉しいのか、おさえた、うめき声とともに金色のローソクがキラキラと輝きながら、前後に二筋、流れて行く。

私は夜更けて寒い道を家に向かっていたが大きな満足感と同時に、大きな欲求不満とがごちゃごちゃになって、何か口の中でブツブツといいながら、やけに足早に歩いて行った。家が近づくにつれて、大塚氏と次回はSMスワッピング（夫婦交換）をやろうと約束して来た私は、どうやって、それを女房に納得させたらいいか、少々ゆううつになって来た。

△追記▽

奇巧の箕田氏から紹介を受けて、夫婦SMプレイを実行しておられる、ある読者の方と知り合うことが出来て、その告白を書いてみました。実際は、こんな文章を読んで頂くより数枚の写真を、お見せする方が、ずっと興味深いことは、百も承知なのですが、何分、大塚氏の許可を得られないので残念です。どうぞ、御了承下さい。





~~~~~△手

記▽~~~~~

仮M性から

本M性へ

齊藤 清

ごくありふれた真面目な女性でした。

ふとしたことから知り合い、何度か飲み歩く内、新宿のスナックバー「昆」に誘う

ことにしました。

始めて投稿させていただきまず。本誌を手にしたのは、4年程前のことでした。商用で大阪へ出かけ、本屋の店頭で見かけたのが、きっかけとなり、現在までずっと愛読しております。

ここにお話します体験は、私にとっては三人目のM女性ですが、以前の二人の女性とは違い、彼女はSMという言葉さえ知らない、

た。彼女は私の腕をしっかりと握りながら、そのプレーに見入っているのです。

そういう彼女のM的反応が、その時、私には正確に観察できたのでした。それから数カ月は、彼女へのM性飼育に適した知識を徐々に与えてゆくことに私は努力しました。

私は、まだまだSMについての経験は浅い者ですが、一人の女性をMに育てることの出来るチャンスに恵まれたことは幸いでした。

毎月のように奇クを読ませ、女体緊縛フォトを見せ、SMプレイの良さを理解させることに懸命でした。そして、いま、奇ク編集部のご好意で、ここに投稿できるようになりました。

土曜日の夜、十二時頃。まだ店内は客もまばらで、なんとなく白けたムードではありましたが、そこにあるSM用品を見せたり、私の知る限りのSMの話をして、彼女のM性を観察していました。そのうち、客も次第にふえてきて、いつの間にかフロアーでは、女性二人と男性一人のプレイが行なわれていまし

したが、まだ完全にMになりきれないため、フォトの撮影をいやがり、そのためライトも使えず、その上、写真技術の未熟のため、ピンボケとなりましたことを、お詫びいたします。

4月4日、新宿で待ち合せ、二軒ほど飲み歩いた後、プレーの出来る広さを持つホテルを探し、そこでプレーすることにしましたが以前の女性と違い、私はきっかけを掴むのに困ったものでした。以前の二人の女性は、経験も豊かだったので、私もSMプレーを始めよかったです……。

いろいろ迷ったあげく、風呂に入り、ありきたりのセックスプレーから始まり、ムードが盛り上がった頃、ユカタの帯で縛り始めたものです。彼女も、ある種の期待と心の準備があったものらしく素直に従ってくれたのでした。帯紐からロープに変わり、胸部緊縛、海老型開脚縛りなどを試み、その若い肢体の縄による反応を楽しんだものです。

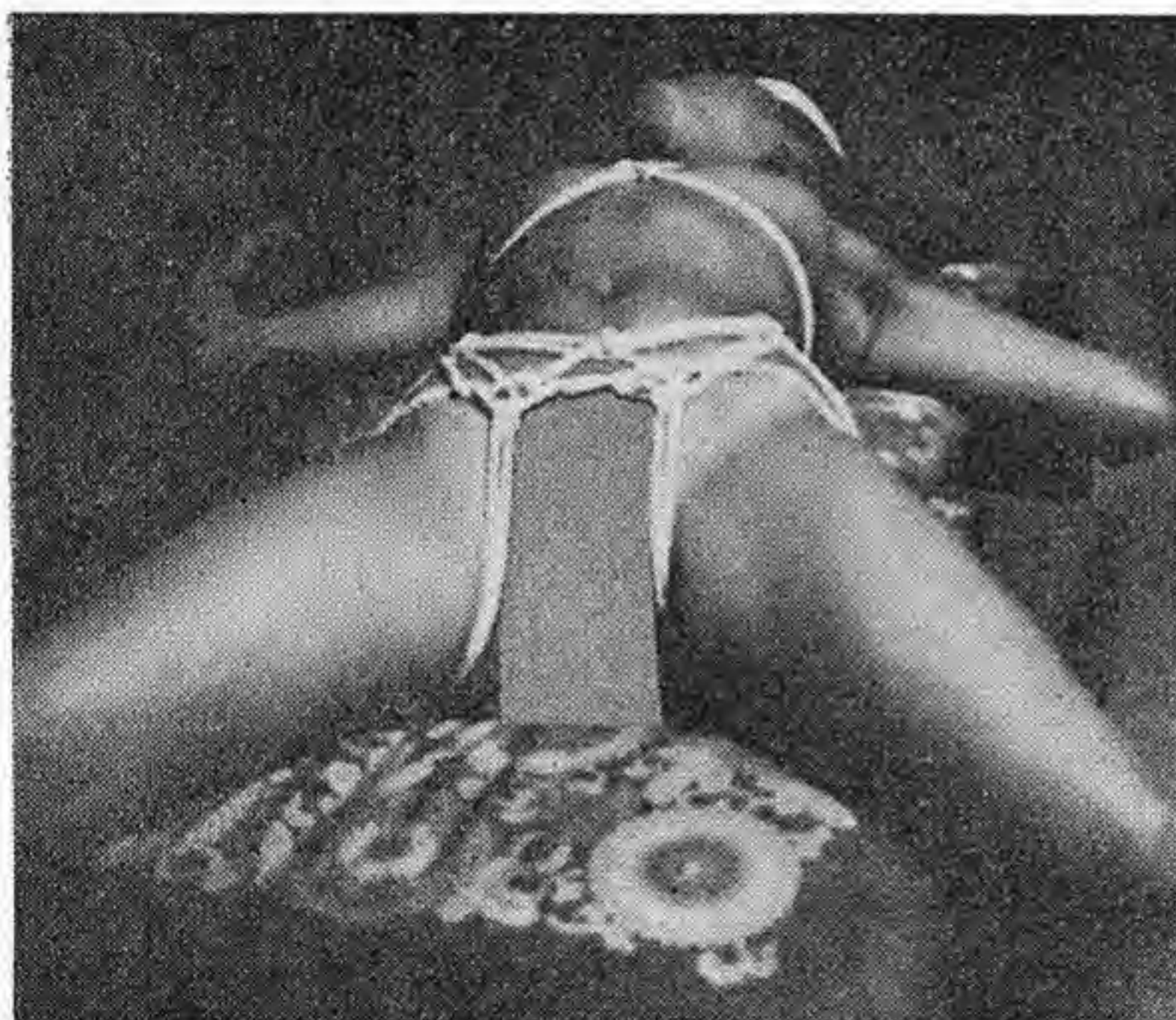
細いロープがキリキリと喰い込んでいる図は、とてもとても美しく見事なものでした。

まだ十九才になったばかりの、その全裸の姿態の中でも、美しく豊かに発達した双丘は私の眼を見はりました。薄暗いスタンドの

灯に照らされてツヤツヤと妖艶に光る乳房はもう熟しきった果物のように、果汁のしたたるばかりの素暗しさです。

小型パイプでの乳房への責め、そして脇腹に沿って発達しすぎたような豊かな双丘へ。

いままで経験したことのない微妙な振動に彼女は酔いしれているようでした。



襦を背にして大の字にハリツケて、乳房を上下から縛り、腰にはアミ目のスキャンティのように縛り、目かくしをして、彼女の羞恥心をくすぐり、M性がどこまで育ったかを見たのです。その時の呻き声、その今にも失神しそうな声に、私もびっくりしました。

「SMという言葉すら知らなかった小娘が、たったこれだけの事で、歓喜の声を、これ程にまであげるのか。この女は、きつと、いいM女になるに違いない」そう思った私は、30分程責めあげた後、襦ハリツケから解放し、休む暇もなく、テーブルの上で仰向けに手足を縛りつけ、パイプと羽毛とで責めてみたのです。

今夜が始めてのプレイですので、痛い目に合わすと恐れをなして、あとのプレーにさしつかえらると思ひ、座布トンを敷き、縄目も少し緩目にしておきました。

羞恥心の強い女性にとって、よし、それが薄暗い灯の下であったといっても、女の一番恥かしい場所を男の目の前にさらけ出すということは、堪えられない事だったと思います私の狙い

は、もともと羞恥責めなので、今こそチャンスだと考え電燈のスイッチをつけたのです。

目かくしはされていたとはいえ、今まで薄暗かった室が、いきなりパツと明るくなったのですから気がつかないわけがありません。

「イヤ、イヤ、電気を消して……」

彼女は泣くような声を出しています。なんと可愛いではありませんか。なんと素敵な事ではありませんか。

羞恥責めの最中に、恥かしいから暗くしてと頼んでいるのです。羞恥責めをするのに、相手が恥かしいと思わなければ、なんの楽しみがありませんか。

私は彼女の頼みにも拘らず電燈を明々とつけ放したまま、これから本番とばかりに、小型パイプばかりか、家庭用一〇〇ボルト使用の大型パイプも取り出しました。皆様も御存知の通り、大型パイプの振動力は相当強烈なものです。

堅く締まった乳房が、ブルブルブル……と大きくふるえるように動くのです。強く押しつけ、時には、かするようにソフトに……。

ツンと上を向いた乳首が、まるで別の生き物のような微妙に動くのです。小型パイプの方は、それ本来の場所へ安住して（写真撮影）

私の手元をはなれて活動しています。

激しく上下する腹部、そりかえる足先、なにやらのわからぬ事を叫び出している開かれた口。それは、この世のものとは思えない程、素晴らしい眺めでした。

私は、心の中で叫んだものです。

へもっとさわげ、もっと泣け。そして本当のM性になるように、体自身におぼえこませるのだ。それ泣け、部屋中に、お前のその泣き声がこだまするように……V

私は、まだ若い。SM人種では、まだまだ子供扱いされる年です。なぜかわからないが年が若いと、どの店でも、「嫌なガキが来た」と言わんばかりの顔をするような気がします。年が若くても、本気で、SMを愛する者が居るという事を知って欲しいものです。

もしかすると、現在のSM愛好者は、若いマニアを迷惑視するところがあるのではないのでしょうか。たしかに、そうかもしれませんね。私とて、自分より若そうな者が本屋の店頭でSM書を、まるでポルノのような気持ちで立ち読みしているのを見ると、むしろ腹が立つのですから不思議なものです。

私は25才、自営で商売をする青年です。SMを楽しむことは、確かに金もかかるし、暇

もいります。とても贅沢な趣味だと思いますが、私のような童顔では、SM用品の人も、私が書店の店頭で立ち読みする若者を見て思うことと同じような考えかもしれません。

話がとんでもない方へ、それてしまいました。だが、本文に戻らせてもらいます。

私の手から逃げるように、入りこんだ小型パイプに、私は少しとまどいを感じました。

その後、私の舌の洗礼とか、彼女のオシャブリとかを経て、その夜のプレイは終わりました。私にとって、SMプレイはセックスの為のものではない事をよく承知しています。しかし、彼女からの求めもあり、セックスプレーと化したことは、私のSMテクニクの未熟を証明しているものだといえに反省しております。

この体験は五カ月前のことであり、その後、数度、彼女とのプレイを経験しております。今では彼女はフォートの撮影も嫌がらず、奇クへの投稿もOKしておりますので、いずれ、その体験も投稿したいと思っています。

今回はM性を知ったばかりの頃の彼女の事を書いてみました。今後は彼女を本当のM性に育てあげてゆき、その報告を再び書かせて頂く事を愛読者の皆様にお約束します。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

窃^{ぬすみ}視^みの愉^{たのしみ}悦^み

喜^き多^た庸^{よう}介^{すけ}

夏草の繁った道路より少しばかり低い空地を、有刺鉄線で囲んで、『売地』と立札をして、「御用の方は……」と、およそ自分には関係のないその文字を丹念に読みながら、ふと顔をあげると、目ざす『若木荘』のアパートの古びた看板が斜め右向こうに目についた。

ハリボテのセメントが落ちて、ツギハギに塗り直したアトのある壁に、建物に比べては異様に大きな看板が先ず目についた。傍にある「空室あり」という文字も、何か風雨にさらされて、うす汚れた

感じだった。

ギーという不快音を立てる扉を開けて、玄関へ足を踏み入れると、外の明るさに慣れた目には、途まどうくらい暗さだった。

暫くして、目が馴れてくると、うなぎの寝床のような細長い廊下が続いているのが目についた。黒く汚れた廊下の床板には、砂がざらざらとこぼれたまま、靴をぬいで上がるのが気持が悪かったが、玄関には受付のようなものもなし、仕方がないので靴下のまま、爪先立つようにして、廊下を歩いていった。一番奥の、そこだけが窓ガラス越しに陽が

射し込んで、やっと字の判読出来る「管理入室」と下手クソな字で書いた紙キレをはりつけた部屋を見つけた。

管理人の奥さんは、若木荘を案内してくれて、ひとくさり述べたてたあとで、ふと私を部屋の中に置き去りにして行ってしまった。

私は、ぐるりと部屋を見回した。

灰色の部屋は、ほこりっぽい匂いで一杯だった。部屋は使い古されているので、どんなに多くの人たちが、出入したかがよくわかる。入口から窓ぎわまで、タタ

ミの上には、うす黒いシミで一杯だ。

毎日毎日、どんなに多くの人の足に踏まれたか、知れたもんじゃない。色が変わるのも、また無理からぬことだろう。

天井も、嵐の空のように、また、夜の川のように暗くなっていた。茶っぽいハメ板も、白い筈の壁も、人手に触れた所は手垢で、うすぎたなくなっている。

それから、フスマにしても、ドアの鍵の所も、窓ぎわの左手のカーテンのあたりの壁のところにしても、どす黒くない所はなく、多くの人々が、煙のようにここを通って行ったのであろう。白いままに残っているのは窓ばかりであった。

私は今宵もまた、他のあらゆる宵々と変わりにように、疲れた体をタタミの上に横たえた。と、私のすぐ耳のわきで鼻唄が聞こえるのに気がついた。

手で窓枠の端をつかんだまま、私は不思議な靈感に押されたように、思わず起きあがり、目をパチパチしながら、どこということなしに、あたりを探してみるのだった。

歌は依然として続いている。

私はどうしても、それから逃がれるこ

とはできない。ぐるりと首を回してみる。

歌は隣の部屋から聞こえてくるのだ。

どうして、あんなに、他の音を混じえずに不思議なほど間近に聞こえてくるのだろうか。

私は隣の部屋とのシキリになっている開け放した押入れの壁を見つめる。そして、驚きの叫びを、わずかに押し殺したのであった。

天井の近くで、壁と柱の間から、歌が降ってくるのだ。壁に裂け目があって、その穴から光が真っすぐ私の部屋に、さし込むのだ。

私の前の人が置いて行った四角い木の箱の上にあがった。そこにつつ立って、壁に手をあててみると、顔が、その割れ目に届くではないか。巧ちはてて乾ききった壁土。曲がってしまった柱。その柱から、壁土が離れ、手のひらほどの隙き間が出来ているのが、そこが窪んでいるので、下からは見えなかったのだ。

私は、じっと見回してみる。私が見ている隣の部屋が赤裸々な姿を、私の前に見せている。私の前にひろがっている部屋で、歌声の主は八帖間ほどの部屋の窓のそばで、箒を片手に息抜きをしているらしい。

彼女はたった一人で私のすぐ近くにいます。

さきほどの管理人の奥さんの娘だろうか。

真っ白な手首。仕事で少しよごれている指の先。ぱっとしないが、特徴のある顔立。若々しく輝いている眼。いささか高い頬骨。東ねた短い髪の毛を、後でかきあげて、アップにしているつもりらしい。

私は、そのような女の子を目を放さずじっと見ている。たそがれが、静かに若さをかくしているのだろうか。うら若い女性の輪かくだけが、陰翳を変えてゆくのだ。ただ、彼女がいるという事がわかるだけだ。これは、彼女が一人でいるせいだ。

全く不思議だ。やや神秘的と思えるほど、一人ぼっちでいる彼女は、無邪気さと純情の中に、孤独な身を置いている。

今は空室のこの部屋にも、いつかは人達が入るに違いない。男か、女か、夫婦ものか、年寄りか――。それは、いずれわかるであろう。そして私は、この部屋を完全に支配するのだ。そして持主だ。

私は目をそこから放すまい。私はその部屋にいるのと同然である。つまり、あの部屋に立ち入る者は、誰でも自分では知らずに、私と一緒にいるわけだ。そし

て、私はその人達を見、そのささやきさえも聞き洩らすことはないのだ。扉が開け放たれているのと全く同じに、彼達の行動を、ひとつひとつ見る事が出来るわけだ。

私は、この恥知らずの考えに耽った。壁に囲まれた私室の中に於ける他人の生活のぞき見る事は、如何にも興味津々としていて、その悪魔的な誘惑は、とても止められそうにもなかった。

ああ、早く見たいものだ。そうだ、是非、見なくちゃ。

彼女は目を光らせ、青いエプロンの中で、手をゆさぶりながら窓際に近寄る。顔と上半身が、ぱっと外光を受けて、まるで天上にいるのではないかと思われる程だった。

窓際に簾を立てかける。

簾の先の、ぼろぼろの所は暗さにかくれてもう見えない。彼女はポケットから手紙を取り出して読みはじめる。

たそがれの淡い光の中で、その手紙は白い指の間に、そっと支えられてゆれている。

彼女は、その手紙を胸に当ててから、

口もとに運んでキスをし、大きく呼吸をしている。

誰から来たものだろうか。年頃の娘が、手紙にあんなに愛情をこめてキスするのは恋人からか。それにしても、私だけが、こうして誰の目にもとまらない愛の仕草を目撃しているのだ。

あの手紙にキスするという飾り気のない仕草。この部屋にかくれ、あたりの暗さにまぎれて、誰はばからず行なわれた、その仕草には犯しがたいところがある。

彼女は窓際に立ちはだかり、手紙はその白い手に握られている。夜は濃くなった。彼女は自分の前にひろがる無限の夕闇を、まじまじと見つめている。

その眼は輝き、まるで泣いているように見えるが、そうではなくて喜びで一杯なのだ。

ため息を残して彼女は、ゆっくりとドアの方に足を運んだ。手紙を読んで、それにキスした他は、なにもしないで出て行ってしまった。これは全く、最近、場末の映画館で私

が見たアルフレッド・ヒッチコックの映画『サイコロ』の中で、モーターの若い男の管理人がジャネット・リーの演じた一人旅の若い女の着がえをのぞき見るシーンがあったが、私は

この場面を想い出していた。

その管理人は小さな穴から、女が一枚一枚脱いてゆくさまを、舐めるように眺め、その弓のようにしなやかな女の全裸が、白いシルエツトとなって、浴室の透明な白いビニールのシャワーカーテンの中に消えるまで凝視していた。猛然と欲望が湧いて、ある強い衝動につかれるさまが、ありありとスクリーンに映し出されていた。

旅の疲れをいやすべく、雨のように降りそそぐ温かいシャワーの中で、この若い女の弓の様な四肢が、のびやかに動いている時、すき間風のように、古めかしい服を着た女が、中世の頃の長い剣を逆手に、透明のシャワーカーテンの中からあたかも湖の中から浮かび上がってくる怪物の様に敏捷な動作で、白い二つの果実の胸もとめがけて、幾度となく振りおろされた。

絹を裂くような悲鳴を残して、明るいたイルの壁を両手でなぜながら、下へ下へと、ずり落ちてゆくシーンの迫力。パツチリと見開いた目は、瀬戸物のように綺麗な瞳孔を見せて、まるくそり返った

長いマツ毛が、目を一層、魅力的にしていた。

私は、そのクローズアップされた剝製みたいな眼を、今でも、はっきりと想い出すことが出来る。私は、あのジャネット・リーの様な女性が隣の部屋に入ってくれることを願いながら、朝晩、隣の部屋の前を通過して出勤していた。だが、私の願いの甲斐もなく、長い間、この部屋は依然として空き部屋になっていた。

会社での私の仕事は伝票の整理であった。

受渡係といえば、体裁がよいが、いわば倉庫番のようなもので、係長も停年間の閑職に追いやられた失意の老人で、私も、その単調で張り合いのない仕事にあきあきしていた。ただ情性でペンを動かしている毎日が、若い私には、やりきれなかった。

しかし、夕方近くになると、だんだん私の頭を支配してきた。今日も昨日と同様、あのままの空室かと思うと、一種異様ないらだたしさが、こみあげてくるのだった。

会社の若いOLの中で部屋を探してい

る人がいたら、うまく紹介してやるふりをし、隣の部屋へ入れてやろうかと思った事もあったが、そんな若くて美しい女性は、めったになかった。

この頃は、時々、夜半に起きて、そっと、例のすき間から、隣の部屋を見たが、黒々と墨のような暗やみの中に、若い女が着替えている様子を、自分の頭の中で想像したり、白く弓のように光る裸身を頭の中で、思いうかべて、ひどく興奮したりした。女の着替えを窃視する事は、私の頭の中から、なかなかぬぐい去る事は出来なかった。

毎日、勤めから帰る時、私は何かを期待して部屋に帰った。その日は、何か起こる様な気がしていたが、案のじよう、隣の部屋には女の字で「山本美都子」Vという字が、誰かの名刺の裏に書いて、はってあった。

それを見て、胸が痛いくらい、ドキリとした。すぐ部屋に飛び込むと、壁を抱擁するように手を拡げながら隣の部屋をのぞき見た。部屋の中は、すでに色々のもので埋められていた。

バラの花のついた赤いカバーにおおわれたベッド。そのバラの花と同じ布地で作ったヒダの多いカーテン。まだ学生なのであろうか

机の上には本箱。その本箱の上の布地も座布団の布地も、同じバラの花のついた布地で部屋全体が花園の様に統一されていた。

赤い姫鏡台も同じバラ色のうるし塗り。その鏡台に顔を近づけている女の子。彼女の口は半ば開かれて、ひどくつやつやした白い顔は、引越しのわずらわしさから、やっと解放されたという、ほっとした所があった。

埃っぽい外の空気に疲れ、道行く車の数に酔い、やっとの思いで、この部屋へ逃げ込み、そうしたものから遠ざかろうとしているらしい。彼女は足を横に投げ出して、机の上の本立てから一冊の本を選びだした。

私は、おののきはじめた。

ふっくらとした座布団は、彼女のお尻に押されて、へこんでいた。しなやかな膝は、ひとつにくっつけて、だらりと横に投げだされ両手で軽々とスカートをまくっている。

私の視線は、それに熱くへばりついて放す事は出来なかった。

私の肉体は、うめきだした。灼熱した

鏝で焼きつけられ、その熱さが下半身にひろがってゆくのが、よくわかった。

私は額と、掌のひらと胸を壁につけ、壁を押しぬくほど夢中になって、彼女の仕草や、事のなりゆきに、眼を裂けるほどみひらいて見つめていた。もっとよくもっとしっかり見きわめようと満身の努力を傾倒するのであった。

彼女は蓄積した疲れを、うすく剥ぐ様に上衣を脱ぎだした。腰をきつく締めつけているスカートを上へ引きあげて、縫い通りのある白いパンツの所まで、ずらした。

やわらかくて、うすく、そして、あたたかそうなパンツも、すんなりと足を通して、ずり落としてしまった。まるで暑く立ちこめた部屋の熱気を入れ替えてもする様に、彼女の香りで満ち満ちた、ふんわりとした暗い森のあたりに立ちこめている。

その暗やみを穴のあくほど見つめていくうちに、私は変な気持になった。この開かれたあけっ放しのクラガリのまんなかに、私は望みのものを見た。禁断の木の実だ――。

しばらくして、私は自分の脳裡にある姿態を思いだし、激しくおののいた。壁の向こう側では、こうして一人つきりになって、臆面もなく可憐なけがれのない姿を見ている女がある。そして、自分にひきつけられている若い男の眼も知らず、あからさまに身をさらしている彼女は、まことに純真であった。

だからこそ、衣服を脱ぎすてて、その日光に当たっていない白い体を部屋の空気にさらして身をくねらせているのだ。彼女は小さな本箱へ腕を伸ばして、本を返すと静かに座布団から立ち上がって赤いベッドカバーの上に身を横たえた。

彼女の体は夕暮の淡い光の中に、とても蒼白く見えた。私の目は、ただ乏しい光のせいだけでなく、煩悩の迷いと生命のときめきとで、身体中の熱い血汐が逆流して、ある一点に注がれた。

荒い息が口をついて、知らず知らずに吐きだされ、全身からこみあげてくる叫び声が、咽喉をつき破ってくるようであった。

なだらかなスロープを描く淡雪のような乳房。そして当然のことながら、目は黒い森の方へ注がれた。わななく手を固く握りしめながら、私のまなざしは爬虫類が穴を求めるよ

うに、じっと凝視しつづけた。

深海の中にいる様な静かさであった。海の藻の匂いが、漂ってくるように思われた。心持ち紅い、グミのような唇が、私の目に入った。今までの孤独が、孤独ではなくなったのだ。この涼しい女の顔が、私を陶醉させるに違いない。おずおずと開かれた彼女の唇が、琴のようにふるえる、あの神秘的傷口のような唇が、私をしびれさすに違いない。

私は猛然と、この自分の手で、本当に彼女に触れてみたくなった。この壁をぶち破るか、部屋を出て、隣の扉を叩き割るかして、彼女に飛びつきたくなった。山本美都子、美都子、ミツコ、……。私はウワゴトのように、彼女の名前を叫びつづけながら、いつしか、昇天していった。

あたりは、いつしか暗くなっていた。私は孤独感をかみしめながら、淡い残光のなかで、じっと立ちすくんでいた。

明日は又、何があるというのだろうか。この間隙のあるかぎり、また新しい発見が私の上にもたらされるだろう。私は、それを心から期待したい。

カット・岡たかし



下宿先を隣家の火事で焼け出され、友人のアパートへ転がり込んでいた野宮信一は、妙ないきさつから、同じ課の堀田係長の宅へ下宿させてもらえることになった。

誰が言い出したのか判らなかったが、信一と堀田が同じK県の出身であるところから、当座の間だけでも堀田係長が信一の面倒を見てやるべきだというような話が、課のなかに広まっていったのである。重役の令嬢と結婚し、そのせいだけではないだろうが、同期の者たちのなかでは出世の早い堀田を妬んだ、厭がらせだったのかも知れない。

もっとも、堀田は、重役が娘夫婦の新居に

／＼創作・靴に囚われた男／＼

白　い　脚　の　下　で

沖　圭　介

と用意した広い家に、美人と評判の高い唯起子夫人と二人きりの生活で、信一に下宿させたとしても、スペースの面では支障はないはずだった。

果たして堀田係長が夫人名義になっているとか噂されている家に信一を同居させるのを唯起子夫人に承知させることが出来るかどうか、課の者たちは興味を持って見守っていたが、

「今朝、出がけに女房が、夜具の用意も出来たとか言ってたから、いつ来てくれたっていいよ。確か君は明日、休日だったから、明日にでも越して来たらどうだい。どうせ来るな

ら、早い方がいいだろう」

ある日、堀田は信一に、そう言った。

周囲の耳を意識しているふうはなく、充分信一に同情した言い方だった。

「……本当にいいんですか。奥さんにご迷惑なのじゃないでしょうか」

「面白半分に色んなことを言う奴が居るようだが、あまり気にしない方がいいよ。今度は君も、すっかり無責任な連中の肴にされてしまつて、大分、困ってたようだったな」

信一の肩を一つ叩いて、堀田は自分の席へ戻って行った。

会社は週休二日制を採用していて、日曜日

以外に、もう一日ある休日は、社員を三組に分けて、それぞれ別な日に休むようになっていたが、信一と堀田は組分けが別で、休日が異なっていた。

翌日、信一は火事場から持ち出すことの出来た衣服類だけの荷物を提げて、堀田係長の宅を訪ねて行った。

平日の午前中の住宅地は、私鉄で都心から十五分ほどの距離とは思えぬ静かだった。人に訊ねるまでもなく、堀田が描いてくれた地図に示されている、辺りの落着いたたたずまいとは、ちぐはぐな喫茶店の赤い三角屋根が見えはじめ、その喫茶店のある四つ辻を右に折れたところに、堀田の住居があるはずであった。

今年入社したばかりの彼は、重役の末娘だという係長夫人に、まだ会ったことはなかった。社内でする噂だけから想像すると、どうやら親しみにくい人柄のようだった。なるべく堀田が家に居る日に引っ越して行きたかったのだが、堀田は信一が来る日に家に居合わせるのを避けたのかも知れなかった。

四つ角を曲がり、堀田家の生垣沿いに歩きつつ、歩みを緩めて垣のなかを覗こうとしたときだった。

「野宮クンじゃなくって？」
背後から、ふくらみのある女の声に呼びかけられた。

覗き見しかけたのを見咎められたようで、うろたえ気味に振り返ると、信一より三つ四つ年上としか見えない女性が、犬を連れて佇んでいた。

やや吊り上がった切れ長な目と鼻すじの細く通った整った顔だちを、ひと目、見た瞬間あまり若く見えるのに驚きながらも、唯起子夫人だと思った。

ぴったり身に合ったミニのワンピースに包まれた、均斉のとれた、しなやかそうな体つきが、昼まへの明るい陽ざしの下に、人妻のあでやかさを撒きちらしているようだった。

「……堀田係長の奥さんでしょうか」
「そうよ。やっぱり、あなたが野宮クンなのね」

切れ長な目に見掘えられると、彼は思わず赧くなってしまっていた。

高慢な女だとか冷たい性格だとか、会社での評判は決して良くはなかったが、これほどまでに美しい唯起子夫人になら、どれほど冷酷に取り扱われてもいいようにも思えた。

「はい。野宮信一と申します。今日から厄

介になりますが、どうぞよろしくお願い致します」

唯起子夫人には、どんなに敬虔に頭を垂れても足りない気がした。心のなかでは土下座でもしているつもりで、信一は、ふかぶかと頭を下げたが、ソックスを穿いただけの夫人の、ふくよかな素足の白さが、息苦しくなりそうなほど、眩しく目に灼きついた。

「長いこと、待たせたのじゃなくって？ 犬を散歩に連れて行ってたところなの」

「いいえ。ほんとに、いま来たばかりです」
一寸でも彼女の気持の負担にならないようにと、少しも待っていないことを強調するようにならなうに答えたが、

「足に何か、ついてるのかしら」

白い足に視線を奪われがちな彼に気づいていたらしい唯起子は、チラと自分の足もとに目をやってから、門の方へ歩きだした。

足を盗み見しすぎたのを後悔しながらも、信一はその場に立ちすくんだまま、彼女の後ろ姿の豊満な腰の動きに瞳を惹き寄せられてしまっていた。

門の前で立ち止まった唯起子は、信一の方を振り向くと、あとから従って来ているものとは思い思っていたらしく、

ナミオM画廊

『女性専用座椅子』

春　川　ナミオ



「二寸、これを持っててちょうだいな」
じれったそうに犬の鎖かざしてみた。
「はいっ」

これ以上、夫人の機嫌を、そこねてしまっ

てはいけないうと、四、五米ほどしかない距離
を、信一は懸命に駆けつけた。

「まるで百米のランナーみたいね」

鎖を手渡すとき、唯起子が初めて白い歯を

見せてくれたのが、嬉しかった。

唯起子が門の鍵を開けている間、犬を眺めてみたが、犬の知識のない彼の目にも、あきらかに雑種だった。美しい夫人が連れて歩くにしては、あまりにも、みすぼらしすぎた。

家へ入ると、唯起子は信一を玄関わきの四畳半へ連れて行った。

「書生部屋みたいで、ごめんなさいね。堀田が、わたしたちの生活から、なるべく離れた部屋の方が野宮クンも気楽だろう」って言うものだから……」

建物の角に位置していて、二面に窓があり風通しは申し分なさそうだった。焼けた下宿には、窓が一つもなかった。

唯起子のように美しい女性の身近で生活出来る自分を幸せと思うだけ、彼女に疎まれてはいしなやかと信一は気がかりでならなかったが、堀田家に寄宿するようになって十日余りがすぎた、ある日、会社からの帰り途、堀田から、唯起子が彼を気に入ってくれているらしいことを聞かされた。

「近ごろの若者に珍しく、折目正しいのが気持がよいし、こまい点にまで気を配り、いじらしいほど、わたしのために尽そうとしてく

れているとか言ってたな」

もともと変な、いきがかりから信一を下宿させるようになってしまっただけに、堀田も妻が信一に好感を持ってくれたのに、一安心している様子であった。

堀田家に住みはじめた最初の日から、信一は目立たぬところで唯起子のために役立つよう心がけて来たのだが、彼女もそれに気づいてくれていたらしかった。そして、堀田の口を通じて、献身的に唯起子のために尽してもよいという、彼女の許可を貰えたように思えた。

一つ屋根の下で暮してみても、はじめて解ったのではあるが、会社で取沙汰されているほど堀田は、唯起子との間で気弱な夫ではなかった。却って唯起子の方が、世間一般の妻なら怒りを泳えきれないだろうと思う時でも、重役の娘であるがために、自分を抑制しているところがあった。

その反動とでもいうのか、そんなとき、ダイニングキッチンに水をこぼすなど信一が些細な失敗をしただけで、唯起子は酷しく注意した。

信一を叱ることで不思議に気持が霽れるらしく、

「野宮クンって、妙なところあるのよね。面白くない時に、あなたを見てると、なんだか虐めてやりたくなるの。そして、当たり前ですと気分が、とっても爽やかになって、どんな不愉快な事があったのも忘れてしまうわ」

そんなふうと言ったこともあった。

大会社の重役の令嬢として誇り高く育った唯起子には、貞淑な妻として自分を抑えるばかりの生活に堪えかねる面もあり、せめても自分の気持の吐け口に、無意識のうちにも、忠実な召使いのように彼女の意のままになる対象を求めていたのかも知れなかった。

自分だけが休みで家に居る日、信一は進んで唯起子の用事を手伝おうとした。堀田が居るところでは憚られるが、唯起子と二人きりなら、どんなこともためらわずに出来そうに思えたのである。

けれど、サラリーマンの家庭に、いつもいつも男手が必要とするような仕事があるはずもなく、彼女の買物に従ってゆき、荷物を持つくらいが関の山だった。

それでも唯起子は結構重宝がってくれた。

自分は犬の鎖を手に行っているだけで、駅前の商店街での雑多な買物を全て信一に持たせて歩いているところを、他所の女たちが、わ

ざわざ立ち止まって眺めたりすると、

「野宮クンのような可愛い男の子を下男みたいに連れて歩くのも、悪くないわね。ほら、あそこに立ってる娘さん、憎らしそうに、わたしを睨んでるわ」

唯起子は愉しげに、少し遅れて歩く信一を振り返った。

おもしろがった彼女は、家へ帰ると、自分は応接間のソファに、たかだかと足を組んで信一に冷えたジュースを運ばせたりした。そして、そんなときには、自分の飲み残ししか信一には与えなかった。

だが、日がたつにつれて、信一を従えて買物をする彼女の噂が堀田の耳にも入ったらしく会社の者に知れたら何を言われるかもしれない、と唯起子は、堀田に注意されたそうだった。

唯起子にそのことを聞かされると、信一も黙って引き下がるしかなかった。

信一と一緒のときに、まとめて買物をしていたのを、また元通り、毎日、駅前まで出かけるようにした唯起子は、彼が家に居る日も犬だけを連れて出ていった。

そんなある日、唯起子を送り出すと、信一は花壇の手入れを思いついて庭へ降りたが、

その日に限って帰りが遅く、丹念に土いじりを終えて手を洗ってしまったから、彼女は戻ってこなかった。

ふだんの倍ほどの時間をかけて、いつになく唯起子は険しい表情で帰ってきたが、玄関まで出迎えた信一に無言で買物の紙袋を突き出すと、引きずるように犬を家の横へ連れて行った。

「どうかなさったのですか」

様子が訝しく、信一も玄関を出てみたが、いつもなら犬小屋へ入れる犬を、唯起子は台所わきの楓の幹に繋ぎとめていた。

そして、信一が傍に居るのもかまわず、犬の胴のあたりを足蹴にした。

「わたし一人で、買物だけでも大変なのに、少しも言うことをきかないのよ」

犬が悲鳴をあげないのに一層、怒りを募らせた唯起子は、もう一度、足を上げると、頭をめがけて蹴りつけた。

如何にも痛そうな犬の啼き声を耳にしながら、信一は、今日に限って腹立ちを自分に向けてきてはくれない唯起子を、恨めしく思った。唯起子を妻にしている堀田を妬ましく感じたことはなかったのに、彼女に二度までも足蹴にされた犬に、激しい嫉妬をおぼえさせ

られていた。

「あんまりみすばらしい犬だから、飼う人もないだろうと、可哀想に思って家で飼うことにしたのだけど、やっぱり雑種って駄目なようね」

少しは気持の昂ぶりも納まったのか、家へ入ると、唯起子は自分の行為を取繕うふうに言った。

堀田から聞かされて、信一に下宿させることを承知してくれたのも、うす汚い犬を拾ったのと同じような、哀れみからだったのかも知れなかった。

「でも、お怒りになると怖いのですね。ぼくも氣をつけます」

信一の言葉に誘われたように、
「そうよ。野宮クンだって、容赦なくお仕置きするかも知れなくてよ」

何処まで本心なのか、唯起子は眉を吊り上げて睨む真似をしてみせた。

会社で仕事に疲れたときなど、信一は、唯起子の白い足に蹴られている自分を想像することが多くなった。

その次の、信一だけが休みの朝だった。

夫婦の間で何事かあったらしく、堀田は食

事するときも唯起子と口を利かなかった。

堀田が無言のまま出かけてしまってから、しばらくして、

「野宮クン、踏み台を持ってきてよ」

二階の部屋で唯起子の声がした。

信一は、一度は踏み台を取りにゆきかけたが、ふと思い直すと、そのまま階段を昇っていった。

唯起子は、彼がなにも持っていないのを見てとるなり、

「手ぶらで上がってきたって仕方ないじゃないのよ」

苛立たしげに声を、とがらせた。

「よく聞こえなかったの……。なにを持ってくるのだったのでしょうか」

「踏み台よ。フミダイ」

堀田との争いは、かなり険悪な様子で、里へでも行くつもりなのか、唯起子は自分の服をまとめているところしかかった。

「うっかりしていて申訳ありません。ぼくが踏み台の代りになります」

「……？」

信一は、怪訝そうな唯起子の足もとに四つん這いになると、

「大丈夫です。ぐらついたりしませんから、

背中の上に立って下さい」

彼女のソックスを穿いた足を凝視めて言った。

「……いくら踏み台を持ってこなかったからって、野宮クンを足で踏むなんて」

氣勢をそがれたのか、唯起子も流石に足をかけかねていたが、

「人間だと思わなければいいんでしょう」

重ねてうながされると、

「本当にいいのね」

好奇心にも駆られたふうで、思いきって、

信一の背中の上に乗った。

腕と膝に力をこめて、信一は唯起子の重みを支えた。固太りのせいか、見かけによらず彼女の体は重かったが、重ければ重いほど、唯起子の足に踏まれる喜びも、また昂まるようだった。

美しい唯起子は、足の裏までも優美に生まれていていいのか、背中が感じる感触は到底踏まれているとは思えぬ柔らかさであった。

だが、唯起子が彼の背中の上に立っていたのは、ほんの数秒の間で、高いところの洋服箱を手にとると、こわれ物を踏み台にしているように、直ぐ降りてしまった。

「そんなに怖そうになさらないで下さい。長

く乗ってもらっても、滅多に奥さんを落としたりしませんから。もし踏み台として役立てなかったら、どんなお叱りでも受けます」

「そお？　じゃあ、本当の踏み台だと思うことにするわ。重いつて悲鳴を上げても知らなくってよ。約束したのだから、お仕置きも覚悟しときなさいね」

冷たい口調で念を押すと、唯起子は、また信一の背中に上がったが、今度は容易には降りる様子もなく、彼の上に立ったまま、箱の中を改めたり、しはじめた。

膝よりも腕が先に疲れてきた。汗が目に入っても拭うことも出来ず、信一は目を閉じて唯起子の重みに堪えた。

「まだ大丈夫だわよね、踏み台さん」

確かめでもするかのように、彼女は両足を踏んばって信一の体を揺するのだった。

「……ええ」

呻くように答えるのが精一杯で、信一は両膝の間隔を広げて、唯起子の足に横転させられそうな体を懸命に支えた。

「一寸、右へ寄るわよ。よくって？」

肩胛骨の間あたりに乗っていた唯起子の右の足が、首すじを踏みつけてきた。

「まあ、ひどい汗。ソックスだけじゃなしに

足も洗わないと、気持が悪いわね」

そんなことを言いつつ、彼女は少しずつ右足に体重を移しはじめていた。

信一は首を動かすことも出来なくなってしまう。両腕を畳に突っぱり、徐々に加えられてくる重みを首で支えぬく苦痛は、拷問を受けているのに等しかった。

「もう少しで手が届きそうだわ」

一体なにをしているのか、唯起子は信一の首すじを踏まえた右足一本で立つ姿勢になっ

てしまったようだった。

首に加えられる重みは石でも鉄でもなく、唯起子の美しい足に踏まれているのであってはみても、そういつまで支えきれものでもなく、やはり限界は来た。

足の裏に神経を集中させて、信一の体力が尽きる瞬間を計っていたのか、唯起子は彼が畳に崩れ伏せる寸前に飛び降りた。

畳に片頬を押しつけるようにして、息も絶え絶えな信一の目に、白いソックスが写っていた。

「踏み台代りとして役に立たなかったのだから、お仕置きしたげるわね」

唯起子の足が、鼻に触れそうなほどにまでつめ寄り、いまにも顔を踏みにじられるのか

イメージギャラリー 『選外者の羨望』 岡 たかし



と思ったが、

「わたしが足を洗ってる間に、下へ降りて来なくて駄目よ」

脂足らしい足の匂いを、かすかに信一の鼻

に残ただけで、唯起子は階段を降りてしまった。

本当に足を洗いに行ったらしく、湯殿の方で、しばらく水の音がしていたが、その音も

やがて聞こえなくなった。

唯起子の言葉を思い出し、信一は慌てて階段を駆け降りていった。

階段の昇り口に立っていた唯起子は、彼の降りようが遅れたのは咎めようともせず、

「いろいろと考えてみたのだけど、野宮くんは口先ばかりで、あまり体力のほうはなさそうだから、重労働は勘忍してあげるわ。その代り、お玄関の下駄箱に入ってる靴を、みんな磨かせるわよ。堀田のちと言いたところだけど、それは一寸、可哀想だから泳えただけ。わたしの靴だけでいいから、どんなに古いのでも、裏についてる土まで綺麗に落としとかなくっては駄目よ。よくって」

命令口調ではあるが、声はふだんの優しさを取り戻していた。

「はい。決して手を抜いたりはしません。磨き終わったら呼びに行きますから、点検して下さい」

瞳をかがやかせる信一に、

「お馬鹿さんね。お仕置きに女の靴を磨かされるのに、なによ、嬉しそうな顔をしたりして……。大丈夫だと思うけど、外から見るといけないから、お玄関の戸を開けたりしないでね」

唯起子は踏み台を持って、改めて二階へ上がって行った。

多分、洋服を元通りに片づけに行ったのだろう。踏み台代りの信一を、わざと踏み潰したことによって、夫への忿懣も消えうせたような後ろ姿だった。

玄関へ行くと、信一は下駄箱を開けてみたが、履物道楽なのか、大きな下駄箱の大半を唯起子の靴が占めていた。

とりわけ、まっすぐに立てれば彼女の太腿までも包みそうな黒の編上げのブーツが見事だった。その次には、思いきって踵の高い紅いハイヒールに目を惹きつけられた。最近よく街で見かける踵の太い靴は、なにか鈍重な印象を受けて好きになれない信一には、如何にもハイヒールの典型といった感じの繊細さが好ましかった。

美味しい菓子は食べるのを一番あとにする子供と同じように、あまり気に染まぬ靴から磨きはじめていったが、どの靴にも一度は唯起子の足が入ったのだと思うと、信一にとっては、どれもが貴重な靴であることに変わりはなかった。

一足を手にするごとに、靴の底に鼻を押しつけるようにして、唯起子の足の残り香を求めたが、革の匂いしか嗅ぎとれぬのに落胆させられた。最近に彼女が穿いていた靴を思い浮かべて、選り出して見たが、やはり同じことだった。希みが叶えられそうにもない、もどかしさに、紅いハイヒールを磨く時、信一は、おもいあまってハイヒールの底に唇を押しつけてしまっていた。

一番あとにした、編上げのブーツは磨きにくかった。柔らかくて、まっすぐ立てることは出来ず、左の腕をなかに通して磨くにはブーツの丈が長すぎた。

扱いあぐねた末に彼は、かなりまえに二階から降りて来ていた唯起子のところへブーツを持って行った。

「ブーツなんか提げて、どうしたの？ ジュースを入れたから呼んであげようと思ってたよ」とこなのよ」

ダイニング・キッチンテーブルにジュースのコップを二つ並べて、唯起子は訝しげに信一を見守った。

「どうしても上手く磨けないので、奥さんに穿いて居てもらえないかと思って、お願いにきたのです」

「いいわ。穿いたげるから、デパートの包装紙と、なにか台になる物を持ってきて頂だい

よ」
磨きにくさが判っているのか、唯起子は即座に承知してくれた。

信一が包装紙と、靴を載せるのに適当な洗剤の空カンを探して戻ってくると、椅子に腰をかけた唯起子が足を組んでジュースを飲んでいたので、その間に、彼女の足にブーツを穿かせようとする、

「自分で穿くから、いいの。足に触らないで——。野宮クンも早くジュースを飲んでしまいなさい」

唯起子は、素早く信一の手を払い除けてしまった。

スリッパとソックスを脱ぎ、深紅に染められた爪によって、ひととき艶めかしく見える足をブーツに入れた唯起子は、床に敷いたデパートの包装紙の上に立って、馴れた手つきで編上げの紐を、あやつりはじめた。ブーツの丈は、ミニスカートの裾を越して、彼女の足を太腿のなかば以上までも包みこんでしまっていた。

ブーツを穿いて立つと、唯起子の美しさは一段と冴えるようだったし、ブーツそのものもまた、唯起子の足に穿かれることによって信一を魅了し尽くすようであった。

眺めているだけでも、うっとりしてしまい
 そうなのに、これからそれに手を触れて、心
 ゆくまで磨かせてもらえるのだと思うと信一
 は、夢ではないかと頬をつねってみたいほど
 だった。

唯起子は椅子に腰を降ろして、空カンの上
 に片足を載せる姿勢をとってみていたが、思
 い直したように、椅子から立ち上がった。

「スカートのなかを覗くにきまつてるから、
 立ったままで磨いてもらうことにするわ」

「ぼくは、どちらでもかまいません」

スカートを覗きこもうなどとは思ひもしな
 かった。唯起子のブーツを穿いた足に触れて
 いられるだけで、信一にはそれ以上、望むこ
 とはなかった。

唯起子の足元に這いつくばるようにして、
 丹念に爪先から空拭きしはじめていったが、
 ふくらはぎのあたりまで拭き昇ってゆくと、
 「上を見たりしませんから、もう少し、足を
 開いてもらえないでしょうか」

信一は顔を伏せたまま、言った。

「これでいいこと？」

股ぐりでも命じるように、大きくひろげ
 られた唯起子の両足の間に顔を入れると信一
 は、自然な仕種しぐさを装って、そっとブーツに頬

ずりしてみた。

そして、膝から上になると、また注文をつ
 けた。

「スカートを汚すといけないので、空いてい
 る方の足を、ぼくの肩に載せて下さいな」

「うるさい靴みがき屋さんのね。わたしの
 足の間に顔を入れようとばかりするからいけ
 ないのよ」

口ではそう言いながらも、テーブルの端に
 手を突いて体を支え、唯起子は片足で信一の
 肩を踏まえるかたちになったが、

「一寸でも上を向いたりしたら、こうするわ
 よ。いいいわね」

ブーツの爪先で信一の顔を二、三度、小突
 いてみた。

「決して見ません」

必要以上に顔を俯向かせると、信一は上目
 使いにブーツの足を見守って、せっせと手を
 動かした。

支えていたテーブルの端から手を離してし
 まったのか、もたれかかる様に唯起子は信一
 の肩を踏んでいる足に体重をかけてきた。

ブーツの足を抱きかかえるようにして拭き
 ながら、靴クリームをすりこむときと、仕上
 げの磨きをかけるときと、あとまだ二度も同

じことを繰り返せるのだと思うと、信一は悦
 びに体が慄えだしそうだった。

「でも感心ね。とっても熱心にやってくれる
 わね。これからも、ときどきはブーツでなく
 っても、わたしが穿いて磨かせてあげてもい
 いことよ」

頭の上に唯起子の声を聞くと、

「はい、有難うございます」

肩に載せられている足がはずれぬよう注意
 しつつ、信一は、唯起子の股に向かって頭を
 下げた。

その後も、唯起子は気が向くと、信一に靴
 を磨かせたが、素足に彼が直接、手を触れる
 ことは、決して許そうとはしなかった。

足に触らせてはもらえないらしいのを察す
 ると、信一は会社にいるときも、唯起子の足
 を洗ったり、鮮かな深紅に染められた足の爪
 を剪ったりする空想に駆りたてられて、とも
 すれば仕事の上から心が離れがちでさえあっ
 た。

一度でもよいから唯起子の足に触れてみた
 い欲望を抑えきれなくなった信一は、靴を磨
 くとき、わざと唯起子の足の甲を靴クリー
 ムで汚した。

「も、申し訳ありません。ぼくが洗わせて頂きます」

彼女の足もとに平伏して詫びてみせたが、唯起子はハイヒールの爪先を信一のあごにかけて顔を起こさせると、しばらく表情を覗きこむようにしてから、

「いいわよ。自分で洗うから」

いつにない冷ややかな口調で、信一が使っている手拭いと、彼用に決めてあるプラスチックの湯桶に湯を入れて持ってくるように言った。

信一が命じられた通りに用意してくると、唯起子は入浴用の、あまり大きくはない湯桶に片足を入れて、靴クリームで汚れたところだけではなく、足指の間まで丹念に洗いはじめた。

足というものは一見、汚れていないようにいて、汚れているらしく、片方の足を洗っただけで、美しい唯起子の足でも、こんなに汚れているのかと驚くほど、湯は思いのほか、濁ってしまった。

手拭いで濡れた足を拭き、もう片方の足も洗うつもりらしい唯起子に

「湯を替えて来ましょうか」

信一は顔色をうかがいながら、小さな声で

訊ねてみたが、

「これでいいわよ」

彼女は見向きもしなかった。

両足を洗ってしまうと、

「湯を棄てちゃ駄目よ」

そう言い残して、唯起子はダイニングキッチンを出て行ったが、まとめて洗濯するつもりで溜めてあったらしい、穿き汚したソックスを三、四足、手にして戻ってくると、湯を濁すのが目的のように、湯桶のなかで、もみ洗いをした。

「さあ、この湯で顔を洗いなさい。わたしの足を汚した罰よ」

床の上に信一を正座させると、

「何度も何度も洗うのよ」

足で彼のまえへ湯桶を押し出した。

湯は、もう不透明なまでに濁ってしまっており、垢とも脂ともつかぬ凝結を表面に浮かべていた。

言われた通り、信一は、唯起子の足とソックスの汚れとで濁りきった湯で、繰り返し顔を洗ったが、幾度目かに顔を洗おうとしたときだった。

「湯をこぼさぬように、手だけ外に出しなさい」

唯起子に命令されて、顔だけを湯桶の上にししのべていると、いつの間に穿いていたのか、出し抜けに彼女のハイヒールに後頭部を踏みつけられてしまった。

「息苦しくなったら、なくなるまで湯を飲んだってかまわないわよ。せつかく靴を磨かせてあげているのに、わざと汚して、わたしの足に手を触れようなんて、不心得を起こしては駄目じゃないのよ。初めてだから今日はこれで堪忍してあげるけど、この次に、またしたら、今度こそ、どんなお仕置きを受けるか知れなくてよ」

床に突いた両手で後頭部を踏みつけてくる唯起子の足の力を支えるのが精一杯で、信一は口からも鼻からも、したたかに、湯を呑みこんでしまっていた。彼女が足を洗った湯がどのような味をするものか、判ろうはずもなかった。

一度、強く踏みにじっておいってから、漸くハイヒールが後頭部から離れた。

湯を、したたらせながら顔を上げる信一の目のまえに、

「床が濡れるじゃないの。さっさと顔を拭きなさい」

唯起子は自分の足を拭いた手拭いをハイヒ

ナミオM画廊 『実技指導押売』 春川 ナミオ



ールの先にひっかけて、突きつけた。
手拭いに残っているかも知れぬ唯起子の足の匂いを探し求めるように、信一はいつまでも顔を拭き続けていた。

「これじゃ、お仕置きじゃなくって、野宮ク

ンを感激させてばかりいるようなものかも知れないわ」
唯起子は、そんな信一を満足げに眺め降ろした。

至急に下宿を探すように、信一が堀田から言われたのは、それから間もなくのことであった。

「ぼくの家で一緒に住むようになってから、君の仕事の能率が下降線を辿り続けているそうなんだ。ぼくも一寸、気がかりになりはじめていた矢先に、課長から注意されてしまったんだよ。……どうしてなんだろうなあ。唯起子への遠慮から、気を遣いすぎていたのじゃないのか」

堀田は気の毒そうに言った。

会社など辞めさされてもよい。このまま堀田家に置いてもらって、いつまでも唯起子の足に仕えたい……。信一は、そんな思いで堀田係長の言葉を聞いていたが、現実にそんなことの許されようはずもなかった。

「素人下宿より、いっそ、アパートの方が気楽でいいかも知れなくてよ」

しきりに信一にアパートを勧めていた唯起子だったが、三日とせぬうちに、堀田の住居と私鉄で一駅、離れたところに、アパートの空室を見つけて来てくれた。

一日でも長く唯起子の身近で暮したい、彼の気持は、解ってくれているはずでありなが

ら、はやばやと引越し先を決めてしまおうとする彼女の仕打ちを、信一は恨めしく思わずにはいられなかった。

責任を感じていたらしい堀田は、進んで保証人になり、礼金なども一時、融通してくれることになって、清和荘という、そのアパートへの転居話は、信一の意志にはかわりなく、とんとん拍子に決まってしまった。

信一が堀田の家を出て清和荘へ移る日、

「これ、わたしからの餞別よ」

美しい包装紙の上に、リボンのかかった箱を唯起子がくれた。

「なにが入っているのですか」

箱は、大きさの割りには軽かった。

「さあ、なにか知ら。これからの野宮クンには、きつと必要だろうと思って、この品に決めたの。アパートへ着いてから開けてみるといいわ」

「じゃ、遠慮なしに頂きます」

箱を荷物の包みのなかに入れると、信一はしばらくためらってから訊ねてみた。

「……あのう、これから、ときどき奥さんの靴を磨きに、寄せてもらってもかまわないでしょうか」

「駄目よ、そんなこと。きつと会社の仕事に

身を入れると、わたしに誓ったじゃないの。励まそうと思って、せつかく餞別まであげたのに」

唯起子は子供を叱るように言った。

「……」

「そんな顔しないで……。たまには様子を見に行ったらげるわよ」

表の通りで、昨日まで使っていた物をそのまま唯起子が貸してくれた夜具類と机のほかには積む物もない、運送屋の運転手が、急ぎ立てるようにクラクションを鳴らしはじめていた。

「——きつと来て下さいね」

玄関に佇む唯起子を振り返りながら、信一は名残りおしげに堀田家の門を出た。

車で行くと、最短コースを走るため、清和荘まで十分足らずだったが、私鉄を利用した場合、駅から、かなりの距離を歩かねばならないようであった。

六畳ひと間に押入れが一つ、附いているだけの部屋へ入ると、信一は直ぐ唯起子に貰った箱を開けてみた。

唯起子の餞別は、彼が最も好ましく思っていた、紅いハイヒールであった。

へ一番、気に入っている靴で、一寸、惜しい

のだけど、あげることにするわ。たんと大切に
になさい▽

走り書きのメモが添えられていた。

どんな古靴でもよいから無断で持って出た
いとさえ思った、唯起子の靴を得られた嬉し
さに、信一は幾度も紅いハイヒールに頬ずり
を繰り返したが、もうこのハイヒールを通じ
て唯起子の足を偲ぶしかないのだと思うと、
彼女と離れて暮す淋しさがこみ上げてきた。

信一が、アパートでの生活を始めて、丁度
二週間がすぎた、休日だった。

何処かへ出かけるところらしい、外出着姿
の唯起子が訪ねて来てくれた。

近くの店で買って来た人形のケースに入れ
て机の上に飾ってある、紅いハイヒールを見
ると、

「まるで宝物扱いね」

彼女は信一を振り返って、満足げに、ほほ
笑んでいたが、

「これからデパートへ行くところなんだけど、
思わしい靴がないから、穿いてくわよ」

彼の返事も待たず、ケースからハイヒール
を出して、踏み込みに降ろしてしまった。

「もう、返してはもらえないのでしょうか」

不安げな信一に、
「帰りに返しに寄るわよ。そんなに心配そうな顔しないで」

「それじゃ、比処まで穿いて来られた靴を、代りに置いといて下さい」

万一、返してもらえない場合を考えて、言ったのだが、

「わたしが出て行つたあとで悪戯するにきまつてるから、いや」

唯起子は含み笑いを信一に向けながら、用意してきたらしい箱に穿いてきた靴をしまい手提袋に入れてしまった。

いまにも出かけそうな素振りで立ち上がった彼女は、

「ストッキングを脱いで行こうかしら」
独り言のように、つぶやいていたが、

「このハイヒールは、もうわたしのじゃないし、野宮クンの許可が必要だわよね。素足で

穿いたら、脂足だから臭くなるかも知れないけど、かまわない？」

首をかしげて信一に訊ねかけてきた。

「ストッキングなしでかまいませんから、どうぞ——」

唯起子の素足に穿かれて、足の脂と汗を、たっぷりしみこませてもあるのなら、それに勝る悦びはなかった。

「じゃ、そうするわ」

横坐りの姿勢で器用にストッキングを脱ぐと、唯起子は丸めたストッキングも手提袋に入れて、出かけて行った。

唯起子がデパートの帰りに寄つたのは、それから三時間ほどしてからだった。

「埃まみれになっちゃったけど、ごめんね」
脱いだハイヒールを指先につまんで眺めて

いた唯起子は、受け取るうとする信一には渡さず、元通り机の上の人形ケースに入れてし

私の口にも押し寄せてきたSM時代

——高　森　　広——

昭和元禄、SM時代の到来を、私が身をもって体験したのは、先達の土曜日でした。

社用を済ませ、しそびれていた溜まりものを脱ぐのが目的で飛びこんだ上野の喫茶店のトイレで、どういう目的かトイレの中にメモ用紙が備えられてあるのに気がつき

まった。

彼女の足の温もりが残っているうちに早くハイヒールに触れたくて、恨めしげに机の方を見やる信一に、

「触りたかったら触ったっていいのよ。野宮クンの靴だもの。……そうだわ。わたしが帰ってしまったあとで、そのハイヒールをどうするのか、見せてほしいわ」

唯起子は、からかうように言った。

「——」

「羞かしいの？　もし見せてくれたら、今日のように、ときどき穿きに來てあげてもいいことよ」

「ほんとですか……」

半月に一度、いや一カ月に一度でもよい、唯起子に穿いてもらえたなら、紅いハイヒールは、そのたびごとに彼女の足の脂を摂取して、いつまでも唯起子の靴としての鮮度を保ち続けられることだろう。

ハイヒールをケースから取り出すと、信一は羞かしさを忖えて靴の内側を嗅いでみた。まだ充分に生温かく、胸を熱くさせるような唯起子の足の匂いが、こもっていた。いつか唯起子に眺められている気羞かしさは遠退き匂いを嗅ぎ続けるだけでは、あきたらず、彼



ました。もちろん、拝見しましたが、いろんな書きなぐりが一杯。どうやら、壁へのラクガキ防止策らしいと思いついて、ペラペラやっていると、ひょっこり出てきたのが、見過ごし出来ぬ『飲むがウロラグラア喰べるがコプロ——土曜七時、上野公園トイレ、S』という暗号文(?)でした。

私には、すぐピンとききました。そして瞬間的に、コプロは、ともかく、行ってみようと思えました。プレイ体験はなく、それを信じた訳でもなかったのですが……。

暗くなりかかった上野公園は、ひっきりなしに往き来する人影、とくにアベックでにぎわいます。指定の公園トイレにもチョコチョコ出入りはありますが、それと見当のつけようもない私は、ただ、出入り口のところを行ったり来たりするだけでした。時計は七時を十二、三分も過ぎています。『やはり嘘か』と、自嘲の気持で帰りかけた時、暗い木陰からスッと出てきた女性がすれ違いざまに「S」と囁いたのです。

私はドキリとして立ち止まりましたが、信じられないような気持でした。二、三步行ってゆっくりと振り向いたその女性は、夜目にも豊かな胸がわかる三十前後の美女だったのですから……。

トイレメモの暗号文(?)は嘘でなく、

しかも、書いたのが、こんな美人の女性とは驚きでしたが、自分だと彼女は、いいました。その美女と私が、それからどうしたかは余り詳しく書くわけには参りませんが彼女からいい出して行った同伴喫茶で、始めてのコプロ体験をしたのは事実です。

差し障りのない程度の報告をしますと、軽度のMで、しかも実体験のない私に、彼女はすこし失望したらしいのですが、同伴喫茶で出されたお冷のコップに、ウロラグラアなるものを注ぎ、それを飲むことを条件にして、体に触れることを許すといい出しました。私は、その下着を何もつけていない豊かな肌につられ、少量とはいいいながら、全く初めての飲みものを口にしたわけですが、報酬はホンのワンタッチだけでした。物足りなさを表明しますと、一緒においでと行って、トイレに入ってしまったのです。おそろおそろ従った私は、そこで息苦しいまでに、柔らかな太腿とお尻の攻撃を受けたのでした。そして同時に、コプロ体験者の一人にされてしまったのでした。彼女が、嘔吐する私をどんな目で見ていたのかは、わかりませんでした。私のM程度ではついていけないほどですので、再会はしていませんが、あんな美女が……と思うと不思議なようです。

は舌が届く限り、靴の底を、舐めまわしていた。

「……お願いですから、足で、ぼくの顔を踏んで下さい」

切なげに訴える信一に、

「素足では駄目よ。と言って野宮くんが舐めた靴を穿くのも気持ち悪いから、出がけに穿いてきた靴でなら、踏んであげてもいいわ」

箱に入れて持ち歩いていた黒のパンプスを取り出して穿くと、唯起子は、紅いハイヒールを握りしめて仰向けに横たわる信一の顔の上に、片足を置いた。

「これでいい？」

「もっと強く……」

情容赦なく踏みつける唯起子のパンプスの下で、信一の顔が、いびつに歪んだ。

爪先に力を入れたり、踵に重みを移したりするごとに、明らかな喜びの、うめき声を漏らす信一を、唯起子は快げに、眺め降ろしていた。

素足に直接、触れることは決して許さず、それでいて、靴を与えて、信一をいつまでも自分の足の虜にしておくつもりだった。

〔読者投稿〕

関西の

女性ファンの

皆さまへ



~~~~~ 東京・中野 ~~~~~ 北 畠 剣 二

○ 初縛り 遠き日のごと 木枯しの  
泣く音に覚めぬ 夜半の床かな

この二月、仕事で大阪に一時、転居した直後に、長年のプレー・メイトM夫人から、私の寓居に送られてきた一首です。そして半年後の今、再び東京に住むこととなった私のもとへ、また彼女から短歌らしきものが届けられました。

○ プレー・デイ 待たるる日となり

湯上がり  
後ろ手組みで そと鏡見る

○ 彼女——結婚後、僅か半年で夫を失った若き未亡人マキと私との、緊縛一途のプレー研究が再び始まることでしょうが、それにしても悔まれるのは、在阪中の皆さんへのご無沙汰。関西に多い奇クファンの皆さんとの、おつき合いを、かねがね夢みていたというのに仕事に忙殺されたからとはいえ、文通の機会さえ、もてなかったとは！ 昨今、同工異曲興味本位のSM誌が氾濫する中で、独り、同好者の、同好者による、同好者のための、交



欲の媒体として特異の地位を揺るぎないものとしてつある奇ク誌に最大の敬意と愛着を抱く小生。今、悔恨とお詫びの気持を歌にこめ心に残る読者通信欄登場の女性ファンの方々に、われわれの拙いプレー写真を添えて、お伝えしたいと思います。

×

×

×

大阪市の山添清子様

美しきプレー夢みし あでやかに

弾む語らい 飛ぶピ

ンの音

△ゆとりある毎日のくらしの中で、貴女の心に広がる妖美な世界。それを、磨かれた社交性に、そっと包んだ、匂うような、たたずまい。美しい重役夫人とのボーリングのひとつとき。語りあうビューティフルなSM談話の夢が、私の胸の中で日毎に、限りなく、ふくらんでいきます▽

雄蝶一つ 香の誘いに

舞い挑む

乱れ咲きにし 美女菊

の君

△甘美な蜜の香りに昂ぶる蝶の羽ばたき、いたぶり。咲き誇る優美な花卉は、羞らいに喘ぎ、濡れ、乱れる……貴女にお贈りしたい私の画く一幅の絵です▽

神戸の「淋しき人」(七月号)へ

われも泣きぬ 悲しき君や 酔客の

賜りに覚めし おみな子の性(さが)

△その後、新しい幸せを掴まれたことですよ



うか。ここに添付した写真の主——小生のプ

レー・メイトが、貴女と同じ運命の女性であるだけに、今なお心にかかってなりません。未亡人というには、あまりにも若い貴女。幼な子をかかえ、懸命に生きるために選んだ馴れない職場のざわめきの中で、貴女の淋しさに堪える心の奥の、消えることはなかったであろう小さな火に、突然、荒々しく油を注いだ男たち。口惜し涙の中で動き出した貴女の新しい世界。その後、ど

んな悦びが貴女を包んでくれたことでしょうか▽

華麗なる君が変身 夢の世も

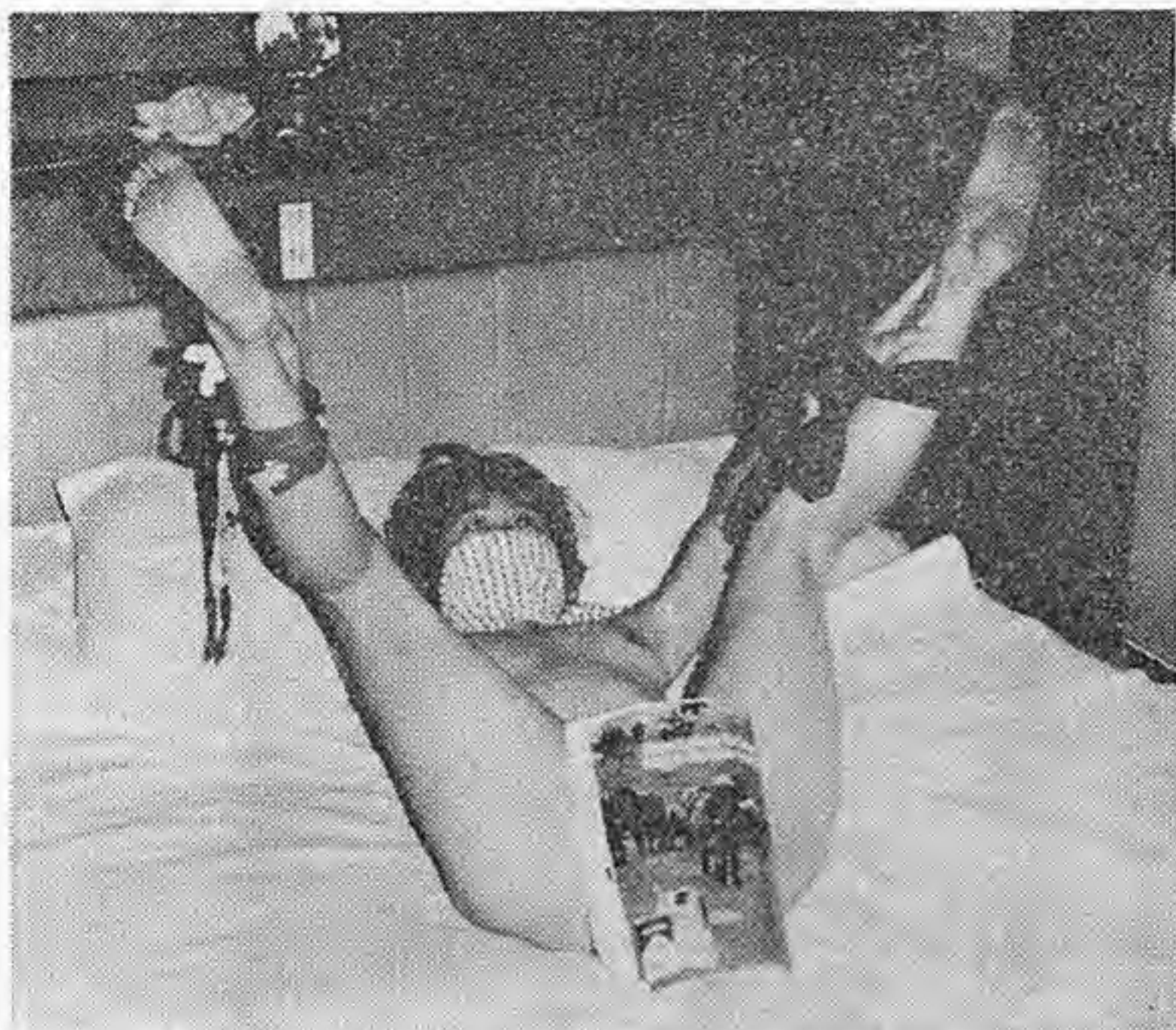
かくや まばゆし 縄の装い

△美しい縄の衣裳が、貴女のすべてを妖美に変えるのです。M女性への出発を、貴女にふさわしい夢のように華やいだムードの中で、もう一度やり直してみませんか!▽

大阪市の大谷美子様

姿見の君美しく わが縄





の  
装いにもまた 美しき君  
美しき女奴隷よ 誰が鞭に  
濡れて欲び 歌う君かは  
めくるめく縄目黒髪濡るる肌  
鏡まばゆし 緊縛の愛  
鏡の中に乱れ咲く、妖艶な緊縛ポーズ。貴

女ご自身が見惚  
れるような白い  
肌の、欲喜に満  
ちた輝きの、夢  
みるような美し  
さ。私は鏡にな  
りたい……♡

愛知  
の久保  
田道代  
様

さび  
しさに

強きおのこの 責め恋うる

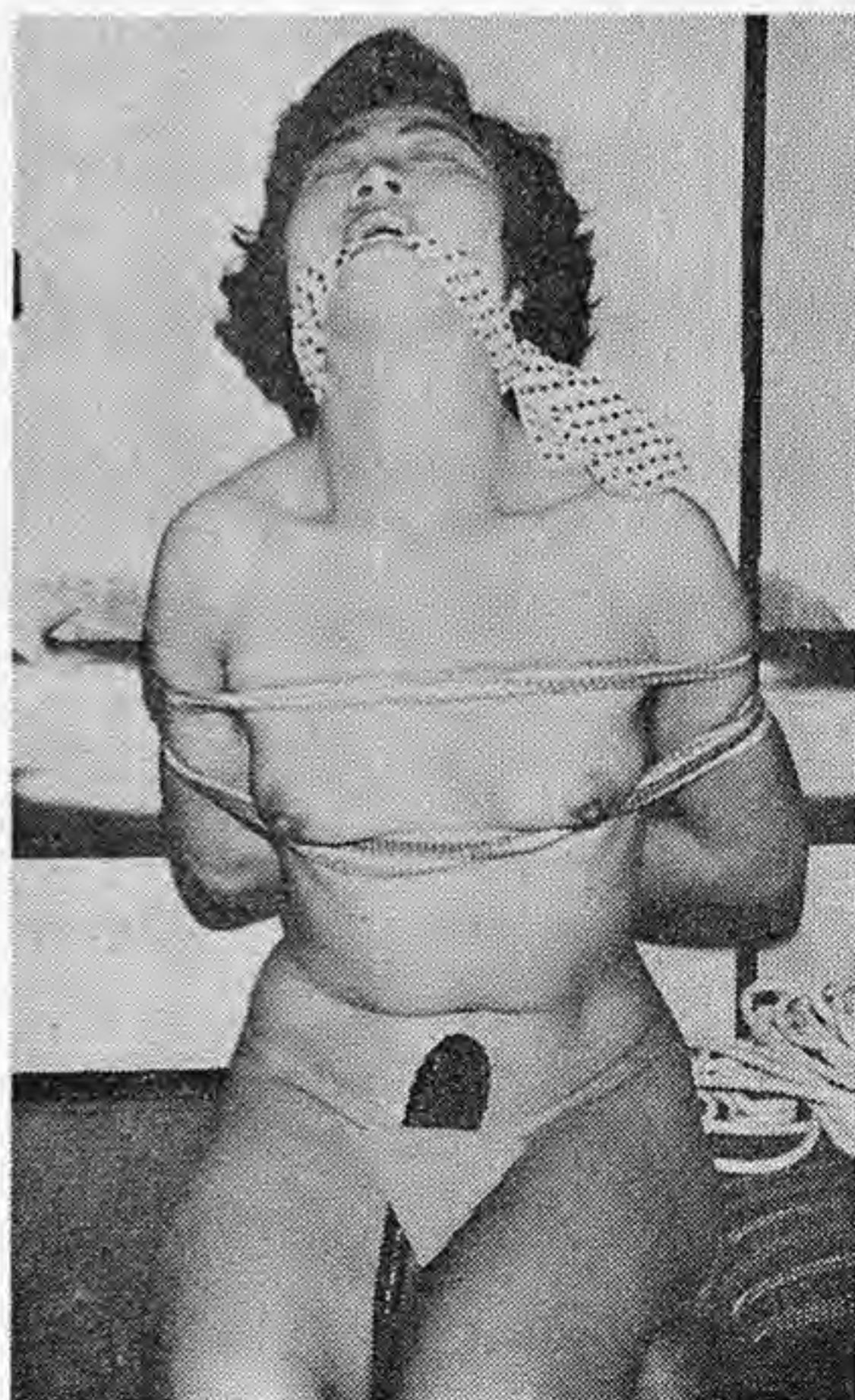
心愛（かな）しも 処女妻よ

君

われと来て 身を焦がしませ 羞  
らいも

身も世もあらぬ 悦虐の床

△許しあった仲だというのに、ご主人と互いに背を向けて寝る夜の、狂おしいばかりの長さ。独り悶えながら、いつしか貴女が辿る夢路には、どんな羞恥責めプレーが待っているのでしょうか♡



和歌山の橋本文代様

ふるさとの 浜に憩いて まどろめば

春の日長し 悦縛の夢

潮騒ぐ 縄をまといて 戯れに

波の颯りに 身をまかすもよし

△東京から郷里に帰られてから、静かな海辺の生活で、すっかりお元気になられたことでしょう。さんさんとふり注ぐ陽光の下に、しぶきに濡れて引き締まる縄の水着も心地よく波と遊ぶ貴女の日焼けした肌に、健康な潮の香が匂います……（初めの一首は本年四月の私の日記から）♡



門真市の峰田節子様

花よりも 美しき花 SM華(げ)

いのちの園は 散るときもなし

縛られて 羞恥に堪ゆる 悦びに

おみな生命(いのち)は 蘇り来む

△二十七才の若さなのに「花のいのちは短かくて……」などの感傷は、ご無用。一度でも良いからと貴女が望む緊縛羞恥責め——そのいのちを洗うような悦びが、女の若さと美し

さを創り、いつまでも貴女の花を咲かせ続け  
てくれるのです！ 思い切ってプレーに挑み  
ましょう▽

大阪市の志村加代様

一筋の縄に 幸せ待つ君の

いかに切なき 日々とかは知る

独り寝の 夢枕には 誰が人の

縛しめの愛 君は見るらむ

△現代の社会で、なお「三年子なきは去る」

の古い諺が生きてい  
る非情の事実、驚  
きと、悲憤を覚えま  
す。今度こそは、そ  
んな悪夢を断ち切れ  
る強く優しい男性に  
めぐり合って、その  
たくましい手で、も  
う離れられないよう  
に、身も心も、しっ  
かりと縛られていた  
い——そんな貴女の  
気持ちに、小生は思わ  
ず目がしらが、熱く  
なりました。どうか  
良縁がありますよう

に▽

守口市の古坂ナミ様

レスボスの愛は不知火 ますらおは

君噴き上ぐる 火の山の愛

△レスビアン<sup>レズビアン</sup>の愛は美しい。けれどそれは、  
夜の海に瞬く不知火のような、あるいは浜辺  
に、ちろちろと燃える漁火<sup>いかりび</sup>のような、小さな  
妖しい美しさ。筋骨たくましいS男性との愛  
のプレーの、強烈な火の玉のような美しさを  
一度でも知ったなら、素敵なテクニシャンで  
ある貴女のプレーの世界には、人生の、もっ  
と豊かな欲びが満ち溢れることでは  
うに……▽

囚われの女豹<sup>メネ</sup>美し 抗ええ

潤おう肌に 黒革の匂う

△レス・プレーの、美しいサディスティン役  
として貴女が振舞うときの衣裳係を、私が勤  
めることができたなら……貴女は、若い肢体  
に、ぴっちりフィットした黒のなめし革の  
コート・ダ・ジュールに、膝上まで伸びたロ  
ング・ブーツ。パートナーの彼女は、全身を  
包む黒い網タイツ姿で、首輪、両手錠、足鎖  
……。女調教師の貴女が振う鞭に挑む黒い女  
豹の絶叫——激しくも美しい争いを演出して  
みたいものですね▽





<告白>

蠟責めと浣腸の思い出



編集長さま――

先日は、大変ぶしつけで、失礼なお手紙を差し上げまして、本当に申し訳もございません。貴方様のお言葉に甘えまして、図々しくも二十枚ばかりの原稿を書いてしまいました

た。こんな拙い文で奇クの貴重な頁をさいていただくことは、どうかと思うのですが亡夫への供養のためにも（夫は本当に奇クが好きだったらしく、私が処分しました時は、段ボールのミカン箱三つに、ぎっしりと入っておりまして）できるだけ、載せていただけないでしょうか。

それから、先日のお便りにも書きましたのですが、緊縛のモデルとして誌上に出てみないかとお誘い、私のような女に、こんなにまで、お心づかいを下さいますて有難うございました。本当に嬉しく思います。

でも、私は自分の被縛写真を奇クに載せていただきますことにつきましては、全く自信がありません。それは第一には自分の身体が、それに適していないと思うからです。こ

村田恭子

んなヤセギスで、ぶ格好な女は、他にいないのではないのでしょうか。たとえ写真が出来ましても、グラビアはおろか、雑誌の中の普通のページですら、発表できるような立派な身体ではないのです。

第二に夫以外の人間には、自分の裸を見られたくない、触れられたくないのです。SMプレイをすれば、当然の結果として、行きたいところまで行ってしまうでしょう。奇ク、いくつかの記事を読みまして、肉関係に及んでいるように思えてなりません。及んでいなかったとしても、少なくともそれを暗示させる様な文章が、随所に見受けられます。

私自身、「そこまでゆくな」とは決して申しません。むしろ、これ程のプレイを行なえ



ば関係が出来て当然だと思っっている位です。でも、私はプレイで夫以外の方々に心身を任せることは好きなことではないのです。

『古い女』『バカな女』と、お笑いになりますか？ 笑われても致し方ございません。現代のようなフリーセックスと高らかに叫ばれています時代に、こんな考え方をしているようでは、笑われても仕方ありませんが、私は好きになれないのです。

第三に、もし奇ク誌上に私の写真が載ったとしたら、私はもう、今のこの静かな部屋にいたたまれないかもしれません。私は、それが一番恐ろしいのです。私が奇クの愛読者であることを、私の周囲の人々には知られたくないのです。知られては困るのです。

奇クがもし、私の意を少しでも汲んで下さるのでしたら、このまま静かにしておいていただけませんでしょうか。

編集長さま――

私は旅行が大好きです。毎年、一、二度は必ず、どこかに出かけます。それも、できるだけ人のいないところを求めて歩きます。大自然とは大変、良いものでございます。果てしなく続く山々、無限の広さを持つ青い空、吸い込まれるような大海原。日頃うっせきし

た気持が晴れるのは、この時だけなのです。

神戸市須磨区の離宮公園の近くに実姉が嫁いでおりまして、一年か二年に一回ぐらいは必ず出かけております。今年の夏も出かけました。

前回に出かけましたのは万国博のあった年です。前年、二年ぶりというわけですが、離宮公園のあたりに人も人が多くなったのに、おどろきました。住宅地の造成が、凄い勢いで進んでいて、今まで青々としていた山が、赤い山肌を見せているのです。

来年の春か秋に、また神戸に行く予定でございますので、その時点で、私の気持にいくぶんの変化でもございましたら必ず連絡いたします。その時には、よろしくお願い申し上げます。

八月三十日

村田 恭子

奇譚クラブ編集長さま

○

私が二つの用件のために東京に出向きました。八月二十六日は、夏の割りには涼しい日でした。一つは高校時代の友人に会うため、そしてもう一つは、毎月二十五日に発売される奇クを購入するためでございます。

十一時頃、横浜を出まして、九段で友人の

K子と会い、そこで昼食をとりながら、二人で学校時代のなつかしい思い出に花を咲かせました。三時頃、レストランを出まして、その足で水道橋に向かいました。

神田、水道橋附近には、書店が軒を並べております。その一角で、私は、ある書店に入りました。店内は外気の明るさに慣れた目には薄暗く、学生風の若者がマルクスの資本論を立ち読みしていました。そのうしろを、す通りしてピンクコーナーの前にさしかかりました。そこには、ひと目で成人雑誌とわかるどぎつい表紙の本と共に、奇クの9月号と10月号が肩をならべておいてあるではありませんか。

私はそれを見た瞬間、急に胸の高まりをおぼえました。そして、そのまわりを見て見ぬふりをして、頭の中では、「買いたい。でも恥かしい」と思いながら私は、そばの学術書の前に立ち、一冊の本を書棚から取り出して立ち読みするのでした。「9月号や10月号には、どんなことが載っているかしら。私の好きなロー責めは載っているかな」などと、立ち読みしている本とは全く無関係なことを考えていました。

「奇クの二冊を買うのに、どうして、こんな



に氣を使わなくてはならないのかしら」

そんな思いが頭の中を交錯して、何分たつたでしょうか。五分か十分でもあったでしょう。けれど、私には一時間、いや二時間もの長い間に思われたのです。

「自分のほしいものを自分のお金で買うことに、何の遠慮がいるものか」

そう思い決めますと、お客の少なくなったのを見計らって、ツカツカとピンクコーナーの前に向かい、その勢いで奇クの10月号を手にとりました。

手にとりました瞬間、心臓が再びドキドキしてきました。もしかしたら、この間、編集部に送った告白文について何か載っているのではないか、と思いながらも、それを見つめる余裕すらありません。もどかしげに二、三ページ繰ってみまして、パタンと本をとじますと、至って平静を装い、「これ下さい」と本屋のおじさんに渡したのです。

おじさんは、何くわぬ顔で「八百円です」と、いいました。女がこんな本を買うなんてと、おじさんは心の中で、そう思っていたのではないのでしょうか。店内のお客の視線が、一斉に、こちらに向けられている様な気がしてなりません。私はハンドバッグから財布を

取り出し、千円札を一枚、渡しますと、袋に入れられた二冊をショッピングバッグの奥底に、かくすように、しまいました。百円玉が九枚あったのに、それを数えることすら出来ないのです。

逃げるように、こそそこそと店を出ようとす

る私に、おじさんが「もしもし、お客さん」と声をかけるのです。

ギクリとして振りかえる私に、「おつりですよ」と二百円を渡してくれるのでした。私は黙って、それをうけとりますと、一目散にそのお店をとびだしていたのです。

しばらく歩くうちに、ようやく平静に戻った私は地下鉄に乗りました。時計は四時を少し回っていました。

轟音と共にすべり込んできた車輦の中は、差程混んではいなかったのですが、あいにくと坐れる席はありませんでした。電車が出発し、ようやくホッと一息ついてドアの硝子越しに見る外は闇一色です。外が暗くて内らが明るいものですから、硝子は丁度、鏡の役目をしているのです。

私は、鏡の中の自分に、そっと問いかけてみました。

「こら恭子。お前みたいなアブな人間はいな

いぞ。毎日のようにローソクで自分を慰めるなんて——」そう思いながらも、また反面、「いいのよ、いいのよ。わけもわからぬ男と肉体関係を結ぶよりは、そのほうが、どんなにか清潔だわ」と思うのです。

「この二冊には、どんなことが載っているのだろうか。私の文は載っているのかな。いや、そんなことはあるまい。あんな下手な文を載せてくれるわけもないわ」

「夫が生きていたら、今頃、何をしていただろうか。きっと夕食のお買物でもしていただろうな。二人だけの夜には、蟬の喜びを与えてくれたにちがいないわ。私が奇クを買ったなんていったら、ヘー、お前がねエ」とおどろくにきまってるわ」

そんなことを、とめどもなく考えていたのです。

○

一時間半の道のりを半日にも感じながら、家に着いた私は、とるものもとあえず、ストッキングもはずさないまま、二冊の奇クをテーブルの上におきました。

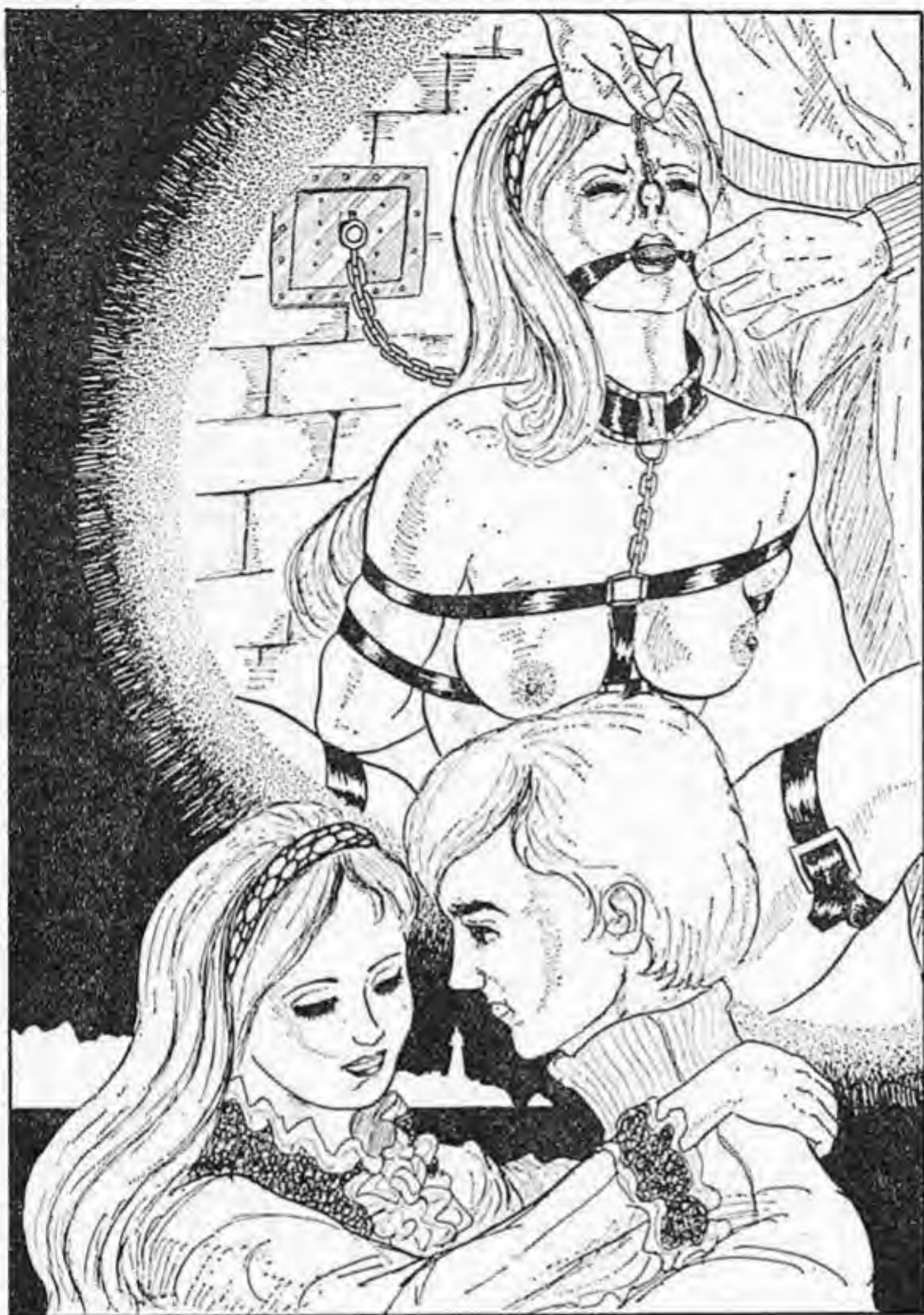
「七月の二十日頃、送ったのだから、載っているとすれば十月号だわ」と思い、十月号をパラパラと、めくってみました。



「何も載ってないわ。だめだったのね、あんな文章では——。それとも十一月号に載るのかしら」と、早合点をして、なかばがっかりしながら、グラビアの緊縛写真を眺めていたのです。

何ページかの緊縛感あふれるグラビアの中の一枚に私の目がとまりました。笠井奈保子さんとおっしゃる方の被縛写真なのです。

深々とくい込んだサルグツワとツンと突起



……イメージギャラリー……

『だからこそOKなの』

……

飯田ひろくに

した乳房が私の目を奪いました。左腕は縄目も痛々しいくらいに鮮かなのです。

「私と同じくらいの年かしら、この人。私もこんなふうにして縛られてみたいナ。でも、こんなに堂々と写真を載せて、この人、恥かしくないのかしら。夫が生きていたら、こんなふうにくれたのに。この身体に、沢山の蠟の花びらを咲かせてくれたわ。でも、縛られるのなら、愛している人でなければ、いやだわ」

などと、勝手なことを考えながら、なにげなく目次のページに目をやりましたら、「ローソク責めの魅力と快味——村田恭子」という見出しが目につきました。

「あら？ ハテナ？」と思ひまして、一八二頁を開いてみました。

そうです。私の下手な文章が載っているではありませんか。しかも、村田恭子という名前まで頂いて——。

私はゆっくりと、その文を読みはじめました。

自分の書いた文が、こうして立派に活字になって、それをゆっくりと読み返す……。なにか、くすぐったい様な、テレくさい様な感じでした。



文は編集部の方が手を加えて下さいまして見違える様に良く出来上がっているのです。私の拙い文章だけでは、どう致しましても活字になるものではございません。

料理学校の先生が、「粗末な材料でも料理の仕方によっては、おいしいものになりますよ」とおっしゃった言葉を、ゆくりなくも思い出しました。

私は夫の位牌の前に、そのページをひろげて、「あなた、ご覧になって。私の書いたことが、あなたから教えられたことが、こうして本に載っているのよ。あなたの愛読していた奇クに載っているのよ。下手な文章だけど精一杯、書いたのよ」と、亡き夫に呼びかけてみるのです。

その時、何故だか急に泣きたくなくなってしまったのです。誰に遠慮することとてない一人暮しの身ですもの、泣きたいときには十分、涙を流すことにしているのです。

涙は流れて止めようもありません。テーブルにうつ伏して、どのくらい泣いておりましたでしょうか。空はすでに、とっぷりと暮れておりました。

## ○

アメリカの古い歌に、『女房を日曜日にセ

ツカンするのは、恥かしいことです』 It's a Shame to whip your wife on Sunday. (米フオークウェイズ・レコードFA二三九六) というのがございます。

モーゼの十戒の中の「汝、安息日を聖とすべし」というところあたりからヒントを得て作られた歌なのでしょうが、私達夫婦は、無神論者でありましたし、日曜の夜ともなれば夕食もそそくさとすませてプレイに没入するのが、ならわしでございました。

普通の方がお考えになるのであれば「土曜日の晩のほうがいいだろう。翌日は遅くまで寝てられるから——」と申されるかも知れませんが、夫は勤めで神経をすりへらして帰った夜よりも、一日中ぼさっとして過ごしていた休日の晩のほうがプレイに熱中できると、よく申しておりました。ですから休みの日のプレイは、ウィーク・デイのそれに比べて、一段と激しいものでした。

快樂よりも苦痛と感ぜられる時が、しばしばでした。

今、考えますと、夫は、奇クに載せられておりますようなプレイのほとんどを、この私に実施していたのではないかと思います。緊縛は勿論のこと、ムチ打ち、浣腸、針責め、

ロー責め等、かぞえ上げれば切りがございません。サロメチールを花園に塗りこめられたこともございます。

私はプレイの最初の頃、ずい分と考えさせられたものでございます。「こんな変態みたいな男と一生やっていけるかしら。この人はなぜ、こんな痴戯が好きなのかしら」と。でも、いつでしたか、女性週刊誌で、そんな男性を夫に持った女性の話とか、どんな行為も究極の目的の為に、単なる前戯である——という様なことも読んだことがございますしそんな変態的な愛撫をするからといって、別れてしまうという様なことは考えてみたこともございませんでした。

一番いやだったのは、針で身体中、つつかれたことでした。

七月号のカメラハントでは羽毛の先端に針をつけて、女体を標的にダートゲームを行なうようなことが載っておりましたが、私ならきつと泣き叫ぶに違いありません。針は注射だって、いやなのです。

夫が私にそれを行なった時、私は「あなた止めてよ、痛いわよ」と、泣いて哀願したのですが、許してくれず、一晩中、それで責めさいなまれたことがございました。



私は頭にきまして、二、三日、ロクに口もきかずに過ごしたことがあります。夫はそれを悟ったかのように、二度と針責めは致しませんでした。実際、快楽を得られないプレイほど、苦しいものはございません。

浣腸されたことも、何度もございました。

夫は奇クを読んでおりましたので、エネマとか、イルリガートルとかいう様な道具を、よく説明してくれたのですが、なかなか求め難いものだったのでしょうか、「そのうち、手に入れてみせる」などと言っておきながら、とうとう、その夢も果たせず、短い一生を終えてしまったのです。

はじめの頃は、イチジクだけだったのですが、そのうち、少量ではもの足りなくなったりしくて、一寸した小道具を考えだすようになりました。夫は太さ一センチぐらいの細いガス用のゴム管を一メートルほどの長さに切り、私の後方にインサートしますと、私をおむけにして、その管の先端に漏斗をつけ、そこに二〇〇CCのメジャーカップを使って何回も水を注ぎこむのです。いつも三回ぐらい、そのカップを使いますと、極限状態に達してしまうのですが、最高、五回使ったことがございました。

いつもゴム管を挿入します時には、できるだけ深く入れるのです。十五センチぐらいは入るでしょうか。菊の花は出入口のところに筋肉みたいなのがありまして、そこで一時的に拒絶反応をうけるのですが、無理して入れてしまいますと、あとはスルスル楽に入っていきます。

ただの水で飽きたりなくなった夫は、私の体内にウイスキーを使用したこともありました。ウイスキーの時などは、注ぎこまれたとたん、キリキリと刺すような軽い痛みともつかない刺激をおぼえました。私はその時、まさか、それがお酒などとは思ってもみなかったものですから、ふだんの時とは一種、変わった感覚におどろきまして、「あなた、何入れたの？ 何なの？」と、ききました。そうしたら「あててみる」などと、うす笑いをうかべているのです。

その時、あのブーンとした匂いで、アルコールだということがわかったのです。

「どうだ、甘いか、辛いかなどと、平気で言うのです。

「馬鹿ね、そんなこと、わかるわけないでしょ。口から飲んでるんじゃないもの」と言ったら、夫はゲラゲラ笑いこけておりました。

ウイスキーとは、ひどいものでして、排泄の瞬間も、菊花が爛れるような熱さをおぼえましたし、数分後には、あたまがフラフラしてベツトリと冷汗をかいて酔っぱらった様な気分になってしまいました。

何と申しまして、夫とのプレイは、ロー責めが一番、心に強く残っております。

ロー責めは浣腸の次に知りました快楽なのです。私がSMプレイに本格的に興味を持つ様になりましたのも、このプレイですから。

私達はロー責めを『キャンプ』と呼んでいました。キャンドル・プレイの略なのです。

浣腸のことは、エネマ・プレイ、略してエムピー(MP)と呼んでいました。

MPとキャンプは、私達二人が最もよく行ったSMプレイなので、二人だけに判るように暗号をつくっておいたのです。

でも、ローソクのプレイを行ないましたのは、ほんとに、ひよんな、きっかけからだっただけです。

それはある夜、床に就く間際に突然、停電しました。そのまま寝てしまえば、あるいは行なわれなかったかも知れません。でもSM狂の夫のことでしたから、時間の問題でしかなかったかもしれませぬけれど……。



暗闇の中を、夫は手さぐりでローソクを棚の上の箱から取り出し火をつけました。

「俺があがるのが早いか、蠟が燃えつきるのが早いか、いっちょう、やってみるか」

「いいわよ、面白そうね」

夫の挑戦に私は言ったものの、急に言われましても、情熱の炎はマッチで火をつける様に、そう簡単にはまいりません。そうこうしているうちに、使いさしのローは燃えつきてしまったのです。すると夫は、やにわに立ち上がり、新しいローソク二本を取り出し、火をつけると一本を部屋の隅のテーブルの上において、もう一本を私の上にもってくると、ローの雫を一滴、二滴と、したたらせるのでした。いく分、夢見心地になっておりました私は、びっくりして、

「何をするの、あなた！」と、思わず、大声を出してしまいました。

「まあまあ、そう、さわぐな。隣（夫の父母とは別棟でしたが、同じ敷地内に住んでいました）が目をさますぞ。これもSMのうちの一つさ」と言うのです。

私は尚も、「あつい、あついわ」を連発しておりますと、夫は、「うるさいナ」と言っ

て箆笥の一番下の抽出しから、いつもの様にロープを取り出し、私を押さえつけ、身につけていたネグリジェをはぎとると、後ろ手に縛り上げてしまいました。そして、マクラカバのタオルを使って、しっかりとサルグツワまでしてしまったのです。

そうして、私をタタミの上にころがすと、一滴、また一滴と、ポタポタ私の身体にロー

涙を浴びせるのでした。

肩、胸、腹、腰——と、ところきらず熱ローをたらしておいて、やがて足を大きくひろげて花園、太股、向こうずね。身体を裏がえしにして、背中、組合わせている腕、双腎二つの山を押しひろげておいて、その奥に咲く菊の花、そして胫と、文字通り、全身くまなくローの洗礼をうけたのです。

私は、だんだんと陶酔みたいなものを感じてしまったのです。特に皮膚のやわらかい部分にローの花びらが咲いた時などは、全身を何かがかき抜ける様な感じがしまして、身体中がケイレンしたことを覚えております。

ローの妖しい魅力との出会いは、これが始めてでした。針やムチには感じることの出来ない快い刺激がありました。

翌朝、夫は「お前、ゆうべは、だいぶん良かったんだろう」などと、冷やかすのです。

私は真赤になって、「そんなこと」と言っ

たり、二の句が告げませんでした。そんなことがあってから後、私達夫婦は、毎晩のように、このロープレイを楽しんだのです。

ある時など、私の両足首を五十センチぐらい開かせて箆の柄に縛りつけると、エビの形にしておいて、夫は私の顔の上に正座する様にまたがり、「しゃぶってみろ、お前の花園にローをたらしてやる」と言っ

て、縛った私の両足を腹部におしつけるのでした。

また、ある夜、開股逆さ吊りにした私の前と後に、ローソクをさし込み、「おい、すこいぞ。こんな見事なインテリア照明は見たことがない」などと、血が頭に下りて苦んでいる私をよそに言いたい放題を言うのでした。

いつでしたか、例によって、全裸にされ、しっかりとサルグツワまでかまされ、念入りに縛り上げられました私に、夫は、「お前、京都の大文字焼きって知ってるだろう。あれは草木を集めて焼くんだぞ」と言うのです。

その時、私は、いつにない夫の目の輝きから、自分に対して、これからしようとしていることを、とっさに読みとりました。首を激しく横にふって拒絶したのですが、夫はロー



に火をつけると私に近寄ってきました。

私はぞっとして、後手に縛られている全裸の身も考えずに寝室を飛び出していました。

飛び出したものの、部屋を出たところで、まごまごしておりますと、夫が近寄ってきて、

「冗談、冗談だよ。ハハハ……」と、笑ってごまかすのです。寝室へ戻ってから、

「何も、あんなに驚かなくなっちゃって、いいじゃないか、こっちの方が、びっくりしたぞ」

私のサルグツワと縄をときながら言うのです。私は夫の身体にしがみついて、「バカ、

バカ、バカ」と泣きじゃくりながら、こぶしで夫を、ところきらわず叩いていました。

夫と過ごしたのは、わずか三年足らずの間でしたが、夫は私に、夫のすべてを残してくれた様な気がするのです。夫との思い出は、まだまだ沢山あるのですが、表現力の乏しい

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

私にとりまして、これだけ書くのも、やっとのことなのです。

高校時代に、『去年マリエンバートで』という映画を見たことがあります。その映画は八人間の記憶の回想は、テレビジョンが古い映画を放送するように、正確にはいかなかったのだ。ABCDEという順序の追想も、Eから始まったり、Gから始まったり、或は順序が逆になってしまいが、それなりに一環した画像を再現できるのが人間の記憶であるVという内容でした。今の私の頭の中は、全くその通りなのです。

私はいま、夫の持っていた性癖と、夫によって導き出された私のそれとを、その道の専門誌である奇譚クラブに発表させて頂き、同じ性癖に悩むすべての方々に、ご理解願うことが、亡き夫への最大のプレゼントだと思っております。

編集長さま——。

八月の末から書き出しまして、今、やっとこの拙い手記を書き終わりました。

生前の夫が心から愛読しておりました奇譚クラブにこそ、この私の文章を発表して頂きたいと思って、ここにお送りいたします。

この前も申し上げましたが、もしお載せ下さいましても、原稿料などお送り下さいませ。ことは、一切不要でございます。もし、それでは、どうしても、お氣がすまないとおっしゃるなら、どこか適当なところへ、寄附して下さいませ。

そのかわりと申しましては失礼でございますが、編集長さまじききのお便りでも賜れば、これに過ぐる幸せはございません。

それから、女の私が、こんなことをお願いして変にお思いかもしれませんが、もし、お許し願えるならば、緊縛された女性の写真、一枚でも二枚でも、お送り頂ければ、大変うれいんですけれど……。

末筆ながら、貴誌のご発展を、はるか横浜の地から、お祈り申し上げます。

かしこ

九月二日

神奈川県横浜市港北区××町一二三

〇〇荘アパート内

村田 恭子

奇譚クラブ編集長さま





## 美女対決 (二)

鬼源の叱咤に追いたてられる静子夫人は、もはや女性としての感情が失せたようにトロリとした瞳をあてどのない方へさまよわせている。

触れなば落ちんばかりに熟しかった両の乳房は、ヌメヌメした脂汗にまみれ、硬く硬く硬直した乳首が汚辱の行使をまつように時々

連載・S大河小説

パ  
ロ  
デ  
イ

花

と

蛇

(十二)

山

光

純

ピクピクと、ゆれる。彼女の、もっともやわらかい隅々に、たっぷりと配された塗り薬は情容赦もなく、その豊満にうねった肉体に、悪魔のような情念のゆさぶりをかけているらしかった。

哀れな美女は、ともすれば残忍につき上げてくる衝動に、懸命に耐えている。もし、不用意に刺戟を強めることにでもなれば、対決を前にしながらどのように狂悶してしまうか——一たび弾み車が動きだせば……その虞れ

が、彼女の軀の動きと、表情を奪っているのだった。

一方の小夜子は畏にかかった白兎そのままである。静子夫人とはちがって、どうしようもなくオロオロし、はては、ぶるぶる慄える指先から器具をとり落としてしまう始末で、「いいから、早く始めな！」と大向こうから声がかかる。その蜚声も普段より一オクターブ高く、見物の反応のたしかさが鬼源に浪のように伝わってくる。



小声で小夜子を叱りつけていた鬼源も、とうとうその催促にたまりかね、「チエッ！」と舌打ちをしたかと思うと、

「客人の前で、恥をかかせたな。おぼえていやがれ」

と毒づき、山なりに立てている静脈の浮いた腿をピシヤリとやり、さらに開かせる。

こうまでいじらしく、ういういしく、娘の恋々の羞恥をこめて、午后のひかりを浴びることなど、ふつうはあり得ようはずのものはなかった。

深海にすんでいる、なよなよした魚類の息たえだえな白いはら。生まれたばかりのみどりごの肌いろ。朝つゆのなかで、ひっそりと開く百合の花。

見るものを恍惚とさせるものは、うつくしいものにほかならない。すべての人は、その恍惚を手にしようとし、往々にして人生を棒にふる。道ばたの仏や、天かける虹は、ともにうつくしいものである。うつくしいものに定義はない。

開かれた小夜子は息たえだえな、うつくしい令嬢であった。しかもその美しさが、鬼源の手によって、さらにおし拡げられるのである。まるですぐれた外科医のような確かな手

付きを見せる、赤禪一丁の男を、客たちは信じられぬ目つきで凝視するのだ。

痛々しいまでに透明な白さをもった美肌はピンと張りつめ、こらえきれない咬りなきをもらしている。こうした、死にもまさる扱いを受けながらも、弱々しい抗議すらもできないでいるこの整った目鼻立ちの美貌の娘を見物していると、逆に、より一層の嗜虐心が男たちの中でメラメラと燃えあがるのである。鬼源は片頬にうすら笑いを浮かべて、一ひねりする。

「……あ、うう……」

と含み声を洩らした小夜子は、ぐうっと弓なりにそりかえり、赤い唇から皓い糸切歯をこぼれさせる。

乳房と双臀こそ、静子夫人に迫ろうとしているが、いま一つ肉の厚みが足りない、ややアンバランスにも見える彼女の体の、信じがたい思いをさせるほどの収容力を目のあたりにした満座に、吐息がもれる。

「——畜生、最高だな……」

と誰かが、いかにも感に耐えないというようにに呟いた。

鬼源は、小夜子にだけ聞こえるように、「どうでい、そう具合の悪いもんでもねえだ

ろう。いいか、若えお前が根かぎりをつくせば、静子に勝てるかも知れねえ。いや、勝てると俺が保証してやってもいい。だが死物狂いで取っかからなきゃだめだぜ」

と有無をいわせない強要と、おだて上げをまぜて、小夜子から心理的な懸念をとっばらうようにする。

パツチリとした明眸をあげた小夜子は、豊かな髪をゆすりあげ、鬼源の視線に万感をこめる。

鬼源は八仲々いいぜ、お前は。まあ、俺がみっちり仕込んでやるVという位のところでぐいと顎を、しゃくるのだ。

「さあて客人方、いろいろと手間をかけやして申し訳もありやせん。女ども二疋、準備ができやしたから、いよいよ勝負にとりかからせやす」

すっかり上気している美貌を交互に眺めながら、客たちはほとんど信じられぬ顔付で、満面の脂汗をぬぐうのさえ忘れていた。なかなか頭のはげ上がったガマ会長は、ポカンと口をあけて彫像のように美しい静子夫人に喰いつかんばかりだ。

彼は興奮のあまり、「がんばれ、静子さん！」



と大声をあげてしまい、満座の失笑を買ってしまふ。

その胴間声をはっきりと耳にした静子夫人は、うすいベールをかむったように滲んでいゝ優雅な面を会長にむけ、すがりつくような微笑をうかべてみせる。

叱責され、折檻ばかりされている性奴隷の彼女にとって、アルコールが入った冷やかしまじりであつたにせよ、それは心に沁みるような力づけなのにながらなかつた。

この珍勝負を撮影する二台の8ミリフィルムが、この時、目にも眩いライトをつけた。用意よしと鬼源はきわめて非情に、家畜を追いたてるようにして勝負のポーズをとらせる。

二人を一米ほど離れて向き合わせ、一たん膝ではなく足裏を床につけた四ツん這いにさせ、改めて両手を後ろにつくように命じる。すると四ツん這いとは逆に胸と腹を天井に向け両手と足裏で身体を支えるポーズとなる。ゆるく膝を折りまげ、たっぷりした尻を床から二、三寸、もちあげさせる。

文字通り棒を飲んだ形で、モゾモゾと動く二人の美体をせきたてながら、「何をもたもたやってるんだ。これ位のこと

が出来なきや、これから先、とうてい務めが果たせねえぞ」

と、静子夫人の逞しい臀部に、ピシヤリときつい平手打ちをくれる。8ミリが、すかさずアップで捉える。

羞恥と哀愁に濡れそぼった彼女は、長い睫毛を、しばたたき、慄える声で「すみません……」真白い尻の半球についた手形の赤さが生々しい肉感をそそり立てる。

にやりと思わず片頬をゆるめ、調教の効果きたしかめた鬼源は、屈辱的なポーズの女たちの、それぞれ器具の端を、手ばやく器用に紐で結びつける。そして、ことさら静子夫人に向かつて、

「大体、お前がのそのそしてやがるから小夜子も見習っちゃまうんだ。年増のお前が悪いんだから、罰だぜ」

と、やにわに、静子夫人の器具につながっている紐を、一寸ばかり引いたのだ。

あつと、狼狽する麗人は双臀をゆすって抗議するが、すでに勝負は始まろうとしているので受け付けられようはずはない。

そのやりとりを、糸のように細くした金壺眼にギラギラする光をたたえて見守っていた千代は、又しても鬼源の心得きつたプロらし

さに感心するのだ。何しろ静子の、鍛えぬかれた力は抜群なのだ。

先に、彼女は二つのハンディを与えられているが、これは三つ目のハンディというべきである。こうすることによって、対決の結着は、いよいよ予断をゆるさないものになったわけである……。

こうして、二人をつないでいる紐は張られた。もはや嫌応もなく羞すべき勝負をつけるように追いこまれた裸女は、吐く息吸う息にピンクの含み声をまじえて、お互いに視線を合わせることは、とてもできない。強要された対決のポーズが、見物人の劣情を、いやが上にも、あおり立てる。

「では、二人とも覚悟はいいな——」

鬼源のドスのきいた声が、円形をつくって今にも触れるばかりに群がっている見物たちの耳にひびき渡った。

と、それに押しかぶせるように、ただムクと身悶えるばかりだった小夜子が、凄艶な表情で叫んだのだ。

「し、静子お姉さま、もうこうなった以上、小夜子は死んだつもりになってお姉さまにぶつかってゆくから、よくってね！」

若い令嬢は身も世もあらぬドン底から這い



あがる決意に、みちみちているのだった。

「よし、勝負！」

たちまち、どっと上がる歓声のなかで、前代未聞の綱引きは開始された。

美女たちをつないでいる紐は、たちまちピンと張られ、きっちり真中に結びつけて床に垂らしてある赤い目印が、ほんのわずかだけ右に寄る。慎重に相手を引きずり出すのがコツである。

右は静子夫人、左側が小夜子である。

静子夫人は瞑目し、一方の令嬢は美しい眉目を大きく開いているちがいはあったが、いずれも艶やかな喉元に深い血筋が浮かびあがっている。

小夜子はみるみるうちに紅潮し、脂汗にまみれた。砕けるばかりに皓齒をかみ合わせ、必死にいきむ。すこしも垂れていない丸い乳房の谷間を汗はしたたり流れた。夫人を睨みつけている瞳に妖しい輝きがある。

静子は、あたかも天に祈るように喉をのけぞらせ、双眸をとじたままだ。そのなめらかに光った肩は血の気をうしなって大理石のようだ。

若い娘の臍のあたりが、大波のようにゆれ

はじめた。8ミリのジージー唸る音のなかでも荒い呼吸は、はっきりと聞かれる。

真ん中の赤い目印が、また静子のほうに片よった。

「ああ、ううう……くくく……」

尻をよじりながら小夜子は洗面をつくる。

かといって静子とて無傷ではない。鬼源が勝負開始の時につけたハンディ・キャップよりは、よほど前に出ている。それは、ネットリと鈍くライトをはねかえしているのだ。その状態から、彼女に塗られた多量の薬が、どのような潤滑の効果をあたえているかが想像できた。鼻をうつ、濃い体臭。

「ああ……もう、ダメだわ！……」

と小夜子の絶叫に近い悲鳴があがる。

こうなっては、もう小夜子に勝目はない。ただ狂うばかりに締めつけているのだが、それはヌルヌルとしたウナギでもあるかのように、ズルズルと通過してゆくのだ。

「だめ、ダメ……くやしい、くやしい……」

敗者にあたえられるという恐ろしい罰を思うと、小夜子の狂おしい体内でめちゃくちゃに火花がはじける。彼女は、もう殺されるのだと思った。

その目も眩む恐怖からのがれるため、小夜

子は、ついに最後のワン・チャンスに賭けたのである。

彼女は、やにわに腹を高くもち上げ、狂乱したように、はげしい勢いで双臀を手前に引きこんだのだ。その一瞬、

「……」

「――」

とても形容のつかない悲鳴と嬌声が二人の裸女の唇から同時に洩れた。

ほとんど間を置かず、獣のように血走った視線を当てていた見物たちからも、叫び声があがったのだ。

「やった！」

ほとんど奇跡のような逆転劇が演じられたのだ。

静子夫人から、匕首のようにキラリとライトに光って離れた器具がポトリと落ちた。かといって、小夜子の勝利も僅かに紙一重だけで、女体が不自然な、きついポーズをくずすと、たちまち絨氈の上に転がった。

時計の動きからすれば短かった対決の刻も、ヒロインの裸女にとってそれは無限とも思われたにちがいない。

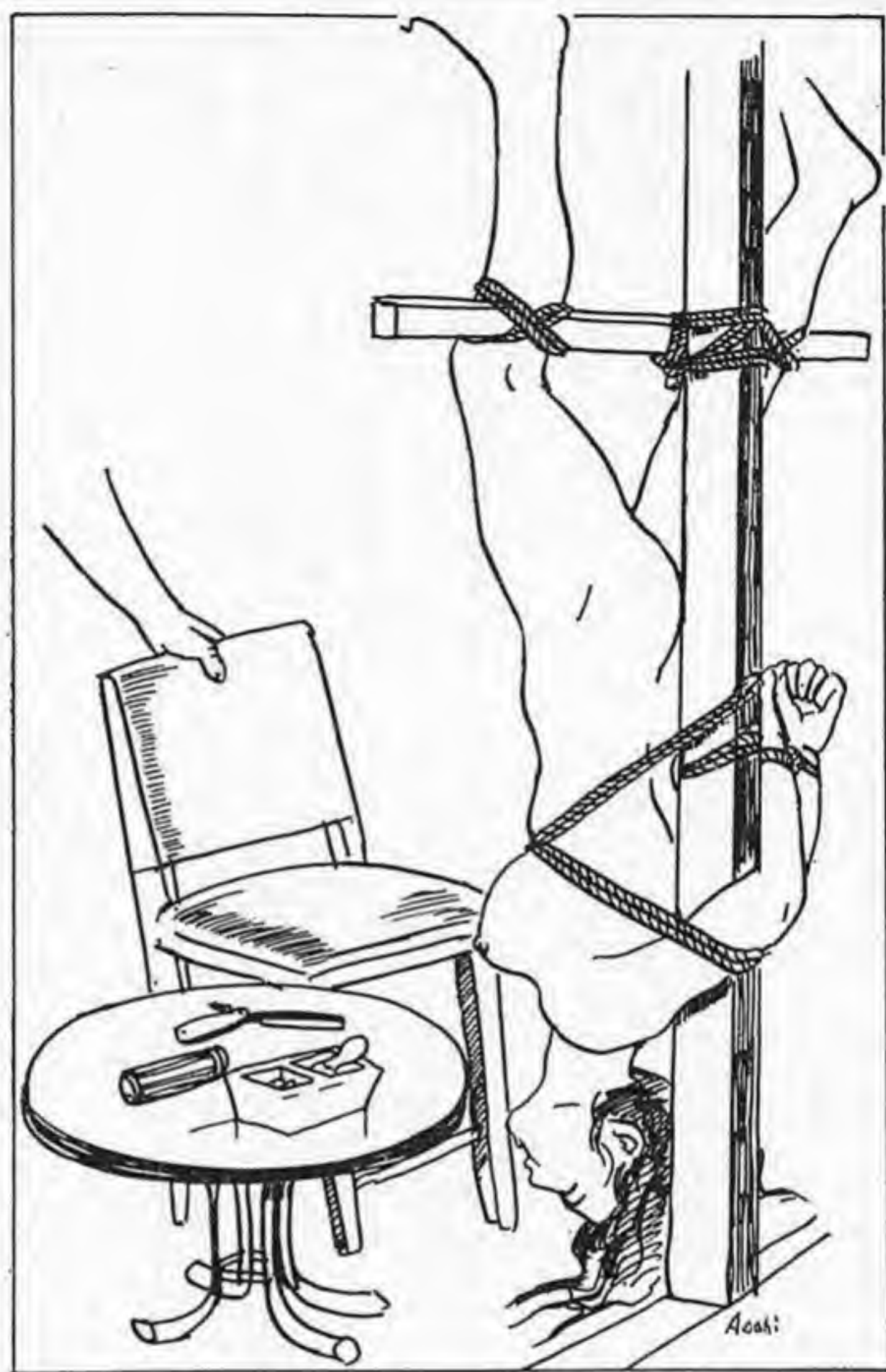
極限の疲労に、勝ったはずの小夜子は仰臥したまま、かろうじて両肢をすり合わせ、息



イメージギャラリー

『準備完了』 須坂

旭



をつまらせながら噓び泣いている。勝負のほ  
てりは残照のように、ほどよく全身を染め、  
その若々しい肌のうねりを、こよなく美しい  
ものにみせた。細かな痙攣が、さざ波のよう  
にピクッピクッと内腿を走る。

静子夫人はといえば、口元に凍りついた笑

みを浮かべ、嚙り泣く小夜子に優しいいたわ  
りをこめた視線を注いでいる。象牙のような  
シミ一つない肌。名匠の手になる伝説の人魚  
像のように、曲線のそこかしこから犯し難い  
気品があふれているのだった。たった今まで  
の卑猥なポーズは、すでに微塵も感じとれな

かった。

やがて彼女は、片手で乳房をかくし両肢を  
びったりと閉じて小夜子の傍により、優しく  
抱きおこしてやる。

「どなたか、タオルをお借しくださいますし。

小夜ちゃん、こんなひどい汗ですもの」

と、しっとりした声で頼む。その間にも無

残に転がっている器具を人目につかない様に

膝の下にかくすのにも抜かりはない。ほつれ

た髪をなでつけ、まだ涙を流しているお嬢さ

んを、あやすように頬ずりをしてやるのだ。

「さあ、小夜ちゃん、もう泣かないのよ。あ

なたのつらさはお姉さまにも、よく分かつ

ていてよ。……でも、もっと強くなるの。女

って、泣くとよけいに辛くなるものなのよ。

お分かりになって？」

勝負がついてからも決して取り乱したりは

せず、逆にむしろ格調高いといえる振舞いを

みせる静子夫人に打たれて、誰かが真白い濡

れタオルをあたえる。「ありがとう」と優雅

な微笑で答える彼女のけなげさに、本当の大

和撫子を見たものは多かったはずだ。

その時であった。

終了の宣言をしようと立ちあがった鬼源を

強引に押さえて千代が、うずくまって、いた



わりあっている美女を見下ろして、憎々しく言いだしたのだ。

「何さ、静子！ そんなに澄まして。日頃、男たちみんなから、トップスターだトップスターだと奉られていい気になっていたくせにこのザマは、なんだい。あたしは女だから分らないなかったけれど、男たちは口をそろえてお前の締める力は天下一品だと言っているのに、小夜子みたいな小娘にコロリと負けちゃうなんて……あんた自分の商売を忘れて、ヘンな気分を出してたんじゃないのかい！」

期待を裏切られた千代は、本気で怒っている。

如何に従順に言いつけに従ってみせても、その時の気分次第で難癖をつける千代の性格を知りながら、弁明することも許されない静子夫人であった。

彫りこんだように華麗な頬を青白くし、屈辱の極で朱い唇を噛みしめながら、彼女は凄艶な切れ長の瞳を、千代のほうにむけるのである。

こうして、今の勝負に対する評定が始まった。

男たちは聞くに耐えない卑語を乱発しながら、

てんでに感想をわめき合い、ズベ公たちがもっと赤裸々な半畳を入れる。それぞれが主張しているところが少しずつ喰いちがっている上に、新しく運びこまれた銚子が、より一層の混迷を、まき起こし、哄笑と冗舌で座は手もつけられないほど乱れてきた。

鬼源は、酔い痴れた客がヒロインの麗人たちに手を出さないように、赤禪一丁のまま、さりげなくボディ・ガードに立つ。

ある者は、トップ・スターである静子夫人がおめおめと、最近の成長が著しいとはいえず小夜子に破れるということからしておかしいという千代の意見に従う。エロ・スターとして彼女以上の女は、世間広しといえども絶無の筈だ。その辺を考慮した鬼源があらかじめ静子にあたえたハンディキャップが、すこしきびしすぎたのではないかというのである。

この辺りから意見は大きく割れる。

勝負を面白くするため、全員の注視の中で静子に二倍以上の薬を使ったが、その処置は分かるとしても、分量が多すぎはしなかったか？ あの秘伝の薬には、どのように冷静な女人をもたちまち桃源境に追いつめ卓効があるが、それをあれだけタップリと盛られると

なくなってしまうはずである。それがクスリ自体の潤滑性と共に作用して、如何に彼女の筋力が良くて、とても支えきえることはできないに違いない、ともいうのである。

おまけに鬼源は、対決開始の寸前に、さらに一寸ほどのハンディを静子に与えたが、あれはいらないことだったのではないか？ 勝負は紙一重のところであつたのだから、あの一寸のハンディは、どだい酷すぎたのだ。

いいや、そんなことはない、と別の者が言う。そんな負い目があつたにもかかわらず、勝負は明らかに静子が優勢だった。ごく公平にみても、あの調子で進めば、十中八、九は静子の勝ちだったろう。それが逆の結果になつたのは、彼女が油断をしたからである。あの奇跡のような逆転をやつてのけた小夜子の精一杯の努力を大いに賞めてやらなくてはいいけない。いや、そうでもない、静子は、クスリと綱引きによって、もうどうしようもなくなつてしまったのだ。そのタイミングが、捨て鉢の勢いで尻を振った小夜子の動きと、ぴたり一致したために不覚をとってしまったにちがいない。何といつてもそうだ。その証拠に静子は、小夜子の準備が整う前から鼻孔をピクピクさせていたではないか、云々……



あげくの果てに、一刻も早くクローズアップで撮りまくったムービーを現像して、誰の意見が正しいか黒白をつけようではないか。いや、そんな悠長なことでは駄目だ。などと口々に言い募り、この小田原評定はどこまでも果てしなく納まりそうにない有様である。

この埒もない騒ぎのなかで、一言も話そうとしなかったのは、座の中央で塑像のように抱き合ったまま身じろぎもしない裸女と、そして鬼源である。

彼は筋くれだった筋肉を赤痺でしめ上げ、裸女のすぐ隣に正座している。がっちりと腕を組み、瞑目したままだ。淫らな口角に泡の意見を、きいている様子はさらさらない。素人は喋りたいだけ喋らせておくに限る。まるで薄っぺらな観察でこの勝負に興奮してはいけない。女のカラダと、女の反応はまさに素人たちを狂喜させはするが、プロの仕事師はそんな目の前の生々しさだけに欺かれたりはしないものだ。鬼源には、プロとしての誇りがあった。

「何てダメな女なんだろう。こんな女なんか香港の魔窟にでも叩き売ってやる……」

と千代は最前からのつづきで、ヒステリックにわめいている。酔った彼女は、おし黙っ

たままの鬼源のほうに、からんできた。

「鬼源さん、あんたの見方はどうなんだい。この静子は、あんたの保証つきだったんじゃないの？ それが、こんなぶざまな負け方をするなんて。天下のエロ事師も、調教の腕がにぶったんじゃないのかい。ふふ……」

千代の挑戦にもかかわらず鬼源は、ひとと目を閉じたきりだ。チェツという舌打ちが聞かれ、ざわめきが又も始まりかけたが、

「どうなのさ、鬼源先生のお考えは——。ちよいと、あたいの言ってることが聞こえないのなら、目ざわりだから出ていってもらいたいね。ホホホ……」

これまで身じろぎもしなかった彼は、とうとうカッと眼を見開き、千代を睨む。その凝視には相手を、はっとさせる稲妻のようなものがこもっていた。何しろ鬼源は、これまでのすばらしい実績をあげてきたのだ。思いは誰しも同じで、満座には緊張感がながれた。

彼はゆっくりと満座を眺めわたし、残忍な紫いろの唇のはしに、嘲りととれる、うすら笑いを浮かべた。

「そこまで言われちゃ、仕方がねえ。じゃ、言わしてもらいやすぜ」

ひっそりと静まり返ってしまった座の中央

で、鬼源は見得をきるように正座をあぐらにかえた。

「静子が、小夜子に勝ちをゆずったんでさ」満座は息を飲んだ。

鬼源は絵解きをするように、彼が見込んだ静子の性能の秀拔さや、勝負がすんだ後の落ち着き振りについて語り始める。

「勝負開始の寸前、小夜子が『死んだつもりになってぶつつかる』とか何とか叫びやしたね。たぶん、あれで静子も勝ちをゆずる決心をつけたんでさあ」

鬼源が絵解きをすまさない内に、蒼白な美貌をあげていた静子夫人が、誰の目にも、はつきりと分かるほど、うろたえ、それが事実に近いことを明瞭に示した。

「う、うそですわ。鬼村さん……そ、そんなことはありません……静子は、ちからいっぱいだったのに、小夜ちゃんのほうが、ずっとつよくって……いま、みなさんがおっしゃっている通りですわ。オクスリのききめがあんまりよくて、それでウツトリとしてしまつて。いいえ、静子が油断してしまつたからですわ……それから——」

「それから？ 何をいいてえんでえ」

「あたくしは、いっしょうけんめいやりまし



てよ。お願いですから、鬼村先生、信じてください」

うるんだ大きい二重瞼に涙をいっぱいにたたえ、熟れきった乳房をべったりと鬼源に押しつけて哀訴する静子夫人は、慚恥を忘れてかきくどく。目にも綾な芙蓉の花が天嶮の岩塊に、まつわりついているようだ。

「何を信じろというんでえ？　なんと浅墓な女だ、お前は。大体、俺の目をごまかせるなんて思ってたやがるのが、お前の甘いところよ。お前の心とカラダは、俺が完全に、にぎっていることを忘れちゃいけない」

という言葉とはうらはらに、鬼源はこうまでして小夜子をかばおうとしている静子夫人の優しい心根に、我もなく打たれたように、激しく訴えかけてくる濡れた美貌を頼もしげに見るのである。これまで彼が、売春婦にさせるために手がけた素人娘たちは数多いが、数回酷い体験をさせてみると、まず例外なくまるで掌を返したように蓮っ葉な態度をとるようになり、とても、鬼源が理想としている性奴隷を育てあげるなど、できそうにもなかったのだ。

蠟石のように白い静子の富士額に、乱れた髪がちよっと垂れている。彼女は、形のよい

唇の端に臆病そうな頬笑みをつくっている。

（これから、あたくしはどんなことをさせられるのかしら？）——次の卑劣の指図がくるまでの間の怖ろしさを、すこしでも忘れるためと、暴行者たちの一片の憐愍を願うあまりに、この美しい貴夫人はその気位を忘れて、愛らしく媚びかける微笑を浮かべるのが癖になってしまった。もちろん、この邸に誘拐されて来からの悲しい卑屈な習性である。

鬼源は、生暖かく押しつけられてくる胸の隆起を右腕に感じ、目を移すと静子の貪欲なまでに肉感的な双臀が、いやでも目に入る。すると、先程から抑えていた男としての、むず痒い様な嗜虐感が喉元にこみあげてくる。しかし彼は、そのような気振りを全く見せずに、ずうずうしく

「ごらんのように、仲々白状しやがらねえ。手荒らなマネも何だから、ほんの少しだけ時間を頂きやす。その間、口直しの酒でもやってもらいましょうか」

するとたちまち、これまでの放蕩の経験でも、これほどの凄惨な見ものに出くわしたことがない三人の客人から、本気の抗議の声がある。

「この女どもは、商売モノなんですぜ。休ま

せねえと、色香も抜けちまいますさあ。さあ、そこをどいて下せえ」

と小声で凄んでみせ、ヨロヨロする女体を左右に抱えて廊下に出る。

廊下には座敷の有様を一目、見ようと何人もの三下が群がっている。中の一人に鬼源は小夜子を、どんと押しやり、

「次の呼び出しまで、地下室にはうりこんでおきな。まだ用済みじゃねえんだから、やっちゃったりすれば承知しねえぜ。——さあ、静子、お前は俺と来な」

鬼源が私室に使っているのは二階の突き当たりである。一日中、窓覆いをしてあるが、目が慣れてくると、散らかし放題の荒れた様子がわかる。

壁には極彩色の秘画や写真が所きらず貼りつけてあり、隅のほうには曰くありげな書物や函が山のように積みあげてある。

まるで、ぬかるみようになっていた万年床の上に、あぐらをかいている鬼源の膝に、白々と張った臀部をのせた静子夫人は、ユルユルと体をくねらせている。

柔らかい脂肪につつまれた乳色の肌から、加虐者をくすぐる牝の体臭が匂う。淫靡な勝



負の興奮もさることながら、対決の前に鬼源から、たつぷりと配合された特別製の秘薬がすっかり発酵し、たまらない痒感をあたえているのだった。押えようのない、うめきが喰いしばった皓齒から洩れてしまう。

……藤長けた女優にもみまほしい美女は、かつて彼女がそうなることを望みさえすれば、スクリーンや大舞台の上で善男善女の胸をときめかす名キャラクターになれたにちがいない。現にそうした推薦は、華美な若さにみちみちていた少女時代から、断わりきれないほどあった。有名人病が猖獗をきわめる世相のなかにあって、彼女は実にあっさりとした遠山夫人となる途を、えらんだ。

スクリーンや舞台など、彼女には無縁のものであった。そうしたものに関わりをもつには彼女はあまりにも清楚な女人であった。内に深く秘められた知性をことさら表にだすはずもなく、上品な優雅な微笑をたやさず、小鳥のさえずりのようにフランス語を話した。

こう書けば、あるいは遠山静子の肖像はあまりにも美化されすぎているという異議がでるかもしれない。しかし、仮に自分の周囲にこのような女人の存在をみつけだし得ないとしても、それは単にその人物の見聞きする周

囲の狭さをしめしているに他ならない。万人の中に驚異的な天才がまじっているように、万人の女性のなかには必ず遠山静子夫人のような人なにかかなわぬ女人をみつけだすことはできるのである。優美な、目にも彩な彼女は、そうして世俗に汚されない令夫人として、慎ましかた、幸福な、人を愛し、人に愛される人生を送るはずだった。

しかし、人の世は何という厭らしいものなのだろう。それは例えていうなら、一個の磁石にプラスとマイナスがあるように、複雑至極なものとかいいようはない。さらに例えるなら、ミロ島のビーナスを至高のものとしてたたえるものは多いが、しかし、同じ大理石の美神にハンマーを当て、それを細々に打ち砕くことをのぞむものもいるのである。静子夫人の場合、その麗わしさは讃美されるべきである。しかし、千代の場合、そのまったく同じ麗わしさは汚辱のなかに叩きこまれるべきものである……

「おい静子。お前、何をモタモタやってやがるんだ。手前が切ながってやがるから、俺の説教も耳に入るめえと思って、こうやって助けてやってるんだぜ、この女！」

鬼源は黄いろい齒をむきだして叱咤する。

先程客人たちの前から下がる時の鬼源の言に従えば、商売モノをろくに休ませもしないで楽しんでしまうのは、性奴隷の容色をいたずらに濫費させ、いましめなくてはならないことのはずである。

だが、そんなことはその場かぎりの出まかせである。いまの淫猥な勝負につきそっていった彼は、いいようのない助平心から、どうあっても静子の美肉を味わいたくなっただけのことである。

尊大ぶっている旦那が、笑止にも「静子さん——」などと呼んだ。その女を、彼は指をならすだけで玩弄することができるのだ。何れにせよ、それは愉快なことである。こうした屁理屈をこねまわして、したい放題にやるところにも、鬼源の男としての卑劣さがあつた。

静子夫人の半開きにした真白い内腿は、むせる匂いを放って妖しく溢れている。火のように熱したこわばりにつきあげられながら、このような時に、どうすれば鬼源の氣にいつてもらえるかを知っている静子夫人は、ためらいがちだった動揺を、さらに大胆にエスカレートさせる。木の節を思わす鬼源に対しては、美しい蝶のような静子夫人が、いかに性



戯の鍛練を叩きこまれていても、尋常の勝負では、とうてい勝ち目はない。

鬼源の要求は底知れないほど苛酷である。女を責め虐め、物にならないとなれば、眉一つ動かすこともなく、叩き売ってしまうことが輝かしい経歴になる、エロ事師の世界であ

る。一人の女に満足しきってしまうことなど最大の恥辱としかいえない。美食に慣れた食通が際限もない食卓をのぞむのと同様に、鬼源の要求するそれも限度はないのだ。

「あうう……」

と喉をならす静子にかまわず、背後から手



イメージギャラリー

『内側もキレイに……』

志羽利也

をのばす彼は、右手を下に、左手でユサユサ揺れている胸の隆起の頂上にあるグミをひねくるのだ。それはピンクの乳暈から突きだし硬くなっている……

「……ま、まって……まって。このままならあたくし、ダメになってしまう」

含み泣きながら静子夫人は白い喉をのけぞらせて鬼源の肩に首筋をもたせかけ、濡れた唇を開く。それは、最愛の情人に接吻をねだる薄倅の貴夫人そのままである。

うすら笑いを浮かべた鬼源の紫いろの口に吸盤のように吸いついてゆく静子夫人は、その間にも彼の巧妙な責めと、淫薬の効きめのせいで脂汗にまみれた乳色のたわわな美肉はどうしようもない激情に悶えるばかりだ。

もはや絶対絶命であった……

このまま鬼源に翻弄され続ければ、性奴静子は、ただ一途に追いつめられてゆくほかはない。皓齒をくだけるばかりに噛みしめ、どのように耐える努力をしても、軀の芯底から着実に、じりじり這いのぼる巨大な恍惚感から逃がられるすべは、まったくない。

ジクジクと噴きだした脂汗に、ほつれたおびただしい後れ毛をはりつかせた彼女は、女人の羞恥の果てにあるような、おどろに取り



# 四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号『花』

定価五〇〇円(送共)

乱した声で、

「あなた、もう静子は何だっしてしましてよ。

……どんな淫らなことだって、しますわ……

あなたが、お言いつけになるとおりに、静子するわ——だから、ねえ、あなた」

「そうはゆかねえや。お前、何でこんなお仕置をされるのか分かつちやいねえのか。さあさあ、俺がもう許すというまで堪えに堪えるんだ。だいたいお前があんな生意気なマネをするから、いけねえんだぜ」

鬼源は、何もかも見透しているのだ。静子夫人の白状を強要することなく、しかも寸時を盗んで肌を楽しみながら、女の落ちるのを待つ。この男女、役者はまるでちがうのだ。

その時、

「ヒイ……アウウ……」

2オクターブ高い叫びをあげた妖美な令夫

人は人もうどうにでもなれVとばかり、豊満な全身をゆすって、クナクナと突進をはじめた。したたる汗をはねとばし、モヤのかかった双眸をあらぬ方にさまよわせながら、殺されてもいいとまで思いつめた切なさ、ありありと見取れるのだ。

流石の鬼源も一瞬、眉間に深い皺をよせ息をつめるようにした。彼にとっても、やはりつらい決意であったが、この場を単なる色事に終わらせてしまうわけにはゆかなかった。仕事として責めとして、体罰として調教として、徹底的に馴致させるためには逸楽だけをとるわけにはゆかないのだ。一疋の性畜をつくりだすためには、おびただしい汗と、涙と愛液が必要なのだ。

鬼源は燃えさかる女の羽二重餅のような臀部に指先をめぐりこませ、上へ持ちあげにかかった。

溶鉱炉のような息吹き的美女は、

「イヤ、イヤ……イヤ！」

と、重い双丘をさらに汚辱にまみれさすべく、鬼源の情欲を挑発する。牝畜だけが発する濃い匂い。茜に染まりつくした躍動する豊かなヌード。

男として、その後の鬼源の行動はあるいは

賞讃されてよい。彼は、打ち負かされそうになった自分を嘲るような勢いで、あぐらの上の重い裸女を力をこめて蒲団の上に投げだしたのだ。

反射的に、わっと号泣する静子夫人は、叩きつけられた牝蛙の様に、すべてをさらけだしたまま身を揉むのだった。鬼源は、その浅ましい様にチラと一瞥をくれたきり、両脚の屈伸運動をし、汚れた手拭いで汗を拭う。際どいところではあったが、水をかけられたように鬼源の中のプロ根性は立ち直っていた。「どうでえ、静子。天国をさまよってる心持ち？ 心の底から俺にありがとうというんだぜ。まだ大した時間もたつちやいねえ、勘弁してもらうためには、もう二山もこしらえにやだめだぜ。ヒヒ……」

意志を喪失しているかのような静子夫人は投げだされた姿のまま、燃える肌を異臭のする蒲団にナヨナヨとすりつけ、生殺しの地獄から解放されることだけを願っているのだ。

鬼源はタイミングをあやまたず乱れた静子の髪をつかんで引きおこし、自らの投げだした両脚の間に導く。

「さあ……続けな。結構な味がするぜ」

女をひれ伏させるには、数えきれない様々



の手段があるが、鬼源がつぎつぎと加えてゆく責めは、扱いを、憎いほど心得たものである。じれさせ、哀願させ、狂わせ、髪を引きすえ、幾百通りものプロセスを這いまわらせ

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 四〇〇円(送32円) |
| 三月分 | 3冊  | 一二〇〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二四〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四八〇〇円(送共)  |

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上のお申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎のお申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

る。むろん、稀有な美女としての資質や、その優しく奥床しい心根を損わずに天女の心に娼婦の肉体を与えるためには、長い時間が必要である。彼女は三つの山を超えてようやく

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

絶え入ることを許され、つづいて五つ目の山頂で許され、次には、幾十もの頂を乗りこえるまで耐えぬく——そうして何時の日か、比類のない魅惑そのものをたたえた性の奴隷が誕生するはずである。

静子は、髪を撫まれたまま、ためらいもなく柔らかに暖かい朱の唇をひらく。皓齒がキラキラと宝石を思わす。

ピンクの霞が粘々する霧の中で、狂おしいやる瀬なさに身を灼く彼女には、もう何一つまとまったことを考えることはできない。ただ今の、どうにもならぬ締め木にかけられた一刻一刻を、どうして耐えぬけというのだらう。この逆上した状態に比べれば、死ぬこととや狂いだすことすら、ごく容易なことのように思われるのだ。

美貌を加虐者の脚に挟まれて、白々と張った臀部をたかく差しあげた彼女に、鬼源の嗜虐が降り注ぐ。

静子は、大浪のような息をつきながら、哀願し、もういいと許可されるためには、どんな無残な、ふるまいでもやってみせようという、健気な女の火の玉のような一念に燃えていた。





△告白▽マヅを忘れかねた恵子の便り

# 過ぎ<sup>す</sup>にし日々<sup>ひび</sup>の思<sup>おも</sup>い出<sup>で</sup>

中<sup>なか</sup> 河<sup>がわ</sup> 恵<sup>けい</sup> 子<sup>こ</sup>

九月の声を聞きますと、このあたりは、朝晩めっきり涼しくなつてまいります。如何お暮しですか、お伺い申しあげます。私は、おかげで元気に過ごしておりますので他事ながら御休心下さいませ。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる——という歌がございますが、ひとときよりは日の暮れるのが早くなりまして、なにかしら、心細い気持のする夕暮れどきになりますと、私には過ぎ去った日々のことが、なつかしく思い出されて仕方がないのでございます。

机の抽出しの一番下の方から、書きさしの原稿がでてきて、私は過ぎ去った自分の青春が、パツと目の前に明るく輝きだしたような気がしました。

なぜ、こんなところに、こんな書きさしの原稿があつたのだろうか、自分でも、すっかり忘れてしまっていただけに、実に思いがけなかったのです。

読みかえしてみても急に、その後を書きたくなり、思いついたまま書



き足して、貴方様にお送りしましたところ、手紙の文と一緒にうまくアレンジしていただいて、九月号に載るよう、お手配下さいましたわね。

五月の生暖かい風が素肌をくすぐって、私の情熱をかりたててしまったのでしょうか。一気に、思いのたけを、あんなつまらない文章に書いてしまいましたけれど、とても、誌上に載せていただけるなんて、考えてもおりませんでしたので、九月号を書店の店頭で拝見しましたときは、本当にびっくりしてしまいました。

あの文章の末尾では、「もう二度とお逢いする機会もないかとも思いますが……」と書きましたが、九月号を読んでみて、なつかしさのあまり、とうとう家から電話をかけてしまいました。と申ししても、実は貴方様の電話番号を書きとめた手帖がみつからず、長い時間をかけて電話局で調べて貰いました。夫が丁度外出中で、子供二人と一緒に家におりましたときで、電話口から子供の声をお聞かせしましたわね。

せめて、貴方様の元気なお声だけでも思っていました、思っていることの十分の一もお喋りすることは出来ませんでした。

どうしても、もう一度お逢いしたいという切ない気持ちから、近いうちに関西へ参りますと申しましたが、その機会も、来ないまま、とうとう九月を迎えてしまいました。

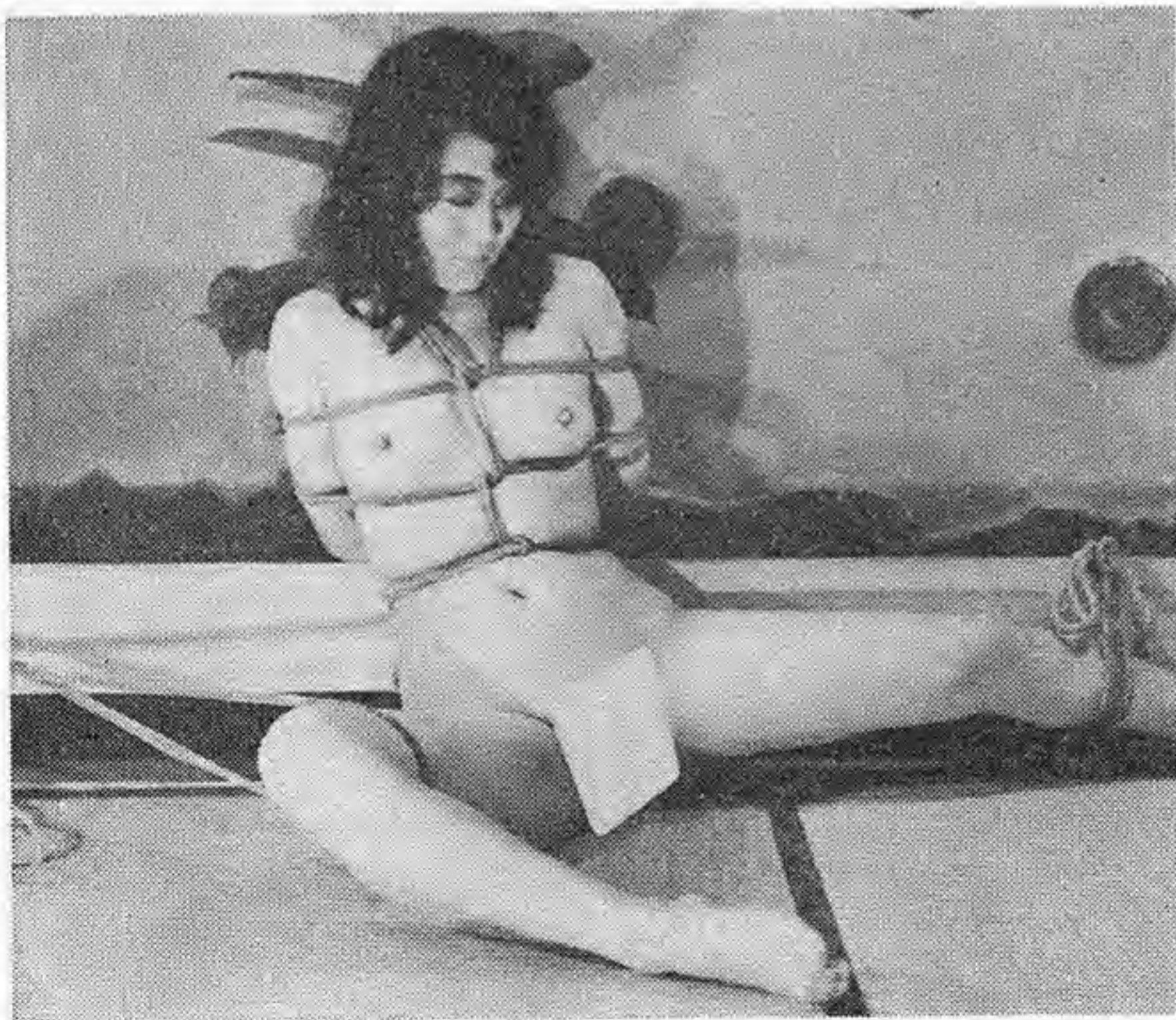
なんだか、嘘を申し上げたようで心苦しく存じますが、貴方様のもとへ飛んで行って、しびれるようなSMプレイに耽溺したいという気持は、今も変わりありません。

出来ることなら、今すぐにも、愛車を駆って東名神を飛ばして、あのなつかしい琵琶湖を目の下に眺める大津のインターチェンジや、六甲の山なみを仰ぐ西宮インターチェンジ附近の風景を眺めたいものだと思います。

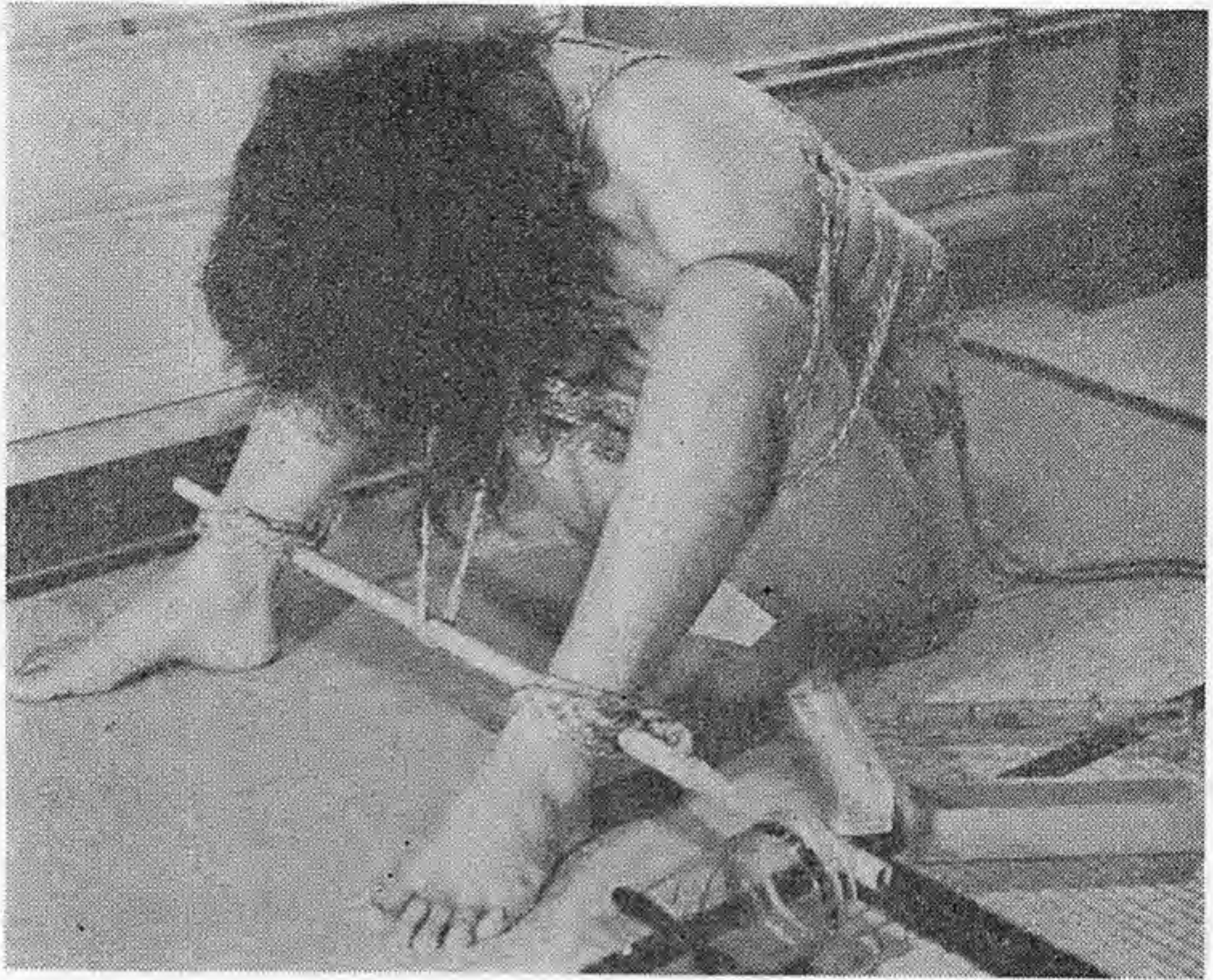
愛車といえば、今度新しく車を買いました。グロリアのハードトップGLのシルバーマタリックです。

今年の夏、友だち三人と、富士五湖めぐりのドライブを行ないました。三人とも未婚

のお嬢さんですが、それぞれみんな運転免許証を持っておりまして、交替で運転しながら快適なドライブを楽しみました。国道一三七号線を南下して御坂峠の御坂トンネル（有料道路になっていますが）を越えますと、す







ぐ目の下が河口湖です。

三人ともスタイルがよくて、すらりと伸び

ですから、花嫁修業の短大通いから、いずれ近いうちに結婚へゴールインすることでしょう

た下半身をブルジョーズやホットパンツにかため上はそれぞれ個性的な柄のTシャツ。女の私が見ても、ハッと目をひくくらい明るく派手な雰囲気なので。

私もふっと、娘時代のことを思い出していました。ウェットスーツを着込んでアクアラングで水中を潜ったりしたあの頃が、一入なつかしく偲ばれます。でも、この三人のお嬢さんは、車中でベチャクチャ喋りまくったりドライブインで買ってきたアイスクリームをなめたり騒いでいますが、至って真面目で大人しいのです。

みんな適令期で、この地方では資産家の娘さん

う。東京の学校へ通っているの、みんな垢抜けしています。車から降りると、パツと車のまわり、花が咲いたようなんです。

河口湖を一周、丁度お天気がよかったので富士が手にとるように、よく見えました。雪がないのでバックになる空と山の色が同じように、はっきりはしませんでした。雲一つなく描いたような秀麗な富士の形が、目のなかに飛び込んでくるようでした。

河口湖大橋の上で車を停めて、お互いに写真をとり合ったりしました。私が運転のベテランということで、湖周の未舗装の細い道の運転をまかされ、広い舗装道路は、三人で腕に依じて運転を交替しました。

私は、このあたりはよく通ったところで、山中湖から御殿場と出て、箱根から長駆して伊豆半島を一周したこともあって、富士五湖といっても、いわば私にとっては箱庭みたいなものですが、三人の女性は長距離ドライブの経験がないらしく、一、二軒ハンドルを握ると「替ってよ、替ってよ」と騒ぎだてるのです。それでいて、友達がうまく運転していると、自分もやりたいらしく、「今度は私の番よ」なんて言い出すのです。

富士スバルラインのゲイトに来ました。観



光バスの列が、ずっと並んで待っています。真すぐに延びたハイウェイの彼方に富士山の全貌が、くっきりと見えます。五合目までの快適なドライブウェイですが、みんな急な坂道なのでこわがって、私にハンドルを握らせ車窓から見える風景にキャッキャッと賑やかな声を立てています。

五合目まで一息に登りましたが駐車場が満車で駐めることが出来ず、奥庭で少し遊び、再び河口湖まで降りて、国道一三九線を走って氷穴と風穴を見物しました。熱気を帯びた外気とは、こと交わり、吐く息も白く凍りついた氷の柱に、思わず二の腕にトリ肌が立ちました。西湖の北岸は、悪路と呼ぶにふさわしい未舗装の部分がありましたが、窓を閉めきってクーラーを全開にして砂ぼこりを蒙々と上げながら、走り抜けました。

静寂な精進湖を一周し、次いで本栖湖に至りました。ここも一部しか舗装してなく、私が主としてハンドルを握りました。ここから富士宮有料道路までは、交通量も少なく、富士の裾野をめぐる快適な直線道路です。

白糸の滝と音止の滝を見てから、一路、逆コースを辿って帰路につきました。山中湖も行けたら行きたいと言っていたのですが、余

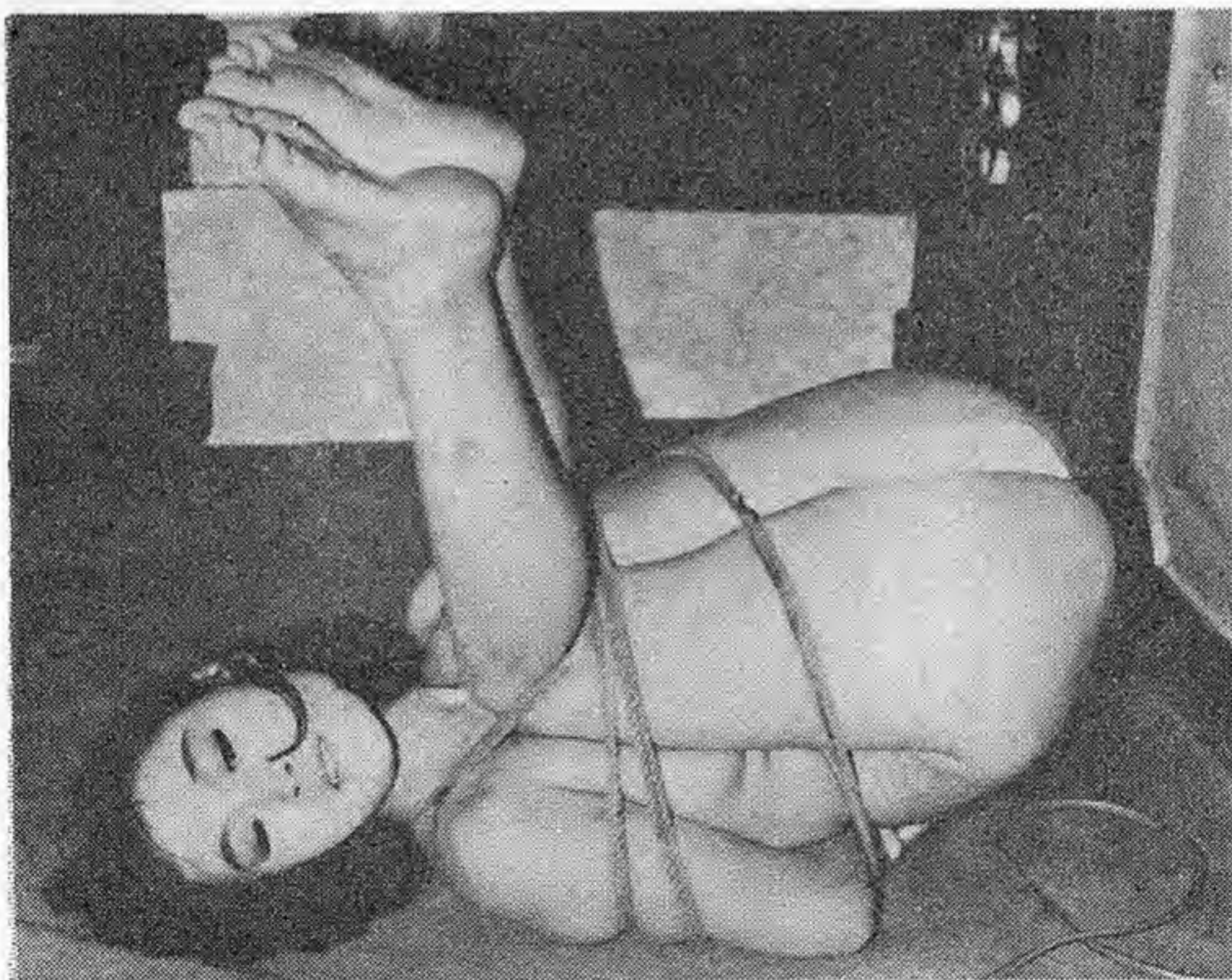
り晩くなっても娘さん連れではいけないと思ったので、河口湖大橋から御坂トンネルを抜けて甲府へと帰ってきました。

八月も後半、それにウイークデーだったので富士五湖の湖畔も、そう人出も多くなくスムーズに走ることが出来ました。

この方面の地理には精しいので、若しお遊びにおいで下さるのでしたら御案内させていただきます。以前は、よく貴方様のお車のあとをついて大阪近郊を走ったことがございましたわね。あの頃は、私は一人で九州方面や山陰方面にまで足を伸ばしていた頃で、腕自慢の乱暴な運転をしたものでした。

姫路から鳥取へ通ずる中国山脈横断の戸倉峠の道を飛ばしていて、ネズ

ミ取りにひっかかり、スピード違反で免許証の停止を受けたときは困りました。





「女だてらに、よくもこんな飛べたものだ」と叱られましたが私って、縄で縛られる事にも弱いのですけれど、スピードにも弱いんです。なんだか身体全体が、すごく敏感な感じで、スピードを出しているだけで、宙に浮いてるみたいになるんです。ですから、スピード違反に問われない東名神の高速道路を走らせるのが、大好きです。

でも、今はもう二人の子供のママですもの一人で勝手気ままに走りまわることも出来ません。子供を遊ばせがてら、よく近くを走りますが、子供はそれをよく知っていて、机の上に置いてあるキーを持ってきて、「ママ、カギ、カギ」と言って、私にドライブを、せがむのです。

○

塚本鉄三さま――



と思っております。

私は今、一つの光景が、まざまざと目に浮かんでおります。あれは何処であったのか、場所ははっきりと思いだせませんが、高台にあるホテルの五階か六階の部屋だったと思います。部屋の窓側のドアを開けると広いベランダになっていて、スリッパばきでベランダに出てみますと大阪の街の灯が目の下に見えておりました。

青や赤のネオンの点滅が丁度、日の暮れかかった薄暮のなかに本当に美しく輝き、私はうっとりとして、その夜景を眺めておりました。日中走りまわっていた快い疲れが、若い

私の身体を熱くほてらせていて、これから行なわれる激しいSMプレイに対する期待がそれに拍車をかけていました。

私は、きつく縛られることや、また肌を痛くされることも決して嫌ではありませんでした。この人――と思う方にされるのだったら不思議に痛い目にあわされても、それが、うずくような快感になってしまうのです。でも女性の心理というものは変なもので、同じこ

私は貴方様に対する、このお手紙を一気に書ききってしまうことは出来ませんでした。

まだ未婚の頃は、マンションの一人住居でしたから徹夜してでも、続けて書いてしまったことも、よくありましたが、今はそういう無茶も出来ませんので、暇を見ては書き、用事があれば休むといった有様で、どうしても時間がかかってしまい、しかも、こんなとりとめもない文章になってしまって、申し訳ない



とをされても、人によって、ひどく不快に感ずる事があるのです。

そのときのムードにもよるのでしょうが、もっと大切なことは、その相手の人によるのだと思います。

私はベランダで涼しい風に吹かれて、熱くほてった身体を冷やしながら、これから、自分に対して、どのような責めを加えられるのだろうか、心のなかで、いろいろと想像をめぐらしていました。

身体をくびれるほどぎゅうぎゅう厳しく縛り上げられるのも好きですが、私は貴方様に責められてから、始めて羞恥責めのよさというものを味わうことが出来ました。

椅子に両足を大きく開くような恰好で縛り上げられて、正面にカメラを向けられたときは、もう自分でも、自分の身体がどうなっ



いるのかわからないくらい、狼狽してしまいました。どうしていいのか、とまどってしまったのです。自分の身体の一部が、自分の意志では、どうにもならない動きをしているのを、どうすることも出来なかったのです。

こんなところを見られては、羞かしくて、羞かしくて、たまらないと思っているのに、

そう思えば思うほど、両足を大きく開いてしまい、足の爪先に、きゅっと力を入れてしまっていました。

そんな私を、貴方様は、どんなお気持ちでご覧になっていたのでしょうか。自分を、じっと見つめられているということが、いや、じっと見つめられていると思っただけで、こんなにも、私を痺れさせてしまうのです。

カメラを真正面から向けて据えられ、ライトを一斉に点灯された貴方様も、こんな私の有様をご覧になって、さぞ驚かれたことだろうと思います。私にしましても、今まで、こんな強烈なショックを受けた経験がありませんでしたのですから、間歇的に襲ってくる背筋の、ぞくぞくするような快感に、もう身も世も、なかったのです。

身体のかなかの、ドロドロしたものが、その一点から外に溢れだし、まるで、潮の満ち干きのように、脈をうって私の肉体を、さいなみはじめたのです。△責め△というにふさわ



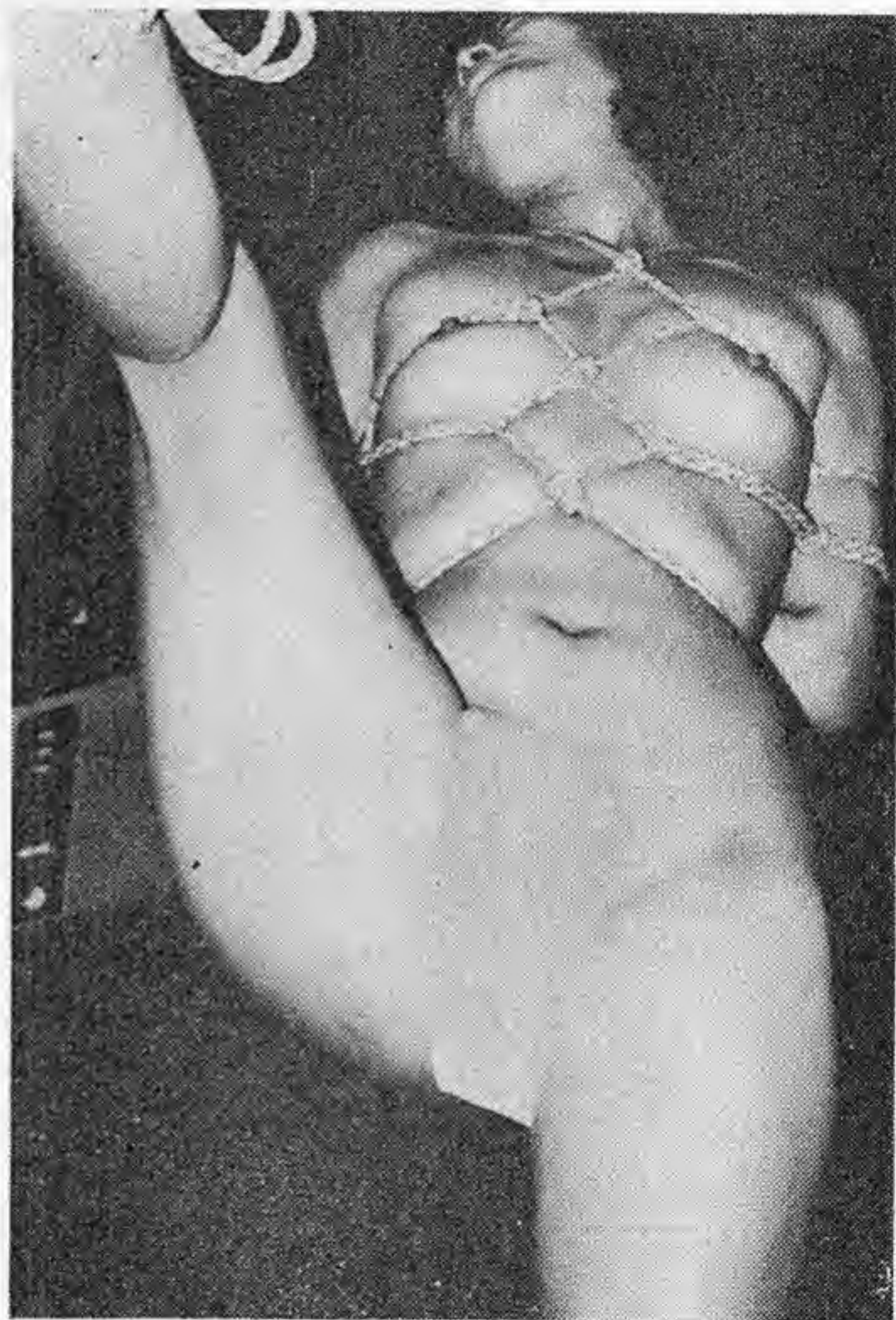
しい息苦しいばかりの羞かしさと苦しさ。そして、その間に混じって、もう身体をズタズタにしてほしいような快さが迫ってきます。

羞恥責めというものが、これほどまでに快いものであるとは、知りませんでした。計算された精密な手段で、お上手に責められるのには、真底、参ってしまった私です。

そんなことがありましたので、私は貴方様

にお逢いするたびに、次々と新しい羞恥責めを経験し、そのたび毎に狂ったように、思わず声まで出してしまうのでした。自分では、それほど大きな声を出しているなんて、思ってもいませんでしたが、テープでとられたのを、あとで聞かせられて、本当に恥かしく穴があれば入りたい気持でした。

でも、テープで自分の責められて感極まったときの声を聞かせられますと、そのときは



「イヤ、イヤ、やめて!」と、恥かしさのあまり、言っておりますが、心のなかでは、灼熱した鉄のように燃えたぎっていました。

塚本鉄三さま——。

今ごろになって、私がこんなことを書き出すと、何を今更——と、きっと、思いになることでしょう。しかし、私にとりましてはあの日のことが、いついまでも忘れることが出来ないのです。テープを聞かせられまし

たときは、あれほど恥かしがってイヤがっていましたが、私ですのに、変ですわね。

ですから、あの、大阪の街の灯の見える部屋で、これから落ち着いて一晩中でも責められるのだわ——と、思いましたときは、楽しさに、わくわくするような思いに、胸が高鳴っていました。

あのときに写して頂いた写真も、きっとネガで保存してあるのでしょうか。その頃を思い出すようですが、是非拝見したいと思います。そうそう、先日はたくさんのお写真をお送り下さいましてほんとうに有難うございました。

女性の私が、自分の縛られた写真を見たいなんて、変に思いになるでしょうか。実際は私、他の方々の緊縛写真も、見せて頂けるものなら見せて頂きたいと思っております。

いつか、貴方様は、私に他の女性の責められていたときの声を、お聞かせ下さったことがございましたわね。自分の声をテープで再生されたときは、「イヤ、イヤ、止めて!」



と拒否していました私も、その東浦ひかる様とかいう女性の方が、泣き声を出しておられるのを聞かされたときは、もっと聞きたいとさえ思いました。恥かしさというよりも聞いてみたい——という物珍しさの方が、先にたっておりまして。

そのとき、その女性の方が、どのような責め方をされて、このよ

うな、すすり泣きをしているのだろうか、自分の責められる場面に比較して、想像してしまうのです。羨ましく嫉ましく、そして、とどのつまり、その空想の責めの中に、自分の身体を、どっぷりと投入してしまい、ひとりでに激しく興奮してしまっているのです。まるで、自分が今そこ、自分の一番好む趣向で責められているのだという妄想にふけりつつ……。

○ 塚本鉄三さま——。

このように、あの頃のことを思い出してみますと、ほんとうに、いろいろのことが、まるで走馬灯のように、私の目の前をよぎってまいります。

縛られることが好きだなんて、他の人に申

しましたら、気違い扱いされてしまいますので、そんなことは、おくびにも出すことは出来ませんが、貴方様にだけは、心おきなく、何でも、お喋り出来ると思ひまして、気易く書いてみました。

お便りだけは、これからも出させていただきます——と、お約束した通り、こんな、くどくどと昔のことを懐古したお手紙を書いてしまいました。

いつかしら、もう一度お逢いできるような気がしてならないのです。そのときは、私がどのように変わっておりますか、お楽しみにして下さいます。

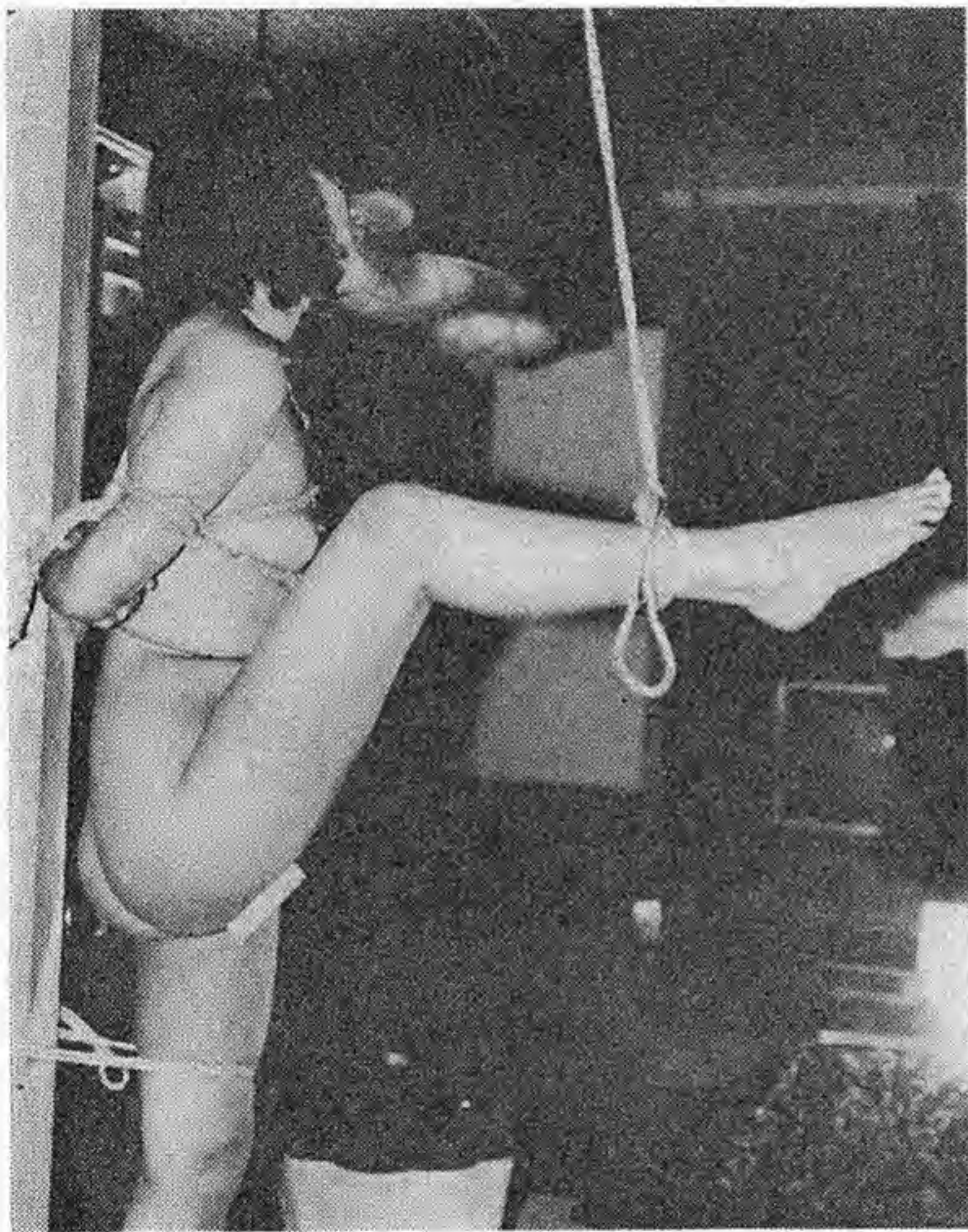
また気が向きましたら、お電話させて頂きます。それから、関西へ参りますことがありましたら、何をさておいても、先ず、真っ先に、御連絡申上げます故、その節は、よろしくお願い致します。

末筆ながら、貴方さまのご健勝を心からお祈り申上げます。かしこ

九月八日

塚本 鉄三様

中河 恵子





ある男がある女を連れてある男を訪ねた時のハナシ  
カット・岡 たかし



A

## 檻のある風景

芳野眉美

男が穿くようなGパンに、赤い鼻緒の駒下駄があった。

ざっくりしたサマージャケットにかくされた胸の盛り上がり、まぶしい。

両頬をおおい、肩に流れる長い髪を、さりげなくかきわけて、エリは私を見つめた。

H氏がエリに私を紹介した。

初対面である。

H氏は本誌をひろげて、私のことを説明する。

上京したH氏が、急用でエリとのプレイができなくなり、エリとの約束を守るために、私に電話をしてきたものである。

ピンチヒッター。

エリは私の性癖を了解したようである。

H氏の話に、何度もうなずいた。

「檻のあるホテルがあるから」

とエリが私にいった。

「そこでもいいわね」

「どこへでも」

と私は答えた。

H氏がニヤリとした。

「檻のある部屋か」

H氏はエリとプレイできないのが残念そうであった。H氏の上京は、地元出身の代議士に会うための公用である。

ホテルまで送って行こうというH氏のハイヤーに同乗する。

H氏と話をしているエリを抱くような恰好になった。

エリの背中を指が這う。

ブラジャーの感触がない。

サマージャケットの下の汗ばんだ厚い背中、健康で奔放な若い女の匂いがする。

やはり、エリはノーブラであった。

素肌に、目の荒いサマージャケットを着て



いるだけである。

無遠慮な指が、背中から、ふくらんだ胸にまわる。

突起した乳首が指の間に、はさまる。

エリは初対面の男の無作法な指をとがめようとはせず、H氏との話を続けている。

エリのやわらかな乳房は手にあまった。

乳房の汗が手の平に、つたわってくる。

残暑は、きびしい。

エリをうしろから抱き、エリの乳房をもてあそびながら、私は背中につれたエリの長い髪に顔を埋めた。

エリは、自然に、そうさせてしまうような女であった。

ホテルの近くで、ハイヤーのH氏と、わかる。

「すぐ（仕事を）かたづけてくるからな」

とH氏はエリと私にいった。

「それまで楽しんでいてくれ」

エリはホテルの名をH氏に告げた。

H氏も気が、かわったらしい。

近くに国電の駅をひかえたホテル街であった。

国道から、せまい路地のような道に入ると両側にホテルが、びっしりと並んでいる。

ネオンは、まだついていない。

せまい道に、エリの赤い鼻緒の駒下駄が、気持の良い音を、はね返す。

「テレビのスタジオで八赤色ブルースVのあがた森魚が、下駄を履いてギターをひいていたね」

エリが振り返って笑顔を見せた。

若い子に、下駄が見直されてきたのだろうか。

エリの丸いお尻は、Gパンから、はちきれそうでカッコがいい。

大きく、そして、重そうだ。

エリのうしろからホテルに入る。

女中に、

「檻のある部屋ね」

とエリは、いった。

中年の女中が私の顔を見た。

玄関からエレベーターであがる。ほかの客と顔を合わせることもない。

ドアを開けると、細い鎖のカーテンが客を迎えた。

鎖のカーテンは、ダブルベッドの寝室を囲んでいる。

サディスティックなムード。

寝室の壁に、大の字の等身大の人形の型が

はりこまれてあった。

そして、手首と足首の部分に、鉄の手枷と足枷が、重々しくついている。

ベッドに腰をかけると、エリは部屋のすみにつくられた檻を、あごで、しゃくった。

檻の中に、首枷のついた、三角木馬が置いてある。

檻は小さく、せまい。

ダブルベッドにダイビングする。

やわらかなベッドに全身が沈んで気持が良

い。

ベッドの頭の部分に二つの穴があげられて

ある。

「そこに手をいれて」

とエリが私にいった。

ベッドに寝たまま、両腕をのばして手首を

入れる。

エリがベッドに上がって、私の顔をまたい

だ。

寝室を囲んでいる鎖を一本、はずす。

穴に通して、ベッドの先に飛び出た私の手

首に、鎖が巻きついた。

鎖のカーテンは、鎖の手枷に変身する。

手首がベッドの穴に、こすれて痛い。

新しいボーリングのボールを使って、指が



こすれて痛いのも同じである。

両手を鎖で拘束すると、Gパンのまま、エリは私の顔に坐った。

「こうされるのが好きなのでしょう」

Gパンが破れはしないかと思われるほど、ばんばんにはった丸いお尻が容赦なく、ごりごりと顔を押し潰す。

Gパンの厚い布地に唇がめくれ、鼻がひしやげ、頬がこすられて痛い。

息苦しくて、もがくと、ベッドの穴に入れさせられた手首が傷つく。

エリのポリウレームのある全体重が、私の顔に集まったような錯覚に、とらわれる。

重いのと、痛いのと、苦しいのと、口から吹き出た泡で、エリのGパンが濡れた。

エリは、始めから、かなり強烈であった。

エリが腰を浮かして、股の間から私を見下ろした。

だらしなく泡を吹いた口をぬぐいたい、手の自由は奪われている。

エリはGパンを下げた。

小さな薄いパンティが汗ばんだお尻に、びったりと、ついている。

エリは私の口をねらって、ゆっくりと顔に坐った。

エリの体臭と、汗にまじって、アークス特有の匂いが、鼻を打つ。

汗と分泌物と排泄物を吸収して、パンティも湿っている。

エリも私も、まだ風呂に入っていない。

エリの体臭から、石けんの匂いは、どこにも感じられない。

エリの腰は微妙に動いている。

パンティが、やんわりと口から鼻、鼻から眼へと押し潰してくる。

昼起きて、トイレに行き、食事をすませ、

H氏と約束した喫茶店で遊んでいた。

そのままの、生の体臭が、芬々と匂ってくるのを、エリは、かくそうとしない。

エリの指がパンティに、かかった。

くるりとパンティが、まくられて、まっ白なお尻が、むきだしにされた。

が、脱いだわけではない。

丸い双臀が谷間に落ち込むところで、パンティは、とまっていて、エリの秘めやかな部分をかくし、アークスだけが空気に触れている。

「お舐め」

とエリが、いった。

私の眼の前で、思い出したように、ぴくり

と動く。

「舐めるのが好きだなんて、面白いわね」

Gパンとパンティを半分おろしたまま、まるでトイレで便器をまたいでいるように、しゃがんでいる。

尻を舐めさせるとは、軽蔑の意味を表わすのに、よく使われる。

そのせいか、エリの言葉のはしにサディスティックな響きが漂う。

おそろおそろ舌を差し出した。

ぴりっとした刺激が走る。

と同時に、ほろ苦い独特の味が舌の先を転がる。

やわらかいお尻が顔におおいかぶさった。

苦味が、ぐんと増し、嗅覚は、それにつれて強烈になる。

微小な褐色の残滓。

エリが、お尻を、もぞもぞと動かす。

排便をつかさどる神経中枢が反応し、便意を感じたのかもしれない。

ウツボカズラやタヌキモの様な、葉の一部が袋状になっている食虫植物を思わせる。

舌に、リズミカルな力強い収縮を感じて、

私は呻いた。

エリの息が乱れている。



「あら」

とエリが叫んだ。

あつという間の出来事であった。

食道に落ちたのは、ぼくの小指ぐらいの、

小さなものだったのかもしれない。

無味無臭であった。

ただ、粘土質のあたたかい感触だけが、私の口中に、いつまでも残った。

「たべちゃったの」

私を見下ろしながらエリはいった。

エリにしても、予想しなかった行為に違いなかった。

私は、かすかに、うなずいた。

排出されるところを見たわけではない。ただ、無味無臭の小さなかたまりが、食道を通過していただけなのである。

エリは立ち上がると、パンティとGパンを穿き直した。

B

エリも私も、予想しなかったハプニングにちよつと戸惑ったようであった。

エリは無言で、私の手首にからませた鎖を解いた。

私はすでに、エリの唇にキスすることを放棄していた。

心理的に、エリが拒絶しても当然のように思えた。

カニリングスをした男に、キスしてくる女は多い。

それはまた、フェラチオ後の女の唇に、キスしてしまう男が多いのと同じことだ。

が、この場合の私の唇も、同じように考えていいかどうか、それはわからない。

ベッドから起き上がると、私はまぶしくエリを見た。

「タバコを、ちょうだい」

とエリが、いった。

浴槽に湯が、あふれている。

女中が湯をだしていったのを、とめるのを忘れていたのである。

私は浴室に入った。

エリの匂いは、ただ一度だけの、これだけの匂いかもしれないと思った。

一時間前まで、見も知らぬ女の、エリの、誰も知らない、味わったことのない匂いであった。

このまま、いつまでも、とどめておきたい気持も強い。

だが、プレイは今、始まったばかりなのである。

口中の匂いが、エリのプレイの妨げになる懸念もあった。

身体を洗い浴槽にひたり、最後に口を漱いだ。

エリが浴室のドアを開けた。

「さっぱりした」

と私にいった。

私は、うなずいた。

エリの気持にひっかかっていたものが、少しは、とれたように思えた。

バスタオルを腰に巻くと、私は浴室を出てタバコを吸おうとすると、

「そこに立って」

とエリが寝室の壁を指さした。

大の字型に、等身大の人形が、ほりこまれである部分であった。

私は壁の人形に、全身を埋めた。鉄の手枷と足枷が重く締めつける。

エリは私からバスタオルを剥ぎ取った。

サマージャケットとGパンのエリの前に、全裸をさらすのは妙に抵抗があった。

エリが裸でないだけに、よけいにテレたのかもしれない。



エリが、じろじろと眺めている。

エリの手が、つと、のばされた。

「あっ」

エリの指は、かなり乱暴であった。

やめさせようにも、手足を拘束されていて

は、どうにもならない。

もがけばもがくほど、手枷足枷の鉄の、す

れ合う音がするだけである。

「どう」

とエリが、きいた。

「お願いだから、はなしてくれないか」

と私は、いった。

「どうして」

「どうしてって……」

「はっきりいって」

エリの乱暴な指は、攻撃を止めない。

「だめなんだ」

「なにが、だめなの」

エリは別に笑ってはいない。

「とにかく、だめなんだ」

エリが無表情な顔で私を見詰めた。

エリに攻撃されるままになるのは、簡単な

ことかもしれない。

だが、そのあと、せっかく高まった情感が

急激に、おとろえることがある。

生理的なものが、精神的なものにあたえる

影響は馬鹿にできない。

プレイを持続させるためには、ある程度の

蓄積は必要であった。

エリが、ようやく指をひっこめてくれた。

ざっくりしたサマージャケットを脱ぐ。

下には何も着ていない。

胸全体に丸く広がった豊満な乳房が、すば

らしい隆起を見せて眼の前にそびえた。

ハイヤーの中での、そのやわらかな感触が

よみがえった。

鉄の手枷が、じゃまであった。

何も出来ないと言って、エリは見せつけて

くる。

Gパンを脱いだ。

小さな薄いパンティだけで私の前に立つ。

汗ばんだ肌から、女の匂いが陽炎のように

ゆらゆらと上がってくる。

「パンティを顔に、かぶりたいのですって」

とエリが、いった。

「かぶせてあげようか」

「――」

「どうなの」

そういわれても、どう答えていいのか、わ

からない。

「いやなの」

「いやだなんて……」

「はっきり、いって」

「それは……」

「パンティを顔にかぶせて下さい、っていう

のよ」

「――」

「早く」

「パンティを……」

と私は口ごもった。

「それから」

「顔に、かぶせて下さい」

「お願いします」

「お願いします」

「いいわ」

とエリが、いった。

「セリフって、むずかしいわね」

小さな薄いパンティをくるりと丸めると、

足から取った。

じつとりと湿ったエリのパンティが、私の

顔に、かぶされた。

エリの汗と分泌物と、排泄物を十分に吸収

したパンティであった。

「お似合いよ」

とエリが笑った。

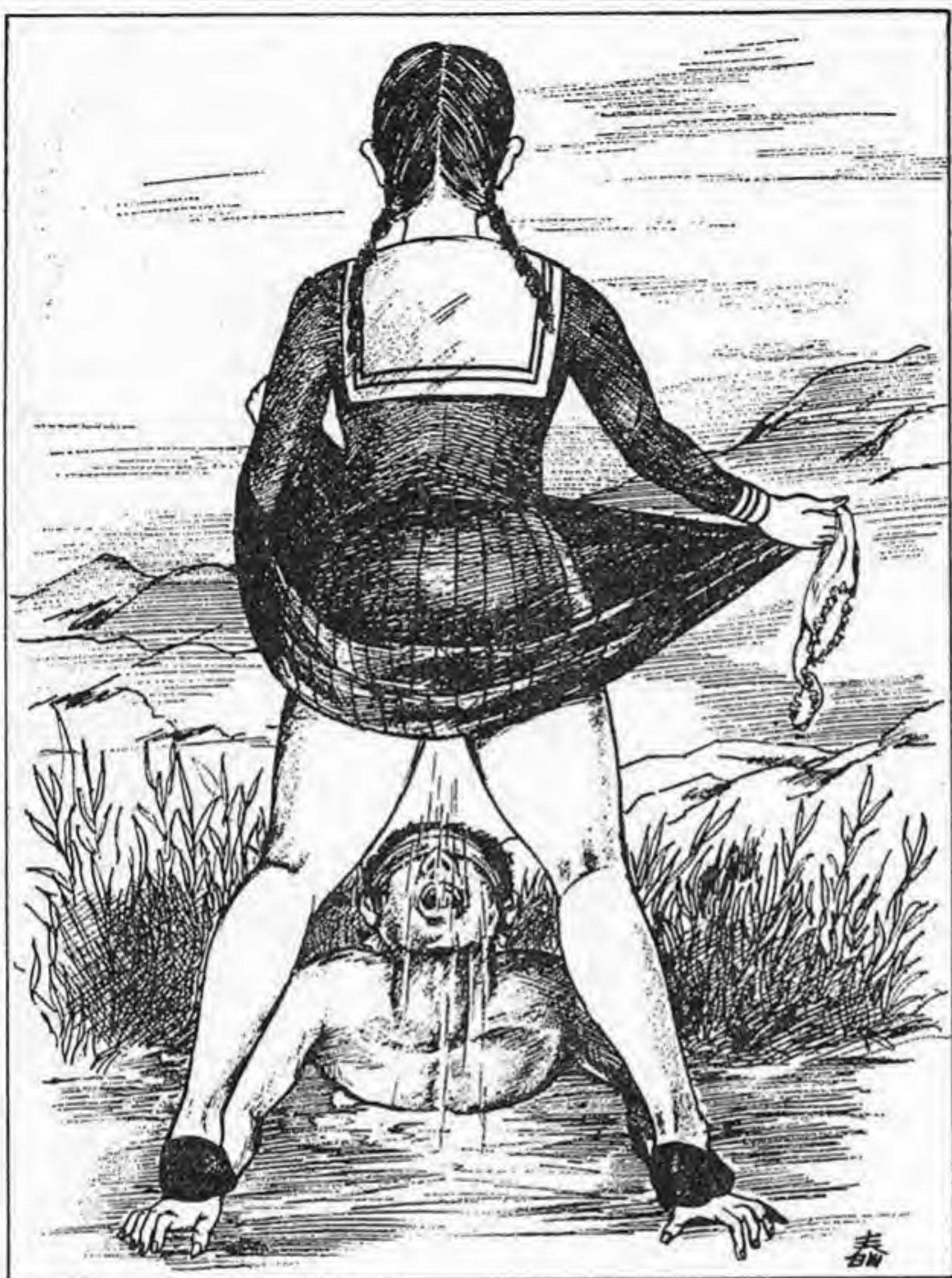


エリはベッドに腰掛け、両脚をひらいた。壁に拘束した私の前で、なやましい裸身を波打たせて、エリが呻いた。

エリの、ぬくみの残っているパンティのマ

スクから、かろうじて眼を覗かせて、私はエリの露骨な挑発を見つめていた。

自然と息が荒くなり、パンティの部分が、唇に、へばりついた。



ナミオM画廊

『晴、所により俄雨』

春川 ナミオ

ほろ苦い、そして、妙に甘い、エリのパンティの味であった。

唾液が口からあふれ、パンティのマスクを濡らしていく。

エリの特有の匂いが、口中に広がった。

全裸のエリが、壁にぬりこめた私の前に立ち、くると、うしろを向いた。

エリの背中に、ふつふつと汗が噴き出していた。

「ああっ」

エリの重々しい大きな臀部が回転する。

エリの湿ったパンティが、私の鼻口を圧迫し始めた。

「だめだ」

と私は叫んだ。

その瞬間、つとエリが私から、はなれた。

「そこまで」

意地悪く笑って、浴室に消えた。

湯の流れる音が聞こえる。

私は寢室の壁の一部と化した。

C

鉄の手枷と足枷をはずしたエリは、だまって部屋のすみにある檻をあごでしゃくった。



入れ、というのである。

エリが穿いていたパンティを顔にかぶったまま、私は身体を小さくして檻の中に、もぐりこんだ。

「またいで」

三角木馬を指さして、エリは命じた。

エリはバスタオルを胸に巻いている。

木馬責めは、江戸時代の拷問にもある。

特に女を責めるために使われたらしい。

太い材木の一つの稜を、かなり鋭くとがらせて、そこに、両手を後ろで縛り、下半身をむき出しにした女を、またがらせたものであるという。

木馬にまたがっただけでも痛いのに、縄で吊るして、またがった木馬の背中に落とすこともあったらしい。

また、木馬をかたむけて、とがった稜の上をすべらせ、股を裂くこともあったようだ。

女にとっては、苦痛と羞恥の、比類のない苛酷な拷問だったのに違いない。

プレイのための木馬は、肌を傷つけるようなことはない。

だが、鉄棒にまたがって両手を放したように、双臀に食い込むと、かなり痛かった。

木馬の、首の部分が、材木でつくられた首

枷になっている。

その首枷は、大小三つの穴が、あけられてあった。

檻の中に入ってきたエリが、首枷の半分を持ち上げ、

「首と両手を入れなさい」

と私を促した。

木馬にまたがったまま、私は首を首枷にあずけ、両手も同じように前に差し出して、小さな二つの穴の、へこみに、はめた。

持ち上げた材木をおろして、上下から私の首と両手首を、はさみこんだ。

首枷はまた、手枷もかねていたのである。

首枷は鋸で固定される。

木馬の鋸が足枷で、足首に鉄の輪が巻きついた。

三角木馬にまたがった囚人は、女のパンティを顔にかぶせられて、檻の中に閉じ込められた。

「お友達に見せたいわ」

檻の外でエリが笑った。

檻の前の椅子に坐り、冷蔵庫からビールをだして、エリはコップに注いだ。

「おいしい」

一口、飲んでエリは、胸をなでおろした。

私ののが、ごくりと鳴った。

エリに責められれば責められるほど、のどが、からからに乾いてくるのを、どうすることもできなかったのである。

「ほしいの」

とエリが私にいった。

私は、うなずいた。

檻の間から手をのばすと、パンティが口をおおっている部分を少し、まくりあげた。檻の間から、エリのほっそりした足がのばされて、私の唇をつついた。

「フフ」

とエリは含み笑いをした。

エリの足の指が、私の下唇をめくった。

「口を開けて」

とエリは、いった。

私の下唇に足の指をあてたまま、コップに注いだビールを、エリは少しずつ自分の足に垂らし始めた。

ビールがエリのすんなりした足をつたい、足の甲から指に流れた。

「飲んでもいいよ」

エリの足の指から、ビールがしたたった。

「ほら、お飲みよ」

エリは、ビールを垂らしながら、足の指を



ぐいぐいと口の中に入れてくる。

私はエリの足の指を音をたてて吸った。

「つまみは、どうかしら」

冷蔵庫に用意されたチーズを取り出すと、小さく割って、エリは足の指に、はさんだ。

檻の間から、器用に綺麗な足を差し込んでくる。

足の指にはさまれたチーズを、私は首枷をされた首をねじって、口に、ほうばった。

「おいしいかい」

とエリは、きいた。

私は、うなずいた。

「おいしいと、はっきり、いいなさい」

「はい、おいしいです」

エリは胸にまいたバスタオルをとると、脚をひろげた。

「お前の好きなものをつけてあげるからね」

エリのチーズを摘んだ指が、微妙な動きを繰り返して、チーズは足の指に、はさみなおされ、檻の間から、ぐいと私の口の前に突き出された。

「ほら、おたべ」

チーズは、ヌメヌメと光っていた。電灯に反射したのかもしれない。

手枷をされた手の平を広げ、首枷をされた

首をひねりながら、私はエリの足指の間のチーズを口に入れた。

「なんでも、たべるんだね、お前は」

おかしそうにエリは、いった。

全裸のエリが檻の中に入ってきた。

三角木馬にまたがり、首枷をされた私の前に立った。

「舐めたくてしょうがないんだろう」

ぞんざいな口調でエリはいった。

私は夢中であった。

「くすぐったい」

エリが身体を、すくめて笑った。

しだいしだいに、三角木馬の痛みが増してくる。無理な形でおさえられているので、痛むのは当然であったのかもしれない。

その時、部屋のドアがあいて、H氏が顔を出した。

仕事を手っ取り早く、かたづけてきたようであった。

檻の中の三角木馬に拘束された私を見て、

「これはいい」

と手を打った。

「記念に撮りましょう」

黒い大きなポストンバッグから8ミリを取り出した。

やめてくれとも、いえなかった。

どうせ、エリのパンティを顔にかぶせられていては、顔はわからない。

「面白いわ」

と全裸のエリも平気のようであった。

「オシッコを飲ませているところを撮りましょう」

と、さっそくH氏は注文をだした。

「いいわよ」

気軽にエリは応じた。

エリは浴室から洗面器を持って来た。

檻の前に洗面器を置くと、エリは、しゃがんだ。

H氏の8ミリがエリを追う。

洗面器に小気味の良い音が、はね返った。かなりの量であった。

洗面器を持つと、エリは檻の中に入った。

「飲みたいのだってねえ」

と私の顔先に、その洗面器を突き出した。

「飲ませてあげるよ」

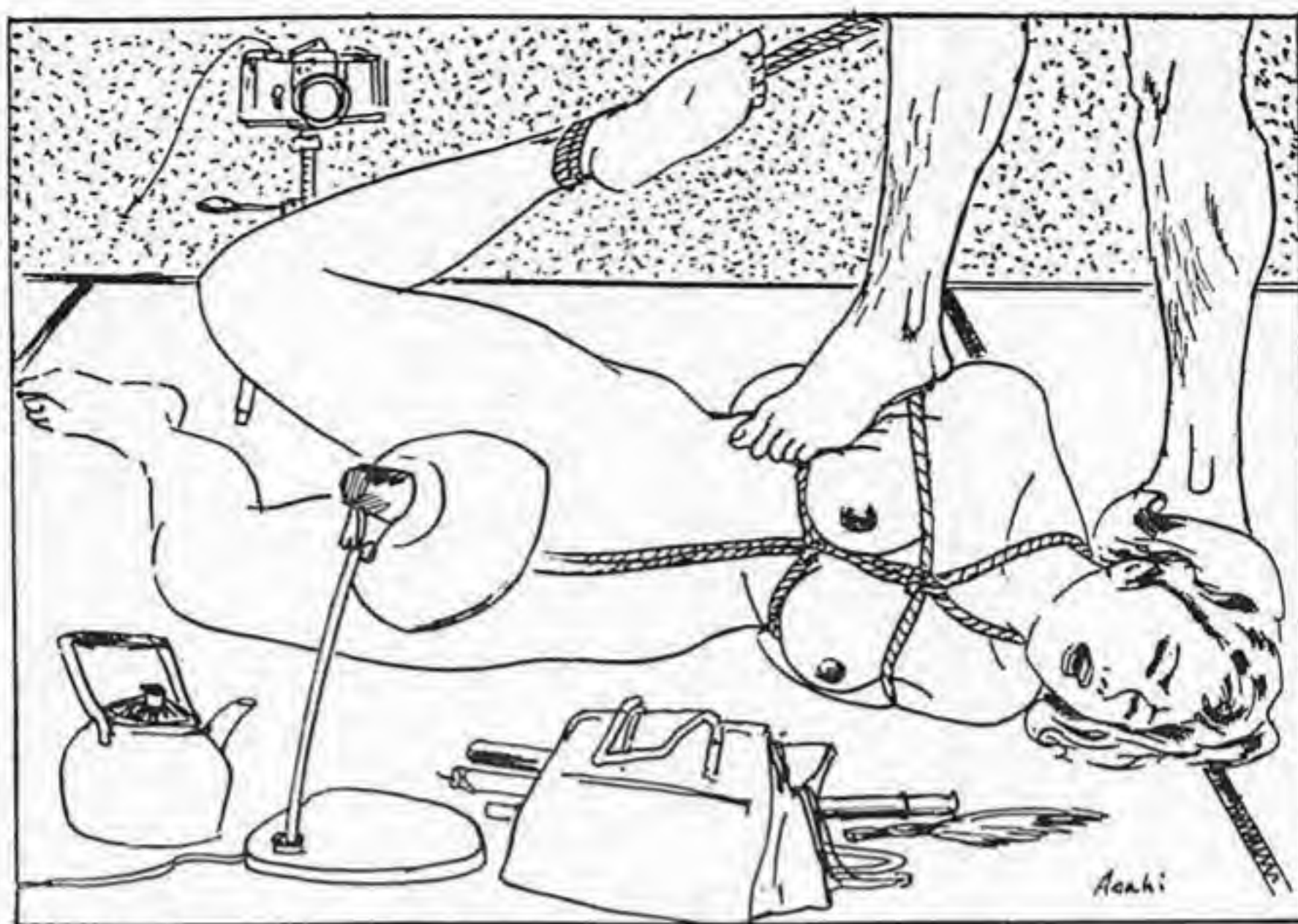
洗面器に、ゆらゆら揺れるレモン色が美しい。

「犬のように舌をだしてお飲み」

エリは、洗面器に私の顔を押し込んだ。8ミリの音も聞こえない。(おわり)



カット・須坂 旭



十二年という長い年月を共に過ごし、心から愛している夫がいるというのに、肉体のどこかに、夫以外の異性を求める何かを感じている私は、本当に不貞な女なのでしょうか。

今では昼日中さえも時として望ましく思うほどに、大きく私の心の中に拡がっているのですから、不思議な気がします。どなた様もそうではないかと思いますが、

三年ほど以前のある寒い冬の夜から、私達夫婦の愛の時間に少しずつ変化が起きました。あるものが這入りこんできたのです。そうです。皆様がたが、よくご存知のSMプレイというものです。

最初のうち、私を、嫌悪、恐れ、羞恥などで悩ませていたそれが、何時とはなく魅力を帯び、甘美なものにすり替わり

# 不貞妻の描く

## 欲望のデッサン

野村麻子

私達はロープによる緊縛から始まり、鞭打ちや浣腸、ローソク責めなどが主なプレイとなっていますが、時には浣腸代りにコケシ人形が登場したり、手足を除いて緊縛の上、ガーター・ストッキングにミニのワンピースだけで、街にショッピングに行くところまでエスカレートしています。

しかもそれが、私にとっても、羞恥や苦痛を上廻る好ましさを含んでいるのです。きっと、それだけ私のMが育ったのでしょう。もちろん、悦びに浸りきっている自分の肉体に気付いて、フツと空恐ろしく思うこともある



ことはあるのですが、いつの間にか新しい刺激を求めて手探りしているような欲望のデッサンを描いている自分に気付くのです。

だけど、それさえも、此の頃では何となくマンネリにおちいつて、何か新しい刺激が無いものかと思っているのです。

「何故だろう。なぜ、これほどの夫婦生活にまだ不満を覚えるのだろう。今迄の方法で、なぜ楽しめないのだろうか」

と、考え詰めていった末、ふと思いついたことに、あわてて上気する頬を自覚しながら打ち消そうとしたものの、点火された導火線のようにパチパチと音を立てて燃え上がった情熱は、そう簡単に消し去る事はできません。

「そうだわ。きっとプレイの相手が、夫以外の人なら、ほんの初歩的な事でも、きっと満足できるかもしれないんだわ」

フツと、一人、そんな事を思いうかべ、あわてて顔を赤らめて打ち消しながらも、一度ともされた欲望のほむらは、容易な事では消しがたく、とうとう、寝物語に夫に話す様になりました。

私が三十五才という年令でなければ、せめて二十才代の若さで、しかも美しい肉体を誇示できるのであったら、とっくに奇クのモデ

ルに志願しているのにと、この道に入るのがおそかった事を悔むのです。

私が夫にその事を話しますと、夫は、

「ふーん、お前が他の男性に責められるとはね。俺もお前が目の前で責められているのを見たいという気持ちもないこともないが、また反面、愛する妻を他人の思いのままにさせるという事は、嫌だという独占欲を感じるよ。」

だが、お前の身体を赤の他人に縛らせて、嫉妬に身を焦がすのも一興かもしれないな」

などと、私の言う事を本気にしないで、のんきな事を言っていますが、私は、今はもう夫の許しもいらぬ。一刻も早く、私が更にこれ以上、年をとって容色のおとろえぬうち見知らぬ人、そうです。夫以外の、私にとっでは此の世で夫以外の始めての男性に（プレイだけではありません。愛さえも私は夫以外の男性と交した事はないのです）この身体をもてあそばれてみたいと思うのです。

思いきり辱かしめられてみたいという気持は、考えただけでも、身体中がぞくぞくします。縛られて身動きできない身体を、その人は、どのように、もてあそばでしようか。

更に、夫も交えた複数プレイ、夫を交えぬ知らぬ男の人二人との複数プレイ……と、私

の思いは募るばかりです。

そして先月、七月十二日の事です。夫はお盆で郷里に子供を連れて帰ると言いだししました。私は、チャンスだ。どこまで出来るか分からないけど、一度、冒険してみよう——とそう心に決めました。

前の日からお腹をこわしたと偽り、しばしばトイレに通い腹痛のジュスチャーをしたのです。当日になって、「もう大分、良くなっただけど、女が夫の里へ行って再三のトイレ通いは羞かしいので、今回は私、家でお留守番します」と申しますと、夫は「残念だが、仕方あるまい、二晩泊まったら帰るからナ」と私の不貞の魂胆も知らずに、あっさりと欺されて出かけてしまいました。

さあ、今夜こそ——と、思いますと、昼間から興奮して小娘のように、うきうきしてくるのです。早い目からお風呂へ入り、身体のスミズミまで念入りに洗い清めて、鏡の前で裸のままに念入りに濃い目の化粧をし、香水を双の乳房の間から腋の下、太股のツケ根にまで振りかけておきました。

「そうだわ。本当にアバンチュールが成功して、その男性が、夫と同様のSだったら、或はSMプレイが出来るかも知れないわ」



一人で、そうつぶやきながら、ブラジャー、ショーツ、コルセット、ストッキング、スリッパ、ミニドレスと、ドレスアップしますと気のせいか、三つ四つ、若く見える様な気がして、思わず口笛を吹きたくなりました。

すっかり外出の支度が整った時は、もう外は暗く、時計の針は九時を指していました。御近所にさとられぬ様に、そっと足音を忍ばせて表通りへ出ますと、駅前通りの賑やかな街に足を向けました。駅の前でタクシーを拾うと一寸、気どって乗り込みました。

「どちらまで」と尋ねる運転手に、「私、少し、お酒が飲みたいの。どこか気易いバーを知ってたら、教えて——」

案外、カッコ良い運転手だったので、こう頼みました。街中へさえ出てしまえば、もう顔がさすこともありません。ヒョットするとこの運転手が、一夜のアバンチュールの相手になるかも——などと考えて、出来るだけ思わせぶりに言ったつもりですが、人の気も知らないで、「ハイ」と答えると、さっさと車を出してしまったのです。

ああ、やっぱり、私はもうオバアちゃんなんだわ——と、がっかりしましたが、まあ、いいわ。とにかくアルコールを少し入れたら

また変わった事が起こるかもしれないわ——と思い直して車の振動に身をまかせておりました。二十分ばかり走って、車は、とあるバーの前で止まりました。

「奥さん、ここなら、そんなに高くもなく、感じのよい店ですよ」

まるで、私の懐の軽さを見抜いた様に言う運転手に、皮肉を言われたような気がして、顔を見ずに車代を払うと、一思いに、すっと肩から中へ入りました。

思ったより明るい照明の店内にはジュークボックスがあり、静かなムードミュージックが流れていました。お客は男性ばかり三人きり、バーテンが二人、女性の姿は見当たりません。一寸、面映ゆい思いをしながら、スツールに腰を下ろすと、ジンフィーズを注文してグラスを口にしました。

一杯目を大分長い時間をかけて、ゆっくりと飲んでいるのに、五人もいる男性の一人として言葉をかけてくれる人もありません。

「ああ、やっぱり、週刊誌に書いてある様には、うまくいかないわ」

がっかりしておりますと、ドアを押して、一人の客が入ってきました。真直ぐに私のとなりのスツールに腰を下ろしますと「水割り

ダブル」と、ぶっきら棒に注文して、グラスを手にするや、スッと一息にあけてしまい、「もう一つ」と注文しています。

ああ、カッコイイ。此の人、私に話しかけてくれないかしら——。私は顔を正面に向けて、たまま、全神経をトナリの男性に向けて、グラスに口をあてようとしますと、男は、さっと身体をひらいて私の方に傾け、

「奥さん、やっぱりまだいらしたんですね。よかったら、お相伴させて下さい」

と、私の耳許で囁くではありませんか。

「えっ？」

私は思わず、びっくりして男の方を顧みしました。

「あら、あなたは、さっきの車の——」

「そうです。車を置いて、着がえてきたんです。奥さんが、まだいらしたら、御一緒に飲みたいなあと思ひましてね」

「まあ、わざわざ——」

「いけませんか？」

「あら、いけないだなんて。私の様なオバアちゃんでもよろしかったら御相手して下さい。だって、今も一人じゃつまなくて、もう帰ろうかしらと思っていた所なんですのよ」

柄にもなく、私は酔いばかりではなく、ぽ



と顔を染めながらも、精一杯の媚びをこめて答えたつもりでした。

「そりゃ、都合のよい所へ来たっていうわけですね。やはり一人じゃつまりませんよ」

グラスを交しているうちに、彼の手は、そして私の腰を抱いていました。夫以外の男性からそうされますと、腰の部分から何かジンと伝わってくるものを感じ、全身が温く上気してしまひそうです。

うきうきした気持が、私の心のタガをゆるめっぱなしにしてしまいます。

「もう飲めないわ。大分、酔ってしまいましたわ。少し風に当たってみたいの」

「そうですか、それでは出ましょうか」

私の気配を察して言葉少なに、そう言う彼は、さっと立ち上がり、表へ出ました。私は酔ったふりをして、彼の腕にすがりつくように身体を寄せました。さすがに夜ともなれば、涼しい風が頬をなぞります。

「どこへ行くの？ 私、あまり歩けないわ」  
バーを出て裏通りを歩きました。急に道が暗くなって、ケバケバしいネオンの看板だけが、いやら鮮かに目につきます。

「ねえ、どこへ行くのよ。私、もう、苦しくて、歩けないわ」

今ごろになって、飲みつけないウイスキーが急に回ってきたようなのです。彼は私の腋の下に手を入れて、かかえる様にして暗くて細い道を歩いてゆきます。角を曲がりますと温泉マークの例のホテルの看板が、ぱっと目に飛び込んで来ました。

「奥さん、大分酔った様ですね。ここで少し休んでいった方が良いでしょう」

私の返事も待たずに、さっさと植込みの間をホテルの入口へ入ってゆくのです。

「ああ、ちょっと待ってよ」

扉の前で尻込みしました。生まれて始めてぐるぐる連れ込みホテルですもの、私は、このまま彼の手をふりほどいて逃げだしたく思いました。でも、私の背後から腋の下に回している男の手は放してくれませんでした。

私は、ええい、ままよ——とばかり、全身を彼にもたせかけたまま、ドアの中へ入っていました。部屋へ落ちつきますと、急に身体中の力が抜けきった様で、ぐったりとしてしまいました。

型通りに、いろいろと口説かれ、芝居気たっぷりに、「私は人妻です。こんな所へ来るつもりじゃなかったの」などと、駄々をこねましたが、いつのまにやら彼の手はブラジャ

ーのホックをはずして、むき出しになった乳房に口を当てています。

「ねえ、お願い。私は悪い女だけど、自分から進んで浮気した様に思いたくはないの。だから、恰好だけでいいから、私の自由を奪ってからにして——」

「ええッ、どうしろって？ まさか、あとになつて、俺に強姦されたなんて、言うんじゃないだろうナ」

「違うわ。決して、そんな事は言わないわ。此れは私の心の問題なの。私が自分自身に納得させたいのよ。ねえ、お願い」

「ふーん、変わってんな。で、一体、どうすりゃ良いんだ」

「私を縛って——。そして、その上で私を抱いて、犯してちょうだい」

「良し、面白い。俺も一度、そんな事をやってみたいと思っていんだ」

私の誘いにうまくのった彼は、私に飛びかかる様にしてベッドの上に突きとばしますと片手片足を器用に使って、私の身体を押さえつけたまま、ドレスを脱がしにかかり、スリッパの肩紐を外しました。

私は夫以外の男に、こんな事をされたのは始めてですから、もう、わくわくする様な気



持で、彼がそれから何をするか、胸を躍らせて待っていました。

男は私の上半身をハダカにしておいて、ホテル備付けの浴衣の腰紐で、後手にねじあげた両方の手首を縛り上げてしまいました。

「あつ、痛い。乱暴しないで——」

「うるさいナ。こうして欲しかったんじゃないのか。言われた通りしてるんだゾ」

何時の間にか、言葉づかいさえ、荒々しく変わっています。腰の所まで下ろされていたスリップ、ストッキング、コルセット、ブラショーツ……と順にむしる様に取りられ、とうとう全裸にされてしまいました。

ああ、遂に、夫以外の男性に、こんな恥かしい姿の裸を近々と見られてしまいました。

でも、ただ、此れだけの事でしたら、何時も夫とやるプレイからすれば、何という事もない子供だましの様な縛りだけなのですが、他人にされているという事だけで、私はもう目もくらむ様な興奮に襲われるのでした。

二本の腰紐と私の脱いだストッキングが、縛りの小道具に使われているのに過ぎませんが、私には今迄味わった事のない刺激がありました。彼は、私の手の自由を奪ってしまいますと、私の身体を、ころりと引っくり返し

て両足を左右に押し開いて、その間にどっかと坐り、しげしげと眺め出しました。

「ねえ、嫌ッ。羞かしいわ」

そんな私の声が合図になった様に、彼は私の両股を押し開きにかかりました。右を開けば左をすばめ、左を開けば右をすばめるという具合に、私は仲々脚を開かせまいとし、彼の力に負けそうになりますと、両足をばたばたさせたり、彼の肩やお腹を蹴ったりしました。二人とも、ハアハアと荒い息づかいで、此んな争いを楽しみました。

なんといっても、両腕の自由がきかないで仰向けにされているものですから、私の方が先に疲れてしまいました。既に着ているものをかなぐり捨てた彼が、私の両足の間に身体を割り込ませて来ました。

此の部屋へ来てから、どれだけの時間が過ぎたでしょうか。

「ああ、貴方、許して。貴方、許して——」

私は思わずそう叫んでいました。夫よりは若々しく逞しい彼自身でした。

総べてが終わってしまいますと私は飛び立つ様にホテルを出てタクシーを拾いました。家へ帰りますと、直ぐに風呂に入り、身体中を洗い清めました。でも、身体はまだ火照っ

たままなのです。

「貴方、御免なさいね。矢張り、貴方がいなければ駄目だわ」

始めての夫以外の男性とのプレイを経験しながら、先ず夫の事が思い出されたのです。

あのタクシーの運転手の、名前も聞いていなかったのですが、私も何も喋っておりません。本当に、行きずりのアバンチュールだったのです。次には、夫を交えた三人プレイを是非やりたいと思います。でも、今日の事だけは夫には内緒にしておかなくては——。

そう考えている私ですが、仲々良い相手が見つかりません。私が、もっと若ければ奇巧の誌上に写真を出して戴いて、読者の方々からの呼びかけを待てばいいのですが、以前に一度モデルの応募はしたのに、お返事はありませんでした。きっと、此んなオバアちゃんだから駄目なのでしょう。

それで、此んな私でもプレイをしてみようと思われる読者の方がおられたら、御連絡下さい。夫には私から口説いてみる自信があります。夫を交えた三人プレイは、きっと私を最高に燃え上がらせてくれるに違いありません。私は、其の日の来るのを楽しみに待っております。





## 秋風対談

## S M界は花ざかり

赤木恵介

A 少々短気で怒りっぽい S M マニア  
B 少々のにびり屋で気のいい マニア

○

A しかし、ひどいねえ、最近の妙な S M 雑誌の氾濫をみていると、なんだか、イヤーな気持ちになってくるねえ。こういう派手な形での氾濫は、おそらく戦後初めての現象じゃないかしら。ということは、日本に印刷文化が輸入されてから、初めての現象ということになるけど。

B だけど、ぼくら S M マニアにとっては、選択できるから、不安になる反面、楽しい時代になったとも言えるよ。

A 楽しい？ 冗談じゃない。楽しいどころ

か不安感がひろがるだけだよ。ああいう雑誌の氾濫で、ぼくら S M マニアは、いっそう世間から誤解される。つまり、S M 雑誌なんか読むやつは、みんな反社会的暴力性色情狂じゃないかと、誤解されそう。ぼくは、それがいやだし、こわいんだよ。

B あいかわらず、きみは心配性だな。大丈夫だよ。世の中は変わっているんだよ。ポルノ解禁なんて噂も、チラホラ、きこえているじゃないか。世の中は、だんだん自由になっていくんだよ。

A その逆の噂だってきこえているぜ。この種類の雑誌の横行が目にあからぬから、そろそろこのへんで、という……。

B まあそのときはそのときでいいじゃないか。ぼくら一般の読者には、関わりのない

ことさ。

A きみは、まったく楽天的だなあ。それにしても、みてごらんよ、ひどい内容だぜ。S M というものを、まったく理解してないくせに、S M 雑誌を名乗るなんて、ぼくには、どうしてもゆるせないのだ。

B まったく、理解していない。というのはちょっと酷な気がするけど、まあ S M に関して、この種の雑誌は理解度が浅いということ、たしかに言えそうだね。

A たとえば、この記事を読んでごらん。「キミは S か、M か？」という、例の最も愚劣で浅薄な文章が、カット入りで堂々と載っているんだぜ。ちょっと読んでみようか。

——人は誰も、その内部に S 的要素と M 的



要素をもち合わせている。ただ、その要素のツヨイほうがその人のタイプを決定するのだ。といって、本人が自分の性的傾向を自覚していない場合が少なくないので、そんな人は簡単なS M診断を試みたら……

①好きな女性のタイプは、(イ)ヤセ型、(ロ)肥満型。

②好きなスポーツ、(イ)ボクシングやプロレス。(ロ)サッカー、バレー。

③好きな色は、(イ)赤。(ロ)黒。

④自慰は、(イ)そんなにしない。(ロ)しばしば行なう。

⑤好きな食べものは、(イ)肉類。(ロ)野菜。

⑥匂いには、(イ)鈍感。(ロ)敏感。

△解答▽比較的なものだが(イ)はS型、(ロ)はM型とみなされる——(以下略)

というんだけどね。これは最も低級な三流四流週刊誌なんかで、以前よく載せていた記事じゃないか。こういう安易なものを、いまさら掲載するS M雑誌を、ぼくたち読者は、とても信用することはできないね。肉の好きな男はS型で野菜が好きなのはM型だなんて、そんな浅薄な、いいかげんな

分類のしかたをされると、ぼくはもう頭がカッカしてくるね。いやになってくる。きみ、S Mマニアの心情なんて、もっと複雑で、屈折していて、しかもデリケートなものだぜ。

B そんなにムキになって怒ると「こういう記事を読んで、すぐカッカする男はS型」なんて診断されるよ。

A もうひとつゆるせないのは、告白記事と称する「教息子と娘との爛れたセックス」だとか「義母との倒錯の愛に溺れて」なんていう記事だ。真実の告白ではなくS Mについて無知な作家に書かせた文章だということが、すぐにわかるいいかげんなデッチあげ記事。こんな程度の低い記事で、S Mマニアがだませると思っているのかな。

B S Mマニアはだまされなくても、だまされる読者が、ほかにたくさん、いるんじゃないかしら。つまり、そういうS M雑誌がねらっているのは、本当のS Mマニアではなく、いわゆる実話雑誌のファン層なのかもしれないよ。

A ああ、そうか、なるほど。つまり、従来の実話雑誌に、S Mの味つけをしたのが、

いま氾濫しているS M雑誌というわけか。

B そういう言い方は、ひどいと思うよ。だって、そういう雑誌の中には以前「奇ク」に作品を発表していた人がたくさん書いている雑誌もあるし「縛り」の写真や絵だってたくさん載せているんだから、やっぱりS Mマニアを相手に編集されているんだと思うよ。

A それぞれ、その写真だって、いいかげんなものだよ。せっかく豪華なカラーページに載せながら、まったくS Mツ気のない縛り写真。縄が無気力にぐるぐるツとモデルに巻いてあるだけで、縛りの形すらできてない、つまらない写真ばかりじゃないか。

B うん、残念ながら、それは認めるね。モデルが、やたらに足をひろげて一番低劣な扇情的ポーズをとっている写真がめだつ。ああいうのを見ると、たしかにS Mマニアの読者は侮辱されていると思うね。あんな低俗きわまる写真で、本当のマニアを満足させることができると思っているのだろうか。腹立たしいなあ。

A おやおや、いつもおとなしいきみが、写真のことになったら、急に語気が鋭くなっ



たね。

B だって、三十ページも四十ページもある写真ページの中で、ぼくをエレクトさせる写真が一枚もないときがあるんだから、悪口だって言いたくなるよ。

A きみの、さっきの言葉を借りれば、そういう写真をよろこぶ読者が、きっと多いんだろうよ。S M マニアにはピンとこないんだけどね。

B 結局、出版社というものは、どんなにいかげんな内容でも、雑誌がたくさん売れて、お金が儲かればいいんだらうねえ。

A よく知らないけど、そう思えてくるよ。ぼくみたいな本当のS M マニアの心を踏みにじらないと、金儲けなんかできないのかも知れないなあ。

B なんだか、急におとなしくなったね。でも、ぼくは思うよ。本当のS M マニアの数だって、けっしてバカにしたものではないし、本当のS M を探究していく姿勢のないS M 雑誌は、やがて滅びる運命にあるんじゃないか、とね。

A うん、ぼくも同感だね。人間性の深いところを探究し、表現する本当のS M には、

「正常」な性癖の読者をも惹きつける魅力があるんだ。いかげんな、うすっぺらな安易なS M 記事ばかりがつづいていたら、そういう「正常」な読者も、やがて離れていくんじゃないだろうか。

B 本当のS M ってのは、おもしろいからねえ。真実性のあるS M 記事というのは、だれが読んだって興味があるし、感動もすると思うんだ。

A まあ、結局、いかげんなものは消えていくと思うよ。嘘ッパチのつくり話なんかにはエロチシズムすら感じられないもの。

B ぼくもそんな予感がする。本当は、S M の世界というものを、もっともっと突っこんで、人間性に密着した雑誌に变身していただろう。

A まあ、いまの姿勢じゃ無理だよ。一番低劣なグロばかりねらっているものなあ。世間の人は、ぼくたちマニアは、ああいうものが好きで、あんなひどいことを、こっそり実行しているんじゃないかと思うだろうなあ。それがいやだなあ。

B まあまあ、そう神経質にならずに、もうすこし見てみようじゃないか。なんだかん

だと言ったって、きみにしても、ぼくにしても、そういうS M 雑誌を、毎号ちゃんと買って一応は読んでいるんだぜ。文句をいうくらいなら、買わなけりゃいいのにさ。

A そこなんだよ、マニアの弱いところは。S M と名のつくものは、一応買って目を通してみないと気がすまないんだ。自分の好きな写真が、一枚でもあれば買うし、小説の中で自分の好きな場面がすこしでもあれば、ほかのページがどんなに気にいらなくても、つい買ってしまふんだ。

B ほかの物価にくらべたら、雑誌は安いしね。まあ、そのへんがマニアのマニアたるところなんだろうねえ。

A 最後に「奇譚クラブ」の提灯持ちをするけど、この雑誌はほんとにおもしろいね。なんといっても、ナマのS M マニアの声がこんなにも豊富に盛りこまれている雑誌はほかには一誌も、ないからね。読めば読むほど味がでてくるんだ。読んでいるうちに恍惚となってくるんだ。

B ぼくらにとっては、まったく貴重な雑誌だよ。永久に刊行をつづけてもらいたいと心の底から念願するね。





SMカメラ・ハント

## 特訓プレイ妻

佐野みさ子の巻

辻 村 隆

上京するたびごとに、事前に佐野みさ子に連絡しておき乍ら、その時になると会う人プレイする人の多さに追われお互いの時間の調整がつかなかったりで、いつも鵲の嘴のくい違いになって、心ならずも、のびのびになっていた私達のプレイであった。

九月の上京は、彼女と出会うことを、目的の第一義にお

き、彼女とのデートの場所に直行することに心をきめ、佐野みさ子さんに電話する。

彼女の時間の都合や、生理期間もあり、日は、彼女の方できめてもらうことにしたのである。

「やっとお目にかかれるのですね。嬉しいですわ」

電話の美しい声は弾んでいる。

「上京して、あれこれ仕事してからと思うといつも時間がなくなります。今度は、貴女に会うのを、目的の一番に置きました。あなた



の都合のいい日を、どうぞ仰有って下さい」  
 「じゃあ九月の四日は、どうでしょうか。主人が土曜日に出張して一週間ばかり戻りませんし、子供は母の方に預かって貰います。日曜より、月曜日の方が混雑しなくて都合がよろしいでしょう」

「結構です。待ち合わせの場所は何？」

「西武新宿駅の売店の前で、午後三時頃……母の家が、西武沿線なものですから、子供を預けに行って、恰度都合がよろしいのですが御存知でしょうか、あの辺り？」

「全然、地理不案内ですが分かるでしょう」

「じゃあ、きつと……お待ちします」

「失礼ですが、体の調子は？」

「月末で終わりました。安全期間だと思います」

「いろいろとお話したいこともありますが、電話じゃ長くなりますので、いずれお目にかかった節——。『花電車』『代理妻』など、私の期待が大きいですからネ」

「誓約書を持参いたしますわ」

「ハア？ なに？」

「辻村様に対する、私の奉仕の誓いの言葉」  
 「ああ、そうですか。愉しみにしています」

電話をきる。

約束は出来た。

九月四日——私は新幹線に揺られている。車に馴れた私にとって、二つの鞆は荷重であった。

ショルダーバッグには、カメラ道具一式と洗面具、男性化粧品など。

手提げの黒革のバッグには、縄と女悦のプレイ道具。

佐野みさ子と出会うのを手始めに、私は所用をかねて、二泊三日の上京のスケジュールを組んでいた。

三時間の車中、独り旅の気楽さで、誰に煩わされることもなく、深沈と瞑想して、佐野みさ子のイメージに、ひたる事が出来る。

石原道代といい、彼女といい、私はいつも東京在住のロマン派生に、プレイハントの先を越されていた。石原道代も、増田喜代司に早くから勧誘されていたが、行きそびれているうちに、ロマン派生が二度に亘って発表し、私が度々上京する機会が出来るようになったら、増田喜代司が関西に転勤し、彼の紹介で、石原道代に連絡したが、時既に遅しの状態で、彼女はロマン派生のルポが、何か気に入らなかったのか、書かれる前提のプレイは御免蒙ると、すげない返事であった。

鉄は熱いうちに打ての譬え通り、SMプレイも、女性の気分の熟した時に、即刻、時を移さずやらないと、女心と秋の空の何とかでいつ気が変わるか分からぬものである。

私はロマン派生に対して、嘗てカメラルポで一時期を画した、山本一章の変身を想像したのであるが、関東在住の医療関係の人と分かってからは、その疑問も解いたが、それにしても、文章なり、フォトに数字をつけての説明など、書き振りが、よく似ている。

似ていない点は、山本一章は、必ずといってよいほど、M女性を眼隠しし、耳栓、猿轡などしたのに対し、ロマン派生には、それ程のかたよった傾向のないことであった。

やはり私の、思い過ごしであつたらしい。山本一章が最近、東京のマルゴあたりにも出没し、仕事で上京の折には、かかさず独自の方法でハントしていることを仄聞していただけに、フトそう思ったままである。

金あり男良しの彼にとって、秘かに耽溺のプレイを愉しむことだけに今や没頭して、今更ルポなど書く気にもならないのであろう。

佐野みさ子さんを印象づけたのは、奇クサロン欄に、折々に発表された、彼女の妊婦フォトからであった。



出産と共に、一時、影を潜めたが、最近、俄に活発な活躍を始め、私に度々呼びかけてくるに及んで、食指が動き始めたのである。

ロマン派生とのSMプレイに、かなり対抗意識を燃やし始め「緊縛花電車」の告白で、SMプレイ、プラス、セックスプレイを、はっきり表明しているのを読んで、これこそ、赤裸々な、SMプレイの究極の姿だと共感を覚えた折も折、追い討ちをかけるような「SM代理妻」の願望を、うち出している。

今は二児の母であり、人妻の彼女も、かつては横浜でセックスに溺れたホステス時代のあったことを、何の衒いもなく告白し、黒人とのセックスなど、堂々と発表している。

そこに、日とともに、激しく昂まりゆく、彼女の被虐の願望が、如実に現われていた。人妻ともなれば、過去を糊塗し、美化するのが常識であるにもかかわらず、彼女の場合殊更に、自己を赤裸々に曝露して、果ては、ストリップショウなどにみられる「花電車」まがいの行為を告白して憚らない。

奇クサロン欄の、片隅を埋めていた頃との彼女とは、雲泥の相違の心境の変化である。ロマン派生を始め、数人のS派の連中とプレイしたこと。黒人とのセックス。SMプレイ

イのあとに、必然的に到達するセックスに、堂々と言及しているのであった。

時流のSMブームが、彼女をそうさせたのであろうか――。

鬱勃として己まぬ、被虐への願望と、甘美な性への歓喜が、佐野みさ子の潜在的なものを、一挙にさらけ出したのであろうか。

ともあれ、彼女の、最近の、プレイへの願望には、眼を瞠るものがあつた。

そのSM代理妻佐野みさ子を、辻村流のSMプレイの特訓でしごくべく、私と彼女との距離は、刻々と縮まりつつあつた。

× × ×

東京駅から新宿へ――

歩いて数分、工事中西武新宿駅を迂回して、目指す売店の前に、黄色いワンピースの後姿の女人が、一人佇むのが目につく。

大阪をたつて、新宿の約束の場所への到着が午後三時三分前――。誠に我乍ら、あざやかな、時間厳守であつた。

後姿に迫って、声をかける。

「佐野さんですね」

ピクッと一瞬、背に強ばりが走り、彼女は振り返った。

「ハイ……」

紅潮し、ベソを掻いたような表情が、眩しげに私をみつめる。

一見、平凡な、人妻らしい姿で、どこにでもザラに転がっている容姿である。

「実にピッタリですね、約束の時間通り……」

大阪と東京を距てて、かくも易々と遭遇出来た欲びが、私について、そんな言葉を吐かせた。

「おそれ入りますわ」

「お待ちになったのですか？」

「ハイ、二時半に到着してしまいました。自分勝手ですけど……」

「それは、それは」

私は始めて、佐野みさ子を、そこで正視した。フォトで、たびたびお目にかかっていたが、その容貌は、故意か偶然か、いつも曖昧模糊としていて、漠然としか掴めなかったのである。

素晴らしい美人というでもない。

清楚さという形容も当て嵌まらない。しかし、一見、堅肥りにみえ、子供を産み、セックス体験の豊富さが、むっちりとした躰全体に溢れ、何よりも、憧憬的なキラキラと光る双眸が、私の心を捉えて離さなかった。しかし、知らない街で、ゆきずりに出会ったとし



たら、懼らく彼女に心を留めることはなかったであろう。

謂うなれば平凡なのである。その平凡さの中に、強烈なM性を秘めた、彼女の願望を知っている私にとっては、その平凡な姿態のすべてが、被虐の悦びに疼いている女体の塊のように、うつるのであった。

若い娘には見出すことの出来ない、欲情のほむらのようなものが、この人妻の体から、そこはかとなく滲み出ていた。

「お食事は？」

「軽く済ませました。辻村様は？」

「私も車中で——よかったら早速、落ち着きましようか、どこかへ。いつも車でしう。だから偶に、こうして重い鞆を、二つも提げていると大変なんですよ」

「済みません、我俚いって……」

「あなたのせいじゃない。唯ね、鞆の中味はヘンなものばかりですからね。何とはなしに自分で気が咎めて、滅多に調べられるようなこともあるまいけど、内心ヒヤヒヤなんです。近頃物騒になって、電車内に爆発物を仕掛けたりする者があるから、余計な眼をつけられやしないかと思ったりしましてね」

「随分、沢山のお荷物なんです」

「存分なプレイをしたいから……」

「あら——」

チラリと眼が笑って、はにかんだ。

「全然、勝手が分からないんです。この近くのホテルに案内して下さいよ」

「私も余り精しくないんです。先日、ロマン派生様とプレイしたホテルでもよろしいでしょうか」

「結構ですよ」

「歩いて、いくらもないですよ」

私と肩を並べて、彼女は新宿の繁華街へ、人浪を掻き分けてゆく。

平日の昼下がりで、このターミナルは雑然と、若い男女の渦が巻いていた。歩き乍らの会話がづく。

「近頃、活発に書かれますネ。あれ、あなたが書いていらっしゃるの？」

「学生時代、文学に憧れたこともありますが、世の中へ出て、そんな機会がなくなりまして、箕田様が、書け書けと、奨めて下さいますので、ついその気になって……。お恥かしいですわ」

「皆、本当なんですか？」

「体験によるものですけど、本当はもっと、凄いいことだってありますのよ」

「へえー、あれ以上？」

「結婚前の、数年の放浪時代を、もっと文才があれば、書いてみたいのですけど。わが半生の記」なんて気取っちゃって……」

「恋愛結婚なの？」

「似たようなものですわ」

「御主人とSMプレイをなさるんですか？」

「主人も学生時代からの奇クファンでした。陰と陽、SとMが惹かれて結婚したようなものです」

「かなり強烈なんでしょう」

「それが意外にそうでもないんです。夫婦になった当時、かなり思い切ったこともしたのですが、最近はマンネリズムになって、余り構ってくれません。面倒くさがるのです。SMプレイを面倒くさがっちゃ、おしまいですわ。私が他に求めていることも、よく知っている筈です。今でも奇クを読んでいるのですから……」

「何も仰有らないのですか？」

「私をこのようにSMずかせたのは彼なんです。彼のSMの気分を昂揚させようと、私はわざと曝露しているような点もあるのです。ロマン派生様との事を、あの方のルポ以上に書けないことまで夫に精密に告白すると、や



はり燃えます。そんな燃える夫が好きなんです。ともすればマンネリになりがちな、私達の夫婦のSMプレイを、より快的にするため、私はSの方を求めているのかも知れませんか」

「今日、私と出会うことは、御主人は御存知？」

「知らせておりません。でも出張から帰ったら、辻村様とのプレイのことは、すべて話す気でおります」

「何だか、やりにくいなあ」

「どうしてですか。夫は、すべて許容しているのです。私は夫とのプレイの睦言の合間にも、辻村様とのSMプレイを只管、望んでいることを、いつも口にしていきますのよ」

「どう言ってるの、彼。それに対して」

「思いきり虐められて、腰が抜けるほど満足してこいて……」

ドキリとする猥らな言葉を平然と吐いて、佐野みさ子は頬も染めなかった。とりようによっては、私に対する挑戦であった。

渡部夫妻といい、この佐野夫妻といい、夫婦のSMプレイの飽和状態を打破する手段として、ゼラシーと妻への嗜虐の思いを縋い交ぜて、第三者にプレイさせようという気にな

るものなのであろうか――。

欣然と出掛ける妻に、激しい嫉妬を感じ、暗黙の諒承をいいことに、無断で第三者と、セックスを伴うSMプレイに耽溺する妻に、湧然と嗜虐の感情を燃やし、自らのプレイをエスカレートさせてゆくように思えるのであった。

お互いを信頼することで成り立つ、こうした行為も、一步誤れば、夫婦間に疑惑と不信の危惧を、孕んでいるように、思われるのであった。

今、私と並んで歩く、佐野みさ子は、紛れもなく、欣喜としていた。

この刹那に、情欲のすべてを賭けている彼女の脳裡には、懼らく夫も子供の存在も、大脳の片隅に追いやっているに違いなかった。

繁華街から外れ、あちこちに隠見し始めたホテル群を素通りして、彼女は、とある一軒のホテルの前で立ち止まると、

「ここですよ、いいかしら？」

と私に、きく。否も応もない。頷くと、佐野みさ子は、そっと私に寄り添った。

昼下がりの明るい陽射しの下で、人眼を気にしながら、私は暗いフロントに、這入っていった。

× × ×

ドライブインレストランや、こうしたアベックホテルは、最近、全国的に画一化された傾向がある。

カメラ・ハントのため、私など比較的、数多くのホテルに、足を踏み入れる方だが、大阪、京都、名古屋、東京と、どこへいっても余り変わりばえは、しない。いずこも同じ、よく似た部屋の構造である。

それだけに、ホテルの、この密室の一部屋に、はいってしまつと、自分が今、東京の新宿にいるという距離感をなくしてしまう。

それが、いいのかも知れない。今の私達にとっては、何もかも忘れて、只管に、ただ、SMプレイに耽溺すればよかったのである。

何となく、辺りを見廻している私に、

「お氣に入らなかったのでしょうか？」

と、佐野みさ子が、責任を感じた顔つきできいた。

「いや、ここで結構ですよ。唯、全国どこへいっても、こうしたアベックホテルは一樣に似た感じなので、そう思っていた迄です」

「回転の円型ベッドや、せり上がってゆく展望ベッドなんかもあるそうですのよ」

「でも緊縛を伴うSMプレイは、柱などのあ





る、こうした和室の方が都合がいいですよ。その代り、いつでも同じようなフォトになるのですが、結局は、こうした部屋を使うからでしょうね」

彼女は黙って、うなずいていた。いつもの型通り、バスに湯を出して戻ってくると、彼女の手一枚の紙片が握られている。

電話で告げていた、代理妻の誓約書なのであろうか。

思いつめたような、熱い人妻の眼眸が、私を直視する。

「縛って下さい」

吐き出すようにいって、女の眼は燃えた。

「その儘で？」

「ハイ、縛って、私に誓いの言葉を述べさせて下さい」

その儘、机に直面しては、言い難い言葉が羅列しているのであろう。

縛られて、被虐の立場に身を置いて、一刻も早くプレイの舞台を構成したかったのか、佐野みさ子は積極的であった。

「よし、分かった」

私の言葉も、須臾にして横柄に、嗜虐者の立場に変身する。

私は手早く、一条の縄を取り出すと、黄色い縞の、ノースリーブのワンピースの上から後手に縛り上げる。

既に、彼女の息遣いは荒い。

ネックのシャツを脱ぎ、ズボンを脱いで身軽になると、人妻を抱きよせる。それを待つかのように、彼女の唇は赤く濡れて、私の接吻を期待していた。

軽く、くちづけして私はカメラを据える。

早くも、ハントの根性が、こんな状態にも、ちゃんと芽を出していた。

私の挿入フォトは、すべて、セルフタイマーである。いちいち断わるのも面倒だから、先に纏めて言うておこう。

机上に、折り畳んだ便箋がのっているのを開く――。

佐野みさ子の、プレイの願望が、縷々と綺麗なボールペン字で、したためられてある。

「さあ、読むのだ。大きな声を出して……」



「ハイ、みさ子は、唯今より、辻村様を御主人と思つて、読ましていただきます」

遊びの感情をむき出しにして、みさ子は、縛られた体を、机ににじりよせ、紙片に顔を近づけていった。私は慌てて、カセットテープを出してセットする。熱い嗜虐の想念が、私の胸を掻きむしる。

佐野みさ子の、導入の演出は、余りにも見事であった。

「みさ子の、代理妻の願いを叶えて下さいまして有難うございます。」

みさ子はSMの代理妻となり、思う存分のプレイとセックスを、御主人様に楽しんでいただきます。

みさ子はおしゃぶりの奉仕は勿論のこと、数ある穴を存分に御使用いただき、御主人様のお恵み下さいますものを、喜んで頂戴いたします。

みさ子は、とことんまで、いじめ抜かれることに遊びと生き甲斐を覚えます。

みさ子は、羞恥責め、餌責め、花電車、剃毛儀式、浣腸責め、穴責め等、責められることがこの世の中で最も愉しく好きなのです。どうか思いきり苛めて可愛がつて下さい。

みさ子は、どんなあられもないポーズの緊

縛も、いけません。存分に縛り上げ、ムチ打つて下さい。

みさ子は、御主人様の命令なれば、沢山の面前で、あらゆるはずかしめを受けても構いません。皆様におしゃぶりの奉仕をし、皆様のものを喜んでお受けします。

みさ子は、代理妻であると共に、御主人様の奴隷であり、牝犬でございます。

御主人様の御命令とあれば、足を挙げて排泄もいたします。喜んで、のませていただきます。唯、いれずみと、血を流すことだけはお許し下さいませ。

みさ子の、この様な切ない願いをお叶下さいます。御主人様の奴隷、代理妻みさ子。スラスラと読み終わり、みさ子の眸は、妖しく、うるんでいた。

たまらなくなった私は、みさ子のワンピースの胸を矢庭に押し詰め、むっちりとした、大きな膨らみの乳房を、掴み出していた。

いつもなら、相手に与える言葉のプレイが積極的なみさ子の誓いの言葉によって、刺激を受けたのは、むしろ私の方であった。

もう、どうにも止まらない思いで、みさ子とその場に立たせると、ミニのワンピースをぐいと、まくり上げ、この日のために穿いて

きた新品の刺繍パンティをずり下げてゆく。

剃毛されて、二カ月ぐらい経ったかにみえる、よく苅り込まれた芝生めいた風情が、咫尺の間に展開する。

髭を剃るのと同じことで、度々剃毛すると毛は硬度を増してくるのか、その感触は、かなりこわばってザラついていた。

感情の尺度を確かめる手に、（ああ）と呻いて、恍惚の表情をまざまざと現わし、みさ子は心もち足を開いた。

甘い馥郁とした蜜の香りが、私の鼻腔を快く擦る。影しい滑らかな露。

魅惑の素肌は、熱く火照っている。その熱度が、みさ子の官能の昂まりを、如実に示していた。

みさ子自身、自らの誓約に、自らを昂ぶらせてもいたが、もう一つの原因には、これから始まるであろう、数々のプレイに期待してあられもない行為を想像するだけで反応は、かくもあらたかなようであった。

情感の高い女性ほど、それは顕著である。

私の古い友人で、今はある映画興業の重役に納まっているSが、こんな話をきかせてくれたのを思い出す。私が廿五、六才で彼はその頃四十才に近かったので、その時の彼の話





は実の処、ピンとこなかったのだが――。

情事するとき、愛撫、くちづけ、抱擁のあと彼の指が、べっとり濡れていたならば、彼の情感は昂まり、情事へと突入するが、あっけらかんとして、カスカスの場合、相手がどのような美女であろうとも、彼は容赦なく叩き出してしまふというのであった。舞台監督やらプロデューサーを仕事にしてきたSにとって数多の女性や、スター、ニューフェイスが彼

の歯牙にかかったが、その話をきいた当時、叩き出すという言葉が耳につき、何てゼイタクな野郎だと内心、思ったが、今にして彼の言葉に、いみじくも思い当たるのであった。

彼のドン・ファン歴をきけば、十五才の少女から、五十八才の姥桜まで手玉にとったが少女が、しとど濡れることを確認し、姥桜といえど、結構、炎を燃やして、たっぷりとうるみ、陶醉しきった表情の三十盛りの女性に

案外ウソがあったというのである。

いい役にありつく為、仕事欲しさに、我が身を投げ出しても、それが真実か偽りの情事かは、その一事で分かるというのであった。

ホステスにも多いと彼は云う。彼の金と地位に近づきたさに、身を投げ出しても、心の燃焼は、濡れるか否かで真偽は分かるから、君もホステスなどとき合う時は、よくそれを確かめたまえとの、女極道を知った人の結構なアドバイスであった。

私のカメラ・ハントの対象の女性の場合、M性の女性は、最初から、その気になっているから、情感たっぷりであるが、報酬目当ての緊縛モデルや、近頃の放恣な金銭づくの若い娘には、全裸を曝し、緊縛であられもない肢態をさらけ出し乍らも、慨して、濡れそぼる情感には乏しかった。

初期の緊縛モデル、大塚啓子嬢など、最もそのいい例で、あっけらかんのクチであって私は余り好まなかったのも、そのせいであつたし、伊吹真砂子にしろ、どちらかというところ、興味がある方だから、も一つ乗ってこなかった。梨花悠紀子の場合、最初はSM自体、分からなかったので無理もなかったが、次第に情感を漂わせるようになり、濡れてい



った方で、先日、結婚後、出会ってプレイした時など、自らプレイを求めてきただけにその濡れ方は激しく、私の琴線を、そぞろ欲びに震わせたのであった。セックスとプレイについて、彼女の体が熟知したせいもあり、昔を偲んで、プレイに心を疼かせたことにもよるのであろう。

話は外れたが、今茲に確かめた佐野みさ子は、未だプレイらしき行為もないに、夥しい情感を表わしていた。プロデューサーS氏に謂わせれば、上乘の女性というところであろうか。

Sと仲のよかった名喜劇俳優、故古川緑波が、こうした情感昂まる女性を「ベトベト」と呼称したという。

（ゆんべの女はベトベトで最高だった）とか（あいつはカスカスなんだ。こんチキシヨウ莫迦にしてやがる）といった会話を交して、女性の感度のよさを表現したと、彼から聞いたが、みさ子はその点で最高の女性ということになる。

芳野眉美の「濡れにぞ濡れし」というタイトルが、いみじくも思い出され、私は、しばし心を疼かせていた。

「御主人様、脱がせて……」



みさ子は喘ぐようにいう。

いわれるまでもなく、私の疼く心は、みさ子を裸にしたがっていた。

ムッチリした、堅肥りの肉体が、私の胸に倒れ込む。

「縛って風呂へ入れてやろう」

「ハイ、お願いします」

代理妻は喜々として応える。

濡れてもいい、短いビニール縄を一条とり

出し、両腕にかけて絞って、後手に縛る。入浴と観賞に、あまり余分の縄は、むしろバスでのプレイには、ふさわしくないと考えたままである。

湯槽の前で、豊かな胸を張ってポーズをとり、天の橋立、股のぞきを命じると、滑らぬように、ジリジリと脚を開いて、股ぐらの間から莞爾と微笑むのであった。

逞しい双臀が、私の眼を眩しく射る。



快楽の根源が、白々とした臀部とは対照的に、黒い象眼を嵌めこんでいる。

透明を湛えた清澄な湯に、みさ子を浸してゆく。

「いい気持——」

湯が快いのか、プレイを指しているのか、彼女は独り言のように呟いて、軀を沈めていった。

「さあ、こうしてやる。どうだ」ザブリと飛び込むと、みさ子の両手を逆にとり、ぐいぐい持ち上げる。

臀部をもっ立てて、彼女は溺れまいとして、もがく。

濡れそぼった双臀に、パシリ、パシリと平手打ちをくわせ乍ら、私は湯槽の中で、自由のきかぬ女体を存分に、もてあそんでいた。

閃光が一瞬、走ったのを最後に私は、バスでのプレイへと邁進する。

縄を握って湯槽から引き揚げると、タイルに長々と仰向けに寝そべらせる。



「奉仕をするんだ。みさ子の大好きだという奉仕を——」

「ハイ。させていただきます」

みさ子はアーンと口を開いて待った。顔に跨がる私——。

確かに巧みである。この口が過去、何人、いや何十人に対して奉仕してきたのであろうか。

みさ子は、それが与えられた天命の如く、さも嬉しげに、いとおしそうに続けるのであった。

VAT 69——。洋酒にちなむのに、もってこいの投げ出して開いた両肢。

全身の骨が融けそうな甘美——。

口篋りつつ、みさ子は肉感的に呻く。

したたかのショックが奔り抜ける。

こらえる私——。

絢爛たる前哨戦といえた。

女性は何度となく挑んではくるが、中年の私にとって、そう度々の勝負は出来ない。

愉しみをあとに残して、私は立ち上がる。

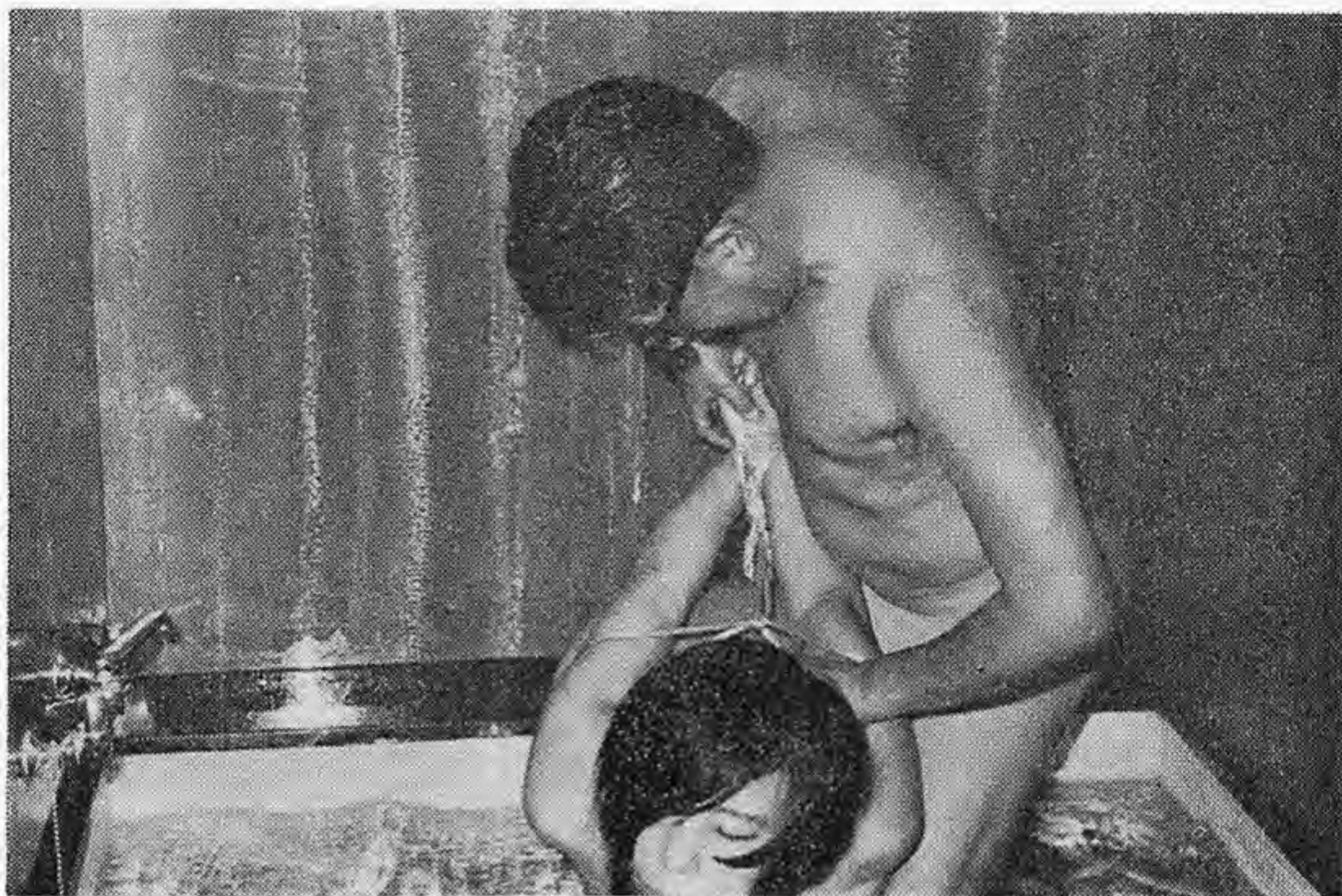
激しく息づく女体に、水栓をひねって、湯桶に水を汲むと、高々と掲げてザブリと、かけてやった。

x

x

x





縄が濡れそぼって、ギューッと固く締まって皮肉に喰い込んだ結び目を、やっこのことで解きほぐすと、みさ子は、その場にヘタヘタと崩折れてしまった。エクスタシーの余韻が、今も彼女の官能を疼かせているのであろうか。

両手首に、赤い条痕が深々とまるであざのように、くっきりと烙印されている。

待てしばしもなく、私は次の行動に移る。

「さあ、あの柱へ立つのだ。たつぷりと、本格的に縛ってやるからね」

「ハイ」と頷き、みさ子は素直に立ち上がって、柱を背にする。と自ら両手を柱の背後に回す。

二の腕を捻じあげて縄で締めつけ、両手を強く縛る。時の経過と共に、しめつけられた二の腕から下は、痺れて、感覚を失ってゆくだろう。

首から胸、そして足許へと、

数条の白縄が縦横に、柔肌を犇と、しめつけてゆく。

とりわけ、胸縄から股へと、垂直に掛け渡した縄は深々と、みさ子の肌に喰い込み、更に胴の左右から二筋の縄が、股間を通して背後に引き絞られていた。

一つの緊縛像を完成して私は、ほっとした思いで煙草を啜えた。

しばらくは、自由を完全に奪われた人妻の裸身を、たつぷりとこの眼で楽しみ、存分にいたぶってみたい、嗜虐の欲望にかられる。

胸を強く、くびったせいもあってか、腰から下が、一層、逞しく発達してみえ、猥らかな願望が、そのあたりに集結して塊り、数々の男性に鍛え抜かれた、女の性を、なまなましく感じさせるのであった。

「縛られた気分は、どう？」

「嬉しいですよ」

「どうして——」

「長い間の念願が叶ったのですから」

「どこか痛いかい」

「いいえ、気持ちいい。体がキニツと引き締まる思いです。いつか御主人様に、このようにされる夢を、幾度みたか知れません」

「ハハ、うまいことをいう。数多のS男性に



出会ったら、皆にそういつているのだろう」

「いえ、本当です。本当に御主人様に縛られて、苛められたかった。貴方様は、私の憧れでしたもの」

「嬉しいことをいつてくれる。ではソロソロ苛めてやるかな」

「ハイ、御主人様のお気のすむまで、存分にいじめて下さい」

女の熱っぽい眸が、灼きつくように私を凝視した。

胸縄で、ピンと張りつめた両の乳首に、私の手が伸びてゆく。

ぐいと摘んで、一ひねり、二ひねりして、指先に力をこめて、ギューッと抓ると、忽ちに激しく悶えて、快楽と疼きの交錯した悲鳴があがる。

「お前は『緊縛花電車と性本能』という告白で、とんでもないことを書いている。結婚して、二人の子供まであるのに、どうして今頃になって、昔の黒人とのセックスなど、告白する気になったのだ？」

露出症めいた告白の真偽に、唐突に、そんな質問を投げかける。

みさ子はマジマジと私を、みつめた。

「どうして、こんな楽しい時に、そんなこと

を聞くのです」

「SMプレイと、黒人のセックスとは、さして関係がないからだ」

「そうでしょうか。私にとって、SMのプレイは、究極はセックスに繋がらねば、愉しくないのです。黒人のことを書いたのも、あの逞しさに憧れてのことだと思います」

「日本人は一二・七センチ、黒人は一六・五センチだなんて、よく調べたものだ。どうして調べたのだ」

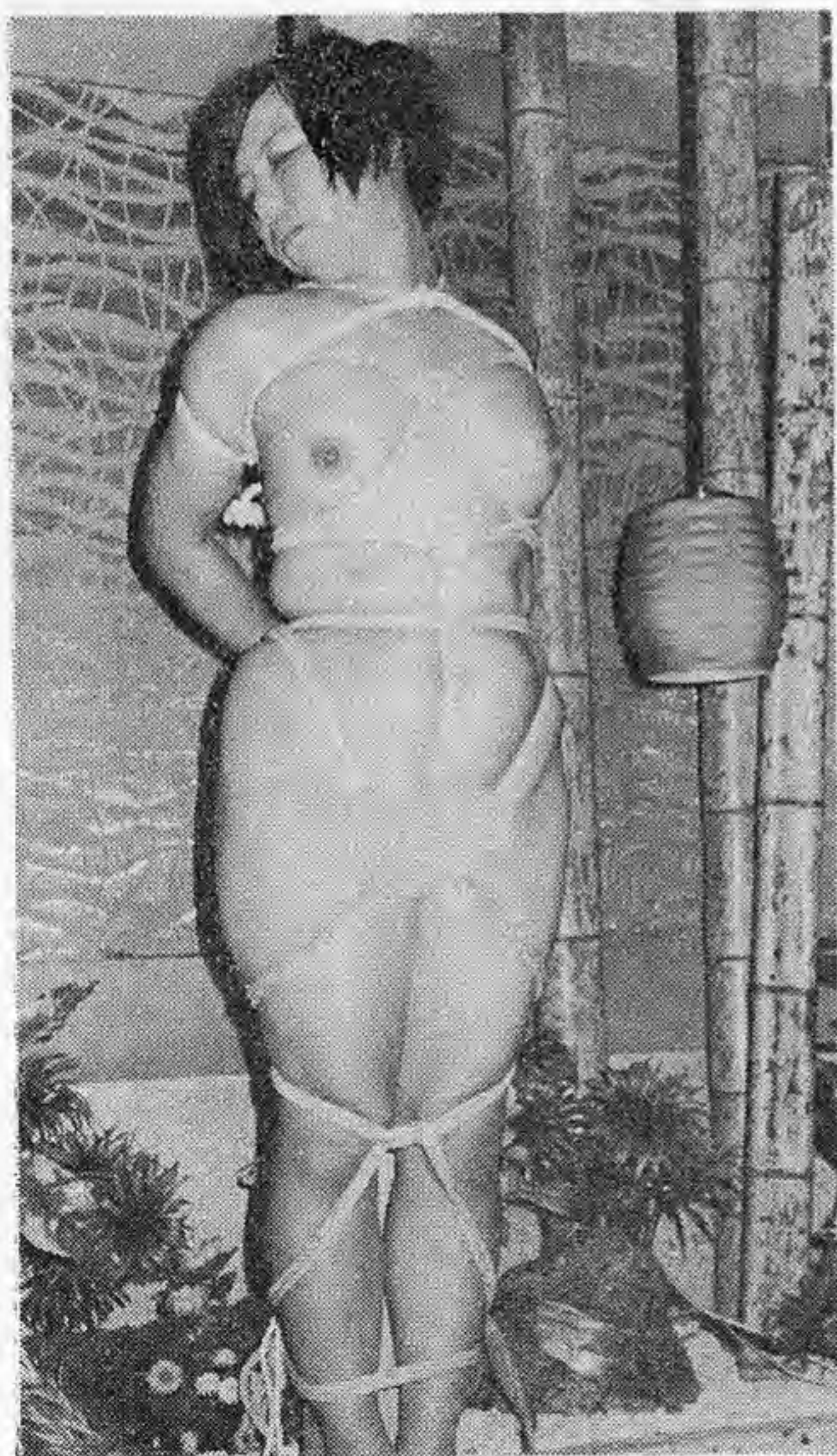
「平均値だと書いた筈です。事実、私とつき合った黒人は、一六・五センチ以上は優にありました。真黒い肌の下で、苦痛と快感に悶えた私。その強烈な印象が、今でも忘れられないのです」

「ダンナに悪いと思わないのか」

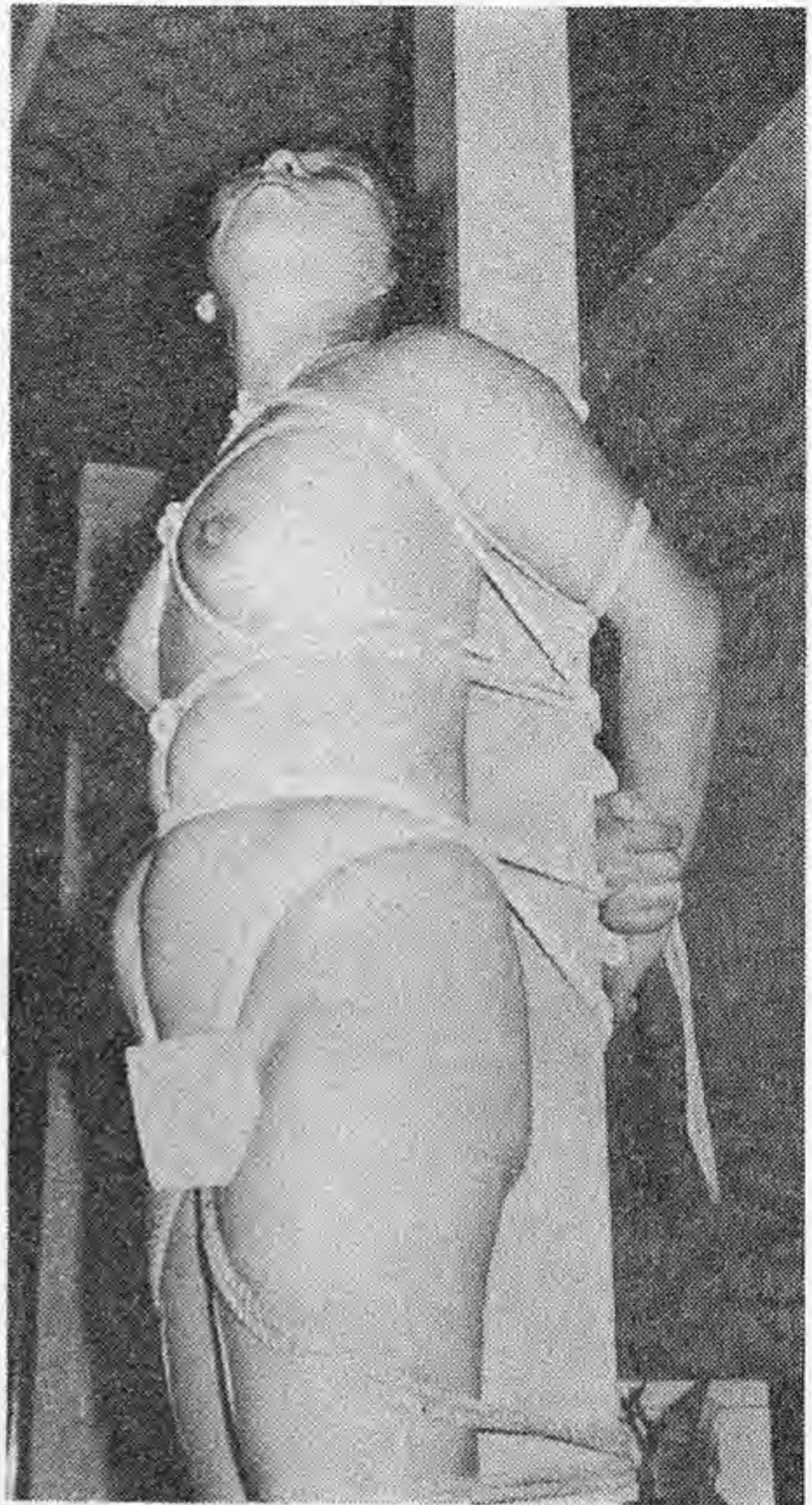
「知っています、夫は。激しいムチの下で白状させられましたもの」

「それで、よく許してくれたな」

「そのため、みさ子は、あらゆる償いをして







来ました、私の肉体の許す限り……」

「例えば、どんなことをしたのだ」

「奴隷妻になりました。夫の人間便器にもなりました。子供が出来ない頃、夫の出勤中、ずっと全裸で鎖につながれ、犬の檻に入れられて、牝犬にもなりました。南京袋に詰め込まれて、座敷から見える庭先の土中に埋められ、丸坊主にされて、肥壺にもなりました。」

私は夫の気が済むまで、苛められようと決心していたのです。夫は、汚い、汚いといつては、大便やら、泥やら、手当たり次第に、

あらゆるものを詰めこみました。カテーテルならいいのですが、細いビニールパイプを押し込んだり、蛭を垂らし込んで、尿の出口をセメダインで塞いだりもしました。みみずや蛙や、とかげまで押しこまれました。

おとろえ痩せ細って、死にそうな痛みの脛炎と、肛門糜爛症にかかり、やっと夫の怒りは解け、治療を受けさせてくれました。医師はかなり驚いて、届けると申されましたが、私は、ヨコハマの外人に暴行されたと偽り、うまくいいのがれたのです」

「今頃になって、そのことを書いたのは、ダシナに対する、何かの思惑か？」

「強烈な責めに明け暮れすると、殺傷以外しか残されておられません。主人のSM気は、やはりあるのですが、煩わしそうにしますし、段々構ってくれなくなるのです」

「それで夫を刺激する目的で、わざと、あんなことを書いたというのだね」

「ハイ、それも目的ですが、私の願望もあるのです。遅い人と……」

「黒ん坊が、そんなによかったのか」

「ハイ、苦痛のあとに快楽が訪れ、近頃は、そうした荒々しい快楽に憧れるようになってきました」

私は、彼女の夫が黙認し、妻をS男性に超越す気持が、幾分は分かるような気がした。

今、みさ子が告白した、夫の凄まじい嗜虐の爆発が本当ならば、彼はもう、この妻に対して、あらゆることを仕尽した飽和状態にあるに違いなかった。黒人とのセックスをたてに、いい換えれば、彼は嗜虐のすべてを彼女に試みたのであろう。

「今でも、黒人とセックスをしたいのか」

「ハイ、出来れば……」

いきなり私の平手が、女の頬に鳴った。



「あっ」と声を立てて、みさ子の異常な眼がキラリと光る。黒人に較べて、格段に劣る、コンプレックスめいたものが、思わず平手打ちの行為をさせたのかも知れない。

ヌケヌケと、黒人とのセックスを讃美するみさ子に、日本人的な怒りが、ふっと湧き上がったともいえるだろう。(九月号「緊縛花電車と性本能」参照)

「みさ子のことだ。黒人に対して、単なるセックスだけではなく、性の奴隷にもなったのだろう。白状しろ」

私は、更に強く乳首を抓り上げた。

「あっ、痛たた……」

「あの告白の手記に書いていたが、逞しい黒人に拐わかされ、幽閉され、性の奴隷として飼育され、珍芸の特訓を受ける自分を想像するなどと逃げていたが、本当は、あらゆる恥かしめをうけて、奴隷の特訓を受けたのだろう。どうだ——それにきまっている。黒人の

旺盛な奴が、みさ子のような感度のいい女をたった二回ぐらいのセックスで見逃がす筈がない。さあ、いえ。いわないと、この煙草を乳首に押しつけるぞ」

「本当に二回きりなんです。黒い混血の子が出来るのが怖かったから……」

「それは手記の通りだ。よし、いわないな」いきり立った私は、彼女の口腔深く縄を喰い込ませ、頬がひん曲がる程、強くしめつけ

更に、バネの強いクリップを、神経の敏感な柔らかい上下の唇に挟みつけた。

強烈な痛さに悶えて、みさ子は声にならぬ苦悶の呻きを、のどの奥から、しぼり出す。

指で鼻を摘まんで呼吸をとめると、みさ子の苦悶は倍加していった。

眼頭に、うっすら涙が滲み出す。

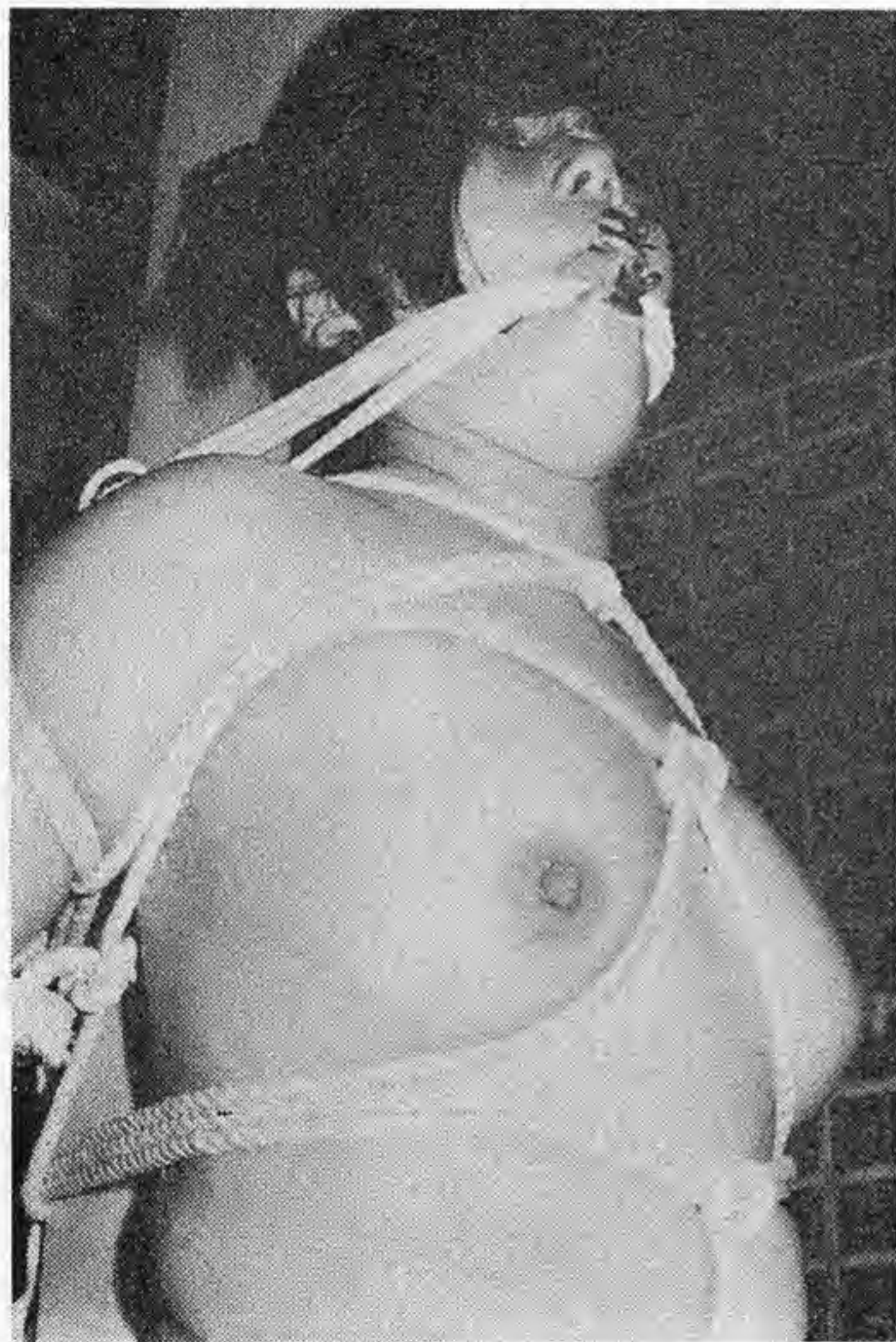
クリップだけは外してやり、安眠マスクといわれる眼隠しを嵌めて、その上から一繩かけると、しばしは、さらし者である。

例え、つくり話にせよ、虚構の告白にしろ私は、みさ子の口から、黒人との特訓プレイをきいてみたいと思った。

女の口から、それを喋ることに、男は激しく嗜虐欲をかき立てられるからであった。

深く喰い込んだ縄の猿轡は、かなり苦しいらしい。

あう、あうと、何か言葉にならぬ声で、みさ子は必死に訴えている。





いよいよ、告白に及ぶというのか。

さらば、解いてやろう。

余程、顎が痛かったのか、みさ子はしばし、唇を上下させ、口をパクパク動かしていた。眼隠しを外そうとすると「あッ、取らないで下さい。御主人様の顔を見ない方が、告白し易いですから……」

「よし、よし、じっくり聞いてやろう」

佐野みさ子は憑かれたように喋り出した。

「その黒人兵はマックといいました。セックスの交渉は、

数カ月の間に、十数回、いや、もっと数え切れぬくらいです。ジープにのって、彼のキャンプに出掛けた時、マックの友達の、黒人兵三人と、合計四人に、かわるがわる、六時間ぐらい、もてあそばれました。

生理の終わった直後が幸いでした。黒人達 はみな、素ッ裸になって、マストレスを外した、スプリングの裸ベッドに、私を大の字に縛りつけ、四人がよってたかって、私の体の



あらゆる部分を利用しました。

いつになく、マックが一番、凶暴でした。

あの優しい男が、どうしてこうも急変したのか、体中の痛さと、薄れゆく意識の中で考えても、分からなかったのです。

四人はベッドの脚を握って、まるでおみこしのようにかつぎあげ、部屋中をぐるぐる廻り、果てはベッドを逆さに立てたのです。

逆さハリツケのようにされた私の頭に、血

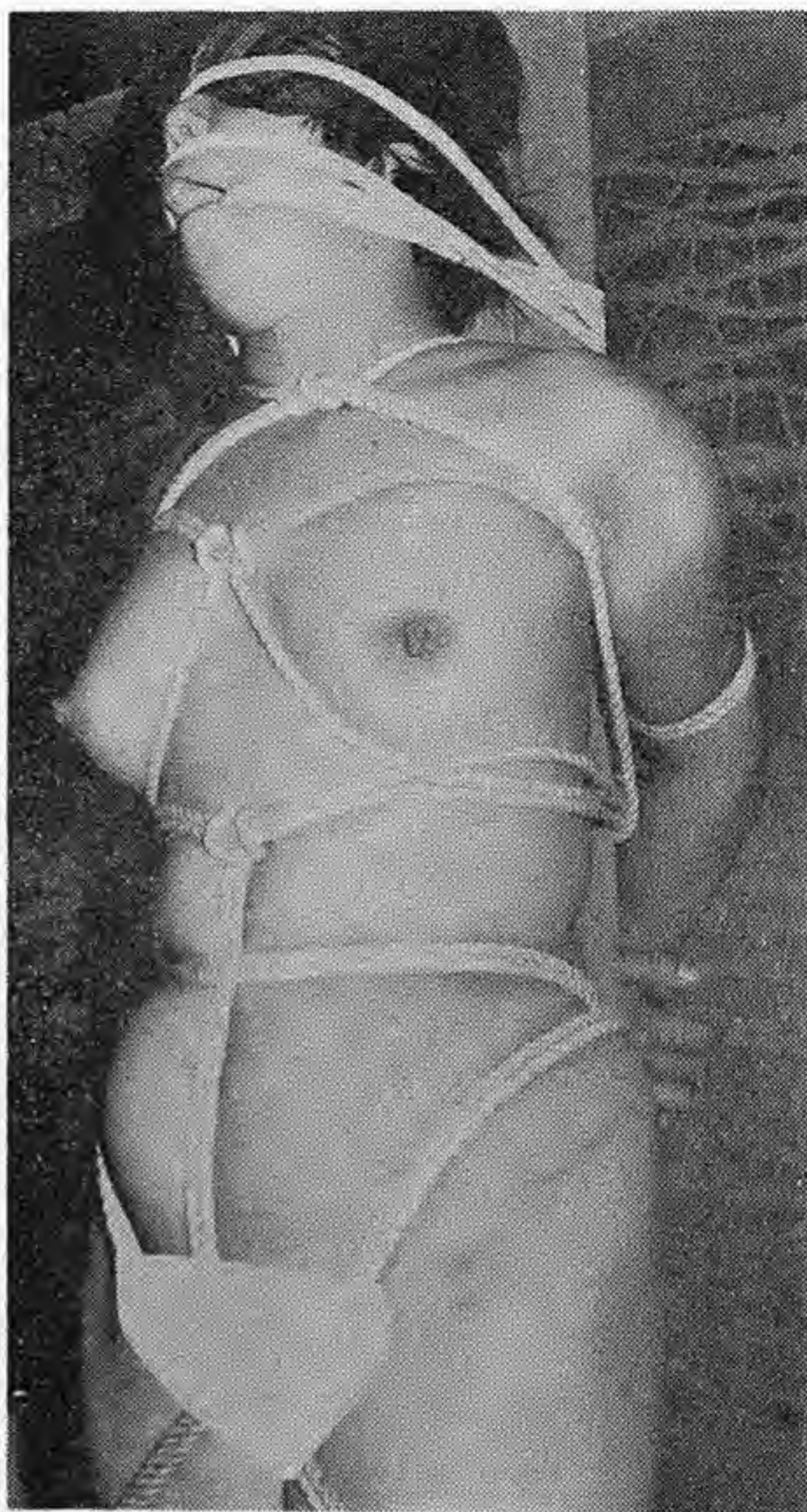
が逆流し、もう意識はモーローとして、おそろく息もたえだえだったことでしょう。

その私を、クリスマスツリーに見立て、誰かが、電飾のいろとりどりの豆球をとり出してくると、愉しそうに私の体中に飾り立て、灯りを消して、裸身に五色の豆球が美しく点滅するのを眺め乍ら、ウイスキーをガブガブのみ、狂ったようにギターを弾いて、足踏みして踊り廻り、大声で黒人霊歌など唄うのでした。

螺旋状の大小二本の、金色の蠟燭が、人間燭台の様に、大きく揺らげられた真中に、立てられました。段々薄れてゆく意識の中で私はこの昏、この黒人達によって殺されるのかと思いました。一きわ背の高い黒人が、太い蠟燭を近づけて、体中に垂らします。

私の全身は、金色の蠟涙にまみれ、逆流する頭の血が、変に冷たく冴えて、もう泣くことも叫ぶこともなく、奇妙に倒錯した、恍惚の境地を、さ迷っていたのです」





みさ子の饒舌は熱を帯びてくる。まるで何かに憑かれたように、それがあらかじめ仕組まれたストーリーでもあるかのようにスラセラと激みなく喋るのであった。マスクを外してやると、自分の言葉に酔ったようになって眼が燃えている。

私は黙って次を促すと、柔らかに、乳房にいたぶりを続けていた。

「マックが、やっとベッドを元の位置に戻してくれました。しかし、彼の手には愛用のゾリンゲンの剃刀が握られていたのです。」

ドス黒い恐怖が、私の五感を引き裂き、必死で私は絶叫しておりました。

太いソーセージが、猿ぐつわ代りに口中に押し込まれ、黒人の一人が、その上から唇を塞ぎました。

マックは石鹸も使わずに、ゾリゾリと丸坊主に剃りとり、彼等はめいめい、剃り落としたものをペーパーに包んで、ポケットに大切にそうに藏い込みました。

再び、荒々しい狂宴が、私に襲いかかりました。体中がバラバラになってしまいそうな

苦痛——。そのくせ、薄れゆく意識の片隅では、ひそかに願望していたことが、現実となつて、今、あらゆる蹂躪を受けている私自身に、めくるめくような陶醉をおぼえていたのです」

みさ子は言葉を切って、私の反応を見届けようとするかの様に、私の眼を直視した。

熱いたかぶりで、女の体は燃えていた。

乳房へのいたぶりが、彼女の昂進に拍車をかけていた。

余りにも出来過ぎた話に、フト虚構を感じ乍らも、私は尚も沈黙を続けていた。

凌辱の土壇場が、被虐願望の女性の口から語られるところに、尽きせぬ興味を覚えたからである。

「私は失神していたのでしよう。フツと正気づいたら友達の黒人達の姿はなく、マック独り、心配そうに私を覗き込んでおりました。

彼は軍票を、すべて日本円に換え、愛するみさ子にプレゼントするといつて、かなり部厚い札束を握らせてくれました。あとで勘定したら二十万円ありました。その翌日、マック等の部隊は、ベトナムへと転進していったのです。私がホステスをやめたのは、その夜のことでした」



憑かれた様に喋る、みさ子は、言葉までがいきいきとして、むしろ、過去のその幻影を追い求めているようであった。

彼女の告白の「花電車と性本能」の末尾に彼女は確かに、こう書いていた。

（私は男女平等の立場からも、フリーセックスを支持する女です。それも、ただのセックスでなく『縛られた全裸の私を、数人の男が犯す』といった、SM的フリーセックスのことです）とあったのを思い出す。

過去に知った、余りにも強烈な暴行の体験が、今では懐かしさとなって、彼女の窮極の願望になっているのだ。

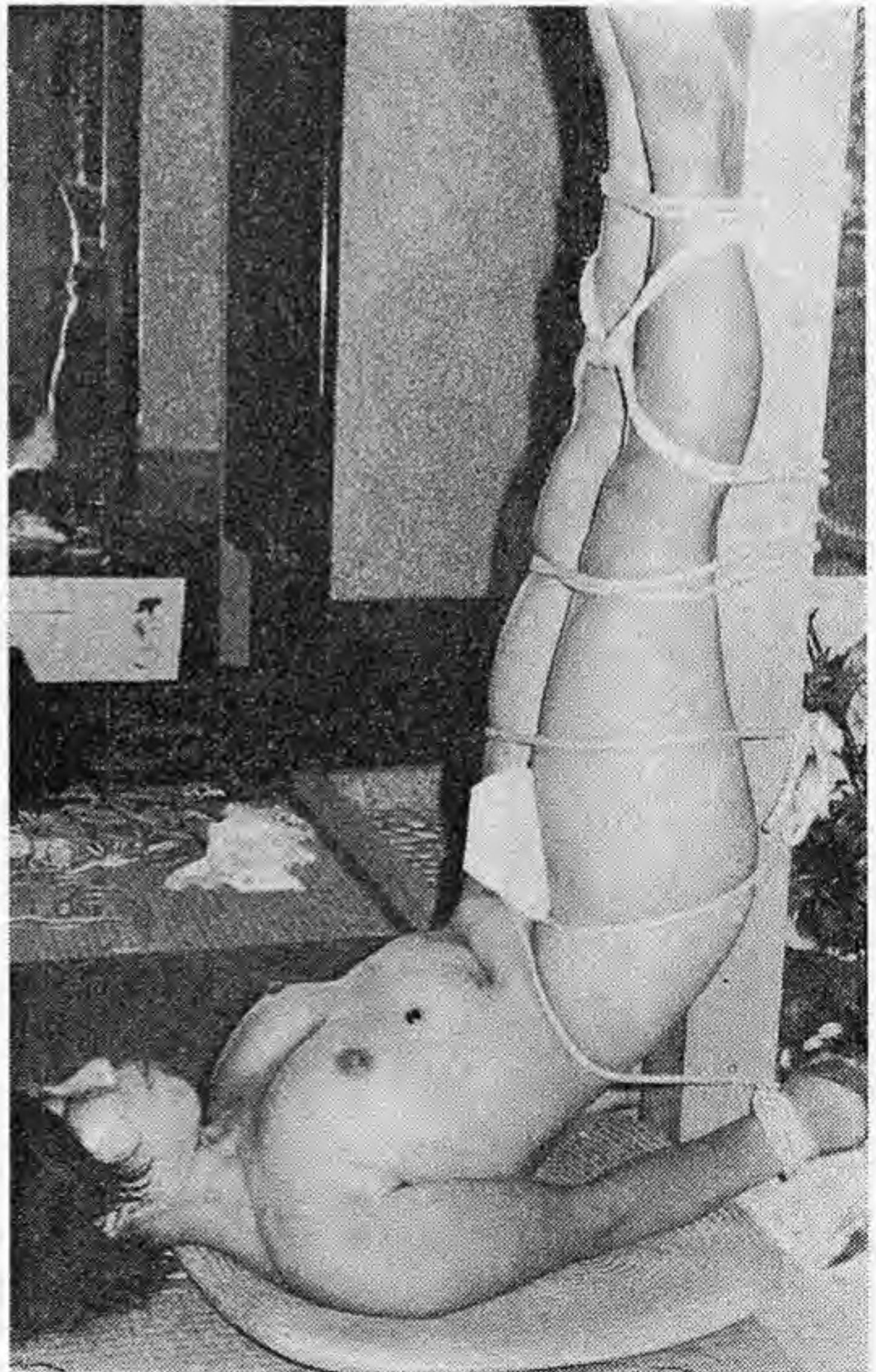
告白に黒人輪姦のことは書かれていない。しかし、フリーセックス云々は、この事態によって、彼女に生々しいショックとなって、植えつけられたことは確かであった。

「驚いた——本当とは思えないくらいだ」

「事実か、虚構かは、御主人様の御想像にお任せしますわ」

「マックは、或は戦死したかも知れない。君の神秘のお守りを抱いてネ。戦場へ旅立つ間際の虚無的な寂寥感が、彼をそうさせたのだろう」

「私のそうした、過去の暗い影を察知した夫



は、私を虐めつくしました。夫の為に貞淑な妻になりたい。そう必死に願って、私は努力しました。しかし、夫の嗜虐が、過去を捨てさろうとする私の魂を燃やし、マンネリズムになった近頃、もはや、どうにも止まらない女に変わってしまったのです」

異常なプレイの傷が彼女の羞恥の対話にふさわしく、佐野みさ子は靡れた過去の性歴を

スラスラと告白するのであった。

女心ほど妖異なものはない。

一つの心が、貞淑な妻を希求する反面、求めて己まない潜在する被虐の願望が、Sの男性を求めて彷徨するのであった。

私は、このハイド夫人と化した、佐野みさ子に、強烈な歓びを与えてやるべく、もうこれ以上はどのようなもない、柱縛りの緊縛を



解き放していった。

× × ×

両脚を柱に添わせて直立させてゆき、腰をぐいぐい引いてゆく。頃合を見計らって、柱ごと、両脚を縛りつける。両手は、柱の背後で、しっかり縛ってある。

佐野みさ子は、既に、陶酔と、肉体の疼きから発する、歓びの呻き声を洩らしていた。

しめつけられた両腿のあたりから、羽虫に

似た電動音が響いている。

もうこれ以上説明するまでもないだろう。

うっとりとした表情には、これからの悦楽の嗜虐の行為を期待する色が泛かんでいる。

小型のクリップを数個とり出すと、まず両の乳首、腹、臍窩へと、肉を摘まんでクリップを挟んでゆく。

敏感な乳首のクリップ挟みは、大概の女性なら、そのバネの強さに音を挙げるのである



が、みさ子の抜群の被虐性は、この行為を、快楽に繋がらせていた。

ありありと、激しい恍惚の表情が浮かび上がった。果肉をふるわす快い振動が、みさ子の快楽を昇進させて、少々の痛みは、すべて快楽につながり、次第に増す強烈な苦痛も、これを愉悦にすりかえていた。

いかに被虐願望のみさ子と雖ども、日常の心気を昇進させぬ時点に於いてなら、この苦痛に、喚き、悲鳴をあげたことであろう。

既に全身、被虐欲の権化と化しさった今、S的な、あらゆる痛苦が、すべて願望と融和して、甘美な喜悦に転化されてゆくのである。

髪を掴み、手で足で、ギューギューと、女身を、いたぶる。

「さあ、しゃぶれ。しゃぶるのだ」

ぐりぐりと、拇指を口中へ押し込んでゆき口腔を掻き廻すと、暗示にかけられた様に彼女は舌端で、足指を丁寧に舐めつくしていった。

「もっと、美味しいおしゃぶりが欲しいか」「ハイ、いただきます」

美味しいおしゃぶりの意味を汲み取って、女奴隷は、あーんと口を開けた俤、待つ。



私はクルクルと全裸になった。  
女奴隷みさ子の舌端が、私の大脳神経を焦  
燥させる。

立ち上がると、赤い螺旋のローソクに点火  
する。これ以上、継続することに自信が持て  
なかったからである。

ねっとりとした感じの口に、ローソクを噛

ませて押し立て、私の目標は、専ら、むき出  
しの双房に移った。

啞えたローソクのため、声も出し得ず、み  
さ子は切なげに喘ぎ、胸は浪打つ。

溜まった熱蠟が、ツーツと糸を曳いて、彼女  
の唇を灼いてゆく。

キニーツと歯を立てて、乳汁の既に止まっ

た乳首を噛んでゆく。

徐々に齒列に力を籠め、キシキシと、きし  
ませる。

痛さの為か、悦びのためか。呻く女の唇の  
蠟燭が、激しくゆらぐ――。

これぞ正しく、SMの甘美なプレイ。

佐野みさ子は、自己を喪失して、おこりの  
ように五体を、ふるわせている。

熱を持った大粒のぐみの実に、赤い蠟涙が  
ポタポタと鮮かな斑点を色づけていった。

蠟燭と乳首の距離が、いつしか近づいてゆ  
く――。

灼熱の痛苦と、被虐の陶醉の交錯した、め  
くるめく悦びに、みさ子は

「ヒエーッ、痛ッ、熱ッ……ああ」

と、絶叫して、のけぞらせた上体をガクリ  
と落とした。

無心に響く、器械の電動音のみが、微かに  
私の耳朵を擦った。

火を吹き消すと、私は静かに、赤い扁平の  
残骸を、手に受け乍ら剥がしていった。

熱蠟の落下地点は、うっすらと桃色づいて  
湿疹のような斑状をつくっていた。

死んだように、身動きもせず、夢遊の放心  
状態で、女の呼吸だけが荒かった。





委細構わず、私は次の作業に移る。

密閉された桃園は、私の攻撃を拒んで、入り込む隙間もない。

私自身、そうした結果を承知で緊縛をしたくせに、これも又、愉しみの薄い、縛り方の一つであった。

開くに限る。叩け、さらば開かれん――。

改めて腰のあたりを、しっかりと柱に縛り直し、鴨居に縄をかけて、両端に足首を結んでいった。

正気なら、両足に、意志を通わせたら、直立出来て、両足の縄は、ゆるむにきまっていた。

既に意識を回復させ乍ら、彼女自身そうなりたがっているのか、自らY字に大きく両足を開いて、私の脳裡に描いた構図通りのポーズをとっていた。

ねっとりした感じの、小型のパイプを止める。耳触りな、羽虫に似た音が、やっと私の鼓膜から消える。

後手を外して両手を前に伸ばして縛ると、反対側の柱に、ピンと引っ張る。

近頃のホテルの柱は、まるで緊縛用に作られたみたい、壁間に埋め込まず、柱の背後に隙間をつくって、植込みの尺地をつくって

いるのが多い。まさにSMプレイ向きに出来ているようである。

のどの渴きを癒やすべく、私は冷蔵庫からコーラを、とり出してきた。もう一つの目的をこめて――。

みさ子は、あの告白の中で、奇クに登場したM女性の中で、コーラのびんを使ったのは懼らく自分だけではないかと書いていたが、これは一寸、ただけでない。私にしても、コーラ瓶以上のものを使った経験は、ザラにあった。

試しに計っても見給え、コーラの瓶の直径を――。そして、それが仮に、彼女のいう通り、三分の一としようと、口先から、やや太目になるあたりは、直径五センチ程度ぐらいなものである。

私が、強烈なM女性や、プレイ対象の女性に、時には好んで使う、アヒルの嘴に似たクスコは、二つのネジを巧みに操作して、ぐんぐん押し抜けてゆくと、到底、コーラの瓶どころの騒ぎではない。

いわば、みさ子のいう、コーラのびん、三分の一などは、若い娘相手の、序の口の方であった。

逞しさを誇る、黒人四人に、存分に蹂躪さ

れた筈の彼女にとっては、この花電車と性本能の記事は、大分、甘い。

第一、二児の出産を経験した彼女にとって握り拳大のものが出ているとあっては、コーラ瓶、何するものぞの筈であろう。

緊縛花電車の、見て楽しむシヨウは、若干サド的傾向もあるが、SMプレイのゆきつくところには、もっと激しいものがあつてしかるべきである。

虚構か真実かはさておき、妻と黒人とのことを知って、あらゆる暴虐の手をふるう夫のやり方に、真のサド性を感じられ、やはり彼女の書いた告白文は、どこかで逃がっているであろうか。

今から二十年前、緊縛モデル第一号といわれた川端多奈子にしろ、最初の頃は、蠟燭あたりが精一杯のところであった。箕田氏は、始めて知った被虐女性に夢中になり、日夜、飼育を続けた結果、一年を経ずして、にぎり拳、ビール瓶の底が、易々と使える程度にまで拡大これ努めたのであった。

結婚後、初の出産が、まるでウソのような安産だったと、奇妙なお礼の便りが届いて、箕田氏は苦笑したと謂う。

まして、みさ子は経験済みというし、既に



二児の母である。

コカコーラの瓶ぐらいで、驚く程のこともあるまい。といっても、昔の産婆時代と違って現在の産医学は、出産の節、会陰を切って拡大し、出産直後に縫合するから、昔の人のように、拡大し放しということではないからコーラ瓶でも結構、驚きを、感じたのである。

のどの渴きを、うるおし終わったコーラ瓶を握って、みさ子に近づく。

別段どうってこともないが、みさ子自身が書いているから、試してみたかったまでである。

ベトナムでの拷問という程の大袈裟なものではない。みさ子の告白では三分の一ほどだと書いてあったが、事實は半分位だと確認することが出来た。

(丸くて、冷たいガラスの感触は、決して悪くありません。みさ子が保証いたしますので私と同じM女性の方、どうぞお試しになって下さい。みさ子と同様、すばらしい快感が、肉体の中心を突き抜けることでしょう)

と、みさ子は「緊縛花電車」の中で書いている。

私の手先の操りによって、この時も彼女は

懼らく、それと同じ、或はそれ以上の快感を覚えたことであろう。

「私は、この程度じゃ満足しないよ。もっと羞かしいポーズをとらせてやろう」

「御主人様のお気のすむよう、みさ子の体を存分にして下さい」

昂ぶった眼が、より以上を望んで、燃えていた。

吊り下げた両足の縄を解くと、殆ど水平近くまで、引き裂けるばかりに開いて、固定する。みさ子の体は柔軟であった。抵抗がないからであろう。むしろ、そうしようと彼女のほうで努力し、協力するから、私の気の済むまで、思う存分に開ききることが出来たのである。

初対面の時から、何をしてもいいというM





女性に遭遇するのは珍しい。みさ子に既成観念が植えつけられていたのが、私に幸いしていた。

あからさまに被虐願望の、どん慾さを露呈して、この奴隷妻は、私の次の愛撫の責めを待っていた。

ピースに火をつけると、深々と一息、吸い込んで、味付けさせることにした。

紫煙が、ゆっくりと立ち昇っているのは珍

しくない点景だが、この場合のは、やはり珍しい。

ひととき鑑賞した後、その、かぐわしい香りを湛えたフィルターを観察してから、改めて口に咥えさせる。

否応なく吸い込んで、煙が眼にしみるのかみさ子は眉をよせた。それでも煙草を落とすまいと、しっかり唇で挟んだ筈、口腔で激しく咳きこんだ。

もうよかろうと、唾液に濡れた煙草をとって、私が咥える。

みさ子の味がしみ込んでいた。

赤い蠟燭が傾斜して立ったのに火を点じ、倒れないのを確かめてみさ子に語りかける。じりじりと蠟涙が溜まって、こぼれ落ちるのを愉しむかのように――。

「何人ものS男性とプレイしたというが、奇ク紹介のロマン派生以外、どうして知り合ったのだ」

「あちこちのSM雑誌に呼びかけました」

「佐野みさ子の名は、奇ク以外では、みかけないぞ」

「大谷澄江という名や、葉山美佐などという仮名を使いました」

「何人ぐらいたプレイしたのだ」

「六人ぐらいです」

「『緊縛花電車』の男性は、どうだった？」

「あの人は、私に珍芸の特訓をして楽しみます」

「主人は知っているのか」

「すべて告白して主人の責めを待つのです。

黙って行って、夜寝る時に告白すると、すぐエクスカレートします」

「珍芸といっても、玉子やバナナ、コーラ、





生け花など、タカがしれている。もっと面白いことをやったこと、白状するのだ」

「書くのでしょう」

「ああ、書くつもりだ」

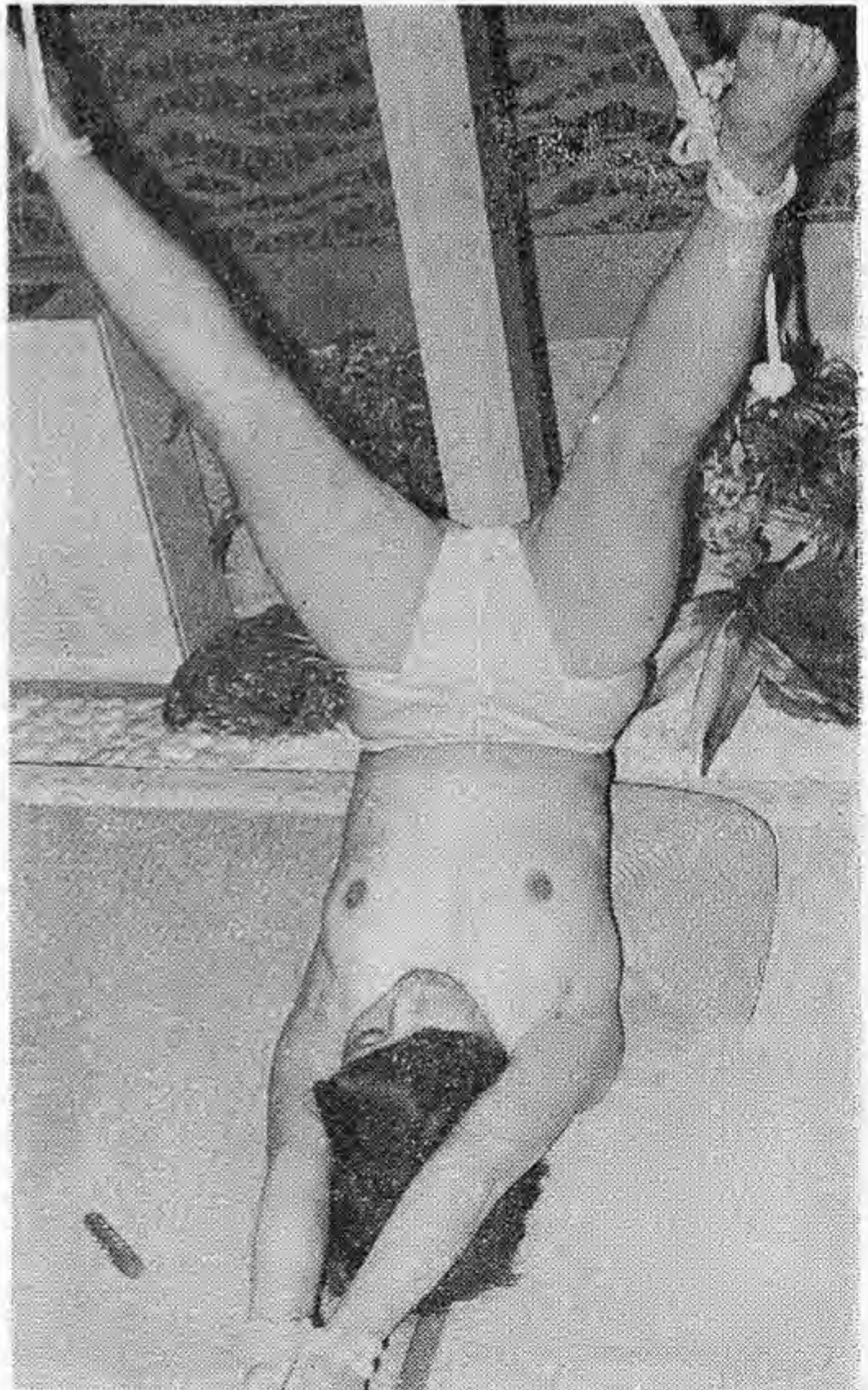
「主人にも、黙っていることがあります。でも構いません。白状しますわ。例の花電車の男性Kは、茄子と、もう一方に胡瓜を使いまして、落ちないよう、縄で縛り、街へ出て、レストランで食事したり散歩しました。すっかり柔らかくなった野菜を漬物にして、主人に喰べさせるよう、いわれました。も一つ、秘密があります。Kはセックスのあと、絶対始末しないで帰宅し、主人とセックスするよう命じました。危険な時期でしたから、あの時、妊娠したのは、果たしてどちらか、私にも分からないのです」

「それに対して、何とも思わないのか——」

「育てるのは私です。フリーセックス賛成ですから、さして罪悪感はありません。あればこうして御主人様の代理妻にはなれないでしょう。あっ、あつい、蠟が流れて……」

眉間をよせて、みさ子は呻いた。

自然に傾斜したのか、かなり傾いた蠟燭から、ポトポトと、熱い滴が流れ落ち、そのあたりを赤く、いろどっている。



蠟燭と電動パイプが交替する。パイプの尖端に、嵌め込みの黒ん坊を、かぶせてある。大きく波打つ豊胸。頂点の小粒のルビーを剥き出すと、舌を触れてゆく。

鋭敏なポイントは、咬虐と吸引によって、硬く表情を変えてゆく。

みるみる、みさ子の表情は激してくる。

獣じみた呻きが噴き出し、制御する、すべての知能を抛擲して、このハイド夫人は、堅

く逞しい双臀に、じっとりと脂汗を浮かべ、狂ったように、圧迫された拘束の上体を輾転とさせて、のたうった。

× × ×

延々と続くSMのプレイで私は未だ果たしていない。きわどくなつては、自己を制御し貪婪にSMのプレイを続けようと画策していたからである。

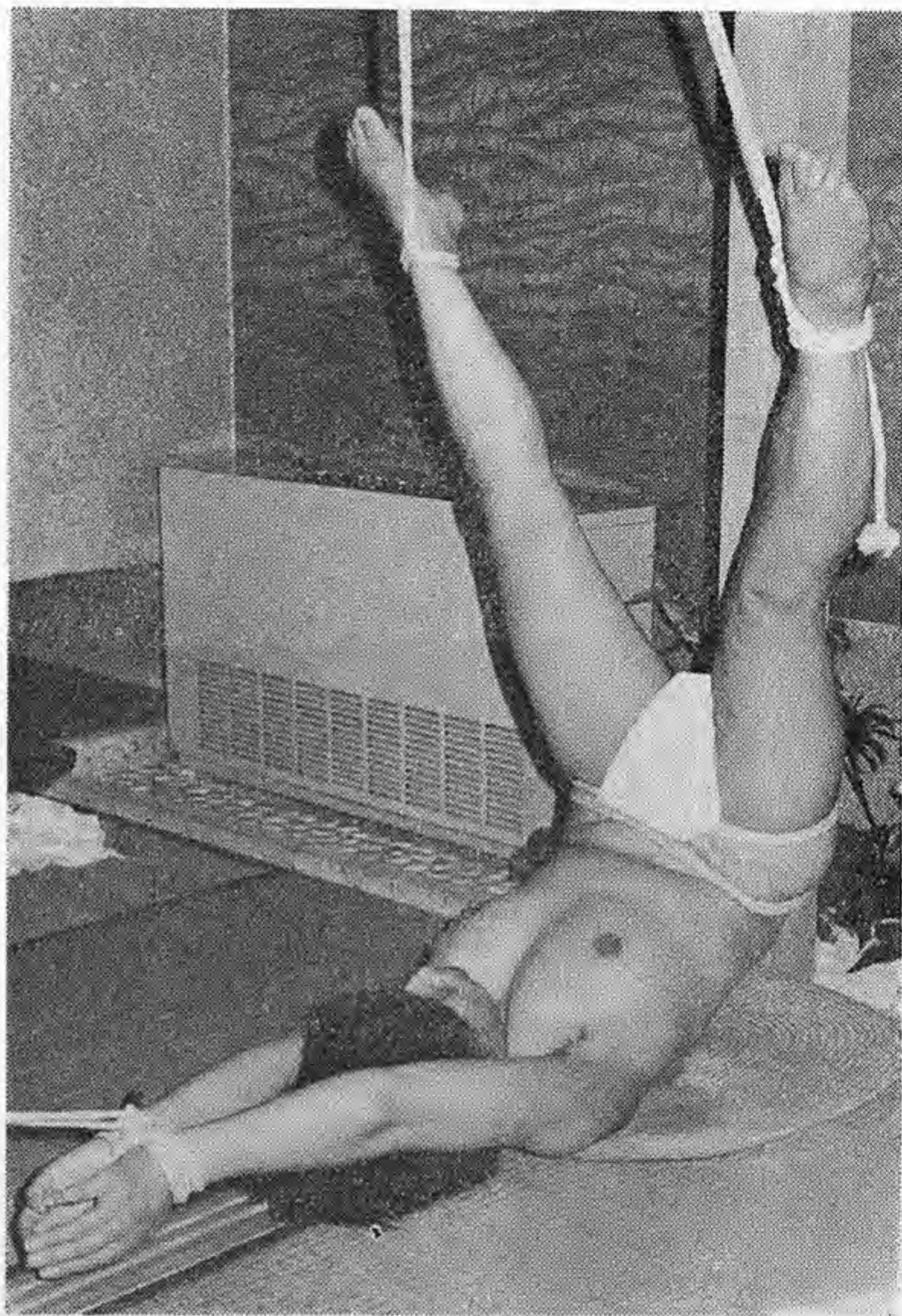
中年の私にとって、果てる事は、プレイの



終焉を意味する。

果てない限り、延々と続くプレイに、体力的に消耗し、疲労しても、嗜虐に磨ぎすまされた神経は、M女の生態の追求を求めて熄まなかったのである。

宿望に近い佐野みさ子とのプレイを、出来る限り長びかせる為に、私は私なりに、か



なり苦しい忍耐を、自己に強制しているのであった。

対象の代理妻は、どうであろうか――。

私の知る限り、三度、いな四度は、恍惚の境地を彷徨し、五彩の雲中浮遊を味わっている筈であった。

セックスのみが目的なら、私はもう、とっ

くの昔に、相果てていたことであろう。しかし、忍耐にも、もうそろそろ限界がありそうである。

囁言のようにみさ子は、ドキリとするような卑語を吐き続けては、快楽の奈落へ、おちこんでゆくのであった。

そのみさ子は、余りにも濡れそぼった裸身を洗うべく、湯あみしている。

時計をみると既に午後六時を少しばかり廻っている。

SMプレイに、どっぷりと身を浸している時、何と時間のたつのが早いこと。

午後七時、私は岸悠子の夫と、銀座で会う約束があった。この夜、中止して直行すれば会えぬこともないが、もう一頑張りしたい思いの方が強い。

彼に電話すると、恰度、これから出掛けようとするところであった。

「へえ、あの佐野みさ子さんと……羨ましいなあ。悠子をもう少し飼育して、Wプレイしたいですよ。是非――」

羨望の籠った彼の声である。私はやむなく一時間、延長してもらった。

彼との用件は、悠子夫人を口説いてもらって一対一でSMプレイをしたいという、虫の



いい頼みをするつもりで、彼はOKしてくれ  
ても、当の悠子夫人が応諾するかどうかは分  
からないが、兎も角、一タ、奢るつもりだっ  
たのである。

それから団鬼六氏を訪問するとなると、こ  
れは深更になりそうだ。今夜は泊めて貰うだ  
けになりそうであった。

今の私は、目の佐野みさ子に、全精神を  
集中していた。彼女が、いろいろなSMプレ  
イを楽しみにして自ら羞恥にくるまった誓い  
の言葉まで準備してきたのに、比較的オーソ  
ドックスな緊縛と、それに伴う、女体の琴線  
を音色よく奏でることぐらいしか、やってい  
ない。謂わば、私の構想の三分の一にもみた  
ぬ、遅々たるプレイ振りであった。

始めて出会って、多くを望むのは無理であ  
る。吊り責め、浣腸責め、アヌス責めなどは  
次回に廻して、剃毛と、究極のセックスぐら  
いに纏めるしか時間がなかった。

今、頬杖をついている、この机上に縛と縛  
りつけ、じっくり観賞し、いたぶり、もてあ  
そび、剃毛して、その上で――。

そう思案すると、机上の茶器やら、灰皿な  
どを片付け始め、手ぐすね引いて待ち構える  
のであった。

肌を、ほんのりと桃色に染  
めて、みさ子が湯から上がっ  
てくる。

「さあ、ここへ仰向けに寝る  
のだ。早くしないと、余り時  
間がないんだよ。会う約束を  
している人があって……」

「あら、お帰りになるんです  
の？」

「そうだよ」

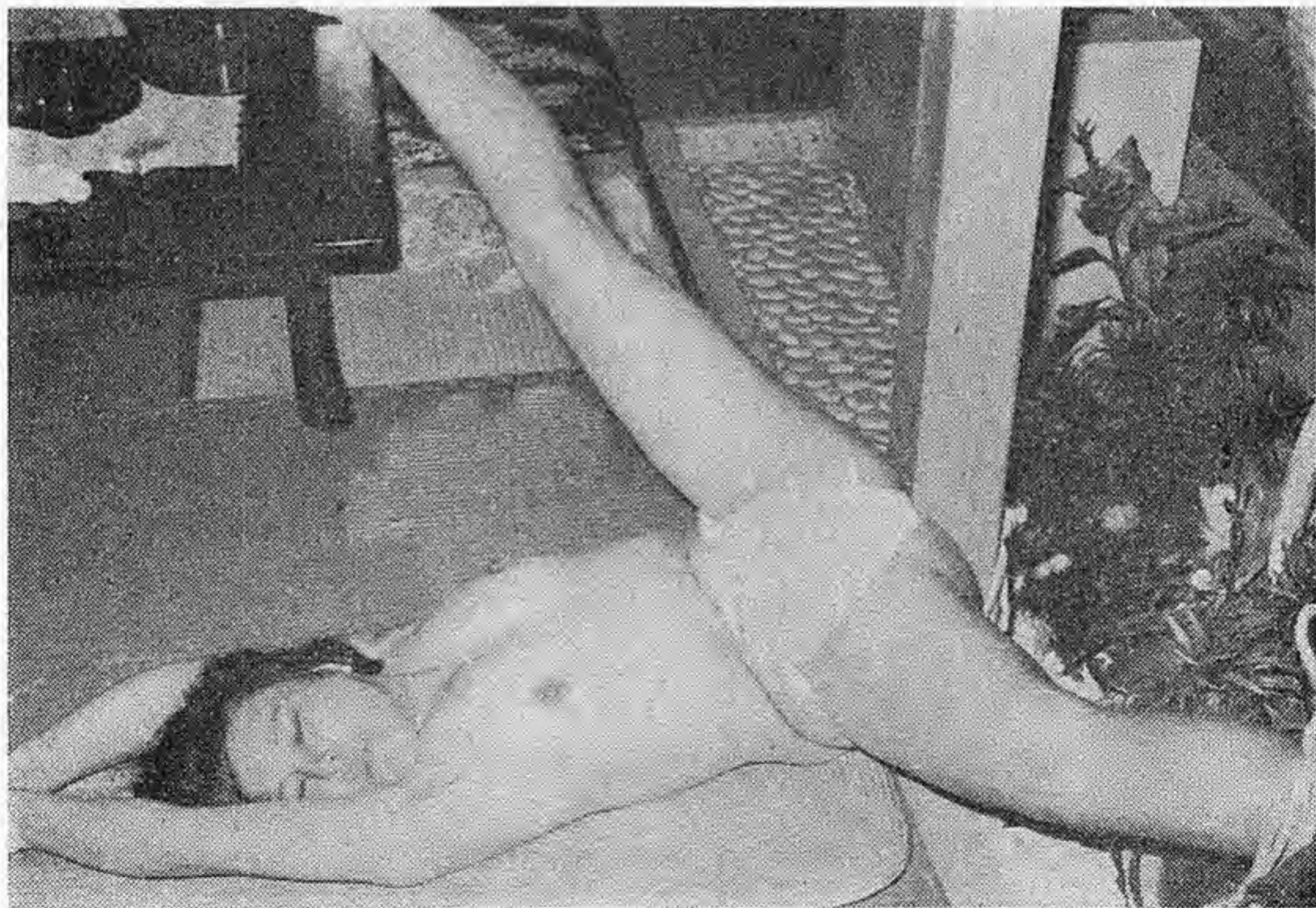
「私は又、泊まっていただけ  
るとばかり思っていましたの  
に……。主人も出張ですし、  
母にも明日まで子供を預って  
もらうよう頼んできましたの  
よ」

「プレイの時間の経つのが早  
すぎてネ。七時に人に会う約  
束を、八時に伸ばしてもらっ  
たんだよ、今」

「私だけかと思っていました  
のに……」

遺瀨なく、如何にも恨めし  
げな、みさ子の風情である。

「この処、毎月上京するから







ね。又、来月か、さ来月、会いましょう。したい責めが沢山、残っているもの」

「ガッカリしましたわ。今夜は、夜中じゅう楽しく、苛めて戴こうと思っていましたのに……意地悪な方ね」

「スケジュールが一杯なんです。今度は泊まる気で来ますよ。さあ、早くこの上に寝て下さい」

渋滞した表情で、彼女は私のいう俚に、黒い机上に長々と横たわる。

手早い縄を、机とみさ子を密着させて、縦横に、かけ渡してゆく。

遅い腰から下を、次のプレイを、し易い様に膝を折って、足首と腿を縛り合わすと、引きしぼってゆく。

股縄、腿縄が、引き絞りによって、深々と

肌に喰い込んでゆく。

委細構わず、机上の見事な曝し者が完成する。

縄をそれぞれ、強く引き絞ってあるので、ビクとも身動き出来ない。

机に縛った目的地点は味わいを湛えて、惜しみなく眼前、咫尺の間にある。

閉じようのないポーズで、観念して、みさ子は、私の次の手段を待っていた。

豊胸の小粒のルビー攻撃を手始めに、快楽の幕は再び、きって落とされる。

「ねえ、お願い。泊まって……」

「ダメだよ」

「そんなこと、いわないで……」

「ダメだといったら——」

「ああ、私、もっと、もっとプレイしていたいわ。辻村様と、めくるめくようなセックスに溺れたかったのに」

いつしか誓約を忘れ、自己の本能をさらけ出して、私を呼ぶのに、御主人様から辻村に戻っていた。

（いっそ、この俚、泊まってゆこうか——）

切々たる訴えに負けそうになり、ともすれば、私の上京のスケジュールは、みさ子の甘い声に壊れそうになるのであった。



その気持を払拭するように、私は始めて縄束をとりあげて、ムチに構えた。

脇腹から、腹へ、ピシッ、ピシッと二、三発、くらわせる。

嗜虐の感情は、荒々しく荒れ狂う。

ムチ打ちが、悲鳴を喚起する。

みさ子のショーツパンティを口中に押し込み、その上から、晒布の猿轡をかませ、私は尚も、強弱を織りまぜて、縄束を振り上げては、みさ子の肌に、桃色の線条を、つくり上げていった。

フト、脳裡に泛かんだのは、先刻、彼女が懐かしげに語った、黒人兵達にベッドに縛りつけられ、逆さに立てられたという一件であった。

机は見た処、頑丈そうで、立てても、脚の折れる気遣いはなさそうである。

が、縛り損いをして、両手が机から、はみ出して、脚に縛りつけてある。これで逆さに立てれば、腕が、机の下敷きになって、折れてしまふに違いない。

縛る時に、そうしたアイデアが浮かんでいれば、その気で縛ったのにと悔まれたが、手首から縛り始めてある縄であるから、いまさら縛り直すとなると、又一から、やり直さね

ばならない。

やむなく、逆さに立てることを、あきらめた代りに、頭を上にして立ててみることを試みた。恰度、戸板にハリツケにされた恰好である。

この責めに、果たして、みさ子が耐えうるかどうかは、やってみなければ分からない。かなり重い体重の、ずっしりとのりかかった机の手首の方に両手をかけて、じりじりと立ててゆく。

ズシリと、みさ子の体が、起立と共に下部にずり下がる。机脚は大丈夫なようである。壁に凭せかけなくとも、そっと手を離すと足許の机脚が土台になって、起立させた机をささえていた。

股繩に、痛々しいまでに力がかかっていてすぐく喰い込んでいる。

両膝は、完全にタタミから浮いていて、みさ子は、机にももの見事にハリツケになっていた。

かなり苦痛が伴うであろうに、彼女は、じっと、こらえている。

机の上端を押えて、倒れぬように気を配りつつ、縄ムチを、盛り上がった柔肌に振り降ろす。

「ウーン、ムム……」

流石に痛みに耐えかねて、猿轡の奥から、くぐもった呻きが洩れる。

黒ん坊をかぶったパイプが、再び唸り始める。

拘束の五体が悶え、机がゆらぐ。

力をこめて、ゆっくりと机を横倒しにしてゆく。

張り渡した縄の下で、グラリと体が下降し右膝がタタミにつく。

反して締められた左腿の縄は、みるも痛々しい許りに、太腿に喰い込み、堅肥りの腿の縄と縄との合間に半円が、ポクリと盛り上がっている。

それでも、みさ子は、懸命に耐えていた。

脇腹がよじれ、足指がねじれ、この無惨な横倒しのポーズに、容赦なく、しばしば縄ムチが飛び交い、黒ん坊が活躍していた。

苦悶の中の快楽――。

疼痛の中の恍惚――。

まぎれもなく、しっかりと閉じられた、みさ子の両の脛に、被虐のきわみの陶醉が泛かんでいた。

横倒しの机を再び起立させる――。

みさ子の裸身は、又何センチか移動する。



その時、私の眼前に、さっと、一条の銀線が噴出した。

しとどにタタミを濡らして、颯ッ、颯ッと二度、三度、水鉄砲さながらに、美しく放射される。

苦悶をこらえるの余り、力をこめた下腹が自制を失って、無意識のうちに失禁していたのであった。

やっと、元の位置に寝かせ終わり、みさ子の入浴に使った濡れたタオルで、ひたいの汗を拭ってやるとついでは、彼女の洩らしたハルンをぬぐってから、私自身、何かホッとした気持ちになった。

猿轡を外すと、大きな溜息を吐き出し、

「きつかったわあー」

と代理妻は甘えて、頬をほころばせた。

忍耐に感激して、長いくちづけをサービスしてやる。貪るように吸って、いつかな彼女は、唇を離そうとしない。



女の口腔は、熱っぽく粘っていた。

「剃ってやろうか——」

「嬉しいわ。綺麗にしてネ」

よしよしとうなずき、洗面道具のケースから、安全カミソリをとり出し、湯桶に湯を汲んでくると、シェービングクリームを、なす

りつける。

替えたての刃は、怖いほど、よく切れる。

すべやかになる迄には、五分とかからなかった。

「主人がみたら驚くぞ」

「いいの、辻村様に剃ってもらったといえますわ」

「いいのかい？」

「きつとエスカレートしてくれるでしょう」

くちづけして、歯を立てるうち、私に気魄が、こもってきた。

みさ子は待っている——男と女に還元しようとするとき——。

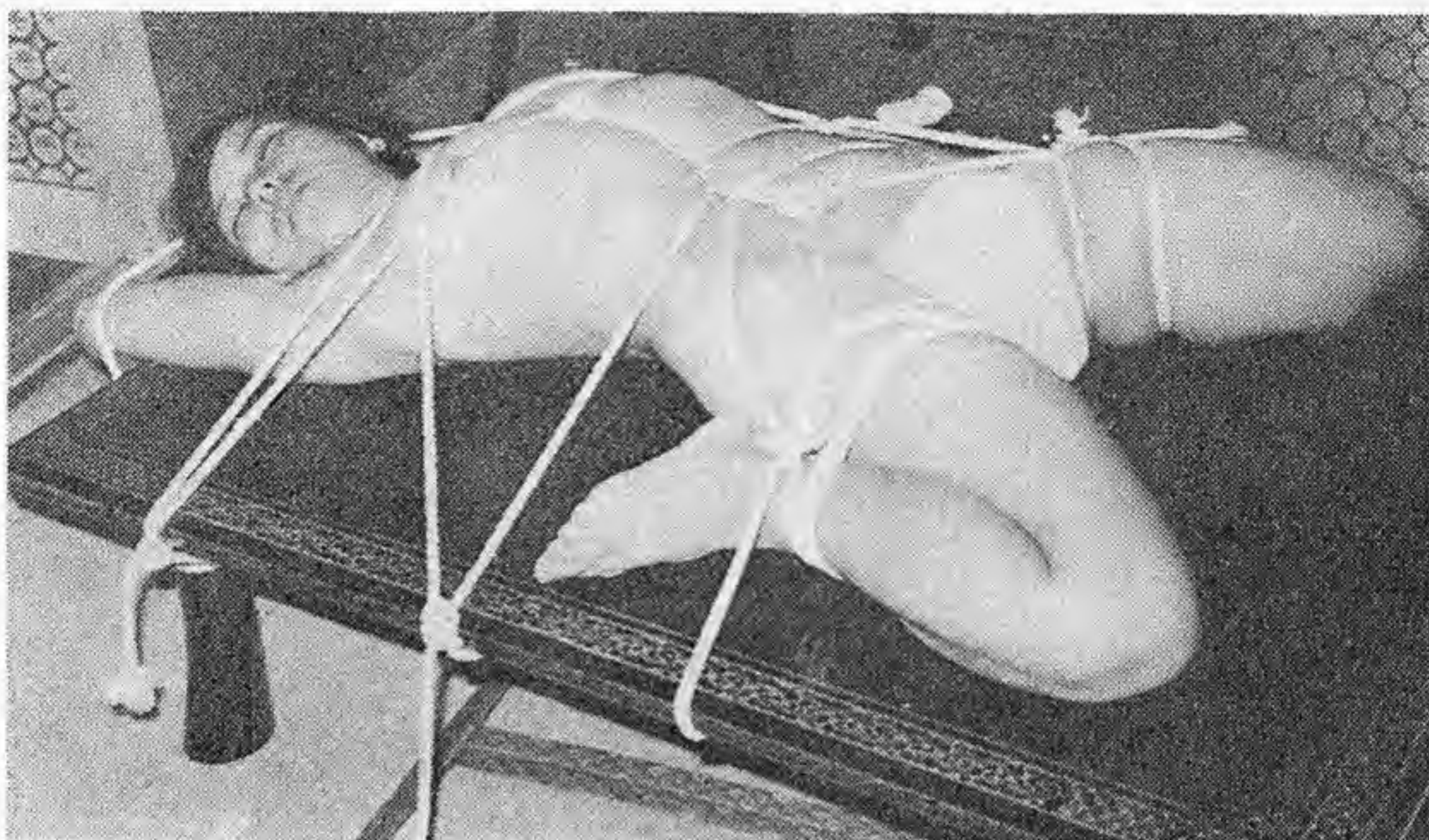
背伸びする恰好の、私の腰は痛く不自然であった。

「ねえ、早く」

いら立たしく、みさ子は本能をむき出しの卑語で叫ぶ。

リモコンの玉子型を起用して、私は逸早くコントローラーを握りしめて、みさ子の顔へ向かった。





黒髪を驚掴みにして、ガクガクと顔を揺り動かせる――。

女は、一瞬、息がつまったかも知れない。切迫した呼吸で呻いていた。

ふと気付いた私は、急に虚無感に襲われ、のろろと体を起こした。

「こんなことになってしまった」

「これでよかったのよ。恰度、ノドが渴いていたから……」

みさ子は妖しく笑った。

「有難うございました」

強烈な彼女のマゾ性に圧倒される想いで、私はいふ言葉もなく、我が身に眼を落としていたのである。

× × ×

「折角持ってきたのですから、使って下さいませんか？」

みさ子はハンドバッグから、一個の鶏卵を取り出した。

「ナマ、それとも茹でてあるの？」

「ナマですわ。温めて、雛にかえしましょうか」

その言葉が、自分でも可笑しかったのか、みさ子は、眼を細めて笑った。眼尻に猥らな、かげがうかんでいる。

今日のプレイを楽しむべく、準備してきたところに、みさ子の並々ならぬM性が窺えるのであった。

片付けにかかる私を、名残り惜しげにみつめ乍ら、彼女は未だに裸の俣であった。

「そろそろ、着ない？」

「ついさういうと、

「使わない、これ？」

と執拗である。

「どうするの？」

「これを書くのよ」

再び、ゴソゴソいわせてとり出したのは、薄いゴムのパンティであった。

「これを上から穿いて歩くのよ。ヒンヤリしている気持」

万一、われて、中味が流れ出しても、ピツタリ肌に吸い着くゴムパンティが流出を防いでくれるというのか。

「よからう、面白そうだ」

「本当はこのゴムパンティね、流腸していただいて、つけるつもりだったの」

次々と、私の嗜虐欲をそそる言葉を吐いてみさ子は鶏卵を私の前に突き出した。

一途に、被虐の欲びに耽溺しようとして、未完めいた思いで戻る彼女に、フト、いじら



しさと、甘い感懐が、こみ上げてきて、私は思わず強く抱きしめていた。

手探りで、鶏卵は、私の手で使われたという、みさ子の望みを果たした。

少女の様に、ひたすらに思いつめて、私の唇を、むさぼり吸う、みさ子に、私は人妻という最大の条件を忘れて、いとおしさが汐騒のように湧き上がってくるのを覚えた。

彼女なら、二つの凸起帯も、易々として装填しようし、パンティをつけずに、街中を闊歩せよといえ、文句なく応じるであろう。

我等、S男性を欲ばせるために、生まれてきたような女――。

今になって、岸英雄との、八時の約束が、ひどく味気ないもののように思われてくるのであった。

縫りつくように、みさ子は別れを惜しむ。なろうことなら、私のスケジュールの変更を、このいまわの際までも願っているようであった。

やっと腕を離すと、みさ子は生ゴムパンティをとり上げ、

「はかせて……」

と甘えていった。

白々と、すべやかなビーナスの丘に、ヒタ

と熱い視線を集中させ、私の情感は、僅かの時間のあいだに、再び回復してきたのを、私自身の大脳神経が一番よく知っていた。

生ゴムパンティは、さえぎるものなく、みさ子の肌に、ピッタリと吸いついた。

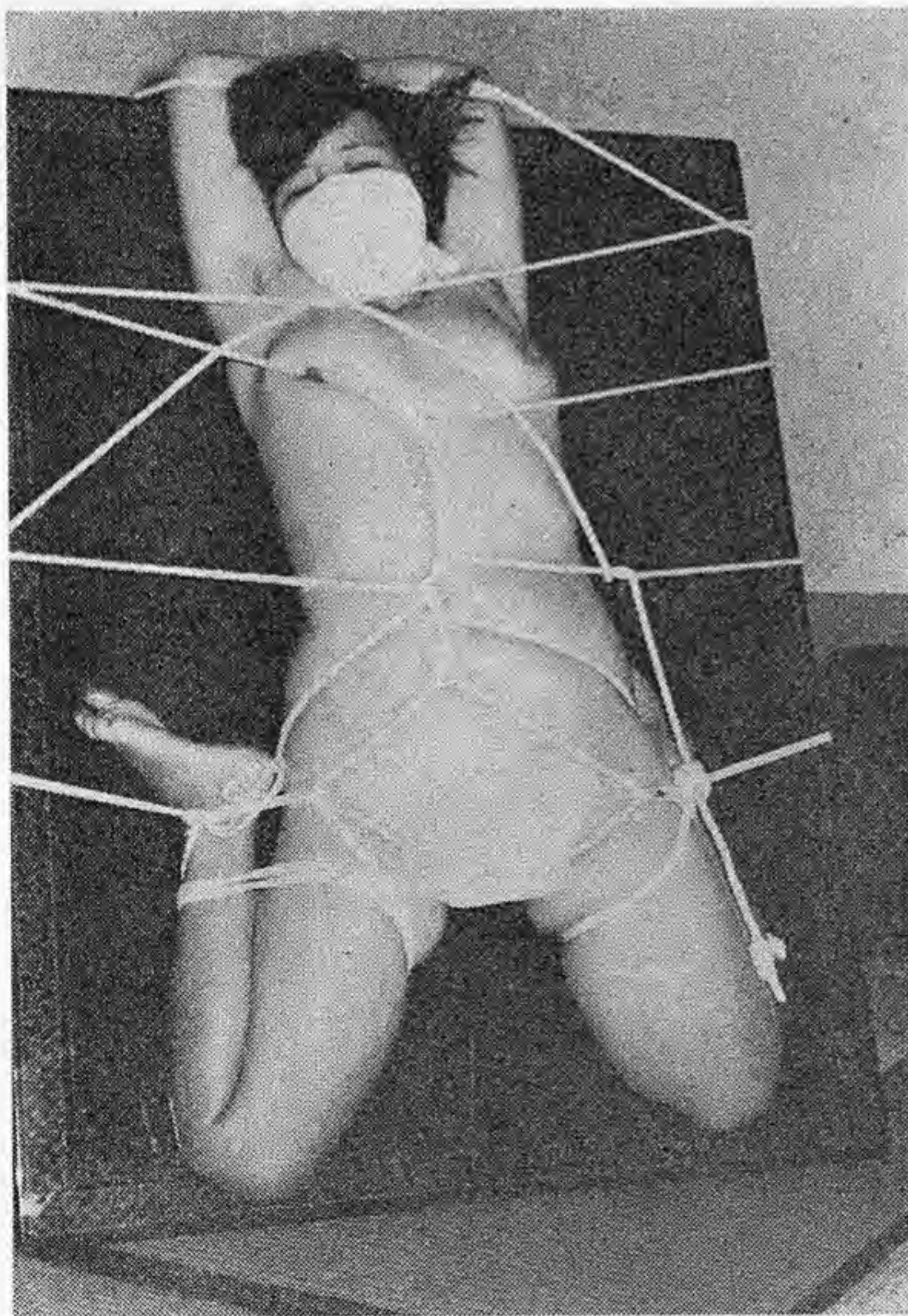
彼女の眼は、激しい欲望にキラキラ光っている。

余りにも激しい女のさがの、果てしない、願望の渦潮の中に、ともすれば巻きこまれそうになる。

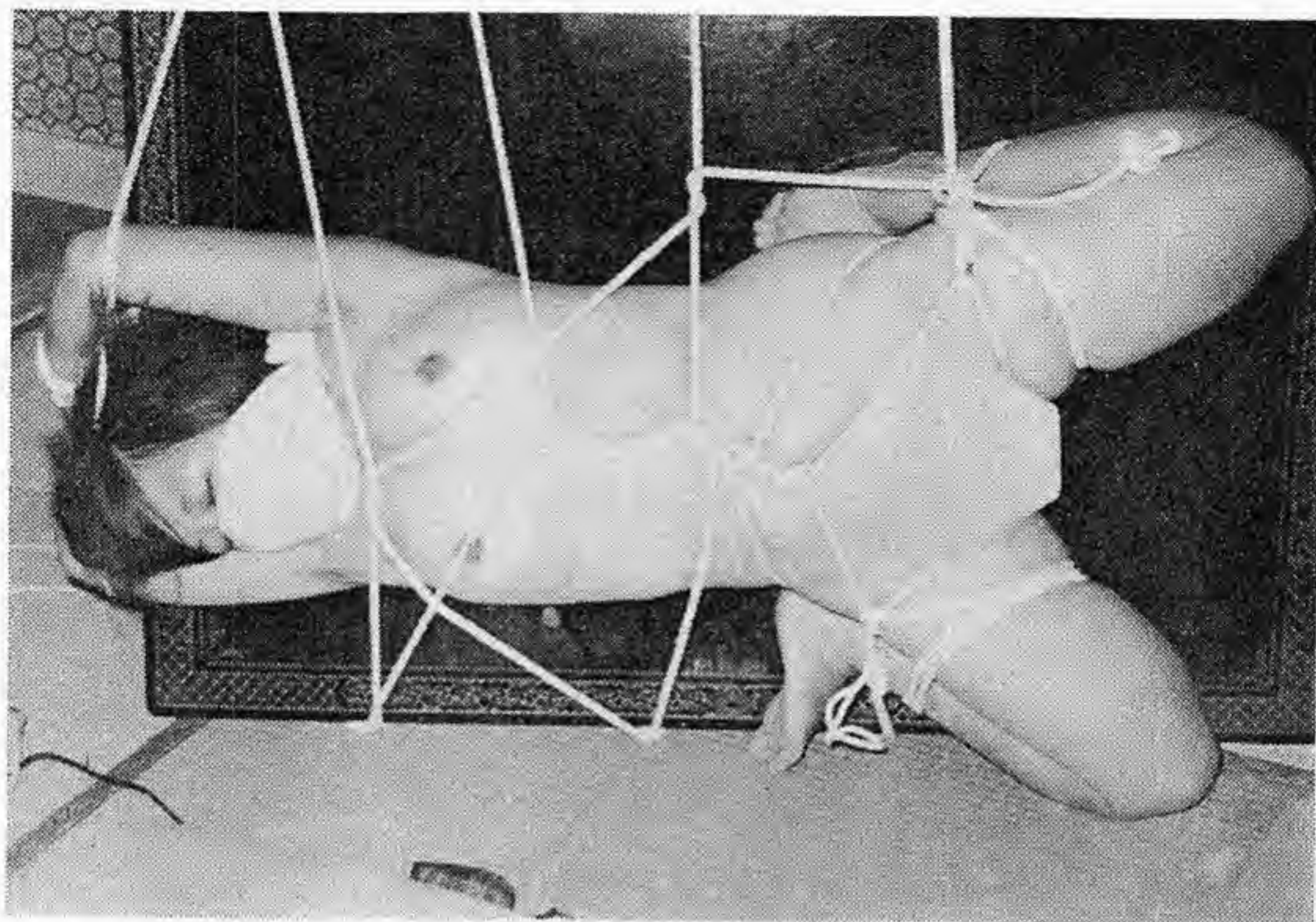
「よかったら、銀座で出会う男性と一緒に食事しようか？」

「その方、誰？」

「岸悠子の御主人さ」







「構わないかしら」

「彼も、かなりのS男性だ。

フラフラと、行くんじゃないよ」

「分かりませんわ」

「じゃあ、よしだ」

「ウソ、今日は大丈夫」

「その代り、明日は分かんというのだろう」

佐野みさ子は、それには応えず、イソイソと支度を整え始めた。ワンピースの下は、生ゴムパンティきりである。

「約束、げんまん。この次、きつと会って下さいますか？」

「ああ、きつと」

小指と小指、若者のように絡ませて、この人妻は、妖しく笑った。

「もっと、楽しめなくちゃイヤ」

「今度は、もっと強烈にやるよ。今日は初対面の手始めなもの」

「SMの特訓を受けさせて下

さいね」

「可能性の限界に挑戦してみるか」

「二カ月前に会った、Uという方は、夕方から朝までの間に、十七回感じさせて下さったわ。だから……」

「怖い、こわい。とても体が続きそうにないよ。どうなってるの、あんたの体」

「エロチシズムの塊よ。認めているわ」

「こりゃ大変だ。ダンナが手を焼くのも無理はない。亭主公認の大浮気——。なるほど、代理妻というより、こりゃ代理亭主だよ」

纏れるようにして、ホテルを出ると、新宿一帯の夜空は、スモッグに煙って五彩の色を撒きちらしていた。

通りへ出ると、タクシーを止める。

変更した約束も違え、もはや時間は八時を少し廻っている。

かなり遅刻しそうであるが、超感度のM女性、佐野みさ子を、彼に紹介してやったら、おそらく、相好を崩すに違いあるまい。

振動で揺れる私の体に、ヒタと蛭のようにへばりついた、この愛すべき代理妻は、そろそろと、手を伸ばして来た。もう玉子は、かなり温まっていることだろう。



## 奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組 百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円

十組十枚 一五〇〇円

二十組二十枚 二八〇〇円

五十組五十枚 五〇〇〇円

百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天竺社  
大阪市阿倍野局 私書箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲りします。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さいます。

☆

1 正面から狙う眼(鈴木千鶴子)  
2 引返し股間縛り(深田 菊子)  
3 ポリウムを縛る(笠井奈保子)  
4 M女なればこそ(高村 浩子)  
5 柔肌にむごき縄(深田 菊子)  
6 後手足首後吊り(高村 浩子)  
7 縄で開股を強要(深田 菊子)  
8 臀部と後手縛り(前田真知子)  
9 排泄を耐える女(笠井奈保子)

10 椅子開股両足吊(鈴木千鶴子)  
11 屋上のいたぶり(前田真知子)  
12 臀部を晒す緊縛(笠井奈保子)  
13 高々と後手縛り(鈴木千鶴子)  
14 首縄に泣く屋上(前田真知子)  
15 美女両脚柱縛り(深田 菊子)  
16 豊満な尻部責め(深田 菊子)  
17 惨美貌の羞らい(深田 菊子)  
18 猪宙吊りの浩子(高村 浩子)  
19 棒責めにあえぐ(鈴木千鶴子)  
20 美へ与える汚辱(前田真知子)  
21 縦縄に呻く女体(深田 菊子)  
22 白き裸身の縄目(笠井奈保子)  
23 両足吊流腸姿態(鈴木千鶴子)  
24 闇での羞恥責め(深田 菊子)  
25 正座しての懇願(前田真知子)  
26 仕置と折檻の果(高村 浩子)  
27 奴隷の誓い宣言(笠井奈保子)  
28 菱縄縛りに喘ぐ(笠井奈保子)  
29 強烈な股間縛り(鈴木千鶴子)  
30 総てをさらして(前田真知子)  
31 片足挙げ柱縛り(深田 菊子)  
32 全身に喰込む縄(高村 浩子)  
33 宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子)  
34 もっと股を開け(笠井奈保子)  
35 転がされた女体(笠井奈保子)  
36 形よきお臍悦情(深田 菊子)

37 そんなのはイヤ(前田真知子)  
38 喰込む股間縛り(高村 浩子)  
39 菱縄正面髪掴み(鈴木千鶴子)  
40 両足吊り逆エビ(高村 浩子)  
41 縄束の中の折檻(深田 菊子)  
42 乳房強調の猿轡(笠井奈保子)  
43 責め抜かれた果(鈴木千鶴子)  
44 全裸の緊縛正坐(笠井奈保子)  
45 階段に呻く女体(深田 菊子)  
46 後手縛りの模範(深田 菊子)  
47 両足首逆さ緊縛(深田 菊子)  
48 階段で逆立縛り(深田 菊子)  
49 責めに反る指(前田真知子)  
50 豊満な全裸縛り(笠井奈保子)  
51 プロポーズ(鈴木千鶴子)  
52 羞恥を晒す女体(深田 菊子)  
53 海老責二つ折り(高村 浩子)  
54 正面開股菱縄縛(深田 菊子)  
55 白肌に喰入る縄(前田真知子)  
56 尻立てアヌス責(深田 菊子)  
57 竹と棒責め地獄(前田真知子)  
58 豊隆乳房へ責め(高村 浩子)  
59 海老棒責めの惨(鈴木千鶴子)  
60 羞恥股裂き責め(前田真知子)  
61 高々棒吊り両足(深田 菊子)  
62 正面片足引上げ(前田真知子)  
63 強烈麻縄の魔力(笠井奈保子)  
64 ニツ折りの仕置(鈴木千鶴子)  
65 猿ぐつわの表情(笠井奈保子)  
66 逆片足エビ責め(前田真知子)  
67 厳重な後手縛り(笠井奈保子)  
68 反り返った女体(鈴木千鶴子)

69 縛りに放心状態(笠井奈保子)  
70 美を汚辱する時(前田真知子)  
71 片足吊りの正面(深田 菊子)  
72 乳房強調の縛り(深田 菊子)  
73 片足吊りの序曲(笠井奈保子)  
74 縄で攻める開股(深田 菊子)  
75 縄痕むごし柔肌(前田真知子)  
76 淫らな羞恥責め(鈴木千鶴子)  
77 開股を攻める縄(高村 浩子)  
78 放置された縛体(笠井奈保子)  
79 憂愁の美女緊縛(深田 菊子)  
80 足挙げ開股責め(深田 菊子)  
81 猿轡苦痛の表情(笠井奈保子)  
82 悦虐に泣く乳房(高村 浩子)  
83 責められた悦楽(鈴木千鶴子)  
84 屋上の引き回し(前田真知子)  
85 写真マニアの顔(笠井奈保子)  
86 臀部突出足縛り(深田 菊子)  
87 気懶るき責の宴(鈴木千鶴子)  
88 さあ立たないか(前田真知子)  
89 棒縛り開脚責め(深田 菊子)  
90 人身御供の裸身(笠井奈保子)  
91 悶えに悶えた末(鈴木千鶴子)  
92 痛いから許して(前田真知子)  
93 乳房責と股間縛(高村 浩子)  
94 諦観の晒しもの(笠井奈保子)  
95 階段で開く両脚(深田 菊子)  
96 強制された開股(笠井奈保子)  
97 顔を向けないか(前田真知子)  
98 大の字開股責め(深田 菊子)  
99 美しき縛り表情(深田 菊子)  
100 豊かさを縛る縄(笠井奈保子)



連載・アブ紳士行状記……宮下秀世の巻(4)

## M 派 交 友 録

(33)

鬼 山 絢 策

カット・岡 たかし



## 英雄きどりの愚者

かつて私は馬場庄平氏のMの成長の速度に

驚くべきタフさを示したばかりでなく、更に強い刺激を求めてきた。

我々はMではあるが、あくまでもアマチュアである。他に仕事を持ち、趣味としてMを

ついて驚嘆し、更には先行きの危険を感じたことがあった。

私が五、六回経験して卒業するところを彼は一回で卒業して次の段階へ進んできた。

最初は、興奮のあまりに暴発し、プレーキがきかなかったのが、二回目には

楽しむ。本能に負けて日常生活に支障をきたしたり、家人、隣人に迷惑を及ぼすことがあってはならない。

私の交友録の中には「自分はマゾヒストである」ということを少しも、かくさぬ人が居る。かくさないことはよいが、それが昂じてむしろ誇示してくる人さえあった。

阿麻哲郎氏や水尾究氏の如きは、そうだった。

沼正三氏の「家畜人ヤプー」があれだけ有名になり、世紀の奇書として、その価値が認められ、ヤプーショウやら、テレビや週刊誌が騒ぎ立てても、遂に沼氏は仮面を脱がなかった。立派である。

あれだけ騒がれると、その中心人物であるヒーローは、何をかくそう私であると名乗り出たくなるものである。しかし彼は、あくまでもMをアマチュアの領域から出さず、Mを売りものにして喰って行こうなどというプロ



意識を見せないところには敬服した。

金嬉老や赤軍派の元学生などはマスコミに騒がれるとヒーロー気取りになってしまう。

愚かも愚か、彼等もまた、痴愚を見せびらかしている哀れな倒錯者である。ヒーローどころか、普通人より劣っていることをやってそれで英雄きどりになるのは、これぞ正に倒錯者ではないか。

マゾヒズムについても、最初は人にも言えない恥かしい性向、恥ずべき倒錯者として自分を卑下していたのが、同好の人と多く語り体験を経ると、次第に秘匿感が薄れてくる。そして更に変わった体験を、更に強い刺激を——と、求めて行くのは当然のことである。

だがアマチュアには、自らリミットがあるはずである。

空想の世界なら、いくらでも飛躍できる。

フィクションなら総理大臣と警視總監をマゾヒストに仕立てて奴隷にし、淫売女の尻を甜めさせたあげく、なぶり殺しにすることだってできるのである。

フィクション作家に敢えて言う。もっと大胆にスケールの大きなものを描いてもらいたいと。

話が横道へそれたが、馬場氏の進行性Mを憂慮したが、彼もまた良識ある社会人で、仕事や家庭にまで迷惑を及ぼすようなことや、自分自身を破滅に導くところまでは行かずに踏み止まることを心得ている男であった。

だが、あとで考えて見ると、彼は当時、会社の仕事に不満を持っていたようである。愚痴をこぼさぬ男だから、それがどんな理由かは知る由もないが、間もなく彼は会社をやめて大阪へ移住した。

そのことから考えても、当時の彼は仕事上に大きな不満を持ち、それをMに耽溺することによって紛らわそうとしていたのだった。

もちろん、それは後年になって、私が推測したことであって、それが当たっていたかどうかは分からない。

だが当時は、馬場氏にそうした悩みのあることに気がつかなかった私としては、彼のMの耽溺に、そろそろブレーキをかけなければいけないのではないかと思っていた。

宮下氏と交際した頃は、そういう時点だったのである。

馬場氏が「プペ」のなおみに謝りたいが敷居が高いから連れていってくれと言う。それがイザ行ってみると、当のなおみは馬場氏が

想像したほど怒ってないと知ると、すぐその場で、なおみとプレーしたいと言いだした。

以前の馬場氏には、これほどの押しはなかった。自分の意思や希望は控え目にしていたのだが、最近の彼は、悪く言えば図々しくなってきたのである。

私は仕事が忙しく、十日間ほど「プペ」に行かなかった。馬場氏からは何度も電話があったらしいが、社を外に、飛び回っていたので、この方面とは絶縁していた。

仕事が片づいたので「プペ」へ行ってみたが、相変わらず暇な様子で客は一人も居なかった。

「ああ、どしたのよう」

「何が、どうしたんだ」

「死んじゃったのかと思ったよ。よっぽど会社へ電話しようかと思ったけど、悪いと思っ

て遠慮してたのよ」

「何かあったのかい」

「あったのかじゃないわよ。あれから馬場がしょっちゅう来てさ、例のプレーをやらせろってきかないのよ」

「で、やったのかい」

「やったかじゃないわよ。あんたに相談してからと思って、来るのを待ってたんじゃない



の。それなのに、バツタリ梨のつぶてになっちゃうんだから」

「何で私に相談する必要があるんだよ。やりたきゃ、勝手にやりや、いいじゃないか」

「まあ、そんな言い方ってある？ だってさ大体、社長さんとの話は一番、最初に、あんたが望みだったのよ。だから一番先に、あんたに相談したでしょ。そしたら一回だけ様子をみてからと、あんたが言うから、馬場をピョンヒッターに出したんじゃないの。そしてら、かつ子の奴が、あたしに相談もなく勝手にやっちゃったから、あたしが乗りこんでってイチャモンつけたんだけどさ。今度は、馬場も社長さんも、かつ子じゃイヤだと言いだしたのよ。やっぱり元通り、あたしに出てくれと言ってきかないのよ。だけど、あたしは一番先に、あんたに相談したてまえ、一応あんたの意見を聞いてからと思って、いままで一日延ばしに待ってたんじゃないの。それを何よ。やりたきゃ勝手にやれとは、ひどいじゃないの」

「ウーム、そういうわけか。イヤ、こりゃ私が悪かった。謝る。前言、取り消しだ。よく待っていてくれた。有難う」

「分かりゃあ、いいんだよ、ヘッヘヘヘ。で

さ、どうしたもんでしょね」

「私に相談するわけだな。私の意見を、ききたいわけだな」

「イヤに念をおすわね。そのために待ってたんじゃないの」

「じゃ、はっきり言おう。プレーを、やっては、いけない！」

### 乗り気ななおみ

最初、宮下社長が、なおみにプレーを申し込んだ時は、一晩七千円だった。

別に本番をやるわけじゃなし、好奇心も手伝って、やってみたものの、男役をやるのはなおみは好きではなかったし、宮下社長が面倒くさいことを言うので、いやになったのだろう。そのうち、かつ子が金に困っているの、かつ子の方に、廻してやった。そして、かつ子に貸してある金の取り立てを、それで償却しようという一石二鳥の案を考えたのだった。

ところが、これに馬場氏が一枚、加わってなおみに断わりもなく、なおみを抜いて勝手に三人でやりはじめたし、馬場氏も宮下氏も「プペ」へ寄りつかなくなつて、かつ子の店

の方へ入り浸りになつて、お客を二人、取られる、はめになった。そこで、なおみの殴り込みと相なったわけだが、いまは二人が一万円宛、出して、一回で二万円の収入になると知って、最近、店の方が暇になった、なおみにとっては、金の方も魅力になってきたのである。で、またぞろ、やる気になっていたところだったのだ。

だが、なおみは私を引っぱり出したかったようである。

だから私が「やってはいけない」と言った時、にっこりして、次の言葉を待った。

「どうしてやっちゃ、いけないの」

「最近の馬場君は相当、乱れている。彼の生活のペースが狂っているように思えるんだ。彼の収入が、どれだけあるか知らないが、このところ二カ月の間に少なくとも二十万以上使つてると思う。イヤ、プレーばかりと言うわけじゃない。飲み代も入れてだ。彼のポケットマネーとしては相当無理してると思う。だから、ここしばらく控えた方が、いいんじゃないかと思うんだ。昔のあんたなら、いざ知らず、お客をあおやぎにするのは、いまのあんたの主義に反するだろう」

「分かったわ。じゃ、あんた、やってくれる



のね」

なおみは、テッキリ私がやりたいために、そう言ったのだと思っただけらしい。

「イヤ、待ってくれ。私が、やるために言ってるんじゃないよ。友人の馬場氏の身を案じて言っただけだよ。勘違いしないでくれよ」

「分かったわよ。だから、あんた、やってくれるんでしょ。ここんところ、飲んでないんなら、お金も溜まったでしょうし、絞ってやるわ」

「私がやるとは言っていない」

「なによ、やきもち、やいてんの」

どうもまだ、なおみは分からないらしい。

「言葉のうらをとらずに、そのまま受け取ってくれよ。私は、もったいぶったり、もって廻った言い方をするのは、きらいなことは、あんたも分かってるだろう」

「あんた、やるの、やらないの。どっちなのよ」

「そう結論を急ぐなよ。もしもだよ、馬場氏を出し抜いて私がやったとしたら、馬場氏はどう思う？ 私と馬場氏の、これまでに十年も続いた友情は、どうなる？ あんたは、そこを考えているのか！」

ようやく、なおみも分かってきたようだ。

「あとで私が何と弁解しても、私が横取りし裏切ったと思われるじゃないか」

「そうねえ、じゃ馬場さんと相談する必要があるわねえ。そう言えば、この頃、あの人の勘定、ツケになっちゃったのよ。いままでキンとナマで払ってたんだけど」

やはり私の想像していた通り、馬場氏も金詰まりになってきたのだ。

「いくらぐらいあるの」

「ううん、一万ちょっとだけど」

「彼は倒すような男じゃないよ」

「それは分かっているわよ。だけど、何しろ乗り気なんだから。是非、やってくれて言うてるのよ。どしたら、いいかしらね」

乗り気なのは、なおみもそうだろう。

「まあ馬場さんのことはおいといて——」

なおみは顔をくつつけるように私の目の中を覗きこみながら、

「あんたはどうなのよ。やる気があるの」

私は返事に窮した。

やる気がないわけではないが、それよりも例によって、私は写真の方に気があるのだ。

どうも私の撮影欲は、もはや本能的なもので、なにかにつけてシヨッキングな場面に遭遇すると、自分が体験するよりも、まず撮影

のことを考えてしまうのである。これは一種の窃視症であろう。

と同時に、セックスを欲望のたぎるままに一気にパァーッと発散するよりも、それを抑えるところに苦痛的な快楽を感じるようになってしまった。これは何だろう。やはり一種の自虐であろうか。

私に写真道楽のあることは、なおみも知っている。馬場氏の承諾を得て、彼の写真、二三枚を、なおみに見せたことがある。

「私はね、自分がプレーをやるよりも、写真を撮ってみたいんだよ」

「そりゃ無理よ。社長さんが嫌がるわよ」

まず、そうだろう。宮下氏は秘密主義だ。

だから、かくし撮りだったら、どうだろう。

「それにはね、やっぱり一度、社長さんとプレーするのよ。そうすれば打ちとけるから。それからなら社長さんもOKするかもよ」

もちろん、それは真っ先に考えたことだ。

その時、ドカドカと三人連れの客が入ってきたので、この話は、そこで途切れた。

それから二、三日して、社に居る時、久しぶりに馬場氏からの電話を受けた。

「ああ、やっと、つかまえた。何度、電話したかしれせんよ」



電話の向こうで馬場氏の、はずんだ声がした。

今晚、是非「プペ」で会いたいと言う。生憎、十時すぎでないと身体があかないと言うと、それでもいいから来てくれと言うので、十一時頃「プペ」に顔を出した。

「いましがたまで、社長さん居たのよ。ひと足違いで帰ったわ」

馬場氏は、もうかなり酒が入っていたが、今夜は顔色もよく、ほがらかだった。

「万事うまく行ったわよ」

なおみが話した。宮下氏は撮影の件をOKしたという。ただし、面と向かって撮られるのは、いやだから、別室で隠し撮りの形で撮ってくれというのである。

「ばかに調子よく行ったもんだな」

「で、いつにするか、きいさんの都合のいい日を聞いといて、って言うのよ」

「私は、やるとも、やらぬとも言っていない」

「またまた、そんなアノジャク言うもんじやないのよ。皆乗り気で、はりきってる時に水を差すようなこと、言わないでよ」

「どうやら今度のまとめ役は、なおみが軸になって進めたらしい。」

「隠し取りってやっは、位置が固定してしま

ってアングルの変化がない。それに、ライトを当てるのができないから、光量不足でもあるしね。あまり、いい写真は撮れないんだよ」

私は、あの「みそのホテル」での撮影の場を考えて見た。

次の間から隠し撮りするにしても、レンズを覗かせるために障子の穴を、かなり大きく開けなければならぬ。それではレンズが見えてしまつて、隠し撮りにならない。第一、あの部屋では光量が不足である。

いままで私が写真を撮ってきた時は、写真撮影が第一の目的で、プレーは二の次になっていた。それが今度はプレーが主眼で、撮影が従になる。すると同じ場面の繰り返しでダラダラとプレーされたのでは「カメラマン」が手持ちぶさたになって、かなり忍耐を要するであろうことは容易に想像できる。

ほんとうの盗み撮りなら我慢するが、モデルが知っているのでは、盗み撮りとは言えない。だからモデルが撮影をOKしたという点で、私にも欲が出てきたのである。もっと撮影に協力してもらいたいという欲である。

できれば、ひとつのストーリーを組み立てて、それに従って動いてもらいたい――。

そんな欲も出た。

「そんな、こむずかしいこと言わないでさ。最初は万事、あたしに委してちょうだいよ。うまくやるからさ」

結局、私も、なおみに説き伏せられたかたちとなった。

### 自宅のプレー

九月に入つて朝晩は充分、涼しくなった。善？ は急げと、二日後の土曜日の夜と決められたので、私は旅行鞆にカメラや電球やストロボ、その他、一式をつめて、十一時半頃「プペ」に行った。

宮下氏も馬場氏も来ていて、飲んでいた。珍しく客が、たて混んでいて、カンバンになるのが十二時半を回った頃だった。

「今夜は、ひとつ私の家でやろうと思うのですが、いかがですか」

宮下氏が意外なことを言い出した。

「家内や子供を避暑にやって、誰も居ないのですよ」

馬場氏は、かつて自宅で行ったことがあるから、別に驚かない。

ただ、秘密主義をとっている宮下氏が自宅



===== イメージギャラリー『牡、牝、どちらなの?』 飯田ひろくに =====



を開放するというのはかなりな開眼振りである。しかし私としては大変、都合がいい。恐らく、いろいろな室が選ばれるし、撮影の便宜が与えられると思っただからだ。

渋谷の駅前からタクシーを拾って、練馬の豊玉中の宮下氏の家に着く。

場所としては、あまり便利なところではないが、家は商売柄、新建材を多用して、五十坪ほどの二階建てのスマートな家だった。

宮下氏が鍵で扉を開けて、あちこちのスイッチをパチパチと、つけた。

家内の雑作や調度も立派なものが入っていたが、何となく荒れた

感じを受けた。それが私の第一印象だった。「何しろ、このところ、やもめ暮しで……」家の中が何となく埃っぽく、乱雑さをおしくくしているようなところが見受けられた。「どの部屋を使って下さっても結構です」

宮下氏は応接間から茶の間、居間、寝室、子供の部屋など、案内して回った。キッチンには十畳ぐらいあって設備は整っていたが、食に残しや汚れた皿小鉢が乱雑に積み重ねられていて、ここが一番ひどかった。

「まあ、ひどいわねえ。これだから男は、しようがないのよ」

「申し訳ありません」

ひと廻りゾロゾロ見て歩いて応接間に戻った。宮下氏は棚からウイスキーとチーズやクラッカーを出してきた。

「どの部屋を使いますか」

みな黙っている。べつに、どの部屋という注文はないらしい。あるのは私だけだ。

「じゃあ、あの茶の間を使いましょう」

応接間もいいが、あまり物がゴチャゴチャ置いてあって、隠し撮りをするのには邪魔になると思ったし、隠れる所がない。

宮下氏は唐草の風呂敷包みを持ってきた。中からは女物の着物、かつら、長襦袢、腰



巻にまじって竹の鞭や、革の鞭、はては、あやし気な形をした、こけし様のものが三、四本、出て来た。それはシングル用とダブル用とあった。また、縄や細い鎖、手錠、針金、男物の下駄や短刀なども入っていた。

普通マゾヒストには、乗馬用の拍車のついた長靴が付きものだが、その代りに男物の桐下駄があるのは、いかにも宮下氏の、好ましい。越中褌や六尺褌用のさらしもあった。

「これ、適当に使って下さい」

「ねえ、社長さん。あたし今夜は男になるのイヤよ。男は此処に二人も居るんだから。あたしは女のままでいいでしょ」

宮下氏は、ちよっと不服そうな顔をした。

「だって馬場さんは、男に虐められるのイヤでしょう」

「ほんとの男に虐められるのは、あまり好みませんがね。しかし、いかに男振ったって、ママは女だから……」

「とにかく今日は、あたしは地のままで行くわよ。その代り社長さんは、どうしても女になりたいんですよ。それは許してあげるわ。それでいいでしょ」

宮下氏は禿頭に、にじみ出た汗をハンカチで拭きながら、

「鬼山さんは、どういうのがいいですか」

「私は今夜は傍観者だから、何も言う権利はありませんよ。ま、しかし今夜は、すべてママにリードを委せてあるんだから、ママの言う通りにしますよ」

なおみが男になるか女になるかは、どうやら3対1で、きまった。

「ママは女、馬場氏は男、宮下さんは女、とそれぞれの性別は、きまったが、それだけでやるの。二人の時と違って三人というのは誰か一人、手があく場合が多いからね。そこをうまくコントロールしてくれよ」

私は、なおみに言った。

「大丈夫よ。委しときなさいよ」

「性別をきめたついでに、もう少し各人の役割を、きめてはどうかね。例えば、それぞれの身柄を仮定するのさ」

「それは、どういうことですか」

宮下氏には、よく分からない。

「つまり三人のうち、だれかが夫婦になるとか、恋人になるとか、主人と召使いになるとか、するんですよ。その方が精神的ショックが強いわけでしょう。目の前で恋人を奪われるとか、凌辱されるとか、各人が孤立するよりも密接につながった方がプレーがやりやす

いでしょう」

宮下氏と馬場氏は賛成したが、なおみは「面倒くさいわよ、そんなの。何でもいいじゃないの。あんまり、いろんなこと、きめられると、やりにくいわよ」

「じゃ仮に馬場君と宮下さんが夫婦になるとママは『プペ』のママの地で行くと。そういうのは、どうかね」

横から口を出すまいと思っていたのだが、どうしても口を出してしまう。

二人が賛成したので、なおみも、それじゃそれでやって見よう、ということになった。

「さて、ボチボチははじめますか」

酒が出ると、みんな腰が重くなる。酒の好きでない私が一番先に立ち上がる事になる。もっとも私は準備が要るから、どうしても先乗りすることになる。

茶の間に行き、此処と思う所に狙いをつけて五百ワットの写真電球を二個、取りつけ、点燈した。まばゆいばかりに明るくなったが同時にジーンと暑さを感じた。

茶の間の障子の向こうに縁側がある。その先は庭に面している。その縁側に陣取って、障子を細目に開けてカメラを向けることにした。



カメラをセットしていると、なおみがやって来た。

「ワア、明るい。暑いわねえ」

片手に、オンザロックのコップを持っている。

「本格的にやるのね」

私の傍へ来ると、黄色いカプセルの、例の薬を出した。

どこの国でつくった薬か知らないが、この前の、なおみのハッスル振りを見ると、たしかに効きめがあるのかもしれない。

「飲んでごらんなさい。今夜は飲むのよ」

カプセルは二つあり、その一つを、なおみは飲み、もうひとつを舌の先にのせると、私の首を抱えて、キスし、強引に舌で口の中へ押し込んだ。

唇をはなし、私を見てニッコリ笑う。

「効くわよ」

ウイスキーのコップを口に当てる。ウイスキーと一緒に私は飲みこんだ。

馬場氏が唐草の風呂敷包みを重そうに持ってやってきた。なおみに、

「どれ、着ますか」

女物や男物の着物がある。

「人の着たものを着るのイヤだよ」

まだ手を通してない紺地の浴衣があった。

のりのきいているのをバサバサはがして、着ていたブラウスとスカートを脱ぎ、シュミーズも脱ぐと、下はノーブラのパンティだけとなった。まるく盛り上がった乳房の下のアストがくびれてセクシーだった。パンティも私達の目の前で脱いだ。臍の近くまで這い上がっている逞しい黒毛は下から上に向かって、そそりたつように生えている。黒い炎のようだ。これはM派にとっては、渴仰のシンボルだ。

なおみは、びったり、くっついた浴衣の袖に腕を通した。

「新しい浴衣は痛いわね」

「その腰巻、締めてくれないか」

私は赤い腰巻があるのを、見て注文を出した。

「ダメよ。あいつが、してくるもん。これもあいつが締めたものよ。汚らしいわ」

水色の伊達巻を無難作に腹に巻きつけた。かなり下の方で腰の上あたりに巻いた。

「何だか男っぽい恰好になっちゃったわね」

なおみはコップのオンザロックを飲みほした。「社長さん」が「あいつ」になった。

「何してるのさ。あいつ、早く連れておいで

よ。あんたも裸になるんだよ」

馬場氏はモゾモゾとパンツ一枚になった。

「それも脱いで。手間をやかせるんじゃないよ」

馬場氏は羞恥に顔をあかくしながらもパンツを脱いだ。

「サ、あいつを連れておいで」

馬場氏が応接間の方に消えた。

「暑いわねえ、このライト。何とかなんないの。二つも、つけなきゃダメなの」

「ウン、それでも昼間の光より暗いんだよ」

馬場氏が戻ってきたので、私は障子の外に退散した。

### 狂乱するなおみ

馬場氏に促されて恥かしそうに下を向いて入ってきた宮下氏を見ると、何とも醜怪なその恰好に私は吐き気を、もよおした。

夫人の着物であろう。あずき色のお召しに名古屋帯を胸高にしていたが、ズングリムックリした、ごつい身体に、いかり肩で、田舎の百姓婆さんが着物を着たみたいである。それに若向きのオカッパのかつらをかむっているのだから、何とも不調和である。



この前、女装したのを見た時は、チョビひげを、はやしていた。宮下氏は、いまそれを剃り落としてきていた。

より女らしくなりきるために、そうしたのであるが、チョビひげをなくした宮下氏の顔というものは、まるで人が変わったみたい。間に抜け面に見えた。それが薄化粧をして口紅までつけているのが、醜さを増していた。

「フフフ、何だよ、その恰好は」

なおみは笑いながら宮下氏の胸ぐらをつかみ、引き倒した。

「この牝豚め」

足をあげて肩を蹴って、ひっくり返した。

なるほど、なおみの言ったように、宮下氏は赤い腰巻をしめていた。

なおみは背のびして、大きな馬場氏の髪の毛をつかむと、グイと、ひき下げた。

馬場氏は、おとなしく頭を下げ、膝をついて四つん這いになった。なおみは片手で浴衣の裾をパツと捲くり馬場氏の首へ跨がった。

「お前も、よくこんなバケモノを女房にしていられるね。する時は風呂敷でも、かぶせるのかい。エエ？」

レンズから目を離して、なおみを見ると、やはり、かつ子とは雲泥の相違だった。かつ

子のやせて、かまきりみたいな顔、細い足、薄い胸は貧弱で、子供っぽさがある。

なおみは妖艶で、殊に目が美しい。かつ子の、とぎすまされた氷のように冷たい目に比べて、なおみの目は男の心を、とろかす情熱が燃えている。

馬場氏の首を、しっかりはさんでいる太股にしても、まる味が大きく盛り上がってボリユームがあり、男の自由を封ずる貫録を備えていた。

なおみは馬場氏を馬にして転がっている宮下氏の傍に行き、足で宮下氏の顔を踏んだ。

「ウツ、勘忍して……」

宮下氏のカン高い作り声をする。なおみの言うところによると「勘忍して」と言った時は「もっとやってくれ」と言うサインだそう。

「フフフ、こんな牝豚は踏み潰してやる」

顔を踏む、なおみの足に力が入る。

「痛い、痛い。勘忍して」

宮下氏は、なおみの足を両手でつかむ。

「コラ、汚い手を出すな。おとなしく、あたしの足で踏まれている。えい、畜生」

なおみは両手で裾を捲くったまま、馬から立ち上がった。

「おい、このバケモノを縛っておしまい」

馬場氏は扱帯をとって宮下氏の両手を後手に縛り上げた。

「ね、お願いだから、この人を奪らないで」

宮下氏の作り声は、どうにも間が抜けて芝居にならない。

「バカヤロー。誰が、こんな男を奪るもんかい。この野郎は、あたしの奴隷として使ってやるだけだよ。お前達、夫婦なら、あたしの見ている前で、つるんで見ろ！」

これには馬場氏が面喰らった。

「やり方、知らないの。この前、やらなかった？」

なおみは、こけしのような棒を一本とって、馬場氏に渡した。

「これでやるのよ」

この前は、かつ子がやったのだ。

「これは男の役目だからね。今日は、あたしは女だからね。あなたがやるのよ」

こけし棒を持って馬場氏は、ためらっている。

「何してんだよ、早くやんなよ」

宮下氏の方で気をきかして縛られた身体をゴロンと、うつ伏せになった。そのお尻を捲くると、モジャモジャと毛の生えた汚い尻が



出た。

私にとっては、はじめての場面だが、こういう醜怪な場面は撮る気がしない。

「そのワセリンを塗って！」

なおみと宮下氏が二人でやってた時は、こ

れを、なおみがやっていたのか。

馬場氏がこわごわという恰好で、なおみの指示に従ったが、不器用な上に要領を知らないと見えて、宮下氏は苦痛にうめいた。

「いいのよ。そのままにしていって。サア、今



ナミオM画廊

『食欲の秋来たる』

春川 ナミオ

度は、あんたを縛るわよ」

棒の尻尾をヒクヒクさせてひっくり返っている宮下氏を見ていると、また私は吐き気をもよおしてきた。

しかしこの吐き気は、醜怪なもの、見たくないものを見たための吐き気とばかり思っていたが、そうではないことが分かった。この吐き気は、さっき飲まれた黄色いカプセルの薬のせいなのである。

なおみは馬場氏を兵児帯でグルグル巻きに縛った。

「サアこれで夫婦とも、あたしの奴隷だよ。あたしが何をしようと、お前達は、あたしに手向かうことはできないんだよ。アハハハ」片手で浴衣の裾を捲くり、高々と足をあげて馬場氏の横っ面を蹴倒して、なおみは気持ちよさそうに笑った。

「お前達は、けだものの牡と牝だよ。さっきの、あのつるみ方は何だい、あんなの人間のやることじゃない、牝豚と牡犬だよ。お前達は」

仰向けに、ひっくり返った馬場氏と、うつ伏せになった宮下氏とが、共に同じ大ききくらの棒を立てていた。



重  
ね  
餅

なおみは足で馬場氏を蹴転がして、宮下氏の上に馬場氏を積み重ねるようにした。

ちょうど松葉のように、うつ伏せの宮下氏の肩のあたりに馬場氏を仰向けに倒すと、やや逆さま加減になった馬場氏の顔が、横向きの宮下氏の顔と並んだ。

なおみは二人の上に跨がり、馬場氏の顔の上に、しゃがんだ。

「牝豚、てめえの亭主が、どういう可愛がられ方をするか、よく見ておきな」

なおみは、ちょっと、ここには書きにくいような大胆なことを始めた。馬場氏の顔がなおみの太股で隠れる瞬間に、舌ののびるのがチラと見えた。

この時、私は突然にエレクトした。

馬場氏が羨ましく、私が代りたい衝動にかられた。

「どうだい、お前も欲しいかい。ウフフ、お前の口は汚いからダメだよ」

なおみは宮下氏に向かって言い、膝小僧を宮下氏の頬へあてがって、押しつけた。

私はレンズを覗き、懸命に焦点を合わせて

シャッターをきったが、ドキドキと息苦しくなってきた手がふるえ、ブレたのではないかなと思って、もう一度シャッターをきった。

いつもこの程度で、こんなに興奮したことはない。レンズから覗いている限り、私はいつも冷静なのだが、何かジッと構えていられないような焦燥感に、おそわれた。やはり、あの薬が効いてきたのであろう。

なおみは、かなり激しく責めている。

奴隷の舌に委せているというのではなく、指示し、自らの重味で馬場氏を責めていた。

馬場氏の顔面は、みるみる紅潮し、額に静脈が、みみずのように浮き上がった。なおみは息使いも荒く、

「こん畜生ッ、こん畜生ッ」と責めている。

馬場氏に対して、これほど手荒く責めたのも、はじめてではないか？ この前「プペ」のスタンドの中でやった時は、慈母が幼児に乳房を吸わせるような、やさしさがあった。が今夜は、羽島道雄に対してやった時のように、それ以上に荒い。

浴衣を割ってニョッキりと露出した太股は白く遅しく、丸味があり、凄いポリウムである。美しい。かつ子の、やせて細い、うす

ぐろい太腿とは比較にならない。

なおみの肌は肌目が細かく、つきたての餅のようにネットリとした弾力がある。

40キロぐらいしかない、かつ子に乗っかられても大して重くはなからうが、なおみは60キロぐらいある。これをモロに乗せられてはかなり苦しいに違いない。しかし、それにも増して70キロもある馬場氏の体重まで乗せられた宮下氏は、かなり苦しいだろう。

宮下氏の横顔を膝で、おさえつけた。その膝に力が入る時は、なおみが尻を持ち上げ気味にした時である。馬場氏が、いく分なりと楽になれる時である。

犬が水を飲む時のような音が断続して聞こえる。

全く凄惨迫力だ。

だが、私にとって残念なのは、なおみが、いつまでも同じポーズで、同じ責め方をくり返していることだった。

「どう？ 参ったか、参ったか」

なおみは馬場氏を見下ろして言う。

馬場氏は、返事を目でするほかはない。だが目をつぶったまま返事がないのは、もっと責められたい意思表示なのだ。

「く、苦しい。もう許して下さい」



宮下氏の方が悲鳴をあげた。

「何言ってやがんだい。この位で、へたばるてめえかよ。こん畜生ッ」

膝を立てて、足のうらで宮下氏の顔を踏み「ホラ、足のうらでも舐めやがれッ」

宮下氏は舌を出して踵のあたりを舐めた。

なおみは足をずらし、土ふまずのあたりを舐めさせた。

「うふッ、くすぐったいッ！」

なおみは、これがきいたらしく、馬場氏の顔を思いきり締め上げ、上下に激しく、こすりつけた。馬場氏の口もとに、こまかい白い泡がふき出していた。

60キロの重圧が、次第にこたえてきたらしく、馬場氏は苦痛を懸命に耐えていた。

その苦痛に正比例するように、馬場氏の持つ柱が次第に直角に、なり始めた。傍に、例の尻尾柱を立てたままの宮下氏が横たわっているだけに、まことに奇妙な対照だった。

これでもか、これでもかと圧しつける、なおみの責めに、

「ウー、ムウ……」

馬場氏が鼻から声をもらしてダウンした。

「参ったか。フフフ」

なおみは、ゆっくりと立ち上がったが、馬

場氏は仰向けのまま、死んだようにノビていた。それを尻目にかけて、なおみは私の方にやってきた。

「どう？ うまく撮れた？」

上気した、なおみの顔は、白い歯を見せて妖しく美しかった。

「ああ、暑い！ 冷房がないもんね」

私の目の前で浴衣を脱ぎ、膝に跨がってきた。私は、なおみが開けっ放しにした襖を閉めた。

「何故、閉めるのよ」

なおみは、私の首へ両手を巻きつけてキスし、そのまま仰向けに倒れた。勿論、私もそのキスに応えた。

両の乳房の中心から臍に向かって縦にはしっているくぼみ、ここは女体の一番チャームな線だ。この線のある女性には少ないが、なおみはクッキリとついている。

「ウー……」

なおみが女らしい声をあげた。強烈な芳香が私の頭をクラクラにした。なおみはクルリと寝返りを打って、私の頭の方から跨がってきた。顔全体で受けるなおみの体重は怪しかった。両膝で支えてくれたのであろう。

私は重圧を望んだ。なおみの両膝が私の腕

をおさえつけていてその方が重く痛かった。私は懸命に耐えた。

私は、もっと苦しめて欲しかったが、なおみのお尻は爬虫類のように、くねくねと蠢きながら移動し、ひと息つくことが出来た。

私は、すべてを彼女に委せていたが、もし馬場氏や宮下氏が見ていたら、女子プロレスラーに翻弄される男のように映り、羨望されたいに違いないと思う。

虚脱した私を、なおみは、まだ解放せず、おさえつけたまま、締め上げ、

「薬、きいたわね」という、なおみの声は、いつもの野太い声に戻っていた。

なおみは片手で襖の下部をサッと開けた。部屋の向こうでは、馬場氏と宮下氏が、河岸のまぐろのようにゴロゴロ転がっていた。なおみは立ち上がると、部屋にズカズカと戻って行った。

「どしたい！ 牝豚！」

足で馬場氏を蹴とばして、宮下氏の顔の前に足をひろげて突っ立った。

そして、ゆっくりと片膝をつき、脅すように女の凶器を面上にかざし、抵抗するすべを知らぬ奴隷の顔を封鎖し始めた。

——(続く)——



義 談 M S 三 鉄

歴 遍 女 体 の カ メ ラ と 縄

—— 三 ぞう 鉄 てつ 本 もと 塚 つか ——



悪趣味の話

(排泄場面を撮る)

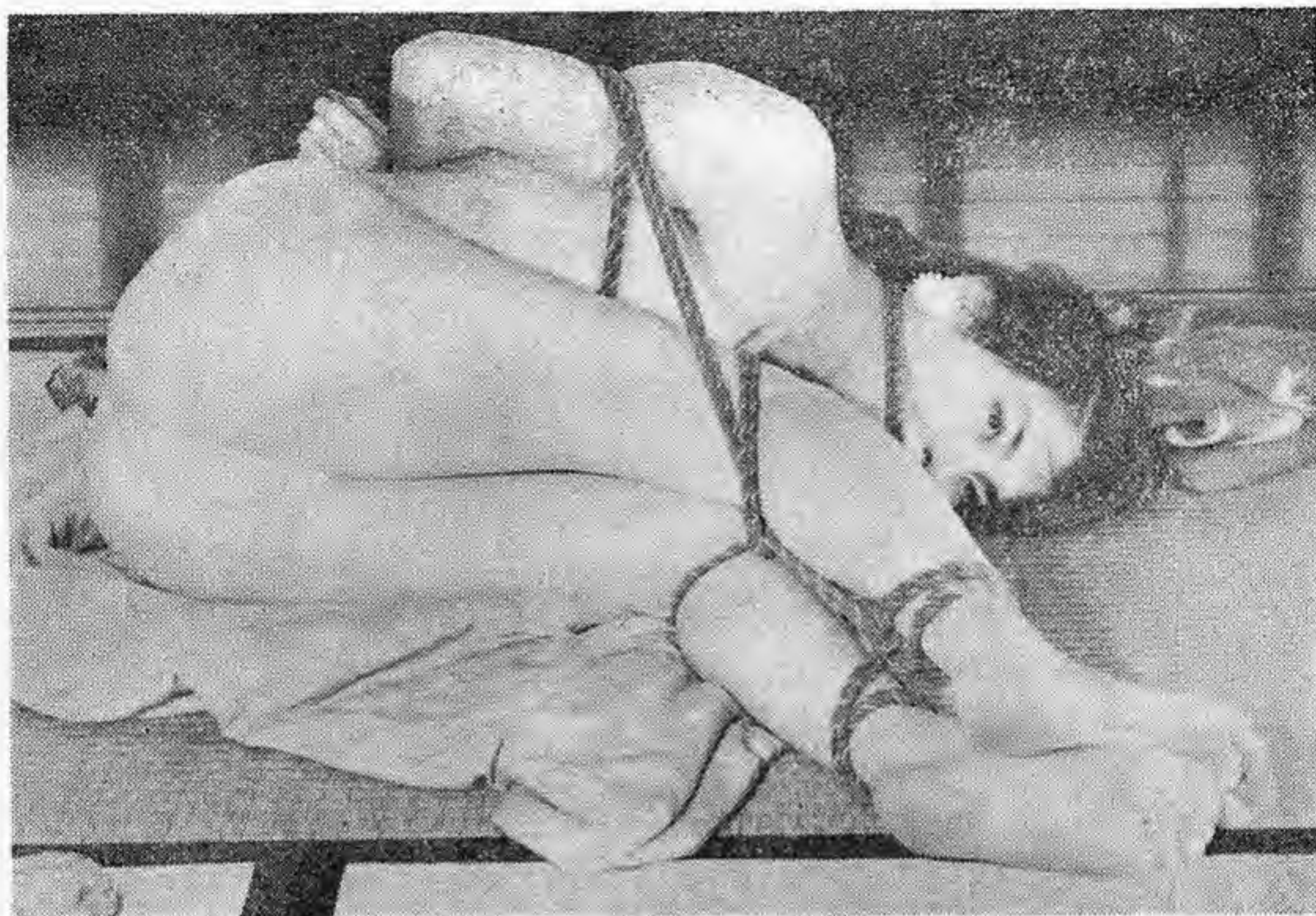
先日、私の所へ、あるSM雑誌の編集者から手紙がきて「小誌にも一つルポ記事を書いてくれませんか」と言ってきた。

私は水増し原稿を適当に色づけしたり、出がらしの茶を煎じて出したりするような器用な真似が出来ないタチなので、鄭重にお断りしておいた。牛乳は水で薄めても牛乳には違いはないのだが、それでは金を出して飲まされるお客の方が災難である。

それはさておき、私の友人に新聞社のカメラマンが一人いるが、これが悪趣味な男で、夏の夜のアベックを写真に撮るのを趣味にしている。それも公園のベンチのアベックを望遠レンズで盗み撮りするというような生やさしいものじゃなくて、ズック靴という軽装で公園の植込みの中へもぐり込んで、ズバリ、その熱演の場面をフラッシュ撮影するというスリルとポルノに満ちた趣味である。

ある時、樹立の中の芝生の上でポルノ場面





を展開中のアベックをキャッチして、ストロボ一閃、見事に撮影に成功。さて暗室に戻って現像してみると、アベックの男女ばかりかそれを窃かに覗いている男の顔がはっきり写っていたということである。ストロボが閃いたあとの騒動は、どんなであったろうか、考えただけでも面白くて仕方がない。

夏の海岸も絶好の撮影場所であるらしい。堤防の真上から、下のアベックを俯瞰してシャッターを切った時のラーゲは出来上がった写真を見せ、貰った私も驚いたものだ。

悪趣味も、ここまでくればいささか常軌を逸していると思われるが、SMの分野に於いても時には、こうした徹底した悪趣味行為を発揮してみたい時がある。あながちマニアといわれる程の者でなくとも、とことんまでイヤら

しく、エゲツないことを、やってみたくて仕方がない時期というものがある。

一つ、若い女の排尿、排便のシーンを写真に撮ってやろうと思ったのも、悪趣味の極、ドロドロとした得体の知れないヌエのような魔物の虜になった一時期のことである。

特に親しくしていた二人の女性に、そのことを話してみた。

「馬鹿ね、何を言うのかと思ったら、真面目な顔をして――」

予想通り一笑に付されてしまった。だが、ここで引き退ってしまったら、何事も成功する筈はない。馬鹿の一つ覚えのように、顔を合わせる度に、その話をしてみる。彼女の反応が次第に変わってゆくのも面白い。やがて「そんなにまで言うんなら、やってみようかしら? うまく撮ってくれる……」

というところまで漕ぎつけた。

「野原なんかで真昼間、キミが思いっきり貯めておいて、とばしてるところを真正面から撮るんだ。面白いゾ」

「馬鹿ね、顔にかかるじゃないの」

そんな冗談を言い合えるようになったら、もうシメタものだ。いつの間にやら排尿しているところを写真に撮るといふ話がきまって



しまった。トイレで撮影しようと試みたが、配光がうまくゆかないので、実際は広くて後始末の、し易い浴室を選んだ。

さて、正面に三脚にのせたカメラを配置してエヤレリーズで遠隔操作するようにしておいて、私は彼女の傍に立って介添え役に回った。事前にビールを一本ばかり飲ましておいたのだが、いざ……と、なると、なかなか、そう簡単に出るものではない。

さんざんジラシ、挙句の果て、スカしたりおだてたりして、時間を稼ぎ、やっと一時間ばかりして、身体が冷えてきたのか、もう辛抱出来ないという。途端に、迸り出てきた、その時の滝の白糸は、はっきりと写真に印されている。大塚啓子が茶目っ気たっぷり演技した排尿シーンの写真は何ら利用価値もないまま、徒らにネガカバーに挟まれたまま埃をかぶっている。

もう一つの悪趣味は、大の方の排便シーンの写真撮影である。この方は絹川文代を口説いて納得させた。彼女は案外、気易く、

「出さえすれば、私はいいですよ」

とても返事がよかった。どんなエキセントリックな要求に対しても、彼女は嫌な顔一つしないできてくれた。出来れば二日程はト

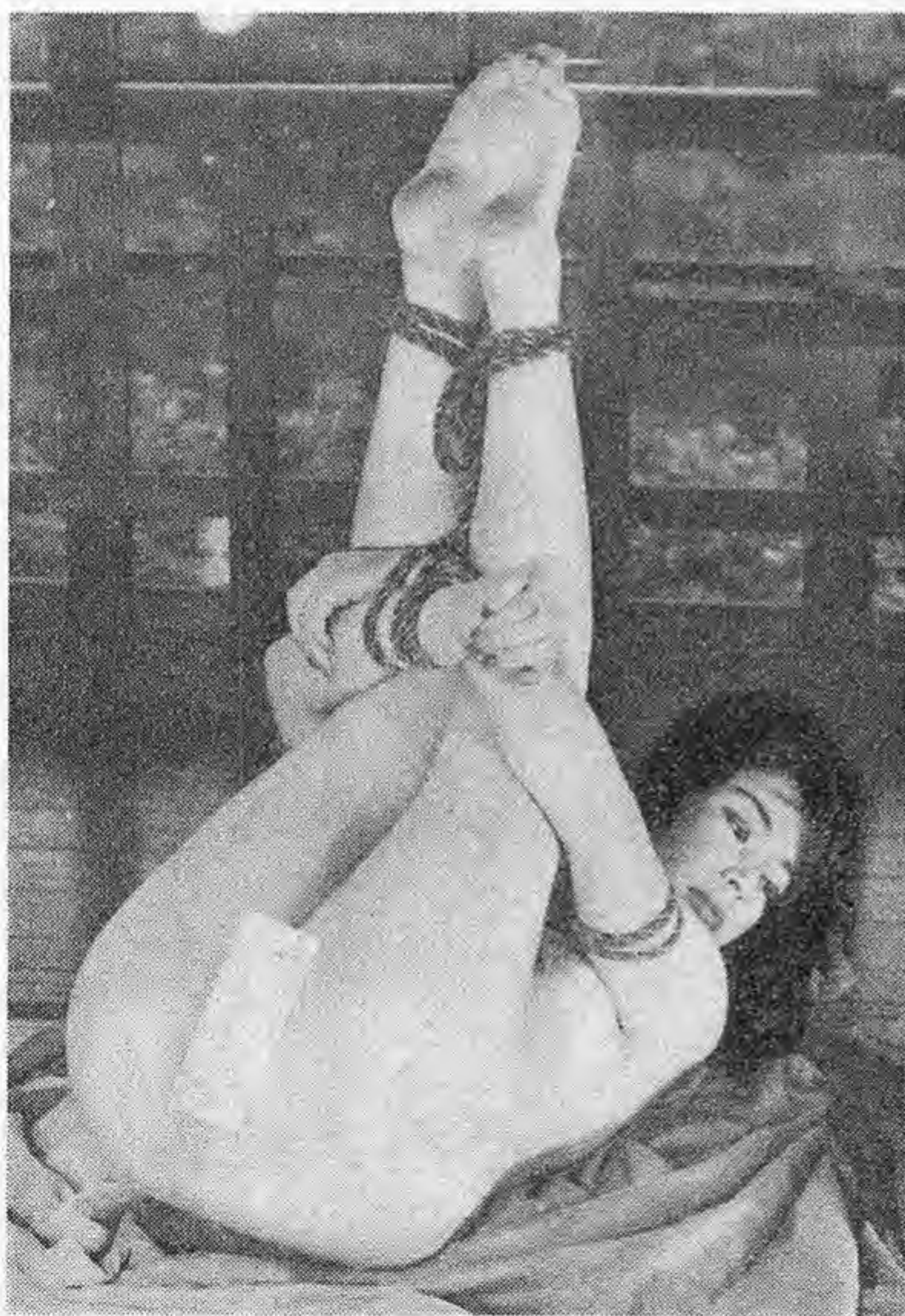
イレへ行かないでほしい。当日の朝だけは絶対に行くなよ——と、言っておいた。

部屋の真中に急造のトイレを造ってテーブルの上に跨がるような格好にさせて、下からカメラが覗くようなアングルにした。

普通、こんな格好は、とても嫌がってやらないものだが、絹川文代は私の命ずる通り素

直に机の上に跨がったばかりか、写真が撮り易い様にと、お尻の位置をいろいろに変えて「こんな具合で、どう？」

カメラの位置がきまってライト点灯。さていよいよ……となって絹川文代は懸命に力むが、先の排尿の場合と同じで、なかなか出ない。しかし、力む際の菊花の動きを見ている





と、まさに女体の神秘をさらけだして圧巻で私は生唾を飲みながら思わずリリースのゴム球を握りしめてしまった。

五分——十分——と、悪戦苦斗が続いたが遂に駄目。そのままの姿勢で、下から石鹸水の浣腸を〇〇〇〇ばかり施す。急に効いてこないで台上に跨がっている足が痺れてきた

というので便意が起こってくるまで休憩。「カメラに写されると思うと、余計に出なくなってしまうのよ」

そう言う絹川文代の言葉もさもありなん。雑談を交わして気長に待っているうち、

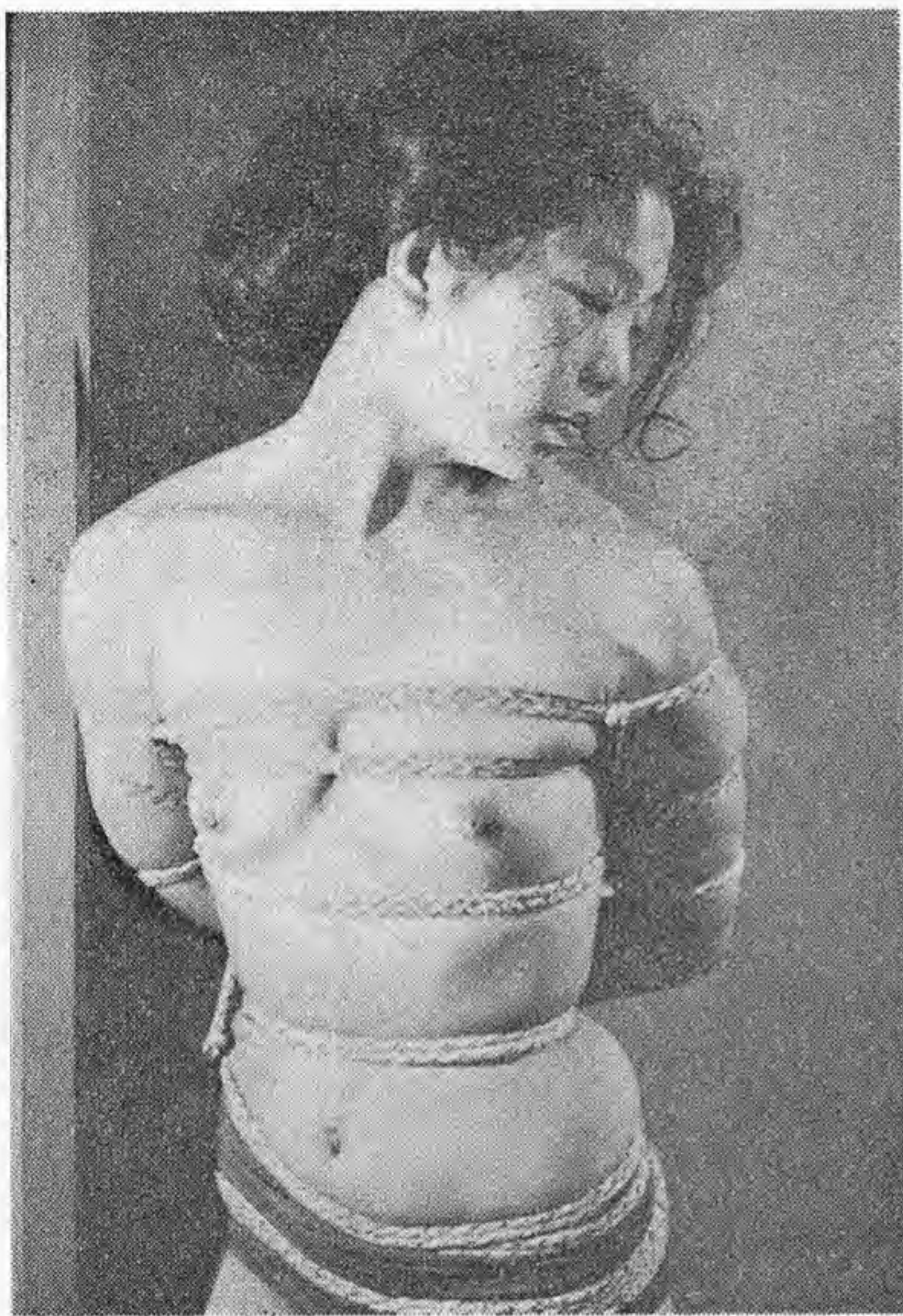
「今度は出そうよ、早くして——」  
せきたてた割には、台の上に跨がっても急

には出て来ない。但し菊花の膨らみ具合は、さっきとは隔段に激しく、私はそれを眺めながら、つられてシャッターを押していた。

水流の場合をキャッチする時でも、同様であるが、この落下物を写真にする場合でも、いかにも落下している、といった動感を掴むためにはシャッタースピードをきめるのが大切である。早や過ぎれば停止してしまい、遅きに過ぎれば、単に一条の線となって排便の感じが出なくなってしまう。

泉から滝が、今まさに噴出しようとして、白玉のような水が、チュルチュルと湧き出てくる瞬間、これは目でじかに見ても面白かったが、写真でもうまく描写に成功した。そのあとの水流の動きは、適度の動感を持たせて白い噴流の湯気から香気まで、その写真は撮んでいえるように思えた。

さて、落下物の方は、いよいよ限界がきたらしく、見事に膨れあがって押し出されてきた。そこを一発、ストロボの閃光をとばしてしまったお蔭で、落下の状況のキャッチに失敗、第二弾を待つ。暫くして、いや、第一弾が大きな糞塊だったのに比べ、次は、たらたら——と、細い紐のような形態。その連結状態は、うまくフィルムに止めた。





出初めると、あとは、もう出るわ出るわ、という有様で、浣腸液を混じえて、とめどもなく出てくる糞流に対して私は忙しくカメラを操作しながらも、絹川文代の真白くて美しい臀部の律動を、つぶさに観察した。

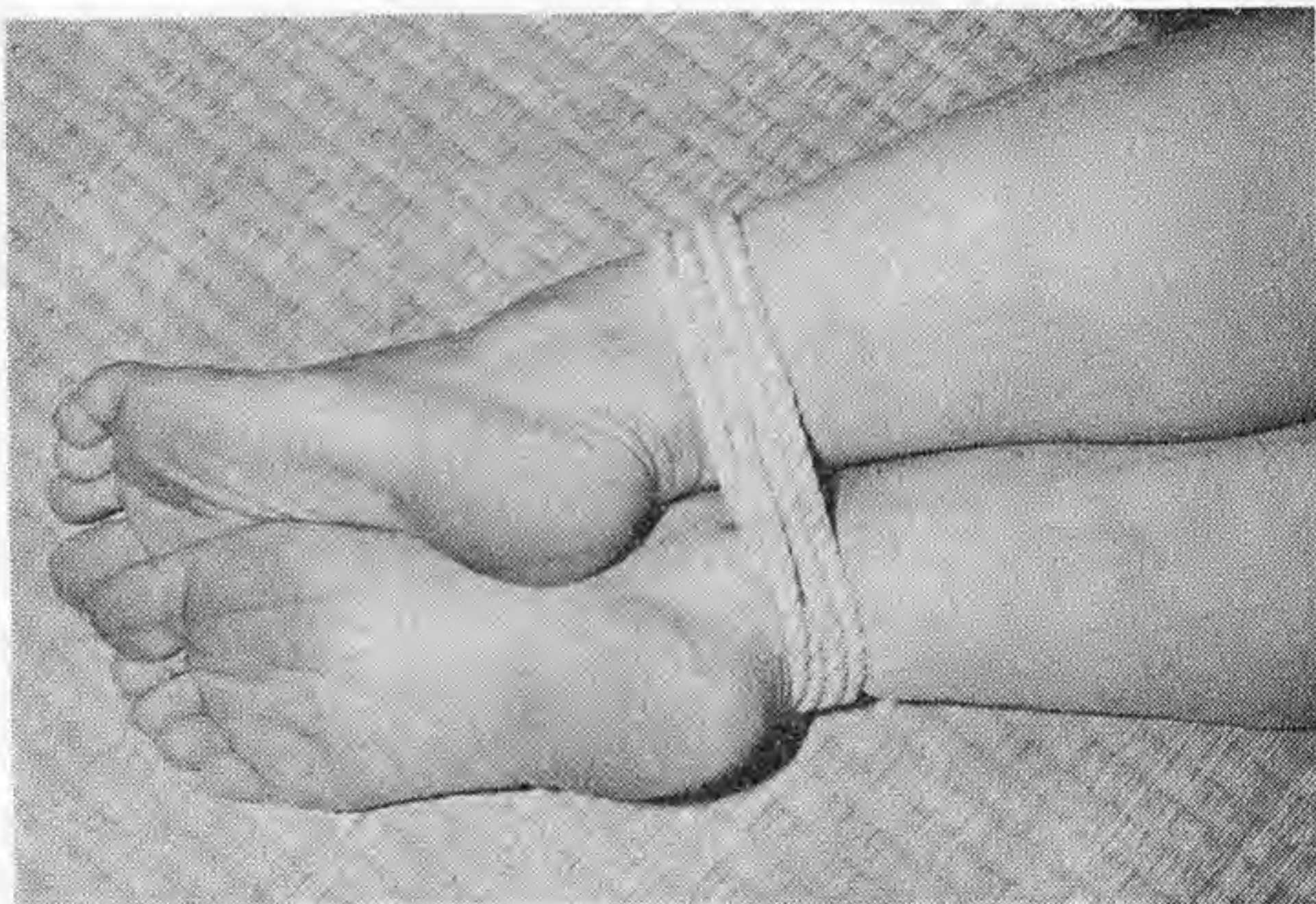
悪趣味はそればかりではない。ビニールの布の上に堆高く積まれた絹川文代の糞塊をもアップで撮り、それに彼女の肢体の一部を配して構図を作った。若し私に、Mとかコプロの趣味があったら、自分の舌で後始末していたかもしれない。それほど、絹川文代のその部分は美しかった。

## 素足のきれいな女

(一宮 百合子)

十九か二十才<sup>はたち</sup>といえ、生活の苦勞が、その手足にあらわれる年頃では、まだないが、私は一宮百合子という娘を、縛って畳の上にいるがし、カメラのファインダーを覗いてみて、その素足の美しいのに驚いた。

台所の水仕事はイヤ、畳の上に正坐するよなことはしない。脚を投げだして行儀の悪い格好で——といった娘の方が、こうしたヌードで写真を撮るときのモデルとしては極めて



て適当しているのだ。

ファインダーから覗いた一宮百合子の女体は、一つの枠の中にカットされて自然色の美

しい色彩で浮かびあがっている。じかの被写体と違って、ピントグラスの上では、部分的に強調されて、そのセクトだけが、いきいきとして、私の目に迫ってくるのだ。

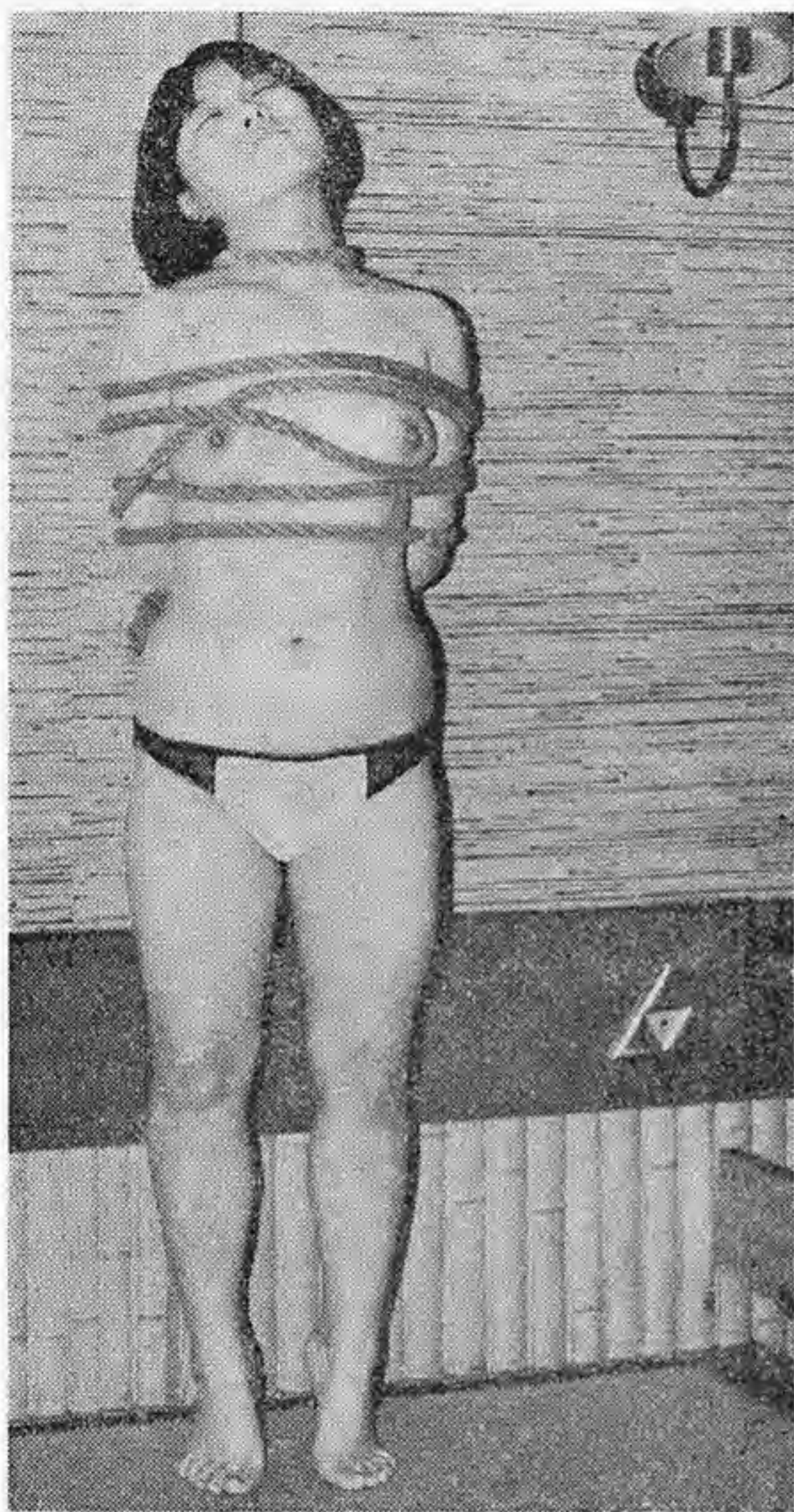
勿論、素人娘の百合子のことであるからペデュキアなんかはしていない。深爪と思えるほど、疳性に切り込んだ爪先がピンク色に染まっていた、ピンと反り返り気味の足の指が、可愛いかった。

縛られることが、好きだ——という一宮百合子に対して、私はなんら躊躇することなく縄を捌いて、まだ少女から抜けきれないような幼なさの残っている肌を縛っていった。

彼女が、どういいうきさつで自分の肌を縛られることが好きになったのかは知らないが縄を掛けてゆくに従って微妙な動きを見せる肢体に私は大いに興味を持った。

うすいウブ毛の、ほんのりと萌えるように粗生している脛に目をやったとき、縄をしめつける毎に、毛穴がふっふっとふくれ上がるように、私には思えた。





太股に目をやった。すべすべとした柔らかそうな白い肌である。だがシミ一つない、きれいな膚も、じっと目を近づけてみると毛穴の一つ一つが、まるでグミのように、私にははっきりと見えるのである。

十九か二十才<sup>はたち</sup>の娘の肌を、このように近々と手にとって、眺めることが出来るというのも、女体を緊縛する者の特権であろうか。単なるヌード写真の撮影の場合は、肌に直接、手を触れたりすると特に嫌がる女があるが、女体緊縛ともなれば、肌に手を触れるだけじ

やなくて、女体そのものを思いのままに痛めつけることさえ出来るのである。

縄を掛けることによって、その女の肢体に微妙な変化をもたらすことは、一体、何を意味するのであろうか。

自分の身体を縛られることが好きだという女性が縛られたならば、その女体に、一体、どのような変化が起るものなのだろうか。これは私にとっても、また縛りマニアのS Mファンにとっても、大いに興味のあることだ。私はカメラを近づけてアップで一宮百合

子の女体の各部を次々と接写してみた。

最初からクローグ・アップすることは、私としては、珍しいことであつたが、余りにも一宮百合子の脚の部分が清潔で美しかったため、その方へつい、視線が奪われてしまったのだつた。

青いさくらんぼのような乳首。まだ膨らみの足りない半内形の乳房。口紅は塗っていないくても紅味を帯びている唇。皮下脂肪のきわめて薄そうな、ほっそりとした下腹。それらの一つ一つをとってみても、私の撮影意欲のわかないものは一つとしてなかった。

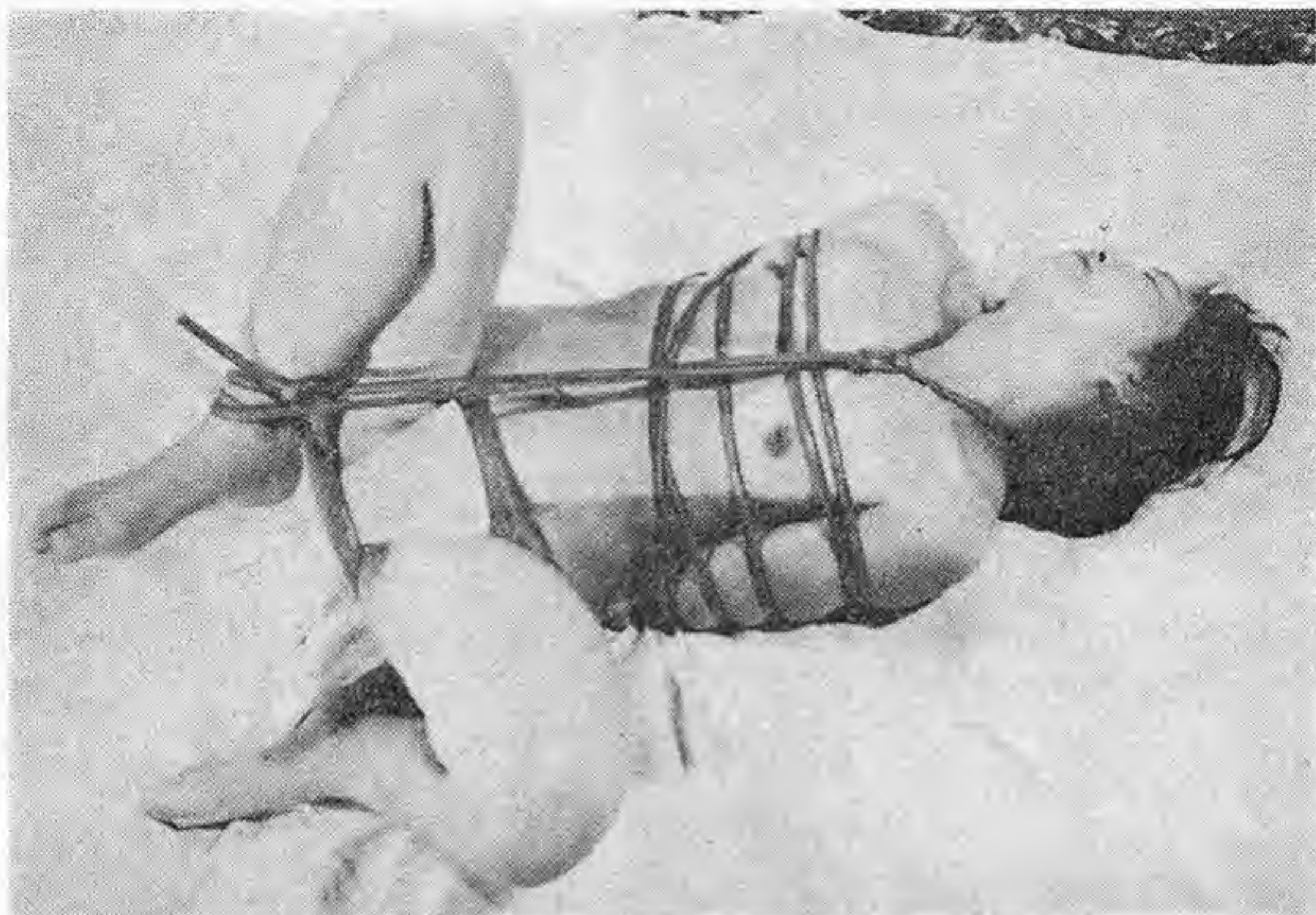
若さの魅力が、ぶんぶんと匂っていた。未だ誰の手にも汚されていない無垢の清潔感が私の心を、ぐつと掴んで放さなかった。

ブラジャーは、私の強要でやっと取ったものの、パンティだけは恥かしがって、中々取ることを承知しなかった。しかし、後手に縛り上げてしまえば、もうあとは、私のなすがままであつた。

「それを取るのだけはカンニンして……」

百合子が哀願しても、それは私にとっては楽しい音楽のようにしか聞こえなかった。すんなりとした脚をすばめて、必死に、それはずさせまいとする——はかない努力。





どうせ、取られるのだから  
 無駄な抗いは、よしの方がいい——と、思うのだが、しかし、少女にとっては、そこを白日の下に晒すということは堪えられない恥かしさなのだろう。取らせまいとして膝に力を入れ、案外それが強く抵抗となつて、私の手に返ってくるのであつた。

くるり……と、玉葱の皮をむくように、真白いパンツが剥がされると、百合子は一瞬消え入りそうに眉を伏せ、私はそれが当然のように、そこへ目をやり、そして、自分の予期した通りの稚さをそこに発見して、やっと安堵するのであつた。

これから、この初々しい十九の少女の、すべての秘奥を探りだしてみせるのだ——という強い意志を以て一歩、足を踏みだしたとき私は、甘ずっぱい牛乳のすえたような匂

いを鼻にして、はっとした。

その甘い匂いは、鼻の奥から口の中へと、ひろがり、そして再び、鼻の方へ戻つた。

私は舌なめずりをして、鼻孔を百合子の肌に近づけた。どの肌から、こんな香ぐわしい匂いがするのか。蒼い静脈の浮いた肌は、何ごともなげに、金色のウブ毛を、かすかに息づかしているばかりだった。

しかし、私を狂わしたのは、視覚ばかりではなかった。先刻の嗅覚も大いに影響してゐた。あとは触覚であるが、いかにも柔らかなうな、腕や肩口。脇腹や下腹。それに、小じんまりと締まったお尻でさえも、私の触手の襲うがままに、まかせている。

珍しく、35ミリ判のカメラを手にした私は手持ちで、乱射乱撃、シャッターを切りまくつた。責めながらカメラを操作するのだから極めて忙しい。三脚の上に据えたカメラの方は置き放しにしておいて、ペンタックスに詰めたトライXで撮りまくつた。

今、手元に、そのとき撮影した夥しい枚数のネガがネガカバーに入つたまま、徒らにそのときの狂つたようなSMプレイの記録として残骸をさらしている。

それから暫くして、一宮百合子から私に來



た手紙には、そのときのSMプレイの楽しさを、あどけないペンに托して書いてあった。

私に対する信頼の念と、何ものも疑うことを知らない純真な百合子の考え方に対して、さすがの私も、手荒な行為は慎まなければいけないと反省せざるを得なかった。

だが、しかし――。

次に逢ったときは、そんな反省もかなぐり捨てて、百合子に対して一層のSMプレイの愉しさを味あわせてやるべく、羞恥責めに移っていった。興にのって思いのままに彼女の柔軟な身体を翻弄した挙句、さて、成果は如何にと、可愛い顔を窺ったところ、そのときの百合子の述懐は、私の頭にガンと鉄槌を下したような、衝撃を与えた。

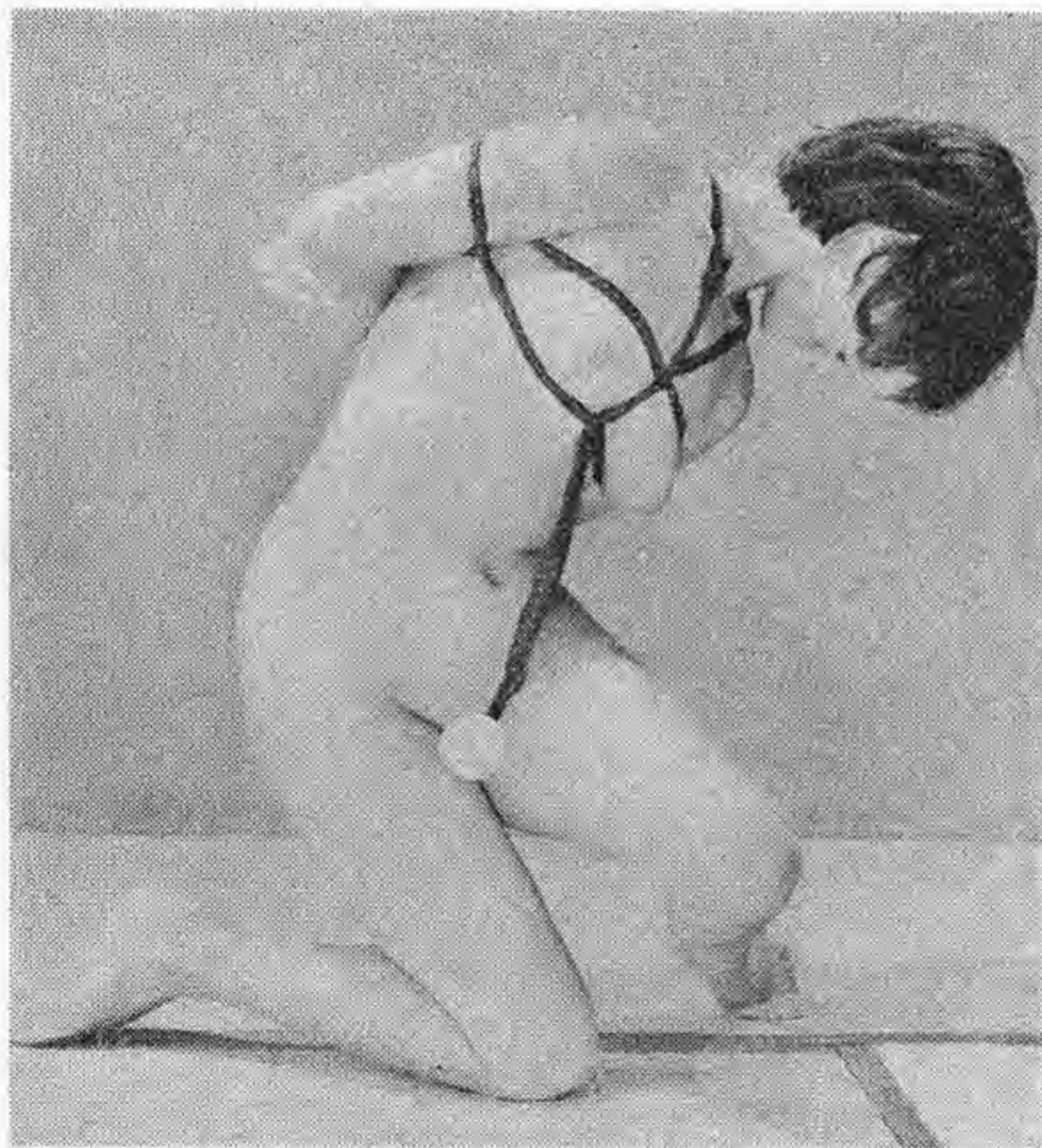
「男の人って、みんな同じネ」

彼女は私に、何を期待し、何を望んでいたのだろうか。如何にも少女らしい、花模様の入った便箋に、一字一字、丁寧にきれいな文字で書いて、よく手紙を呉れた百合子――。

それは、すべて好意に満ち満ちた内容であったが、あのとき呟いた言葉だけは、未だに忘れることは出来ない。

## 無毛症の女

(田原 美佐子)



背はあまり高くないのだが、痩せているので、すらりとしていてスタイルはよかった。陽に灼けた浅黒い肌、目だけがギラギラと輝いて野性的な感じの女であった。

バスタオルを腰に巻いて立った田原美佐子のお腹はペコンとへこんでいて、如何にも皮下脂肪の乏しいといった肌に、お臍が平べ

たく、ついていた。

肋骨の一本一本あきらかに見えるくらい、胸にも肉が少なく、乳房が申しわけのように僅かな膨らみを見せている。

私の審美眼からすれば、余り好みのタイプとは言えなかったが、なんととっても十九才という若さが私の興味を、そそった。

友人からアルバイトでヌードモデルをしたいというBGがおるが……と、いつて紹介されたのが田原美佐子であった。

喫茶店で逢ったとき、会社の帰りだという彼女は慣々しく私の問いに答えるのだった。

「ヌードばかりじゃなくて、縄で身体を縛るけど、それでもいいか



い？」

「ええ、いいわ。そのかわり、一度や二度じゃなくて、ずっと使って下さる？」

田原美佐子は一寸、考える風をしてから、すぐ縛られることをOKした。そして、私の顔をうかがうようにして更に言った。

「それから……、ダンスへ行ったり、何か御馳走、食べに連れて行って下さる？」

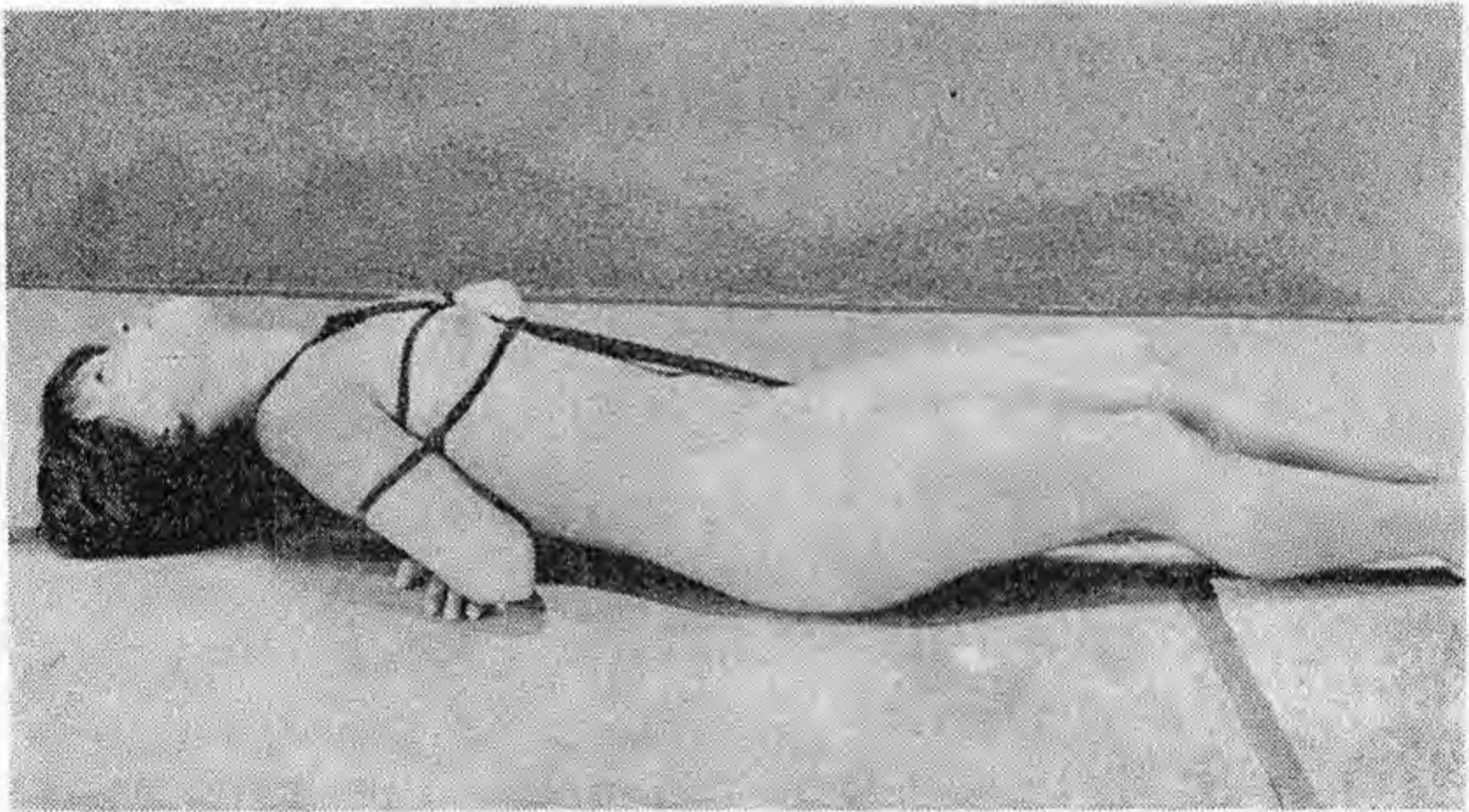
「そりゃいいけど、君って、そんなに暇があるのかい？」

「ええ、毎日でも、いいの。会社が終わってから、することがなくて、困ってるのよ。だから、もしよければ、毎日でも出てくるわ」「うん、それはまあ、先に君の身体を見てから、きめようよ」

その日は、喫茶店でお茶を飲んだだけで別れたのだが、今日はじめて、田原美佐子のハダカを目のあたりに見たのだ。

洋服を着ていた彼女の、あの身体がこれなのか——と、私は浅黒い肌の女体を前にしていささか慄然たる気持であった。

更に、このハダカのなかに、何が秘められているだろうか。それを今から、この一筋の縄によって、発掘したいと思った。もとより田原美佐子は、縄で自分の身体を縛られたこ



ともないだろうし、また、縄で裸身を縛られるということが、何を意味するか、ということも全く知らない筈である。

この無垢のうら若き女性が、縄に対して、どのような反応を示すものか。そして、やがて、どのような変化を見せるだろうか。

私は、それを実験し、そして、この目で、じかに、はっきりと人縄によって変化する女体Vを、見極めたいものだった。

私は田原美佐子の両手首を背後で軽く縛っておいてから、バスタオルを剥ごうとした。

「ちょっと待って。私……ないのよ。それでもいい？」

「えッ？ なにが……」

「ないって……言ったら、わかるでしょ」

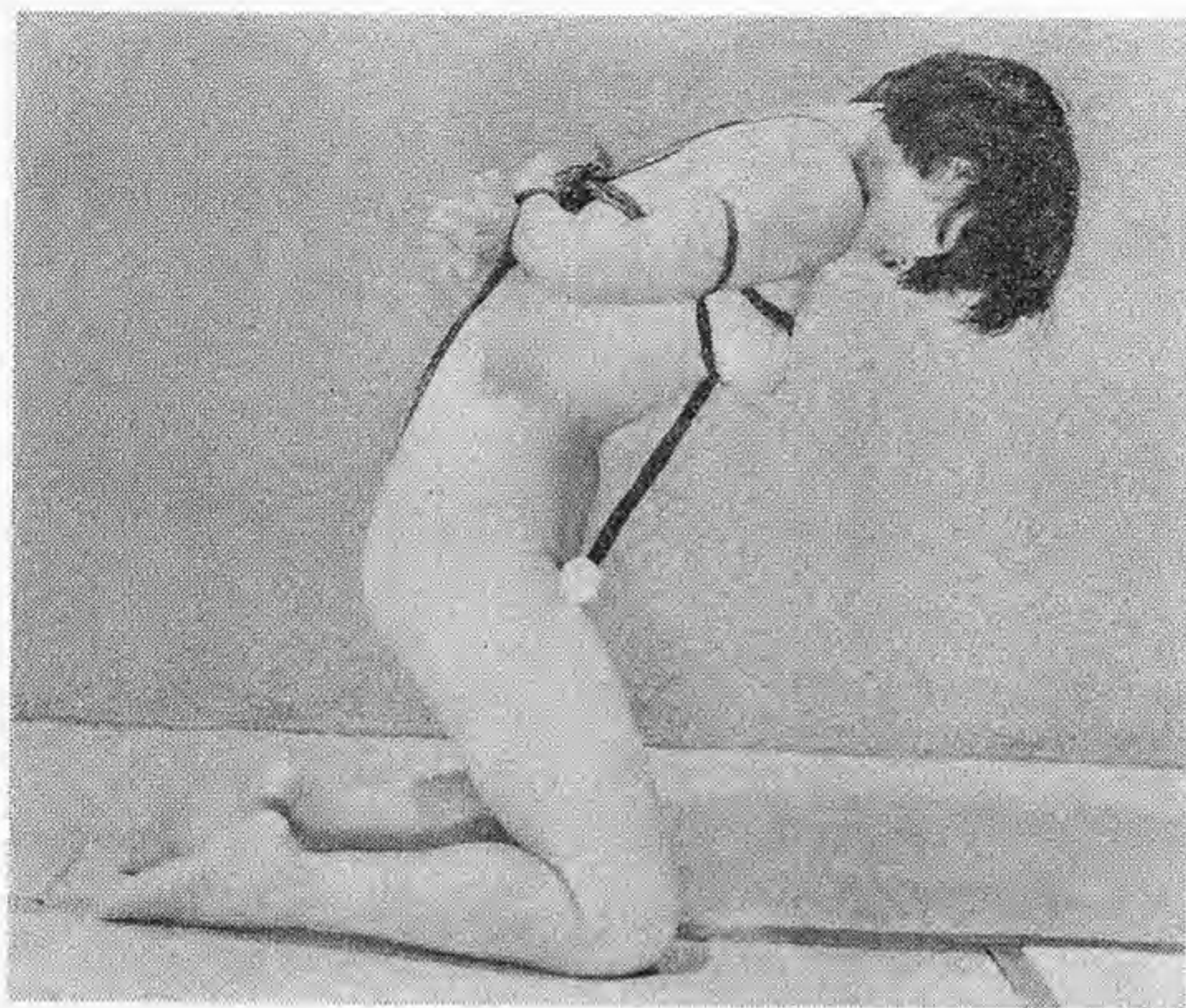
「フン——」

私は半信半疑で、パッとバスタオルを引き剥がした。

あッ、やっぱり——。

そこに、すべすべとした童女のようななめらかな肌を発見して、私は一瞬、ドキリとした。剃毛というプレイが流行し





て、童女のような白い肌という形容詞が、ぴったりするプレイの場面に、出くわすことが最近によくあるのだが、天然の無毛となれば

これは又、別の異常美があるものだ。

もっとも、私とて、今まで無毛の女性に逢ったことがないわけではない。完全にオール

ナッシングのものには確か二回、逢っている。

「ねえ、どうなの？ かまわないでしょ」

私が、棒立ちになって只、ぼんやりと眺めているばかりなので、心配げに田原美佐子は私に返答を催促した。

「かまわないどころか、これは大発見だよ。全くついてるナ、僕は無毛が大好きなんだ。それに、修整の手間がいらないしね」

私は猛然と嗜虐欲が湧いてくるのを全身で感じとった。

彼女が、自分のその部分にコンプレックスを感じて気持を、そこに集中している以上、私もまた

大いにそこに関心を持たざるを得なかった。そして、大いに関心を持った部分に対して、十二分の鑑賞を行ない、且、ぎりぎりいっばいのアップ撮影を行なうためには、先ず用意周到な緊縛をする必要があった。

この方は、すでに彼女のOKがとってあった。田原美佐子にしては八縛られるVということが、一体、何を意味するのか、わからない筈であったが、とにかく、一応、承知したということと素直に私を受けた。

最初、このようにして、何がなんだか、わからないままに、自分の身体が縛られ、そして、それを繰り返しているうち、縛られることが、責められることが、好きで好きで、たまらなくなった女性もいる。典型的なマゾ女性として、自ら告白を書いたひとの中に、こうしたケースがあることは興味深いところである。

後手高手小手に縛り上げた田原美佐子の裸身を、ああでもない、こうでもない、粘土細工のように、こねまわして私はシャッターを切っていった。

必ずしも、私好みのタイプではなかったが新しい被写体に対して女体の神秘をあばきたいという男性個有の強い興味が私をして大い



にハッスルさせた。

無毛の丘が果たしてどのような状態であるのか、それを仔細に記録するためには、フィルム膜面いっぱい拡大描写するのが最上策であるのは論を俟たない。その鮮鋭なるピントのネガを十数倍に引き伸ばしたときは、毛穴の一つ一つに至るまで絶対に逃がすことはない筈である。

完全なる無毛症の丘陵やその秘奥が、どのような環境にあるかということを、私は自分の目で確かめると共に、十数枚のネガに記録することが出来た。

田原美佐子は、消え入りたような激しい羞恥に身も世もあらず悶えに悶えぬいた果てそれが当然のように、自分のすべての秘密を握られた者に対して屈伏していった。

本来、マゾの性質があったのかどうか、その日以来、田原美佐子は、どんな極端な縛り方に対しても、強い羞恥心を示しながらも、なにか、そのなかに愉しさを見つけたしているような風情を見せはじめた。

縄なんて、なにも知らなかった女性が、じわじわと、次第に縄の味を知りはじめ、それが水がしみるように女体の各部へ波及してゆくのを冷徹な目で眺めているのは極めて面白

いものだ。彼女の望んでいたダンスホールやキャバレーへ一度も連れて行ってやる暇もなく、逢えばすぐさま緊縛プレイへと移行していったしまったし、田原美佐子もまた、生まれて初めて体験したSMプレイの方に体当たり的に惑溺していったのであった。

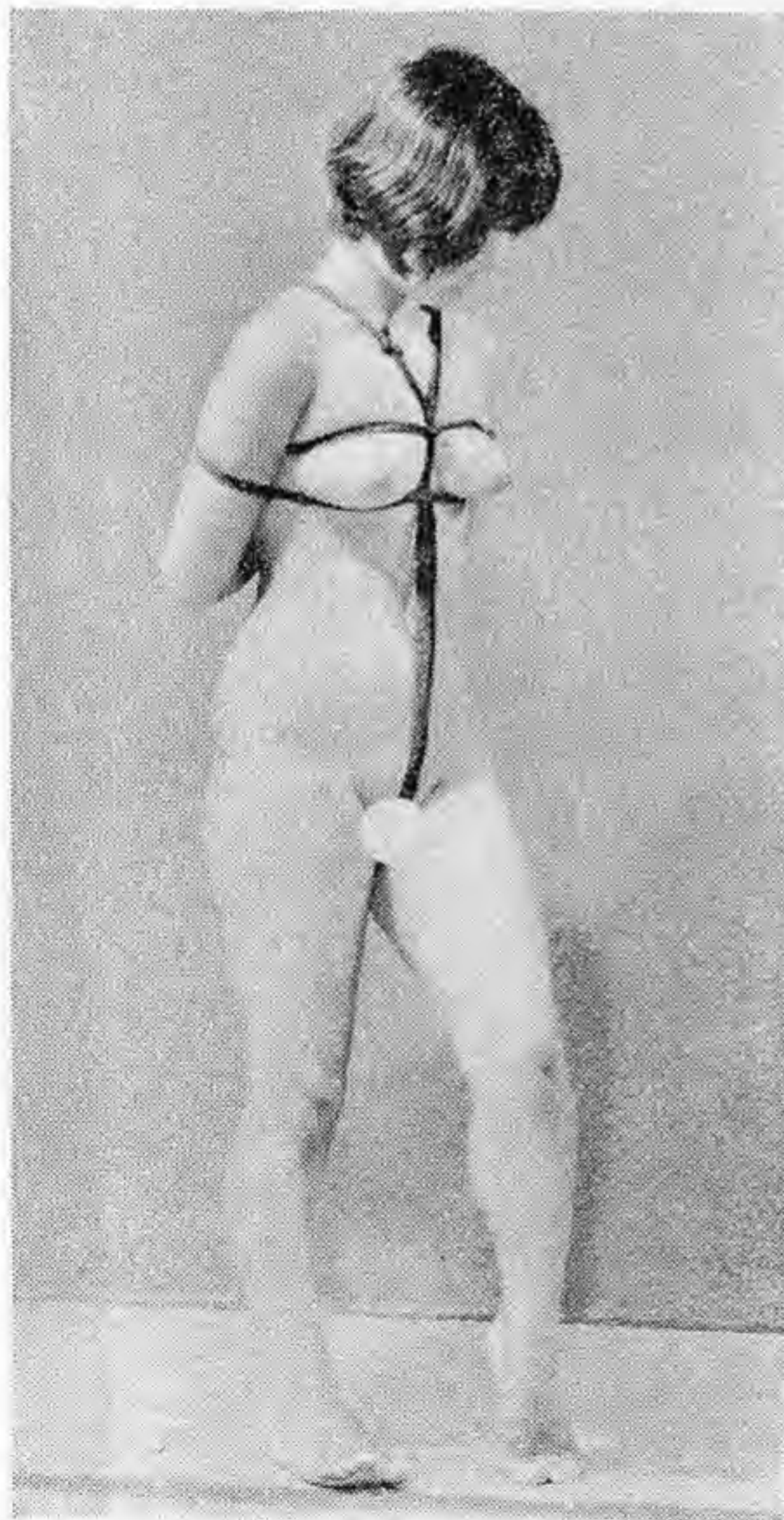
## 緊縛フオトの撮影を

見たいという女

(津川路子)

「こんな読者通信が来てるんだけど君、一つ当たってみてくれないか。ひょっとすると、緊縛写真が撮れるかもしれないよ。君だったら、彼女の希望を満たしてやる事が出来るだろうからナ」

奇ク編集長から、そう言われて一通の読者通信を見せられた。編集部宛や編集長宛に来るものを含めて、女性読者からの読者通信は相当な数になるらしい。その一部は「読者通信欄」や「奇クサロン」に載っていて我々の目に触れるが、いろんな都合で発表されな





い分も割合あるようだ。

そんな通信のなかで、住所が書いてなくて駅のホームで待ち合わせたい——というような通信があつて、私に行ってくれと頼まれたこともあつた。幸い、その駅は郊外電車の閑散な駅で、電車の乗降客が去ってしまうと、広いホームには誰一人残らないといった有様

だったので、指定されたベンチに、私は目指す女性を見つけだすことが出来て、悪戯や冷やかしてないことがわかり、ホッとしたことがあつた。

私の見せられた通信は、住所氏名もちゃんと書いてあつて、そこへ返事をほしいと言うのだから、あながち眉唾ものではなさそうで

ある。私は住所と名前を手帖に控えて、

「暇があつたら連絡してみますが、私も忙しいので余り期待しないで下さい」

と、答えておいたが、その手紙の内容が女性からのものとしては全く奇妙なのだ。

というのは、女性が縛られて写真撮影されているところを見たい。女性の緊縛写真というのは、一体どのようなようにして写されるのか、その場面を自分の目で見たい——なんとか、その便宜をはかって貰えないか、と、いう文面であつた。

それでいて、自分のことは何一つ、書いていないのである。只、奇クの愛読者で、大阪市内の会社に勤める女事務員、とあるだけである。

男性の読者からであつたら、そんな希望の人達が多いのは当然だが、女性の、しかも年の若いらしい（年齢は書いてなかったが、私は自分でそう考えていた）女性にしては、珍しかった。

私は、とにかく返事を書いた。

そうした機会は、ないこともないが、相手もいることだし、急に今すぐというわけにはいかない。貴女のこと、お聞きしたいので一度お逢いしたいが、よろしいか——という





手紙に対して、折返しOKの返事がきた。

会社の仕事が五時に終わるから六時頃だったら都合がよいとのことだったので、私は誰でも知っている著名な中華料理店を予約しておいた。畳の部屋もテーブルの部屋もあったが、いずれも個室なので、食事をしながら、ゆっくり話が出来ると思ったからだ。

約束の六時きっちり津川路子は来た。

年は十九か二十才か。高校を卒業して勤めにでて一、二年というところか。清楚なツーピース姿だが、変わりばえのしない月並的な女子事務員タイプである。

「津川路子です」

初対面の挨拶をする、はにかんだ様な彼女の顔を見ていると、この女が八女を縛って写真撮っているところを見たいVと希望しているのかと解せない気持ちであった。

だが、注文しておいた一品料理が運ばれてきてから、話を交してみると、たしかに、手紙を呉れた女性に間違いはなかった。話しながら、いろいろと水を向けてみたが、自分の性向のことについては何一つ、喋らない。

奇クを読んでいると、どうしても、女性の縛られて写真を撮られているところを見たくって、あんなお願いの手紙を出してしまった



のです——と、いうばかりであった。

私は持っていった数枚の緊縛写真をテーブルの上に並べて見せてやったが、彼女は恥かしいのか、関心がないのか、手にとろうともせず、チラッと視線をやっただけで、うつむいているばかりであった。

アワよくば、話の持ってゆきようによって

は、そんな他の女性の責められているところを眺めたりするより、貴女自身が緊縛モデルになってみてはどうです？——といった話を切り出してやろうという私の虫のよい考えも、どうやら進展しそうにもなかった。

それよりも、食事をすまして、私が勘定を支払ったあと、彼女の言った言葉には、私を



ドキリとさせた。

「いつも読者の方に、こんな御馳走をなさるのですか？」

別に大した御馳走というほどの事もなかったのだが、その中華料理店は結婚式場も兼ねていたから、ロビーなんかも広くて、まるで中国のお城のように豪華に見えたせいもあった。

たのだろう。質素な事務員風の彼女の身なりでは、いささか場違いの感もなきにしもあらずだった。

「貴女が若くって、きれいだからです」とでも返事すれば、小説の会話としては上出来なのだろうが、私は、なにか自分のよからぬ下心を彼女に事前に見破られたようでドギマギ

し、それには答えず、

「心当たりがありますから、日と場所がきまったら、また、お知らせします」

と、別なことを言っていた。

心当たりというのは、木村洋子のことだ。前々から、自分の責められているところを同性に見られたい。或は同性の手で責められてみたい——と、木村洋子が言っていたからだ。いつか、大塚啓子に木村洋子を責めさせたことがあったが二人とも大層それが気に入って、次も、こうした機会を持ちたいと言っていたからだ。

ただ、難点は木村洋子には、こちらから連絡出来ないことだ。局留で郵便を出したって受け取りに行くかどうかかわからないので、気長に、彼女から電話が掛かってくるのを待つしか、手はなかった。

とにかく、二人に対する連絡がつき、やっと、一緒に逢うことが出来たのは、津川路子の読者通信を私が見せられてから半年は優に過ぎていた。

折柄の夕立が車軸を流す豪雨となって、勤め帰りの通勤者やタクシーの右往左往する中を、やっとのこと二人を拾って、ホテルの一室へ落着いたのは午後八時、近かった。





家へは映画を見て帰ると言っているもので、十一時頃には帰らなければ——という津川路子なので、余り時間の余裕はない。

部屋の隅の光線の届かないところへ津川路子を坐らせておいて、私は木村洋子に対する責めと撮影を開始した。

一体、津川路子は、どのような女体責めの展開を期待していたのだろうか。彼女は私に対して何も喋らないのでわからなかった。

私は執拗に、そのことを問い訊すと「私にもわかりません」と答えるばかりだった。

第三者の若い女性が、じっと見つめている——と、思っただけで、責める側の私も、責められる木村洋子も大いにハッスルした。

殊更、羞恥の根源を五〇〇Wのフラッドランプの光源の中心に浮かび上がらせて必要以上の責めを加え、木村洋子も、そのドロドロとした女体責めの泥沼の中に、もだえにもだえ抜いて激しい働きの声を洩らした。

じっと、こうした光景を部屋の隅で息を殺して凝視している津川路子の方にも、私は気をとられていた。かすかな息づかいが、私の耳元に背後から伝わってくるようだった。

最初から、こんな淫らな羞恥責めを展開してしまつて、津川路子は、幻滅を感じてい



しないだろうか——と、そうした一抹の不安を感じないでもなかった。

台風一過のような、すさまじい木村洋子に対する女体の羞恥責めが終わってしまうと、三者、思い思いの心境を胸にしながら、私は先ず木村洋子を送って行った。彼女の指定する公園の脇の街灯の下で車をとめて別れた。

津川路子と二人きりになると、私は真ッ先に聞いてみた。

「どうだった、女の子が縛られて責められるところを見て——」

私は余りにも生々しい場面を見せつけてしまつて、津川路子が、ちょっとドギモを抜かれてしまったのではないかと心配した。もし





許されたら、彼女を緊縛モデルに——という下心があったから、ここで嫌われたり、熱をさまされたりしてしまっただけは元も子もなくなってしまうからだ。

「ええ、凄かったわ。私、あんなとは思わなかったの、もっと……」

そこで言葉を濁して口ごもってしまった。

もっと甘くて、ロマンチックなムードを期待していたのに、案外だった——というのか。

それとも、もっともっと、厳しく激しい責めを期待していたというのか。私が何度催促しても彼女は、はっきりした意志表示はしなかった。しかし、私は繰り返して執拗に口説いて、縛られた姿態を写真にすることを、やっ

とこのことで納得させた。ただ、羞かしいからハダカになるのだけはイヤ——と、言っていたが、私は快くその条件を受け入れた。

彼女の家近くまで送って行って別れようとした時、彼女は手帳の中の一枚を破って電話番号と名前を書いて私に渡して寄こした。

「私の勤め先の電話ですの。いつも電話の近くにありますから……」

街灯のない暗い路地を曲がってしまうまでヘッドライトをつけて彼女を見送ってUターンして中央環状線の広い道路へ入った。

それから都合三度、私は津川路子を縛って写真を撮る機会を持った。

緊縛写真といえば、全裸が多かったのに、津川路子に関しては、珍しく三度とも、着衣で緊縛したのだ。最初からの約束でもあったし、それに、私が裸にさせようとしたら、彼女が極端に恥かしがったこともあった。下半身を覆う赤い腰巻やパンティを私が剥ぎとろうとしたら泣くような悲鳴を挙げて拒んだ。

縛られることについては、着衣である限り別に嫌がる風もなかったが、彼女が何故、同性の縛られた姿態を見たかったのか、わからずじまいだった。あれ以来、そうした場面を見たいと言わなかったのも謎の一つである。



# 奇譚クラブ

私の感想記

那 津 子 慕 情

長 田 二 郎

奇譚クラブ8月号に、城氏が久しぶりに「那津子緊縛撮影行」を發表されているのを見て雀躍。早速にも感想を述べたかったのであるが、私の拙い感想文などでは却って城氏に対して失礼に当たるとうに思い、文才ある方々のご投稿を期待していたのである。

しかし、9月号にも、また10月号にも見当たらないではないか。

あれほどの「名ルポ」に……と思う気持ちと同時に、待ちきれない気持ちに追いたたられ、拙文を承知で、この小文を投ずる次第なのである。城氏よ、許されよ！

題して「雛祭の夜」……想像するだに、ロマンチックな夢を誘ってくれるタイトルではある。

胸おどらせながら読みすすんで行くと、果たして『奥の細道』を詩い「旅のいざない」をひいていくくれる。私には、こたえられない詩文の味付けなのである。とくに、83頁から85頁にかけての文章

は私を魅了し、何度、繰りかえして読んでも飽きない。

SM雑誌であるから、当然、SMベッタリの文章が多いのはよく分かるし、不思議でもない。しかし、こういう詩文の挿入によって緊縛記にロマンチックなイメージとか、一種の風格とかいったものを与えることは、決して無意味なことではないと思う。私が、城氏の緊縛記に魅せられ、好きでたまらないという気持ちにさせられるのは、ここにも一因するのだ。

もちろん、緊縛そのものの魅力は、いうまでもないが……。

白く、ぬめやかな女体の上に、城氏が飽くことなく追及する三重菱縄の造形美。城氏の緊縛記發表が回を重ねる毎に、その菱縄による造形美は、益々素晴らしいものとなってきた。

写真1、2、そして側面を撮影した写真3に、その造形美は、私の心しびれるばかりに表現されて

いる。膝から太腿そして腰に及ぶムッチリとしまった、肢体の美しさ。そして太腿のつけ根にしっかりと巻きつかれた黒縄。尻の丘を斜に横切る黒線。ウエストを巡る菱形につながる線と丁度、正五角形を形成して、素晴らしいアクセントとなっている。

太腿のつけ根に巻きつけられる黒縄は、城氏の緊縛美における特長であるが、画面全体のポイントとなっており、緊迫したムードを醸成するのである。写真11で、大きくクローズ・アップされたこの太腿のつけ根の黒縄が、もし、ない場合を想像したならば、如何にこの黒縄の効果が大きいか判るといふものだ。更に白紙にかくされて、画面からは窺えないが、その下の、桃源のうめきが聞こえる様である。

写真9も素晴らしい。城氏が本文に書かれたように、「股ながにしろと寝し」た姿態は、写真4、5にも表現されているが、写真9は、それに更に動感が加わっているからである。

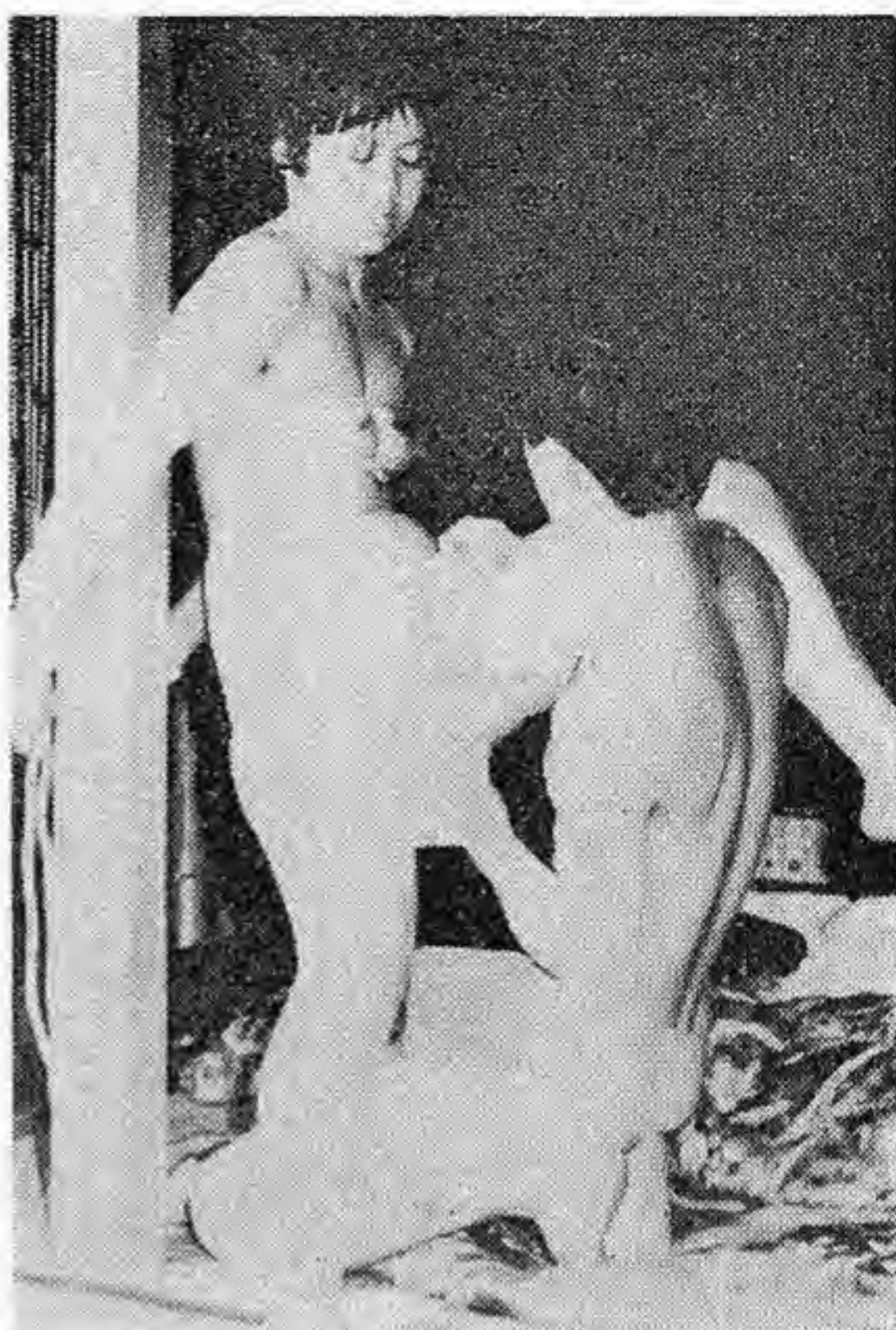
城氏の那津子緊縛フォトの發表

は、従来、辻村、塚本両氏のフォトに比較して、数の少ない嫌いがあったといえるが、今回は、大量に惜しげもなく、愛する那津子の緊縛ヌードを發表された。

11枚のフォトを眺め終わって感ずることは、白紙貼りのフォトである。11枚中、実に9枚が白紙貼りとなっている。写真3と9とがやっと白紙貼りのムードこわしをまぬがれている。確かにヘアー禁止の我が国の法令は腹立たしいものがある。しかし、その限界の中で、如何にして緊縛ムードの醸成されたフォトを作成するかも検討して欲しい。緊縛フォト・ファンが、記録として保管する場合、白紙貼りは、鑑賞よりもさきに、痛々しさが先走る。グラビアのように、あるいは塚本氏のルポ「私の縛った思い出のM女たち」にある一五四、一五五頁の梨花悠紀子さんのフォトのように、むしろカッとし、クローズ・アップにより肌と縄とのかもし出す雰囲気大きく表現した方が素晴らしいのではない。

那津子の緊縛フォトを眺めることによって醸される私のSM情念のカタルシスが、こういった駄文を書かせてしまったのである。





## ある夫婦プレイ実践者の願い

鈴 鹿 山 賊

梅川幸子様の告白文を読みまして早速ペンを執った次第です。私は二十八才になるサド傾向の男性で、ある銀行の電算室に勤務している者です。

私は夫婦プレイ実践者で、妻はゴムフェチです。けれども私はむしろ、AやVを責めるのが好きです。ですから、余りゴムマントとかは出来ませんけれど浣腸をしてゴムのオムツ位ならプレイ出来る

と思っています。

夫婦プレイと言いましても、ただかけ出しですから、それほど上手に出来ませんが、あなたが泣いて喜ぶ事は出来ると自負しています。先ずその方法を述べますと、最初に千CCのイルリガートルで浣腸をし、腸内を全部空にしてからウインナーをあなたのAに押し入れて（入るだけ）排泄欲が出てきたところでグリセリンを百

CC浣腸し、そして小型のバイブをVに入れます。そしてAとVをローを落として固定します。そしてゴムパンティをはかせて開脚縛りにして、あなたをオシヤブリの刑に処します。

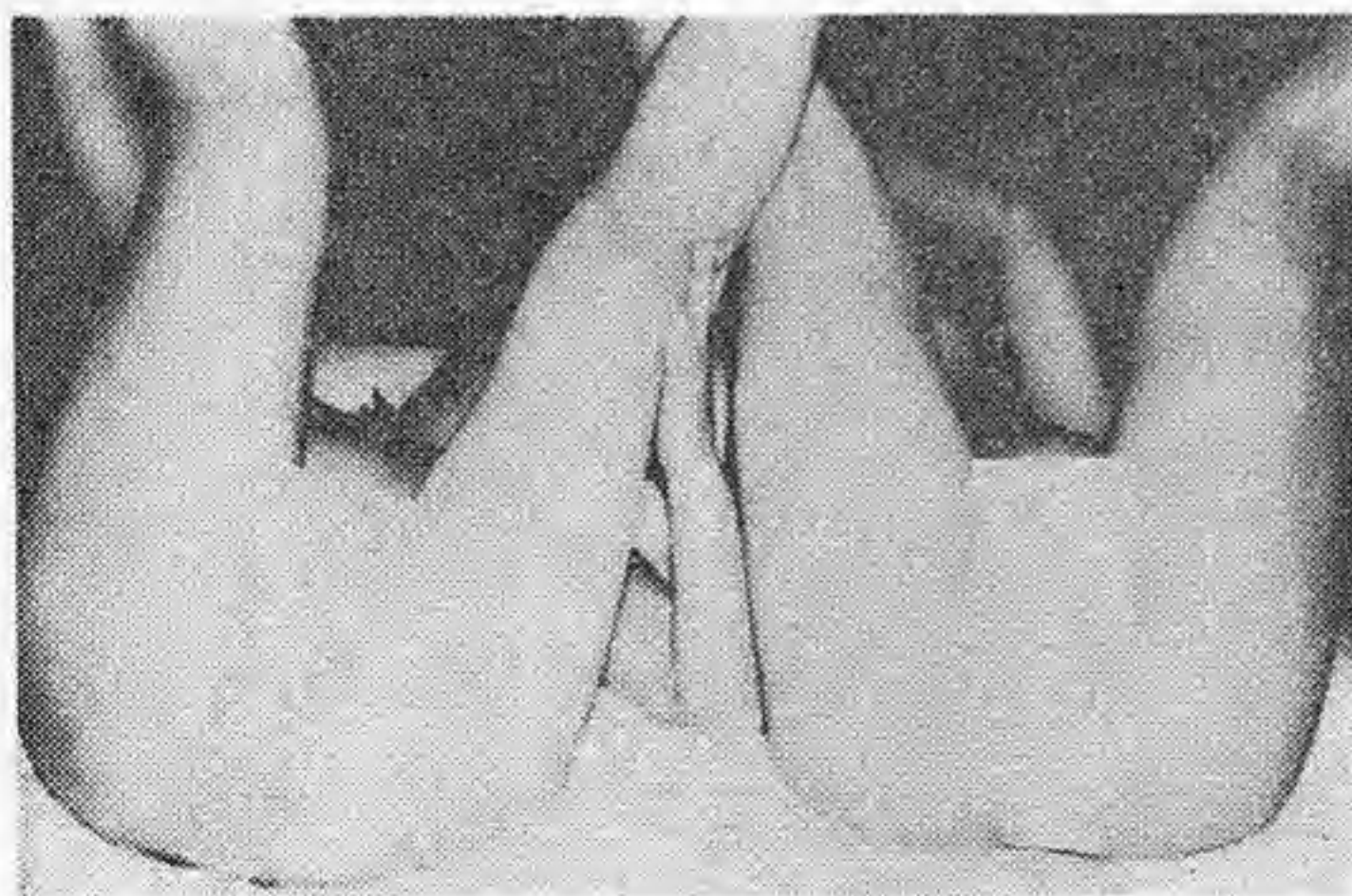
妻に一度、右の責め方をためしに見ましたが、ものの三分もたたないのに、ダウンしてしまいました。あなたはどうか。良かったら妻と、一度、競演してみ

ては？  
同封の写真は妻と私のプレイをセルフタイマーでとったものです。二人の女性のチン列競演は私がバスの中で知り合った女の子をハントした女性でもう一人は妻です。ちょっと引き伸ばしの技術が下手なのでコントラストがおかしいかもしれませんが。

それから我こそはと思われるM女性あるいは夫婦プレイ実践者の皆さま、私達夫婦とプレイしてみませんか。私は中年の小柄な女性が最も好きです。けれど、結婚の相手としては自分より余り年上の女性では社会的にみてもおかしいですし、生活の面でも不自然ですので自分より若い女性

（現在の妻）と、結婚したわけ

です。  
そんなわけで、私は自分よりは年上で中年の小柄な女性とプレイしたくてなりません。梅川幸子様そんな理由で貴女と文通なりプレイ（ダブルプレイ）をしたいのです。妻もその点、承知しておりますので、若し私の希望にそうような方がおられましたら、よろしくお願ひします。





## 『夫婦交換プレイ』の提唱—toに寄せて

西原

浩

早坂信治様—to。

十月号の告白「夫婦交換プレイに魅せられた私達の場合」見ました。夫婦プレイは私もろ手を挙げて賛成です。大いにやりましょう。私はまだプレイを同好のファンの方に告白しておりませんが貴方と同様、相当エスカレートして夫婦プレイを楽しんでおります。マンネリというものは必ずつき当たるものですが、このマンネリをつき破るための努力もまた楽しくプラスになるものです。早坂様現在はまだポルノ時代です。お教えの変質的という名詞は忘れましょう。お互いの了解と理解によるプレイには変質的という言葉は、私に関する限り存在しません。

お子様がおられない御日常、お淋しいことでしょう。文面に明記の、駆け落ち同然の長い同棲生活……の由、私にもよく傷口が痛む程よくわかります。でも御兩人様の固いお心が結ばれたことは、私にとっても胸中熱くなる程うれしくてなりません。好いた者同志が結ばれない、不運の私より貴方の

方をうらやましく思います。記念のプレイ旅行、とってもよいプランをおたてになり、さぞ良き新婚旅行でしたでしょう。

飼育はあらゆる話かけ、写真と本誌がよりよきリーダーとなり理解力を深めてくれました。最近では、こうすればもっとよいなどという様にさえなりました。バナナ切り、玉子とばし、習字、シガレットプレイ、私の考えだした責めは女をよろこび泣かせるプレイを資料として保存しております。とにかく、SMの外出に下着は不用です。皮製レザー製のパンティ穴明きは、いかがですか。それも鎖をあしらったもの、或は鈴入り挿入器具を着装させたプレイは宜しいかと愚考します。油性絵具による刺青プレイはまだ始めてです。夫婦プレイの行きつく所は、やはりSM夫婦の交換プレイ又は三人グループのプレイは新鮮な羞恥心の魅力があるので、わくわくとした、プレイの展開が望まれました。早坂様の考案になる刺青をした女やくざのムード、肉体を責め



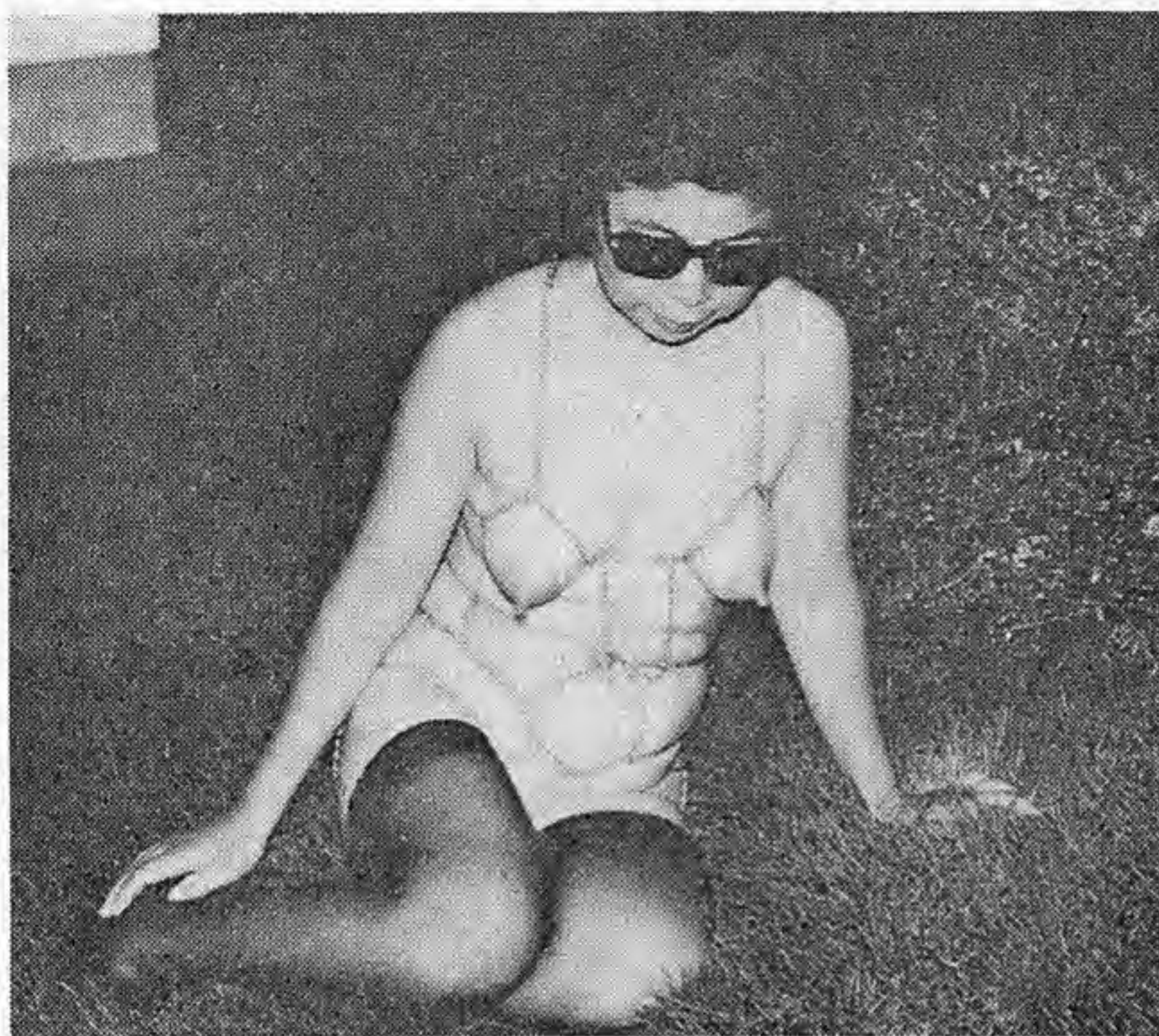
『アナタァ、まだなの』——小川茂正——

たままの、それぞれの出先へと進ませるプレイは想像しただけでも悦虐の極だと思えます。又、剃毛の点につきましても、M女性に対してなくてはならない責め手段であって、たまらない快感と羞恥心を誘発させるものと思えます。

抜毛についても被虐者自身の、抜かれる、これから抜かれる、抜

かれた、抜き終わったという一本の感覚は、もう私は、どこをどうされても——という、ピクピクと私達は申ししておりますが、とにかくすばらしい自己陶醉の責めプレイといっても過言ではありません。大の字の剃毛、抜毛の体位は、これが一番よい様に思われますが、他の変形体位もやりたいも





愛妻、和歌子との「夫婦プレイ」の一場面

紀 川 正 信



のです。現在、どの程度、奥様への抜毛が進んでいるのか、お伺いしたいものです。

交換プレイと二人では出来ないプレイを三人、又は複数プレイに

求める事は、まだまだ未開拓の分野ですが、早坂様はじめ渡部光雄好美ご夫妻のようにSMに総べてを賭けて、その願望をまさぐり見届けておられるベテランの御発言

を期待します。好美夫人の勇氣には只々敬意を表したく、十月号に拙文を呈しましたが、ぜひ一度お呼びかけ下さい。

私の知る範囲でも、まだまだ同

好者の中で本誌上に発表されない方々が沢山ありますが、それらの人達の為にも、よき資料やデータをお持ちの方は、誌上に発表して下さいを望んでおります。



△山形の最上卓也氏へ△  
 羞恥責め、雑感

神奈川 喜 怒 写 楽

「奇クサロン」に御投稿の記事と写真を毎回、興味深く読ませていただいております。私も貴殿と同様にOLとSMプレイを楽しんでいる男です。

毎度の事ながら軽い抵抗を楽しみつつ、一枚一枚、衣類を剥いで行く時が、最も幸福感に酔うひとときです。だから、いきなり全裸からプレイに入る事は全くありません。上衣を脱がした所で、両手

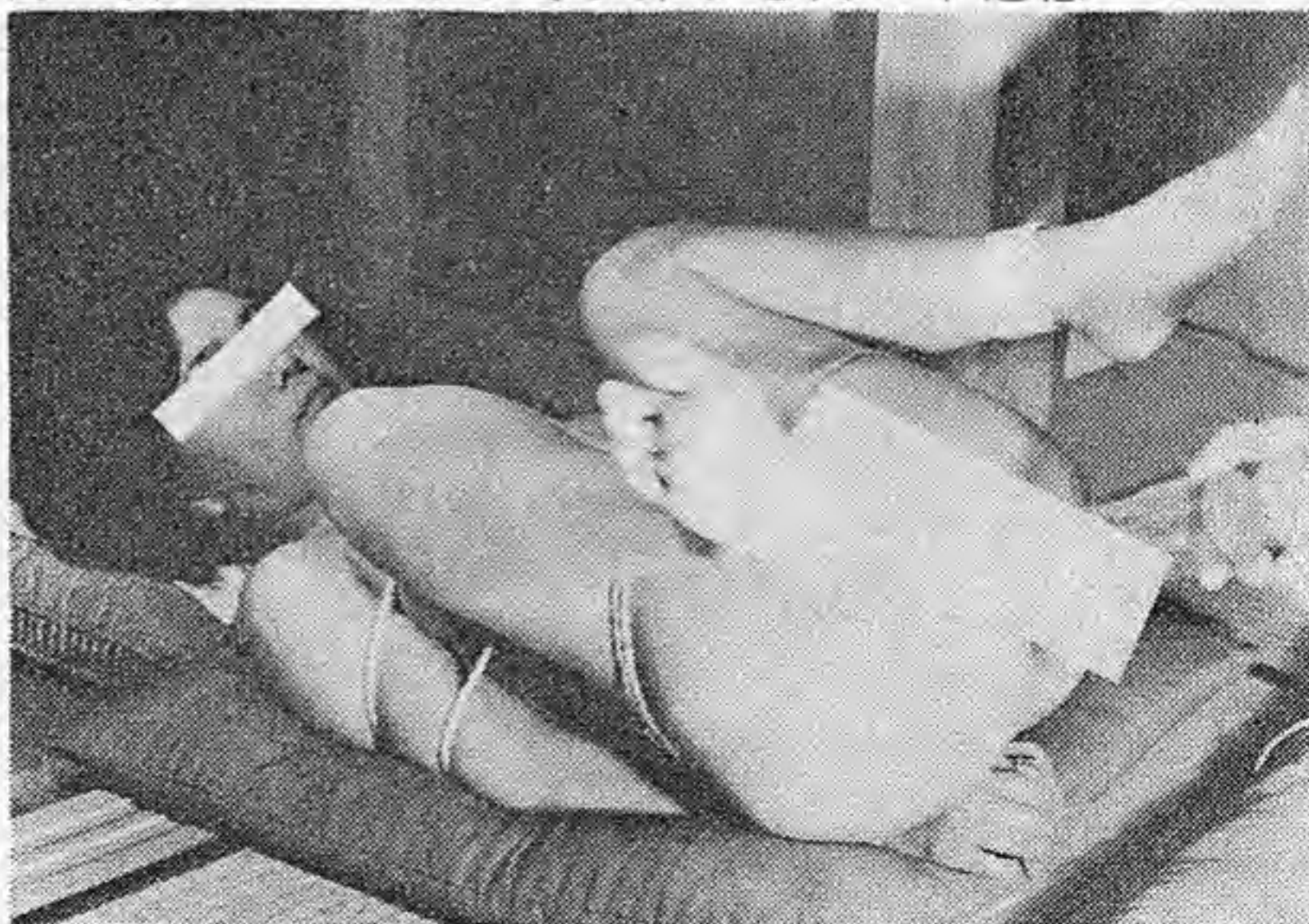
首を縛りあげ、頭上高く伸ばして鴨居に縄尻を固定し、女体を一直線に起立させてから、ゆっくりとミニスカートのチャックに指をかけます。

不安と期待が複雑に交錯する女体は、かすかな戦きを全身に表わします。とたんに私のS心が、むくむくと湧き上がってきます。スカートを乱暴に剥ぎとりスリッパの肩紐をちぎりますと、女の顔に

赤味がさしてきます。ブラジャーを除くと、魅惑的な曲線を描いて乳房が飛び出します。

ここで私は必ず一息入れます。即ち数歩退いて、どっかと腰を下ろし、ゆっくりとパンティ一枚の女体を観賞するのです。何も手を加えず凝つと見つめられる事は女にとって非常に羞恥を招くものらしいです。例外なく身体を、くねくねとよじって羞恥に肌が赤くなります。そして露骨な言葉で胸や腰の批判を加えますと、ますます消え入りたげな羞恥を示しますが、その姿がまことに愛らしく、思わず抱きしめたい衝動にかられるのを次の行動で打ち消します。

最後のパンティに手をかけますと悩まし気な嘆息を洩らして女体が、ゆるやかに振じれるのです。ピタリと合わせた太腿から香気を漂わせながら、かすかに震えている若草に指をからませて思いき



り引き寄せますと「うッ」という呻きと共に、ぐっと弓なりに腰をつき出して、急に胸の隆起が忙し気に波打ってきます。

眼を閉じて心持ち開いた唇から白い歯がのぞいて悶える表情を下から見上げながら、左手を臀部に回し引き寄せておいて、素早く右



手を……。声にならずに声を発しながら  
ら臉がピクピク痙攣します。

「満更でもなさそうだな」と残酷  
な言葉の追い打ちをかける。「イ  
イ……ヤ……」と後は悦虐の呻き  
に変わってゆきます。

遂に激情を抑え切れなくなった  
私は、左足首をつかむと縄を巻き  
つけ、その縄尻を鴨居にかけてジ  
リジリと吊り上げにかかります。

空しいとは知りながら腿を離す  
まいと必死に耐える女の哀れな姿  
は、私のS性にますます拍車をか  
けます。やがて力尽き、ぐったり

## || まりこのマゾうた || 北川 まりこ ||

日頃のまりこの夢を綴ってみ  
ました。お笑覧下さいませ。

○  
ま(魔)の手に陥ちて幾月ぞ  
り(凌)辱に明け蹂躪に暮れ  
この身にとりしマゾの火に  
に(逃)げよう気持も薄れゆき  
は(羞)かしさにこそ肌身燃え  
ずり落としたる湯文字の上で  
か(観)客からの注文どおりに  
し(強)いられた芸に溺れこみ  
いたぶりの手を待ちうける  
お(墮)ち込み入りし性地獄

と全身の力が抜けた時、女の足は  
高々と吊り上げられ、隠すすべを  
失った女の命が、羞かしげに花を  
開いていきます。それを見つめる私  
の瞳は、ギラギラと妖しく輝いて  
いることでしょう。女は頭を垂れ  
て次にくる責めに期待と不安を抱  
いているに違いありません。それ  
が証拠に静脈の浮いた白い太腿が  
かすかに痙攣しています。

以上が、私のプレイに於けるフ  
ァーストシーンです。そして矢つ  
ぎ早やかな攻撃の手が、次々と展開  
されてゆくのです。併し、どちら

も(悶)え狂いし徹夜の責めに

い(生)きる悦び感じとり

を(男)の手荒き扱いを

ささやき声でネダリつつ

せつなく燃える裸身をさらす

て(手)足の縄目をきしませて

「↓まりこに羞しい思いをさせて

○

わすれられない あの夜のことが

たった一人で 訪ねた部屋で

くるしく悶えた ホテルの一夜

しらぬ男に 縛られて……。

はじめて会った 義理あるヒトに

かといひますと私はこのファース  
トシーンが最も好きです。新鮮で  
あり、心の準備の整わぬままに受  
ける羞恥心は又格別だからです。

掲載の写真は、いよいよ責めに  
入る時の写真ですが、全体にフラ  
ットなものは好まず、多少陰影の  
ある方がよいと思っています。そ  
の時々女性の責められる心理を  
暗示出来ないものかと、常に照明  
に苦心しています。従ってストロ  
ボは、あまり使用しません。最上  
氏の写真は、どちらかといえば陽  
であり、私の写真は陰である。

氏は今、マンネリだと言う。併  
し撮影に一工夫すれば、別の新鮮  
さを発見出来るのではないだろう  
か。又、プレイのプロセスにして  
も、モテルの部屋に入る前の車の中  
でプロローグを作るのも気分が  
変わって面白いし、ゆっくり入浴  
してから、相手の焦れるのを待つ  
のも別の世界があつて、興味のあ  
るものとなるでしょう。

私達のフォトが新しい刺激を呼  
ぶなら喜んで寄贈致しますよう。  
又、お互いに意志が合えば、合同  
プレイも新鮮かも知れません。

こいのウラミと 察したときは

はや剥がれ居し 我が衣類

めったやたらに 押し拉がれて

すはだをこする 荒縄いたく

いつの間にやら うしろ手縛り

ぬがされた下着で さるぐつわ

いつになつても 許してくれず

じつと噛みしむ 縄の味

めかくしされて そろそろと

てのひら感じ マゾの火燃ゆる

くだもの遊びや たまご割り

だまってはげむ 我が日常を

さりとては気付かぬ? 復讐男

いいからウンと お責めなさい

「↓まりこは牝犬虐めて下さい



## S M 妄想記

はじめ

つき月

しも霜



金丸優二画

奇ク十月号を読んで驚いたことは、流腸願望者からの投稿が目立って多いということである。この傾向は、八奇クサロンVで平山連流氏も述べておられるように、他の雑誌の場合でも同じである。極言すれば、もはや流腸の出て来ない小説は読む価値もない——と断定してもよい凄まじさである。

塚本鉄三氏のカメラ・ルポ「東京の踊子流腸記」に於いても、私の大好きな鈴木千鶴子嬢が、さっそく流腸されて強烈なフォトが発表されている。四つ這いの姿勢で嘴管を挿入された数葉は、塚本氏に限りない嫉妬を感じると共に、白ヌキの部分想着、思わず発

散してしまった。

おそらく、私を含めて千鶴子ファンは感激したに相違ない。惜しむらくは無修整で発表できないことで、日頃、彼女を勵めてみたいと思っている私の気持ちを、もはやと歪ませ欲求不満に陥れた罪は奈辺にあるのか？

また、グラビアの美女、前田真知子嬢の鮮烈な流腸フォト及び剃毛股間縛り、排尿、強制排泄フォト等を奇クに載せられるよう編集部に冀う次第である。

流腸——人に排泄を強要する行為。一般の女性にとって、これ以上の羞恥はなからう。他人（それが肉親であっても）に排泄行為を

見られることは、江戸時代の蹴転女郎でも嫌がった。とくに、この羞じらいは日本女性に強いよう排泄を見られる位なら身体を許した方が、まだ救われるという道徳観念がある。現代の若い女性も、フリーセックスや稚な妻、ヌードモデルには簡単に割り切ってやれども、衆人環視の中で排泄をして見せろと言われて、「はい、わかりました」と引き受けるわけにはいかないだろう。

ましてや、古風な家庭に育ったお淑かな女性ともなれば、一番愛する夫にさえ、ヴァギナを見せても、アヌスは死んでも見せないだろう。

また下着蒐集狂の集める下着も新しいものより、使用後の汚れたものを欲しがるのはその大半が下着に付着した薄黄色の尿のシミやあるいは、こびりついた褐色の排泄物の匂いを嗅ぎたいからで、体液そのものに夢中になるフェチストは意外に少ないものだ。

考えようによつては、女性の排泄物ほど、男を昂ぶらせるものはないといつてよい。これは、あんな美人が、こんなものを排泄するののかといった特殊な神秘感と間接的にではあるが、下着の持主を凌

辱したような征服感、持主の秘密を知ったという異様な満足感と快楽……。それらが重なり合つて欲情を興奮させるのである。

事実、この私自身も、その経験があり、八月号に木元無人のペンネームで発表した『女性の下着に狂う』という告白文を読んでもらえば、この甘美な世界の素晴らしさが、わかつていただけたと思う。話が少し横道にそれたが、このように美しい女性の排泄物は、魅惑的なのである。

柴田錬三郎『眠狂四郎殺法帖』の中に、こんな話がある。錢屋五兵衛という金沢の豪商が平家部落の高貴な姫君を邸宅に囲った。しかし、五兵衛は、その類まれな、天女のような美貌の姫に手を出そうとはせず、こっそり厠の隣の部屋に覗き穴を設けて姫君の排泄行為を眺めて楽しむ。

当時の封建制において高貴な家柄の姫君の秘められた排泄行為を観賞するということは単に姫君の体を抱くよりも強い確かな凌辱感があったものではあるまいか。

もう一篇。奇想天外な忍者小説を書く山田風太郎の初期の作品である。

吉原の花魁に惚れた数人の男が





花魁の排泄物を食べたいと熱望する。そのうちの一人が思案した挙句、死ぬ覚悟で多量の胡椒を胃に詰め込んで助けを求めた。医師は胃の胡椒を吐き出させなければ助からないと言う。てっとり早い方

法は人間の排泄物を食べさせればいいと言うので、男は、それなら惚れた花魁のものをと懇願する。情に負けた花魁は男の望む通りに、排泄物を食べさせてやるのである。M派にとってはなんとも羨

ましい限りではないか。度々記しているように、浣腸するにしても相手の女性が絶世の美女でなければ何の意味もない。その辺の安酒場あたりの器量の悪いホステスが、便秘で苦しいから浣

## 千恵のハダカを見て下さい

小杉 千恵

奇クに投書する女性が多いと聞きますが、女性の大半は、口ではイヤと申しながら、心の奥底や体の隅では、燃えあがる全裸に対する自己愛と、興奮を秘めていると思います。

過去に於いては中河恵子さん、現在に於いては佐野みさ子さんの様に人前に全裸を晒してナルシズムに酔おうとする勇敢なM女性も少なくはないだろうと思いますが、殆どの愛読者は、ひっそりと隠れて夢見ているのではないのでしょうか。千恵の写真を同封します。掲載して下さいませんか。

まいません。でも最近、浣腸の回数が多すぎて、少しやせがめだっていますから役に立たないかも知れません。

東京の佐野みさ子さんには、いつも御活躍を羨ましく思っております。関西に在住します千恵としましては、みさ子さんに負けないように、羞恥のルツボのなかで思いきり悶えぬきたいと考えております。こんな私でもよければ、千恵のハダカのすべてを奇クの皆さまの前にさらけだして、御覧いただきたいと思っておりますので、いかがでしょうか。

腸してよ、と頼んできても、こっちは、一向に楽しくもない。淑かで清楚な風情、水着姿になるのも羞じらうような美女こそ、浣腸願望者としては歓迎すべき相手なのである。例えるならば『花と蛇』の静子夫人。実在するのであれば私のあらん限りの知恵を絞って、浣腸責めをしてみたい、存在である。

辻村隆氏よ、塚本鉄三氏よ。あなた方が羨ましい。鈴木千鶴子や梨花悠紀子、前田真知子のような若くて美しい女性を好きなように縛り、浣腸できるからだ。できうるなら、そのルポ現場を一度でよいから拝見したいものである。

前田真知子嬢が下着を剥ぎとられ、四つ這いにされて可愛い菊蕾に嘴管を挿入されたとき、いたい、どのような表情をするだろうか。便意を堪える悶えを、この両眼で確かめてみたい。

さらに海老縛りで四肢の自由を奪い、四〇〇CCものグリセリンを注ぎ込まれて、私たちの視界の中で、ついに強制された排泄をするポーズを想像すると、胸が高鳴ってくるほどだ。



△告 白▽

# みさ子の『浣腸、器具、避妊』

佐 野 みさ子

(一) ……浣腸……

みさ子はSMプレイに出かける前に、自分で必ず浣腸をして、サッパリとしてから出かけます。私は便秘症で、下剤を常日頃から飲んでおりますが、それでも、なお

浣腸をしてから男の人と会いますのは、SMプレイの最中に、お腹がゴロゴロ鳴ったりしては、せっかくの楽しいプレイがシラケちゃうからです。それと、もう一つ、みさ子が浣腸を好んでいるからでしょう。だから、SMプレイのなかでも、遠慮なく、みさ子に対して、浣腸を施して下さいませぬ。

(二) ……器具……

つい最近まで、みさ子はスポンジのこけしを愛用しておりましたが、この頃では『やわらかすぎてダメ』なので、現在は、もっと硬度のあるプラスチックの製品を専ら使用しております。

サボテン形でイボイボのあるもの

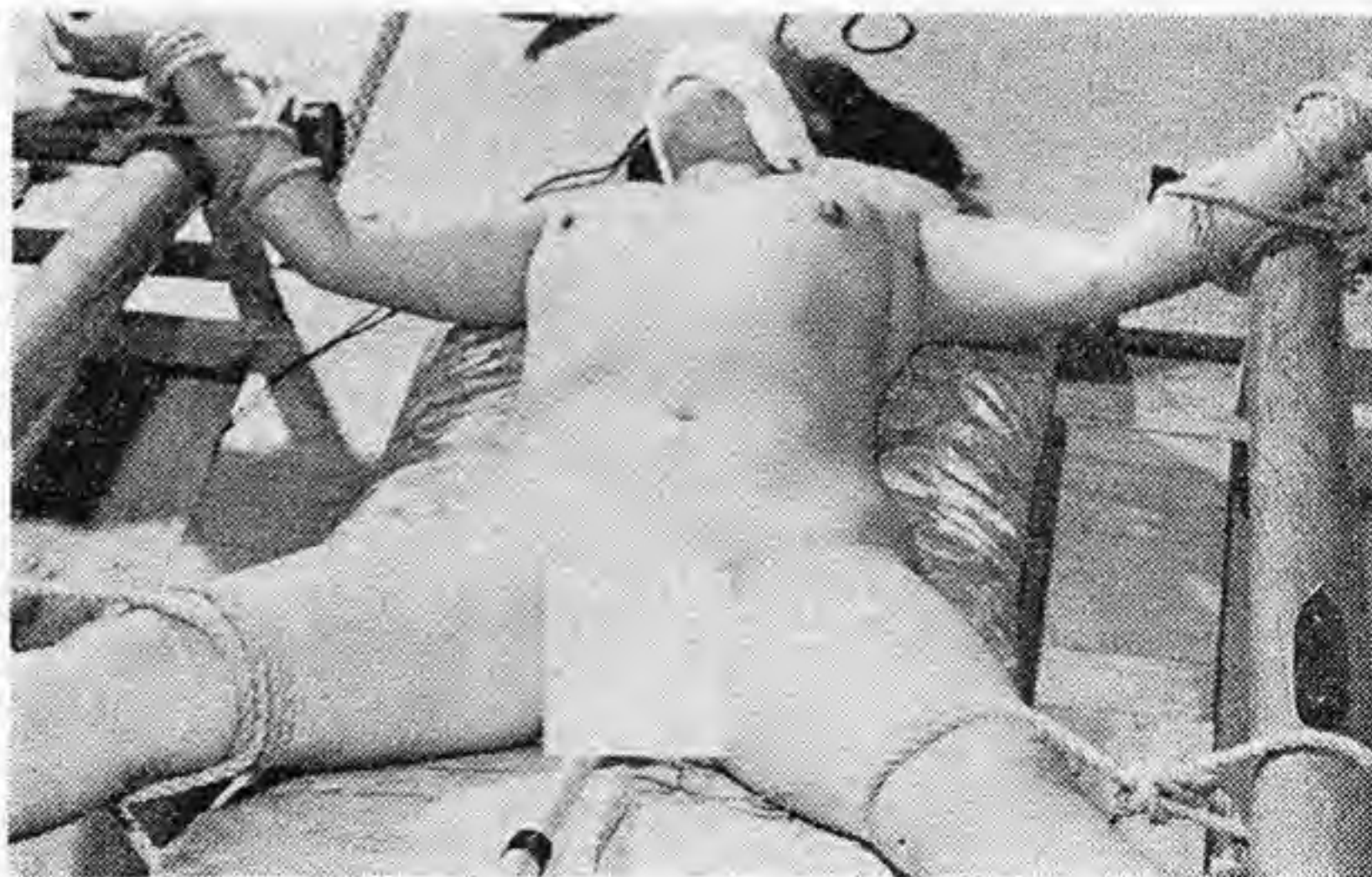
空気を入れるとピクピク動くコケシ形などで、いずれも、普通一般の男性が見れば、思わず劣等感におそわれるような立派なものばかりです。

こんな小道具ではなくて本物の男性の責め道具で、みさ子を思いきり泣かせて下さるような、遅くも見事な方って、いらっしゃらないものでしょうか。みさ子の前に、そうした素晴らしいS男性が、出現して下さいることを、心から願っております。

(三) ……避妊……

SMプレイには、セックスはつきものだと思うのです。ですが、SMプレイを楽しむたびに、子供が出来ては育てるのに大変で、楽しむどころではなくなります。

それですから、みさ子もSMプレイを心ゆくまで楽しむ為に、主に現在はコンドームを使用しておりますが、でも、生理の数日前でしたら、使っておりません。みさ子はSMプレイをやるとき



は肉体の奥底まで、徹底して楽しむことにしておりますので、どちらかといえば、避妊具はない方が好きです。立派な御自慢の男性自身をお持ちの方、一度みさ子と、セックスプレイの手合わせをしてみられませんか。



## M妻に想う

広島一騎

夕食の用意がおくれし罰だとして  
すべやかなる背に手首組む妻

緊縛の快味を覚えしやわハダの  
口実設けのいとしくもいじらし

あご埋めし胸に噛みこむ細紐を  
見詰めいるなり息はずませつ

ひしひしと締まる縄目強ければ  
なおさら燃ゆる牝ハダの不思議さ

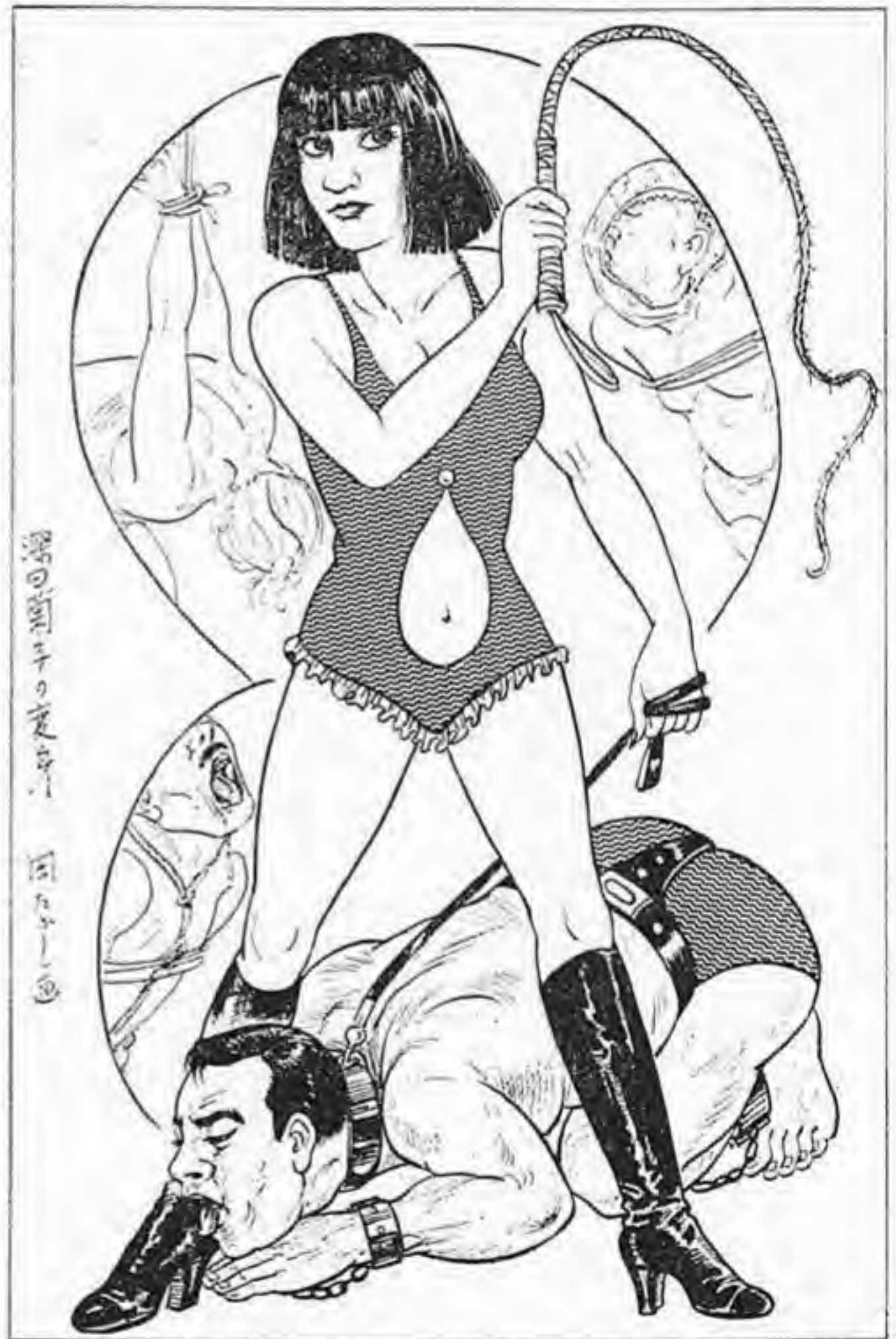
喘ぎつつ後ろ手裸身くねらせる  
白い牝豹にふと想うときあり

縄恋うるオンナ目指して数カ月  
馴致にはげみし故のみなりや?

縄受けばヒト替りたる思いする  
あらわな牝獣の狂える痴態は

わが望み叶いし事にあるなれど  
そのはげしさにタジタジとなる

驚きと不安と怖えのいろ浮かべ  
われを見上げし頃ぞなつかし



深田菊子の変身

岡たかし

## 深田菊子の変身

岡たかし

私は深田菊子嬢を誌上で拝見するだけで、その実態は知らない。フォトや塚本氏のルポ記事などで判断する限りでは素晴らしい女性だと思ふ。

今は自己陶醉のみの被虐の愉悅に酔っているが、年月と共にその

嗜好も変わり、美男奴隷を迫害する事に興味を持つようになるのではないかと思ふ。

美しい断髪が眉毛の付根まで垂れて、黒耀石のように妖しく光る眸が、きわめて印象的だ。睨まれると、畏敬と恐懼に身がすくむ思

いがする。

蠱惑的な魅力と吸引力がある大柄で均整のとれた肢体は、きわめて柔軟で若々しく、精気に満ちて発刺としている。腰から腿、足指の先に至るまで美しい曲線を描いている女体はまさに、垂涎のものだ。

じっと凝視していると統のような餅肌が惱ましく迫ってくる。くびれた足首、まるくすべすべした踵。可愛い足指の先に宝石のような爪がキラキラと輝いている。変化する指の表情が、私の胸をかきむしる。

こんな足を見ると憑かれたように全身の血が逆流する私である。彼女は、まさに男を狂奔させる魔力がある。

女王として男性に君臨する雄姿を描いてみたくなったのでイメージ画として、変身させてみた。菊子嬢よ、僭越な私の行為をお許し下さい。





＜第102回＞ 辻 村 隆

この夏、家内が異常に汗をかきすぎ、何か体に欠陥でもあるのではないかと知人に忠告され、嫌がるのを奨めて、同好のドクター氏に健康診断をして貰ったら、夏バテの疲労と睡眠不足程度で、これといった徴候もなくホッとしたがあとがいけなかった。

ついでのことに私もと、調べてもらったら、血糖値が非常に高く相当の過コレストロール症状で、血圧も下が高い。この俸放っておくと早晚エラいことになる脅かされ、一向気にならなくなっていた糖尿病も、検査の結果では、全然癒っていないということを、判

っきり知らされたのであった。

毎日、毎日、好き放題に、のみ喰いしていたのでは、よくなっている筈もなく、忘れかけていた、糖尿の病いに対する認識を、改めて思い知らされ、半ば自棄気味でええい、こうなりや、なまじメシなど喰っているから、つい意地汚くもなるのだと、箕田氏からも奨められて、その日から、プツリ主食をやめてしまった。

飯、パン、麺類一切抜きで、肉や野菜や牛乳ばかりの生活が、もうかれこれ、一カ月近く続いている。謂わば自己との闘いである。

それというのも、このドクター氏に紹介した渡部光雄氏の症状が余りにもよくないからであった。大抵こまめに連絡のあった彼からこの処、ずっと音沙汰がないと思つたら、この一夏、糖尿の余波が全身に現われ、胃潰瘍やら、視力減退やら、神経痛で、まさに満身創痍の状態で、それどころではなかったらしい。

ゆっくり静養すればいいのだが生活がかかっているもので、そうもならず、そんな体で無理をしているから、尚更悪くなってゆくようであった。

前途を考えて、つい気持もすさ

ぶのか、好美夫人とも、つまらぬことで争ったりして、何となく気拙くなっていたらしかった。

琴瑟相和してこそ、夫婦プレイも愉しく、他に恩恵も与えてやろうという寛大な気持にもなろうが心がとげとげしくなっている時は凡そプレイどころではなかったのであらう。初秋の訪れと共に、幾分は体調も回復してきたのか、数日前、久し振りに電話があったがお互いに健康の有難味を、つくづく語り合ったのであった。

すべてに健康優先だが、SMプレイも又、健全な体力、精力なくては叶わない。

年令に比して、結構元気だと思つていた私にして、冷徹な検査の結果は、かくの如しである。体重を減らすのに努力して、一カ月で二キロ減量出来たが、ユメユメ、自己過信は禁物である。

× × ×

奇クの読者欄や投稿欄を拝見すると、最近の私は、過去のハント女性の蒸し返しが多いという風に書かれ、ピチピチした若い女性のハントは少なく、すっかり塚本鉄三氏にお株を奪われたようだといわんばかりである。

確かにそれは、私自身、認めて

いる。

かつて、奇クのモデル志望のM女性を、片っ端から、ハントした時代にくらべ、今は、塚本氏が、その役をになっているから、私の方へは一向に廻ってこない。

自然、私のハントは、私独自の方法で開拓してゆくより致し方ないのであって、一つの大きな門を閉ざされた私にとっては、そうそう毎月々々、異なれる女性をハントするということは、正直いつて至難に近い。

奇クの編集部にしてみれば、塚本氏の場合なら、その女性を、奇クのモデルとして、毎月登場させられるが、私のハントの場合、素晴らしい女性であっても、一回きりで消えてゆく時が多く、折角のM女性なのにと、惜しい気もするのであらう。

現在、奇クに登場する女性は、判っきり、次の四つに区別されている。

一、奇クの方針によって、塚本氏のみハントした女性——福井桃子、笠井奈保子、松本たえ、鈴木千鶴子、荒尾慶子等である。

二、私と塚本氏との、共通の女性——川路むら子、江口淑子、深田菊子、渡部好美、谷山久美子、高



## 『悲鳴を挙げる双丘』…… 福 井 桃 子



村浩子等である。

三、私独自で開拓した女性——最近のハントから、鬼頭達世、奥村マリ、岸悠子、篠原レイ子、野村信子、石田敦子、大沢妙子等である。

四、奇クの紹介を受けて、私のみハントした女性——喜多知子、佐野みさ子等である。

こう大別してみると、よく分かることであるが、(一)と(二)の女性は、今も、奇クの誌上を賑わすが、(三)

の女性は最早余り登場はしない。

四の場合は、登場の可能性を含んでいるということであろうか。

同じハント女性を毎月登場させて、諸賢とおなじみになる方がよいが、カメラ・ハントという当初の姿勢を崩さず、特別の事情のない限り、毎月異なる女性を登場させる方がいいか——それは、私のカメラ・ハントを読んで下さる方の趣味、嗜好によって、それぞれ異なってくるので、どちらをと

るかは一概にいいない。

あるM女性をハントした場合、その女性に傾倒された方は、再登場を願うであろうし、その女性に関心を示さぬ人は、又かとも知れない。

肥満タイプ、痩身タイプ、容貌嗜好、すべて、読まれる方の好みが違うからである。

毀誉褒貶、何やかやといわれ、もう時には、SMカメラ・ハントを投げ出したくなる時もある。

恰度、丸八年続いた今、私にとっても飽和状態で、思えば随分と息が長い。

SMブームの今、書かずには、独り楽しく、SMプレイしている連中も多い。いっそ私も好きな時に、好きなプレイをして、SMカメラハントの桎梏から脱

したいと思う時もあるのだが、そのくせ、長年の習性は、M女性に出会ふとプレイより先ずカメラの方が先に立ってしまふ。結果は、私の撮った拙作を、それなりに発表したくも

なってくる。

毎月、必ずと思うからシンドイのだが、新しい女性をハント出来た時だけ書くようにすれば、私の心の負担は、もっと軽くなるのかも知れない。

主食抜ききの生活をする今の私にとって、書くこと自体が、既に体を消耗させる一つの大きな原因になっているようである。

× × ×

団鬼六氏の要請で、近頃上京する機会も多くなり、そのせいで、懸案の佐野みさ子さんと、SMプレイをする機会に恵まれ、その翌日、鬼六氏の招聘したモデル嬢を緊縛したのであるが、そのモデル嬢が、如何に若く、素晴しくピチピチしていても、佐野みさ子さんとの、耽溺のプレイに較べたら、愉しさを、嗜虐癖満喫の点では問題にならない。

一方は、チャキチャキの現代娘で、美貌であり、佐野みさ子さんは、人妻で二児の母で、若さ容貌共、叶うべくもないが、被虐願望という点では抜群の女性である。

モデル嬢も結構よく協力してくれて、緊縛フォトとしてならそれで充分でも、赤裸々なSMプレイとなると、これは程遠い。



佐野みさ子さんは、最初から、苛められ、責められることを唯一の目的とし、しかも、究極にセックスの旨味がある。

中年の私にとっては、まるで自分のムスメのようなモデル嬢より被虐の愉悅と快楽にのたうち、あらゆる奉仕を、いとわない佐野みさ子に、痺れるような満足感を覚えるのは当然であった。

SMプレイとは、かくも楽しいものか――。

そんな感懷を改めて抱かせる彼女である。

正直いって、彼女を撮ったフォトは、余りにも露骨すぎ、ナマナマし過ぎて、かつはアップで、ズバリを狙ったものが多く、ハントの誌上を飾れるものは、費やしたフィルムの三分の一にも満たないが、写真を焼く時の私の愉しみは又格別の味わいがあった。

モデル嬢の場合、撮ったフォトは、殆ど使用可能であつても、結局、緊縛フォト用として撮っているから、愉しみは薄く、現在、未だにネガの俥である。

誌上を飾る場合、見た眼には、どちらが愉しいかは、いわずと知れているが、そこに、つくられた緊縛フォトと、ナマのSMプレイ

フォトの違いがある。

近頃の私は、ナマナマしいSMプレイを好む余り、つい、誌上用の緊縛フォトは、おざなりになり勝ちである。ポルノ解禁にでもならない限り、私のナマのSMプレイフォトは陽の目をみることもあるまいが、私の心の底流に、ナマのプレイは生き続けている。

奇クにしる、公開雑誌である限り、発表可能な緊縛フォトに重点をおくのは当然である。

その結果が、私より、プロカメラマンの、塚本鉄三氏により紹介するようになるのかも知れない。フォトでの勝負は、最初からきまっていた、到底、私など太刀打ち出来ない。

しかし、本当の強烈なSMプレイ、そしてそれにつながるセックスプレイの、発表出来ぬフォトの愉しさは、SMプレイに耽溺する同好者なら、既に御存知の筈であろう。

かなりキワドイところまで許容されても、所詮、カメラ・ハントのフォトは氷山の一角である。それを一番よく知っているのは、よきライバル、塚本鉄三氏であるかもしれない。

× × ×

何かの折に、奇クのパックナンバーをとり出し、私の書いたカメラ・ハントのフォトなど、しげしげと眺めたのであるが、過去八年正に夢うたかた隔世の感がある。

おしりの割れめがいけない、むき出しのオッパイがいけない。股紐もいけないなどと、制約多き時代のカメラ・ハントは、送ったフォトの枚数に比して、掲載のフォトは少なく、これこそと思ったものも、遠慮会釈なくカットされていた。

塚本氏が十一月号で『筐底のネガに見たM女の生態』と題して、過去のM女性のフォトを、新たに発表していたのに刺激されたわけでもあるまいが、私もいつか、ネタのきれた時、過去の、制約を受けていたハント女性の、ナマナマしい素晴らしいフォトを、もう一度発表してみたい気持ちに、しきりにかられたのであった。

時勢の移り変わりと共に、秘部に白い斜線を引くことを考え、それが許容されると、ストーリーップのツンパまがいになり、今では、これが極く普通になってしまった。

その気になれば、ハント女性の

未発表のフォトはワンサとあり、筐底のネガをまさぐっておれば、何も苦心してハントしなくても、当分は書けそうなくらいに豊富である。

もっと、さかのぼって『奇譚三十九夜物語』の、煮つまりつつあった頃、ハントまがいに発表したフォトの、秘められたものも数多くある。

読者層の変わった最近なら、十年、十五年前の、緊縛女性達の、秘められていた強烈な緊縛フォトも結構、目新しいかも知れないし古くからのおなじみの方は、再びあの頃、あのハントへの、思い出の、よすがになるかも知れない。

何しろ膨大なネガであるから、検討してゆくと大分、暇がかかりそうであるが、時の流れを、タイムトンネルで一気に十数年前に戻して、意欲旺盛だった頃の、私の過去のフォトをみて戴くのも、あながち無駄ではあるまい。

既に十数年前、今のSMブームの時代を先取りして、緊縛フォトにうつつを抜かしていた頃が、如何に現在のフォトと、ちっとも変わらないうかという、証拠でもあるから――。



## 手錠について

佐原陽一郎



手錠姿に前手錠が多いのは、日本の警察が両手を身体の前で組み合わせた形式で犯罪者を護送するからなのだろうか。

アメリカの映画を見ると、被疑者をホールドアップさせ容赦なく両腕を背後へねじ上げて後手錠にしている。肌に食い込む縄目もいが、きらりと光る冷たい金属がやわらかな手首にきつくはめられている風情も捨て難い味がある。かつて大塚啓子嬢が全盛のころ、手錠姿のグラビア特集があったが近年、手錠マニアが少なくなっただのか、手錠が姿を消したのは、さびしい。

縄でしばるのは思ったほど簡単ではないことはマニア諸氏もよく御存知の筈。されば不器用さをカバーする手段として縄と手錠の併

用をされては、いかがだろう。

同封の写真は後手錠にした囚女を細引でしばり上げたものだが、アメリカ式に後手錠にした方が拘束感が出ていいように思われる。

私はいつか関西のデパートで、万引女が現行犯で逮捕されるところを見たが、連行されるとき大暴れしたので婦人警官が逆上したのか、後手にして手錠をかけてしまった。犯人は三十ぐらいの年増女だったが、別人のように大人しくなり、首うなだれて縄尻をとられて行ったことがある。後手錠というのは前手錠より、いっそう、もうだめだと犯人に観念させる力を持つているのではないだろうか。私は写真でしか見ていないが、各国の警察が用いている手錠は、それぞれデザインが異なっており

アメリカのは頑丈で、いかにも実質的な形態をしていたり、フランス製は優美なスタイルをしていたり何となくお国ぶりを表現しているようであった。

手錠のコレクターというのは、まだ聞いていないが、各国の手錠をお持ちの方があれば、ぜひ誌上で公開していただきたいものだ。

現在、日本で売っている手錠はなかなかよくできているが、残念なことにはキーがなくてもはずれるような小さなレバーが付いており現実感に欠けるうらみがある。

手錠は、やはり鍵がなければ絶

体に、はずれないというところに値打があるように思う。

M女性の中にも縄より手錠の好きなのがいて、ニュース映画の中で永田洋子の手錠姿を見てから興味を持ったと告白したOLを、私は知っている。連合赤軍も思わぬところに、ファンがいるものである。

手錠のメカニク的な面を否とされる方もあらうが私は冷徹さと非情さの中に何か離れ難い魅力を感じる。SMプレイの中に手錠が活用されないのは、何とも惜しいような気がしてならない。



『クサリの音』 絹川美代子



# 僕のフェチ言葉集

並 原 新

僕は本誌の小説や告白などの中で、次のような文章や言葉に接すると、ゾクゾク楽しくなってきました。ほんとうは実際に、そんな言葉をおびせかけてもらいたいのですが、まだ機会がありません。ぜひ、こんな言葉の沢山はといった作品や告白を毎号のせて下さるようお願いいたします。

一、ズロースやブルマについて、  
「まあ、この人ったらズロースを三枚も買って、どうするのかしら。まさか、自分で、はくのでは？ イヤらしい人だわ」  
「ごらん、ごらん。あの男の人の水着。黒のブルマーじゃない？ エッチね」  
「お客さん、さっきから、もみながら、ここがゴムみたいで、おかしいと思っていいたら、ズロースをはいていられるのですか。（そして、ゆかたのすそを、めくって）まあピンクのズロース。変な御趣味ですこと！」  
「さあ、浣腸しますから、ズボンも下着も下げて下さい。どうなさいましたか？ お手伝いしますわまあ、この方ったら、それ、メン



『全自動タワシ機』 泉 絵実

スバンドでは？……」  
「どうして、君のポストンバッグにズロース？ しかも派手なピンクやクリーム色のズロースが、何枚もはいつているのか？ これは何だ！ 女学生の運動ブルマーじゃないか。一体、どうしたってんだ」  
二、お洩らしについて  
「先生、だめです。もうがまんできません。早くトイレに行かせて下さい。あ、あ、洩れそう……」  
「さあ、浣腸おわりましたよ。お粗相しないように、オシメはめてあげましょうね。足を広げてごらん。ほらごらん、かわいいオシメカバーでしょう。レースなんか、ついてるのよ。恥かしいことなのよ。がまんできなくなったら安心して、お洩らしなさい」  
「さっきから、くさいくさいと思っていいたら、あんた、オシッコしかぶっていたの？ まあ、ズボンの中ぐしよくしよじゃないの。そんなに酔ってらしたの？ しまつしてあげるわ。そこに、横になつて。大きな赤ん坊みたい。くさいくさい。この次からは、ゴムのズロース、はかしておいて、あげるわ」  
「さあ、さっきのビールとお茶が

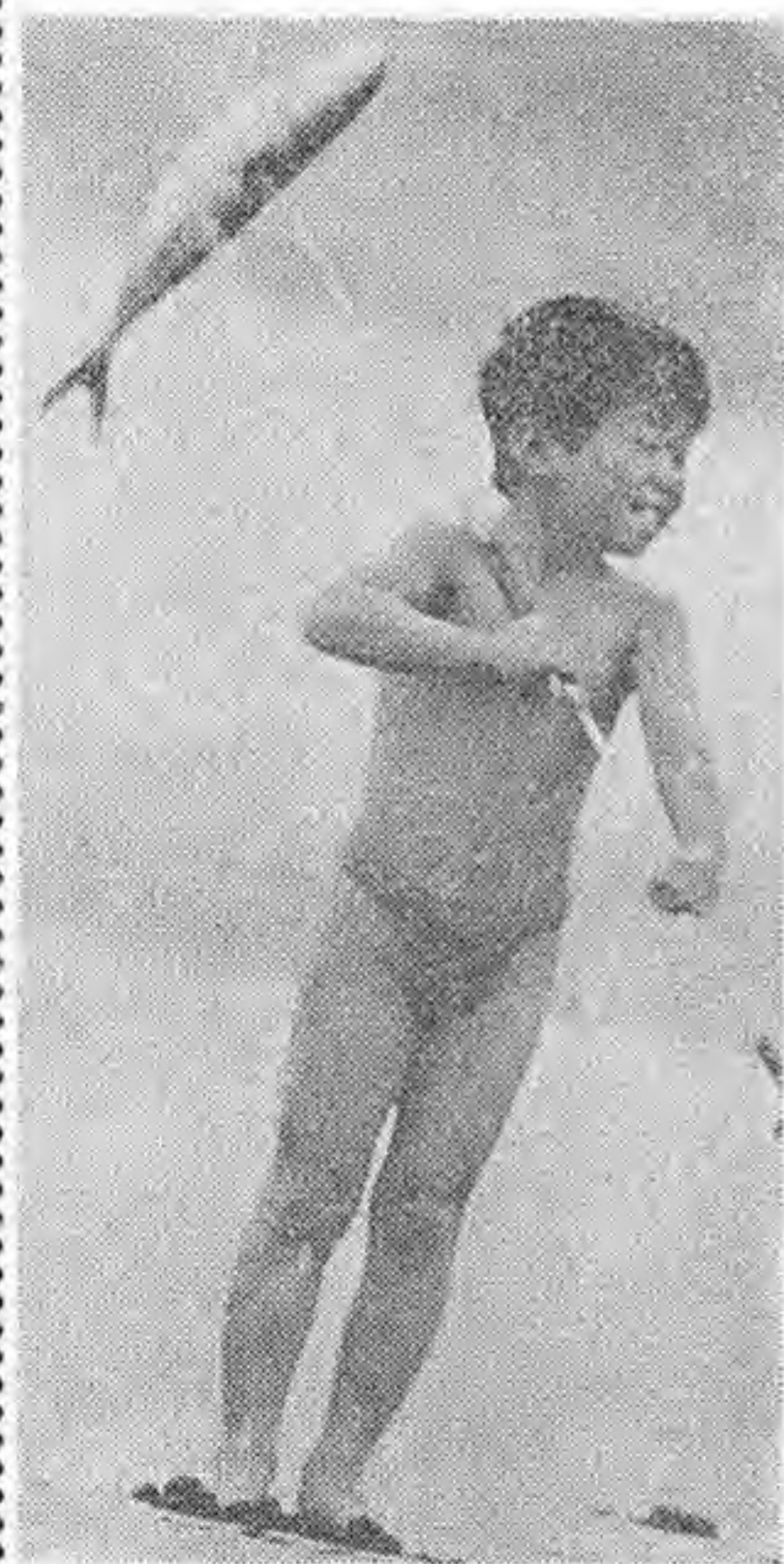
## 編集部だより

○『夫婦SMプレイ』の体験をはじめとして、奇クサロン、向きの原稿が多く投ぜられました。今月号でも極力掲載しましたが、未掲載の分は次号に予定しておりますので御諒承願います。  
○新開店されたマダム美美代コト福井桃子さんは目下忙しくて本誌に出れないそうですが、いずれ落着けば顔を出してくれる由です。  
○塚本鉄三氏の責め並に撮影助手募集に応募されたお便りは早速回答しておきましたから、直接何分の回答があるものと思います。  
○本誌の女性読者の方からのAM女通信が二、三参っています。中には緊縛のモデルになつてもよいという希望もあり、第二の中河恵子、深田菊子、前田真知子、笠井奈保子、高村浩子、鈴木千鶴子の諸嬢として誌上で活躍して下さい方が出現するかも知れません。  
○四年有余に亘って連載して大好評の千葉青鬼作SMF小説『大噴火』の第五十一回は今月号に掲載の予定でしたが郵便事故のため入手出来ず、残念ながら休載になり





## 青い国—四国



四国四県の観光課の合作品。少年というよりは、幼児に近い年ごろのふんどし姿が珍しい。紹介する写真は全体と部分拡大を示す。

このポスターは、香川県庁の観光課の好意により入手したもの。なお同題名の作品がもう一つあり、次回に予定。

## ふんどし美とポスター(1) 青い国・四国 V 岩手 信夫

きいてきたのね。フフフ、おもしろいわ。あなた、手も足も縛られているのよ。トイレに行けないわよ。どうする、そのまま、しかぶっちゃうの? 赤ン坊みたいに。特別たのんだら、おむつ当ててあげてもいいわよ。特製のゴムカバーなのよ。どう? はきたい? 恥かしい?」

「看護婦さん、まだトイレに行つては、だめですか。もう十分たつ

たでしょう。もうがまんできない……トイレまで遠いでしょ。途中で汚しそう。何か汚してもいいように、お尻に当てて下さいませんか。ああ、少し洩れちゃった! ああ、早く、早く。だめだ、とうとう、シーツ汚しちゃった!」

「さあ、何もがまんすることないのよ。特別に三枚もおむつ当ててあげたわよ。そして、ピッチリ、ゴムズロースもはかせたし……。その上にブルマーもはいているのよ、オシッコもウンチも、みんな出してしまいい」

「甘えちゃいけないよ。トイレに行きたいなんて——。そのまま、やってしまいな。その薄いパンティからオシッコとウンチが、あふれてくるのを、見物させてもらうよ。やや、もう始めやがったな、立ったまままで。足もとが洪水じゃないか」

またしたことをお詫び致します。  
○11月号のこの欄でSM代理妻佐野みさ子さんに対する辻村隆氏のカメラハントの予告を書いておきました。予告通りに実施され今月号の誌上を飾ることが出来ました。長い間、八奇クサロンVで読者の皆さんに馴染みになっていた佐野みさ子さんが主人公ですからさぞ興味深いことと思います。  
○本誌では誌面の許す限り出来るだけ広範囲にSMFに関する告白を主体にした記事を掲載したいと考えておりますので、読者の皆さんの御投稿を大いに期待しております。尚、現在の誌上でも努めて掲載しておりますが描画に自信をお持ちの方は、是非ともS画又はM画をお寄せ下さい。これはと思う作品に対しては折返し批評、その他、御返事差し上げます。  
○読者の皆さまの御協力により本誌の「編集資料室」も相当充実して参りました。若しお手持ちのSMに関する資料で処分可能のものがございましたら、御一報賜われれば幸いです。出来るだけ高価で購入したいと思えます。資料内容の概略並に処分希望価格など御一報頂ければ折り返し御返事申し上げます。



# 書の中に身を沈めて

瞳 耀太郎

今月は投稿しようかなあ——と  
思っていると思わぬ伏兵が起こつて  
飛入りの茶番劇が催される。嫌  
も応もなく援けを求めてくる。見  
すごしも出来ず、私の運動が始ま  
る。やっと落ち着いたときは一日  
が五日になり、十日なって遂に書  
きそびれてしまう。情けないなあ  
と思ったり歎いたりする始末で自  
分が嫌になってしまう。

一日に七十通も手紙を書いたり  
レポートイングしていた自分だっ  
たのと思う。奇クは非常に話題  
が豊富になり、筆達者な皆さんの  
レポートや創作で埋められ、加え  
て辻村さんのカメラハント、塚本  
さんのカメラルポが燦めく星の様  
にキラキラと輝いている。仇花や  
毒花の多いSM誌の中で奇クは独  
特の生彩を放っている。

関谷富佐子さんの美しさを讃え  
て初投稿したとき、私は塚本さん  
を知らなかったが、それからじー  
っと年月を重ねて見つめているう  
ちに、塚本さんの写真には絵画的  
な美しさがあり、時には額にして  
みたいと思う様な傑作もある。塚

本さんの立場を一介の投稿氏と思  
ったのは汗顔の至りである。

奇クの一大特色は、堅実な歴史  
に対して揺るぎない信頼にこたえ  
て投稿される新鋭の読者の皆さん  
の層の厚さである。お互いがお互  
いを呼びあうことによって、一冊  
の雑誌を通じて心温まる交流があ  
り、小さな幸せを守り、礎いてゆ  
く力ともなっているのではないだ  
ろうか。この雑誌は宗教書でもな  
いし科学誌でもない。さりとて時  
代迎合主義のピンク誌でもない  
確信を持って言えるのは何故だろ  
うか。宗教書でもなく科学書でも  
ないのに、何故、この様に、われ  
われを魅了し続けるのだろうか。  
珍奇なSMの妄執の囚われ人と  
なつて、われわれは捉えられてい  
るのだろうか。われわれは鎖で囚  
われている事実もないし、財布の  
紐さえ閉じれば、われわれは勇氣  
なくして易々と脱出さえ出来るの  
だ。だが、それさえも私達自身の  
意志でそれを拒否し、母の懐に返  
る様に、奇クを求めるのは何故だ  
ろう。鬱勃たる心の悩みを解きほ

ぐし、暴発する世代の安全弁にな  
ろうとする様な読後感が生じる。  
美に対する一つの変型、一つの  
価値観が、この奇クの存在の中に  
生じていることを読者自身は知っ  
て居り、自身によって証明され続  
けている。その価値観とは何なの  
か？ 生命への永遠に放つ美の讃  
歌であり、果てしなき探究の道を  
意味している。

美しくまた楽しく、その肉体と  
いう偶然を通して内面的なもの、  
外面的なものを知らうとする心の  
発露をさしているのではないだろ  
うか。

私達は友であるという共感とい  
うか、一つの連帯感が、この雑誌  
を、より身近なものに、している  
と言えるのではなからうか。

(我が書齋にて)



—八色艶筆—

ああ関谷富佐子

木戸川 健

最近、私はポルノ小説を読ん  
だり、ポルノグラフィを見たり  
することが多くなった。

病氣をして以来、どうも「ア

ノ方」が、はかばかしくなくな  
ったのではあるまいか、という  
深刻な疑懼の為で、普通興奮  
するか、どうかを試したかった  
のである。

以前であれば、奇クの小説、  
例えば「花と蛇」なんか読んで  
も、忽ち反応したのであるが、  
今はどうもいけない。もっとも



## 「鼻いじめ」の夢

山井 二 良



いつか、こんな夢を見ました。美少女と湖畔で出会ったのです。流麗な鼻に、しばし声もありませんでした。

鼻孔の整った形の人は、鼻の外見も優美な造形を持っています。私にとって美人とは、鼻と鼻孔の優美さにあります。たとえ、クレオパトラでも鼻の高さだけで美人だった筈はないでしょう。整形外科で、いくら隆鼻手術を受けても鼻孔がペチャンだとは、よく聞く話です。見る人が見れば分かってしまうから、残念な隆鼻術ですが鼻孔整形は、外国では割合、あるそうです。

映画（外映）の鼻孔整形の一部写真を持っていますが、鼻腔からのびている縫合糸が外科医の手に

ある針まで、ピンと張っているのが鼻孔のアップ場面では迫真のものでした。私の知る限り外人女性の鼻や鼻孔コンプレックスは、日本女性と全く異なるものですから私がいくら垂涎の鼻孔と思っても、無理に低くしたり、細長いものを丸くしたり、いくら価値観が相異するといっても、惜しい場面や話があります。

通常、美人といわれる人に醜い鼻孔の持主は皆無に等しいのは何故でしょうか。女性の鼻は一般に優美で繊細で美しい色合いのバランスを持っています。鼻腔も淡いピンクで私達を魅了します。美少女との夢の出来事では鼻いじめの鼻合わせを、シックスティナインで行なうのです。鼻キッスで、舌

写真では、確実に反応するのであるが、これとても、すこぶるつきの美人でなければ……。強いてあげれば、関谷富佐子さんのような方でなければ、直ちに「感電」しないのである。

考えてみれば、私が奇クに初投稿したのは関谷富佐子さんのあの素晴らしい艶姿に惚れたからなのである。その時は、『美津田栄』という筆名で、『ラブレター』を書いていました。もとより、関谷さんとプレイをしたかったというのではなく、写真の艶姿に、何となく惚れたというだけ

先にチクチク感ずると、私はタイムストップ（行動の方が）です。いつか、奇ク誌上で双孔に硬貨を入れて楽しみ、人に見られたい方の告白がありました。男子なら十円硬貨位入るでしょうが、女性では相当鼻孔のタテ長の方でない無理でしょう。『可愛い方だな』と思う人で、一円硬貨（巾2センチ）がようやく入る程度でしょう。

外国では、世界一鼻高の国イタリア人なら、百円コイン（サッポロ）でも入るでしょうが、今年に入ってイタリア一の鼻高き人は

の軽い気持であった。

最近になって、つらつら考えてみるに、関谷富佐子さんは、単なる美女というだけでなく、縛られても痛々しさというものを感ぜさせない肉体美の持ち主であるから……というところに無意識に魅せられていたのだ。

縄を纏って、一段と艶かしさを増す女性とは、私の場合、縄目に負けないだけのポリニームある柔肌でなければならぬらしい。しかも、全身から滲み出るお色気なるもの……。改めて富佐子さんに惚れた訳である。

外国でも男性なんでしたね。

私のプレイの中でも、まだ女性に試したことがないので、上向いた双孔に釣り具をつけて重りをつけたら、何グラムまで耐えられるだろうか。耐え得る限りの限点では、私の胸も熱くなる鼻いじめと鼻孔の伸びが見られるだろうと思います。私の試みでは、二キログラムが限度でした。

とりとめもない事を長々と書き綴りましたが、女性の鼻や鼻いじめについて関心を、お持ちのマニアの方々からの、お便りを、お待ちしております。





## SM 奴隷妻の出現を待つ

田中友三(広島)

奇クとのつきあいも、すでに十余年。名古屋駅前で買い求めた色刷り表紙から数えて、すでに私のスクラップには、ぎっしりと写真をはりつけたものが三十冊以上になりました。その間、広島から大阪へ、また再び広島へと三転する間に数多くのM女を飼育、調教して、その人数(いや奴隷の数)も八人を数えました。

現在は門真に在住の山崎氏夫妻とのSMセックスプレイが続行中です。このご夫妻とはあるホテルで本当に偶然知り合ったのですがその運命(と言えば大げさすぎるかも知れませんが)は私のサディストとしての仕上げでもありました。

「人妻調教」という念願を叶えてくれた、そして主人の見ている前で、奴隷として誓ったメスを全裸にして思いつき縛りあげ、尻打ち、灸責め、クリップ挟み、吊り責め、バイブ責め、馬のり等、延々三——五時間にわたり、責め続けた上、不自然なスタイルのセックスを、ご主人共々、行ない、その日の調教を終えました。

ご主人は教養ある一流商社のエリート商社マンで三十九才。夫人は白豚のように色白の肥満体で三十三才。脂ののりきった美人で、ご主人の調教飼育よろしきを得て如何なる命令にも従順なMとして完成しています。全てをさらけ出して拷問にも等しい苛酷な責苦も

甘受して耐え抜き、その後に来るセックスを最上の快楽として体得する三人プレイを楽しんできたのです。

所が私が広島へ転勤のため遂にその終わりが訪れ、私の大阪出張以外は三人プレイを楽しめなくなってしまうました。従って私のサディストとしての夢である「常に隷従する女性を調教飼育する」機会も少なくなり、又36才という年齢からしても、やは独身であるハNĐィはどうにも致し方なく、ここに奇ク愛読者の皆さんの中よりMとして、奴隷として名乗り出る方を持つ為に、敢えて投稿した次第です。

広島某大学を卒業し、現在は一流とは言えませんが、この業界では中国一の会社の責任ある地位に在職中。身長一七二、体重六二どちらかといえバヤセ型で容姿は十人並以上のハンサムの部類。但し相当のサディストであります。従って並のMでは到底ついて来れないと思いますが、あくまでも個人の自由、あるいは権利は保証致します。SMの世界は二十四時間の内、ある一部の時間のみ、完全な二人の合意の下に行ない得る世界であると信じております。

佐野みさ子さん。あなたは人妻である以上、私に隷属する妻としての資格に欠けると思いますが、代理妻あるいは、その時のみの妻も、この世に有って然るべきと考えます。出来る事なら、永久に奴隷妻として生活を保証し且、充分な調教を施しても良いのです。あなたさえ良ければ私としては可能性百%ですが、出来れば順を追ってエスカレートする即ちプレイから入って、どうしても我が必要不可欠の存在になる迄調教出来るM女の出現が希まれます。相手はやはりあなたの様なボリニームのある人、若しくは十月号の告白にある笠井奈保子さんや高村浩子さんの様な方が好みます。

私はプレイの時、縄は中細でキツチリときびしくかけますので、出来るだけボリニームのある女性の方が緊縛感もあり又奴隷の調教上欠かせないのです。従って中途半端な呼びかけになります。佐野みさ子さんに対する望みもさる事ながら、今から私に調教飼育を希望される方ならどなたでも結構です。編集部に住所氏名から全てのデータをお送りしておきますので御連絡下さる様、よろしく。



## 孤独なM男の回想

羽崎 勉



ぼくは気の強い女性に不思議に魅力を感じるので。それは、ぼくが気の弱い男であるからでしょう。雨の日曜日などアパートの部屋で一人ポツンと孤独感にひたっている時、ふと、和田アキ子ばりの女番長に追いまわされ、ついにつかまってねじ伏せられ、お尻など、きゅっとつねられたら、どんな気がするだろうか、などと、幻想に耽ることがあります。

気の強い女性に痛い目にあわされて泣き叫びたいぼくなのです。ぼくはたまにバーに行くことがありますが。飲む目的でなく、それで男子のバーテンのいないところに限られます。ぼくの他に男がいるのではダメなのです。勿論、まだ

お客がきそうもない時間帯を選びます。

そう、営業して間もない頃がいいのです。ぼくは一人で、一人ないはは複数のホステスを独占できます。いや独占されたいのかもしれない。

そして、そのチャンスにめぐり逢えた時、ぼくはSM的刺激を欲求する気持で俄然、胸がドキドキ高鳴ってくるのです。ぼくは恥らいもむきだしにして、こんなことを言ったりします。「ねえ、注射されるとしたら、男の先生と看護婦さんでは、どっちが痛いかなあ」「ウッフッフ、そりゃ看護婦さんよ。あたりまえじゃない。あたしが、してやろうか」そのホステスは、にっと白い歯を見せて、ぼくをいびるのを楽しむような表情を見せます。ぼくは、そういう女性に、たまらないほどの魅力を感じるのです。

## &lt;映画通信&gt;

最近の  
緊縛シーンから

東山 映史

最近のすさまじい緊縛映画は、東映作品に多い。

ご存知、女番長シリーズの第三弾「スケバン女番長ゲリラ」は、杉本美樹、池玲子の二大ポルノ女優が素晴らしい緊縛状態でSMファンを、たんのうさせてくれる。

前作の「女番長・牝蜂の挑戦」では、池玲子とその豊満な乳房を丸出しにして、女同志のリンチ、暴力団の女責めにあい、縛りに鞭打ち、女のあらゆる部分への陰虐な責め——逆エビ縛りでローソク責めなど——そのSM場面は圧巻であった。

今回「スケバン女番長ゲリラ」では、杉本美樹が東京から京都へ乗り込んできたスケバン。そして池玲子が京都のスケバンである。主役は杉本美樹になっている。美樹は乳房の豊満さでは劣るが、ひきしまったカモシカのような弾力性のある身体をクサリでギリギリ縛り上げられ、吊るし責め、ローソク責めと、暴力団のリンチに

あう。池玲子も安部徹の暴力団のボスを刺し、逆に捕えられて縛られて犯されるが、前回のような素晴らしい緊縛シーンのなかったのは残念。他のシーンでは、仲間の規約を破った裏切者が、赤軍の総括のようなリンチにあう。単車に両手を縛られ、地面を引きずりまわされる。顔はすりむけて血だらけになり、すさまじい。また逃走して捕えられた二人は、連縛されてなぐり倒される。まさに総括もどきである。

つづいて東映の梶芽衣子主演の「女囚第七号さそり」は女囚のリンチが、これでもか、これでもかと、残酷に行なわれる。麻薬捜査官を恋人に持つ梶扮するメミが男に裏切られ、男を殺す。そして女囚になる。

女同志の、なまぐさい陰虐なリンチ、皮の拘束衣で責められる梶など、見ごたえ十分である。

エロダクシオンものでは、ポインナンバーワンの谷ナオミの監督主演の「性の殺し屋」の涼子が、自ら縛られ責められて楽しませてくれた。

「続・ワイセツ？」では舌戯の娼婦の責めなど、変態的なシーンが多かった。



## 〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天竺社に於て分譲して、おりに止つたSM資料写真は、その後分譲中になつて再開を強く要望され、最近になつて再開を強く要望され、増をいたします。御注文の方に、五日間位の予定で、作成の上、早速御送付申し上げます。

## △Mフォト▽

## 馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円  
花田沙登子 略号△わふ▽

## 両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わむ▽

## 肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わら▽

## 女王様の臀臭をかかす

大手札二枚一組 略号△六〇〇円  
花田沙登子 略号△わけ▽

## 足舐めの強制

大手札三枚一組 略号△八〇〇円  
花田沙登子 略号△わな▽

## 女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 略号△一五〇〇円  
花田沙登子 略号△わね▽

## △入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よひ▽

## 全裸の入墨女賊折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よせ▽

## 入墨女笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よゆ▽

## ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よめ▽

## 凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よす▽

## 全裸の四つ這い木馬責

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よも▽

## 逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よき▽

## 大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よさ▽

## △日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め  
大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もと▽

## 石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もへ▽

## 凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もに▽

## 女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もち▽

## 白洲笞打ち折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ▽

## 非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
山原 清子 略号△よせ▽

## 美木乃々子 略号△もぬ▽

## 土壇で胴斬りの仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もり▽

## 白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
美木乃々子 略号△もは▽

## △M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく  
大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まふ▽

## 二女にいじめられるM男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まも▽

## 美女二人から縛られる男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まね▽

## 男馬を乗り潰す裸女二人

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まめ▽

## 痛烈、ムチ打ちのご馳走

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まれ▽

## 首絞めでM男に止どめを刺す

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まむ▽

## 汚臭と足舐めの強要

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
大塚・山原 略号△まり▽

## 二女の臀臭にむせび泣く男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円  
山原・大塚 略号△まみ▽

## パンプスの下に喘ぐM男

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△わそ▽

## 豊満な太股で首を股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
長野 良子 略号△ほふ▽

## 大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円

## 大塚 啓子 略号△わよ▽

## 男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△わた▽

## 顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号△一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△らも▽

## △女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹  
大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 啓子 略号△せ10▽

## 全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 啓子 略号△ひた▽

## 全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円  
大塚 啓子 略号△ひと▽

## マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
甘木 春子 略号△まに▽

## 血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 啓子 略号△れは▽

## 血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円  
大塚 啓子 略号△れみ▽

## 血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号△二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号△のせ▽

## 血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
絹川 文代 略号△ちた▽

## 絹川 文代 略号△ちた▽

## 豊満腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円  
長野 良子 略号△ほふ▽



パイプ責めに呻めく女

大手札三枚一組 略号△きわ 五〇〇円

両足挙げ柱宙縛り

大手札三枚一組 略号△きろ 五〇〇円

強烈黒縄縛り悦虐地獄

大手札三枚一組 略号△きる 五〇〇円

羞恥責めに陶醉する女

大手札三枚一組 略号△きは 五〇〇円

猿轡と縄に涕泣する瞬間

大手札三枚一組 略号△きは 五〇〇円

柱宙縛りと逆さ縛り責め

大手札三枚一組 略号△きた 五〇〇円

足を吊られた悦虐に泣く

大手札三枚一組 略号△きは 五〇〇円

浣腸溶液を圧入される

大手札三枚一組 略号△みは 四〇〇円

全裸で受ける三種の浣腸

大手札三枚一組 略号△みふ 四〇〇円

イルリの嘴管挿入浣腸

大手札三枚一組 略号△みほ 四〇〇円

突き刺さる浣腸器の恐怖

大手札三枚一組 略号△みち 四〇〇円

自ら施す浣腸の悦楽

大手札三枚一組 略号△みそ 四〇〇円

体内に奔流する浣腸溶液

大手札三枚一組 略号△みや 四〇〇円

浣腸プレイを楽しむ美女

大手札三枚一組 略号△みぬ 四〇〇円

オシメから生ゴムカバーへ

大手札三枚一組 略号△みめ 二〇〇円

おムツに排便する乙女

大手札三枚一組 略号△みし 二〇〇円

生ゴム製のオムツカバー着用

大手札三枚一組 略号△みせ 一八〇〇円

メロン腹白縄縛り

大手札三枚一組 略号△えす 五〇〇円

正面柱縛りの蛙腹

大手札三枚一組 略号△えき 五〇〇円

開脚縛り妊娠腹

大手札三枚一組 略号△えけ 五〇〇円

蛙腹を晒す開股責め

大手札三枚一組 略号△えこ 五〇〇円

太鼓腹強調片足吊り

大手札三枚一組 略号△えさ 五〇〇円

妊孕緊縛美の極致

大手札三枚一組 略号△えあ 五〇〇円

美しき妊孕腹緊縛

大手札三枚一組 略号△えか 五〇〇円

八カ月の妊婦裸身開陳

大手札三枚一組 略号△えせ 五〇〇円

柱縛りの九カ月腹妊婦

大手札三枚一組 略号△えて 五〇〇円

引き回された妊婦腹

大手札三枚一組 略号△えり 五〇〇円

膨隆妊婦腹の股間縛り

大手札三枚一組 略号△えれ 五〇〇円

鏡に映る太鼓腹縛り

大手札三枚一組 略号△ええ 五〇〇円

蛙腹誇張の緊縛美

大手札三枚一組 略号△えさう 五〇〇円

足挙げ縛り蛙腹妊婦

大手札三枚一組 略号△えさた 五〇〇円

卓の脚に縛った蛙腹妊婦

大手札三枚一組 略号△えさつ 五〇〇円

九カ月妊娠腹の緊縛美

大手札三枚一組 略号△えさゆ 五〇〇円

豆絞りの猿ぐつわ哀情

大手札三枚一組 略号△ぬも 五〇〇円

逆エビ地獄の美女

大手札三枚一組 略号△ぬや 五〇〇円

麻縄亀甲菱縄縛り

大手札三枚一組 略号△ぬむ 五〇〇円

後手高手小手縛り三態

大手札三枚一組 略号△ぬみ 五〇〇円

卓上の緊縛悦虐姿態

大手札三枚一組 略号△ぬる 五〇〇円

全裸浴室での股間縛り

大手札三枚一組 略号△ぬひ 五〇〇円

悶える踊子の欲情処理

大手札三枚一組 略号△ぬま 五〇〇円

美しき全裸の縛り

大手札三枚一組 略号△ぬふ 五〇〇円

柱縛りと脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号△ぬすき 五〇〇円

麻縄高手小手首縄縛り

大手札三枚一組 略号△ぬすめ 五〇〇円

荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号△ぬすけ 五〇〇円

荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚一組 略号△ぬすら 五〇〇円

悶える強烈海老責め

大手札三枚一組 略号△ぬすへ 五〇〇円

柔肌をくびる厳しき縄目

大手札三枚一組 略号△ぬすれ 五〇〇円

緊縛の全裸女体をいびる

大手札三枚一組 略号△ぬする 五〇〇円



|               |                                |                |                               |               |                               |              |                              |
|---------------|--------------------------------|----------------|-------------------------------|---------------|-------------------------------|--------------|------------------------------|
| 両足首括り逆さ吊り     | 大手札五枚一組 八〇〇円<br>梨花悠紀子 略号八さかV   | 六尺裄着用の艶姿       | 大手札七枚一組 一〇〇〇円<br>美木乃々子 略号八ぬおV | ゴム衣とゴムの猿ぐつわ   | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>木村 洋子 略号八なとV  | 黒フンドシの女(正面)  | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>遠藤百合子 略号八くまV |
| 手足逆さ宙吊り       | 大手札五枚一組 八〇〇円<br>梨花悠紀子 略号八さとV   | サカエメンスバンド着用    | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八おこV  | 甘美なる椅子プレイ     | 大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八なあV  | 黒フンドシを誇る姿    | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>遠藤百合子 略号八くまV |
| 逆さ吊りの女体を析檻    | 大手札五枚一組 八〇〇円<br>梨花悠紀子 略号八させV   | サカエメンスバンド着用    | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八おえV  | 開股拷問椅子の正面責め   | 大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八なたV  | 黒フンドシ背面刺青模様  | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>遠藤百合子 略号八くわV |
| メンスバンド着用替ゴム見せ | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>東浦ひかる 略号八へみV   | サカエメンスバンド着用    | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八おたV  | オムツ着用の股間縛り    | 大手札四枚一組 六〇〇円<br>東浦ひかる 略号八むくV  | 黒フンドシ入墨姿     | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>山原 清子 略号八くこV |
| 股に喰い込む黒フンドシ   | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八としV   | パリスマメンスバンド前開き  | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八おいV  | オムツ着用フエチフォト   | 大手札七枚一組 一〇〇〇円<br>大塚 啓子 略号八むねV | 黒ふんどし媚態の魅力   | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>山原 清子 略号八くなV |
| 股を開いた黒フンドシ姿   | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八とひV   | 携帯用白色メンスバンド着用  | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八おかV  | オシメをつける二人プレイ  | 大手札六枚一組 一〇〇〇円<br>山原・東浦 略号八むしV | 白晒六尺フンドシの姿態  | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>刑部 典子 略号八けすV |
| 開股逆さ吊り姿態      | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>左近麻里子 略号八ちてV   | パリスマメンスバンド着用縛り | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八おはV  | ゴムのオムツカバー強制着用 | 大手札六枚一組 一〇〇〇円<br>山原・東浦 略号八むにV | 黒六尺フンドシを締めた女 | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>刑部 典子 略号八けすV |
| 禪美・表と裏の二態     | 大手札二枚一組 四〇〇円<br>左近麻里子 略号八ちけV   | パビアメンスバンド着用    | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八おしV  | 生ゴムの猿ぐつわ責め    | 大手札四枚一組 五〇〇円<br>木村 洋子 略号八むこV  | フンドシ姿の羞らい    | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>栗本 ミチ 略号八ふへV |
| 強烈責め被虐の果て     | 大手札五枚一組 八〇〇円<br>梨花悠紀子 略号八りおV   | 相撲禪を締めた女       | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>東浦ひかる 略号八そいV  | オシメ着用と女学生     | 大手札七枚一組 一〇〇〇円<br>大塚 啓子 略号八うえV | フンドシ姿の女の魅力   | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>栗本 ミチ 略号八ふのV |
| 踊り子の美しき緊縛     | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>絹川 文代 略号八りこV   | メンスバンド着用開股ポーズ  | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>東浦ひかる 略号八つんV  | 六尺フンドシの女性像    | 大手札四枚一組 六〇〇円<br>関谷富佐子 略号八くろV  | 六尺裄の羞じらい     | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>横尾 峯子 略号八ふけV |
| 股間縛りの法悦境      | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>絹川 文代 略号八ぬこV   | 黒ゴム衣後手縛り       | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>木村 洋子 略号八なほV  | 黒フンドシを着用した女   | 大手札四枚一組 六〇〇円<br>大塚 啓子 略号八くふV  | 双臀に喰い込む禪     | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>横尾 峯子 略号八ふくV |
| 相撲禪着用の艶姿      | 大手札12枚一組 一八〇〇円<br>美木乃々子 略号八ぬわV | ゴム衣緊縛悶悦姿態      | 大手札五枚一組 七〇〇円<br>木村 洋子 略号八なへV  | 黒フンドシの女(背面)   | 大手札三枚一組 五〇〇円<br>遠藤百合子 略号八くうV  | 禪美に羞じらう女     | 大手札六枚一組 八〇〇円<br>玉田美佐子 略号八こんV |



## 血紅女体切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 六〇〇円  
梨花悠紀子 略号八せんV

## 女体切腹シリーズ

大手札12枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号八せい12V

## 血紅切腹祭壇に果てる女体

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八せぬV

## 首桶に落ちる女の首

大手札三枚一組 五〇〇円  
水野加代子 略号八せへV

## 愛妻の切腹を介添えする

大手札三枚一組 五〇〇円  
水野加代子 略号八せほV

## 切腹する女体を介錯する

大手札三枚一組 五〇〇円  
水野加代子 略号八せはV

## 血紅使用介添え切腹

大手札五枚一組 八〇〇円  
大塚・東浦 略号八きつV

## 介添え切腹の女

大手札四枚一組 六〇〇円  
甘木 春子 略号八あかV

## 自刃した血まみれ屍体

大手札10枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号八えしV

## 自らの腹を切り裂く女

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八やいV

## 自ら柔肌を切り裂く場面

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八やえV

## 自らの下腹に突き刺す刃

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八やおV

## 血紅女体切腹苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八くえV

## 哀婉美女の血紅切腹

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八るなV

## 絞首刑に果てる女体

大手札二枚一組 四〇〇円  
新宮夫人 略号八るくV

## 引回しと晒の処刑

大手札二枚一組 四〇〇円  
新宮夫人 略号八るにV

## 血紅使用血まみれ切腹

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八わいV

## 殿中の自決女体切腹

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八わこV

## 切腹美態から絶命ポーズへ

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚 啓子 略号八わはV

## 女体自刃の美態

大手札三枚一組 五〇〇円  
細川アヤ子 略号八ねにV

## 女体切腹媚態

大手札二枚一組 四〇〇円  
細川アヤ子 略号八ねはV

## 肉体美少女全裸切腹

大手札五枚一組 七〇〇円  
長野 良子 略号八なせV

## 禪裸女血斗凄惨場面

大手札五枚一組 七〇〇円  
絹川・大塚 略号八らはV

## 和洋争斗場面展開

大手札六枚一組 八〇〇円  
田中・愛川 略号八らりV

## 血紅使用斬られる美女

大手札七枚一組 一〇〇〇円  
絹川 文代 略号八らふV

## 鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 四〇〇円  
愛川・田中 略号八らくV

## 咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 四〇〇円  
愛川・田中 略号八らみV

## 斬首の瞬間

大手札三枚一組 五〇〇円  
新宮夫人 略号八のきV

## 晒台の女の生首

大手札三枚一組 五〇〇円  
新宮夫人 略号八のくV

## 全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八のみV

## 切腹に悶える悦虐裸身

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号八のそV

## 切腹した裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八のいV

## 美しき裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八のりV

## 屠腹される女体

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八のるV

## 立腹切腹に悶える女体

大手札10枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号八のさV

## 切腹に苦悶する裸女

大手札10枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号八のむV

## 絞首された女体

大手札六枚一組 一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八のひV

## 斬首処刑場面

大手札二枚一組 四〇〇円  
新宮夫人 略号八くしV

## 絞首刑にされる女

大手札三枚一組 五〇〇円  
新宮夫人 略号八こけV

## 血まみれ血斗場面

大手札12枚一組 二〇〇〇円  
山原清子外 略号八えみV

## ゴムフエチの美体

大手札四枚一組 六〇〇円  
梨花悠紀子 略号八こまV

## ゴム包みの束縛女体

大手札四枚一組 六〇〇円  
東浦ひかる 略号八こはV

## メンスバンド只今着用

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号八もかV

## 白禪刺青女体脇差切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円  
山原 清子 略号八ひにV

## 白禪刺青女体短刀切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円  
山原 清子 略号八ひぬV

## ゴム衣着用緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
水本 茂美 略号八みすV

## メンスバンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円  
遠藤百合子 略号八ゆおV

## 月経帯を着けた緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
遠藤百合子 略号八ゆすV



竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

麗身の裏と表縛りの綾 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

裸身に悶えるマゾの表情 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

豆絞りの猿轡と縛りの表情 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

私を虐めて下さい。お願い 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

悦虐夫人のマゾの表情 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 五〇〇円

全裸の股間縛り 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 六〇〇円

ムチの一打に反る裸身 略号△せて▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 五〇〇円

富佐子の裸身を陳列 略号△せて▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 五〇〇円

尻を立てたムチ打ちポーズ 略号△せて▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円

脂ぎった豊満女体縛り

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 五〇〇円

鞭が柔肌に炸烈する 略号△もむ▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 五〇〇円

滑車吊りで揮う甘い鞭 略号△もむ▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 五〇〇円

両手万才に縛りムチ打ち 略号△もむ▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 五〇〇円

狂う鞭に哀切の表情 略号△もむ▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち 略号△もむ▽ 五〇〇円

大手札四枚一組 略号△もむ▽ 六〇〇円

安井喜久子 略号△もむ▽ 六〇〇円

鞭と縛りに夢心地の表情 略号△もむ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△もむ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 六〇〇円

烈しい鞭は美肌からむ 略号△もむ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△もむ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 六〇〇円

狂う鞭に狂うムチの女王 略号△もむ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△もむ▽ 六〇〇円

逆エビ開股の女体に鞭打ち

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△めひ▽ 六〇〇円

ムチ打ちに悶絶した女体 略号△めひ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△めひ▽ 六〇〇円

強打にのけぞる悦虐表情 略号△めひ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△めひ▽ 六〇〇円

羞恥責めによる法悦境地 略号△めひ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△めひ▽ 六〇〇円

足挙げ開股羞恥責め 略号△めひ▽ 六〇〇円

大手札三枚一組 略号△めひ▽ 五〇〇円

梨花悠紀子 略号△めひ▽ 五〇〇円

片足挙げ姿態にムチ打ち 略号△めひ▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△めひ▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△めひ▽ 五〇〇円

両手吊りに悶えるM女 略号△めひ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△めひ▽ 六〇〇円

開股責めに泣く女 略号△めひ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△めひ▽ 六〇〇円

両手万才吊りで晒す女体 略号△めひ▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

ムチの強打に泣く裸身

大手札四枚一組 略号△むち▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△むち▽ 六〇〇円

足吊りの被虐肢体 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△むち▽ 五〇〇円

鞭打ちにうねるM女 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△むち▽ 五〇〇円

鞭に狂う女の悦虐表情 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△むち▽ 五〇〇円

美しき女体マゾの境地 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△むち▽ 五〇〇円

全裸開股膝頭縛り 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

中河 恵子 略号△むち▽ 五〇〇円

菱縄縛り竹棒責め 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

中河 恵子 略号△むち▽ 五〇〇円

開股竹棒羞恥責め 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

中河 恵子 略号△むち▽ 五〇〇円

手足縛り逆エビ責め 略号△むち▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△むち▽ 五〇〇円

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

麗身の裏と表縛りの綾 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

裸身に悶えるマゾの表情 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

豆絞りの猿轡と縛りの表情 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

中河 恵子 略号△せて▽ 六〇〇円

私を虐めて下さい。お願い 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

悦虐夫人のマゾの表情 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 五〇〇円

全裸の股間縛り 略号△せて▽ 六〇〇円

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 六〇〇円

ムチの一打に反る裸身 略号△せて▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 五〇〇円

富佐子の裸身を陳列 略号△せて▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円

関谷富佐子 略号△せて▽ 五〇〇円

尻を立てたムチ打ちポーズ 略号△せて▽ 五〇〇円

大手札三枚一組 略号△せて▽ 五〇〇円



## 〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V組 百態 大手札印画紙(9×13種) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚(送料共)

五組五枚 八〇〇円  
 十組十枚 一五〇〇円  
 二十組二十枚 二八〇〇円  
 五十組五十枚 五〇〇〇円  
 百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社  
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が  
 出回っているようですが、これは  
 全部特殊マニアの蒐集用として一  
 粒選りのネガから直接印画紙に焼  
 付した極めて鮮明な逸品揃いばか  
 りです。きつとファンのアルバム  
 を最高に充実させると信じます。  
 大阪市阿倍野局私書箱14号天星社  
 へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め(深田 菊子)  
 2 トイレ排泄強要(三浦 純子)  
 3 完全二つ折締め(三浦 純子)  
 4 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)  
 5 超強烈エビ責め(三浦 純子)  
 6 荒縄柔肌いじめ(前田真知子)  
 7 全裸縛玄閑晒し(三浦 純子)  
 8 ネどうでもして(高村 浩子)  
 9 蠟燭責後手縛(富田由美子)

10 羞恥の源を扶る(江口 淑子)  
 11 妊婦縛りの庄巻(富田由美子)  
 12 菱縄縛正面開放(江口 淑子)  
 13 正面の妊婦縛り(富田由美子)  
 14 麗しのマドンナ(荒尾 慶子)  
 15 両手挙前面晒し(福井 桃子)  
 16 強烈浣腸ポーズ(高村 浩子)  
 17 後手吊上げ猿轡(高村 浩子)  
 18 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)  
 19 ゴム人形の恐怖(江口 淑子)  
 20 菱縄股間縛前面(深田 菊子)  
 21 柱縛り開股強要(福井 桃子)  
 22 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)  
 23 本格的な麻縄責(前田真知子)  
 24 強烈麻縄の緊縛(前田真知子)  
 25 正面股間縛晒し(高村 浩子)  
 26 両足吊りの苦悶(江口 淑子)  
 27 店での全裸縛り(福井 桃子)  
 28 豊満な女体開陳(福井 桃子)  
 29 恍惚バイブ責め(江口 淑子)  
 30 マダム責の哀愁(江口 淑子)  
 31 開股強制棒責め(前田真知子)  
 32 大の字片足挙げ(高村 浩子)  
 33 雁字搦目の女体(江口 淑子)  
 34 足挙げ責の羞恥(江口 淑子)  
 35 淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)  
 36 海老開脚強制責(深田 菊子)

37 全裸立像後手縛(富田由美子)  
 38 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)  
 39 美女の全裸縛り(荒尾 慶子)  
 40 マダム全裸開陳(江口 淑子)  
 41 後手錠吊上げ責(江口 淑子)  
 42 女体美を晒して(深田 菊子)  
 43 高々と後手緊縛(福井 桃子)  
 44 猿轡に悶える女(高村 浩子)  
 45 太鼓腹全裸正面(富田由美子)  
 46 菱縄股間縛猿轡(前田真知子)  
 47 苛酷の宴果てて(高村 浩子)  
 48 美しき緊縛女体(荒尾 慶子)  
 49 エビ責めの序曲(江口 淑子)  
 50 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)  
 51 料理される女体(高村 浩子)  
 52 美肌に映える縄(荒尾 慶子)  
 53 両手両足開責め(三浦 純子)  
 54 剃毛責めの結果(荒尾 慶子)  
 55 人の字型羞恥縛(江口 淑子)  
 56 浴室での浣腸責(江口 淑子)  
 57 股間に喰込む麻(深田 菊子)  
 58 浣腸責めのあと(福井 桃子)  
 59 黒髪前に垂れる(福井 桃子)  
 60 スナックで縛る(福井 桃子)  
 61 喰込む股間縄責(江口 淑子)  
 62 責めに呻くM女(高村 浩子)  
 63 片足挙げ開股縛(江口 淑子)  
 64 菱縄悲し泣く(江口 淑子)  
 65 M女を責め尽す(前田真知子)  
 66 引回される全裸(江口 淑子)  
 67 尻立蠟燭悦虐(福井 桃子)  
 68 羞恥責を待つ女(深田 菊子)

69 凌辱に捧げる体(高村 浩子)  
 70 剃毛の女体展開(荒尾 慶子)  
 71 被縛者のマダム(江口 淑子)  
 72 縄の山と浣腸器(福井 桃子)  
 73 強制足挙臀部晒(高村 浩子)  
 74 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)  
 75 両手両足吊り責(江口 淑子)  
 76 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)  
 77 全裸一直線開股(福井 桃子)  
 78 裏門を開放する(深田 菊子)  
 79 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)  
 80 後手胴締股間縛(深田 菊子)  
 81 強烈海老責地獄(江口 淑子)  
 82 大の字縛り正面(高村 浩子)  
 83 足挙げ強制開陳(高村 浩子)  
 84 海老責の耐久度(荒尾 慶子)  
 85 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)  
 86 後手吊上げ責め(三浦 純子)  
 87 羞恥責臀部露出(三浦 純子)  
 88 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)  
 89 淫虐に晒す女体(高村 浩子)  
 90 マダム開股の図(福井 桃子)  
 91 がっちり後手縛(深田 菊子)  
 92 無惨白肌の縄痕(前田真知子)  
 93 妊婦大の字縛り(富田由美子)  
 94 開脚を強要せよ(富田由美子)  
 95 引回される妊婦(富田由美子)  
 96 強烈麻縄掛け(前田真知子)  
 97 股間縛の引回し(江口 淑子)  
 98 正座する股間縛(荒尾 慶子)  
 99 荒縄後手二つ折(前田真知子)  
 100 椅子開股羞恥責(前田真知子)



木馬責めにあう三態

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号△もく▽

乳房責めの苦悶表情

大手札二枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もろ▽

強烈なエビ縛り

大手札三枚一組 五〇〇円  
関谷富佐子 略号△もい▽

乳枷と貞操帯着用

大手札三枚一組 五〇〇円  
山原 清子 略号△もや▽

檻に入れられた捕われ女

大手札二枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△もの▽

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円  
山原 清子 略号△ひろ▽

入墨女体の全裸姿態

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号△ひへ▽

黒フンドシの刺青女体

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号△ひね▽

刺青姐御晒の腹巻脇差姿

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号△ひほ▽

刺青姐御晒の腹巻短刀姿

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号△ひり▽

両手吊りにあえぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号△ひお▽

ポリウムをくびる妖蛇の縄

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号△ひか▽

後手垂直強烈しばり

大手札三枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号△ひけ▽

一米まとわぬ柔肌緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号△ひく▽

豊胸をくびるむこき縄目

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号△ひき▽

開股羞恥責めの恥態

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△しう▽

尻立て鞭打ちの艶姿

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△しつ▽

あぐら縛りの羞恥責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△しよ▽

片足引ききつけ縛り

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△しち▽

髪吊り責め強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△した▽

柔肌に炸烈するムゴい答

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△して▽

貞操帯着用にて鞭打ち

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△しや▽

ムチの痛打にもかく女体

大手札四枚一組 六〇〇円  
安井喜久子 略号△しゆ▽

前開きゴム製オシメカバー

大手札12枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号△しま▽

前開き布製防水オシメカバー

大手札12枚一組 一八〇〇円  
大塚 啓子 略号△しな▽

妊娠したお腹を見て

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆわ▽

縛られた妊婦横臥姿態

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆよ▽

被虐に燃える若き妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆぬ▽

縛られて尚見せたい妊娠腹

大手札四枚一組 六〇〇円  
中河 恵子 略号△ゆる▽

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦 略号△きす▽

奴隷の捨札開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きむ▽

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きま▽

竹柱立縛り正面晒しもの

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きみ▽

柱宙縛り苦悶表情

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きめ▽

猿ぐつわ股間縛り引回し

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きも▽

マゾ女のMの生態

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きに▽

奴隷女のマゾの生態

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きね▽

私はあなたの奴隷です

大手札三枚一組 四〇〇円  
木村 洋子 略号△きふ▽

美貌の裸身に鮮やかな縄目

大手札三枚一組 五〇〇円  
絹川 文代 略号△きん▽

激痛！逆エビ責めの惨美

大手札四枚一組 六〇〇円  
大塚 啓子 略号△きえ▽

女奴隷を弄ぶ三人プレイ

大手札八枚一組 一二〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きあ▽

二女をいじめめる啓子

大手札十枚一組 一五〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きい▽

股裂き責めと逆さ吊り

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きう▽

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きお▽

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きさ▽

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きし▽

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 六〇〇円  
大塚・東浦 略号△きせ▽

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 八〇〇円  
大塚・東浦 略号△きそ▽



|                                             |                                             |                                              |                                               |
|---------------------------------------------|---------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| 明瞭な臨月腹の妊娠線<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>増田みゆき 略号八りきV  | 膨満の妊娠腹の緊縛<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八おみV   | 産み月の膨大な腹<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>安原さゆり 略号八よまV     | 膨満腹も露わな両手挙げ縛り<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のろV |
| 双胎の臨月腹を鑑賞する<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>増田みゆき 略号八りけV | 妊婦開股縛り哀歎<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わうV    | 麻縄でくびった妊婦腹<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八よはV   | 竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のはV  |
| 妊婦の乳房を縛り弄そぶ<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>増田みゆき 略号八りさV | 八力月の妊婦開股責め<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わのV  | ころがされた緊縛の妊婦<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八よほV  | 十文字縛りの妊婦腹<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のほV     |
| 妊婦後手縛り引き回し<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>増田みゆき 略号八りしV  | 妊婦腹誇張の開股縛り<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わえV  | 臨月妊婦の革紐縛り<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八よにV    | 柱縛りに苦しむ九力月の妊婦<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のほV |
| 亀甲縛りの臨月妊孕美<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>増田みゆき 略号八りたV  | 妊孕美人の媚態立像<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わおV   | 見事に美しい臨月腹妊婦<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八よちV  | 開股責めと椅子縛りの妊婦<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のほV  |
| 乳房緊縛の双胎臨月腹<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>増田みゆき 略号八りちV  | 妊孕美人の媚態坐像<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わきV   | 臨月の妊婦麻縄縛り<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八よらV    | 脈打つ全裸の臨月腹<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>中河 恵子 略号八こふV     |
| 臨月双胎蛙腹の股間縛り<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>増田みゆき 略号八りぬV | 両手吊り片足挙げの妊婦<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わくV | 臨月の妊婦全裸鑑賞<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八よへV    | 猿轡にうめく臨月妊婦腹<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>中河 恵子 略号八このV   |
| 浣腸される妊産婦<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>増田みゆき 略号八りひV    | 縛られた妊婦の艶姿<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わすV   | 羞らう妊婦の裸身前向立像<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のまV | 革紐による臨月腹股間縛り<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>中河 恵子 略号八こやV  |
| 臨月妊婦の全身像<br>大手札二枚一組 四〇〇円<br>安原さゆり 略号八りせV    | 両手一本吊りの妊婦<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八わせV   | 九力月の妊婦腹を晒す<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のめV   | 逆さ吊りの臨月妊婦<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>金原奈加子 略号八さめV     |
| 臨月妊婦腹の側面<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>安原さゆり 略号八りそV    | 臨月の妊婦三態<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>安原さゆり 略号八わちV     | 九力月の妊娠腹を縛る<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のやV   | 強烈縛り妊婦責め<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>金原奈加子 略号八さもV      |
| 妊婦臨月腹のアップ<br>大手札二枚一組 四〇〇円<br>安原さゆり 略号八りとV   | 動物的な臨月妊婦の腹<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>安原さゆり 略号八よみV  | 便々たる太鼓腹に縄掛け<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>木戸 悦子 略号八のしV  | 妊婦全裸縛りの全身<br>大手札三枚一組 五〇〇円<br>金原奈加子 略号八さにV     |
| 恵子の妊孕美緊縛<br>大手札四枚一組 六〇〇円<br>中河 恵子 略号八おにV    |                                             |                                              |                                               |



|                                        |                                                 |                                                  |                                                  |                                               |                                                 |                                                  |                                                   |                                                  |                                                  |                                                  |                                                  |                                                 |                                                  |       |
|----------------------------------------|-------------------------------------------------|--------------------------------------------------|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------|-------------------------------------------------|--------------------------------------------------|---------------------------------------------------|--------------------------------------------------|--------------------------------------------------|--------------------------------------------------|--------------------------------------------------|-------------------------------------------------|--------------------------------------------------|-------|
| 若妻初妊娠の哀歎<br>大手札三枚一組<br>略号△さい<br>五〇〇円   | 妊娠腹の緊縛又ード側面<br>大手札三枚一組<br>略号△さみ<br>五〇〇円         | 金原奈加子<br>大手札三枚一組<br>略号△さみ<br>五〇〇円                | 若妻の緊縛妊孕美<br>大手札三枚一組<br>略号△さま<br>五〇〇円             | 膨満腹妊婦の乳房責め<br>大手札三枚一組<br>略号△さむ<br>五〇〇円        | 金原奈加子<br>大手札三枚一組<br>略号△さむ<br>五〇〇円               | 臨月腹若妻全裸晒人形<br>大手札三枚一組<br>略号△さち<br>五〇〇円           | 金原奈加子<br>躍動する妊婦の裸像<br>大手札三枚一組<br>略号△さほ<br>五〇〇円    | 妊娠という異常美<br>大手札三枚一組<br>略号△さへ<br>五〇〇円             | 金原奈加子<br>見てほしい若妻の臨月腹<br>大手札三枚一組<br>略号△さよ<br>五〇〇円 | 金原奈加子<br>若妻妊婦の全裸全身肢体<br>大手札三枚一組<br>略号△ささ<br>五〇〇円 | 金原奈加子<br>八カ月の妊孕腹鑑賞<br>大手札四枚一組<br>略号△ほち<br>六〇〇円   | 増田みゆき<br>双胎妊婦の乳房と腹部<br>大手札四枚一組<br>略号△ほる<br>六〇〇円 | 増田みゆき<br>八カ月の双胎腹菱縄縛り<br>大手札四枚一組<br>略号△ほわ<br>六〇〇円 | 増田みゆき |
| 岩田帯をする双胎妊婦<br>大手札四枚一組<br>略号△はた<br>六〇〇円 | 増田みゆき<br>双胎懐妊の生態を探る<br>大手札四枚一組<br>略号△ほれ<br>六〇〇円 | 増田みゆき<br>全裸の双胎妊婦を見せる<br>大手札四枚一組<br>略号△ほそ<br>六〇〇円 | 増田みゆき<br>便々たる双胎初産妊娠<br>大手札四枚一組<br>略号△ほま<br>六〇〇円  | 増田みゆき<br>臨月の妊婦又ード<br>大手札三枚一組<br>略号△にわ<br>五〇〇円 | 田中美佐子<br>臨月妊婦の裸身立腹<br>大手札二枚一組<br>略号△にた<br>四〇〇円  | 田中美佐子<br>九カ月の妊婦腹<br>大手札三枚一組<br>略号△にの<br>五〇〇円     | 安原さゆり<br>首枷手枷で責められる妊婦<br>大手札三枚一組<br>略号△にゆ<br>五〇〇円 | 増田みゆき<br>双胎妊婦腹強調縛り<br>大手札四枚一組<br>略号△にき<br>六〇〇円   | 増田みゆき<br>緊縛と猿轡双胎妊婦虐待<br>大手札五枚一組<br>略号△にけ<br>七〇〇円 | 増田みゆき<br>後手縛りの双胎妊産婦<br>大手札四枚一組<br>略号△にさ<br>六〇〇円  | 増田みゆき<br>動物的な双胎妊婦の生態<br>大手札四枚一組<br>略号△にな<br>六〇〇円 | 増田みゆき                                           | 増田みゆき                                            | 増田みゆき |
| 白肌に喰い込む縄目<br>大手札三枚一組<br>略号△とわ<br>五〇〇円  | 松山真樹子<br>一糸まとわぬ白い柔肌<br>大手札三枚一組<br>略号△とら<br>五〇〇円 | 松山真樹子<br>開陳した華麗な肢体<br>大手札三枚一組<br>略号△とゆ<br>五〇〇円   | 松山真樹子<br>縄目に喘ぐ麗人諦観の相<br>大手札三枚一組<br>略号△とえ<br>五〇〇円 | 松山真樹子<br>縛られた美女二人<br>大手札三枚一組<br>略号△とそ<br>五〇〇円 | 小池・松山<br>全裸の美女二人の連縛<br>大手札三枚一組<br>略号△とれ<br>五〇〇円 | 小池・松山<br>SとMの美女の甘い一瞬<br>大手札三枚一組<br>略号△とさ<br>五〇〇円 | 小池・松山<br>縄に通うSM愛情の焰<br>大手札三枚一組<br>略号△とけ<br>五〇〇円   | 小池・松山<br>全裸の豊満な女体にムチ<br>大手札四枚一組<br>略号△もた<br>六〇〇円 | 関谷富佐子<br>両手吊りで悶える裸身<br>大手札三枚一組<br>略号△もえ<br>五〇〇円  | 関谷富佐子<br>女奴隷を飼育するシーン<br>大手札五枚一組<br>略号△きて<br>八〇〇円 | 大塚・東浦<br>凌辱されるマゾ女の恥態<br>大手札五枚一組<br>略号△きと<br>八〇〇円 | 大塚・東浦                                           | 大塚・東浦                                            | 大塚・東浦 |
| 完全逆さ吊り責め<br>大手札三枚一組<br>略号△さつり<br>五〇〇円  | 木村 洋子<br>少女全裸アグラ縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△てへ<br>五〇〇円  | 長野 良子<br>少女全裸屈伸縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△てほ<br>五〇〇円    | 鬼面と接吻する少女<br>大手札二枚一組<br>略号△てち<br>四〇〇円            | 長野 良子<br>緊縛女体撮影風景<br>大手札四枚一組<br>略号△むら<br>六〇〇円 | 大塚 啓子<br>柱縛り宙吊り晒し<br>大手札二枚一組<br>略号△つめ<br>四〇〇円   | 大塚 啓子<br>柱縛り全裸臀部晒し<br>大手札五枚一組<br>略号△つま<br>七〇〇円   | 大塚 啓子<br>柱正面縛り折檻<br>大手札三枚一組<br>略号△つも<br>五〇〇円      | 大塚 啓子<br>豊満な双乳の強調縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△そう<br>五〇〇円  | 長野 良子<br>八の字開股縛り羞恥責<br>大手札四枚一組<br>略号△そか<br>六〇〇円  | 中河 恵子<br>菱縄縛りの全裸を晒す<br>大手札四枚一組<br>略号△そえ<br>六〇〇円  | 中河 恵子<br>全裸二つ折り縛りの苦悶<br>大手札四枚一組<br>略号△そむ<br>六〇〇円 | 中河 恵子                                           | 中河 恵子                                            | 中河 恵子 |



|                                       |                                        |                                        |                                      |                                       |                                        |                                          |                                       |                                        |                                         |                                        |                                       |
|---------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------------|
| 浣腸責め地獄の妊産婦<br>大手札四枚一組 略号△ほなV<br>増田みゆき | 浣腸責めの甘い恐怖<br>大手札三枚一組 略号△とかV<br>中河 恵子   | 浣腸液注入直後の状況<br>大手札三枚一組 略号△とまV<br>中河 恵子  | 強制浣腸の各美姿態<br>大手札三枚一組 略号△とみV<br>中河 恵子 | 浣腸責めの美態開陳<br>大手札三枚一組 略号△とめV<br>中河 恵子  | 浣腸を待つポーズ<br>大手札三枚一組 略号△ともV<br>中河 恵子    | エネマと縛りの恐怖<br>大手札三枚一組 略号△よてV<br>長井葉津子     | エネマ責めの恐怖<br>大手札三枚一組 略号△よるV<br>長井葉津子   | 浣腸器を弄び愛撫する女<br>大手札三枚一組 略号△よるV<br>長井葉津子 | イルリガートルの浣腸責め<br>大手札三枚一組 略号△よたV<br>長井葉津子 | 浣腸にむせび泣く女<br>大手札四枚一組 略号△つゆV<br>大島 照代   | 身動き出来ぬ浣腸地獄<br>大手札四枚一組 略号△つえV<br>大島 照代 |
| 浣腸とオシメ装着<br>大手札四枚一組 略号△ひそV<br>大塚 啓子   | 強制浣腸責めの序曲<br>大手札三枚一組 略号△よかV<br>長井葉津子   | 襲いくる浣腸器嘴管の先<br>大手札三枚一組 略号△よりV<br>長井葉津子 | 鼻孔の奥を探る魔手<br>大手札三枚一組 略号△はむV<br>中河 恵子 | 開孔器にてひらく鼻孔<br>大手札三枚一組 略号△はらV<br>中河 恵子 | なぶられる拘束裸身の鼻<br>大手札三枚一組 略号△はれV<br>中河 恵子 | 仰臥した緊縛女体の鼻なぶり<br>大手札三枚一組 略号△はにV<br>中河 恵子 | 美女の鼻をもてあそぶ<br>大手札三枚一組 略号△ちるV<br>左近麻里子 | 美女の鼻孔を觀賞する<br>大手札三枚一組 略号△ちれV<br>左近麻里子  | 開孔器で検査する鼻孔<br>大手札三枚一組 略号△ちきV<br>左近麻里子   | 鼻孔に煙草挿し込み責め<br>大手札三枚一組 略号△ぬとV<br>美木乃々子 | 可愛い鼻責めのアップ<br>大手札五枚一組 略号△ぬはV<br>美木乃々子 |
| 強烈縛りで顔面翻弄<br>大手札八枚一組 略号△ぬほV<br>美木乃々子  | 可憐乙女の鼻をいたぶる<br>大手札四枚一組 略号△るえV<br>一宮百合子 | 鼻責めと鼻孔のアップ<br>大手札三枚一組 略号△ねけV<br>中河 恵子  | 鼻責めの陶醉境<br>大手札三枚一組 略号△なはV<br>大塚 啓子   | 淫虐鼻なぶりの形相<br>大手札三枚一組 略号△ないV<br>大塚 啓子  | 鼻の穴を責める<br>大手札三枚一組 略号△なくV<br>大塚 啓子     | 夫婦連縛にて鼻責め<br>大手札十枚一組 略号△らかV<br>増田みゆき     | 鼻責めに悶える女<br>大手札七枚一組 略号△むるV<br>木村 洋子   | 顔を凌辱される女<br>大手札四枚一組 略号△むよV<br>木村 洋子    | 鼻責めと緊縛<br>大手札五枚一組 略号△ういV<br>大塚 啓子       | 鼻責めによる悦楽<br>大手札二枚一組 略号△きなV<br>東浦・大塚    | 美しき鼻をいたぶる<br>大手札三枚一組 略号△ゆはV<br>遠藤百合子  |
| 乳房いじめの責め<br>大手札二枚一組 略号△とおV<br>大塚 啓子   | 豊かな乳房を責める<br>大手札三枚一組 略号△ときV<br>東浦ひかる   | 逆エビ吊り責め<br>大手札六枚一組 略号△りつ1V<br>梨花悠紀子    | 逆胴吊り責め<br>大手札六枚一組 略号△りつ2V<br>梨花悠紀子   | 大の字逆さ吊り<br>大手札二枚一組 略号△むのV<br>増田みゆき    | 豊満乳房しばり責め<br>大手札三枚一組 略号△うはV<br>長野 良子   | 吊り打ち責め<br>大手札三枚一組 略号△やりV<br>関谷富佐子        | 腰元の吊り責め<br>大手札二枚一組 略号△こりV<br>村井知可子    | 乳房強調膨隆責め<br>大手札三枚一組 略号△こわV<br>佐々木真弓    | エネマシリソジ挿入責め<br>大手札三枚一組 略号△えねV<br>大塚 啓子  | ワシづかみ責めの乳房<br>大手札三枚一組 略号△えうV<br>大塚・東浦  | 強烈乳房責め五態<br>大手札五枚一組 略号△てらV<br>山原 清子   |





私は、ねっからの妊婦マニアで今まで、ありとあらゆる雑誌や本から妊婦に関する資料を集めておりましたが、中々思うように集まりません。いつも貴誌の妊婦物に対する開拓精神には只々、頭が下がる思いです。最近の庄巻は、なんといいっても福井桃子さんの素晴らしい妊娠腹です。10月号では高野原美さんが「夢に見た桃子緊縛」を書いておられますが、私も一度でいいから、福井桃子さんのような素晴らしい臨月腹を、この目で見この手で触れてみたいと願っております。五月号の「私の蛙腹を責めてみて」という福井桃子さんの記事には何十冊の雑誌にも増して私を心から、満足させてくれました。それに福井桃子さんの太鼓腹ばかりか、木戸悦子さん、中河恵子さん、富田由美子さん、増田み

(愛知県・久坂ミツル)

私は貴誌の熱烈なファンです。一月も欠かしたことなく、毎月、購入しております。毎月25日になると、書店へ行って奇クを買うのが楽しみです。奇クを手にとるとまず、塚本氏と辻村氏のルポを読みます。私が最も興味を、ひかれるのは流腸です。だから十月号の塚本氏のルポ、鈴木千鶴子さんの「東京の踊り子流腸記」は非常にうれしく、心をわくわくさせて読

みました。それに千鶴子さんの流腸フォトが沢山のついでに良かったです。流腸の外には開股縛りの様な羞恥責めや猿ぐつわに関心がありません。猿ぐつわでは笠井奈保子さんの上下の唇の間にかまされたのが、とてもよく感じが出ていて好きです。こうした方と、お友達になれたらと、いつも思っています。

(東京都・花井輝雄)

私は何時も奇クを愛読させて頂いて居る二十一才になる女子洋裁生です。プレイ其の他で女性同志御交際下さいませんか。奈良の生駒〇〇子様、京都の南〇〇〇子様御便り下さいませ。いろいろ興味を持つプレイのお話し合い致します。興味の品、試作してお送りもします。私は現在、ふんどしに興味を持っております。女性陣美の写真で、桜井葉子さん等、送って頂いたこともあります。同好の方、お便り下さい。

(守口市・小野みどり)

K誌の最近号は、数年来、待望のグラビア版「鼻責め」写真など現われて、我々責めマニアにとっては望外の喜びでした。殊に有難いのは、其の方面に余り好みをお

持ちでない辻村様が、鼻責め写真をK誌に載せていただける事です。此の上、御情けに甘える様ですが前田真知子、高村浩子両嬢の弄鼻取材を切にお願いする次第です。真鍋五十二様、山井次良様も同好の方と承りました。真鍋様の遠き昔の鼻責め写真も小生の筐底深く蔵して居ります。小生も虐鼻の道に、いそしみ、フォトに8ミリにある程度、蓄積を楽しんでいる者です。鼻のみならず眼、頬、唇等にも変形を試みる事も、こよなきあこがれです。どうぞ諸兄の御成果を、ドシドシ誌上に御発表下さい。御呼びかけ下されば写真交換情報交換など御願いしたいと思ひます。

(東京都・墨堤YK生)

木村洋子様。奇ク10月号に貴女の書かれた「マゾの放浪記」拝見しました。僕も以前からSMに興味を持ち本などは、よく読みますが、プレイの方は、わずかです。貴女の文を読み、そして、写真を見ておきますと、もうじつとしておれず、この文を書きました。僕も貴女と同様、羞恥責めに興味を持っています。はずかしい縛り方にして、はずかしいポーズをさせ貴女が一番、はずかしい所を脛開



口器などの小道具で、じっくり念入りに検査して責めてあげます。貴女の、もっと変わった経験や体験も聞かせて下さい。貴女と友達になれる事を夢に見て毎日、新しい責めを考えております。

(大阪市・我堂俊次)

私の奇クに対する愛着は益々強くなる一方で、過去五年余に及ぶ莫大な量の奇ク誌を身のまわりに積みかさね、奇クの過去を繰っております。そして素晴しかった金原奈加子の童女妻、妊婦縛りなどを始めとする華麗な想い出にたえきれず、切々の情をこめて私なりの好みの文を綴りながら、抜粋し「奇ク五年の愛読の精」とでも申すべき感激を、まとめようとしております。なお末筆ながら最近の早坂ご夫妻の大活躍には只々感服しております。願わくば夫婦交換

〓御送金についてのお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されております。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もあり、普通のご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

SMプレイをと思いますが、実現は数多の困難があり、せめて誌上にて浣腸責めの麗姿を拝見致したく、乞い願う心地でおります。

(神戸市・大西弘明)

10月号の東京の踊り子浣腸記の鈴木千鶴子さんの写真は、よかったです。今後も、こうした写真をたくさん、のせてほしい。東京に中村恵美子さんのような女性がいるのを読者通信で読み、うれしくなりました。私は、二十三才の独身男性。一六五センチ、五五キロ。美男子とはいかないが、中村恵美子さんを縛り浣腸できれば素敵だと思っています。巻頭写真の笠井奈保子さんの表情は、すばらしい。コブ付きの股間しほりも見事。こんな責め方を私も、したい。

(東京都・市川秋男)

さわやかな秋風の吹く季節となりました。奇ク編集の皆さま、愛読者の皆さま、御健勝のことと申します。奇クも、発行以来二十数年にわたる長い歴史を誇り、当時紅顔の美少年だった小生も、不惑の齢を重ねている現在です。こうした雑誌としては前例のない長いキャリアとなり、小生の如き長年

の愛読者にとっては誠に嬉しい限りです。若輩の頃から中年の今日まで毎月毎月、馴染み親しみ手にとってきた奇クの、そのときどきの内容には、心なぐさめられてきたものでした。小生の青春もまた奇クの歴史と共にあったような気がする今日此頃です。どうか、いつまでも永続して発行されることを心から祈り上げます。

(東京都・上村則夫)

十月号「東京の踊り子浣腸記」と「羞恥責めの実態」が、楽しめた。塚本、辻村氏の実績からすれば当然かもしれないが、ひととき興味を深めた。鈴木千鶴子さんの浣腸趣味は予想外のプレゼントとして僭越ながらファン一同に代り、有難くお礼申上げたい。ここに「天使」対「踊り子」の華麗な対決の実現を希望したい。つまり浣腸によって深田菊子さんと鈴木千鶴子さんの菊花を連結し、SMプレイの金字塔を本誌上に建立してほしいと願うのは愚輩のみにあらずと考える。若くて美しい両嬢の、あくなき探求心に幸あれ。

(千葉市・檜田正二)

初めてお便りします。私の思春

期の頃は今のようにな「SM」という言葉も、あまり聞かれず、自分はどうしようもないアブな人間だと自分自身、思っていました。自分の様な人間は、おそらく他には居ないだろうとさえ、思っていたのです。そんな私でしたから、奇クを書店で見つけた時の驚きは、大変なものでした。私は反射的にそれを手にして、代金を支払ってしまいました。先ず何よりも、緊縛された女体の写真を眼にした時、心の臓がとまるのではないかと思いましたが、その写真の持つ、何とも言えない妖しいムードに酔ってしまっていたのです。それ以来、奇クは私の最良の友となり、分譲写真も数多くコレクトしました。最近になって意外にMSに興味を持つたれる方が多いのには驚いています。今は「浣腸」に、すごく興味を持っています。私のガールフレンドと、この間ささやかな浣腸プレイをしました。これは彼女の希望だったのですが、今では私の方がマニアになってしまったようです。私の恋人が深田菊子や前田真知子嬢のような美人だと、プレイフォトも可能なのですが……。最後に編集部の方々の御健康と今後の御活躍をお祈りいたします。



○ (和歌山市・東川安男)

私は以前にも猿轡ファンだと書いたことがありましたが、今月号(10月号)ほど内容が充実している号はないと思えるほどです。出演しているモデルの過半数以上の8人もが、この猿轡をされていると言ふことを数えてみただけでもファンにはゾーンとくると思われる。特に深田菊子の211、202頁、木村洋子の211、205頁、巻頭に見られる高村浩子や笠井奈保子の猿轡もすばらしい。それにサロン楽我記100回を記念して発表された三宅満恵の頁など216は、なんとも言えない作品であっただけに何回も、くり返しくり返し見せてもらった。猿轡では満足を得たが、浣腸では後から来た鈴木千鶴子に前田真知子先輩が先をこされてしまったのが、とても残念でならない。また前田真知子ファンとしては、たとえ一回でもよいから、今月号の深田菊子や木村洋子等にされたような口に強くかませた猿轡を期待していたが、近い将来、彼女にもこのような猿轡と、鈴木千鶴子にされた以上の強烈な浣腸を希望しております。

(東京都・西村まこと)

○

高橋道子さん。10月号の貴女の記事、数回読み返しました。文中各処にあらわれているM性。つぎに貴女の写真。特に貴女の目。貴女の体にひそんでいるM性が貴女の目によって表現された時の事を思い、とりつかれたようにペンを走らせたわけです。残念ながら東京在住ではない様に思いました。しかし、いずれ奇クのベテラン諸先生により、貴女の恍惚のポーズを見る事が出来るであろうと期待をする事で、残念さを抑えて居ます。私の期待は、前田真知子嬢の目。手足の指。そして全身。これら全ての心にくいポーズにも増して貴女はすばらしいM性を見せて呉れる事です。

(東京都品川区・小山 勝)

○

毎月毎月、私達ファンのためにすばらしい編集をつづけて下さり誠にありがとうございます。毎月入手するなり、二晩ぐらいいで読みたいとおしております。もっとも私がS的ですので、最初に目をとおすのは、やはり辻村様のSMカメラハントから、ということになります。今月号(11月号)では浣腸写真に真正面からとりくんだ意欲に

は、頭の下がる思いがします。P二二四、P二二六、P二三一などは、実にリアルに双丘をわって浣腸器が挿入されている様を視覚に訴えており、さほど浣腸に興味をおぼえなかった私でさえ、何かしら強く訴えかけられるものを感じました。慎重な編集方針により、なかなかのせられなかったものですが、さすがは本家、他誌の浣腸写真とはその質に於いても量に於いても、大きな差があることは明らかです。今後SMの旗手として発展されることを、一読者として願ってやみません。大分の南加津子様とは、この二月より読者通信欄で交信してまいりました。これも奇クあつてのことと感謝しております。幸い南様からも返信をいただき「責められてみたい」とまで、言ってくれました。つきましては今しばらく文通をして、お互いにSMの倫理をふまえて交際できるという目途が立ち次第、実際のプレイを試してみたいと思っております。

(名古屋市・三宅俱隆)

○

深まりゆく秋の気配の濃い今日この頃、益々充実した奇クを手にすることは本当にうれしいことで

す。11月号入手、例によって隅から隅まで一気に読了。なんとなく胸の高まりを感じ、そして躍動する鼓動に生きていることの喜びを覚えしました。巻頭の口絵写真から巻末の編集後記に至るまで、息もつかせず読ませる奇クの魅力は、一体どこにあるのでしょうか。大抵、本や雑誌は読者とは遊離して勝手に作り上げたものを、読者が買って別世界のものとして読んでいるものですが、奇クだけは全誌面に読者の血が、いきいきとして通っているところに、魅力の秘密があるように思います。辻村隆氏が「サロン楽我記」が百回目を迎えた10月号で言っておられたがこのように長く数年、或は十年以上にもわたって連載されるということは、奇クの真面目さというものを如実にあらわしている。半年か一年でやめてしまう雑誌では、とても真似の出来ることではありません。今、連載されているものの中でも、「大噴火」の五十回、「M派交友録」の三十回、「紫蘭の門」の十五回と息の長さを誇っています。団氏のとを受けて山光純の「花と蛇」もすでに十一回あと何回、続くことや、今月号が楽しみです。といって私は何も







お便りしました。といいますのは一度、男性の方の手で、この私を裸にして縛ってほしいと思いましたが、恥かしいのをしのでペンをとりました。私は、まだSMのことにについては何も存じませんが、ただ縛ってほしいだけです。写真をとって下さっても、かまいません。顔さえ、かくして下さるのだしたら。私を縛ってみようと思われる読者の方がありましたら、お便り下さい。中肉中背で色は白い方です。(寝屋川市・菅原妙子)

十一月号に読者通信を寄せられた笹井世津子さん。貴女は41年12月号の奇クにも、浣腸通信として「私の浣腸レポート」という報告を書いておられますが、いつもながら浣腸について並々ならぬ研究をかさねておられることには敬意を表します。これから女性の立場からの浣腸についての告白を、どしどしお書き下さるようお願いいたします。今、奇クに登場している若い縛りモデルの方々のなかにもなかなか浣腸熱が盛んなようで喜んでいきます。女性の立場からの浣腸告白を望んでおります。夫婦プレイも盛況で、うれしいです。早坂郁子さんの「愛と倒錯の記録」

は実にすばらしかった。挿入されている写真も全く見事で、こんな女性を伴侶に持っている男性は幸福の極にあるものと羨ましくて仕方なかった。

(神奈川県・山本春樹)

笠井奈保子様、御元気ですか。先月号で貴女の緊縛フォトを見ました。いい身体をしていますね。肉づきのよい乳房は、なんとも言えないぐらい、形がよろしいですね。一度、会っていただけませんか。貴女に対して浣腸責め、ローソク責め、鳥の羽根による擦り責め、女体生花など、縛ったり責めたりしてSMプレイをしたいと思っています。そしてSMプレイだけでなくカメラのモデルになっていただきたいと思っています。どうか私の緊縛モデルになっていただけませんか。(加古川市・神野留雄)

最近の奇クに「生首もの」が見られないのは残念です。以前は、新宮夫人の生首のグラビア写真や記事が、たくさん載ったものでした。愛好者が少ないせいもあるのでしょうか、たまには、少数意見を満足させるものも、お願いします。(青森県・小倉幸男)

# ☆福井桃子の臨月腹と臨月腹緊縛写真

愈々迎えた福井桃子さんの臨月は私達妊婦ファンにとって最大の楽しみでした。自分の妊娠した日でも料として自分の妊娠した日でも提供された福井桃子さんの協力によって、ここに見事な文庫を残すことが出来ました。八カ月から始まった九カ月の極鮮明な資料はきつとマニアの方々の熱狂させることとします。どうか文庫の価値を高くこの妊婦資料を各月一括して蒐集下さるようお願いいたします。

## 出産直前の緊縛美

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 臨月腹の開股縛り

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 堂々たる臨月縛り

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 両手吊り臨月妊婦

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 逞しき腹と臀部

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 後手縛りの太鼓腹

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 全裸臨月腹の展示

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 臨月の奴隷犬調教

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。

## 両手吊り臨月妊婦

大手札三枚一組 略号八ぬぬ五〇〇円  
福井桃子 臨月腹の上部に縄を掛け控えた臨月腹の上部に丸く膨らんだ妊婦を縛る。



現在、都内のある私立大学の文学部に在籍している一女性です。以前からSM的な小説などを読み漁り、私の身体にもマゾの血が流れているように思っているのですが、実際の体験は、ほとんどありません。本誌の読者通信に時々見かける呼びかけに応じて、プレイしてみたいとも思うのですが、やはり少し、ためらってしまいます。もし出来ることなら、短時間のプレイといったものでなく、長時間、本当に奴隷として使役されてみたいとも思います。実は、まだ考えただけです。アメリカの奴隷制度を文学の方からアプローチしたものを卒論にしたいなどと考えているのですが、そんなことを考えていると、むしろ本当の奴隷の心理というものに興味を覚えてくるのです。客観的な見方ではなく奴隷の立場、被隷属者の立場からの考え方をしてみたい。そして一層のこと、自分が奴隷体験をしたら、どんなものかと、思うのです。一カ月か二カ月の期限をきめて、その間は、どんなに辛く苦しくても解放されない。そういったあきらめの気持を、もったうえで拘束されたらどうかと思います。

一、二カ月なら学校のほうも何とかなるのです。読者のかたで、そのような体験を与えて下さる方がおられるでしょうか。できるなら多少、年輩のかたで、ご夫婦でもよいと思います。奴隷になるのですから、着衣が許されるとは思っていませんし、肉体労働もするつもりです。命をつなぐだけの食糧をお与え下されば何も欲しがりません。二カ月間、いっさいの人格を剥奪され、全裸の動物のような姿で所有者の方に、ご奉仕する気持は、どんなものでしょうか。ご夫婦の方なら、同性である奥さまからも軽べつされ、のしられながら働く、はじめな気持ちでしょうね。本誌に登場するような鞭打ち縛りなどは、もちろん、浣腸とかアヌス責めなど全く経験はございませんが、お望みになるのなら、お受けして耐えてみる、つもりです。ただの遊びの延長でなく、はじめに一寸へんな表現ですが私の希望をかなえて下さるような方がありましたら、誌上でお呼びかけ下さい。なお私が望んでいるような奴隷体験を本当になさった女性の方がありません。お眼にかかるとは、できないでしうか。お話をうかがえたらと思っ

## ☆笠井奈保子の若々しき肢体を緊縛す

六月号のカメラ・ルポで、その初々しい緊縛姿を誌上に登場させた笠井奈保子さんは女性の緊縛フォトを見るのが大好きだという。家事手伝のお嬢さんであるが、その鮮やかなカメラを駆使して取材した成果をここに印刷紙焼付の迫真的写真によってファンコレクターのアルバムの一頁を盛大に飾りたいと思う。乞う御一見！

## 縄に依る悶悦姿態

大手札三枚一組 略号八ぬゆ 五〇〇円  
笠井奈保子  
縛られたことで心中の動揺をかくしきれず真白い全裸の肢をくねくねとくねらせて悶える乙女。

## 縛りを耐える表情

大手札三枚一組 略号八ぬき 五〇〇円  
笠井奈保子  
縛られることが好きなのか嫌いなかわからないが、強烈に縛られ必死に耐える表情は美しい。

## 若き肢体美を縛る

大手札三枚一組 略号八ぬさ 五〇〇円  
笠井奈保子  
伸びやかな若々しい肢体を思いきり開陳して緊縛美をいっぱいにふりまく二十才の乙女の柔肌。

## 羞恥縛りの種々相

大手札三枚一組 略号八ぬあ 五〇〇円  
笠井奈保子  
乙女の羞かしさをいやという程

## 女体の悦虐を抉る

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円  
笠井奈保子  
縄―それは奈保子にとって果たしてどのような刺激を与えるのだろうか。この恍惚の表情を見よ。

## 若さを縄でくびる

大手札三枚一組 略号八ぬた 五〇〇円  
笠井奈保子  
むちむちと匂う花のような若さの溢れる女体を思ひのまに縄によって縛り上げ弄ぶSの醍醐味。

## 緊縛の姿態に恥ず

大手札三枚一組 略号八ぬて 五〇〇円  
笠井奈保子  
白い頬を真赤に染めて縛られることを恥ずる乙女は肢体をエビのように屈伸させて表情に現わす。

## 乙女の女体を曝く

大手札三枚一組 略号八ぬら 五〇〇円  
笠井奈保子  
奈保子の猿轡をかまされた表情を縦横正面から女体の秘奥を凝る垂れるほど正確にあばく。

## 開股縛りの決定版

大手札三枚一組 略号八ぬつ 五〇〇円  
笠井奈保子  
肉ののった太股を縄によって強制的に拡げさせられた美しくも妖しいムードの漂う女体開陳版。



おります。(東京都・山下悠子)

○

十一月号の「流腸志願」は流石辻村氏の流麗な、しかも手馴れたカメラルポであるだけに読みごたえ充分。しかも流腸を受けた鬼頭達世さんの姿態、特に臀部は流腸向きだけに、内容を盛り上げていく。流腸モデルはファッションモデルと異なりプロポーションは、どうしてもよいが、ただ見ただけでも、いかにも流腸をのみ込みそうな臀部でなくてはならない。骨のでたような尻、ヤセた尻、ダラリと落ちた尻は流腸モデルには向かない。その点、鬼頭達世さんの肉づきのよい、横に張った尻(十一月号二二四頁参照)は、たとえばカでかい二百CC流腸器でも十分のみ込んでしまうだろう。辻村氏よ、再度、彼女を流腸モデルにしよう。今度は、よりエロチックに、そして二百CC流腸器、イルリガートル、エネマ、水道直接流腸を駆使して、彼女の豊満にして、かぶりつきたくなるような魅力的な尻をメタメタに責めてほしい。できたら連載で辻村氏を司会者にして今迄、奇クに登場して来た数多くの流腸モデルとの対談が、企画できないだろうか。他のSM雑誌が手

がけていないだけに、面白いのではなからうか。

(東京都・平山連流)

○

最近、講談社から出された「切腹の話」を読んだ。著者の千葉徳爾氏は、かなりの資料を駆使して著述されているが、奇譚クラブの記事も、かなり引用されており、読者の多くを、かなり魅了したのではなからうかと推察される。普通の読者が、この本を読んだ場合少なからず驚くのは、やはり女の切腹の話ではなからうか。殊に異常な迄、切腹を願望する女性の心理は、男女の性に対する感覚の差異を、ある程度代弁しているようでもある。女の腹切りから、次々と私の脳裏に連想するのは、心中近松の描く、あの情念の世界である。そうして、その共通した情念は、日本文化の基調でもある。世にSM、あるいは切腹(殊に女の場合)、フェチなどという、すぐ異端者扱いをする傾向があるがこういう人達は一体、自分達の底に潜む情念を、どのように考えているのであろうか。奇譚クラブの愛読者の多くは非常に知性的に黒い情念を処理しているように見える。私も奇クを読んで十年近くに

なるが、この雑誌が持ちつづける長所は、非常に程度の高い風俗誌だという点にある。ただ興味本位に煽情的な雑誌であるなら、こうも長く刊行されなかつたろう。最近、この種の雑誌が多くて、みな所謂、SMポルノ的な程度の低い方へ走るが、是非、奇譚クラブだけは、その孤高さを保ちつづけて欲しい。(東京都・坂元睦朗)

○

九月号に私の読者通信をのせていただいたて有難うございました。おかげで奇クの読者の真面目な方とお知り合いになれて、ほんとうに嬉しゅうございました。はじめて主人以外の男性の方とプレイする機会を持ちました。写真も少しばかり写していただいたので、差しつかえないものを選んで誌上に発表させていただこうと思っております。その節は、よろしく願います。主人もそれ以来、非常にハッスルしますし、私も変わった責め方を変わった方から受け入れて、ほんとうに幸福な生活をつづけております。

(箕面市・玉木章子)

○

奇ク10月号で梅川幸子様の「ゴム衣、泥責めのプレイの体験」を

読んで、ここ三、四カ月眠れない日が読いております。特に、この文章は実感がこもっており、楽しく自分の頭の中に描いていると、一時でも早く逢って責めてみたいと思っている今日この頃です。幸子様は45才とか。私は現在、28才の若者です。私の母より少し若いですが私は45才ぐらいの人とプレイしたくて、たまらないのです。幸子様を私の奴隷として、こっぴどく責めてやりたい。特に、あらゆるゴムで、いたぶってやるし流腸をした上でゴムのズロースやゴムのオシメカバーを、はかせて排泄責めにもしてやりたいです。そんな格好で街の中を歩かせてやりたいと思います。歩くたびにポチャンポチャンと音がするなどと考えたら、たまりません。

(広島市・安東 進)

○

私は昨年と今年それぞれ奇クサロンに随想、随筆で一文を寄せました同僚の者です。早坂さんの記事とフォトは、ピンアップさせていただいて居ります。高松志朗さんと交信していらっしゃるのを、横から飛び入りして悪いと思い乍ら、筆をとりました。奥様の美しさもさる事乍ら、御愛育の程がし



のばれて燃える想いが、鏡を見る様です。乳房や大腿部にペンティングされたお腕は、大したものですね。妻をモデルにしたり、モデルさんをお願いしたりして色んなフォトも作りましたが、ボディペーティングの腕は是非、見せていただきたいものと思います。都合でワイフにも描いていただきたいと思っています。かつてはミス×××といわれたワイフですが、今は御腕をふるっていただくには、奥様の肌には勝てないでしょう。然し充分に手入はさせて居りますから、ボディは若い御婦人に劣ることはないでしょう。ボディペーティングは私達が好む処ですが残念乍らアクセサリをかくには今の私は不適當です。差支えさえないればパウリスターか、何処かで食事を共にしながら話をすすめられれば幸いです。

○ (神戸・瞳耀太郎)

奇クの心からの愛読者ですが、特に私は奇クサロンが大好きで、購入後に先ず頁をくるのがサロン欄です。それは同好者の偽りのない投稿が、あまた掲載されているからです。ナルシストらしいM女性からの自分自身の写真入りの寄

稿もあれば、美しい細君を縛り上げてのS男性の寄稿もありSMに對する惜情あふる愛読者からの生の声に接し、日頃の抑圧憂うつから解放される思いが致します。長年の愛読者なのですが、新しい方からの投稿を見ますと、親友が増えたような喜びを感じます。山形県の最上卓也氏が六月号で「我が初撮影の記」を公表なされた際にも二十四才のOL、裕子嬢(氏と同棲中と想像しました)の素晴らしい臀部に興奮を憶えながら、同じ喜びに耽りましたが、予想どおりで、氏が八月号で再度、華麗なる羞恥責めフォトを御公表なさり感慨を新たに致しました。ローソク責めが主体の氏の責めに裕子さんが耐えているのは、まだあどけなさ宿した可愛い容貌に似ずその豊満な肉体が求めるMの魔性とみており、さらに責めの向上を祈る次第です。きわだって見事なヒップの持主ですから、アヌス責めで肛門を開眼させ、その責めの美の極致を窺えるフォトを再々度ぜひ、御発表下さい。お待ちしております。

○

山光純殿。貴殿の「花と蛇」はいつも世間のウサ晴しに楽しく読

ませていただいております。提案などとは口はばったいのですが、断片的に案を並べてみます。一、昔あったという「ソレツケ、ヤレツケ」の責めをやり、刺さった際には、ひどい罰をあたえる。二、題名どおりの蛇、またはウナギとショーに出演させる。蛇などに酒を飲ませて酔わせてやると、適当に女体に向くと聞き及びます。三、短い双胴の張形ではなく、一米ばかりの竹の両端に脱脂綿をかたくまきつけて輪ゴム留め、二人で突きつてをさせてほしい。未だ余り会ったことのない珠江夫人とやらせ、二人に上流社交場の頃を思い出させる。四、乳房の先端やアヌス、それに、もっと大事なところには口紅を塗って野卑な男達を喜ばせる。五、美沙江を自由にすると珠江夫人をだまして、美沙江と珠江のレズショーを珠江の口から口説かせる。六、久方振りに小夜子を登場させ、静子夫人の前で強要されたとはいえ、見事なアヌスバナナ切りや、お習字を演じ、夫人を悲しませる。以上、駄文をろうしましたが、もっともっと素晴らしい夢をひろげて下さいますことを祈っております。

(神戸市・国川栄一)

○

十一月号の平山さん。二百CC硝子浣腸器の販売所を教えてくださいとの由、ベテラン浣腸マンとしての、その気持は、よく判ります。二百CC硝子浣腸器は浣腸マニヤにとって、よだれが出るぐらい欲しいものです。確か街の薬局で扱っているのは、せいぜい五十CC浣腸器までで、それ以上は薬局では扱っていないのが事実です。ただ百CCともなれば東京では「アテネ上野店」新宿の「パラダイス北欧」で売っていますが、二百CCともなれば、さすが前記二店でも扱っていません。ただ「パラダイス北欧」では二百CC注射筒は売っているのですが、これでも使えます。ただ、浣腸器の嘴管は真中についていきますので、スムーズにアヌスに挿入できますが、注射筒の嘴管は端についているので、嘴管だけ差し込めばいいが、注射筒とも挿入すれば若干の異物感があるので、やはり二百CC浣腸器を買った方がよろしい。さて、その販売所は東京都文京区本郷三丁目十八番地のトップ(株)本郷営業所(電話東京〇三―八二二―八二二四)で値段もメーカーだけに二千八百円と安く、たとえ一本でも売



次号(一月号)は十一月二十五日に発売いたします

るそうです。他では東京都内数多い浣腸器メーカーでも、さすがに扱っていません。前記トップの営業所の話によれば、大体二百CC硝子浣腸器は特大ものと称して、牛や馬といった動物に使うものなので、獣医関係のみに、わずかに売れるだけとの事。ところが、最近この二百CC硝子浣腸器が欲しいとの問い合わせが、ひんばんにあるそうで、今や静かな浣腸ブームが、このようなメーカーにまで何等かのかたちであらわれているといっても誇張ではありません。先日の女性週刊誌にも、三年で千万円の浣腸妾のことがでていましたが、もはや浣腸ブームは、津波のように、とけこんでいるようです。

(東京都・浣腸キチ)

○ 九月号に登場された高田礼子さん。乳房に洗濯バサミ、乳首にクリップをつけ、ローソク責め、浣腸責め、お灸責め、と自虐に耽溺する貴女に、私の心は稲妻のように強烈なショックを与えられました。また貴女と責めの構想がピッタリ一致しているのは僥倖です。

それに年令十八才というのを見てにわかに、油然たる喜びが湧きま

した。マゾにつかれた貴女の姿態は、きつと蓮華の花ビラのように芳醇でしょう。そして私のサドの血を沸かせることでしよう。それでは、貴女を羞恥責めにする一部を披歴しておきましょう。先ず私の前で、素裸にさせ、後手に縛る。その後ブラシ責めや、乳首に糸を巻いてグイッグイッと軽く引っ張る。次は言葉での責めに加味して、お尻を物差しや縄、鞭、平手で、薄くピンク色に染まる程度にスパンキングをする。それを今度は鏡でピンク色に染まったマゾの肉塊を見ることを強要し、抓ったり擦ったりして、女体を罵る。プレイは更に続いて、浣腸責めに移る。君は脂汗を流して許しを請う。苦しみのために、乳首につけた鈴がなる。何分かたった後で、やっと排泄の許可がでる。貴女はマゾの陶酔しきった表情で俯向いている。また私の暴挙が貴女を襲い、君はぼくに身を委ねる。ローソク責めの蠟涙を乳房、腹、ビーンナスの丘、大腿部、お尻、背中と

所嫌わず垂れ流す。君がマゾに悶えている時、私はローを垂らしながら、君を鞭打つ。きつと君のマゾを満足させて上げることができると思っています。

(東京都世田谷・光井弓雄)

○ 谷山久美子様。あなたの熱烈なファンの一人です。初めて「マゾヒスチックアニマル」を読んだ時の衝撃は今も有々と脳裏に浮かんできます。あの強烈な印象は、以来、私の胸の中で抑え難い欲望と甘酸っぱいノスタルジアに変貌しながら、あなたへの激しい執着となつて燃え続けています。さらに「性倒錯の世界」のあなたを見た時の、今にも自分の願望が爆発しそうな感動は忘れられません。もっと奇抜な方法で、もっと強く責めてやりたい。あなたのことを思うたびに、いつもそう感じます。そして映画や写真で責めを受けている、あなたを見るたびに抱きしめてやりたいような衝動にかられます。私には少年時代からS性もM性もあり、子供なりにSMプレイにも似た経験も幾度か重ねました。しかし私の、そうしたSM願望が明確に自分の中に形造られたのは、奇クを知って以後のことです。

す。そして何かにつけて女性を責める自分を想像し、それは私の頭の中だけで益々エスカレートしてゆきました。三年程前、同級の女子大生や馴染みのスナックの女性相手に何度かプレイをしたこともあり。しかし、何分、相手はM性のない女性で二十才という若い年令なので、いくら遠慮もあり、私の責めのイメージに合わない面もあつて計画の何分の一も実行できぬままに途中で断念せざるを得ませんでした。というのが私の責めのアイデアの対象となる女性。性は三十才前後の年上の女性なのです。私は、そういう責めのイメージに合致した女性を求めています。そんな時読んだのが「マゾヒスチックアニマル」でした。私は高鳴る胸を抑えながら一枚一枚の写真に、辻村先生の文章の一言一言に目を通してゆきました。自分が秘かに考えてきた縛りも、アヌス責めも、尻責めもあなたにこそふさわしい、あなたこそ自分の責めのイメージにピッタリだ、どうしても一度プレイしてみたい。そう思ったのです。しかし、私はまたMへの願望も捨て難く、両方を望むことが、あなたに対しては無理な気がして仕方なく筆を執る







# 編集後記

○秋の爽やかさに便乗してお届けする本号は早くも本年度の最終号。だからといって特別どうってこともないのですが、「十二月」という語感には、どうも編集子に、過ぎ来し一年間の反省を強いる力があるようでして、毎年のこと「せねばならんのではなからうか」と、殊勝な気持喚起に、鼻毛抜きつつ涙ぐましい努力をさせられるのです。そして例年、努力、必ずしも実るにあらざることを痛感するもの、また「十二月」の慣例なのです。

○その本年度棹尾を飾る本号。巻頭で艶麗を競う美女達のフォトは一段と鮮明度を増し、告白、手記、レポートの切実な吐露に加うる創作陣の好調で、この小誌がズッシリとした重

量感を持ち、本当の意味の読みごたえあるものになっていると自讃したいところですが、いかがでしょう。ただ「たより」欄でのご案内の通り、連載小説「大噴火」八千葉青鬼の不着は残念です。作者からは、繰り上げ掲載を……と、次号予定原稿のご送付を頂きたいものが、出来得れば不着分の再起稿を願いたいものと考えた上で、本号は休載ということになった次第です。ご諒承下さい。

○トニカク、日付は十二月ダッサカイニ、夜明けナンカ冷エコミマ。ダレカハント古毛布ノヒッパリッコンテルノハ、ワテトコダケヤナイヤロ思イマンネンヤガ、ぶれいシヤハルンヤッタラ風邪ヒカンヨウニ氣イ……アア、ツケテハリマツカ。ホナマア、エエヨウニシヤハッテ、来年度モ、マタ頼ンマツセ。

## 懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられ、た事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故に悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

## ☆ 本誌御購読の葉 ☆

予約に限り  
一月分(1冊)四〇〇円△送32円▽  
三月分(3冊)一二〇〇円△送共▽  
半年分(6冊)二四〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 四〇〇円

十二月号 (第二十六巻第十二号) (通刊第二百九十八号)

昭和四十七年十一月二十日 印刷  
昭和四十七年十二月一日 発行

郵便番号558 大阪府住吉郵便局私書函第四十一号  
発行所 暁出版株式会社  
△振替口座大阪四二七八三番▽  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努めております。青少年の健全なる育成に努めております。青少年の健全なる育成に努めております。